はろ 暈(英 Halo)【名】〔天〕『もと希臘語』かさ(暈)に同じ。

は-ろう 把弄【名】手にとりて弄ぶこと。

はろげん (英 Halogen)【名】〔化〕『原語は鹽を生成する物の義』鹽素・臭素・沃素及び弗素の四元素を總括せる名稱。この四元素並びにその化合物は、性狀互に極めて類似し、殊に鹽・臭・沃の三元素は、海水中にありて、ナトリウムと共に、皆、食鹽に類する鹽(エ)を造る。造鹽素。

はろげんぞくのげんそ ハロゲン族の元素(英 Elements of Halogen family)【句】〔化〕前條に同じ。

はろげん-えん ハロゲン鹽(英 Halogen salt)【名】〔化〕ハロゲン元素と金屬との化合物、例へば、鹽化ナトリウム・臭化カリウム・弗化カリウムなどの總稱。

はろげん-くわがふぶつ ハロゲン化合物(英 Halogen compounds)【名】〔化〕次條に同じ。

はろげんくわ-ぶつ ハロゲン化物(英 Halides)【名】〔化〕ハロゲン族の元素と他元素との化合物、例へば、鹽化ナトリウム・沃化加里などの總稱。

はろげん-げんそ ハロゲン元素【名】〔化〕はろげんに同じ。

はろ-ばろ 遙遙【貌】**はるばる**(遙遙)に同じ。〔古語〕紀「はろばろに琴ぞ聞ゆる」萬葉「はろばろに別れし來(ク)れば」

はろび 腹帶【名】**はらおび**(腹帶)の約。〔古語〕字鏡「鞁・靯、波呂比」

ばろ-めえたあ (英 Barometer)【名】㈠**せいうけい**(晴雨計)に同じ。㈡物事の盛衰、人氣の程度などを測定し得る標準。

はわい 布哇(英 Hawaii)【名】〔地〕太平洋の東部にある列島。大洋洲の一部なるポリネシヤ諸島の最東北部。もと、獨立の王國なりしが、西曆一八九三年、共和國となり、一八九九年、亞米利加合衆國に合併せらる。最大島をハワイといひ、首府をホノルル(Honolulu)といふ。本邦人の在留者多し。一名、さんどゐっち諸島。

は-わう 霸王・霸王【名】㈠『禮記の經解篇に「義與レ信、和與レ仁、霸王之器也」とあり』諸侯を統御して、天下を治むる者。霸者の長。㈡霸者と王者と。霸道と王道と。王霸。

はわう-じゆ 霸王樹・霸王樹【名】〔植〕**さぼてん**(仙人掌)の漢名。

はわか-の-き 葉若木【名】**さかき**(榊)に同じ。

は-わがふそう 破和合僧【名】〔佛〕『**わがふそう**(和合僧)を見よ』五逆罪の中にて、最も重きもの。邪なる方便を以て、一味の聞法(モンボフ)衆及び一味の作法衆を乖離せしめ、以て佛の轉法輪(テンボフリン)を息止し、僧中の法事を阻害すること。破僧。盛衰記「破和合僧は、五逆罪の隨一に非ずや」

は-わかれ 齒分・歷齒【名】齒と齒との間の分れ透きてあること。すきば。〔古語〕和名「歷齒、波和加禮」 「わかれ。

は-わけ 派分【名】流派また黨派の區別。

は-わけ 葉分【名】葉の一つ一つ。每葉。源氏「朝日さす光を見ても玉笹の葉分の霜を消(ケ)たずもあらなん」

は-わざ 刃業【名】**はあぢ**(刃味)に同じ。

は-わさび 葉山葵【名】葉の附きたるままのわさび。

は-わたり 刃渡【名】㈠刃物の刃の長さ。㈡多くの刃の刃を上に向けて、梯子の棧とし、その上を、跣足にて步み渡る輕業。

は-ゐる 斷る・齚る【動上一自】齒浮くが如く感ず。〔古語〕和名「斷、波井留。齒傷レ酢也」

は-ゑ 破壞【名】**はくわい**(破壞)に同じ。盛衰記「破壞の堂舍を修補(シユフ)し」

は-ゑつ 播越【名】『左傳の昭公二十六年の條に「震蕩播越、竄在二荊蠻一」とあり』**はたう**(播蕩)に同じ。

はゑ-つく 蝕盡く【動上二自】日月、全く蝕す。皆旣蝕となる。〔古語〕紀「蝕盡、ハヱツク」

は-ゑん 巴猿【名】㈠支那の蜀の巴峽の猿。**さんけふ**(三峽)參照。太平記「巴猿一叫、停二舟於明月峽之邊一」㈡山の峽(カヒ)にある猿。保元「峰の巴猿、一たび叫び」

は-をく 破屋【名】やぶれたる家。敗屋。

ひ

【發音】㈠は行第二の音。羅馬字にてはhiと書けども、同じく**は**行の**は**(ha)・**へ**(he)・**ほ**(ho)の子音hが喉頭音なるに對し、**ひ**の子音は、口蓋音に屬し、發音の場所著しく前方に位し、舌の中部を高めて發す。これ、子音hが、口蓋的母音**い**(i)の感化を受くるがためにして、類例は、**さ**行の**し**・**じ**、**た**行の**ち**・**ぢ**、及び**な**行の**に**に求むるを得べし。故に、**ひ**は、hiに非ずして、實はhyiの音なりといふべく、これに母音a・u・oが結び附けば、拗音**ひや**(hya)・**ひゆ**(hyu)・**ひよ**(hyo)となる。濁音**び**は、子音bと母音iと、又、半濁音(實は淸音)**ぴ**は、子音pと母音iとの結び附きたるものにて、**ひ**・**び**・**ぴ**三音の關係及び半濁音の名稱につきては、**は**の條下に記せり。なほ、**や**の部㈠をも參照せよ。㈡長音は、**ひい**・**びい**・**ぴい**と書くと、**ひー**・**びー**・**ぴー**と書くとの兩法あり。本書は前者に依れり。㈢一語中の第二音**以下**に在る**ひ**は、**普通イと發音す**。例へば、**こひ**(鯉)・**たたかひ**(戰)をコイ・タタカイと發音する類。これ、一語中の第二音以下なる**は**を、ワと發音すると同一の理由によりて、一旦ヰ(wi)に變じ、更にイとなれるものなり。㈣拗音**ひや**・**ひゆ**・**ひよ**の成立は、前項㈠に說きたる所、又、拗音**びや**・**びゆ**・**びよ**及び**ぴや**・**ぴゆ**・**ぴよ**も、子音b・pの場合以上に高め、母音iの場合の位置に置きて發する子音に、母音a・e・oの結び附けるものにて、長音は、**ひやあ**・**ひゆう**・**ひよお**・**びやあ**・**びゆう**・**びよお**・**ぴやあ**・**ぴゆう**・**ぴよお**なり。㈤四段活用の動詞の語尾なる場合に、**ひ**は、「戰ひて」を「戰うて」・「戰って」、「云ひし」を「云っし」といふ類、**び**は、「呼びて」を「呼うで」・「呼んで」といふ類、又、動詞の語尾以外にても、**あきびと**(商人)の、**あきうど**・**あきんど**となり、地名**にひた**(新田)の、**にった**・**にうた**となる類なる音便上の變化を爲すことあり。動詞の語尾なる場合のは、口語に在りては常に現れ、又、文語の上にも屢現るるものにして、**う**音に變化するは、主として關西方面に、促音又は撥音に變化するは、主として關東方面に行はる。㈥一語の中にて、**ひ**・**び**・**ぴ**の直後に**う**又は**ふ**の續く場合には、普通、相合して、拗長音ヒュウ・ビュウ・ピュウとなる。例へば、**ひうが**(日向)・**ごびう**(誤謬)をヒュウガ・ゴビュウと發音する類。㈦**ひやう**・**びやう**・**ぴやう**は、すべて拗長音ヒョオ・ビョオ・ピョオの發音をなす。㈧**ひ**をfiと發音する地方あり。**は**の㈡を參照せよ。㈨東京地方にては、**ひ**を誤りて、**し**と發音する傾あり。これ、**ひ**の子音と**し**の子音shとの間に、著しき類似の點あるに因る。㈩西洋語のviの音(獨逸語に於けるが如く、これをfiと發音する場合を除く)は、本書にては、**び**として掲げたり。

【字源】平假名**ひ**は「比」(漢・呉音共にヒ)の草體、變體平假名𛁋・𛁌は「飛」(漢・呉音共にヒ)の草體、𛁊は「悲」(漢・呉音共にヒ)の草體、𛁉は「非」(漢・呉音共にヒ)の草體、𛁍は「日」(訓ヒ)の草體より出で、片假名**ヒ**は「比」の略體、又、萬葉假名としては、淸音には、前記「比」・「飛」・「悲」・「非」・「日」の外、「妣」・「斐」・「卑」・「彼」・「被」・「祕」・「辟」・「臂」・「譬」・「肥」・「皮」・「避」・「婢」・「秤」・「備」・「毗」・「毘」・「鼻」・「必」・「賓」・「嬪」等、字音に據れるも

の、「日」・「火」・「氷」・「檜」・「簸」・「椒」・「樋」・「乾」・「頁」・「飯」等、訓を取れるものあり、濁音には、「備」・「毗」・「毘」・「鼻」・「婢」・「眉」・「媚」・「味」・「寐」・「弭」・「彌」・「縻」等を用ひ、又、清音の「比」・「飛」・「非」・「悲」・「火」等を濁音のに用ひたる例もあり。　字音を取りて、清音の萬葉假名に用ひたる諸字の、支那の原音に於て、頭首にpを帶びたるは、ひの古音がpiなりし傍證とするに足るものなり。

ひ

火【名】『**ひ**(日)を見よ』一化學變化のために、熱の發生甚しくして、光をも伴なひたる現象。物の燃えて、光を發したるもの。　二**ともしび**(燈火)の略。［灯］　枕「暗き程に文(フミ)を得て、火ともす程も、心もとなきにや」　增鏡「掃部寮(カニモリヅカサ)、火、しげうともして」　三**すみび**(炭火)の略。　枕「火桶の火を挾み上げ」　四火事。火災。　榮花「世の中に、火さわがしくて、又、所所燒けぬ」　枕「近き程に火出で來ぬといふ」　五**のろし**(狼烟)に同じ。　籾井日記「味方に、この火を立つるに、夜討衆、手を合はせ申す」　六火を焚きて、飲食に熱を與ふること。　煮燒(ニタキ)。「火を禁ず」「火の物」　七烈しく怒り、又、恨むること。　萬葉「心には火さへ燃えつつ思ひ戀ひ息(イキ)づき餘り」　八『古、月經中は、對屋(タイノヤ)に別居して、別火を構ふる習なりしよりいふ。**ひざまり**(火止)參照』**げっけい**(月經)を云ふ。［女の語］

火危し【句】古、禁中などにて、夜警の者の、巡邏しながら呼ばはりし語。火の用心。［古語］　源氏「あやしきをのこの聲どもして、火あやふしなどいふも」

火出づる程【句】斬りあふ刀と刀と打ち合ひて、火出づる程、火花の迸るほど。　保元「返し合せて、火出づる程ぞ戰うたる」

火が擧(アガ)る【句】火、高く燃ゆ。火の手が擧る。

火が消えたやう【句】俄かに寂しくなりたる形容。

火が高ぶる【句】誇りて、のぼせ上る。　八笑人「この方(ハウ)とても、その通り、立唄(タテウタ)・立敵(タテガタキ)兼帶でござる。どいつも、どいつも、火が高ぶってゐるから、いけるもんぢゃあねえ」　和合人「どいつも、どいつも、火が高ぶって、屁の役にも立たねえ」

火が附いたやう【句】あわただしく急なる形容。

火が火を喚ぶ【句】「同氣(ドウキ)相求む」に同じ。［諺語］

火が降っても、槍が降っても【句】いかなる困難が起りても。

火が降る【句】「火の雨が降る」に同じ。　鷹筑波「火が降るや貧者の家に飛ぶ螢」　平假名盛衰記「金持ばかり守って、我等が内には、不動樣の火焰のやうな火が降り」

火が廻(マハ)る【句】火事にて、火が燃え移りゆく。

火と下人(ゲニン)とは、身に添ふ敵(カタキ)【句】火と召使とは、共に身近く使ふ者ながら、油斷しがたし。［諺語］

火に入る夏の蟲【句】「飛んで火に入る夏の蟲」に同じ。　太平記「皆、火に入る夏の蟲の如くにて、燋死(コガレジニ)にこそ死ににけれ」

火に入る蟲【句】前條に同じ。

火にして貰ふ【句】遊女が、客に向ひ、强ひて金錢を貰ひ受く。火の手を擧ぐ。［德川時代の遊廓の語］

火にも、水にも【句】火にも入り、水にも沈みて。水火の苦に遭ひても。　萬葉「わがせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にも我ならなくに」

火にも水にもなる【句】いかなる困難・危險に遇ふとも、厭はず。水火の苦をも避けず。　盛衰記「理訴を極めずして下向の條、謂(イハレ)なし。山門にてこそ火にも水にもなるべけれ」

火の雨【句】一火の粉の落ち來るを、雨の降るに譬へていふ語。　蟬丸「炎を降らし、只、火の雨のごとくなり」　二次條の略。

火の雨が降る【句】貧しき形容。火が降る。　火の雨。　火の車。

火の家【句】［佛］**くわたく**(火宅)の直譯。　空穗「出づとせし身だに離れぬ火の家を君水の尾にいかで棲むらん」

火の印(イン)【句】［佛］**くわいん**(火印)一に同じ。　著聞「火の印を結ばせたまひければ、御心地、元の如くならせ給ひ」

火の色【句】**ひいろ**(火色)に同じ。　新古今「女藏人(ニヨクラウド)……東より紅の衣を出したりけるを、檢非違使のたださんとしければ、……、大空より照るひの色をいさめても天の下には誰かすむべき」

火の消えたやう【句】「火が消えたやう」に同じ。

火の輿(コシ)【句】古、葬式に、火を點じて、行列に加はりし輿。　和名「火輿、喪禮圖云、蠟燭輿。今按、俗云、火輿是」　榮花「香の輿、火の輿など」

火の事【句】**ひ**(火)四に同じ。　右京大夫集「内裏に近き火の事ありて、すでにあぶなかりしかば」　增鏡「春宮の御元服、……興福寺の火の事により、延びて」

火の地獄【句】「爪の極樂、火の地獄、捻放(ヒネリバナシ)は目が廻る」を見よ。

火の附いたやう【句】「火が附いたやう」に同じ。

火の手【句】火の燃えあがる勢。火の燃えゆく端。

火の手が擧る【句】「火が擧る」に同じ。

火の手が强い【句】一火勢さかんなり。　二意氣組烈し。熱烈なり。執著深し。

火の手を擧ぐ【句】一「火を擧ぐ」二に同じ。　二「火にして貰ふ」に同じ。［德川時代の遊廓の語］

火の中(ナカ)、水の底【句】一火の燃ゆる中と、海・河などの底と。　二『「水火(スヰクワ)を蹈む」を見よ』非常に困難危險なる場合。火水(ヒミヅ)の底。　用明天皇職人鑑「火の中、水の底までも、言ひし言葉をちがへうか」

火の無き處に煙は立たず【句】形跡なき事ならば、噂の立つ筈なし。［諺語］

火の柱【句】**ひばしら**(火柱)に同じ。　謠曲(求塚)「柱は、すなはち火焰となって、火の柱を抱くぞとよ」

火の傍(ハタ)に兒を置くがごとし【句】危險なる譬。

火の花【句】**ひばな**(火花)に同じ。　字鏡集「熛、ヒノハナ・トビヒ」

火の札(フダ)【句】昔、恨などある家に對し、火を放つべき旨を記して、その門戶に貼り、又は戶外に捨ておきなどせし札。火附(ヒツケ)の札。　傾城佛の原「聞けば、お手前に、火の札を打ったとある」

火の物【句】火にて煮燒したる食物。　永正記「彼日以前食用火物、至㆓彼日㆒成㆓燧火㆒也」

火のやう【句】怒り又は羞ぢなどして、顏を赤くする譬。

火は燒亡(ゼウマウ)【句】「人は盜人(ヌスビト)、火は燒亡」を見よ。

火を擧ぐ【句】一『晏子の雜上篇に「國之簡士、待㆑臣而擧㆑火者數百家」とあり。火を焚きて、飯を炊ぐ義』生活す。　二火を放ちて、高く燃す。火の手を擧ぐ。　太平記「大講堂・文殊樓の邊に控へて、火を擧げられ候へ」

火を入る【句】火入(ヒイレ)二三を行ふ。

火を打易(ウチカ)ふ【句】「火を易ふ」に同じ。

火を打消ちたるやう【句】燈火の消えたるが如くにて、心細し。［古語］　榮花「宮は、……、消え入らせたまひにけり。……、宮をこそ賴み申しつるに、火を打消ちたるやうなるを」

火を打つ【句】火打石と火打鎌とを打ち合はせて、發火せしむ。火を鑽(キ)る。　記「その火打を以ちて、火を打出で」

火を落す【句】『**たきおとし**(焚落)を見よ』竈などに焚きたる火を、使用したる後、消す。

火を揭ぐ【句】「火を擧ぐ」二に同じ。　義經記「正面に出でたまへば、殊に、その時は、火を高くかかげたり」

火を篝(カガリ)にす【句】篝火を焚く。　和名「漢書陳勝傳云、夜篝㆑火、比乎加加利邇須」

火を掛く【句】火をつけて燃す。火を放つ。　保元「屋に火かけ、烟の中にて、皆自害したる」

火を易（カ）ふ【句】忌服の終りし日などに、火を新たに鑚（キリ）出して、清淨にす。火を淨む。心中刃は氷の朔日「打って清めの鹽水や、跡は火をかへ、水をかへ」

火を淨（キヨ）む【句】前條に同じ。

火を鑚（キ）る【句】「火を打つ」に同じ。記「海布（メ）の柄（カラ）を鎌（カ）りて、燧臼（ヒキリウス）に作り、海蓴（コモ）の柄（カラ）を燧杵（ヒキリギネ）に作りて、火を鑚り出でて」

火を消したやう【句】「火の消えたやう」に同じ。

火を避けて、水に陷る【句】一の禍を免れて、又、他の禍に遭ふ譬。

火を失す【句】過ちて、火事を出す。

火を摺る【句】**一**マッチなどを、摩擦して、火を發せしむ。**二**極めて不和なる間柄の譬。一說に、「桴（ト）を擦る」にて、桴と筬（ヲサ）と擦れあひて、一所に寄らぬ義より、表面は和せるやうにて、內心は和せぬ譬にいふ。鵜鷺合戰「法華・念佛は、互に火を摺りたる間なり」 鷹筑波「火をするや螢の中も不破の關」

火を散す【句】戰鬪などの激しき形容。火花を散す。太平記「人まぜもせず、只二人、火を散して斬りあひける」

火を吐く【句】辯論の激烈なる形容。

火を放つ【句】つけびをなす。火をつく。放火す。續後紀「放ㇾ火殺ㇾ人」

火を吹く【句】**一**炭火を起さんとて、氣息を吹きかく。**二**炭火を吹く時の氣息の如くに、鼾をかく。小町踊「寢言にも火を吹く冬の寒さかな」

火を吹く力も無し【句】營養不良のため、體力甚しく衰ふ。胸算用「火吹く力もなき、その日すぎの釘鍛冶（クギカヂ）」 織留「二十年以前までは、提燈の張替して、火吹く力もなかりしが」

火を見るがごとし【句】『書經の盤庚上篇に「不ㇾ惕㆓予一人㆒、予若ㇾ觀ㇾ火」とありて、疏に「見ㇾ之分明、如ㇾ見ㇾ火也」と見ゆ』事の極めて明瞭なる譬。

火を水に言ひなす【句】「鷺を烏」に同じ。〔諺語〕 平治「信賴が方樣の事を、火を水に言ひなす讒侫至極の曲者（クセモノ）なり」

火を見れば、火事と思へ【句】少しの物事にも警戒して、油斷すべからず。人を見れば盜人（ヌスビト）と思へ。人は盜人、火は燒亡（セウマウ）。〔諺語〕

ひ

日【名】『ひ（火）の轉義』**一**太陽。日輪。**二**太陽の光又は熱。ひかげ。日光。**三**ひる（晝）に同じ。記「かかなべて夜には九夜（ココノヨ）日には十日を」 雙蝶蝶曲輪日記「日の內は、隨分、我等働き」 **四**地球が一回自轉する時間。約二十四時間を要し、前夜の半ばより翌日の夜半までを、一回の時間と定む。一晝夜。一日。**こうせいじつ**（恆星日）・**たいやうじつ**（太陽日）・**へいきんたいやうじつ**（平均太陽日）參照。**五**ひぎり。日限。「日を延ばす」 **六**ひかず。日數。太平記「背に癰瘡出でたりけるが、日を經ずして、忽ちに死しにけり」 **七**その日。當日。盛衰記「せめては、日の高名を得たる那須の與一をなりとも、射殺さばや」 **八**忌日（キニチ）。命日（メイニチ）。きのふはけふの物語「けふは伯父の賴朝の日ぢや」 **九**時代。をり。世。「幼かりし日」 **十**天候。天氣。空穗「日荒れ、空のけしき苦しげなり」 **十一**紋所の一。太陽に象（カタド）れるもの。

日出づる國【句】〔地〕『亞細亞洲の東端に位するよりいふ。**ひのもと**（日本）參照』我國の自稱。日出國（ニッシュツコク）。（「日の入る國」に對して）

日出づる處【句】〔地〕『隋書に「大業三年、其王多利思比孤、遣ㇾ使朝貢。其國書曰、日出處天子、致㆓書日沒處天子㆒、無ㇾ恙、……。帝覽不ㇾ悅」とあり』前條に同じ。（「日沒する處」に對して）

日、打下（ウチクダ）る【句】日影傾く。榮花「二十三日、日うち下りて霞たなびきわたりたる程に」

日が込む【句】多くの日數を要す。冥途飛脚「川川に水が出ますれば、道中に日が込み」

日が照る【句】幸運に遭ふ。（多くは打消又は反語の形にて用ふ） 茜染野中の隱井「炙ばかりが日は照りはせぬ。江戶・長崎へも立越え、身を全う持って吳れ」 俗曲 八重霞浪花濱荻「大坂ばかりに日は照らぬ」

日がな一日【句】『**がな**は願望の意の助詞』終日。日一日（ヒトヒ）。續鳩翁道話「日がな一日、竿を持って、立通（タチドホシ）に立ち」

日が西から出る【句】あり得べからざる譬。〔諺語〕

日暮れて、塗（ミチ）遠し【句】『史記の伍子胥傳に「吾日莫塗遠、吾故倒行而逆㆓施之㆒」とあり』年老いて、目的を達することの容易ならぬ譬。〔諺語〕

日、西山に薄（セマ）る【句】『詩經の反離騷に「恐日薄㆓於西山㆒」、李密の陳情表に「但以㆔劉日薄㆓西山㆒、氣息奄奄㆒」とあり』年老いて、死期切迫す。

日、中（チュウ）しては傾く【句】『易經の豐卦象傳に「日中則昃、月盈則食」とあり』「盈つれば虧く」に同じ。〔諺語〕

日に從ひて【句】次條に同じ。著聞「その後、日に從ひて名譽ありて、……、牛車（ギッシャ）宣旨まで極められたりし」

日に添ひて【句】「日に增し」に同じ。拾遺員外「陰しげき檜の葉がしは日に添ひて窓より西の空ぞ少き」

日に添へて【句】前條に同じ。源氏「日に添へて弱りたまふ」

日に就（ナ）り、月に將（スス）む【句】『詩經の周頌敬之篇に「維予小子不㆓聽敬㆒止、日就月將、學有ㇾ緝㆓熙于光明㆒」とあるに本づく』日ごと、月ごとに、成就し、進步す。

日には【句】云云する場合には。云云するに於ては。和合人「斯う醉って寐込んだ日にやあ」

日に增し【句】日の立つに從ひて、ますます。日ましに。

日に三たび吾が身を省（カヘリ）みる【句】**さんせい**（三省）**一**を見よ。〔諺語〕

日の【句】『日の神、卽ち天照大御神（アマテラスオホミカミ）の御裔なるによりていふ』天皇に關する事物にいふ語。記「高光る日の御子（ミコ）」 同「高光る日の宮人」

日の脚（アシ）【句】『**にっきやく**（日脚）を見よ』**一**物の間よりさし來る日光。日光。蜻蛉「日の足のわづかに見えて、霧、所所に霽れゆくあなたの峰に」 **二**ひあし（日脚）に同じ。

日の入る國【句】〔地〕『我國の西方に當るよりいふ』古、我國より、支那を指して呼びし語。日沒する處。（「日出づる國」に對して） 萬葉「住吉（スミノエ）の御津に船乘りただ渡り日の入る國に遣さるる吾がせの君は」

日の中（チウ）【句】**にっちゅう**（日中）に同じ。拾遺「日のうちに物を二たび思ふかなとく明けぬると遲く暮るると」

日の御座（オマシ）【句】清涼殿にありて、天皇の日中おはしまし、平敷（ヒラシキ）の御座。（「夜（ヨル）の御座」に對して）〔晝（ヒ）の御座〕 枕「日のおましの方に、おもの參る」 西宮記「主上起㆓晝御座㆒、入ㇾ自㆓夜御殿南戶㆒」

日の御座（オマシ）の御劍（ゴケン）【句】清涼殿中、晝御座に置かれし御劍。〔晝（ヒ）の御座の御劍〕 禁祕抄「內內御步行、必不ㇾ用㆓晝御座御劍㆒、內內用㆓他御劍㆒」

日の御物（オモノ）【句】主上の每日召上る物。日の御供（ゴク）。空穗「御だい四つ立てて、日のおものきこしめす」

日の烏【句】「三足（サンゾク）の烏」に同じ。平家女護島「暮れては明ける日の烏」

日の下臈（ゲラフ）【句】『「下臈の藏人（クラウド）」を見よ』每日交替して、御物（オモノ）の給仕、その他雜用を勤めし藏人。職原抄「六位藏人奉行禁中細細公事、朝夕御膳等事、稱㆓之日下臈㆒也。四人分ㇾ日令㆓奉行㆒故也」

日の御座（ゴザ）【句】「晝（ヒ）の御座（オマシ）」に同じ。〔晝（ヒ）の御座〕

日の御座（ゴザ）の御劍（ゴケン）【句】「晝（ヒ）の御座（オマシ）の御劍」に同じ。〔晝（ヒ）の御座の御劍〕 徒然「別殿の行幸には、晝の御座の御劍にてこそあれ」

日の裝束（サウゾク）【句】束帶を著くること。晝（ヒ）のよそひ。（宿直（トノヰ）裝束**一**

に對して」〔晝(ヒ)の裝束〕空穗「日のさうぞくども、いとうるはしく」

日の縱(タタシ)【句】次條に同じ。(「日の横(ヨコシ)」に對して)〔古語〕紀「日縱、ヒノタタシ」

日の縱(タテ)【句】東西に通ずる方。(「日の横」に對して)〔日の經〕〔古語〕萬葉「大和の青香具(アヲカグ)山は日の經(タテ)の大みかどに青山としみさび立てり」

火の玉【句】ひだま(火玉)に同じ。

日の使【句】昔、春日神社・男山八幡宮の祭事に、社人及び附近の村民等が、勅使の參向に擬し、行粧を凝して、列を作り參拜せしこと。その頭人を、日頭(ヒトウ)といへり。山城名勝志「日使、四月三日也。有二頭人一。故又曰二日頭一」

日の辻【句】晝のまなか。まひる。

日の頭(トウ)【句】「日の使」を見よ。

日の殿(ト)【句】晝間居たまふ殿舍。「夜(ヨル)の御殿」參照。〔晝(ヒ)の殿〕〔古語〕落窪「おとど、ひのとのにおはしけるままに」

日の緯(ヌキ)【句】「日の横」を見よ。

日の鼠【句】〔佛〕にそ(二鼠)㊁を見よ。土御門院集「冬枯の草葉に騷ぐ日の鼠きのふは今日に何ぞ程なき」

日の初【句】ぐわんじつ(元日)に同じ。一代男「日の初、靜かに、豐かに、世にある人の門は、松、緑なして」

日の旗【句】日の丸の旗。錦の旗。長祿記「日の旗を向けらるる上は、朝敵たる事、隱なし」

日の御蔭(ミカゲ)【句】『日光を覆ひて、蔭を爲す義』天皇の宮殿の形容。〔古語〕祝詞「皇御孫(スメミマ)の命(ミコト)の瑞(ミヅ)の御舍(ミアラカ)仕へまつりて、天(アメ)の御蔭、日の御蔭と隱りまして」萬葉「高知るや天(アメ)の御蔭天知るや日の御蔭の水こそは」

日の御影(ミカゲ)【句】『ひかげ(日影)の敬稱』日の神の神德。新古今「宮柱下(シタ)つ岩根に敷き立ててつゆも曇らぬ日の御影かな」

日の御門(ミカド)【句】みかど(御門)の美稱。天(アメ)のみかど。「檜(ヒ)の御門」參照。〔古語〕萬葉「わが造る日の御門に知らぬ國よりこせぢより」

日の御供(ミク)【句】「日の御物(オモノ)」に同じ。太平記「天子、自ら玉扆をおりさせたまひて、常の御膳(オモノ)を降され、攝家、皆、高門を掩ひて、日の御供を奉りたまふ」

日の御子(ミコ)【句】㊀「日嗣(ヒツギ)の御子」に同じ。記「譽田(ホムダ)の日の御子大さざぎ」㊁てんわう(天皇)の異稱。〔古語〕萬葉「やすみしし吾が大君高光る日のみこ」

日の貢(ミツギ)【句】日毎に奉るみつぎ。ひつぎ。萬葉「みけつ國日の御調(ミツギ)と淡路の野島(ヌジマ)の海人(アマ)の……あはび玉さはにかづきて」

日の御綱(ミツナ)【句】綱にて、丸く日の形に造り、宮殿などに掛けめぐらしたるもの。しりくめなは。古語拾遺「以二日御綱一(今斯利久米繩、是日形之像也)、廻二懸其殿一」

日の御旗【句】「日の旗」の敬稱。

日の宮【句】日神(ヒノカミ)又はその御裔の宮殿。〔古語〕續後紀「あま照る國の日の宮のひじりのみこそ」

日の目【句】日光の、目に見ゆること。萬葉「あま雲の日の目も見せず常闇(トコヤミ)におほひたまひて」新版歌祭文「おろし藥、思ひ切って煎じてたも。……、初孫(ウヒマゴ)を、日の目も見せず水になせとの胴慾を敎へる母が心の中は」

日の横【句】南北に通ずる道筋。日のよこし。(「日の縱(タテ)」に對して)〔日緯〕〔古語〕萬葉「畝傍(ウネビ)のこの瑞山(ミヅヤマ)は日の緯の大御門に瑞山としみさび立てり」

日の横(ヨコシ)【句】前條に同じ。(「日の縱(タタシ)」に對して)〔古語〕紀「日横、ヒノヨコシ」

日の裝(ヒヨソ)【句】「晝(ヒル)の裝(ヒヨソ)」に同じ。〔晝(ヒ)の裝〕源氏「休日のよそひに替へたまふ人人も多かり」

日の若宮【句】「日の宮」の美稱ならん。〔日の少宮〕〔古語〕紀「伊弉諾尊、……登レ天報命。仍留二守日之少宮一」

日の我が君【句】てんわう(天皇)の美稱。〔古語〕年中行事歌合「萬民の照さぬ方もなかりけり日のわが君の出づる御幸に」

日沒する處【句】〔地〕『「日出づる處」を見よ』「日の入る國」に同じ。(「日出づる處」に對して)

日も惟(コレ)足らず【句】『詩經の小雅天保篇に「降二爾遐福一、維日不レ足」、書經の泰誓篇に「我聞、吉人爲レ善、惟日不レ足。凶人爲二不善一、惟日不レ足」とあり。日は一日の義』終日爲すとも、爲し盡すを得ず。

日も亦足らず【句】前條に同じ。

日も夜も足らず【句】常に甚だ忙しき形容。

日を明す【句】「日を暮す」に同じ。室町千疊敷「君は、彼の賣女ゆゑに、九條の町に夜明し、日明し」

日を移す【句】『史記の夏侯嬰傳に「與二高祖一語、未二嘗不一レ移レ日也」とあり』一日を過す。

日を送る【句】㊀次より次へと、日を過す。日數を送る。㊁毎日の生活を爲す。一代男「天道、人を殺したまはず、今日までは、日を送りぬ」

日を同じくして論ず【句】『史記の蘇秦傳にも「臣レ人之與レ見レ臣二於人一也、豈可二同レ日而論一哉」とあり』兩者共に大差なき形容。同日の論。

日を逐ひて【句】「日に增し」に同じ。太平記「四國・西國、日を追ひて亂れければ」

日を返す【句】「魯陽、日を返す」を見よ。

日を暮す【句】その日を過して、夜に達す。(「夜を明す」に對して)

日を取る【句】豫め日限を決む。吉日を選ぶ。源氏「日など取らせたまひて、忍びやかに、然(サ)るべき事など宣ひ掟てさせたまふ」宇治「長者悅びて、婿にとらんとて、日を取りて契りてけり」

日を待つ【句】日待(ヒマチ)を爲す。醒睡笑「日待の座敷にて、……、祈禱のために、日を待たせたまふぞや」

日を夜に繫ぐ【句】「夜を日に繼ぐ」に同じ。和合人「秋の夜の長しといへど、……、日を夜につなぐ能樂者(ノウラクモノ)」

日を彌(ワタ)る【句】『世說の賞譽上篇に「遂留共語、彌レ日累レ夜」とあり』日數を重ぬ。

ひ 氷・冰【名】㊀こほり(氷)に同じ。〔古語〕蜻蛉「垂氷(タルヒ)、……、ありつる氷(ヒ)を、一重の袖に包み持たりて」和名「氷、比」㊁雹(ヒヨウ)。あられ。ひさめ。〔古語〕和名「霈、比布留」源氏「地の底とほるばかりのひ降り」

氷の祈【句】「氷の樣(タメシ)の奏」を見よ。

氷の奏【句】「氷の樣(タメシ)の奏」に同じ。

氷の樣(タメシ)【句】古、正月元日に、宮内省より、前年の氷室(ヒムロ)の結氷の模樣・寸法を記し、その模型として、石瓦を奏上せし儀式。氷厚ければ、豐年の兆とし、薄き時は、凶年の兆として、供進に差支なからんことを神に祈請し、これを、氷(ヒ)の祈又は氷調(ヒツキ)の祭といへり。盛衰記「年の始なりけれども、……、氷の樣も參らず、鮨(ハラカ)も奏せず」

氷の樣(タメシ)の奏【句】氷の樣につきて奏上せし儀式。氷(ヒ)の奏。ひいけ(氷池)・「氷調(ヒツキ)の祭」參照。江次第「宮内省氷樣奏」

ひ 目翳【名】眼の瞳(ヒトミ)の上に、翳(クモリ)の生じて、物の明かに見えぬ病。「うはひ」「そこひ」和名「目翳、比。眼精上有レ物、如二蠅翅一是也」

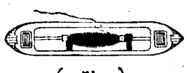
ひ 樋【名】㊀水を導き送る長き管。竹・木又は鐵葉(ブリキ)などにて造る。とひ。太平記「地の底に樋を伏せ、城中へ水を懸け入ると覺え候」㊁刀身の背に近く、縱に刻りたる、細長き溝。重さを減じ、又は血走を善くするためにすといふ。したひ(下樋)參照。〔血槽〕義經記「金作(コガネヅクリ)の太刀…

…、けんのひかきて」

ひ 椷【名】『前條の語の轉義』一開閉して、水を出入せしめ、その調節をはかるために設けたる戸。いひ。ひのくち。名義抄「椷、ヒ・イヒ」二廁の中に設けて、糞を受くるためにしたる器。和名「椷廁。說文云、椷、比、廁也、行二淸廁一也」

ひ 杼【名】くわうみやく(鑛脈)に同じ。

ひ 杼・梭【名】機を織る時、伸張せる經絲(タテイト)を上下に開き、その間に、緯絲(ヌキイト)を左右に通して織り上ぐるために、その緯絲を拏(タク)に卷きて中央部に收めたる具。木又は金屬にて、船形に作る。和名「杼。受レ緯曰レ等、今案、卽杼字也。比」


（ひ）

ひ 乾・干【名】乾(ヒ)ること、又その程度。かわき。「ひが好(ヨ)い」

ひ【名】塗物などのわれめ。ひび。犬筑波「十ぜんの位もひをば改めて（といふ句に）燕口なる椀の數數」

ひ 檜【名】〔植〕『火の義。この木にて鑽(キ)れば、火を得るよりいふ』ひのき(扁柏)に同じ。〔古語〕和名「檜、飛」

檜の御門(ミカド)【句】檜木(ヒノキ)にて造りたる御門。「日の御門」の意を含む。記「まきさくひのみかど新嘗屋(ニヒナヘヤ)に生ひだてる百(モモ)だる槻(ツキ)が枝は」

ひ 卑【名】一いやしく、ひくきこと、又その人。二ひぞく(卑屬)に同じ。政事要略「子・養子(爲二等卑一)……姪・孫・子婦(已上三色、爲三等卑一)」

ひ 婢【名】げぢよ(下女)二に同じ。

ひ 碑【名】いしぶみ。石碑。碑石。

ひ 脾【名】ひざう(脾臟)に同じ。和合人「思過ぐれば、脾を破り」

脾の小節(セウセツ)【句】〔醫〕まるぴぎしせうたい(マルピギ氏小體)を見よ。

ひ 髀【名】脚の上部。もも。

髀、肉を生ず【句】「髀肉(ヒニク)の嘆」を見よ。

ひ 稗【名】〔植〕ひえ(稗)の漢名。

ひ 比【名】一くらぶること。二たぐひ。三ともがら。ならび。「その進歩、昔日の比に非ず」三〔文〕詩の六義(リクギ)の一。その意を、物事に譬へて述ぶるもの。四〔數〕『英 Ratio』二つの量の中の一方が、他方の幾倍又は幾分に等しきを示す數。例へば、aの中にbが幾倍含まるるか(卽ちbはaの幾分に等しきか)といふ關係を、$a:b$を以て表はす類。

比の値(アタヒ)【句】〔數〕比$a:b$に於て、bにてaを除したる商を、aのbに對する比の値といふ類。

比の項(カウ)【句】〔數〕比$a:b$に於けるaとbとの類。

ひ 批【名】批評。非難。

ひ 妣【名】『禮記の曲禮篇に「生曰二父母一、死曰二考妣一」とあり』亡き母を子より稱する語。先妣。(考に對して)

ひ 非【名】一道理に非ざること。よこしま。罪惡。(是(ゼ)に對して) 盛衰記「神明・神道、宜しく非を糺すべし」二あやまり。きず。缺點。曾根崎心中「言ふ程、己(レオ)が非に落ちる」三不利益なる地位。「形勢、日に非なり」

非が入る【句】非難せらる。難を批(ウ)たる。重帷子「大概非の入らぬ程の御用の間にはあひませう」

非の茶【句】山城國宇治より產する茶。(「本(ホン)の茶」に對して) 狂言(茶壺)「ひの茶を立てぬことなし」

非を飾る【句】『史記の殷紀に「智足二以拒一レ諫、言足二以飾一レ非」とあり』自己の非行を言ひつくろひて、是(ゼ)なるが如く見せかく。「智は非を飾る」參照。

非を打つ【句】そしる。非難す。

ひ 緋【名】一深紅にして、火の如き色、又その色の物。二次條の略。榮花「弱冠著レ緋之時」

緋 裝束【句】位袍の一。四位・五位の者の著けし、緋色なるもの。四位のは濃く、五位のは淡し。後、四位以上は、すべて黑袍に、五位の緋は蘇枋(スハウ)に變更せられたり。榮花「四位・五位など……、緋の裝束をしたるものから」

緋の袴【句】緋色の精好(セイガウ)にて仕立て、主に女官の著用せし袴。謠曲(雲林院)「緋の袴踏みしだき」の。

ひ 剕【名】五刑の一。髕骨を切り去るもの。

ひ 翡【名】〔動〕かはせみ(川蟬)の漢名。

ひ 妃【名】一きさき。みめ。二大寶令の制にて、皇后の次位にある後宮。初、皇親にのみ限定せられ、後には、臣下よりも選ばるるに至り、又、妃にて、天皇の御母なるを皇太妃、御祖母なるを太皇太妃といへり。三現時の制にては、皇族の妻。その皇親の稱號を冠らせて、皇太子妃・皇太孫妃・親王妃・王妃などいふ。

ひ 否【名】一然らざること。然らずとすること。(可に對して) 二思ふとほりにならぬこと。運命の塞がること。否塞。否運。

否極まりて、泰に反(カヘ)る【句】『支那梁の宣帝の賦に「望二否極而反一レ泰」とあり。否も、泰も、易の卦の名』否塞の運命も、極度に達すれば、泰平にかへる。〔諺語〕

ひ 被【名】一おほひ。かぶりもの。二よぎ。ふすま。かいまき。

ひ 肥【名】一こゆること。二〔地〕肥前・肥後二國の總稱。「肥・筑の野」

ひ 祕【名】祕密なる物事。內密の物事。「祕を發(アバ)く」「帳中の祕」

ひ 鄙【名】一いやしきこと。みやびならぬこと。二ゐなか。ひな。「都・鄙」

ひ 鈚【名】〔化〕ひそ(砒素)に同じ。

ひ 羆【名】〔動〕ひぐま(羆)の漢名。

ひ 彼【代】かの人。かの物。かの事。「彼・我(ガ)」「彼・此(シ)」

ひ 一【數】ひとつ。ひい。(數へ擧ぐる時にいふ)

ひ【接頭】その下に添ふ名詞の示す血統よりなほ一階を重ねたる尊親又は卑親の意。ひひ參照。「曾孫(ヒコ)」「曾祖父(ヒオホヂ)」

ひ 非【接頭】一その物事を否定する意。「非文化的」「非立憲」二現在その勤務に就きてあらぬ意。「非番」「非參議」三幸ならぬ、又は凶なる意。「非運」

ひ 被【接頭】受動の意。「被後見人」「被保護者」

ひ 炷【助數】灸點の度數。曾我會稽山「身柱(チリケ)に一炷(ト)すゑうかと」

ひ 匕【助數】匕(サジ)にて量る度數。孕常磐「一粒・一匕の藥を與へて」

び 美【名】一すぐれてあること。褒むべきこと。よきこと。「美・惡」二うつくしきこと。うるはしきこと。(醜に對して) 三味のよきこと。うまきこと。美味。四〔哲〕『英 Beauty』多樣の純一と部分の調和とによりて成立し、實際的必要と沒交涉なる直接的滿足を惹起するもの。優美・壯美・滑稽美等に分類すべく、狹義にいふ時は、優美のみを指す。

び 微【名】一かすかなること。ほのかなること。二よわきこと。微弱。太平記「勢微にして、叶はず」三小きこと。すこし。わづか。こまか。微小。微細。四いやしきこと。身分卑きこと。「微にして、顯れず」

び 尾【名】びしゆく(尾宿)に同じ。

び 眉【名】まゆ(眉)に同じ。「眉・目(モク)」

び 麋【名】〔動〕おほしか(麋)の漢名。

び 鼻【名】はな(鼻)に同じ。「耳(ジ)・目(モク)・鼻・口(コウ)」

び 備【名】〔地〕備前・備中・備後三國の總稱。「藝・備」

び 尾【助數】魚の數。「鮭一尾」

び-あ 微痾【名】かるき病。微恙。

ひ-あい 悲哀【名】かなしむこと。あはれ。悲歎。愁歎。哀痛。

ひ-あい 非愛【名】一無愛想。無遠慮。十訓「公任(キンタフ)卿の非愛なるにてぞありける」二危きこと。危險。平家「わが馬のひあいなりとて、主の馬に乘り替へ」平假名盛衰記「さても、ひあいや、危いこと」

ひ-あう 祕奧【名】一『釋名に「室中西南隅曰レ奧、不レ見二戸明一、所在祕奧也」とあり』奧深きこと。二あうぎ(奧義)に同じ。

ひ-あがる 乾上る・干上る【動四自】全く乾る。乾き果つ。ひいる。「腭(アゴ)が乾上る」參照。置土產「裸になされて、寒い。著物(キルモノ)が干あがったらば著たい」夕霧阿波鳴渡「乾上った土器(カハラケ)に、燈心一筋とぼいて」

び-あく 美惡【名】一『禮記の學記篇に「君

子既知二至レ學之難易一、而知二其美惡一」とあり』よきと、あしきと。善惡。㊁『史記の魯仲連傳に「女無二美惡一、入レ宮見レ妬」とあり』みめよきと、みめあしきと。美醜。

ひ-あし 日脚【名】㊀太陽の空を過ぎゆく速度。ひかげ。俳諧新選（武然）「筍や日脚に連る影法師」㊁一日の時間。「日脚が延びる」天神記「永き日脚のべらべらと」

ひ-あし 火脚【名】ひまはり（日廻）㊁に同じ。

ひあしんす 風信子【名】〔植〕ひやしんす（風信子）を見よ。

ひあしんさ 風信子【名】〔植〕ひやしんさ（風信子）を見よ。

ひ-あじろ 檜網代【名】檜又は竹にて、網代に組みたるもの。大鏡「祭の日調じたまへりし車……、檜網代といふ物張りて」

ぴあずさる【助數】ぴやすさるを見よ。

ひ-あたり 日當【名】日光のあたること、又その場所。新六「日あたりの澤の深田の霜どけに傳ひかねたるあぜの細道」醒士斎「これを、日あたりへ乾（ホ）せ」

ひ-あぢ 火味【名】香爐の火に、灰をかけて、火加減をはかるに用ふる具。形、香箸（カウバシ）に以て、鍔をはめたるもの。

びあつ-けい 微壓計【名】『英Microborograph』氣壓の微細なる變化を測定するに用ふる器械。

ぴあにすさ【名】ぴやにすさを見よ。

ぴあの 洋琴（英Piano）【名】ぴやのを見よ。

ひ-あはひ 廂間【名】『日光の照り透らぬ間の義』家と家との間なる、狹き處。

ひ-あはひ 日間【名】前條に同じ。

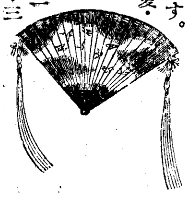
ひ-あひ 日間【名】㊀ひかず。日數（ニッスウ）。㊁ひぶ（日步）に同じ。

ひ-あひ 日合【名】時日の程あひ。ひどり。

ひ-あひ 火相【名】火の樣子。火加減。織留「內藏、火相よく念入れ」

ひ-あひ 杼合【名】機を織る時、その緯絲（ヌキイト）の間に、組織より來るにあらずして、廣狹・疎密の間隙を生じたる場合の、粗なる部分。外見を損ずるのみならず、摩擦によりて、破損しやすし。

ひ-あふぎ 檜扇【名】㊀檜の薄板を、絲にて綴ぢ連ねて作りたる扇。十六歲乃至三十歲の公卿、これを用ひ、老年の者も、束帶の時には懷中す。又、束帶の時は、夏・冬共に用ひ、衣冠の時は、冬のみ用ひたり（夏は紙の扇）。板の數は、二十五枚・二十八枚・三十五枚等、官位によりて同じからず。今日も、祭服として、衣冠著用の時には用ふ。㊁〔植〕『葉の並び方、前記の扇に似たるよりいふ』鳶尾（イチハツ）科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は劍狀にして、平行脈を具へ、兩側に相對して互生す。莖の上部に枝を分ち、夏秋の交、帶黃色又は帶赤色にして、濃紫色の斑ある六片の花被を有する花を開き、種子は黑し。うせん。からすあふぎ。からすあふひ。にはあふぎ。〔射干・夜干・玉燕〕㊂紋所の一。檜扇㊀のさまを描けるもの。



（ひあふぎ㊀）

ひあふぎ-あやめ 檜扇溪蓀【名】〔植〕鳶尾（イチハツ）科に屬する多年生の草。高さ二尺、葉は劍狀にして、燕子花（カキツバタ）のに似、中肋狀の脈無く、淡綠色にして、基部はやや紫色。初夏、葉間より花莖出で、數枚に分る。花は各花莖に二箇づつ開き、形、溪蓀（アヤメ）のに似て、濃紫色の脈ある紫色の萼を具へ、花瓣は極めて小し。觀賞用として栽培す。

ひあふぎ-ずゐせん 檜扇水仙【名】〔植〕鳶尾（イチハツ）科に屬する多年生の草。高さ二尺に達し、球莖を具へ、葉は劍狀にして、中肋を有し、簇生す。花莖は枝を分ち、花は大體圓錐狀に排列し花被は、中央部は鮮橙黃色を帶ぶ。原產地は南亞弗利加。

ひあふぎ-てふ 檜扇蝶【名】紋所の一。檜扇㊀を、蝶形に描けるもの。

ひあふぎ-らん 檜扇蘭【名】〔植〕やうらくらん（瓔珞蘭）に同じ。

ひ-あふそう-しや 被押送者【名】押送せらるる囚人、又は刑事被告人。

び-あふさう 微凹頭【名】〔植〕『英Retuse』葉先（エフセン）の一形。圓形にして、中央の淺く凹めるもの。

ひ-あぶり 火焙・火炙【名】㊀火にて焙り殺すこと。㊁武家時代に、罪人を柱に縛りつけ、周圍に薪を積みて燒き殺しし刑罰。火刑。燔刑。

ひ-あんじ-せい 被暗示性【名】『英Suggestibility』暗示に感應する性質。

ひ-あんばい 火鹽梅【名】火力の程あひ。火の加減。俳諧新選（沙月）「存分や內の火燵（コタツ）の火鹽梅」

ひ-あめ 冰雨・氷雨【名】ひさめ（氷雨）に同じ。

ひあめ-づか 冰雨塚・氷雨塚【名】ひさめづか（氷雨塚）に同じ。

ひ-あや 緋綾【名】緋色の綾織物。

ひ-あらし 日荒【名】『比叡嵐の意か』秋・冬の頃に吹く風。〔近江國の方言〕

ひ-ありやん-じんしゆ 非アリヤン人種【名】アリヤン人種以外の人種。

ひい 杼・梭【名】ひ（杼）の音便。字鏡「杼、比伊」

ひ-い 緋衣【名】緋色の衣服。

ひ-い 一【數】ひ（一）の音便。「ひい・二（フウ）・三（ミ）・四（ヨウ）」

ひい【貌】鳥又は鹿などの啼聲。盛衰記「鵼（ヌエ）……。ひいと鳴く」芭蕉「ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿」

ぴい【名】女の嬰兒を云ふ。〔豐後國・佐渡國の方言〕

び-い 美衣【名】美しき衣服。美服。

び-い 微意【名】㊀いささかなる心。微志。㊁自己の意志の謙稱。寸志。微衷。

ぴい【名】三十枚一組なる、一種のカルタ。

ぴい P【名】ぷろ㊀に同じ。

びいあ 麥酒（英Beer）【名】びいや（麥酒）を見よ。

びいあ-ほおる（英Beer-hall）【名】びいやほおるを見よ。

ぴい-おお-ぴい P.O.P【名】『英Printing out paper の頭字を取りて呼べるもの』寫眞の印畫紙の一。燒き附けたる時、すでに畫像を現し、後、鍍金（メッキ）によりて、仕上をなす方法に依るもの。主として、鹽化銀・ゼラチン又は鹽化銀・コロヂオンにて製す。（ぶろまいど紙に對して）

ぴいおおぴい-しやしん ピイオオピイ寫眞（英P.O.P. print）【名】ピイオオピイにて製したる寫眞。

ひ-いか ひ烏賊【名】〔動〕烏賊の一種。大さ三寸內外、脚の長さの差甚し。我國、到る處に產す。ばらずいか。

びいかあ（英Beaker）【名】薄き硝子にて製したる、化學實驗用の盃。大小數箇を重ね合はせて、一組とするを常とす。

ひいき 贔屓・贔屭【名】『ひき（引）㊀の延ともいひ、又、ひき（贔屭）の延ともいへど、前說可なるべし。ひきびき（引引）參照』己が好む方に、力を添ふること。目をかけて引き立つること。後援。

贔屓の引倒【句】ひいきだふし（贔屓倒）に同じ。曾我會稽山「かたむくろに曾我を引き、おのれは贔屓の引倒」

ひいき-ぐち 贔屓口【名】贔屓にするあまりに、或人を實際以上に譽むる言葉。桂川連理柵「ひいき口でござるかや」

ひいき-すぢ 贔屓筋【名】藝人などの中の或者を贔屓する人。

ひいき-だふし 贔屓倒【名】贔屓をして、却って、その人に迷惑を掛くること。贔屓の引倒。

ひいき-びいき 贔屓贔屓【名】各自が好む方に、力を添ふること。ひきびき。

ひいき-ぶん 贔屓分【名】贔屓のためにすること。持統天皇歌軍法「最前に來て、內證といふは、一門だけの贔屓分」

ひいき-め 贔屓目【名】贔屓にするあまりに、或人を、實際の價値以上に見ること。一代男「贔屓目から見立てました。壘の上で育つ人ぢや」

ひ-いく 肥育【名】〔農〕家畜・家禽等を、肉用として屠殺するに先だち、喫氣を與へ、運動を禁じ、食糧の回數を增しなどして、短時日の間に肥滿せしむること。

び-いく 美育【名】〔哲〕『英Aesthetic education』美感の敎育。趣味を高尙・純潔ならしめんと努むる敎育。

ひ-いけ 氷池・冰池【名】水を凍らせ、翌年

の氷様（ヒノタメシ）の奏に、その氷の厚薄を奏上する池。氷薄き時は、凶年の兆なりとて、祈禱を行ひ、これを氷池の祭といへり。〔古語〕年中行事歌合「今日ぞ知る年は昨日に栗栖野（クルス）の氷池の水の深き惠を」

氷池の祭【句】前條を見よ。

ひ-いけ 火活【名】炭火を、消えぬやうに、灰の中に埋むること。

ひ-いご 榿子【名】㊀〔動〕とびのうを（飛魚）に同じ。㊁〔動〕つばくらめ（燕）を云ふ。〔但馬國の方言〕㊂鯷（コヒシ）の、乾したるもの。〔陸奥國の方言〕

ひい-さま 姫様【名】『ひいはひめ（姫）の略の音便』高貴の令孃などの敬稱。

ひい-さま 日様【名】『ひいはひ（日）の音便』たいやう（太陽）の敬稱。おひさま。〔幼兒の語〕

びい-しき 美意識【名】〔哲〕『英 Aethetic psychosis』美を意識する態度。美醜及びその程度を判別する意識。

ひいたあ（英 Heater）【名】〔理〕石油機關に於て、適量の石油を滴下せしめて、直ちにこれを氣化せしむるために裝置したる、熱せられたる物體。

ひい-たづら 火徒【名】ひいぢり（火弄）に同じ。

ひい-ち 非一【名】〔佛〕ひさんひいち（非三非一）を見よ。

ひい-ぢぢ 曾祖父【名】『ひぢぢ（曾祖父）の音便』そうそふ（曾祖父）に同じ。

ひい-ぢり 火弄【名】小供などの、火を弄ぶこと。ひせせり。ひなぶり。ひいたづら。

ひ-いづ 秀づ【動下二自】『穗出づの轉といふ』㊀穗出づ。ひづ。㊁すぐる。ぬきんづ。まさる。靈異記「秀、勝也。須久禮爾多留。又云、備伊弖爾多流」

秀でて實（ミ）らず【句】㊀穗は出でながら、結實成熟せず。㊁『論語の子罕篇に「苗而不ㇾ秀者有矣夫、秀而不ㇾ實者有矣夫」とあるに本づく』學は進みながら、結果を見ずして終る譬。〔諺語〕

ひ-いっぱい 日一杯【名】その日の暮るるまでの間。

ひ-いてんてき-ざいくわ 非移轉的財貨【名】〔經〕人類の内部に屬し、他に移轉する能はざる財貨。例へば、智力・技能・信用などの類。

ひい-と 呎（英 Feet）【助數】ふうと（呎）の複數。

びいどろ 硝子（葡 Vidro 又 Vidris）【名】がらす（硝子）に同じ。醒睡笑「びいどろの盃・ちよく」狂歌百人一首（吉田俊住）「一合目二合目わかる硝子（ビイドロ）の陶子（トクリ）に入れし富士の白酒」

びいどろを逆（サカサ）【句】次條の略。〔江戸時代の語〕八笑人「どろびいとは、硝子（ビイドロ）を逆といふ事だは」

びいどろを逆（サカサ）に吊（ツル）す【句】次條の訛。〔江戸時代の語〕蜀山人狂歌「玳瑁の櫛の光やびいどろをさかさにつるす燈籠の鬢」

びいどろを櫻に吊（ツル）す【句】美貌の形容。〔江戸時代の語〕

びいどろ-からがい 硝子笄【名】硝子にて造れる笄。我衣「享保末より、ビイドロ笄はやる。筆の輪のやうにして、五色の綿を入れたり」

びいどろ-かがみ 硝子鏡【名】硝子の裏に、水銀を塗りて造れる鏡。現時の鏡は、大抵これなり。〔江戸時代の語〕

びいどろ-がみ 硝子紙【名】寒天を、薄く板に流して、よく乾きたる時、剝ぎ取りたるもの。昔、これを縫ひ合はせて、煙草入に造り、中なる煙草の透き通りて見ゆるを貴びたり。

びいどろ-よま 硝子よま【名】ビイドロの粉を、飯粒にて涏（ネ）り、塗りつけたる絲。紙鳶（タコ）をとばす時、他の紙鳶の絲にひきかけて、磨り切るに用ふ。ねよま（根よま）參照。〔肥前國長崎の方言〕長崎歲時記「市中のはた屋ども、野中に假店をしつらひ、硝子よま・はたを商ふ」

ひい-な 雛【名】ひひな（雛）の音便。

びい-ばあ（英 Beaver）【名】㊀〔動〕かいり（海狸）に同じ。㊁メリノ種の羊の毛を經（タテ）・緯（ヨコ）の絲に使用せる紡毛織物。

ひい-ばば 曾祖母【名】『ひばば（曾祖母）の音便』そうそぼ（曾祖母）に同じ。

ひい-はら 脾腹【名】ひはら（脾腹）の音便。

脾腹揉む【句】「脾腹（ヒハラ）を揉む」の音便。浮世床「何も、こんなに、ひいはら揉んで、敎へる譯も無（ネ）えが」八笑人「脾腹揉んで、臺詞廻（セリフマハシ）に、骨を折って」

びい-び【名】びいびいに同じ。〔幼兒の語〕

ひい-ひい【名】ひんひんに同じ。〔幼兒の語〕

ひい-ひい【貌】㊀ひりひりに同じ。曾我會稽山「からい涙に目玉も飛んで、咽（ノド）はひいひい」㊁苦しみ泣く聲。

びい-びい【名】おび（帶）を云ふ。〔幼兒の語〕

びい-びい【貌】ぴいぴい㊂に同じ。

ぴい-ぴい【名】㊀『その音に本づきていふ』ふえ（笛）を云ふ。〔幼兒の語〕㊁昔の玩具の一。吹けば、ぴいぴいと鳴りしもの。大藏流狂言（太刀奪）「ぴいぴい・風車」守貞漫稿「ぴいぴい、今世、江戸にある物なり。亘（ワタリ）直徑一寸四五分の竹の外面を、八角に削り、長さ一寸一二分に切り、兩面に赤き紙を貼りて、太鼓の形を造り、その柄を切り穿ち、内に簧（シタ）を附け、これを吹けば、ぴいぴいと鳴る。古のぴいぴい、この類か。……。又、方一寸五六分の板二枚、隅切となし、下の板には、中央に穴をあけ、又、紙を帖みて、挑燈の如くなし、板上に、種種禽獸を造りて、これを附け、下の板を上下し動かせば、ぴいぴいと鳴るあり」

ぴい-ぴい【貌】㊀鳥・獸の啼聲。㊁笛の音。㊂小兒のやかましく泣く聲。びいびい。㊃貧困なるさま。

ぴいぴい風車【句】『前條の語を、玩具のぴいぴいに言ひかけたる語』貧困なる形容。

ひいひい-たもれ【名】小供くさきこと、又その人。浮世風呂「まだお前（メ）へ、ひいひいたもれだものを」梅曆「あんなひいひいたもれを、妬心（ジンスケ）する事も無（ネ）え」

びい-ふ（英 Beef）【名】ぎうにく（牛肉）に同じ。

びいふ-かつれつ（英 Beef-cutlet）【名】西洋料理の一。牛肉にて作りたるカツレツ。

びいふ-すてえき（英 Beef-steak）【名】びふてきに同じ。

ひい-ふっ【貌】弓弦を離れたる矢の、風を切りて飛びゆき、物に中る音。平家「扇の要（カナメ）ぎは一寸ばかりおいて、ひいふっとぞ射切ったる」

ひい-ほん 被風【名】『漢字の唐音』ひふ（被風）に同じ。

ひい-まご 曾孫【名】『ひまご（曾孫）の音便』そうそん（曾孫）に同じ。

びいむ-とろおる（英 Beam trawler）【名】トロオル船の一種。桁（ケタ）にて、網口を擴張する裝置の打網（ウチアミ）を用ふるもの。

ひ-いん 碑陰【名】石碑の裏面。碑背。

ひ-いん 庇蔭【名】『庇はひさしの義、蔭は木の蔭（カゲ）の義』人をかばひ助くること。御蔭（オカゲ）。

び-いん 微陰【名】㊀かすかに陰（クモ）ること。うすぐもり。纖翳。㊁『後漢書の註に「五月、陰氣始生、故曰二微陰一」とあり』陰曆五月の異稱。

ひい-や【貌】笛の音。雪女五枚羽子板「笛の音の、ひいや兵亂（ヒヤウラン）治まりて」

びい-や 麥酒（英 Beer）【名】びいる（麥酒）に同じ。

びいや-ほおる 麥酒舖【名】びやほおるに同じ。

びいや-だる 麥酒樽【名】びやだる（麥酒樽）に同じ。

ひい-やり 冷【貌】ひやり（冷）㊀の延。狂言（日近大名）「臺所へ行（イ）て、水でも、ひいやりと飲まぬか」

ひい-よろ【貌】鳶の鳴聲。

ひい-らく 疼く【動四自】ひびらく㊁の音便。運歩色葉集「疼、ヒイラク」

ひい-る 沖る【動四自】ひひる（沖る）の音便。〔古語〕運歩色葉集「沖、ヒイル。沖ㇾ天」

ひ-いる 乾入る・干入る【動四自】全く乾る。乾上（ヒアガ）る。ひからぶ。運歩色葉集「干入、ヒイル」

びいる 麥酒（獨 Bier）【名】大麥の麥芽の粉にしたるに、水を注ぎ、列氏五六十度に溫めて、飴の如き汁となし、搾りて、麥の皮膜を去りたる液に、忽布（ホップ）を加へ、煮沸して冷し、更に酵母を加へて醱酵せしめたる、一種の酒。酒精分は百分の二乃至七にして、黑麥酒・白麥酒、などあり。び

いや。びや。

びいるこっぷ 麥酒洋盃（英 Beer-cup）【名】麥酒を飮むに用ふるコップ。びいるのみ。

びいるぜい 麥酒稅【名】麥酒の製造石數に應じて、徵收する租稅。麥酒(バクシユ)稅。

びいるぜいはふ 麥酒稅法【名】麥酒稅に關する法律。明治三十四年の制定に係り、爾後、多少の改正を經たり。

びいるだる 麥酒樽【名】**びやだる**(麥酒樽)に同じ。

びいるのみ 麥酒飮【名】**びいるこっぷ**(麥酒洋盃)に同じ。

びいるばら 麥酒腹【名】常に麥酒を飮む人の、腹部の肥えふくれてあること。

びいるびん 麥酒瓶・麥酒壜【名】麥酒を瓶詰(ビンヅメ)にする時の瓶。

ひいれ 火入【名】㊀烟草を吸ふための炭火を盛り、烟草盆の中に据うる、小き器。 狂言(通圓)「茶碗・火入を打破れば」 ㊁『「火を入る」㊀を見よ』 石燈籠の、燈火を入るる處。 和合人「石燈籠の陰へ、火入を置いて」 ㊂山野・秣場などを肥すため、その枯草を燒くこと。ひぶくろ。 ㊃『「火を入る」㊁を見よ。 淸酒又は醬油などを釀造するに、一定の時期に、程よく熱を加ふること。

ひいれず 火不入【名】『前條㊃を見よ』 **しんしゆ**(新酒)に同じ。 源平布引瀧「火入れずを下さるるとは、この又五郎、有難うて、涙がこぼれる」

ひいろ 火色【名】㊀灼熱せる物體の光輝の度合。冶金の際など、爐內の大體の溫度を判斷する等のために檢査す。㊁火の如き深紅なる染色。 政事要略「改以二深紅之色一當時號レ之曰二火色一」 ㊂襲(カサネ)の色目の一。表も裏も薄紅の打ちたるものの間に、一重を加へたるもの。一說に、**かいねり**(搔練)に同じと。 中山內府記「火色は頗色薄、搔練は赤色殊深なれば、搔練之日は、必可レ指二紺地平絹一」 ㊃織色の一。經(タテ)は紫に、緯(ヌキ)は紅なるもの。

ひいろ 緋色【名】㊀緋の色。㊁銅器に附くる、赤く鮮かなる鳶色。

ひいろいん（英 Heroine）【名】㊀女の英雄。㊁戲曲・小說などの女の主人公。

ひいろお（英 Hero）【名】㊀勇者。英雄。㊁戲曲・小說などの主人公。

ひいを 梭魚【名】［動］**しいら**(鱰)を云ふ。［肥前國唐津の方言］

ひう 飛宇【名】高き簷。飛簷。飛軒。

ひう 飛雨【名】飛ぶが如き樣に降る雨。ゆふだち。

ひう 聶う【動下二他】『**へつくり**(覺造)を見よ』 肉を薄く小く切る。剝ぐ。へぐ。［古語］ 記「鯨……の肉(ミ)の無けくをこきしひゑね、肉(ミ)の多けくをこきだひゑね」

びう 眉宇【名】『眉はまゆ、宇は簷の義。眉の、人面にあるは、家の簷あるに似たるよりいふ』まゆ。眉のあたり。

びう 微雨【名】こさめ。細雨。小雨。 蕪村「靑梅や微雨の中行く飯烟(メシケムリ)」

ひうが 日向【名】［地］西海道十二國の一。宮崎・南那珂・東諸縣(ヒガシモロカタ)・西諸縣・北諸縣・東臼杵(ヒガシウスキ)・西臼杵・兒湯(コユ)の八郡に分れ、全國、宮崎縣の管轄に屬す。

ひうがあびらやまのうへのみささぎ 日向吾平山上陵【名】鸕鷀草葺不合(ウガヤフキア)尊の御陵。大隅國肝屬(キモツキ)郡姶良(アヒラ)村大字上名(カミナ)の鵜殿(ウドノ)山をその地點に充つれど、信じがたし。

ひうがえのやまのみささぎ 日向可愛山陵【名】天彥火瓊瓊杵(アマツヒコホニニギ)尊の御陵。但し、その地點明かならず。

ひうがし 東【名】『**ひむがし**(東)の音便』**ひがし**(東)に同じ。

ひうがたかやのやまのうへのみささぎ 日向高屋山上陵【名】彥火火出見(ヒコホホデミ)尊の御陵。但し、その地點明かならず。

ひうがなだ 日向洋【名】［地］日向國の東方の海。北方、鶴見崎より、東方、都井(トヰ)崎に至り、直ちに太平洋の浩波を受く。

ひうがばと 日向鳩【名】［動］**あをばと**(靑鳩)に同じ。

びうきよ 謬擧【名】誤りて擧用すること。 正統記「君のみだりに授くるを、謬擧とし」

びうけい 謬計【名】**びうさん**(謬算)に同じ。

びうけん 謬見【名】まちがひの意見。誤りたる見解。

びうご 謬誤【名】**ごびう**(誤謬)に同じ。

ひうさうひむさうしよ 非有想非無想處【名】［佛］**ひさうひひさうてん**(非想非非想天)に同じ。

びうさん 謬算【名】誤りたる謀計。誤算。謬計。

ひうち 火打【名】㊀『「火を打つ」を見よ』 火打石と火打鎌とを打ち合はせて、發火せしむること、又その具。［燧］ 和名「燧、比宇知」 貫之集「火打の調度を調じて、それに薰物を加へてやるに」 ㊁**ひうちば**(火打羽)に同じ。 ㊂『形、火打袋に似たるよりいふ』 打裂(ブッサキ)羽織の脊の縫目の裂けたる部分に附くる緣。 膝栗毛「火打の處、黑繻子をあてたる打裂羽織」 ㊃［建］二材を水平に組合はせて、角(カド)を作る場合に、その角の歪を少くするため、その二材に斜材を取り附くること。［燧］

火打の石【句】次條に同じ。 夫木「打ちいだす火打の石のほくそ無み何にもつかぬ我が身なりけり」

ひうちいし 火打合・燧石【名】［鑛］白色にして、靑みを帶びたる、劣等の石英。堅くして、碎けば、稜角多きゆゑ、古、火打鎌と打ち合はせ、火口(ホクチ)に移して、火を取るに用ひたり。燧石(スキセキ)。 字鏡「磐、火宇知石」 和合人「火打石ばかりは、面取はいかぬものだて」

ひうちいしうり 火打石賣【名】昔、火打石を賣りあるきし商人。 若風俗「思の焚附(タキツケ)は火打石賣」

ひうちいた 火打板【名】襖(フスマ)の骨組の隅隅の歪を防ぐために、隅に用ふる、小き三角形の板。

ひうちがじやう 燧城【名】**ひうちじやう**(燧城)に同じ。 平家「木曾義仲は……、越前國燧が城をぞ構へける」

ひうちがた 火打形【名】火打㊀の形。 中務內侍日記「火打形のからかね」

ひうちがね 火打金【名】火打道具の一。生子(ナマコ)形の鋼鐵を、木に嵌めたるもの。燧石と打ち合はせて、發火せしむるに用ふ。ひうちがま。ひがま。

ひうちがは 火打革【名】蹴鞠を取り扱ふ時に持つ、小き革。たぶさがは。

ひうちがま 火打鎌【名】**ひうちがね**(火打金)に同じ。

ひうちけ 火打笥【名】**ひうちばこ**(火打箱)に同じとも、又、火打袋の類にて、腰に提げしものともいふ。［古語］ 大和「法師の、腰に、ひうちけなど結びつけたる」

ひうちじやう 燧城【名】越前國南條郡湯尾(ユノヲ)村大字燧にありし城。壽永二年、木曾義仲の兵、據守し、平維盛に陷れらる。燧山城。燧城(ヒウチガジヤウ)。

ひうちだうぐ 火打道具・燧道具【名】火を打ち出すにつきて必要なる諸道具、即ち火打石・火打鎌及び火口(ホクチ)。

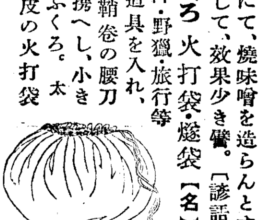
ひうちば 火打羽【名】『形、火打に似たるよりいふとぞ』鳥の翼の肩の部分にある羽。ひうち。 徒然「火打羽のたけにくらべて切りて」

ひうちばこ 火打箱・燧箱【名】㊀火打道具を入るる箱。その一部に、火口(ホクチ)を蓄ふ、長方形の箱。 置土產「火打箱探して、茶の下へ燒(ク)きつけ」 和合人「火鉢のそばへ、火打箱を置いた筈だ」 ㊁狹き家を嘲りていふ語。 俗曲(染幟菖蒲の彩色)「裏屋ずまひの火打箱、三疊敷に暮しても」

火打箱で、飯(メシ)を焚く【句】次條に同じ。［諺語］

火打箱で、燒味噌を燒く【句】『火打箱の火にて、燒味噌を造らんとする義』迂遠にして、效果少き譬。［諺語］

ひうちぶくろ 火打袋・燧袋【名】古、武士の、軍陣・野獵・旅行等に、火打道具を入れ、太刀又は鞘卷の腰刀に附けて携へし、小き袋。すりぶくろ。 太平記「虎の皮の火打袋をさげ」



（ひうちぶくろ）

火打袋御免（ゴメン）【句】室町時代に、四十歲以前の武家の者の內、火打袋を著くるを特許せられしこと。

ひうちやまーじやう 燧山城【名】**ひうちじやう**（燧城）に同じ。

ひーうつり 火移【名】火の燃え移ること。

ひーうつり 日映【名】日光の映ずること。

ひーうつり 火映・灯映【名】火影の、物に映ずること。（俳諧新選、赤羽）「灯映や白く見て伐る女郎花」

びうーでん 謬傳【名】**ごでん**（誤傳）に同じ。

ひーうとひ【名】『**ひひとひ**（日一日）の音便』**しゆうじつ**（終日）を云ふ。〔駿河國の方言〕

ひうーひう【貌】風の吹く音。びうびう。（鬼貫）「ひうひうと風は空行く冬牡丹」

びうーびう【貌】前條に同じ。

ひうーひくう 非有非空【句】〔佛〕**ひうひむ**（非有非無）に同じ。

ひうひくうーもん 非有非空門【名】〔佛〕**しもん**（四門）㊁を見よ。

ひうーひむ 非有非無【句】〔佛〕宇宙の本體（卽ち眞如）は、有（ウ）にもあらず、無（ム）にもあらず、絕對唯一の妙體なること。非有非空。色卽是空（シキソクゼクウ）、空卽是色。不生（フシヤウ）不滅。中道實相。

ひーうん 飛雲【名】㊀風に吹かれて疾く移り動く雲。㊁謠曲の一。山伏の、天狗にあひて、祈り伏する事を作れるもの。

ひーうん 否運・非運【名】否塞の運命。ふしあはせ。不運。（泰運に對して）

びーうん 微運【名】運命の薄きこと。ふしあはせ。薄運。（太平記）「三種の神器、徒に微運の君に隨って、空しく邊鄙・外土に交りたまふ」

びーうん 微雲【名】すこしの雲。うすぐも。

ひーうら 日裏【名】**ひかげ**（日陰）に同じ。（雙生隅田川）「日裏陰山の雨晒（アマザラシ）」

ひーうらがきーにん 被裏書人【名】〔法〕**うらがきゆづりうけにん**（裏書讓受人）に同じ。

びうーろん 謬論【名】㊀誤れる議論。㊁〔哲〕『英 Fallacy』三段論法の使用を謬れる議論。廣義に用ひて、修辭學の範圍に屬すべき文義解釋上の誤謬をも包含せしむる學者尠からず。論過。

ひーうを 干魚・乾魚【名】**ひもの**（干物）に同じ。（也有）「行く秋の干魚に殘る鳴子かな」

ひえ 冷【名】㊀ひゆること、又その程度。さむさ。（心中二枚繪草紙）「よかれ、惡しかれ、おのれが冷にも熱氣にもなる事か」㊁**ひえやまひ**（冷病）に同じ。㊂**さうどく**（瘡毒）に同じ。

冷が入る【句】**ひえいる**（冷入る）㊀に同じ。（續鳩翁道話）「腰ぎり水につかって、冷の入ることも、……忘れはてて」

ひえ 稗・穇子【名】〔植〕禾本科に屬する一年生の草。高さ三四尺、葉は細長くして、平行脈を有し、七八月頃、粟のに似たる穗を出だす。淡褐色なる小花、圓錐花序に排列し、花序の枝は、上部僅かに彎曲す。芒（ギ）あると無きとあり。田圃に栽培す。種子は小粒狀をなし、食用又は家禽の飼料とす。くさひえ。けびえ。（字鏡）「稗、比江」

稗の飯【句】**ひえめし**（稗飯）に同じ。（沙石集）「折敷（ヲシキ）に、紙打敷きて、稗の飯を置きたりける」

ひえ【名】風痺（カザホロシ）の類。

ひえ 比叡【名】㊀〔地〕**ひえいざん**（比叡山）に同じ。（芭蕉）「湖水晴れて比叡降り殘す五月雨（サツキアメ）」〔日枝〕㊁**えんりやくじ**（延曆寺）の異稱。（榮花）「奈良・三井寺・比叡・石藏（イハクラ）・仁和寺」

ひーえ 緋衣【名】緋色の法衣（ホフエ）。

ひえーあがる 冷上る【動四自】全く冷ゆ。ひえのぼる。ひえぬく。（五人女）「嵐、枕に通ひ、土間（ツチマ）冷えあがりけるに」

ひえーあたり 冷中【名】冷氣に中ること、又それがために起る病。

ひーえい 飛英【名】散る花。落花。

ひーえい 飛影【名】稻妻・飛鳥などの如き、速かに目を過ぐる影。

びーえい 微影【名】かすかなるかげ。

ひーえいきやうーせい 被影響性【名】意志・行爲・判斷等が、他人又は周圍の影響を受けて、多少變化する性質。

ひえいーざん 比叡山【名】㊀〔地〕『冷（ヒエ）の山の義。比叡は假借の字』山城國愛宕（オタギ）郡と近江國滋賀郡とに跨れる山。高さ二七一六尺。延曆寺・官幣大社日吉神社等あり。絕頂を四明（シメイ）ゲ嶽といふ。別稱、日枝（ヒエ）の山・天台山・台嶺・台嶽・艮嶽（ゴンガク）・叡嶽北嶺・鷲峯（ジユブ）・都富士（ミヤコフジ）。略稱、叡山。㊁**えんりやくじ**（延曆寺）の異稱。

ひえーいる 冷入る【動四自】㊀寒さ、身にしみとほる。ひえとほる。ひえこむ。（源氏）「雪降りたりし曉に…わが身も冷えいるやうにおぼえて」㊁生氣失せ、體溫、全く無くなる。（源氏）「俄かに消え入りて、ただ冷えに冷えいりたまふ」

ひーえう 祕要・秘要【名】**あうぎ**（奧義）に同じ。（盛衰記）「天台・法相は、天下泰平の祕要なり」

ひえーおろし 比叡颪【名】比叡山より吹きおろす風。（近江源氏先陣館）「向ふ風の比叡颪で、櫓づか持つ手も切る樣に」

ひえーがたな 竹刀【名】**あをひえ**（竹刀）に同じ。（落窪）「政親、御ひえがたなを獻り」

ひえーかたまる 冷固まる【動四自】寒さに縮まる。（浮世風呂）「かて飯を食って冷え固まって」（同）「雪女が、段段冷え硬まれば」

ひえーがら 稗稈・稗殼【名】稗の實を取り去りたるあとの稈（カラ）。（芭蕉）「新田に稗殼烟る時雨かな」

ひーえき 稗益・埤益【名】たすけとなること。補益。

ひーえき 飛驛【名】至急を要する驛使。（三代實錄）「飛驛上奏」

ひーえき 避役【名】〔動〕**かめれおん**（避役）の漢名。

びーえき 鼻液【名】はなしる。洟。

ひえーきる 冷切る【動四自】全く冷ゆ。ひえいる。ひえちぎる。ひえぬく。（奧州安達原）「寒氣に、肌も冷えきれば」

ひえーくび 冷首【名】死者の首級。（三河物語）「今日の高名は、悉く冷頸なり。我等が取りたるも、鐵炮にあたりて死にたる冷頸に御座候」

ひえーごたつ 冷火燵・冷炬燵【名】火氣の無き火燵。

ひえーこむ 冷込む【動四自】**ひえいる**（冷入る）㊀に同じ。

ひえーさんわう 日吉山王【名】『王の字、山の字の韻に引かれて、ナウと發音す』次條に同じ。

ひえーじんじや 日吉神社【名】近江國滋賀郡坂本村東坂本（比叡山の東麓）に鎭座せる官幣大社。祭神は大山咋（オホヤマクヒ）神。延喜式內の名神（ミヤウジン）大社。舊二十二社の一。日吉山王。「山王二十一社」參照。

ひえーじんじや 日枝神社【名】東京市麴町區永田町星ゲ岡に鎭座せる官幣大社。祭神は大山咋（オホヤマクヒ）神。國常立（クニトコタチ）神・足仲彥尊・伊弉册（イザナミ）神を配祀す。慈覺大師の、今の埼玉（サイタマ）縣川越（カハゴエ）の地に近江國日吉（ヒエ）神社の神靈を遷祀せしに創まり、太田道灌の江戶に移ししものと傳ふ。俗に、山王と稱す。

ひえーしんたう 日吉神道【名】本迹（ホンジヤク）緣起神道の一。舊く近江國日吉神社の神職・社僧等の唱道に係り、初は微微たりしが、德川時代に、天海僧正の、山王一實の說を加味するに至りて盛行し、一種の兩部神道なるより、明治維新の際、神佛混淆禁止と共に廢絕せり。天台山王神道。

ひえーしやう 冷性【名】身體の冷えやすき性質。（柳樽）「冷性で二十日ほど食ふ冬牡丹」

ひえーだ 稗田【名】稗を作りてある田。

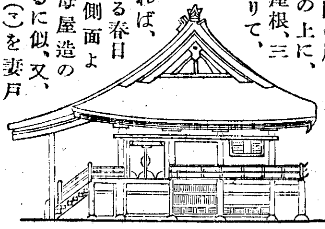
ひえだーあれ 稗田阿禮【名】〔人〕天武天皇の朝の舍人（トネリ）。天鈿女（アメノウズメ）命の後裔といふ。蘇我蝦夷の亂に、古記錄燒盡せしより、朝廷、古老を召して、口碑を奏せしめし時、二十五歲にして、朝命によりて、これを聽き、和銅四年に至り、太安麻呂（オホノヤスマロ）、元明天皇の命を奉じ、阿禮の記憶せる所を寫して、古事記を作る。阿禮、時に六十歲前後なりしならんといふ。一說に、阿禮は婦人ならんかともいふ。

ひえーだんご 稗團子【名】稗の粉にて製したる團子。（謠）「下衆（スザ）の子と稗團子」（鶉衣）「蟲齒やむ子にまじなひ敎へて、稗團子のもてなしにあふ」

びえ-ちぎる 冷えちぎる 【動四自】 **ひえきる**（冷切る）に同じ。賀古教信七墓廻「冷えちぎったる亡者（マウジヤ）の肌」

ひ-えつ 披閲 【名】 書狀を開きて、よく見ること。

ひえ-づくり 日吉造 【名】〔建〕神社の建築樣式の一。近江國日吉神社の形式に傚へるもの。三間・二面の內陣の左右と前面とに、一間の廂を繞らし、內陣の上に、神明造型の屋根、三方に廂屋根ありて、前面より見れば、入母屋造（イリモヤヅクリ）に似、後面よりすれば、前後に向拜ある春日造（カスガヅクリ）に似、側面よりすれば、入母屋造の袖を截斷せるに似、又、側面第一の間（マ）を妻戸とし、周圍の勾欄は、その部分に於て中斷し、又、側面後方の一間には、連子窓（レンジマド）の設ある等、特異の構造をなす。



（ひえづくり）

ひえ-つのる 冷募る 【動四自】 冷えまさる。ますます冷ゆ。

ひえ-とほる 冷通る 【動四自】 **ひえいる**（冷入る）㊀に同じ。水鏡「御らがひも氷りて、持ちたまへる手も冷えとほりて」

ひえ-どり 鵯 【名】〔動〕 **ひよどり**（鵯）に同じ。〔古語〕和名「鴨、比衣止利」

ひえな （羅 Hyaena） 【名】〔動〕 **はいいな**に同じ。

ひえぬき 稗貫 【名】〔地〕 陸中國十二郡の一。郡役所を、花卷川口町に置く。

ひえ-ぬく 冷拔く 【動四自】 **ひえきる**（冷切る）に同じ。

ひえ-のぼる 冷上る 【動四自】 **ひえあがる**（冷上る）に同じ。醒睡笑「頭も足も冷えのぼり」同「下から冷えのぼるほどに」

ひえ-の-やしろ 日吉社 【名】 **ひえじんじや**（日吉神社）に同じ。

ひえ-の-やま 比叡山・日枝山 【名】〔地〕 **ひえいざん**（比叡山）に同じ。記「近淡路（チカツアフミ）の國の日枝の山に坐（マ）す」

ひえのやま-でら 比叡山寺 【名】 **えんりやくじ**（延曆寺）に同じ。夫木「法（ノリ）の水淺くなりゆく後の世を思へば悲しひえの山でら」

ひえ-はだ 冷肌 【名】 冷えて溫みを失ひたる皮膚。冷性（ヒエシヤウ）の肌。

ひえ-ばら 冷腹 【名】 冷中（ヒエアタリ）のために、腹の痛み、又は下痢すること。

ひえ-ほふし 比叡法師 【名】 **やまほふし**（山法師）に同じ。平家「比叡法師あはの上座にはかられて嚴しく獄につがれけるかな」

ひえ-まき 稗蒔 【名】 小き鉢に、野稗（ノビエ）を蒔き、芽の出でたるを、青田の狀に見なして、目を娯ましむるもの。

ひえ-まつり 日吉祭 【名】 近江國日吉神社の祭禮。昔は四月の申の日（申の日二回ある時は、第二の申の日）なりしが、今は同月十四日と定めらる。山王祭。

ひ-えん 飛燕 【名】 ㊀飛ぶつばめ。㊁劍術などにて、燕の飛ぶ如く、身を飜すこと。

ひ-えん 飛簷 【名】 ㊀高き簷（ノキ）。飛宇。飛軒。「飛簷、此間、音比衣無。棟頭似レ鳥舒將レ飛之狀也」㊁〔建〕 **ひえんだるき**（飛簷榱）の略。

ひ-えん 飛鳶 【名】 鏃（ヤジリ）の一種。

ひ-えん 脾炎 【名】〔醫〕 **ひざうえん**（脾臟炎）に同じ。

び-えん 鼻炎 【名】〔醫〕 鼻腔粘膜の炎症。種類多し。

び-えん 美艷 【名】 **えんび**（艷美）に同じ。若風俗「若衆の美艷は、この道に至らずして辨へがたし」

ひえん-さう 飛燕草 【名】〔植〕 毛茛（キンポウゲ）科に屬する一年生の草。高さ一尺五六寸、葉は互生し、細狹なる裂片となる。二瓣・不整齊にして、美しき萼を具へ、青・白・桃色を呈する小花を著け、一萼片には、長き距を有す。原產地は歐羅巴。觀賞用として栽培す。ちどりさう。

ひえん-だるき 飛簷榱 【名】〔建〕 殿堂などの簷（ノキ）の、二重に構へたる中の、上方に在るもの、又は一重の簷にても、隅に至りて、反（ソ）り曲りてある榱。ひえん。

ひえ-めし 冷飯 【名】 **ひやめし**（冷飯）に同じ。一代女「膳なしに冷飯食ふ」

ひえ-めし 稗飯 【名】 稗を炊ぎて、飯とせるもの。

ひえ-も 稗藻 【名】〔植〕 **たぬきも**（狸藻）に同じ。

ひえ-もの 冷物 【名】 冷えたる物。

冷物御免 【句】 わが冷えたる皮膚を、相手の皮膚に觸るる時にいふ語。二代男「冷物御免と、足をさし込めば」置土產「冷物御免、どの懷（フトコロ）へなりとも入れと」

ひえ-やまひ 冷病 【名】 血液の循環害せられ、身體の冷ゆる病氣。ひえ。箱根靈驗躄仇討「冷病に腰・膝しびれ」

ひ-えり 日擇 【名】 よき日をえらぶこと。源氏「愛敬（アイギヤウ）の初は、日えりしてきこしめすべきことにこそ」

ひ-おき 日置 【名】 上古に於ける本邦固有の曆官にて、支那より曆法の傳はるに及びて、廢せられしものとも、又、毎日行ふとの義にて、祭祀の職をいへるなるべしともいふ。〔古語〕

ひおき 日置 【名】〔地〕 薩摩國七郡の一。郡役所を、中伊集院（ナカイジフヰン）村に置く。

ひおき-だ 日置田 【名】 雜色田（ザフシキデン）の一。日祀（ヒマツリ）に供する料田なるべし。へきだ。

ひおき-べ 日置部 【名】 日置部に屬せし部曲。

ひ-おくり 日送 【名】 次より次へと、日を過すこと。日をのばすこと。

ひ-おこし 火熾 【名】 **ひふきだけ**（火吹竹）を云ふ。〔九州の方言〕

ひ-おこり 日瘧 【名】 毎日發する瘧。

ひ-おし 鎺押 【名】 **たてあひおひ**（立合追）に同じ。

ひ-おち 火落 【名】『**ひいれ**（火入）㊃を見よ』清酒の貯藏中、香味に異狀を來して、變敗すること、又その酒。

ひおち-きん 火落菌 【名】〔植〕『英 Hiochibacillus』清酒中の蛋白質を分解して、火落の變化を生ぜしむる桿狀菌。

ひ-おつ 干落つ 【動上二自】 川の水など、流れ落ちて涸る。太平記「洪水に河を渡りかねて、水の干落つる程を待つなり」

ひ-おひ 日覆 【名】 **ひおほひ**（日覆）の略。

ひ-おほぢ 曾祖父 【名】 **そうそふ**（曾祖父）に同じ。〔古語〕運歩色葉集「曾祖父、ヒオホヂ」狂言（二千石）「某（ソレガシ）が親の親は、祖父（オホヂ）よな。その親は、ひおほぢよな」

ひ-おほば 曾祖母 【名】 **そうそぼ**（曾祖母）に同じ。〔古語〕

ひ-おほひ 日覆 【名】 ㊀日光を遮り覆ふ物。庇の類。ひおひ。ひよけ。ひがくし。天神記「矢通（ヤトホリ）の日覆に、作り花を以て葺きたれば」㊁芝居の舞臺の天井。すのこ。お染久松色讀販「日覆より松の釣枝」㊂夏季、帽子の上を覆ふ白布。

ひおほひ-ぶね 日覆船 【名】 日覆の設ある船。ひよけぶね。

ひおほひ-やかた 日覆屋形 【名】 二階作又は三階作なる屋形船の、最上部にある屋形。

ひ-おほをば 曾祖姑 【名】 **そうそこ**（曾祖姑）に同じ。

び-おん 美音 【名】 うるはしき音聲。謠ふ聲のよきこと。八笑人「例の美音で、女どもを迷はせてくれべえ」

び-おん 微音 【名】 かすかなる音。

び-おん 鼻音 【名】〔語〕『英 Nasal sounds』鼻腔の共鳴ある聲音。普通、口內又は脣の何れかに閉鎖ありて、氣流の、咽頭より直ちに鼻腔を通じて出づる場合の子音、殊にな行の子音即ちnをいふ。nは有聲音なれども、無聲の子音にして鼻音なるもあり、又、鼻にかかりて發音せらるる母音をも、これに含ましむるを得。正濁音。撥音。

びおん-き 微音器 【名】 **けんびおんき**（顯微音器）に同じ。

びおん-てんによ 美音天女 【名】〔佛〕 **べんざいてん**（辯財天）に同じ。盛衰記「美音天女とも名づけ、妙音樂天とも申すなり」

ひ-おもて 面日 【名】 日に向ひたる方。日光のさす方。ひなた。

び-おら （英 Viola） 【名】 西洋の絃樂器の一。構造、バイオリンと同樣にて、奏法も相同じけれど、調子一段低きため、音質、

別樣の趣を具ふ。

びおろんせろ（英 Violoncello）【名】西洋の絃樂器の一。構造はバイオリンと同樣にて、形、遙かに大きく、尾端に鐵錘を附け、床の上に立て、膝の間に挾みて奏す。

ひ-か 非家【名】その道、その職の專門家にあらぬこと。徒然「よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人に並ぶ時」

ひ-か 比價【名】〔經〕**ひかくねだん**（比較直段）に同じ。「金・銀比價の變動」

ひ-か 皮下【名】皮膚の下層。

ひ-か 飛舸【名】疾く駛る船。はやふね。

ひ-か 悲歌【名】㊀悲しみ歌ふこと。悲壯なる歌をうたふこと。㊁悲哀なる調子の歌。

ひ-か 疲餓【名】餓ゑ疲るること。

ひ-が 彼我【名】かれと、われと。自他。

ひ-が 飛蛾【名】飛ぶ蛾。ひとりむし。

飛蛾の火に入るが如し【句】『梁書の到既傳に「如二飛蛾之赴一レ火、豈焚レ身之可レ郄」とあり』「飛んで火に入る夏の蟲」に同じ。〔諺語〕

ひ-が 非我【名】㊀〔佛〕**むが**（無我）に同じ。㊁『英 Non-ego』自我以外の一切、即ち自我の對象となるもの。

ひが 僻【接頭】『**ひがむ**（僻む）の語幹』道理・事實などに違ひたる意。「ひがおぼえ」「ひが目」「ひが耳」「ひが心」「ひが事」

び-か 鼻下【名】鼻の下。

ひ-がい 避害【名】災害を避くること。

ひ-がい 被害【名】危害を受くること。損害を被ること。

ひがい-しや 被害者【名】㊀天災・事變又は人爲によりて、損害を被れる人。㊁〔法〕他人の不法行爲又は犯罪行爲によりて、權利の傷害を被る人。（加害者に對して）

ひがい-しや 避害者【名】災害を避けたる人。

ひ-かいしゆ-しや 被拐取者【名】〔法〕誘拐せられたる者と、略取せられたる者と。

ひがいす【名】**ひがやす**に同じ。曾根崎心中「あのひがいすな小男を、……、ようもようも踏みをったな」平假名盛衰記「手先なども青白け、ひがいすな生付（ウマレツキ）」

ひがい-ち 被害地【名】損害を受けたる土地。

ひがい-ち 避害地【名】災害を避くるために移轉する土地。

ぴか-いち 光一【名】㊀花合（ハナアハセ）の手役（テヤク）の一。光物（ヒカリモノ）一枚にして、他は、素物（スモノ）又は場（バ）などの札のみなるもの。

ひ-かいちやう 日開帳【名】毎日行ふ開帳。

ひか-いっけつ 皮下溢血【名】〔醫〕皮下又は皮下組織の内に、血液の流入すること。原因は挫傷・壓迫・打撲・咬刺等の外傷。皮膚出血。

ひがい-はん 避害鈑【名】〔兵〕防楯（バウジュン）の一。敵彈に對し、照準手を掩護する目的にて、砲架に結合する、鐵鈑の楯。

ひがい-まうざう 被害妄想【名】仇敵・探偵などに追跡せられ、危害を受くべしと誤信する妄想。

ひがい-みん 被害民【名】損害を被りたる人民。

ひがい-みん 避害民【名】災害を避けたる人民。

ひ-かう 披講【名】詩歌などの會にて、詩歌を讀み上ぐること、又その式、又その人。八雲御抄「御製讀師は歌披講畢」增鏡「作文（サクモン）……、人人の文を取集めて、一度に文臺の上に置く。披講の終る程に」

ひ-かう 詖行【名】偏頗なるおこなひ。

ひ-かう 跛行【名】びっこをひくこと。

ひ-かう 非行【名】正しからざる行爲。

ひ-かう 飛行【名】㊀とびゆくこと。空中をとびゆくこと。**ひぎやう**（飛行）參照。㊁飛行機・飛行船の、空中を進みゆくこと。

ひ-かう 比較・比校・比挍【名】**ひかく**（比較）を見よ。

ひ-かう 粃糠【名】しひなと、ぬかと。

ひ-かう 卑行【名】㊀目下の親戚。卑屬。㊁いやしき行爲。

ひ-かう 卑稿【名】自己の草稿の謙稱。拙稿。

ひ-かう 肥効【名】〔農〕肥料の、作物に及ぼす効力。施肥の効果。

び-かう 鼻高【名】**びかうり**（鼻高履）に同じ。下學集「鼻高、ビカウ。履也、高字或作レ荒」

び-かう 鼻腔【名】〔醫〕鼻のあな。顏面の中央にあり、不整方形にして、鼻骨・上顎骨等、種種の骨片より成り、上端は頭蓋腔の基底、眼窩の中央、下端は口腔の上蓋に接す。鼻中隔によりて、左右二箇に分るれども、後部に於て合一す。

び-かう 微香【名】かすかなるかをり。

び-かう 微行【名】目だたぬやうにして行くこと。しのびあるき。

び-かう 美行【名】褒むべき行爲。善行。

び-かう 尾行【名】あとをつけゆくこと。

び-かう 備考【名】參考に備ふること、又その物。㊁本文の補足、考究の材料等のために記し添ふること、又その記事。

び-がう 美號【名】よき名號。よき稱號。

ひかう-いうびん 飛行郵便【名】航空機にて輸送する郵便。

ひかう-か 飛行家【名】飛行機の操縱を職業とする人。

ひかう-き 飛行機【名】『英 Aeroplane』航空機の一。發動機と飛行螺旋機とを裝置し、翼狀の物を備へ附け、空氣の抵抗によりて受くる壓力を利用して、空中に浮揚し、坐乘者の操縱によりて、自由に飛行し得る機械。翼狀の物の數によりて、單葉式・複葉式・多葉式等あり。西暦十九世紀末完成して、先づ軍事上に使用し、その後、漸次、通信・交通の上にも利用するに至れり。

ひかう-ききう 飛行氣球【名】**ひかうせん**（飛行船）の舊稱。

びかう-ぐつ 鼻高沓【名】**びかうり**（鼻高履）に同じ。

ひかう-し 飛行士【名】一定の試驗を經て、飛行機操縱を許可せられたる者。

ひかう-しん 粃糠疹【名】〔醫〕皮膚面に、粃糠の如き細小なる鱗屑の生ずるもの。諸種の皮膚病に發生し、雲脂（フケ）も、その一にして、又、最も普通なるものなり。

ひかう-しや 飛香舍【名】**ひぎやうしや**（飛香舍）に同じ。運歩色葉集「飛香舍、ヒカウシヤ。藤壺」

ひかう-せん 飛行船【名】『英 Airship 又 Navigable balloon 又 Dirigible balloon』航空機の一。飛行發動機と飛行螺旋機とを備へ、自由に方向を定めて、空中を飛行し得る輕氣球。氣嚢を、アルミニウム又は木材を用ひたる骨組にて保たしめたるを硬式、全く骨組を有せざるを、軟式といひ、又、軟式の氣嚢の下部に、前端より後端に亙りて、龍骨を固定し、これに機關室・乘員室などを設けたるを、半硬式といふ。西暦第十九世紀末の完成にして、硬式中のツェッペリン（Zeppelin）式、軟式中のパルセバル（Parseval）式、最も有名なり。用途の沿革、飛行機に同じ。航空船。

ひ-かうせん-しや 非交戰者【名】從軍して、戰地にあれども、交戰者にあらざる者。例へば、新聞記者・布教師など。

ひかう-たい 飛行隊【名】**かうくうたい**（航空隊）の舊稱。

ひが-うた 僻歌【名】道理にはづれ、事實に違ひたる歌。實方集「八月ばかり、月あかき夜、花山院の、ひが歌よまんとて。秋の夜に山ほととぎす鳴かませば（連歌）垣ねの月や花と見えまし」

ひかう-はつどうき 飛行發動機【名】『英 Aero-engine』飛行機と飛行船とに裝置する發動機。現時のは、すべて、ガソリンを燃料とする内燃機關なり。航空發動機。

ひかう-ふく 飛行服【名】飛行家の、飛行の時著用する衣服。

ひかう-らせんき 飛行螺旋機【名】『英 Air-screw』**ぷろぺら**に同じ。

びかう-り 鼻高履【名】皮にて作り、爪先を高くしたる履。奈良朝時代に專ら行はれ、平安朝時代には、專ら僧家の料となれり。後の淺沓は、その變化せるものといふ。はなたかぐつ。鼻高。鼻廣（ビソウ）。**はなきれぐつ**（鼻切沓）參照。和名「鼻高履、楊氏漢語抄云、突子、今僧侶所レ著、鼻廣履是歟。鼻高履也」伊呂波字類「鼻高履、ビカウリ、今僧侶所レ著鼻高履」

ひからーりつ 肥効率【名】〔農〕肥料の効果の率。肥料の作物に吸收せらるる割合と、施肥の結果として現るる、收穫增加の割合との平均によりて測定す。

ひがーおぼえ 僻覺【名】事實に違ひたる記憶。〔古語〕枕「ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば」

ひがーかぞへ 僻數【名】誤りたる計算。誤算。〔古語〕源氏「いと若きようにて、かく御賀などいふことは、ひがかぞへにやとおぼゆるさまの」

ひーかがみ 引屈・膕【名】『ひきかがみ(引屈)の略』膝のうしろの、窪みて、坐る時、屈む處。うつあし。よぼろ。よぼろくぼ。ひっかがみ。

ひーかき 火搔【名】㊀薪の火を搔き出すに用ふる具。端の曲れる長き金に、木の柄を取り附けたるもの。おきかき。すみかき。はひかき。運歩色葉集「火搔、ヒカキ」㊁じふのう(十能)に同じ。重井筒「火をくわとおこいて、火搔に二三杯持っておぢや」

ひーがき 檜垣【名】㊀檜の薄き板を、網代(アジロ)の如く斜に編みて張れる垣。古、賤しき家などの外構に用ひたり。源氏「家の傍に、檜垣といふもの、新しうして」宇治「中の檜垣を、ただ毀ちに毀ちて」㊁兜の鉢の緣に附けたる飾。㊂ひがきぶね(檜垣船)の略。㊃せきでらこまち(關寺小町)㊂を見よ。

ひがきーあや 檜垣綾【名】檜垣に菊花の模様を織り出したる綾。

ひーかきーかへす 日搔返【名】蘭陵王(ラリヨウワウ)の舞にある、一種の手振。

ひがーぎき 僻聞【名】ひがみみ(僻耳)に同じ。〔古語〕著聞「もしひが聞かと、人を換へて聞かするに」

ひがきーくわいせん 檜垣廻船・菱垣廻船【名】ひがきぶね(檜垣船)に同じ。

ひがきくわいせんーどんや 檜垣廻船問屋・菱垣廻船問屋【名】德川時代に、檜垣船を用ひて、江戸十組の問屋と大阪二十四組の問屋との貨物を廻漕せし問屋。檜垣船積(フナツミ)問屋。檜垣問屋。

ひかーきしゆ 皮下氣腫【名】〔醫〕皮下組織の間に、瓦斯の豬留する病。皮膚の損傷あるに當り、空氣進入して發す。

ひがきーづくり 檜垣作【名】船を、檜垣船として造れること、又その船。博多小女郎波枕「沖に何待つ檜垣作、十四五端の廻船」

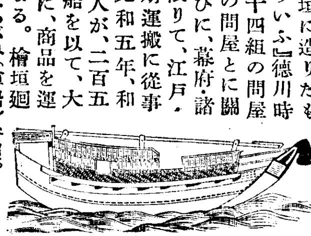
ひがきーどんや 檜垣問屋・菱垣問屋【名】**ひがきくわいせんざんや**(檜垣廻船問屋)の略。

ひがきーのーおうな 檜垣嫗【名】〔人〕次條に同じ。

ひがきーのーご 檜垣御【名】〔人〕『謠曲「檜垣」の曲に、もと太宰府にありし時、庵に檜垣を結ひめぐらして住みし由、記せり。御(ゴ)は、女に對する敬稱』平安朝時代に肥後國白河の邊に住みし遊女。清原元輔、肥後守たりし時、互に深く契りて、和歌を贈答せし事、家集に見え、大和物語には、小野好古(ヨシフル)が事となし、歌詞も少しく異なり。又、後撰集には、大貳藤原興範朝臣の事とせり。

ひがきーふなづみーどんや 檜垣船積問屋・菱垣船積問屋【名】ひがきくわいせんざんや(檜垣廻船問屋)に同じ。

ひがきーぶね 檜垣船・菱垣船【名】『垣立(カキタツ)の筋を檜垣に造りたるものなりしよりいふ』德川時代に、大阪二十四組の問屋と江戸十組の問屋とに關する商品、並びに、幕府・諸藩の荷物に限りて、江戸・大阪間の定期運搬に從事せし大船。元和五年、和泉國堺の商人が、二百五十石積の一船を以て、大阪より、江戸に、商品を運搬せしに始まる。檜垣廻船。ひがき。たるぶね(樽船)參照。


(ひがきぶね)

ひかきーめ 引搔目【名】鑢(ヤスリ)などにてすりたる目。七十一職人歌合「恨めしや人の心のあら鑢引搔目にだにのぞかれぬかな」

ひがきーりんず 檜垣綸子【名】檜垣綾の綸子(リンズ)。

ひーかく 皮革【名】獸皮の、毛の著けるままのと、毛を除きて精練せるものと。

ひーかく 皮角【名】〔醫〕『獨 Hauthorn』皮膚に、外見獸角のごとき種種の形の突起生ずるもの。長さ、數寸にも及ぶことあり。老人に多く、婦人にやや多し。無害なれど、稀に癌腫を續發することあり。

ひーかく 祕閣【名】㊀天子の書籍を藏し置く倉庫。祕館。㊁支那にて、文字を書く時に、臂を置くに用ふる臺。〔臂閣〕

ひーかく 比較【名】『較の字の音、正しくはカウ』くらぶること。くらべ考ふること。

ひーかく 否隔【名】『ひそく(否塞)を見よ』閉ぢへだたりて、融和せざること。

ひーがく 費額【名】入費のたか。費消のたか。いりめ。

ひーがく 非學【名】學問をせぬこと。徒然「非修(ヒシユ)・非學の男」

びーがく 美學【名】〔哲〕『英 Aesthetics』自然・人生及び藝術に現るる美を對象とする學問。審美學。

ひかくーかいばうがく 比較解剖學【名】『英 Comparative anatomy』解剖學の一分科。すべての動物の構造を比較し、その器官の相同・相似等を論ずるもの。

ひかくーきふ 比較級【名】〔語〕『英 Comparative degree』歐洲語の副詞・形容詞にて、狀態の程度を、他と比較していひあらはすもの。(通常級・最上級に對して)

ひかくーけっくわんしゆ 皮角血管腫【名】〔醫〕皮下の血管擴張して、角層を被る血管腫を形成する病。手の指、足の趾の背側面等に生じ、凍瘡に原因すること多し。

ひかくーけんきう 比較研究【名】彼と此とを比較して、異同を研究すること。

ひかくーげんぎよがく 比較言語學【名】『獨 Vergleichende Sprachwissenschaft』言語學の一分科。二種以上の異なる言語の構造・變遷等を比較して、その親近關係を調査研究するもの。西曆一七八七年に、英國の東洋學者ジョオンズ (Sir W. Jones)、印度語と希臘語及び羅甸語との間に親近關係ある旨を唱道し、後、獨逸のシユレエゲル (A. W. Schlegel)・ボップ (Fr. Bopp) 出でて、長足の進步をなせり。舊稱、比較博言學。

ひかくーげんごがく 比較言語學【名】前條に同じ。

ひかーくさ【名】〔植〕からすびしやく(烏柄杓)に同じ。

ひーがくし 日隱【名】ひおほひ(日覆)㊀に同じ。〔古語〕仲正集「暮れにけり西の日隱とりのけよ月を厭ぶと人もこそ見れ」

日隱の間(マ)【句】「階隱(ハシガクシ)の間」に同じ。大鏡「日隱の間に、尻打ちかけて」

びかくーしだ 麋角羊齒【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。地下莖より若干の常綠葉簇生す。葉は全邊にして、披針形なれども、深缺刻を有するもの二三箇あり。葉の裏面には、子囊幹密生す。かうもりしだ。かはほりしだ。

ひかくーしんりがく 比較心理學【名】『英 Comparative psychology』心理學の一分科。兒童と大人、人類と他の動物、常人と罪人、又は甲人種と乙人種等、種類の異なる者の心理に就きて、その異同を比較研究するもの。

ひがくーしや 非學者【名】㊀學問をせぬ者。㊁〔佛〕大・小乘の學を修めざる者。

非學者、論議に負けず【句】無學なる者は、却って暴論を吐きて、屈伏せぬものなり。〔諺語〕狂言(宗論)「そちがやうなる者にかまふよりも、非學者論議に負けじといふ事がある」

非學者、論に負けず【句】前條に同じ。〔諺語〕天神記「一句に、はったと詰められ、おお非學者論に負けず、御邊などとは論ぜず」

ひかくーしゆうけうがく 比較宗教學【名】『英 Comparative religeon』宗教の敎義及び現象を、歷史的に比較研究する學問。

ひかくーせいりがく 比較生理學【名】『英 Comparative physiology』生理學の一分科。高級及び下級に位せる各種の生物の生活現象を比較し、相待ちて、その說明に資せんとするもの。

ひかくーてき 比較的【貌】他の事物と比べての程度。

ひかくてきーぶんてん 比較的文典【名】

次條に同じ。（歷史的文典に對して）

ひかくてき-ぶんぽふ 比較的文法【名】ひかくぶんぽふ（比較文法）に同じ。（歷史的文法に對して）

びがくてき-へうじゆん 美學的標準【名】〔哲〕びてきへうじゆん（美的標準）に同じ。

ひかくてき-みつど 比較的密度【名】〔理〕みつど（密度）を見よ。

ひかく-ねだん 比較直段・比較値段【名】他との比較によりて定まる價格。

ひかく-はくげんがく 比較博言學【名】ひかくげんごがく（比較言語學）の舊稱。

ひかく-はふがく 比較法學【名】『獨 Vergleichende Rechtswissenschaft』法律學の一分科。世界各國の法律現象を、法系別・國別又は人種別等に研究して、法律の原理・通則を發見せんとするもの。

ひかく-はふせいし 比較法制史【名】二箇以上の國家の法制の起原・變遷・發達等を、沿革的に比較研究する學問。

ひかく-ぶんてん 比較文典【名】次條に同じ。（歷史文典に對して）

ひかく-ぶんぽふ 比較文法【名】『英 Comparative grammar』文法の一種。二種以上の國語を比較して、その文法の異同關係を研究するもの。比較文典。比較的文典。比較的文法。（歷史文法に對して）

ひ-かげ 日影【名】㊀日の影。日の光。ひなた。後拾遺「雲の上にさばかりさしし日影にも君が氷柱（ヒタル）は解けずなりにき」㊁ひあし（日脚）に同じ。

ひ-かげ 日陰・日蔭【名】㊀日光のささぬ所。日光を遮る物の蔭。（日向（ヒナタ）に對して）㊁君恩の及ばぬ身分。世間より棄てられたること。㊂ひかげもの（日陰者）の略。傾城反魂香「筆の軸さへ細元手……日陰の師匠を重んじて」梅曆「鬼兵衞（キヘ）といへるが後見して、……、丹次郎は、日蔭の身となり」㊃〔植〕ひかげのかづら（日陰葛）に同じ。和名「蘿蔓、日本紀私記云、比加介」㊄ひかげのかづら（日陰蔓）㊁に同じ。後拾遺「臨時祭……日かげとおぼしくて」㊅〔植〕『ひかげのかづら（日陰葛）を見よ』**さるをがせ**（猿麻桛）に同じ。〔蘿・女蘿・松蘿〕紀「蘿、此云比舸礙」

日陰の絲【句】**ひかげのかづら**（日陰蔓）を見よ。蜻蛉「日陰の絲結びて、とて賜へりければ」

日陰の組（クミ）【句】前條に同じ。

日陰の毛【句】鷹の羽裏にある毛。

日陰の心葉（ココロバ）【句】古、日陰蔓（ヒカゲノカヅラ）と共に、冠に附けし心葉。新六「諸人の掛くる日かげの心葉に天照る神の惠をぞ見る」

日陰の梨【句】形はよけれど、味の惡しき譬。

日陰の花【句】世間に知られぬ譬。

日陰の豆も彈時（ハジケドキ）【句】相當の年齡に達して、春情の發動する頃。

日陰の桃の木【句】瘠せかじけたる身體の譬。

ひ-かげ 火影【名】**ほかげ**（火影）に同じ。堀次「火かげさす豐の明（アカリ）に見つるかなわがすべらぎの千代のかざしを」

ひ-がけ 日掛【名】㊀日日若干づつ掛金をすること。㊁比較的多額の金錢を融通する目的にて、一定の人員が、金錢を、各自、毎日若干づつ醵出し、その總額を、抽籤などによりて、一人に與へ、順次に全員に及ぼす方法。浮世風呂「日掛の錢」和合人「日日の入用は、講中になった者から、日掛で出させる譯なのか」

ひ-がけ 火掛【名】掛物㊁の內、下等なる金米糖（コンペイタウ）などを製造するに、種を氷蜜に浸し、直ちに蒸籠（セイロウ）にて乾すこと。

ひかげ-かづら 日陰蔓・日蔭蔓【名】**ひかげのかづら**（日陰蔓）に同じ。和名「日本紀私記云、爲レ蘰以レ蘿、比加介加都良」

ひかげ-ぐさ 日陰草・日蔭草【名】㊀**ひかげのかづら**（日陰蔓）に同じ。蜻蛉「かけて見し末も絕えにし日かげ草何によそへて今日結ぶらん」㊁〔植〕**ふたばあふひ**（二葉葵）に同じ。後拾遺「臨時祭……日かげとおぼしくて、鏡の上に、葦手にて書きて侍りける。日かげ草輝く影やまがひけんますみの鏡曇らぬものを」

ひかげ-すげ 日陰菅・日蔭菅【名】〔植〕莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。高さ一二尺。葉は互生し、三縱列に排列し、狹長にして、平行脈を具へ、花は單性・黑褐色、穗狀花序に排列し、雄花は花莖の頂上に、細き花序を成し、雌花は、その下部に、長き柄ある花序を作る。山野に自生す。

ひかげ-すみれ 日陰菫・日蔭菫【名】〔植〕菫菜（スミレ）科に屬する多年生の草。高さ三四寸。葉は地下莖より叢生し、葉柄長く、葉身は心臟形をなし、鈍鋸齒と毛とを具へ、花莖の頂に、五瓣より成る一花を著く。花は大形にて、白色又は青紫色を呈し、長き距を具ふ。山野の陰地に自生す。えぞすみれ。えぞのこすみれ。しんすみれ。

ひかげ-ちやう 日蔭町・日影町【名】〔地〕『狹隘にて、日光のさすこと少しとて、日蔭といひしを、後、日影の字に改めたり』東京市芝區の一部。芝口の通路の西に並行せる、狹隘なる街。兩側に古著店・古道具店多く、神田區の柳原と好一對をなす。

ひかげ-つつじ 日陰躑躅・日蔭躑躅【名】〔植〕石南（シヤクナゲ）科に屬する灌木。高さ二三尺。葉は互生し、小くして長卵形をなし、七月頃、淡黃色・合瓣の鐘形花開く。果實は、球狀にして、熟すれば紅色を呈す。山野に自生し、又、觀賞用とす。いはつつじ。さはてらし。みやまつつじ。めしやくなぎ。めしやくなげ。

ひか-けっていそしき 皮下結締組織【名】〔醫〕『獨 Unterhautfindegewebe』皮膚の眞皮の下に在りて、粗鬆なる結締組織と彈力纖維とより成り、多量の脂肪を含み、皮膚を、筋膜又は直接に骨に附著せしむる層。頰部・臀部・大腿・足蹠等の如きは、この組織を有す。

ひかげ-てふ 日陰蝶・日蔭蝶【名】〔動〕鱗翅類に屬する昆蟲。翅は帶黃暗褐色にして、後翅には、不明瞭なる環紋數箇あり。幼蟲は禾木科植物の葉を食ふ。

ひかげ-の-かづら 日陰蔓・日蔭蔓【名】『日陰㊃を蘰（カツラ）とずる義』古、神嘗會・大嘗會等の神事に、冠の巾子（コジ）の左右、又は供神の具に結びて垂れたる紐。上古は、次條の草を用ひたれど、中世以來、絹紐を、總角（アゲマキ）と鮑結（アハビムスビ）とに數段に結びたるを代用することとなり、日蔭の絲、又は日蔭の組といへり。色は、主として、青又は白なれど、年少者は、紅梅・白梅交・萌黃などを用ひたり。明治に至り、登極令の附則中に、男子は、上古のごとく眞の草を用ひ、女子は、昔のまま日陰の絲を代用することに定められたり。かづらかけ。ひかげ。**こころば**（心葉）參照。新六「見るたびに日かげのかづらよそながら昔をかけて忘れやはする」

ひかげ-の-かづら 日陰葛・日蔭葛・石松【名】〔植〕石松（ヒカゲノカヅラ）科に屬する多年生の草。長さ六七尺にして、地上に匍匐し、下方より細根を生ず。葉は小くして、線狀針形をなし、莖・枝に密生するさま、杉に似、枝の頂上に、黃色にして、長さ一寸餘の子囊穗を出し、子囊中に、多くの淡黃色なる胞子を藏す。觀賞用ともし、胞子は、石松子（セキシヨウシ）とて、藥用に供す。かづらかげ。きつねだすき。たまひかげ。やまかづら。（蘿・松蘿又は女蘿の字を充つる**さるをがせ**（猿麻桛）をこれと混じたる古書もあれど、誤なり。**ひかげ**（日陰）㊅參照。）

ひかげ-の-かづら 蘿鬘【名】〔書〕國語の文法上の分類、活用・てにをはの事等に就きて講述せるもの。一卷。堀秀成の著。

ひかげのかづら-くわ 石松科【名】〔植〕隱花植物中、羊齒（シダ）植物、石松類の一科。多く熱帶・溫帶の地に生ず。石松（ヒカゲノカヅラ）・萬年杉等、これに屬す。せきしようくわ。

ひがけ-ほけん 日掛保險【名】〔商〕特別保險の一。火災保險中、保險料一口に就き、日掛若干錢と定めたるもの。

ひ-かげん 火加減【名】火氣の强弱の度。ひあんばい。

ひかげ-もの 日陰者・日蔭者【名】㊀罪を犯し、又は勘當せられなどして、表だちては、世に立ち交ることをせぬ者。世を隱れ忍ぶ者。ひかげ。本朝二十不孝「日陰者といはれて、腫物・切疵の膏藥賣りて」㊁世に知られず、立身せぬ人。

ひかげ-やま 日影山【名】〔地〕山城國愛宕（オタギ）郡にありといふ山。**みかげやま**（御蔭

山」に同じきか。堀太「日影山おふる葵のうら若みいかなる神のしるしなるらん」

ひかげ-わらび 日陰蕨【名】〔植〕はなわらび（花蕨）に同じ。

ひが-ごころ 僻心【名】ひがみたる心。ねぢけたる心。かんがへちがひ。源氏「ひが心にて、わが身を、さしもあるまじきさまにあこがらしたまふ」

ひが-こころう 僻心得【動下二自】まちがひて心得。考ちがひをなす。源氏「まだきに聞えば、またひが心得たまふべければ」

ひが-ごと 僻事【名】道理又は事實に違ひたる事。ひがわざ。源氏「いかにひが事多からん」盛衰記「當家追討の披露、一定（イチヂヤウ）僻事にこそ」

ひ-がさ 日傘【名】紙又は絹にて張り、晴天の日、日光を遮るに用ふるさしがさ。紙のは、多く紺色に染むるにより、青がさともいふ。又、油紙を張りて、晴・雨兩用に供するもありて、兩天（リヤウテン）の名あり。ひがらがさ。（雨（アマ）傘に對して）榮花「いとあやしき衣（キヌ）著、やれたる日がさをさして」

ひ-がさ 檜笠【名】檜の木にて作りたる網代（アジロ）笠なるべし。盛衰記「頸を掻落し、……、檜笠の下に引きかくし」冬の日「木賊刈下著に髮を茶筌して（といふ句に）檜笠に宮をやつす朝露」

ひ-がさ 日暈【名】かさ（暈）を見よ。

ひがさ-の-うら 日笠浦【名】〔地〕播磨國の海岸の一部の古稱なりといふ。萬葉「印南野（イナミヌ）は行き過ぎぬらし天傳（アマツタ）ふ日笠の浦に波立てる見ゆ」

ひがさ-やま 檜笠山【名】〔地〕播磨國印南（インナン）郡曾根村と大鹽村との間にある山。堀太「天傳（アマツタ）ふ時雨も袖に濡れにけりひがさの山をさして來つれど」

ひが-ざま 僻樣【名】ひがみたる有樣。道理に違へる次第。〔古語〕落窪「みづからの心、ひがざまにしおかばこそあらめ」源氏「年頃かくてはぐくみ聞えたまひける御心ざしを、ひがざまにこそ」

ひか-さ-る 引かさる【動下二自】心にまつはる。思ひ切るを得ず。ひきつけらる。

とらはる。ほださる。源氏「短かりける御契にひかされて、我も世にえあるまじきなり」箱根靈驗躄仇討「やっぱり輪廻（リンヱ）に引かされて、花の臺（ウテナ）の未來まで」

ひ-がし 東【名】『ひむがし（東）の略』㊀四方の一。太陽の出づる方、即ち西と相對する方角。ひんがし。東方（トウハウ）。㊁相撲場にて、力士の兩方に分れて控へたる内の一方。（西に對して）狂言（飛越新發意）「相撲……東の方から出た」㊂ひがしかぜ（東風）の略。㊃〔佛〕ひがしほんぐわんじは（東本願寺派）の略。（信徒は、接頭語お（御）を添へて呼ぶ）（西に對して）㊄とよたけざ（豐竹座）の異稱。（西に對して）ひがしもの（東物）參照。浮世風呂「豐竹越前掾の方、若太夫・麓太夫・駒太夫の類を、東といふ」㊅〔地〕大阪市の十三區の一。

東士（サムラヒ）、西坊主【句】江戶にては、武士が權勢あり、京都にては、僧侶が權勢ありしこと。一說に、東西兩本願寺の僧の氣質の相違をいふと。〔諺語〕

東の衆【句】室町幕府の制度にて、公家（クゲ）・出家の營中に參向する時、東向の緣より參入せし者。心安き內內の人にて、將軍は、西の衆に先だちて、これに對面するを、例としたり。

東の對【句】たいのや（對屋）を見よ。

東の陣【句】『內裏の東にありて、左兵衞の陣のある所なりしよりいふ』せんやうもん（宣陽門）の異稱。十訓「これを見んとて、東の陣へ競ひ集まる程に」

東の戶【句】大極殿の東の廂にある戶。

東より、西より【句】次條に同じ。正統記「上下、堵を安くし、東より、西より、その德に服せしかば」

東より、西より、南より、北より【句】『詩經の大雅文王有聲篇に「自レ西自レ東自レ南自レ北、無二思不一レ服」とあるに本づく』君主の德を慕ひて、四方の民の慕ひ集まる形容。

ひ-がし 日貸【名】ひがねかし（日金貸）に同じ。（日借（ヒガリ）に對して）一代男「日借（ヒガシ）の金子御借しなされ候はば」織留「鉢坊主に衣（コロモ）の日借（ヒガシ）を渡世にする出家あり」

ひがし-あさゐ 東淺井【名】〔地〕近江國十二郡の一。郡役所を、虎姬（トラゴゼ）村に置く。

ひがし-あふみ 東近江【名】〔地〕近江國の、琵琶湖以東の地。東江州。（西近江に對して）保元「昨日、爲義を、舟にて、東近江に著けたりとて」

ひがしいちでう-ゐん 東一條院【名】〔人〕ふぢはらたつこ（藤原立子）に同じ。

ひがし-いはせ 東岩瀨【名】〔地〕越中國上新川（カミニヒカハ）郡にある町。神通（ジンツウ）川の河口。富山市の北二里。古の八重湊なり。

ひがし-いばらき 東茨城【名】〔地〕常陸國十一郡の一。郡役所を、水戶市に置く。

ひがし-いはゐ 東磐井【名】〔地〕陸中國十二郡の一。郡役所を、千厩（センマヤ）町に置く。

ひがし-うけ 東受【名】建物の、東方より日光を受くること。ひがしむき。

ひがし-うすき 東臼杵【名】〔地〕日向國八郡の一。郡役所を、岡富村に置く。

ひがし-うわ 東宇和【名】〔地〕伊豫國十二郡の一。郡役所を、宇和町に置く。

ひがし-えびす 東鰕夷【名】次條に同じ。伊呂波字類抄「蝦夷、カイ。東エビス」

ひがし-えみし 東蝦夷【名】古、陸奧に住みし蝦夷。陸奧蝦夷。ひがしえびす。紀「北蝦夷九十九人、東蝦夷九十五人」

ひがし-えんし 東燕志【名】〔人〕俳人。江戶に住し、匍匐庵又は、東柳窓と號す。初世萬英の門人。俳諧題林集四十卷を著す。

ひがし-おいたま 東置賜【名】〔地〕羽前國十郡の一。郡役所を、高畠町に置く。

ひがし-おほかは 東大川【名】〔地〕美作國の津山川の下流。別稱、吉川・和氣（ワケ）川・西大寺（サイダイジ）川。

ひがし-おほたに 東大谷【名】㊀〔地〕京都東山の麓、下京圓山（マルヤマ）町安樂寺及び八阪（ヤサカ）神社の南方の地。（西大谷に對して）㊁前記の東大谷なる東山の中腹に在る、親鸞上人の廟所。西大谷の營造後、承應二年東本願寺の營みし所。（西大谷に對して）

ひがしおほたに-べつゐん 東大谷別院【名】京都東山にある大谷派の別院。

ひがし-かいだう 東海道【名】〔地〕りくぜんはまかいだう（陸前濱海道）の舊稱。

ひがし-がしら 東頭・東首【名】頭を、東に向くること。盛衰記「夫は、東頭に臥し、妻は、西を枕とす」太平記「馬の上にて、鎧の上帶縮（シ）め直して、東頭に控へたり」

ひがし-かすがゐ 東春日井【名】〔地〕尾張國九郡の一。郡役所を、勝川（カチカハ）町に置く。

ひがし-かぜ 東風【名】東より吹き來る風。こち。ひがし。東風（トウフウ）。

ひがし-かつしか 東葛飾【名】〔地〕下總國七郡の一。郡役所を松戶（マツド）町に置く。

ひがし-がは 東川【名】〔地〕山城國愛宕（ギク）郡なる加茂川及びこれに注げる白川の異稱。ひんがしがは。（西川に對して）

ひがし-かんばら 東蒲原【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を、津川町に置く。

ひがし-かも 東加茂【名】〔地〕三河國十郡の一。郡役所を、足助（アスケ）町に置く。

ひがし-きた 東北【名】東と北との中間の方位。うしとら。東北（トウホク）。

ひがし-くぜ 東久世【名】姓氏の一。本姓は村上源氏。久我（コガ）家の支流。權大納言・正二位晴通の子なる通堅の孫通廉（ミチカド）を祖とし、通廉七世の孫通禧（ミチトミ）、明治中興の業を翼贊せる勳功によりて、伯爵を授けらる。又、通禧の第二子秀雄、別に家を立てて、男爵を授けらる。

ひがしくぜ-みちとみ 東久世通禧【名】〔人〕明治維新の功臣。伯爵。通廉八世の孫。文久三年參政となり、次いで三條實美等と長州に走り、歸りて參與に任じ、明治元年、伏見・鳥羽の戰に軍事參謀となり、後、議定 侍從長等に歷任し、樞密院副議長に至る。明治四十年歿す。年八十。

ひがし-ぐち 東口【名】㊀東向（ヒガシムキ）の入口。淀鯉出世瀧德「曲輪住（クルワズマヒ）……霞が關か、東口、爰ぞ浮世のだての大木戶」㊁

『ひがし(東)［五］を見よ』豐竹座に屬する大夫たちの語りぶり。（浮世風呂）「うまい事はうまいて。ほんまの東口といふものは、まだまだあのやうな物(モン)ぢやない」

ひがし-くにさき 東國東【名】〔地〕豐後國十郡の一。郡役所を國東(クニサキ)村に置く。

ひがしくに-の-みや 東久邇宮【名】宮家の一。久邇宮第一世朝彦親王の第九子稔彦(ナルヒコ)王に始まる。

ひがし-くびき 東頸城【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を、安塚村に置く。

ひがし-ぐんま 東群馬【名】〔地〕上野國の舊郡の一。前橋市の南、利根川の東なる、狹少の地なりしが、明治二十九年、南勢多郡と合して、勢多郡を立つ。

ひがし-くるまづか 東車塚【名】**ふかくさのみささぎ**(深草陵)を見よ。

ひがし-ごうしう 東江州【名】〔地〕**ひがしあふみ**(東近江)に同じ。(西江州に對して)（平家）「鹽津庄司が許に宿して、夜半ばかりに……、東江州へ移りにけり」

ひがし-さかもと 東坂本【名】〔地〕**さかもと**(坂本)［一］に同じ。(西坂本に對して)（平家）「五萬餘騎……、天台山東坂本に滿ち滿ちて候ふ」（正統記）「比叡山・東坂本に行幸し」

ひがし-さぶらひ 東侍【名】母家(モヤ)の東方に在る侍所。

ひがし-さむらひ-にし-ばうず 東侍西坊主【句】ひがし(東)の條下を見よ。

ひがし-さんじふ-さん-が-こく 東三十三箇國【名】〔地〕『地方凡例錄』に「關東・關西と分くるは、往古は、逢坂關より東三十三箇國を、關東とも、坂東ともいふ」とあり』東海道十五箇國、東山道八箇國、北陸道七箇國に、丹波・丹後・但馬を加へたる三十三箇國。「藤堂は、東三十三箇國の旗頭」

ひがしさんでう-うだいじん 東三條右大臣【名】〔人〕**ふぢはらうぢむね**(藤原氏宗)に同じ。

ひがしさんでう-さだいじん 東三條左大臣【名】〔人〕**みなもとつね**(源常)に同じ。

ひがしさんでう-どの 東三條殿【名】白河法皇の仙洞。京都市上京區三條の北、烏丸の東、東洞院(ヒガシノトウヰン)の西にありし里內裏。初、白河法皇御し、平治の亂に、後白河上皇、高松殿より移りたまひ、東三條の內裏ともいへり。さんでうどの。別稱、三條烏丸殿。（保元）「俄かに、東三條殿へ行幸なる」

ひがしさんでう-の-おとど 東三條大臣【名】〔人〕**ふぢはらかねいへ**(藤原兼家)に同じ。

ひがしさんでう-の-だいり 東三條內裏【名】**ひがしさんでうどの**(東三條殿)に同じ。

ひがしさんでう-ゐん 東三條院【名】〔人〕**ふぢはらあきこ**(藤原明子)の異稱。

ひがしさんでうゐん-の-くわんばく 東三條院關白【名】〔人〕**ふぢはらかねいへ**(藤原兼家)に同じ。

ひがししちでう-の-きさき 東七條后【名】〔人〕**ふぢはらあつこ**(藤原溫子)に同じ。

ひがしじま-とくざゑもん 東島德左衞門【名】〔人〕陶工。肥前國伊萬里の人。支那の釉畫・彩色の法を得、屢ば試みて、遂に有田燒を發明す。

ひがし-しらかは 東白河【名】〔地〕岩代國十郡の一。郡役所を、棚倉町に置く。

ひがし-じろ 東白【名】朝、東の空の、明るくなること。（持統天皇歌軍法）「はや染色の東じろ、空にたなびく山かづら」

ひがし-すゐだう 東水道【名】【名】〔地〕**つしまかいけふ**(對馬海峽)に同じ。(西水道に對して)

ひがし-そお 東囎唹【名】〔地〕大隅國の舊郡の一。明治二十九年、日向國南諸縣(ミナミモロカタ)郡と合して、囎唹郡を立つ。

ひがしその 東園【名】姓氏の一。本姓は藤原。園(ソノ)基任の二男基教を祖とす。子孫相續し、明治維新後、子爵を授けらる。

ひがし-そのき 東彼杵【名】〔地〕肥前國十四郡の一。郡役所を、大村町に置く。

ひがし-たいりく 東大陸【名】〔地〕**とうたいりく**(東大陸)に同じ。(西(ニシ)大陸に對して)

ひがし-たかくら 東高倉【名】**ふせはら**(伏原)を見よ。

ひがし-たがは 東田川【名】〔地〕羽前國十郡の一。郡役所を、藤島村に置く。

ひがし-たま 東多摩【名】〔地〕武藏國の舊郡の一。明治二十九年、南豐島(ミナミトシマ)郡と合して、豐多摩(トヨタマ)郡を立つ。

ひがし-ちくま 東筑摩【名】〔地〕信濃國の十六郡の一。郡役所を、松本市に置く。

ひがし-つがる 東津輕【名】〔地〕陸奧國九郡の一。郡役所を、青森市に置く。

ひがし-づつみ 東堤【名】東の方にある堤。（保元）「安藝守は、二條河原の東堤の西に向って控へたり」

ひがし-つねより 東常緣【名】〔人〕**とうつねより**(東常緣)に同じ。

ひがし-づめ 東詰・東爪【名】東の橋詰(ハシヅメ)。

ひがし-てうしふだう 東朝集堂【名】**てうしふだう**(朝集堂)を見よ。

ひがし-てうせんわん 東朝鮮灣【名】〔地〕**てうせんわん**(朝鮮灣)を見よ。

ひがし-となみ 東礪波【名】〔地〕越中國八郡の一。郡役所を、井波(ヰナミ)町に置く。

ひがし-どなり 東隣【名】東に隣れること、又その家。（一代女）「東隣は不斷留守」

ひがしなり 東成【名】〔地〕［一］攝津國舊郡の一。郡役所を大阪市南區に置きしが、大正十四年、大阪市に編入せられて、その東成・住吉の二區となる。［二］大阪市十三區の一。前項參照。

ひがし-にでうゐん 東二條院【名】〔人〕後深草天皇の中宮。御名は貞子。西園寺實氏の第二女。永仁元年落飾し、嘉元二年崩ず。御年七十二。（增鏡）「東二條院、御惱、日日におもりたまひて」

ひがしね 東根【名】〔地〕羽前國北村山郡にある町。陸前國に通ずる街道に當り、東根城址存す。

ひがしね-じやう 東根城【名】羽前國北村山郡東根町にありし城。中古の名城。今、その址あり。

ひがし-の-いちのつかさ 東市司【名】市司(イチノツカサ)の一。東市に在りしもの。(西市司(ニシノイチノツカサ)に對して)

ひがし-の-きやう 東京【名】〔地〕**さきやう**(左京)に同じ。(西京(ニシノキヤウ)に對して)

ひがし-の-しゆう 東の衆【句】**ひがし**(東)の條下を見よ。

ひがし-の-たい 東の對【句】**たい**(對)の條下を見よ。

ひがし-の-ちちかは 東父川【名】〔地〕十勝國十勝川の異稱。

ひがし-の-ぢん 東の陣【句】**ひがし**(東)の條下を見よ。

ひがし-の-と 東の戶【句】**ひがし**(東)の條下を見よ。

ひがし-の-ははかは 東母川【名】〔地〕釧路(クシロ)國釧路川の異稱。

ひがし-の-みち 東道【名】〔地〕**とうさんだう**(東山道)の古稱。（北山抄）「山の道、又、東の道」

ひがし-の-やまのみち 東山道【名】〔地〕前條に同じ。

ひがし-は 東派【名】東［四］の流派。(西派に對して)

ひがし-はうぢやう 東方丈【名】七堂伽藍の一。東方にある方丈。

ひがし-ばうじやう 東坊城【名】姓氏の一。本姓は菅原。五條長經の二男茂長を祖とす。子孫相續し、明治維新後、子爵を授けらる。

ひがし-びさし 東廂【名】東面にある廂の間(マ)。

ひがし-ふさがり 東塞【名】［一］東方の塞ること。［二］貧困に陷ること。不運なる境遇。（長町女腹切）「こころあたりの拂さへ埒あかず、東塞になった者、打ちみしやいでも、粒三文ない」

ひがしふしみ-の-みや 東伏見宮【名】明治新立の宮家の一。伏見宮第十九世邦家親王の第十六子依仁親王に出づ。親王、初、山階(ヤマシナ)宮晃(アキラ)親王の養子となり、後、更に小松宮彰仁(アキヒト)親王の嗣となり給ひしが、小松宮家は、彰仁親王の遺言によりて、絕家となりしより、彰仁親王、嘗て仁和寺宮より東伏見宮と改められし緣に基づき、勅旨によりて、この一家を立てられたり。

ひがしふしみ-わん 東伏見灣【名】〔地〕樺太島の南部にある亞庭(アニ)灣の、明治三十七八年戰役の時、我軍の占領當初の名稱。

ひがし-へい 東閉伊【名】〔地〕陸中國の舊郡の一。明治二十九年、閉伊・北閉伊の二郡と合して、下閉伊郡を立つ。

ひがし-ほんぐわんじ 東本願寺【名】『所在の地、西本願寺に對して、東方なるよりいふ』京都市下京(シモギヤウ)區烏丸通り七條上る常葉(トキハ)町にある、眞宗大谷(オホタニ)派の本山。本願寺第十一世顯如の長子敎如の創建。一名、大谷(オホタニ)派本願寺。**ほんぐわんじ**(本願寺)參照。

ひがしほんぐわんじ-は 東本願寺派【名】〔佛〕眞宗の一派。親鸞第十一世顯如の長子敎如を派祖とし、東本願寺を本山とするもの。大谷(オホタニ)派。

ひがし-まくら 東枕【名】寢ぬる時、枕を東方に据うること。禁祕抄「夜御殿……御帳同二清涼殿一東枕」

ひがし-まつうら 東松浦【名】〔地〕肥前國十四郡の一。郡役所を、唐津(カラツ)町に置く。

ひがし-まひづる 東舞鶴【名】〔地〕**まひづる**(舞鶴)を見よ。

ひがし-まんだら 東曼陀羅【名】〔佛〕『これを東方に安置し、金剛界曼陀羅を西方に安置して、相對せしむるよりいふ。東は物の發生する始、西は物の終歸する義ありて、自ら因果の理に相應するに依る』**たいざうかいまんだら**(胎藏界曼陀羅)に同じ。(西(ニシ)曼陀羅に對して)平家「高野の金堂(コンダウ)に、曼陀羅を書かれけるが、……。東曼陀羅をば、淸盛書かんとて」

ひがし-みづはし 東水橋【名】〔地〕越中國中新川(ニヒカハ)郡にある町。

ひがし-みなみ 東南【名】東と南との中間なる方位。たつみ。東南(トウナン)。

ひがし-みのぶ 東身延【名】**ほんがくじ**(本覺寺)［三］を見よ。

ひがし-むき 東向【名】東方に向きてあること、又その方向。

ひがし-むらやま 東村山【名】〔地〕武藏國北多摩郡の村。狹山(サヤマ)の岡の東端、古の村山鄕の入口。鐵道中央線の川越(カハゴエ)支線の停車場あり。

ひがし-むらやま 東村山【名】〔地〕羽前國十郡の一。郡役所を天童(テンドウ)町に置く。

ひがし-むろ 東牟婁【名】〔地〕紀伊國九郡の一。郡役所を新宮(シングウ)町に置く。

ひがし-もの 東物【名】『**ひがし**(東)［五］を見よ』豐竹座の作者、卽ち紀海音・西澤一風・並木宗輔などの作りたる淨瑠璃本。(西物に對して)

ひがし-もろかた 東諸縣【名】〔地〕日向國八郡の一。郡役所を、高岡村に置く。

びか-しやか【貌】**びらしやら**に同じ。傾城酒呑童子「氣立のよい、びかしやかせぬ太夫を賴む」

びかしやか-ぶる びかしやか振る【動四自】びかしやかとしたる態度を爲す。きどる。てらふ。薩摩歌「少し好(ヨ)めなる女房の、びかしやかぶるは、科(トガ)ならず」

ひがし-やつしろ 東八代【名】〔地〕甲斐國九郡の一。郡役所を、石和(イサワ)町に置く。

ひがし-やま 東山【名】〔地〕山城國京都市の東方に位する諸山の總稱。北、如意(ニョイ)嶽より、南稻荷(イナリ)三峰(ミツガミネ)に至る。一般に三十六峰と稱す。(北山・西山に對して)嵐雪「蒲團著て寢たる姿や東山」

ひがし-やま 東山【名】〔地〕岩代國北會津郡の村。若松市の東北約一里。大字湯本に、鹽類泉湧出し、客舍・酒樓あり。

ひがしやま-じだい 東山時代【名】室町時代の一部、將軍義政の、文明十五年、銀閣に隱退せしより、延德二年薨去せしまで、ほぼ九年間。主として、美術・工藝上の時代區分に用ふる名稱にて、義政の保護により、點茶・香道・繪畫・蒔繪・漆器等に名家巨匠輩出して、一時の隆盛を致せり。

ひがしやま-だうぢやう 東山道場【名】**そうりんじ**(雙林寺)を見よ。

ひがしやま-てんわう 東山天皇【人】第百十三代の天皇。御名は朝仁(アサヒト)。靈元天皇第四の皇子。御母は敬法門院藤原宗子。在位二十三年(紀元二三四七年—二

三六九年)。寶永六年崩ず。壽三十五。

ひがしやま-どの 東山殿【名】〔人〕［一］**ふぢはらみちいへ**(藤原道家)に同じ。［二］**あしかがよしまさ**(足利義政)に同じ。

ひがし-やまなし 東山梨【名】〔地〕甲斐國九郡の一。郡役所を、日下部(クサカベ)村に置く。

ひがしやま-ぶんこ 東山文庫【名】京都の御所内にある文庫。

ひがしやま-やき 東山燒【名】安永年間、播磨國飾磨(シカマ)郡絲引村字東山にて、吾庫木屋といへる者の創めし陶器。天保年間、姬路藩保護の下に、窯を姬路小利木町に移して、明治初年まで繼續したり。とうさんやき。

ひがしやま-よしまさ 東山義政【名】〔人〕**あしかがよしまさ**(足利義政)に同じ。

ひがしやま-りう 東山流【名】［一］〔佛〕『證入、京都東山宮の辻に、阿彌陀院を建立して住せしよりの稱』淨土宗西山(セイザン)派の一流。證入を祖とす。宮辻義(ミヤノツジギ)。［二］花道の一派。足利義政の創めたるもの。

ひか-しゆっけつ 皮下出血【名】〔醫〕**ひかいっけつ**(皮下溢血)に同じ。

ひがし-ろくでう 東六條【名】［一］〔地〕京都の東本願寺の所在地、卽ち下京區烏丸通、六條下る常葉町。(西六條に對して)［二］**ひがしほんぐわんじ**(東本願寺)の異稱。

ひがしろくでう-ふぢ 東六條藤【名】紋所の一。東本願寺の法主たる大谷家の定紋とする藤の紋。

ひがしろくでう-ゐん 東六條院【名】**かはらのゐん**(河原院)に同じ。

ひがし-わか 東和賀【名】〔地〕陸中國の舊郡の一。明治二十九年、西和賀郡と合併して、和賀郡を立つ。

ひかす 引かす【動四他】引くやうに仕向く。引かしむ。

ひ-かず 日數【名】月日の日のかず。日數(ニッスウ)。宗長手記「日かず經て御たよりあり」［二］一定の日數。增鏡「二條富小路(トミノコウヂ)殿にてかくれさせたまひぬ。……御日數の程は、伏見殿に、宮たち・遊義門院などおはします」［三］源氏重代の重寶として傳

へし八領の鎧の一。保元「重代相傳仕って候ふ月數・日數・源太が產衣(ウブギヌ)・八龍・澤瀉(オモダカ)・薄金・楯無(タテナシ)・膝丸と申して」

日數を送る【句】「日を送る」に同じ。著聞「その後、心にかかりて、日數を送りけり」

ひかず-いとま 日數暇【名】豫め日數を定めて、暇を貰ふこと。大館常興記「治部大輔、今日、伯州へ下向、……日數暇を申し、罷下り候」

ひ-かすう 被加數【名】〔數〕『英 Summand』加算にて、加へらるる方の數。

ひか-そしき 皮下組織【名】〔醫〕**ひかけっていそしき**(皮下結締組織)を見よ。

ひ-かた 干潟【名】潮の干たる潟。斥鹵。古今「鹽竈の浦のひかたの曙に霞に殘る浮島の松」

干潟の鰯(イワシ)【句】如何にともせんすべなき物事の譬。〔諺語〕

ひ-かた 日方【名】西南の風。〔古語〕萬葉「あまぎらひ日方吹くらし水莖の岡のみなとに波立ちわたる」

日方の宵弱(ヨヒヨワリ)【句】日方の風は、日の暮るると共に勢衰ふ。〔諺語〕倭訓栞「萬葉集に日方吹くといへるは、申酉の風をいふ。蝦夷にても然云へり。夕日の空に吹くを、船人の語に、日方の宵よわりといふ。晩にその方より吹くは、强きものながら、暮過ぐる程に、必ず弱るなりと云へり」

ひかた 日方【名】〔地〕紀伊國海草(カイサウ)郡にある町。日方灣の北方に瀕し、熊野街道に沿ふ。和歌山市の南方二里半。

ひかた 干潟【名】〔地〕下總國海上(ウナカミ)郡旭町の西端の地。鐵道總武線の一驛。附近は、干潟八萬石の地と稱して、寬文年間、椿湖(ツバキノウミ)を排水開墾せし處。

ひ-がた 日形・日像【名】日の形。太陽の形。

日形の鏡【句】天照大神(太陽)の御姿に擬して作れる鏡。謠曲(浦島)「青和幣(アヲニギテ)・白和幣・日形の鏡、天照らす神も御影をうつして」

日像の旗【句】**にちざうどう**(日像幢)に同じ。

日像の幢（ハタボコ）【句】前條に同じ。

ひかた‐ぢ 干潟地【名】干潟になりてある土地。日本武尊吾妻鏡「沖吹く風に、干潟地の砂子を飛ばする如くなり」

ひ‐かたまる 干固まる・乾固まる【動四自】かわきて固まる。日光の熱によりて固くなる。

び‐かたる 鼻加答兒【名】〔醫〕『獨 Nasen-katarrh』鼻腔粘膜に發する炎性疾患。感冒、器械的及び化學的刺戟等によりて發し、鼻腔の痒み・分泌增多・閉塞及び頭痛等を起す。俗に鼻風（ハナカゼ）といふ。

びか‐ちやう 鼻下長【名】『「鼻の下が長し」を見よ』女色におぼれやすきこと、又その人。はなたらし。〔俚語〕

ひか‐ちゆうしや 皮下注射【名】注射器を用ゐて、藥劑を、直接に皮膚內に注射すること。（腔內注射に對して）

ぴかっ【貌】ぴかりに同じ。

ぴか‐つく【動四自】ぴかぴかとす。きら「めく。

ひ‐がって 非勝手【名】茶室にて、客の、亭主の左の方に居ること。右勝手。（本勝手（ホンガツテ）に對して）

ひか‐とらのを ひか虎尾【名】〔植〕ぬまとらのを（沼虎尾）に同じ。

ひ‐がな‐いちにち 日がな一日【副】しゆうじつ（終日）に同じ。傾城反魂香「日がな一日立ちずくみ」

ひ‐がなきん 緋金巾【名】緋色に染めたる金巾。

ひ‐がね 日鐵漿【名】毎日鐵漿（カネ）を著く「ること。

ひ‐がね 日金【名】毎日日步（ブヒ）㊁を拂ふ約束にて貸借する金子。日貸（ヒガシ）又は日借（ヒガリ）の金。からすがね。

ひがね‐かし 日金貸【名】日金を貸すこと、又その人。ひがし。

ひがね‐かり 日金借【名】日金を借るこ「と、又その人。

ひがね‐やま 日金山【名】〔地〕伊豆國田方郡にある山。熱海（アタミ）町の西北。高さ二六三〇尺。山上の眺望開豁にして、相模・武藏・上總・下總・安房・駿河・遠江・信濃・甲斐・伊豆の十州、並びに、五島に及ぶと

て、十國（ジッコク）峠ともいふ。

ひ‐がのこ 緋鹿子【名】緋色の鹿子絞。俳諧曆「紅鹿子（ヒガノコ）の繻絆」

ひ‐かは 干川【名】水の涸れてある川。俳諧新選（尺布）「白鷺の干川に光る暑さかな」

ひかは‐こうゑん 氷川公園【名】〔地〕氷川神社㊀の境內にある公園。一名、大宮公園。

ひかは‐じんじや 氷川神社【名】『氷川の名は、素盞嗚尊、出雲國簸川（ヒノカハ）の上流にて、八岐蛇（ヤマタノヲロチ）を斬りたまひし傳說に本づくといふ。簸川を氷川とも書ける例、平家物語にも見ゆ』㊀武藏國北足立（キタアダチ）郡大宮町に鎭座せる官幣大社。祭神は素盞嗚（スサノヲ）尊・櫛稻田姬（クシイナダヒメ）命・大己貴（オホナムチ）命。古くは、大己貴命に代ふるに、火之御子（ヒノミコ）を以てしたり。孝昭天皇の御代に、出雲國杵築（キヅキ）の大社の神靈を奉遷せるに創まるといひ、古來、國內の一の宮たり。明治天皇の東京奠都後、勅して、帝都の鎭守と定めらる。㊁東京市赤坂區氷川町に鎭座せる府社。祭神は素盞嗚（スサノヲ）命・櫛稻田姬（クシイナダヒメ）命・大己貴（オホナムチ）命・天忍日（アメノオシヒ）命。

ひかは‐だいみやうじん 氷川大明神【名】「前條の舊稱。

ひ‐がひ 日買【名】入用なる品を、その日その日に買ふこと。

ひがひ 鰉【名】〔動〕『　は、明治天皇の好み給ひしによりて、新に造れる和字』硬骨類に屬する河魚。體細長く、口は小くして、やや下方に位し、鱗に褐色の斑紋あり、鰓蓋の直後に、やや大なる一黑點あり。〔近江國琵琶湖邊の方言〕さくらばえ。

ひか‐ひか【貌】次條に同じ。和合人「眼ばかりひかひかしてゐる」

びか‐びか【貌】次條に同じ。

ぴか‐ぴか【貌】光りかがやくさま。ぴかぴか。ひかひか。ひっかりひっかり。俳諧古選附錄（移竹）「ぴかぴかとずはえの梅の蕾みけり」

ひが‐ひがし 僻僻し【形二】ひがみたり。心ねぢけたるさまなり。くせぐせし。源氏「ひがひがしく聞えなす人ありとも、ゆめ心おきたまふな」同「耳なども、すこしひがひがしくなりたるにあらん」

ひ‐かふ 緋甲【名】緋縅（ヒヲドシ）の鎧。

ひかふ 控ふ・扣ふ【動下二他】『ひく（引く）より派生したる語』㊀引き留む。引き抑ふ。支ふ。源氏「わづらはしさにとて立ちたまふをひかへて」宇治「煩惱（ボンナウ）にひかへられて、今に、斯くて、うき世を出でやらぬにこそ」㊁ひかへめにす。うちばにす。十分にせず。節す。宇治「ことごとをば、よく數へたりけれども、その一事をばひかへて數へざりけり」㊂準備しおく。用意しおく。㊃近き處に構へ備ふ。「背後に山を控ふ」㊄手許に蓄へ、又は書き留めおく。「手帳に控ふ」㊅昔の船軍にて、身方の帆を少し下ぐ。

ひかふ 控ふ・扣ふ【動下二自】『前條を見よ』進まず又は去らずして、その場に居る。乘盛集「釣舟、垂れて、海の上にひかへたり」宇治「入り來てひかへつ」

ひ‐かふ 引替ふ【動下二他】『ひきかふ（引替ふ）の略』たてかふ（立替ふ）に同じ。狂言（八句連歌）「九次郎と申す者に、少し米錢のひかへてござる」

ひ‐かぶ 緋蕪菁【名】〔植〕ひかぶら（緋蕪菁）「に同じ。

ひか‐ふくかう‐しやう 皮下匐行症【名】〔醫〕蠅の蛆の、皮下を穿孔匐行するによりて發する病氣。但し稀有のものなり。

ひ‐かぶら 緋蕪菁【名】〔植〕べにかぶら（紅蕪菁）に同じ。

ひかへ 控・扣【名】㊀ひかふること。ひきとむること。㊁萬一のために用意しておくこと、又その物又は人。㊂ひかへがき（控書）の略。手習鑑「天道のひかへ強きにや」㊃傍に居て助くること。㊄ひかへいし（控石）の略。㊅建物の前方へ傾き臥すを防ぐために、引き支へしむる針金、又は柱・杙（クヒ）など。つっかひ。㊆和船の一部。㊇小船を漕ぐに、艪を操りて、船首を左方に轉向せしむること、即ち操舵の場合の取舵（トリカヂ）を、艪によりて行ふもの。（押（オサヘ）に對して）㊈積石用の石材の、表面となるべき面より測れる高さ。

控の御所（ゴシヨ）【句】「下（シモ）の御所」に同じ。

ひ‐かへ 火替【名】次條を見よ。

火替の神事（ジンジ）【句】攝津國住吉神社にて、六月晦日、大祓の夜、神輿、堺の御旅所に渡御あり、その渡御及び還御の際、堺の市民、手每に松火（タイマツ）を點じて、送迎する神事。

ひかへ‐いし 控石【名】『英 Bond-stone 又 Bonder』壁の表面より背面へ貫通して、その全厚を收結する石材。ひかへ。

ひかへ‐がき 控書【名】後日のために、書きとめておくこと、又その物。ひかへ。副稿。備忘。

ひかへ‐ぐひ 控杭・控杙【名】控㊅の杙。

ひかへ‐じあん 控思案【名】控目に考ふること、又その思案。引込（ヒッコミ）思案。甲陽軍鑑「ひかへ思案を致し、若し討死やせんと、身の爲ばかり存ずると見え」

ひかへ‐しつ 控室【名】控へて待ち居る部屋。

ひかへ‐しやう 控性【名】控目に事をす「る性質。引込（ヒッコミ）性。

ひかへ‐じよ 控所【名】出かけて行くべき時まで、控へて待ち居る場所。

ひかへ‐たつ 控立【名】和船に於ける矢倉の、控柱の垣立（カキタツ）の外にあるもの。

ひかへ‐だな 控店【名】床見世（トコミセ）を張れる者の住宅。〔江戸の語〕

ひかへ‐ち 控地【名】萬一の時に使用する目的にて、豫め準備しおく土地。

ひかへ‐ちやう 控帳【名】控㊁のために記しおく帳簿。

ひかへ‐づな 控綱【名】㊀立てたる物の傾き倒れなどするを防ぎ支ふるために引き張りおく綱。㊁ひかへ（控）㊃を、綱にて引き支ふるに譬へていふ語。心中刃は氷の朔日「跡にたづぬる願立（グワンダテ）に、神や佛の控綱、延ばす命と知らばこそ」

ひかへ‐てい 控邸【名】本邸の外に、豫め設けおく邸宅。ひかへやしき。

ひかへ‐ばしら 控柱【名】㊀ひかへ（控）㊅の柱。すけばしら。ひかへ。㊁支柱。

その家の萬事を支へ保つ人の譬。

ひかへ-へい 控兵【名】〔兵〕衞戍衞兵・風紀衞兵等に於ける、豫備の兵員。

ひかへ-ぼん 控本【名】必要の場合を豫想して備へ持つ書籍。諸藝太平記「講談を聞くための控本」

ひかへ-め 控目【名】控へ憚る氣味あひ。遠慮して、十分に爲さぬこと。うちば。

ひかへ-や 控家【名】現在の住家以外に、豫め備へおく家。

ひかへ-やぐら 控櫓【名】かへやぐら(代櫓)に同じ。

ひかへ-やしき 控屋敷【名】ひかへてい(控邸)に同じ。

ひ-がへり 日歸【名】その日の中に往きて、又歸ること。

ひがへり-きやく 日歸客【名】日がへりをする客。

ひかへ-を 控緒【名】鎧の栴檀板(センダンノイタ)と鳩尾板(キウビノイタ)との內緣に出せる、一條の緒。脇鞐(ワキコハゼ)又は高紐に控へさせて、左右の胸板のはづれを覆ふ用に供す。

ひ-がま 火鎌【名】ひうちがま(火打鎌)に同じ。

ひ-がます 干梭魚・干魳【名】㊀梭魚(カマス)の干物。織留「干烏賊(スルメ)一連又は干魳二十」傾城酒呑童子「干梭魚のむしり物」㊁痩せて、骨立てるさまの譬。

ひがみ 僻【名】ひがむこと。ひがみごころ。源氏「老の御ひがみさへ添ひたれば」

ひかみ 氷上【名】〔地〕丹波國七郡の一。郡役所を、柏原(カイバラ)町に置く。

ひ-がみ 日髮【名】毎日髮を結ひなほすこと。(持髮(モチガミ)に對して)

ひ-がみ 斐紙【名】がんぴし(雁皮紙)に同じかるべしといふ。〔古語〕延喜式「斐紙」

ひがみ-ごころ 僻心【名】ひがみてある心。ねぢけてある心。ひがみこんじやう。ひがみ。松風村雨束帶鑑「おのれが一心の僻心より起ったり」

ひがみ-こんじやう 僻根性【名】前條に同じ。曾我會稽山「世にある者を妬み嫉む僻根性」

ひがみ-しれ-びと 僻痴人【名】心ひがみて、おろかめきたる人。〔古語〕落窪「ひがみしれびとは、便(ビン)なからんとも思ひたらで」

ひ-がみなり 火神鳴・火雷【名】落雷の結果、火を發して、物を焦しなどしたる時、その神鳴をさしていふ語。(水神鳴に對して)〔江戸時代の語〕一代男「火神鳴の雲がくれ」

ひがみ-の-しほやき 氷上鹽燒【名】〔人〕奈良朝の末頃の人。新田部(ニヒタベ)親王の子。初、鹽燒王と呼びしが、橘奈良麿の事に連坐して、人臣に列し、氷上眞人(マヒト)の姓を賜はり、天平寶字八年、惠美押勝(エミノオシカツ)に擁立せられて、帝と稱し、誅せらる。

ひが-みみ 僻耳【名】聞き誤ること。ききちがひ。ききそこなひ。ひがぎき。そらみみ。誤聞。源氏「山伏のひが耳に、松風を聞きいだしはべるにやあらん」

ひがむ 僻む【動四自】心ゆがむ。性質かたよる。ひずむ。ねぢく。榮花「御心のひがませたまへれば、物のあはれ・有樣をも知らせたまはぬ」

ひがむ 僻む【動下二他】ひがむやうにす。あやまつ。源氏「聞しめしひがめたる事などや侍らん」

ひ-かん 脾疳【名】腸間腺膜の腺病のために、全身痩せ、腹部膨大する病。疳勞。

ひ-かん 肥甘【名】牛・羊などの肉の、肥えてうまきこと。

ひ-かん 避寒【名】暖地に轉じて、寒氣を避くること。(避暑に對して)

ひ-かん 比干【名】㊀干(タテ)を比(ナラ)べて、敵を防ぐこと。㊁〔人〕支那殷の賢人。紂王の親戚。王を諫めて殺さる。

ひ-がん 火燗【名】酒の燗をするに、徳利を、直接に火にあててすること。

ひ-がん 飛雁・蜚雁【名】飛び翔る雁。

ひ-がん 彼岸【名】『梵 Pāra (波羅)の譯語。生死(シヤウジ)の境界を此岸とし、煩惱(ボンナウ)を中流に譬へたるに對していふ。**はらみつ**(波羅蜜)參照』㊀〔佛〕涅槃(ネハン)の境地。不生(フシヤウ)不滅。濟度。太平記「群生(グンジヤウ)濟度の船、彼岸に到らずといふことなし」㊁**ひがんゑ**(彼岸會)の略。㊂彼岸會を行ふ七日間。春分・秋分を中日(チユウニチ)と呼び、その前後各三日を合はせて七日間。太平記「十六日、彼岸のはじめに」㊃〔植〕**ひがんざくら**(彼岸櫻)の略。

彼岸太郎・八專次郎・土用三郎・寒四郎【句】彼岸の第一日、八專の第二日、土用の第三日及び小寒の第四日に晴天なれば、その年は豐年なり。〔諺語〕

彼岸の明(アケ)【句】彼岸㊂の終ること、又その日。

彼岸の入(イリ)【句】彼岸㊂の初となること、又その日。

彼岸の中日(チユウニチ)【句】**ひがん**(彼岸)㊂を見よ。

彼岸の果(ハテ)【句】「彼岸の明(アケ)」に同じ。源氏「二十六日、彼岸のはてにて、よき日なりければ」

秋の彼岸は、農家の厄日【句】秋の彼岸の天候の良否は、農家の收穫に影響すること甚し。〔諺語〕

暑さ寒さも彼岸まで【句】春の彼岸を過ぐれば、寒氣ゆるみ、秋も、彼岸後は、暑氣減ず。「彼岸過(ヒガンスギ)まで七雪」參照。〔諺語〕

び-かん 美感【名】〔哲〕『獨 Schönheitgefühl』美の感。美を味ふ快感。

び-がん 美顏【名】うつくしき顏。美貌。二代男「さすが京育(キヤウソダチ)、備はっての美顏」

ひがん-ざくら 彼岸櫻【名】〔植〕薔薇(バイラ)科に屬する落葉喬木。高さ二三丈、枝條細く、葉は長橢圓形にて、鋸齒を具ふ。早春、他の櫻類に先だちて葉生じ、他の櫻花より遙かに小き五瓣の花、繖形花序をなして開く。花の色は、淡紅なるを普通とすれども、濃紅・純白等のもあり。果實は、紅色の小核果。山地に自生し、又庭園に栽培す。うばざくら。ひがん。

ひがん-じしや 彼岸侍者【名】〔佛〕次條に同じ。

ひがん-しゆう 彼岸衆【名】〔佛〕**しやうそうじしや**(聖僧侍者)に同じ。東鑑「日吉塔下彼岸衆訴訟事」

びがん-じゆつ 美顏術【名】人の顏を美しく若若しく見えしむる手術。美容術。

ひがん-じよ 彼岸所【名】〔佛〕山王二十一社の社內にありて、彼岸會を修する所。平家「降三世(ゴウザンゼ)の大阿闍梨(ダイアジヤリ)、大行事(ダイギヤウジ)の彼岸所にて死なる」

ひがん-すぎ 彼岸過【名】彼岸の七日間の過ぎたること、又その後の數日。(彼岸前に對して)

彼岸過まで七雪(ナナユキ)【句】春の彼岸を過ぎても、屢ば雪降ること。〔諺語〕

ひがん-たけ 彼岸茸【名】〔植〕**うぐひすたけ**(鶯茸)に同じ。

ひがん-だんご 彼岸團子【名】春秋二季の彼岸にて、佛前に供する團子。餡・黃粉(キナコ)などを附けて、知人に配る習俗あり。

ひがん-たらう 彼岸太郎【句】**ひがん**(彼岸)の條下を見よ。

ひ-がんぢやう 日勘定【名】毎日の勘定。一日一日にする計算。

日勘定では足らぬが、月勘定では餘る【句】『後漢書の章帝紀に「日計不㆑足、月計有㆑餘」とあり』その日その日の勘定にては不足なれども、一箇月の總計の結果は、餘分を生ず。〔諺語〕

ひがん-ばな 彼岸花・石蒜【名】〔植〕**まんじゆしやげ**(蔓珠沙華)に同じ。

ひがんばな-くわ 石蒜科【名】〔植〕**まんじゆしやげくわ**(石蒜科)に同じ。

ひがん-まへ 彼岸前【名】彼岸㊂にならんとする少し前の時。(彼岸過に對して)猿簑(路通)「彼岸まへ寒さも一夜二夜かな」

ひがん-まゐり 彼岸詣【名】彼岸會に、寺院に參詣すること、又その人。

ひがん-ゑ 彼岸會【名】〔佛〕春・秋二季の彼岸に、寺院にて行ふ法會。

ひが-め 僻目【名】㊀まちがへて見ること。みあやまり。みそこなひ。そらめ。平治「この門の大將軍は、信賴卿と見るは、僻目か」盛衰記「僻目かとて、よくよく見しかば」㊁**ひがらめ**(瞟眼)に同じ。〔古語〕字鏡「眺、與己目。又、比加目。又、須加目」

ひか-めく【動四自】ひかひかと光る。ひらめく。義經記「八大天龍鳴りわたりて、稻妻ひかめきしに」

ひが-もの 僻者【名】心の僻みたる人。根性まがり。ねぢけもの。變人。源氏「世のひが者にて、まじらひもせず」鵯鷲合戰「早雄(ハヤリヲ)の若鷲、死生(シシヤウ)知らずの僻者」

ひがやす【名】體質よわよわしきこと。虛弱。ひがいす。〔江戸時代の大阪の語〕 緋縮緬卯月の紅葉「ひがやすな輿兵衞を引き立て、駕(カゴ)に押し込めば」

ひが-よみ 僻讀【名】まちがへて讀むこと。よみあやまり。空穗「ひが讀を多くすべきを、點一つも讀みあやまたぬを」

ひがら 瞟眼【名】ひがらめ(瞟眼)の略。

ひ-がら 日柄【名】一その日の吉凶。〔曆の語〕 運歩色葉集「日柄、ヒガラ」 二ひかず(日數)一に同じ。「日柄が立つ」 三ひがらやくそく(日柄約束)の略。

ひ-がら 日雀【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。四十雀(シジフカラ)に似て小く、頭上は黑くして、青き色澤を呈し、咽喉は黑色、頰より頸の側面にかけて純白、頸の後部には、黑色にて圍まれたる白斑あり。背は灰蒼色、腰部は少しく綠色を帶び、胸部より腹部にかけて帶褐白色、尾羽は黑褐色にして、その緣邊は灰蒼色又は帶白色をなす。夏は山地に巢を營み、秋は平原に來りてそのまま冬を越ゆること、小雀(コガラ)に同じく、習性も、これに類す。樹木の害蟲を食し、益鳥の一たり。

びから 毗羯羅【名】〔佛〕びからだいしやう(毗羯大將)に同じ。

ひ-がらかさ 日傘【名】ひがさ(日傘)に同じ。毛吹草「松に藤これや繪がける日がらかさ」

ひからかす 光らかす【動四他】一次條に同じ。二ひけらかすに同じ。甲陽軍鑑「御旗本をひからかし、先手のかせぐ若者どもに、腹を立たせ」

ひからす 光らす【動四他】一光るやうにす。光らしむ。光らかす。二祝儀などの金を與ふ。

びから-だいしやう 毗羯羅大將(梵 Vikarāla)【名】〔佛〕十二神將の一。本地は釋迦如來。その像は、三鈷を持つ。

ひ-からぶ 干枯ぶ・乾枯ぶ・乾涸ぶ【動上二自】甚しくかわく。かわきはつ。膝栗毛「干からびし姑(シウト)の畑に引き替へて水澤山の嫁が田ぞよき」

ひがら-め 瞟眼【名】やぶにらみ・すがめの類、又その人。ひがら。ひがめ。三代男「大みっちゃのひがら目」

ひがら-め 日雀【名】〔動〕ひがら(日雀)に同じ。

ひがら-やくそく 日柄約束【名】藝・娼妓に對して、近き紋日の買切の約束をすること。ひがら。守貞漫稿「日柄約束せし日は、朝より、その樓に來り、客を待つなり」

ひかり 光【名】一ひかること、又その物。二〔理〕吾人の視覺の物理的原因となるもの。通常、色及び强さの二樣の感覺を伴なふ。その本性につきては、從來、微塵說と波動說とありしが、近年電磁說起れり。光線。三色の、特にはえばえしく鮮かなるもの。つや。色澤。光澤。四はえばえしく美しきこと。源氏「春の光を見たまふにつけても」 五目立ちて見ゆる物事。はえ。光榮。威光。面目。源氏「かくも畏き仰言を光にて」 大鏡「世の中は、この殿の御光ならずといふ事なきに」 六ごくわう(後光)に同じ。榮花「光のなかの化佛(ケツ)無數億にして、無量莊嚴具足し」

光ある物を友とす【句】「類は友を呼ぶ」に同じ。〔諺語〕 沙石集「光ある物は、光ある物を友とすといへり」

光の行差【句】〔天〕『英 Aberration of light』 光の速度の關係により、一定の速度にて運動せる觀測者に見ゆる天體の方向と、その眞の方向との間に生ずる角度。急行せる汽車中に在りては、直下する雨の、斜に降れるがごとく見ゆると同一の理に因る。

光の陰【句】くわういん(光陰)に同じ。謠曲 石橋「光の陰を惜めども」

光の偏(カヨリ)【句】〔理〕『英 Polarization of light』 偏光(ヘンクワウ)を生ずる現象。

光の神【句】『ひかるかみ(光神)を見よ』かみなり(雷)一に同じ。東鑑「駒形・走湯權現雷電(ヒカリノカミ)」

光の屈折【句】〔理〕くっせつ(屈折)二を見よ。

光の廻折【句】〔理〕くわいせつ(廻折)二を見よ。

光臨む【句】『くわうりん(光臨)の直譯』 貴き人來たまふ。散木「うれしやな貴なる川瀨や澄みぬらん君が光ののぞむしるしに」

光の分散【句】〔理〕ぶんさん(分散)四を見よ。

光は東方より、法は西方より【句】『羅 Ex oriente lux, ex occidente jur』 精神的文明は亞細亞に發し、物質的文明は歐羅巴に發したり。〔諺語〕

光和(ヤハラ)ぐ【句】わくわう(和光)に同じ。謠曲 高砂「今こそ不審はるの日の、光やはらぐ西の海の」

光を喰ふ【句】威に怖る。〔俚語〕 嫗山姥「こりや紵卷(オダマキ)とやら、くだ卷とやら、光は喰はぬ。出直しや」

光をくれる【句】いきほひを見す。松の葉(山谷踊)「今度初めてお江戸に住めば、天下かがやく光をくれて」

光を韜(ツツ)む【句】自己の才能・形跡を隱す。韜晦す。太平記「光を韜(ツツ)み、跡を消し、……道を行ひ、心を淸くして」

光を放つ【句】ひかる(光る)一二に同じ。空穗「御かたち、唯今さかりにて、…光を放つやうに見えたまふ」 增鏡「御髮(ミグシ)はこぼれかかりて、少し傾きたまへるかたはら目、……、光を放つとは、斯かるをやと見えたまふ」

光を和(ヤハラ)ぐ【句】わくわう(和光)に同じ。平家「王城守護の鎭守は、四方に光を和げ」

光を和(ヤハラ)げ、塵に同(ドウ)ず【句】わくわうどうぢん(和光同塵)に同じ。

枝の光【句】木の枝を松明(タイマツ)に作りてともせる燈火。〔古語〕

三(ミツ)の光【句】さんくわう(三光)一に同じ。夫木「久方の空のかぎりも無き世かな三つの光のあらんかぎりは」

ひ-がり 日借【名】ひなしかり(日濟借)に同じ。(日貸(ヒガシ)に對して)

ぴかり【貌】閃くさま。ぴっかり。ぴかっ。

ひかり-あふ 光合ふ【動四自】互に光る。相映射す。照りあふ。芭蕉「光り合ふ二つの山の茂(シゲリ)かな」

ひかり-か【貌】つやつやしく光るさま。〔古語〕 榮花「御色の、白く麗(ウルハ)しく、ひかりかにおはします」

ひかり-がま 光釜【名】昔、江戸の奧州海道筋に當れる千住(センヂユ)にありし茶店の茶釜。享保の頃、將軍、附近に御成の節、この店に立ち寄り、茶釜のよく磨かれて光れるを賞めて、銀を與へ、「名を殘すぢいが茶釜やてるかがみ」といふ句を與へ、その後、將軍御成の度ごとに、この家のみは、煙を立つるを許されきといふ。

ひかり-ぎ 光木【名】闇夜に、燐などの作用にて、青白く光る朽木。

ひかり-ぐさ 光草【名】〔植〕ひめゆり(姬百合)に同じといふ。〔古語〕 莫傳抄「夏の野を心しづかに分けゆけば花に驚く光草かな」

ひかり-くらべ 光比【名】互に競ひて光ること。御室撰歌合「秋の夜は月と草葉の白露と光りくらべにいづれ勝たまし」

ひかり-ごけ 光蘚【名】〔植〕光蘚科に屬する蘚類。莖は纖細にして、子囊を生ずるものと生ぜざるものとあり。後者は二縱列、前者は、下部に二縱列、上部に數縱列の葉を具へ、高さ僅かに二分に過ぎず。原絲體は、淡綠色にして、地面に擴がり、弱き光線を反射して光を放つ。洞窟など、光線の不十分なる地に自生す。我國にては、近年、信濃國及び下野國日光にて發見せり。

ひかりごけ-くわ 光蘚科【名】〔植〕隱花植物中、蘚苔植物の眞蘚類に屬する一科。光蘚の一種あるのみ。

ひかり-だう 光堂【名】一こんじきだう(金色堂)に同じ。太平記「門主は、……光堂の中へ逃げ入らせたまふ」 芭蕉「五月雨に降り殘してや光堂」 二金持の立派なる家。日本永代藏「大豆(マメ)一粒(イチリフ)の光堂」

ひかり-だて 光立【名】『だて(立)は接尾

語』威光を見せんとすること。女殺油地獄「會津蠟燭が光立したら、此方(コチ)二人が、心(シン)切って、蹈み消してくれる」

ひかり‐の‐かみ 光の神【句】ひかり(光)の條下を見よ。

ひかりのかみ‐まつり 光神祭【名】雷神を祀る祭。東鑑「雷神(ヒカリノカミ)祭、相模守俊定等奉二仕之一」

ぴかり‐ぴかり【貌】ぴかりを重ねていふ語。ぴかぴか。狂言(雷)「雷は上りけり上りけり、ぴかりぴかり、ぐわらりぐわらり」

ひかり‐むし 光蟲【名】【動】やくわうちゆう(夜光蟲)に同じ。

ひかり‐も 光藻【名】〔植〕鞭毛類の一種。球形にして、遊走細胞は、一箇の纖毛を具ふ。主として、溫帶地方の靜かなる豬水中に生じ、水面に浮游して、金屬樣光澤を放ち、恰も金粉を水に散らしたるが如き狀を呈す。我國にては、近年の發見に係る。

ひかり‐もの 光物【名】㊀光を放つ物。ひかる物。㊁光りて、空中を走り行く、流星の類。著聞「初は、只、光物とこそ見るに、……、年寄りたる姥の、ゑみゑみとしたる形を顯して」太平記「遙かの澳(オキ)を見るに、一の光物あり」㊂金銀の貨幣。諸艶太平記「日頃蓄へたる光物をば、空しく藏に殘し置き」㊃大判(オホバン)・小判(コバン)。花骨牌(ハナガルタ)㊁の一。松・櫻・桐・日を畫きて、何れも金銀の泥(デイ)にて、美しく彩色せるもの。價格は、各、二十にして、その數四枚あり。

ひかり‐わたる 光渡る【動四自】一面に光る。平家「海上光り渡りて」

ひかる 光る【動四自】㊀光を放ち又は反射す。かがやく。照る。㊁容貌美しく見ゆ。風采立ちまさる。源氏「顏の色合まさりて、常よりも光ると見えたまふ」榮花「すぐれて見えおぼさるる御有樣の……光るやうに見えたまふに」㊂目立ちて見ゆ。すぐれて見ゆ。

光る柏【句】とうさん(燈盞)の異稱ならんといふ。〔古語〕李部王記「深夜讀レ書愛二光柏一」公賢集「見る文の雪も螢もいかでしかん光る柏の時分かぬ影」

光る神【句】「光の神」に同じ。〔古語〕萬葉「光る神鳴りはた少女(ヲトメ)」

光るやう【句】容貌美しき形容。大鏡「御容(カタチ)の光るやうにしたまひしかば」今昔「形は光るやうなる人の、愛敬はこぼれにこぼれ」

ひかる 叱る【動四他】しかる(叱る)の轉訛。〔關西の方言〕浮世風呂「ひかるとは稻妻かえ。……。江戸では叱るといふのさ」

ひかる‐かみ 光神【枕】『「光の神」を見よ』雷は鳴りはためくものなるより、なりはたにかけていふ。萬葉「光る神鳴りはた少女(ヲトメ)手たづさひ共にあらむと思ひしに」

ひかる‐きみ 光君【名】次條に同じ。源氏「光る君といふ名は、高麗人(コマウド)のめできこえて附け奉りけるとぞ」謠曲(須磨源氏)「斯く樂を極めて、光る君とは申すなり」

ひかる‐げんじ 光源氏【名】『ひかる(光る)㊁を見よ』源氏物語の主人公。ひかるきみ。源氏「光る源氏、名のみことごとしう」更科「光る源氏の夕顏、宇治の大將の浮舟の女君」

ひかる‐げんじ‐の‐きみ 光源氏君【名】「前條に同じ。

ひかる‐げんじ‐の‐だいしやう 光源氏大將【名】前條に同じ。太平記「光る源氏の大將の、しく物もなしと詠じつつ」

ひかるげんじ‐の‐ものがたり 光源氏物語【名】〔書〕げんじものがたり(源氏物語)に同じ。謠曲(夕顏)「光る源氏の物語」

ひかる‐こ 光蠶【名】膿蠶(ウミコ)の一。

ひかる‐せうしやう 光少將【名】〔人〕ふぢはらしげいへ(藤原重家)に同じ。

ひかる‐ばん 光盤【名】ひらけづりきかい(平削機械)に同じ。

ひ‐がれ 日離【名】戀人同志の、晝の間離れ居ること。(夜離(ヨガレ)に對して)〔古語〕盛衰記「夜がれ・日枯をだにも怨みしに、後會その期を知らざりけるこそ悲しけれ」

ひかれ‐もの 引かれ者【名】罪ありて拘引せらるる人。

引かれ者の小唄【句】㊀引かれ者が、窮地に在りながら、ことさらに小唄などを唄ひて、平氣を裝ふこと。〔諺語〕㊁負惜(マケヲシミ)などする譬。〔諺語〕

ひかわ【名】『「若い」を、倒まにいへる語』「わかひ」と書きたるを、假名遣を誤りて、年の若きこと。〔江戸時代の語〕風流徒然草「比丘尼宿(ビクニヤド)の二階に入られけるに、下に居りける比丘尼の申しけるは、てんかいちごはひかわではないかと聞えけるを、二階の客は、若い客かと申すと知る」

ひ‐かわく 干乾く【動四自】日に照されてかわく。蒸發して涸る。撰集抄「清水なども、皆ひかわきて」

ひが‐わざ 僻業【名】ひがごと(僻事)に同じ。〔古語〕源氏「ゆめ、をこがましくひがわざすまじきを」

ひき 引【名】㊀引くこと。率ゐ行くこと。萬葉「大丈夫(マスラヲ)のひきのまにまにしなざかる越路をさして」㊁ひいき。ひきたて。てびき。てづる。緣故。落窪「おもしろの駒はいかに。この頃、年かへらば、御ひきにて、白馬(アヲウマ)に出だしたまへ」義經記「方方よりひきを求めて、目見(メミエ)する」㊂ひきでもの(引出物)の略。薩摩歌「これは、一期(イチゴ)のひきにて候。御身を放さず御覽候へ」繼八卦柱曆「曆くばる家によって、御ひきが出る」㊃ひきあはせがみ(引合紙)の略。㊄德川幕府時代に、地形・地味の變化及び水旱・風・蟲等の災害ある時に、點檢して、租を減除せしこと。年年引・連連(レンレン)引・地不足(フソク)引等、種種の別ありたり。㊅引く力に對して堪ふる力。「ひきのある紙」

ひき【名】瀬戸内海にて、夜光蟲などの作用により、夜間、海水の光ること。

ひき 蟇【名】〔動〕ひきがへる(蟾蜍)の略。和名「蟾蜍、比岐」

蟇が蠅を呑むやう【句】「蛇(ジヤ)が蚊を呑んだやう」に同じ。〔諺語〕

蟇の息さへ、天に昇る【句】「蝦蟇(ガマ)の息、天に昇る」に同じ。〔諺語〕

蟇の思も、天に通ず【句】前條に同じ。〔諺語〕梅園日記「今、豐後にて、ひきの思も天に通ずといふは、古諺の傳はれるなり」

ひ‐き 非器【名】その器量に適せぬこと、又その人。平治「何を以て、太子なればとて、非器に授けて、朝民を苦しましむべき」

ひ‐き 悲喜【名】「かなしさと、うれしさと。かなしみと、よろこびと。

ひ‐き 誹毀【名】㊀そしること。惡口。〔「非毀」〕㊁〔法〕事實の有無に拘らず、他人の惡事・醜行、その他、これに類する事實を、公然摘示して、その名譽を毀損する行爲。**ひきざい**(誹毀罪)參照。

ひ‐き 祕記・秘記【名】祕密なる記錄。

ひ‐き 避忌【名】きひ(忌避)㊀に同じ。

ひき 比企【名】〔地〕武藏國二十郡の一。郡役所を、松山町に置く。

ひき 低・矮【接頭】『ひきし(低し)の語幹』ひく(低)に同じ。〔古語〕「ひき山」「ひき人」

ひき 引【接頭】動詞に添へてその意を強むるに用ふる語。「ひき繕ふ」「ひき續いて」

ひき 疋・匹【助數】㊀獸・鳥・蟲・魚の數。㊁布帛を二段づつ數ふるにいふ語。古は四丈、今は鯨尺にて五丈六尺。源氏「絹四百匹を分ちて」㊂錢を數ふるにいふ語。古錢にては、十文を一疋とし、今は二十五錢を百疋とし、且つ百疋・百五十疋・二百疋・二百五十疋等、百疋以上に用ひ、又、百疋以上と雖も、五十疋未滿の端數を添へていふことなし。徒然「かれこれ三萬疋を、芋頭のあしと定めて」

ひ‐ぎ 氷木・冰椽【名】『肱木(ヒヂキ)の略にて、肱の如く曲りて突き張れる木の義といふ』ちぎ(千木)に同じ。記「高天原(タカマガハラ)に氷木高知りて」和名「搏風板、比宜」

ひ‐ぎ 非義【名】義理にもとること。道ならぬこと。非理。俳家奇人談(鷺水)「室咲の非義は習ひそ庭の梅」

非義の義【句】『孟子離婁下篇に「非義之義大人弗レ爲」とあり』似て非なる義。義のごとくにして、まことの義にあらざること。

ひ‐ぎ 非儀【名】はくぎ(薄儀)に同じ。

ひ-ぎ 誹議・非議【名】そしりて、かれこれと言ふこと。わるくち。

ひ-ぎ 比擬【名】ひきくらぶること。なぞらふること。

ひ-ぎ 批議【名】ひはん(批判)に同じ。

び-き 尾季【名】花合(ハナアハセ)㊂にて、親・胴二などが引き終へたる最後に、札を引く人。

び-き 美姬【名】うつくしき女。美人。

び-ぎ 美妓【名】美しき藝妓。

ひき-あく 引開く【動下二他】引きてあく。あく。ひらく。增鏡「御文(ミフ)ひきあけさせたまふより」

ひき-あぐ 引上ぐ【動下二他】㊀引きて上ぐ。高く擧ぐ。かかぐ。源氏「母屋(モヤ)の木丁の帷子(カタビラ)引き上げて」義經記「簾(ス)を引き上げ」㊁昔の船軍(フナイクサ)にて、楯を立つ。㊂程度を高くす。高まらす。和合人「釜屋の酒がまだ醒めねえ所へ、此處でやらかしたから、醉を引き上げて」㊃多くの人の中より選びて用ふ。登用す。㊄戰爭又は喧嘩などの時に、部下を率ゐて退く。退陣す。撤退す。㊅强ひて差し出さしむ。とりあぐ。今國姓爺「責め使ひ、釜まで引き上げ、褒美はくれず」

ひき-あけ 引明【名】夜の明けはなれんとする時。よあけ。あけがた。

ひき-あげ 引上【名】ひきあぐること。

ひきあげ-せんか 引上船架・曳上船架【名】『英 Slip dock』水邊の斜面に、船架を置き、修理すべき船舶を、これに架して、陸上に引き上ぐる裝置。

ひき-あし 引足【名】㊀退く足取。置土產「蹴かへし・はね棲・引足のうるはしく」㊁足を引きずりて歩むこと。

ひき-あつ 引當つ【動下二他】㊀引き寄せて當つ。㊁『ひき(引)は接頭語』あてはむ。ひきくらぶ。一代男「身に引き當てて悲しく」賀古敎信七墓廻「身の孝心に引きあて、親を助けし義理を忘れ」

ひき-あて 引當【名】㊀引き當つること。㊁ていたう(抵當)に同じ。

ひきあて-もの 引當物【名】ていたうぶつ(抵當物)に同じ。

ひき-あはす 引合はす【動下二他】㊀引き寄せて合はす。㊁合はせてくらぶ。ひきくらぶ。てらしあはす。對照す。若風俗「これらに引き合はせては、勘子にも、さて違はあるものぞ」㊂兩者の中間に立ちて、對面せしむ。紹介す。狂言(腹不立)「庄屋殿に引き合はせませう」

ひき-あはす 彈合はす【動下二他】種種の絃樂器を、同時に彈きて、調子を合はす。源氏「この姬君たちの、琴彈きあはせて遊びたまへる」

ひき-あはせ 引合【名】㊀引き合はすること。てびき。紹介。㊁鎧の胴の前と後とを引き寄せて、合はする所。大鎧にては、弦走(ツルバシリ)の右脇の口。盛衰記「卷物一卷、泣く泣く鎧の引合より取り出だしたり」㊂『古、他の女子を、我が子息に引き合はせて、夫婦の緣を結ばせんとする時、その因緣を記して、女子の親に送り、その女子の親、己が心に合へりと思ふ時は、その裏に、返事を認めて、約束を固むるに用ひし紙なるよりいふ』古、祝儀等に用ひし一種の和紙。檀紙の別名なりとも、その一種にて、皺(シボ)なきもの、又、少し薄くして、縱に皺あるものともいふ。もとは同一なりしに、後世、產地・用法等の異なるに從ひて、區別あるに至りしものか。京都にては、丈小く、薄くして、竪に皺(シボ)あるものをいふといふ。ひきあはせがみ。ひき。みちのくがみ(陸奧紙)參照。

引合の緒(ヲ)【句】㊀引合㊁の兩方の端に附け、結びあはせて、胴を引き締むるに用ふる組緒。革緒にて、平たく裄けて作る。㊁たかひも(高紐)の後世の稱。

ひき-あはせ 彈合【名】彈き合はすること。浮世風呂「今から、湯の中で浚って、それから彈合だあ」

ひきあはせ-がみ 引合紙【名】ひきあはせ(引合)㊂に同じ。

ひき-あひ 引合【名】㊀賣買の取組、又その證書。㊁證據として、又は關係ある者として、出し示すこと。和合人「靈寶の言立(イヒタテ)には、木魚も叩かず、鈴も振らず、鋼鑼(ドラ)・鐃鈸(ネウハチ)も、引合に出さねえから」㊂引合人(ヒキアヒニン)となること。㊃ひきあはせ(引合)㊁の誤讀。參考本保元「ひきあひの中に射られて落ちにけり」

ひきあひ-くじ 引合公事【名】まきぞへの訴訟沙汰。小町踊「根がらみは引合公事か姬小松」

ひきあひ-にん 引合人【名】訴訟事件の關係者として、法廷に召喚せられ、判決の資料に供せらるる人。

ひき-あふ 引合ふ【動四自】㊀互に引く。雙方にて引く。狂言(猿替勾當)「手を引きあうて行くは」㊁引き退きて、味方の軍勢と合同す。太平記「北國へも引き合はず、黑地(クロチ)をも破りえず」㊂互に、引き入、れて、仲間とす。結託す。太平記「豐原平泉寺の衆徒(シユト)、宮方と引き合ひて、旗を擧げたり」㊃賣買を取り組む。取引す。㊄賣買して、不利ならず。事を行ひて、勞力を費したるだけの効あり。割にあふ。浮世風呂「お天氣都合が惡いと、休が勝ちますからね。やっぱり引合ひません」

ひき-あふぎ 引扇【名】能(ノウ)にて、引く手の時の扇づかひ。本朝三國誌「上松(アゲマツ)大夫がさし扇、春日大夫が引扇」

ひき-あふのく 引仰く【動下二他】引き張りてあふのかしむ。盛衰記「幸廣(ユキヒロ)が冑を引きあふのけて、首を搔きてけり」

ひき-あみ 引網・曳網【名】網を、磯邊・船など一定の場所に引き寄せて、魚を捕ふること。磯邊に引き寄するものと、船にて、引き寄するものとあり。前者を地網(ヂアミ)又は地引網(ヂビキアミ)、後者を、沖網(オキアミ)といふ。曾丹集「みほの浦の引網の綱のたぐれども長きは春の一日なりけり」

ひき-あん 引餡【名】小豆(アヅキ)を煮て、餡を製すること、又その製したる餡。

ひき-いた 引板【名】なるこ(鳴子)に同じ。下學集「引板、ヒキイタ。鳴子之類也。驚レ鳥物也」

ひき-いだす 引出だす【動四他】㊀引きて、外へ出だす。ひきだす。太平記「六條河原に引き出だし、一人も殘らず首を刎ねて」㊁誘ひ出す。をびきだす。ひきだす。ひっぱりだす。㊂ひきおこす(引起す)㊂に同じ。保元「御中違ひ、天下の大亂引き出だし給へども」太平記「南部・北嶺の衆徒等、於二南庭一不慮に喧嘩を引き出だして」

ひき-いづ 引出づ【動下二他】㊀引張(ヒッパ)りて、出だす。ひきいだす。今昔「その馬引き出でよと云ひければ、引き出でたり」㊁大勢の面前に出す。差出す。枕「宮の御子たちとて引き出でたらんに、わろくは侍らじかし」㊂引事(コトヒキ)に取りいだす。引例とす。引用す。源氏「人のみかどのためしまで引き出で」㊃ひきおこす(引起す)㊂に同じ。枕「わが心の、若くいわけなきにまかせて、さる騷をさへ引き出でて」源氏「つひに、あはあはしき事、この君ぞ引き出でんと」㊄昔の戰にて、敵方が、人數を打ち出だす。味方の場合には、打ち出づといへり。(引取るに對して)

ひきいで-もの 引出物【名】ひきでもの(引出物)に同じ。〔古語〕空穗「ひきいで物は、侍從に、さまざまのふち馬」

ひき-いと 引絲【名】物に結びつけて、それを引き動かすための絲。和合人「引絲の仕掛」

ひき-いはひ 引祝【名】藝人などの、職業を退く時の祝。引退の祝。廢業の祝。

ひき-いひ 引飯【名】だうみやうじほしいひ(道明寺糒)に同じ。洛陽集「引飯。道明寺喰うても涼し備後砂」

ひき-いる 引入る【動四自】㊀ひきこむ(引込む)㊀に同じ。源氏「わが車に乘せ奉りたまひて、みづからは引き入りて奉れり」太平記「敵、皆、城中へ引き入れば」㊁ひきこむ(引込む)㊁に同じ。㊂ひきこむ(引込む)㊄に同じ。增鏡「海づらよりは少し引き入りて」㊃息絕ゆ。絕息す。息をひきとる。十訓「度度らうたひて、引き入りにけり」

心に引入る【句】人知れずたくむ。たくらみ思ふ。つつみ思ふ。〔古語〕枕「人などの來るも安からずぞ人人言ひなすなる。いとあまり心に引き入りたるおぼえ、はた無ければ」

ひき-いる 引入る【動下二他】㊀引きて、內に入らしむ。ひきこむ。源氏「いよいよ顏を引き入れたまふ」㊁引張(ヒッパ)りて、深くかぶる。今昔「烏帽子を、鼻の許に引き入れて」禁秘抄「於二殿上口一、切レ紐引二入帽子一、如二面縛一」㊂誘ひて、仲間に入らしむ。ひきこむ。「味方に引き入る」

ひき-いる 挽入る【動下二他】『前條の語の轉義』車に乘れるまま轅內・門內などに入る。ひきこむ。源氏「御門(ミカド)ひき入るるより、けはひことに、廣廣として」

ひき-いれ 引入【名】㊀引き入るること。㊁元服の時、冠を被らすること、又その役。〔古語〕榮花「枇杷殿にて、御冠召させたまふ。引入には閑院の內大臣」引入の大臣(オトド)【句】前條㊁の役をする大臣。源氏「引入のおとどの御座(オマシ)、御前にあり」

ひき-いれ 挽入【名】ひきれ(挽入)に同じ。〔古語〕語燈錄「齋(トキ)のさば、……わがひきいれの皿に取りさぶらふべきか」

ひきいれ-えぼし 引入烏帽子【名】烏帽子を、掛緒(カケヲ)を掛けずに、深めにかぶること、又そのかぶり方の烏帽子。著聞「白き直衣(ナホシ)に引入烏帽子したる男」

ひきいれ-がふし 挽入合子【名】ひきれがふし(挽入合子)に同じ。

ひきいれ-ごゑ 引入聲【名】息を引き入るる氣味にして、幽かに發する聲。枕「ことなる事なき男の、ひきいれ聲して、艷だちたる」

ひき-いろ 引色【名】引き退かんとする樣子。退却せんとする形勢。まけいろ。太平記「寄手、すでに引色になりて候ふ」同「戰屈して、已に引色に見えける處に」

ひ-きう 貔貅・豼貅【名】㊀『史記の五帝紀に見ゆ。貔は牡、貅は牝』支那にて、古、馴して、戰爭に用ひたりといふ猛獸。㊁『禮記の曲禮篇に見ゆ』支那にて、古、前記の猛獸を描きて、兵車に建てし旗。㊂次條に同じ。「貅・貔虎。

貔貅の士【句】勇猛なるつはもの。貔

ひ-きう 髀臼【名】〔醫〕『獨 Hüftfanne』無名骨の外側にある、深大なる臼窩。腸骨・坐骨及び恥骨の癒合中點にして、形、小杯のごとく、圓靭帶によりて、大腿骨頭と關節を作る。

び-きう 彌久【名】久しきに彌(ワタ)ること。長引くこと。「曠日彌久」

び-ぎう 微牛【名】取るに足らぬ牛。徒然「尫弱の官人、たまたま出仕の微牛を取るべきやうなし」

ひき-うう 引植う【動下二他】引き拔き來りて植う。萬葉「夏の野のさゆり引き植ゑて」續千載「けふよりは子(ネ)の日の小松引き植ゑて八百萬代の春をこそ待て」

ひきう-か 被救荷【名】〔商〕ひきうざいさん(被救財產)に同じ。

ひき-うく 引受く【動下二他】㊀手もとに引き寄せて始末す。うけもつ。負擔す。擔當す。㊁他人の爲せる跡を受けつぐ。代りて爲す。㊂相手となりてあひしらふ。堀川波の鼓「囲(カク)の盃、つっと干して、又、引き受け」㊃保證す。身許保證をなす。〔引請く〕㊄自分に關する事なりと邪推す。

ひきう-くわんせつ 髀臼關節【名】〔醫〕こくわんせつ(股關節)に同じ。

ひき-うけ 引受【名】㊀ひきうくること。㊁〔商〕『英 Acceptance』爲替手形の支拂人が、手形の所持人に對し、滿期日に於て、手形金額の義務を負擔する手形行爲。その方式は、通常、引受の旨を手形の一端に記載し、或は引受欄內に署名捺印す。

ひきうけ-かかく 引受價格【名】〔商〕株式又は社債を、額面以上の價格にて發行する時、その申込人が、申込證に、高直にて引き受けんとして記載する價格。

ひきうけ-きよぜつ 引受拒絕【名】〔商〕『英 Nonacceptance』爲替手形の支拂人が、その所持人に對して、支拂を拒絕し、又は支拂には應ずれども、引受に條件を附し、或は支拂に應じ、且つ引受に條件を附することはなけれども、一覽後定期拂の手形に、引受の日附を記載せぬこと。

ひきうけきよぜつ-しようしよ 引受拒絕證書【名】〔商〕『英 Protest for nonacceptance』拒絕證書の一。引受拒絕又は手形の不渡(フワタリ)の際に、手形上の權利を確保するに必須なる行爲をなすことを證明するために、公證人又は執達吏をして作成せしむる要式證券。

ひきうけこばみ-しようしよ 引受拒證書【名】〔商〕前條に同じ。

ひきうけじこく-しようめい 引受時刻證明【名】郵便局にて、書留郵便を引き受けたる時刻の證明。

ひきうけじこくしようめい-いうびん 引受時刻證明郵便【名】特殊取扱郵便の一。郵便局にて、引受時刻を證明するもの。この取扱に依り得るは、書留通常郵便物のみ。

ひきうけじこくしようめい-いうびんぶつ 引受時刻證明郵便物【名】引受時刻證明の取扱に依る郵便物。

ひきうけずみ-かはせてがた 引受濟爲替手形【名】〔商〕手形支拂人が引受を爲したる爲替手形。

ひきうけ-て 引受手【名】次條に㊀同じ。

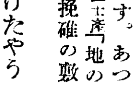
ひきうけ-にん 引受人【名】㊀引き受くる人。ひきうけて。㊁〔商〕爲替手形の引受濟爲替手形の支拂人。

ひき-うごかす 引動かす【動四他】㊀引きて動かす。源氏「ひき動かしたまへど、なよなよとして」㊁勸めて、他人の心を動かす。源氏「御いらへばかりは聞えたまへかしなど、ひき動かしつべくいふ」

ひきう-ざいさん 被救財產【名】〔商〕海難・失火又は捕獲などによりて、滅失に歸せんとしたる船舶、又はその積荷の、救濟せられたるもの。被救荷。

ひき-うしなふ 引失ふ【動四他】『ひき(引)は接頭語』うしなふ(失ふ)㊀を强めていふ語。紫式部日記「よろしう書きかへたりしは、皆引失ひて」

ひき-うす 碾臼・挽碓【名】直徑一尺內外、高さ約三寸の、磨臼(スリウス)に似たる石臼。上の石にある、挽木(ヒキキ)と呼ぶ柄を廻して、その石を廻轉せしめつつ、穀物を碾きて、粉にす。いしうす。あつうす。置土產「地の衆の文(フミ)は、……挽碓の敷紙になりて」


（ひきうす）

碾臼の栓の拔けたやう【句】用を成さぬ物事の譬。〔諺語〕

ひきうす-げい 碾臼藝【名】いしうすげい(石臼藝)に同じ。化物氣質「一切萬能、せぬといふ事もなく、知らぬといふ事ないやうなれど、挽臼藝」

ひきうす-べん 碾臼辯【名】話す言葉の重くるしきこと。口の重きこと。

ひき-うつす 引移す【動四他】㊀『ひき(引)は接頭語』うつす(移す)に同じ。㊁萬事とりまかなふ。增鏡「節會の儀式、ひきうつし、待ちとりたまふさま、いとめでたく」同「世の中は、新院斯くておはしませば、法皇の御かはりに引きうつして」

ひき-うつる 引移る【動四自】ひきこす(引越す)に同じ。

ひき-うど 低人・短人・侏儒【名】ひきびと(低人)の音便。〔古語〕宇治「ひきうどの、いかめしく力強く、足早く」

ひき-うま 引馬【名】㊀古、貴人の儀從に、鞍覆を掛けて牽き行きし馬。東鑑「御先達、次先陣隨兵、次御乘替、次童一人、次御引馬」義經記「唐櫃(カラビツ)、あまた舁かせて、引馬、その數あり」㊁つけうま(附馬)に同じ。(遊客側よりいふ語)柳樽「引馬で大門を出る飛んだ客」

ひき-おくる 引後る【動下二自】引きさがりて後る。後(アト)に附きて進む。太平記「遥かに後陣に引殿(ヒキオク)れて」

ひき-おこし 引起【名】㊀昔の暑氣拂の藥。胡椒一匁、木香(モクカウ)八分、肉桂八分、黃蓮(ワウレン)七分、黃芩(ワウゴン)七分、甘草三分、葛粉八匁の七味を調合せるものといふ。㊁〔植〕脣形科に屬する多年生の草。莖は方形にして、高さ三四尺、葉は卵形にして、鋸齒を具へ、表面に、白色の毛茸密生し、小形・白色にして、紅・紫の斑ある脣形花、大なる聚繖花序をなして開く。いっぽ

んさう。えんめいさう。やまはくか。㊂［植］やまはくか(山薄荷)㊀に同じ。

ひきおこす 引起す【動四他】㊀引張(ヒッパ)りて起す。倒れたるを起し立たしむ。源氏「ひき起して奉らせたまふ」㊁廢れたるを再興す。ひきたつ。玉葉「世の中は和泉の杣木取る民のふるきを更に引き起さなん」㊂事を發生せしむ。しでかす。でかす。ひきいだす。ひきいづ。誘發す。［惹起す］

ひきおしろい 引白粉【名】白粉を塗ること、又、塗りたる白粉。井筒業平河内通「引白粉の額ぎは」

ひきおとし 引落【名】㊀引き落すこと。㊁相撲(スマフ)の手の一。相手の腕又は手先を押へ、わが體を後方へ引きながら、相手の體を、前へ引き倒すこと。引倒(ヒキタフシ)といふも、ほぼこれに同じ。たたきこみ。㊂決算の時、損害と見做して、帳簿より、その價格を除くこと。

ひきおとす 引落す【動四他】㊀引張(ヒッパ)りて落す。引きおろす。源氏「小袿(コウチギ)ひきおとして」盛衰記「勢多の橋二三間を引き落して」㊁相撲(スマフ)にて、引落(ヒキオトシ)の手を用ふ。㊂損害と見做して、決算帳簿より、價格を除く。

ひきおどろかす 引驚かす【動四他】引張(ヒッパ)りて、目を覺さす。［古語］榮花「御いらへもなく、驚かせたまはねば、寄りて、……引き驚かし奉りたまふに」

ひきおひ 引負【名】引き負ふこと。補缺。堀川狂歌集「我が戀は引債(ヒキオヒ)のある代官の胸算用をするごとくなり」新版歌祭文「引負の銀(カネ)の工面」

ひきおび 引帶【名】袍・直衣(ナホシ)などを締め結ぶに用ふる、小き帶。［古語］萬葉「みはなだのたへの帶を引帶なす唐帶にとらし」和名「衿、比岐於比。小帶也。釋名云、衿禁也、禁不レ得二開散一也」

ひきおふ 引負ふ【動四他】㊀人に代りて賣買又は取引をなしたる損失が、自己の負擔となる。女殺油地獄「主人の金……三貫目餘引き負ひ」㊁借金す。負債す。

ひきおぼしめす 引思召す【動四他】ひきおもふ(引思ふ)の敬語。盛衰記「源氏を引き思召して、平家をにくませたまふ」

ひきおほふ 引覆ふ【動四他】一面におほふ。たなびきおほふ。盛衰記「さしも晴れたる大空、俄かに黒雲引覆ひ」

ひきおもふ 引思ふ【動四他】ひいきに思ふ。ひいきす。盛衰記「三千の衆徒(シユト)一同に平家を引き思ふこと、よも候はじ」

ひきおろす 引下す【動四他】引張(ヒッパ)りておろす。ひきおとす。おろす。源氏「御木丁の帷子(カタビラ)ひきおろし」

ひきかがみ 引屈・膕【名】ひかがみ(引屈)に同じ。

ひきかかる 引掛る・引懸る【動四自】引き掛けたるやうになる。かかりて離れず。かかりとどまる。ひっかかる。

ひきがき 引柿・曳柿【名】布に、柿の澀を引きたること、又その布。東鑑「曳柿(ヒキガキ)直垂(ヒタタレ)」義經記「あひあひに引柿したる摺盡(スリツクシ)の直垂」

ひきかく 引掛く・引懸く【動下二他】㊀掛けて、離れぬやうにす。釣り下ぐ。ひっかく。ぶらさぐ。つるす。㊁身に引き寄せて、上より掛く。㊂ひきかぶる。ひき著(キ)る。ひきまとふ。ひっかく。枕「紫苑(シヲン)の衣(キヌ)のいとあざやかなるを引き懸けて」㊃關係あるやうにす。ひっかく。源氏「ちぢの社を引きかけて、行く先長きことを契りけん」徒然「身を引きかけて言ひ出でたる、いとわびし」

ひきかく 引闕く【動四他】引張(ヒッパ)りて闕く。もぎ取る。ひっかく。記「搔(カッ)み批(ヒシ)ぎて、その枝を引き闕きて」

ひきかく 引驅く・引駈く【動下二他】手綱を引きたぐりて、馬を走らす。平治「引き驅け引き驅け打つ程に」

ひきかくす 引隱す【動四他】引きこめて隱す。隱す。源氏「數珠(ズズ)引き隱して持(モ)たまへり」

ひきかくる 引隱る【動下二自】引きこみて隱る。隱る。十訓「引き隱れてのぞきけるに」

ひきかけ 引掛【名】㊀引きかくること。又、その裝置をなしたる物。ひっかけ。㊁花合(ハナアハセ)㊁にて、己の二枚持てる札を取りて、あとの札を、己の手に集るやうにすること。

ひきかけむしろ 引懸筵【名】檳榔毛(ビラウゲ)の車、半蔀(ハジトミ)の車などの車の前後に懸けて、前板などの塵を避くる料とせし筵。ひきたてむしろ。

ひきかけわたす 引掛渡す【動四他】こなたよりかなたまで引き掛く。榮花「おどろおどろしき大海の摺裳(スリモ)どもひきかけわたして」

ひきかさぬ 引重ぬ・引襲ぬ【動下二他】㊀引き延(ハ)へて添へ加ふ。加ふ。新拾遺「年經ぬるわが神山の榊葉に幾重みしめを引き重ねけん」㊁『ひき(引)は接頭語』ひっかさぬ。かさぬ(重ぬ)を强めていふ語。枕「白き綾、二藍(フタアヰ)引き重ねて」同「紙屋紙(カウヤガミ)引き重ねて」

ひきかぜ 引風【名】風を引くこと。かぜひき。風邪。感冒。

ひきかた 引方【名】㊀引く方法。ひきやう。㊁［商］節(セツ)㊄の一。大阪堂島(ダウジマ)の米穀取引所に於ける、午前の第三節及び午後の第二節。

ひきがた 引方【名】引き退く方面。太平記「そぞろに深入して、引方のなさに」

ひきかたぐ 引擔ぐ【動下二他】『ひき(引)は接頭語』ひっかつぐ(引擔ぐ)に同じ。狂言(三人片輪)「輕物藏をあけて、引きかたげ退(ノ)くまいか」

ひきかたむ 引堅む【動下二他】ひきしぼる(引絞る)に同じ。宇治「引き堅めて、とろとろと放ちて、弓倒して見やれば」盛衰記「能く引き堅めて、兵(ヒヤウ)と放つ」

ひきがたり 彈語【名】琵琶・三味線などを自ら彈きながら、その文句を語ること。

ひきかづく 引被く【動四他】身に引き寄せてかづく。頭の上よりひきかく。ひきかぶる。ひっかづく。源氏「御衣(オンゾ)引きかづきて臥したまへり」

ひきかなぐる 引拐る【動四他】力を籠めてかなぐる。源氏「なみなみの人ならばこそ、荒らかにも、ひきかなぐらめ」

ひきがね 引金・引鐵【名】小銃に裝置せる彎曲せる金具。彈込(タマゴメ)に先だちて、引き上げ置き、右手の人さし指にて、その下端を手前に引けば、打金落下して、發火す。國姓爺後日合戰「鐵砲の引金」

ひきがね 引鐘【名】軍隊を引き上ぐる時、鳴らす鐘。(押(オシ)太鼓に對して) 木下蔭狹間合戰「打立つる引鐘に連れて」

ひきがは 日置川【名】［地］紀伊國西牟婁(ニシムロ)郡にある川。大和國和田森の山中に發し、前野川と合し、日置町にて海に注ぐ。長さ七〇里餘。

ひきがはらけ 引土器【名】「(下土器)に同じ。

ひきがひる 蟇蛙・蟾蜍【名】［動］ひきがへる(蟾蜍)の轉訛。運歩色葉集「蟾蜍、ヒキガヒル」

ひきかふ 引替ふ【動下二自】『ひき(引)は接頭語』㊀普通又は前の狀態と、大いにかはる。ひきかへす。源氏「大將殿の造り磨きたまはんにこそは、引き替へたる玉の臺(ウテナ)にもなり返らめ」狂言(三人片輪)「引きかへて、座頭になって參らう」㊁とりかふ。かふ。交換す。［引換ふ］

ひきかぶる 引被る【動四他】引き寄せてかぶる。ひきかづく。ひっかぶる。

ひきかへ 引替【名】㊀互にとりかふること。交換。ひっかへ。［引換］㊁元よりの物を止めて、新しきに代ふること。とりかへ。ひかへ。狹衣「女車、牛の引替などして、遠き所に歸る」

引替の馬【句】乘替の馬。副馬。盛衰記「御引替の御馬に乘らせたまひて」

引替の膳【名】七五三の膳を饗する時、これを撤して、更に進むる膳部。

ひきかへけん 引替劵【名】後に品物と引き替ふる約束にて、假に渡す切符(キップ)。

ひきかへし 引返【名】㊀引き返すこと。㊁芝居にて、前の幕に續けて、繰り返して演ずる早幕。ひっかへし。㊂女の盛服を仕立つるに、裾廻に、表のと同一の切地を

用ふること。ともすそ。ひっかへし。

ひき-かへし 引返【副】前の狀態とは變りて。ひきかへて。うって變りて。源氏「ひきかへしゆるさぬけしきを見せんも」同「したの心ゆがみたらん人……、ひきかへしあはれに」

ひき-かへす 引返す【動四他】㊀うらうへにす。反對にす。源氏「疊、所所引き返したり」㊁くりかへす。反復す。新後拾遺「いつはりの言の葉しげき玉づさにひきかへしても恨みつるかな」

ひき-かへす 引返す【動四自】㊀元の位置に戻る。退きもどる。ひっかへす。保元「敵引返すと見てあれば」㊁元の狀態に戻る。續世繼「さりとても思ひな捨てそ梓弓引き返す世もありもこそすれ」㊂あらたまり變る。ひきかふ。増鏡「さまざまに引き返したる世なりかし」

ひきかへ-ばらひ 引換拂【名】貨物と引換へに、代金を支拂ふこと。貨物引換拂。品物引換拂。

ひき-かへる 引歸る【動四自】引き退きて歸る。ひきかへす。立ち歸る。源氏「こともとに几帳をぞ隔てたる、あな口惜しと思ひて、引歸るをりしも」

ひき-がへる 蟇蛙・蟾蜍【名】〔動〕無尾類に屬する兩棲動物。體肥大にして、長さ四五寸に達す。背部は通常黑褐色、腹面は灰白色を呈し、皮腺よく發達して、疣狀を呈し、眼の後方に毒腺を有し、白色・乳狀の液を分泌す。口に齒なく、趾間に蹼なく、產卵期の外、陸上に居り、陰濕の地を好む。動作遲鈍、昆蟲類を餌とす。革は袋物の製造に用ふ。おほびき。がま。ひき。

蟇蛙が蚊を呑んだやう【句】「蛇(ジャ)が蚊を呑んだやう」に同じ。〔諺語〕

ひき-がも 引鴨【名】春季に至りて、我國より、北方の寒地に去る鴨。

ひき-ぎ 挽木【名】ひきうす(碾臼)を見よ。謠曲(放下僧)「茶臼は、挽木にもまるる」靈土產「琴・三味線を彈きし指に、碓(イシウス)の挽木も、ついてまはり」

ひき-きす 引著す【動下二他】引き寄せて著しむ。源氏「御衣(オンゾ)引き著せ奉りたまふに」

ひき-ぎぬ 疋絹【名】疋に調へてある絹。榮花「品品にしたがひて、かづけ物、ひきぎぬ賜はす」

ひき-きり 引切【名】㊀物事にいらだつ性質。性急。〔古語〕源氏「おとなおとなしうのどめたる所、さすがになく、いとひききりに、花やいたまへる人人」㊁鋸挽にして切ること。〔挽切〕平治「首をば、鋸にて引切にし候はばや」㊂ひききりのこぎり(引切鋸)の略。〔挽切〕㊃『鋸にて挽き切りて造るよりいふ』釜の蓋を載せ置く竹筒。ふたおき。ひっきり。しかた咄「茶を立てけるに、まだ無功なれば、しまひの時、蓋にひききりの著きたるを知らず、そのまま蓋しめければ、客の田舍人、これを見て、今の竹の輪切は、その分にては煮えまい、……といふた」

ひききり-なし 引切無【名】絶間なきこと。のべつ。ひっきりなし。

ひききり-なし 引切無し【形二】絶間なし。絶えず。のべつなり。たてつづけ。ひっきりなし。

ひききり-のこぎり 引切鋸・挽切鋸【名】刃の幅狹く、齒の細かなる、小き鋸。鴨居切・竹鋸などの種類あり。ひききり。

ひき-きる 引切る【動四他】引きて切る。引張(ヒッパ)りてちぎる。ひっきる。宇治「刀にて切りたるやうに引き切りて」

引切らず【句】ひききりなし(引切無し)に同じ。太平記「國國の勢(セイ)、百騎・二百騎、東坂本へ馳せ參る事、引きも切らず」一代女「勸進といふ聲、引切らず」

ひき-きる 挽切る【動四他】鋸にて挽きて切る。ひっきる。狂言(萩大名)「鋸おくせい。引切って、心(シン)に立てう」

ひき-きる 引著る【動上一他】身に引き寄せて著る。ひきかく。ひきまとふ。源氏「つま戶の御簾(ミス)をひき著たまへば」十訓「紙衾といふものばかり引き著て」

ひき-く 引句【名】㊀引言(ヒキゴト)にする文句。㊁平家琵琶にて、然るべく曲節を正し、音調を琵琶に合はせて歌ふこと。(語句(カクリク)に對して)

ひき-くくる 引括る【動四他】『ひき(引)は接頭語』くくる(括る)を强めていふ語。ひっくくる。宇治「藁すぢにてひきくくりて、枝の先に附けて」

ひき-ぐし 挽櫛【名】鋸にて、齒の形を挽きて、櫛を製造すること。

ひき-ぐす 引具す【動佐變他】ひきつる(引連る)に同じ。源氏「遠き國國より、妻子(メコ)を引具しつつ詣で來(ク)なるを」保元「わが身が合期(ガフゴ)したらばこそ、各引具して、山林にも立隱れめ」

ひき-ぐすり 引藥【名】ぬりぐすり(塗藥)に同じ。

ひき-ぐち 引口【名】引き退く際。一代女「引口に、お前さまは、どれさまにおあひなされます、……といふが」

ひき-くづ 挽屑【名】おがくづ(大鋸屑)に同じ。

ひき-くはふ 引加ふ【動下二他】ひきかさぬ(引重ぬ)㊀に同じ。源氏「ときはの蔭に花の錦を引き加へたると見ゆるに」

ひき-くむ 引組む【動四自】引き寄せて組みつく。ひっくむ。とりくむ。

ひき-くらぶ 引比ぶ【動下二他】『ひき(引)は接頭語』くらぶ(比ぶ)を强めていふ語。金葉「梓弓かへるあしたの思には引き比ぶべき事の無きかな」

ひき-くるむ 引括む【動四他】㊀引き寄せてくるむ。ひっくるむ。㊁一つにまとむ。一括す。包括す。ひっくるむ。

ひき-くるむ 引括む【動下二他】前條に同じ。「ひきくるめて言へば」

ひき-くるめ 引括【名】ひきくるむること。ひっくるめ。ひりくるめ。

ひき-ぐわし 引菓子【名】『ひきさかづき(引盃)を見よ』祝儀又は佛事の時などに、引物として出す菓子。臺引(ダイビキ)菓子。引物(ヒキモノ)菓子。

ひき-げ 引毛【名】料理用にすべき鳥獸などの羽毛を引き拔くこと。

ひ-きげき 悲喜劇【名】㊀悲劇と喜劇と。㊁〔文〕『英 Trag·comedy』一篇の戲曲の、初は悲劇なれども、終には圓滿なる解決を見るやうに仕組めるもの。

ひき-げた 引下駄【名】ひきずりげた(引摺下駄)に同じ。〔京都・大阪邊の語〕一代男「赤前垂して、桐の引下駄をはきて」一代女「梧(リキ)の引下駄」

ひき-こ 挽子【名】車宿に雇はれをる人力車夫。

ひき-こ 熟蠶【名】蠶の、完全に發育して、身體透明となり、繭を作る時期に達せるもの。

ひき-ご 蟇子【名】〔動〕あをがへる(靑蛙)を云ふ。〔伊賀國の方言〕

ひき-こかす 引轉す【動四他】ひきたふす(引倒す)に同じ。狂言(膏藥練)「引きこかした。さあ勝ったぞ」

ひきこき-がみ 引扱髮【名】ひっこきがみ(引扱髮)に同じ。

ひき-こくる 引きこくる【動四他】『ひき(引)は接頭語』こくるを强めていふ語。ひっこくる。

ひき-こし 引越【名】いてん(移轉)㊁に同じ。〔東京の語〕

ひき-ごし 引腰【名】女子の正裝に用ふる裳(モ)の左右に取り附けて、垂れて、飾とする紐。裳とは異なる地質の絹を用ひて作る。男子の平緒(ヒラヲ)と同樣に、もと、裳の紐を前にて結び、餘を垂れおきしより一變せしものなるべしといふ。新六「わぎも子が御裳(ミモ)の引腰長き夜をかけてぞ契るあかぬあまりに」

ひきこし-いはひ 引越祝【名】引越をなせる時の祝。轉宅の祝。ひっこしいはひ。

ひきこし-ぐるま 引越車【名】引越荷物を運搬する車。こしぐるま。ひっこしぐるま。

ひきこし-さき 引越先【名】引越して行く場處。轉宅せる處。ひっこしさき。

ひきこし-そば 引越蕎麥【名】引越振舞として配り又は食ふ蕎麥。ひっこしそば。

ひきこし-にもつ 引越荷物【名】引越すに當りて、運ぶ家財。ひっこしにもつ。

ひきこし-ぶるまひ 引越振舞【名】引越祝の饗應。ひっこしぶるまひ。

ひきこし-れう 引越料【名】引越の入費。

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの　はひふへほ　まみむんめも　やゆよ　らりるれろ　わゐゑを

こしれら。ひっこしれら。

ひき-こす 引越す【動四他】『ひき(引)は接頭語』**こす**(越す)㊁を強めていふ語。ひきこゆ。榮花「宰相中將にておはするを……、ひきこして、大納言になし奉らせたまひっ」

ひき-こす 引越す【動四自】『ひき(引)は接頭語』家を移す。轉宅す。轉居す。移轉す。こす。ひっこす。

ひき-こする 引擦る【動四他】『ひき(引)は接頭語』**こする**(擦る)を強めていふ語。ひっこする。

ひき-ごと 引言・引事【名】事を説明するために、他の文句を引用すること、又その文句。引例。例證。引證。八笑人「面(ツラ)の言立(イヒタテ)は、大概(テエゲエ)にさっし。おれが面まで引事に並べたって、面白くもねえ」

ひき-こなす 引熟す【動四他】『ひき(引)は接頭語』**こなす**(熟す)㊁㊅を強めていふ語。ひっこなす。持統天皇歌軍法「小姑を引きこなした。眼を開いておしやれとは、何ぢやの」

ひき-ごま 引獨樂【名】曲獨樂(キヨクゴマ)の一。廻して、紐などの上を、手許の方へと傳はり來らしむること。松風村雨東帶鑑「袖の内なる引獨樂は、餘所に漏らさぬ玉章(タマツサ)獨樂」

ひき-ごま 引駒【名】將棊をさす時、後退する駒。

ひき-こます 引込ます【他四他】引き込むやうにす。ひっこます。

ひき-こみ 引込【名】ひきこむこと。ひっこみ。

ひき-こみ-じあん 引込思案【名】進みて事を爲す元氣に乏しき考。因循なる考。ひっこみじあん。ひかへじあん。

ひき-こみ-しえ 引込紫衣【名】**ひっこみしえ**(引込紫衣)を見よ。

ひき-こみ-しんざう 引込新造【名】**ひっこみしんざう**(引込新造)を見よ。

ひき-こみ-しやう 引込性【名】引込思案に陷りやすき性質。因循なる性質。ひっこみしやう。ひかへしやう。

ひき-こみ-しゆぎ 引込主義【名】㊀家に籠り居て、外出せぬ主義。ひっこみ主義。㊁引込思案の主義。事なかれ主義。ひっこみ主義。

ひきこみ-せん 引込線【名】『英 Service-wire』幹線より分岐し、構外に於ける支持物を經過せずして、使用場所の構内に達する屋外電線。架空引込線と地中引込線との別あり。

ひき-こむ 引込む【動四自】㊀退きて、内に入る。ひきこもる。ひきいる。ひっこむ。東海道名所記「亭主引込みぬ」㊁家の内、又は、その他、内部にこもりて出でず。閉居す。ひきこもる。ひきいる。ひっこむ。㊂隱退す。退隱す。ひっこむ。甲陽軍鑑「引込まんと存知、物を貯へんとて、虛病を構へ」㊃しりごみす。ぐづぐづす。ひっこむ。㊄人又は物の位置、同列の人又は物に比べて、後方又は下方にさがる。くぼむ。ひきいる。ひきさがる。ひっこむ。

ひき-こむ 挽込む【動四他】**ひきいる**(挽入る)に同じ。

ひき-こむ 引込む【動四他】㊀内の方に引き寄す。ひきいる。㊁誘ひて、仲間に入らしむ。勸めて加入せしむ。㊂他人の物をいつのまにか我物にすずりこむ。㊃風を引込む【句】感冒に罹る。風を引く。

ひき-こむ 引込む【動下二他】後方又は下方に退き入らしむ。ひきこます。

ひき-こむ 彈込む【動下二他】世には知られねど、巧に彈く。源氏「箏(サウ)……、世に名を取れる人人、かきなでの心やりばかりにのみあるを、ここに、斯う彈き込めたまへりける、いと興ありける事かな」

ひき-ごめ 碾米【名】臼にて、米粒を碾くこと、又その碾きたる米。

ひき-こもり 引籠【名】ひきこもること。ひっこもり。

ひき-こもる 引籠る【名】㊀引き退きて、内にこもる。ひきいる。ひきこむ。ひっこもる。甲陽軍鑑「敵を見て、引籠りたまふ事なきに」㊁外出せず。ひきこむ。閉ぢこもる。こもる。ひっこもる。

ひき-こゆ 引越ゆ【動下二他】『ひき(引)は接頭語』**こゆ**(越ゆ)㊀㊁㊂を強めていふ語。ひきこす。落窪「司召(ツカサメシ)に、引越え、中納言になりたまひぬ」盛衰記「礪並(トナミ)山・倶梨伽羅(クリカラ)が峯を引越えて」

ひき-ころす 轢殺す【動四他】轢きて殺す。轢殺(レキサツ)す。

ひき-ころばす 引轉ばす【動四他】引張(ヒッパ)りてころばす。ひっころばす。

ひき-ごゑ 低聲【名】低き聲。こごゑ。低聲(テイセイ)。〔古語〕榮花「加持とどめて、そこらの僧、ひき聲に讀みたり」

ひき-ざい 挽材【名】機械にて挽き割りたる材木。

ひき-ざい 誹毀罪【名】〔法〕舊刑法にて、惡事・醜行を摘發して、人を誹毀せるによりて成立せし罪。死者に對しては、事實の誣罔なりし時にのみ成立すとせられたり。現行刑法の名譽毀損罪に該當す。

ひき-さがす 引搜す【動四他】『ひき(引)は接頭語』**さがす**(搜す)を強めていふ語。枕「手づから引きさがし出でて見るこそ、いと憎けれ」

ひき-さかづき 引盃・引杯【名】『ひき(引)は引渡す義。**ひきぐわし**(引菓子)・**ひきもの**(引物)參照』饗膳の時、銘銘に配る盃。

ひき-ざかな 引肴【名】引物の肴。

ひき-さがる 引下る【動四自】㊀退く。さがる。しさる。ひきしりぞく。八笑人「出目助・呑七は、少し引下り」㊁他の人又は物の後方に位す。さがる。太平記「己れが勢(セイ)の程を人に知られんとや思ひけん、一日引きさがりてぞ向ひける」

ひき-さき-がみ 引裂紙・引割紙【名】引裂きたる紙。ひっさきがみ。若風俗「指、少し疼(タイ)ませ、血の出る程にもなきを、引割紙にして結びしを」重井筒「引裂紙の捻元結(ヒネリモトユヒ)」

ひき-さき-もとゆひ 引裂元結【名】德川時代に、鳥子(トリノコ)紙或は薄葉などを、幅約二分、もしくは、それよりも狹く疊みて、元結とせしもの。主に奧女中の間に行はれたり。幅五六分に裁ちたるを、四つ又は五つに疊みて、そのまま用ひ、又は疊みて、縮をかけて用ふるもありて、小引裂(コヒキサキ)元結といへり。ひっさきもとゆひ。

ひき-さく 引裂く【動四他】引張(ヒッパ)りて裂く。つんざく。狂言(胸突)「名判(ナハン)の處を引裂かっしやれて下され」

ひき-さく 引避く【動下二他】**とほざく**(遠ざく)に同じ。〔古語〕源氏「障子(サウジ)のあなたに、一尺ばかり引きさけて、屛風立てたり」

ひき-さぐ 引下ぐ【動下二他】㊀下げて持つ。たづさふ。ひっさぐ。ひさぐ。枕「盤もひきさげながら、急ぎてぞ見るや」源氏「鋤などひき下げて、ただ掘りに掘りて」㊁引き連る。引き具す。伴なふ。つる。落窪「旅だちたるに……子引き下げて居たらん、いと見苦しからん」㊂地位・身分を低くす。くだす。おとす。五人女「身をひきさげて、里の仕業の庭働(ニハバタラキ)望にて」㊃ひきさがらしむ。退かす。

ひき-ざくら ひき櫻【名】〔植〕**こぶし**(辛夷)に同じ。〔古語〕和名「蕪荑、比岐佐久良」

ひき-さげ 引下【名】㊀引きさぐること。㊁**ひきさげぐすり**(引下藥)の略。㊂**ひきさげづとめ**(引下勤)の略。

ひき-ざけ 引酒【名】肉類を燒く時、味を添へんために、酒を塗ること、又その酒。

ひき-さげ-ぐすり 引下藥【名】**のぼせひきさげぐすり**(逆上引下藥)の略。

ひき-さげ-づとめ 引下勤【名】德川時代に、武家の、家格以下の職を勤めしこと。ひきさげ。

ひき-さしなは 引指繩・引差繩【名】馬の前に立ちて、牽きゆく時の指繩。とめなは。

ひき-ざん 引算【名】**げんぱふ**(減法)に同じ。

ひき-さらへ 輓杷【名】田の土を掻きならすに用ふる農具。形は、熊手に似て、綱を附けて引きゆく。

ひき-さる 引去る【動四他】㊀引張(ヒッパ)りて持ちゆく。〔挽去る〕蕪村「指南車を胡地に引き去る霞かな」㊁**ひく**(引く)⑰に同じ。

ひきし 低し・矮し【形一】ひくし（低し）に同じ。［古語］源氏「御簾（ミス）ばかりはひきくて」

ひき-しごく 引扱く【動四他】『ひき（引）は接頭語』しごく（扱く）を强めていふ語。ひっしごく。

ひき-しざる 引退る【動四自】しざる（退る）に同じ。太平記「この陣をも破られて、共に天王寺へとひきしざる」

ひき-しじむ 引縮む【動下二他】引き込めて、小くす。源氏「聲ひきしじめ、かしこまりて物語し」同「その御勢をもひきしじめたまひて」

ひき-したたむ 引認む【動下二他】引き寄せて處理す。したたむ。まとむ。整理す。徒然「われかしこげに物ひきしたため、ちりぢりに行きあかれぬ」

ひき-しづむ 彈靜む【動下二他】調子に外れず彈く。源氏「琵琶なん、まことの音（ネ）を彈きしづむる人、古も難う侍りしを」

ひき-しのぶ 引忍ぶ【動四自】引き込みてしのび隱る。ひそむ。枕「しのびて賜はせたりつるといひて、ここにてさへひきしのぶも、餘なり」著聞「近く寄りてあひしらふに、この人、思はずげに思ひて、ひきしのぶを」

ひき-しほ 引潮・引汐【名】沖に引き去る潮。いりしほ。おちしほ。かれしほ。さげしほ。落潮。（上潮（アゲシホ）に對して）

ひきしほ-どき 引潮時・引汐時【名】引潮の起る時刻。潮の引き去る時。浦島年代記「引汐時に誘はれて」

ひき-しぼる 引絞る【動四他】弓の弦に、矢をつがへ、十分に引き張る。ひきかたむ。滿引す。太平記「十二東三伏（ミツブセ）……引き絞りて、切って放つ」

ひき-しまる 引締る【動四自】强くしまる。しまりて、ゆるまず。

ひき-しむ 引締む【名】【動下二他】㊀引張（ヒッパ）りて締む。强く締む。ひっしむ。狂言（鎧）「紐（ヒモ）の上帶引き締めて」㊁締めて、ゆるみなきやうにす。心をしっかりとす。ひっしむ。曾我會稽山「御兄弟の御事を身に引き締めて賴みしが」

ひ-ぎしやう 火起請【名】起請の一種。鐵火を握りて、手の爛るると然らざるとによりて、曲直を決するもの。鐵火。

ひき-しやうじ 引障子【名】鴨居と敷居との溝に嵌めて、引き動かし、左右へ開閉するやうにせる障子。

ひき-しりぞく 引退く【動四自】しりぞく（退く）㊀に同じ。十訓「貞任等堪へずして、引き退く」太平記「戰はで引き退きぬと覺ゆるぞ」

ひき-しりぞく 引退く【動下二他】引き退くやうにす。退き去らしむ。ひきのく。

ひき-しろふ 引合ふ【動四他】㊀さまざまに引く。引張（ヒッパ）りあふ。ひこじらふ。ひこづらふ。［古語］源氏「脫がじとすまふを、とかく引きしろふほどに」㊁引張（ヒッパ）りて長くす。ひきずる。のばす。ひこじらふ。［古語］諸藝太平記「間（マ）に合（アヒ）の噓ばかり言うて、半年ほどひきしろふ內に」

ひき-すう 引据う【動下二他】『ひき（引）は接頭語』㊀すう（据う）㊀を强めていふ語。ひっすう。祝詞「初穗は、汁にも、穎（カヒ）にも、千稻（チイネ）・八千稻（ヤチイネ）に引き居（ス）ゑて」㊁すう（据う）㊁を强めていふ語。千載「矢形尾の眞白の鷹を引き据ゑて宇陀の鳥立（トダチ）を狩り暮しつる」

ひき-すぐ 引過ぐ【動下二自】『ひき（引）は接頭語』すぐ（過ぐ）を强めていふ語。源氏「上達部（カンダチメ）なども、道をよぎつつ引過ぎて」

ひき-すつ 引捨つ【動下二他】㊀捨つ。枕「死にければ、門の外に引き捨てつ」㊁引き行き、又は引き拔きなどして捨つ。新六「穗に出でぬ夏田にまじるひえ草の引き捨てられて世をや過ぎなん」

ひき-すつ 彈捨つ【動下二他】彈きて、そのまま捨ておく。

ひき-すて 彈捨【名】彈き捨つること。俳諧新選（比松）「彈捨の琴のゆるみや五月雨」

ひき-すます 彈澄す【動四他】琴などを、心も澄むばかりに彈く。源氏「廣陵といふ手を、あるかぎり彈きすまし」

ひき-ずみ 引墨【名】『「墨を引く」を見よ』㊀書狀の封じ目に、墨を引くこと、又その墨。夫木「このたびは見てかへしけり手馴れつつ引墨たがふ文（フミ）のうはがき」㊁眉を剃りたる跡に、墨を引くこと、又その墨。藤簍歌「眉の引墨・紅（ベニ）落ちて」

ひき-ずり 引摺【名】㊀引き摺ること。㊁『著物の裾を引き摺る義』しやれなまめきて働かぬ婦人を嘲りていふ語。浮世風呂「かかあ殿は、長屋中で、評判の引摺よ」㊂ひきずりもち（引摺餅）の略。㊃次條の略。［京都・大阪の語］㊄長びかすること。和合人「數度せがんでも、埒明かず。……ちとひき摺が長過ぎよう」

ひきずり-げた 引摺下駄【名】㊀下駄を引き摺るやうにして歩むこと。㊁のめり下駄、又その粗末なるもの。ひきずり。［京都・大阪の語］

ひきずり-こむ 引摺込む【動四他】㊀引き摺りて、內へ入らしむ。八笑人「ひっ捕へ、有無を言はず、下座（ゲザ）へ引摺り込む」㊁竊む。取り込みて、わが有とす。梅曆「畠山樣の寶物を引摺り込んで」

ひきずり-ごゑ 引摺聲【名】引き摺るが如きうめき聲。

ひきずり-だす 引摺出す【動四他】引き摺りて、外に出でしむ。八笑人「行（イ）って引きずり出して來さっし」

ひきずり-たふす 引摺倒す【動四他】引き摺りて倒す。狂言（胸突）「ひきずり倒して、肋骨が打折れた」

ひきずり-ちやばん 引摺茶番【名】茶番狂言の一。數人一團となりて、他人の家に到り、その家の器物を用ひて、種種の趣向を盡すもの。おしかけちやばん。

ひきずり-どうふ 引摺豆腐【名】胡麻味噌を著けて食する湯豆腐。

ひきずり-なます 引摺鱠【名】鰹を鱠にせる料理。［駿河國の方言］

ひきずり-ばおり 引摺羽織【名】江戸時代の初に、醫師又は廓通（クルワガヨヒ）の若き人などの著用せし、丈長き羽織。ながばおり。

ひきずり-もち 引摺餅【名】歲末に、餅搗に必要なる諸道具を携へ、賃銀を受けて、依賴者の家に到り、直ちに、その場にて、新年の餅を搗き上ぐること、又その餅。ひきずり。

ひき-ずる 引摺る・曳摺る【動四他】㊀地面・疊などの上を摺るやうに、長く垂れて曳き行く。一代男「竹杖を曳き摺る」㊁强ひて引き行く。㊂長びかしむ。八笑人「舞臺より、樂屋ごっこを、おもに樂み、幕を引きずる事、甚だ長し」

ひき-ずる 曳摺る・引摺る【動四自】長く垂れて、地面・疊などと摺れあふ。

ひき-そばむ 引側む【動下二他】身に引き寄せてそばむ。ひっそばむ。著聞「小き太刀を引きそばめて持ちたりけるを」

ひき-そふ 引添ふ【動四自】『ひき（引）は接頭語』そふ（添ふ）に同じ。ひっそふ。

ひき-そふ 引添ふ【動下二他】引き寄せて添へ加ふ。ひっそふ。萬葉「大船（オホブネ）に小船（オブネ）引き副へかづくとも志賀の荒雄（アラヲ）にかづきあはめやも」假名手本忠臣藏「その駕籠に引き添うて」

ひき-そへ 引副【名】次條の略。

引副の馬【句】馬を進物とする時、鞍置馬に副へて進むる裸馬。ひきそへ。

ひき-ぞめ 引染【名】布帛を染むるに、擴げ張り、刷毛（ハケ）にて、染汁を引くこと。

ひき-ぞめ 彈初【名】㊀彈き初むること。初めて彈くこと。㊁新年になりて、初めて、琴・三味線などを彈くこと。一月二日に、めでたき曲を彈く習にて、主に遊藝の師匠又は遊廓などに行はる。

ひきそろへ-いと 引揃絲【名】二本以上の絲を引き合はせ、これに撚（ヨリ）を掛けず、そのまま使用するもの。

ひき-た 引板【名】『ひきいた（引板）の略』なるこ（鳴子）に同じ。［古語］萬葉「衣手（コロモデ）に水澀（ミシブ）つくまで植ゑし田をひきたわが延（ハ）へ守れる苦し」

ひきだ 【名】［動］ひきがへる（蟇蛙）を云ふ。［陸奧國の方言］

ひきだ-あはぢのじよう 引田淡路掾【名】

〔人〕淨瑠璃操（アヤツ）の祖。京師の人。技を後陽成天皇の御前に演じて、淡路掾を授けらる。

ひき-だい 引臺【名】芝居の大道具の一。長さ四尺、幅三尺、厚さ四寸ほどの臺の裏に、車四箇を取り附け、これに綱を結び附けて、本舞臺に置き、役者の乘りて、見（ミ）えをなしたるまま、左右何れかに引き込むやうに仕掛けたるもの。引道具と同じく、中村傳七の考案に係る。

ひき-だうぐ 引道具【名】芝居の大道具の一。背景その他の道具を車に附けて、左右何れかに引きて、場面に變化を與ふるもの。正德の頃、中村座の作者中村傳七の考案に係り、多くは、廻（マハ）り舞臺の備なき芝居にて用ひたり。四方のあか「一夜（ヒト）明くれば賑やかに、……、梅と柳の引道具、春の初の初芝居」

ひきだ-かげかね 疋田景兼【名】〔人〕**ひきだぶんごらう**（疋田文五郎）に同じ。

ひきだ-かげりう 疋田陰流【名】劍術の流派の一。疋田文五郎景兼の創めしもの。疋田流。

ひき-たがふ 引違ふ【動下二自】**ひきちがふ**（引違ふ）㊀に同じ。榮花「兄君たちを、……ひきたがへ、さまざま、いみじう」増鏡「いかでかひきたがふるやうはあらんと宣はせて」

ひき-だし 引出・抽出【名】㊀ひきだすこと。㊁簞笥・机・戸棚などに、横に拔差（ヌキサシ）し得るやうに嵌め込みたる匣。〔抽斗〕

ひきだし-こぎって 引出小切手【名】〔商〕當座預金を引き出すに用ふる小切手。

ひきだし-ちがひ 引出違【名】**おもひちがひ**（思違）に同じ。

ひき-だす 引出す【動四他】㊀**ひきいだす**（引出だす）に同じ。和合人「愚慢を引き出して行く」八笑人「安波（アハ）公・安波公と、あんまり安っぽく引出すなえ」㊁預金を取り戻す。㊂他より金錢の融通を受く。

ひきた-ずし 匹田鮨【名】鮨の一種。

ひき-たつ 引立つ【動四自】㊀勢よくなる。盛んになる。景氣づく。おこる。新六「柚山のあさ木の柱ふし繁み引き立つべくもなきわが身かな」㊁特によく見ゆ。きはだつ。ひったつ。㊂次條に同じ。謠曲（正尊）「正尊、かなはじと引き立ちけるを、辨慶追っ詰め、戰ひけるが」

ひき-たつ 引立つ【動下二自】浮足になり初む。逃足になる。退きかかる。平家「引き立てたる勢（セ）なれば、馬の足を立てかねて」太平記「混引（ヒタヒキ）に引き立てて、曾て後（ウシロ）を顧みず、暫く支へたりけれども、引き立てたる大勢なれば、一足も留めず」

ひき-たつ 引立つ【動下二他】㊀引きて立たしむ。ひきおこす。ひったつ。祝詞「耳振り立てて聞く物と、馬牽き立てて」落窪「御車どもは、梯殿（ハシドノ）に引き立てて」㊁戸・障子などを、横に引き動かして閉づ。枕「若き人人おはしけりとて、引き立てて去（イ）ぬる後に」㊂引き立つやうにす。勇み立たしむ。はげます。鼓舞す。㊃力を添へて助く。ひいきにして、便宜をはかる。擧げ用ふ。登庸す。十訓「信光法眼引き立つる人もなぎさの捨小舟さすがに法（ノリ）のおしでをぞ待つ と詠めりければ、法印に申しなされけり」㊄强ひて引き連れ行く。ひったつ。太平記「逃ぐる大勢に引き立てられて」㊅立派に引き延（ハ）ふ。盛衰記「緋（アケ）の玉垣亂れつつ、引き立てたる標繩（シメナハ）も、絶絶（タエダエ）なり」

ひき-たつ 彈立つ【動下二他】盛んに彈く。夫木「よりあはせ鳴く蟲の音を琴柱（コトヂ）にて彈き立てたりな秋の調に」

ひき-たつ 引斷つ【動四他】引張（ヒッパ）りて斷つ。ひきちぎる。榮花「御几帳の綻ひきたち亂れたまふを」

ひき-たて 引立【名】引き立つること。落窪「國の事、いとよくなしたりければ、引立よくて、やがて播磨になしつ」赤染衞門集「よからばぞよききさまさるといらふべき引立もなき心地こそすれ」

ひき-たて【名】〔植〕**うつぎ**（空木）に同じ。

ひきたて-えぼし 引立烏帽子【名】揉（モミ）烏帽子の一種。後の角を引き立てたるやうに作れるもの。紙にて薄く作り、大皺（サビ）にして、綟塗（ヌリ）をし、兜の下にかぶりて用ふ。なえくたえぼし。盛衰記「縫物の紺の直垂（ヒタタレ）に、同じ毛の鎧、引立烏帽子を著けて」

ひきたて-なほし 引建直【名】建物を壞し、他の土地に移して、建て直すこと。

ひきたて-むしろ 引立筵【名】**ひきがけむしろ**（引懸筵）に同じ。

ひき-たふし 引倒【名】㊀引き倒すこと。㊁**ひきおとし**（引落）㊁を見よ。「を見よ。

ひき-だふし 引倒【名】「贔屓（ヒイキ）の引倒」

ひき-たふす 引倒す【動四他】引張（ヒッパ）りて倒す。ひきこかす。ひっこかす。ひったふす。倒す。

ひきだ-ぶんごらう 疋田文五郎【名】〔人〕劍術家又槍術家。神陰（シンカゲ）流の祖、上泉（カウヅミ）伊勢守の高弟。名は景兼。師と共に諸國を修業し、その妙技、豐臣秀次に聞え、召されて、御前試合をなししことあり。疋田陰流劍術及び疋田流槍術の祖。

ひき-だめ 挽溜【名】挽茶を挽きて、溜めおく容器。

ひきた-やき 曳田燒【名】安政三年より明治年間まで、因幡國八頭（ヤヅ）郡曳田村にて燒き出しし陶器。現今は、製法を改良して、八上（ヤカミ）燒といふ。ひけたやき。

ひきだ-りう 疋田流【名】㊀槍術の流派の一。疋田文五郎景兼の創めしもの。㊁**ひきだかげりう**（疋田陰流）の略。

ひき-たれ 引垂【名】㊀鳥類を料理するに、その胸を割きたるもの。㊁**ひきずり**（引摺）㊁を云ふ。〔備後國福山の方言〕

ひきたれ-おどし 引垂嚇【名】『引垂㊁を驚かすとていふ』秋の初、俄かに寒くなること。〔備後國福山の方言〕

ひきたれ-やき 引垂燒【名】雉子の引垂を、身の中に少しづつ赤み有る樣に燒き、切りて食ふ料理。「る木地。

ひき-ぢ 挽地【名】挽物細工をなすに用ふ

ひき-ちがひ 挽違【名】木口の矩方なる木を、斜に左右同形に挽き割ること、又その挽き割りたる木。この挽割方を、長押（ナゲシ）挽ともいふ。

ひきちがひ-おし 引違押【名】船の艪を押すに、右方の者の前方へ突く時、左方の者は後方へ引き、又、右方にて引く時は、左方にては突き、左右常に相反して動作すること。

ひき-ちがふ 引違ふ【動下二他】『ひき（引）は接頭語』㊀道理・約束などに背きて爲す。ひきたがふ。盛衰記「家の嫡嫡といひ、旁（カタガタ）御理運にておはせしを、引違へられし事」十訓「東の陣より出すべしと仰せられけるに、……引違へて、西より出しければ」㊁交叉せしむ。うちちがふ。太平記「鎧の袖と袖とを引違へて、むずと組んで」

ひき-ちぎる 引きちぎる【動四他】引張（ヒッパ）りてちぎる。ひっちぎる。ひきたつ。

ひき-ちゃ 碾茶・挽茶【名】製茶を碾きて粉にせるもの。熱湯を注ぎ、攪きまぜて飲み、又、菓子類にも應用す。濃茶（コイチャ）と薄茶との別あり。うんちゃ。抹茶。

ひき-ちゃ 引茶【名】季の御讀經（ミドキャウ）の時、僧に賜ひし茶。行茶。河海抄「季の御讀經（ミドキャウ）……引茶とて、僧に茶を引かるなり」

ひきちゃ-らくがん 挽茶落雁【名】干菓子の一。挽茶を入れて製したる落雁。

ひき-ぢゅうばこ 引重箱【名】引肴を盛れる重箱。宵庚申「初獻（シヨコン）の肴は、鯖の足一切當（ヒトキレアテ）の引重箱」

ひき-ちらす 引散す【動四他】『ひき（引）は接頭語』ちらす（散す）を强めていふ語。八笑人「引散しましたを、少少拾ひ集めて」

ひき-つ 引津【名】〔地〕筑前國糸島郡小富士村の邊の古稱なるべしといふ。萬葉「引津亭（トマリ）泊レ舶之作歌」

ひき-つぎ 引繼・引次【名】引きつぐこと。

ひき-つく 引附く【動下二他】㊀固く取附く。引き寄せ近づかしむ。源氏「小鳥、しるしばかり引き附けさせたる荻の枝など」㊁或事柄にかこつく。附會す。

ひき-つく 引附く【動下二自】急癇（キフカン）を發す。

ひき-つく 彈附く【動下二他】ひく(彈く)を強めていふ語。十分に彈く。源氏「箏(ウツ)の琴……、今の世に聞えぬ筋彈きつけて」

ひき-つぐ 引繼ぐ・引次ぐ【動四他】引き受けて、その後を繼ぐ。うけつぐ。

ひき-つくす 彈盡す【動四他】十分に技能を發揮して彈く。源氏「調(シラベ)一つに手を彈きつくさんことだに、はかりなきものなり。いはんや、多くの調、煩しき曲(ゴク)多かるを」

ひき-つくろふ 引繕ふ【動四他】『ひき(引)は接頭語』つくろふ(繕ふ)を強めていふ語。枕「聲ひきつくろひて」

ひき-つけ 引附・引付【名】㊀引き附くること。㊁事有りたる時、後日の例證とするために、委細に書き留め置く文書。記錄。庭訓往來「借二給古日記法例引付一」㊂ひきつけしゆう(引附衆)の略。園太曆「引付高駿河守入道・大高伊豫前守重成、爲二兩頭人一行之」㊃ひきつけざしき(引附座敷)の略。㊄ひきつけげた(引附下駄)の略。㊅きふかん(急癇)に同じ。

ひきつけ-いうひつ 引附右筆・引付右筆【名】鎌倉幕府の職制の一。政所(マンドコロ)の寄人(ヨリウド)の中より兼ね、引附衆の各番ごとに配屬し、政務裁許の座に祗候し、主として書記を掌りしもの。引附執筆。

ひきつけ-かいかふ 引附開闔・引付開闔【名】室町幕府の職制の一。引附の開闔。引附右筆中の宿老、これに任じ、署務の整理を掌りしもの。

ひきつけかいかふ-だい 引附開闔代・引付開闔代【名】室町幕府の職制の一。引附開闔に差支ある時、代りて、その事務を掌りしもの。

ひきつけ-がしら 引附頭・引付頭【名】ひきつけとうにん(引附頭人)に同じかるべし。北條九代記「政村……爲二引附頭一」

ひきつけ-かた 引附方・引付方【名】引附㊁の取扱に關する部面。庭訓往來「於二引附方一、可レ被レ逢二御沙汰一」

ひきつけかた-ぶぎやう 引附方奉行・引付方奉行【名】ひきつけしゆう(引附衆)に同じ。

ひきつけ-げた 引附下駄【名】駒下駄の一種。男子のは、桐の白木(シラキ)、婦人のは、漆塗もしくは白木を用ひ、齒を鋸にて引き附け、表附にせるもの。ひきつけ。

ひきつけ-ごん-の-ごんのとう 引附權權頭・引付權權頭【名】室町幕府の職制の一。引附權頭の次席にて、引附頭人及び引附權頭に差支ある時、代りて、その事務を行ひしもの。

ひきつけ-ごんのとう 引附權頭・引付權頭【名】次條に同じ。

ひきつけ-ごん-の-とうにん 引附權頭人・引付權頭人【名】室町幕府の職制の一。評定衆中より兼ね、引附頭人の次に位し、引附頭人に差支ある時、代りて、その事務を行ひしもの。外樣(トザマ)大名中より任ず。

ひきつけ-ざしき 引附座敷【名】遊女屋にて、遊客を通し置き、女郎を連れ來りて面會せしむる座敷。ひきつけべや。ひきつけ。

ひきつけ-さた 引附沙汰・引付沙汰【名】鎌倉・室町兩幕府時代に、引附衆の座に訴人・論人を召して、對決せしめ、引附衆一同評議して、是非を判定せしこと。

ひきつけ-しつぴつ 引附執筆・引付執筆【名】ひきつけいうひつ(引附右筆)に同じ。

ひきつけ-しゆう 引附衆・引付衆【名】『ひきつけ(引附)㊁を見よ』鎌倉・室町兩幕府の職制の一。評定衆の補助として、訴訟を聽斷し、庶務を施行し、兼ねて、政所(マンドコロ)の簿書の註記を掌りしもの。定員、鎌倉時代には、初は五人、後、增減ありたれども、多きは十五人とし、これを五番に分ちて、各番に頭人を置き、室町時代にも、十餘人を置きて、五番に分ちたり。引附奉行。引附内談衆。ないだん(内談)參照。

ひきつけ-ていちゆう 引附庭中・引付庭中【名】引附沙汰の時の庭中言上。後愚昧記「今日武家評定始也。引附庭中等、同始二行之一」

ひきつけ-とうにん 引附頭人・引付頭人【名】鎌倉・室町幕府の職制の一。引附衆の首席。鎌倉時代には、北條氏の一家門にして、評定衆たる者より選補するを常とし、又、時に、引附衆より補せしこともあり。室町時代には、足利氏の一門にして、評定衆たる者を補し、頭人の次位たる權頭人(ゴントウ)は、外樣(トザマ)大名中より選任せり。

ひきつけ-の-とう 引附頭・引付頭【名】前條に同じ。

ひきつけ-ぶぎやう 引附奉行・引付奉行【名】次條に同じ。

ひきつけ-ぶぎやうにん 引附奉行人・引付奉行人【名】ひきつけしゆう(引附衆)に同じ。

ひきつけ-べや 引附部屋【名】ひきつけざしき(引附座敷)に同じ。

ひき-つたふ 彈傳ふ【動下二他】學びて彈く。傳へて彈く。源氏「琴(キン)……、延喜の御手より彈き傳へたること」

ひき-つち 引土【名】掘り崩して引きならしたる土。太平記「山を崩し、木を伐り捨てて、地を引くに、……一首の歌を書きて、引土の上にぞ立てたりける」

ひき-つづく 引續く【動四自】『ひき(引)は接頭語』つづく(續く)を強めていふ語。源氏「よそほしう引續きて立ちわづらふ」

ひき-つづく 引續く【動下二他】『ひき(引)は接頭語』引きつづくやうにす。つらぬ。新六「長閑なる御代の長橋とりもあへず引きつづけても渡る白馬」

ひき-つつむ 引包む・引裹む【動四他】『ひき(引)は接頭語』つつむ(包む)㊀㊁を強めていふ語。太平記「武藏の七黨七千餘騎、東西より引裹みて、眞中に……取込め」

ひき-づな 引綱【名】物に結びつけて引く綱。ひきなは。萬葉「彥星のつま呼ぶ船の引綱の絕えむと君をあが思(モ)はなくに」天神記「牛の引綱たぐり寄せ」

ひき-つぼぬ 引局ぬ【動下二他】引き廻してつぼぬ。小く圍ふ。〔古語〕蜻蛉「おのがじし引きつぼねなどしつつあめる中に」榮花「屛風・几帳ばかりを引きつぼねつつ、ひまもなくて居たり」

ひき-つむ 引抓む【動四他】『ひき(引)は接頭語』つむ(抓む)を強めていふ語。源氏「ひきつみなどして敎へたまへ」

ひき-つむ 引詰む【動下二他】㊀引張(ヒツパ)りて詰む。ひつつむ。㊁「差詰(サシツ)め・引詰め」を見よ。

引詰め、差(サシ)詰め【句】「差詰(サシツ)め、引詰め」に同じ。

ひきつめ-がみ 引詰髮【名】ひつつめがみ(引詰髮)を見よ。

ひきつめ-たぼ 引詰髱【名】ひつつめたぼ(引詰髱)を見よ。

ひき-つらなる 引連なる【動四自】『ひき(引)は接頭語』つらなる(連なる)を強めていふ語。玉葉「庭もせにひきつらなれる諸人の立ち居る今日や千世の初春」

ひき-つり 引攣【名】引きつること。すぢつまり。痙攣。

ひき-つる 引攣る【動下二自】筋つりて痛む。痙攣起る。

ひき-つる 引連る【動下二他】身に近く連る。ひきゐ行く。引き具す。ともなふ。源氏「御子供、六人ながら引連れて」

ひき-づる 引鶴【名】春になりて、寒地に歸る鶴。ひきどり(引鳥)參照。

ひき-づゑ 引杖【名】杖をひきずり行くこと、又その杖。宇治「侍ども、引杖して、……守りけるを」

ひき-て 引手【名】㊀障子・襖(フス)などに取り附けたる金具又は緒など。開閉ごとに、手を掛くるに供す。ひきもの。和名「鐶鈕、斗乃比岐天」義經記「御障子の引手」㊁導く人。誘ふ人。㊂はしらびき(柱引)㊀に同じ。㊃みづつき(承鞚)に同じ。

ひき-て 彈手【名】㊀彈く人。一代男「聲の美しさ、彈手は上手」㊁巧みに彈く人。

ひき-で 引手【名】右の手。(押手に對して)〔射術の語〕夫木「梓弓ひきでの山のほととぎす雲を宿とやおして入るらん」

ひき-で 引出【名】㊀引き出づること。紀「かなぎ附け吾が飼ふ駒はひきでせず吾(ア)が飼ふ駒を人見つらむか」㊁ひきでもの(引出物)の略。「聟(ムコ)引出」

ひきて-いた 引手板【名】ひきて(引手)㊀の用に供する板。

ひきて-がなもの 引手金物【名】引手㊀

の用に供する金物。

ひきてーぢやや　引手茶屋【名】遊廓に附屬して、遊客を妓樓に案內する茶屋。

ひきでーもの　引出物・曳出物・牽出物【名】『古、祝宴などに、馬を庭上に引き出でて、客に贈りしよりいふ。**ひく**（引く）⑲參照』饗宴の時、主人より來客へ贈る物。武家にては、初獻（シヨコン）に馬、二獻に太刀、三獻に鎧又は腹卷、四獻に弓・征矢（ソヤ）、五獻に沓・行縢（ムカバキ）、六獻に刀（鞘卷）、七獻に小袖の七種を正式とし、これを式の引出物と呼びたり。おひき。ひきもの。江次第「遣ニ曳出物馬二匹并送物ニ」北山抄「次尊者牽出物（馬二疋、若尊者好ㇾ鷹者、馬一疋、鷹一聯、加ㇾ犬）」

ひきてーやま　引手山【名】〔地〕大和國羽易（ハガヒ）山の一部なるべしといふ。萬葉「衾路（フスマヂ）を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし」

ひきーと　低人・短人・侏儒【名】**ひきひと**（低人）の略。〔古語〕紀「侏儒、ヒキト」

ひきーと　引砥【名】小刀にて削りたる上、更に磨擦して細末とし、菜種油と共に指頭に著けて、蒔繪の金銀粉の面を磨き、光澤を出すに用ふる砥石。

ひきーど　引戸【名】㊀敷居と鴨居との溝に嵌めて、引き動かし、左右へ開閉するやうに作れる戸。やりど。（開戸（ヒラキド）に對して）**ひきわけど**（引分戸）參照。㊁乘物の出入口に、前記の引戸を著けたるもの。㊂『英 Sliding caisson』船渠出入の口に取り附け、底部の軌條によりて、渠壁內に進退して、その開閉に供へたる門扉。木材又は鐵材にて造り、形狀は船體に類す。

ひきどーあじろ　引戸網代【名】全部を網代にて張り、左右の出入口には、簾を垂ることなく、引戸を附けたる乘物。

ひきどーかご　引戸駕籠【名】出入口には、簾などを垂るることなく、引戸を取り附けたる駕籠。身分低き者は用ひざりき。權門駕籠。（垂（タレ）駕籠などに對して）

ひきーとく　引解く【動四他】引張（ヒッパ）りて、結び目或は封じ目などをほどく。ひきほどく。源氏「御文取り入る。……ひきときて御覽ぜさす」同「中將の帶をひきときて」

ひきーどくこ　引獨鈷【名】襖（フスマ）の緣の附け方の一。その地を、縱緣に組み合はするもの。

ひきどーせき　引戸堰【名】『英 Draw door weir』河川もしくは水路中、堰を設くべき位置に、規則正しく間隔を置きて、一列の杭枠或は橋臺を設け、その間隙を、戶又は板にて塞ぎ、その上下によりて、堰の效力を十分ならしむる裝置の堰。

ひきーととのふ　引調ふ【動下二他】引張（ヒッパ）りて、揃はしむ。源氏「御馬四十疋、……、次次に引きととのふる程」

ひきーととのふ　彈調ふ【動下二他】彈きて、調子を正す。枕「まだ音（ネ）も彈きととのへぬ琴を」

ひきーとどまる　引留まる【動四自】進まずに留まり殘る。ふみとどまる。太平記「恥ある兵は、引留まりて、師直の前後に控へ」

ひきーとどむ　引留む・引止む【動下二他】引きてとまらす。ひきとむ。源氏「許したまひても、又ひきとどめたまひつつ」

ひきとーとぎ　引砥磨【名】引砥にて、蒔繪に光澤を出すこと。

ひきーとほし　引通【名】㊀引き通すこと。㊁殊に長き藺草（ヰグサ）を用ひ、中途にて繼がず、揃へて織りたる備後表。

ひきーとほす　引通す【動四他】㊀引きて、中を通らしむ。㊁最後まで續けて引く。㊂最後まで繼續す。始終一貫す。

ひきーとむ　引留む・引止む【動下二他】**ひきとどむ**（引留む）に同じ。新六「さして入る山の端逃げよあかぬまに引留めがたき弓張の月」

ひきーどん　引どん【名】**ばんこ**（番箇）を見よ。

ひきーとり　引取【名】引き取ること。うけとり。狂言（內沙汰）「牛をひきとりにせう」

ひきーどり　引鳥【名】渡鳥（ワタリドリ）の、春になりて、元の土地に歸りゆくもの。續猿蓑（支浪）「引鳥の中にまじるや田螺取（タニシトリ）」

ひきとりーいうよきん　引取猶豫金【名】〔商〕『英 Contango』受渡期日の到來したる現物の受渡を猶豫せんとする買方より、賣方に出す日步（ヒブ）。買方弱ければ、日步從ひて高し。（引渡猶豫金に對して）〔取引所の語〕

ひきとりーて　引取手【名】次條に同じ。

ひきとりーにん　引取人【名】引き取る人。受け取る人。ひきとりて。

ひきーとる　引取る【動四自】㊀引き退きて歸り去る。まかる。和合人「直（スグ）に出掛けるといふ事にも行（イ）くめえから、一まづ拙宅まで引取って」㊁昔の戰にて、敵方の人數が退く。（引出づに對して）

ひきーとる　引取る【動四他】㊀引張（ヒッパ）りて取る。うばふ。ひっとる。枕「そばえたる小舍人童（コドネリワラハ）などに引取られて泣く」㊁引き受けて、手元に置く。自分の方に受け取る。八笑人「これからは、私どもが引取りますからは」㊂引き受けて、己が相手とす。盛衰記「向の岸を見るに、矢筈を取りたるもの、四五百騎と見えたり。瀨踏する者あらば、定めて、引取り、射んずらん」㊃「息（イキ）を引取る」を見よ。大織冠「引取る息や波の泡、終にはかなくなりにけり」

ひきーとる　彈取る【動四他】彈くことを習ひ取る。源氏「昔より、箏（サウ）は、女なん彈き取るものなりける」狹衣「いとさとく美くしう彈きとらせ給ひつつ」

ひきーなう　引綯・曳綯【名】**ひきなは**（引繩）㊂の音便。

ひきーながし　彈流【名】芝居にて、めりやすの合方（アヒカタ）を彈捨にして、次の臺詞（セリフ）にかかること。

ひきーながす　引流す【動四他】塗物などに液を塗りて流す。

ひきーながす　彈流す【動四他】門附（カドヅケ）をしながら、街上を彈きあるく。ながす。

ひきーなげ　引投【名】相撲（スマフ）の手の一。四手（ヨツ）に組み、相手の差手を抱へ込みたる上手にて、褌を引き、片手に前褌を取り、體を斜に構へて、わが體を廻しつつ引き倒すもの。

ひきーなは　引繩【名】㊀物を引き寄するに當り、その物に取り附けたる繩。ひきづな。雙蝶蝶曲輪日記「引窓（ヒキマド）……、窓の引繩、三尺殘して切るが古例」㊁次條の略。〔曳繩〕

ひきなはーづり　引繩釣・曳繩釣【名】船より、餌又は擬餌鉤を附けたる長き緡絲を垂れて、水中を曳きまはり、餌に附きたる魚を捕ふる方法。こぎづり。ひきなは。ひきなう。

ひきーなびく　引靡く【動下二他】引き寄せて靡かしむ。五人女「文（フミ）にして嘆き、……引きなびけてはまらせんと、數數書きくどきて遣され」

ひきーなほし　引直衣【名】直衣の、裾（スソ）を、裾（キヨ）の如く三尺餘も長くし、主上の召させたまひしもの。さげなほし。**はなちなほし**（放直衣）參照。右京大夫集「中宮の御方へ、內の上渡らせたまへりし御引直衣の御姿」

ひきーなほす　引直す【動四他】『**ひき**（引）は接頭語』**なほす**（直す）を强めていふ語。源氏「御木丁引直しまゐらす」

ひきーならす　彈馴す【動四他】彈きて、馴るるやうにす。源氏「なつかしう彈きならしたまひし爪音」

ひきーならぶ　引並ぶ【動下二他】引きて並ばしむ。祝詞「鈴・衣笠（キヌガサ）・御馬を引き並べて」

ひきーなり　侏儒【名】**ひきびと**（低人）に同じ。〔古語〕名義抄「侏儒、ヒキウド・タケヒキ・ヒキナリ」

ひきーにく　挽肉【名】器械にて、纖維を挽き切りて、老幼、その他消化力弱き人に適するやうにせる牛・豚肉又は鷄肉など。

ひきーにげ　轢逃【名】自轉車・自働車などが、人を轢きて、そのまま逃げ去ること。

ひきーぬき　引拔【名】㊀引き拔くこと、又引き拔きたること、又その物。㊁芝居にて、俳優が、假裝せる外面の衣裳を脫ぎ捨てて、その內側の衣裳を露出して、實際の身の上を示すこと。八笑人「引拔で、上の襤褸（ボロ）が、ばらりと落ちる」㊂**ぬきめあみ**（拔目編）に同じ。

ひき-ぬき-いしやう　引拔衣裳　【名】前條㊁に著用する衣裳。八笑人「上の引拔衣裳は、こっちで、袷を一枚引っぽどいて拵(セコ)へずばなるめえ」

ひきぬき-ぶすま　引拔襖　【名】芝居の大道具の一。舞臺の趣を變化せしむるため、その襖の地(ヂ)のみを引き拔き、その跡に、その襖の繪のやうに見せかけたる立木などを殘して、そのまま道具建として用ふるもの。狂言作者辰岡萬作の創意に係る。

ひき-ぬく　引拔く　【動四他】引張(ヒッパ)りて拔き取る。力をこめて拔く。ひっこぬく。ひんぬく。狂言(粟出口)「引き拔いて、鎺元(ハバキモト)黑かるべい」

ひき-ぬの　疋布　【名】疋にしてある布。ひきぎぬ(疋絹)參照。

ひき-ぬらす　引きぬらす　【動四他】『ぬらす』を見よ』引き伸して、ぬらぬらと靡かす。〔古語〕萬葉「ぬば玉の吾が黑髮を引きぬらし亂れて吾は戀ひわたるかも」

ひき-ねぢる　引捩る　【動四他】『ひき(引)は接頭語』ねぢる(捩る)を强めていふ語。ひんねぢる。

ひき-の　引野　【名】〔地〕壹岐國にありといふ野。古今「梓弓ひき野のつづら末つひにわが思ふ人に言(コト)のしげけん」

ひき-の-かさ　蟇笠　【名】〔植〕㊀毛茛(キンポウゲ)科に屬する草。高さ三四寸、根葉は三出複葉にして、小葉は二三に裂け、上部の葉は細長し。花は黃色、田芥子(タガラシ)のに似たり。濕地の野に生ず。㊁たがらし(田芥子)を云ふ。〔西國の方言〕

ひき-のく　引退く　【動四自】ひきしりぞく(引退く)に同じ。

ひき-のく　引退く　【動下二他】㊀引張(ヒッパ)りて、その場より退かしむ。㊁しりぞかしむ。ひきはなす。遠ざく。ひきしりぞく。榮花「次に、又、少しひきのけて、上(ウヘ)の御料よそひたり」義經腰越狀「母は、娘を引き退げて」

ひき-のこす　引殘す　【動四他】引き拔かずして殘す。續拾遺「神山に引き殘さるる葵草時に逢はでも過ぎにけるかな」

ひき-のこす　挽殘す　【動四他】鋸にて引き切るに、一部分は、切らずに殘す。八犬傳「頃は卯月の夏霞、挽き殘したる鋸山」

ひき-のし　引熨斗　【名】洗濯せる布帛などの皺を、火熨斗(ヒノシ)にて延ばすこと。

ひき-の-ちんきやく　【名】〔植〕いぬなづな(犬薺)に同じ。

ひき-のばし　引延・引伸　【名】㊀引き延ばすこと。㊁『英 Enlargement』原板より擴大して、寫眞を複寫すること、又その寫眞。通常、臭素紙を用ひて製し、その器械及び製法に、暗室用・日光用の二種あり。

ひきのばし-しやしん　引延寫眞・引伸寫眞　【名】前條㊁の寫眞。

ひき-のばす　引延ばす　【動四他】㊀引張(ヒッパ)りて延ばす。ひきのぶ。㊁『ひき(引)は接頭語』のばす(延ばす)を强めていふ語。㊂原板より擴大して、寫眞を複寫す。

ひき-の-ひたひ-ぐさ　細辛　【名】〔植〕ろすばさいしん(薄葉細辛)に同じ。〔古認〕和名「細辛、比岐乃比多比久散」

ひき-のぶ　引延ぶ　【動下二他】ひきのばす(引延ばす)㊀に同じ。源氏「日日に、物をひきのぶるやうにおよすげたまふ」

ひき-のぼす　引上す・引登す　【動下二他】引きてのぼらしむ。ひきあぐ。

ひき-のぼる　引上る・引登る　【動四自】㊀引きてのぼりゆく。引きてさかのぼる。萬葉「おし照る難波の埼に引き登る赤(アケ)のそほ舟」㊁退きて、山の上などにのぼる。太平記「追ひ立てられて、……傍(ソバ)なる峯へ引き上りけるを」

ひき-ば　引場・引塲　【名】敗北して引き退くに都合よき場所。謠曲(熊坂)「爰こそ、究竟(クッキャウ)の所なれ。引場も、四方に道多し」

ひき-はがす　引剝す　【動四自】引張(ヒッパ)りて剝す。力をこめて剝す。ひっぱがす。ひきめくる。ひんめくる。

ひき-はぎ　引剝　【名】おひはぎ(追剝)に同じ。〔古語〕著聞「京都にては强盜をし、邊土にてはひきはぎをして」

ひき-はく　引佩く　【動四他】身に引き寄せて佩(オ)ぶ。宇治「太刀ひきはきて」

ひき-はぐ　引剝ぐ　【動四他】引張(ヒッパ)りて剝ぐ。力をこめて剝ぐ。ひんめくる。ひっぱぐ。はぐ。

ひき-はこふ　引きはこふ　【動下二他】『はこふを見よ。はこゆの假名の方正しともいふ』身に引き寄せてはこふ。〔古語〕枕「革の帶のかたつきたるを、とのゐ姿にひきはこへて」

ひき-はこゆ　引きはこゆ　【動下二他】前條を見よ。

ひき-ばし　引橋　【名】㊀橋板を引き放ちて、桁のみ殘るやうにしたる橋。義經記「三方には堀を掘り、東の方に引橋渡して」㊁引き去るやうに作りたる梯子。盛衰記「内殿の引橋取りて、天井にのぼりて」

ひき-ばしら　引柱　【名】船に、檣のやうに柱を立て、これに綱を附けて、他の船を引かしむる用に供するその柱。

ひき-はだ　蟇肌・蟇皮・引膚・皺文・波文　【名】㊀ひきはだがは(蟇肌革)の略。運步色葉集「皺皮、ヒキハダ」㊁前記の革にて作りたる刀の鞘袋。膝栗毛「おのれが脇指のひきはだを延ばし、あとの方へ長くして」

蟇肌の下鞍(シタグラ)　【句】蟇肌革にて作れる下鞍。名義抄「皺文鞦、ヒキハダノシタグラ」

ひきはだ-がは　蟇肌革・蟇皮革・引膚革　【名】蟇の背の如き皺ある革。おほしぼかは。しぼみがは。ひきはだ。

ひき-ばち　挽鉢　【名】きばち(木鉢)を云ふ。〔京都の語〕

ひき-はづす　引外す　【動四他】㊀引張(ヒッパ)りてはづす。ひっぱづす。太平記「橋を引き外して」㊁『ひき(引)は接頭語』はづす(外す)を强めていふ語。ひっぱづす。

ひき-はな　引鼻　【名】「引目(ヒキメ)・引鼻」を見よ。

ひき-はなす　引離す　【動四他】㊀引張(ヒッパ)りて離す。無理に離れしむ。ひきはなつ。はがす。㊁『ひき(引)は接頭語』はなす(離す)㊀を强めていふ語。

ひき-はなつ　引放つ　【動四他】㊀前條㊀に同じ。源氏「御直衣(ナホシ)の袖もひき放ちたまはぬに」㊁前條㊁に同じ。源氏「手はいと惡しうて、歌はわざとがましく引きはなちてぞ書きたる」

ひき-はなる　引離る　【動下二他】『ひき(引)は接頭語』はなる(離る)㊀を强めていふ語。

ひき-はふ　引延ふ　【動下二他】『ひき(引)は接頭語』はふ(延ふ)を强めていふ語。枕「をのこごの十ばかりなるが、髮をかしげなるひきはへても」

ひき-はま　引濱　【名】鹽田(エンデン)の表面を、熊手の如き器具にて引き廻して、撒布せる細かき砂を均(ナラ)すこと。

ひき-はらふ　引拂ふ　【動四他】引き退きて、その跡を取り拂ふ。退去す。退散す。

ひき-はる　引張る　【動四他】ひっぱる(引張る)に同じ。宇治「その法師ひき張れと宣へば」

ひき-び　引日　【名】遊女の、身あがりをして休む日。心中刃は氷の朔日「引日の、何のと、てっきり七兩は入りませう」

ひき-びき　引引　【名】各自の心の引く方にまかすること。銘銘のひいき。すきずき。續紀「天(アメ)の下の政は、君の勅に在るを、己が心のひきびき、太子(ヒツギノミコ)を立てむと念ひて」聞書「これを見る人人、おのがひきびき、心心に言ひつくるとて」

ひき-びと　低人・短人・侏儒　【名】丈の甚だ低き人。ひきうど。ひきと。ひきなり。せいひく。一寸法師。侏儒(シュジュ)。矮人。〔古語〕紀「侏儒、ヒキヒト」

ひきびと-まひ　低人舞・短人舞・侏儒舞　【名】古、侏儒に舞はしめし舞。

ひき-ひろぐ　引廣ぐ　【動下二他】引張(ヒッパ)りてひろぐ。引きて、延び開くやうにす。源氏「屛風をひきひろげて」

ひ-きふ　悲泣　【名】かなしみ泣くこと。悲啼。

ひきふ　率ふ　【動上二他】ひきゐる(率ゐる)の訛。

び-きふ　備急　【名】急用の時の準備とすること。

ひき-ふす　引伏す　【動下二他】引き倒して、伏さしむ。ひっぷす。宇治「髻を取りて引き伏せて」

ひき-ふだ 引札【名】㊀商品廣告のために、品名とその定價及び發賣店名などとを記して、諸方に配る札。浮世風呂「藥の引札を、團扇へ張って」㊁廣く言ひ觸らすこと。廣告。八笑人「廣く愚痴・短才を引札するに等しからずや」

ひきふだ-くばり 引札配【名】引札を配ること、又その人。

ひき-ふね 引船・引舟【名】㊀綱を附け、機械もしくは人力にて、船舶を引きゆくこと、又その船舶。萬葉「風吹きて河波立ちぬ引船にわたりも來ませ夜くだたぬまに」㊁他の船又は浮動體を曳き行く船。〔曳船・曳舟〕㊂**かごぶね**(籠船)に同じ。㊃『「義經千本櫻」・「源平鵯鳥越」などの狂言にて、ここに懸けたる水引幕を、海の書割にして、小き軍船を、その上に引きしより起るとも、又、「義經千本櫻」の狂言の渡海屋の場にて、ここを、遙かに海にこしらへ、數多の軍船入り亂れて戰ふさまを仕出して、大當(オホアタリ)なりし事あるより起るともいふ』芝居の舞臺の正面に在る棧敷。前後三側に分ち、前方より、順次に前船(マヘブネ)・中船(ナカブネ)・後船(アトブネ)と呼び、前船は本船(ホンブネ)ともいへり。㊄**ひきふねぢよらう**(引船女郎)の略。一代男「初音(ハツネ)が座配、……、外の太夫の、手の屆く事にもあらず、……、引舟の女は、あとに歸し」膝栗毛「相方の太夫・引船・禿を連れて」

ひき-ふね 引船・引舟【名】〔地〕**ひきふねどほり**(引舟通)の略。

ひきふね-ぢよらう 引船女郎・引舟女郎【名】『太夫を船に譬へて、その指揮を掌る者なるによりていふ。**しんざう**(新造)參照』昔、京阪地方の遊廓にて、太夫に一人づつ附き添ひて、遊客の用事萬端を取り扱ひし遊女。江戸の番頭新造に相當すれども、色を鬻ぐことは、嚴禁せられたり。ひきふね。一代女「我、太夫と呼ばれし時、……、天神におろしけるに、はや、その日より引舟女郎もなく」「を見よ。

ひきふね-どほり 引舟通【名】〔地〕次條

ひきふね-ぼり 引舟堀【名】〔地〕武藏國南葛飾(ミナミカツシカ)郡にある溝渠。元祿中、江戸本所・深川へ給水の目的にて開鑿せし葛西(カサイ)用水の西堀の末の、龜有(カメアリ)以南の稱。享保四年、通航に用ひ、その西堤を道路とし、引舟通(ヒキフネドホリ)といふ。

ひきふね-やりて 引船遣手・引舟遣手【名】**ひきふねぢよらう**(引船女郎)に同じ。一代女「太夫の時は、五七度も、心よく逢ひ馴れし後……、引舟遣手、氣を附け」

ひき-へがす 引剝す【動四他】**ひきはがす**(引剝す)に同じ。

ひき-へぎ 引倍木【名】**ひへぎ**(引倍木)に同じ。禁秘抄「夏、引倍木、無文單重也」

ひき-べつ 引別【名】くらぶること。比較。八笑人「路考のと比較(ヒキベツ)すれば、第一、こんな首は、澤庵の押(シオ)にしかならねえ」

ひき-ほぐす 引解す【動四他】『**ひき**(引)は接頭語』**ほぐす**(解す)を强めていふ語。ひきほどく。ひっぽどく。ひきとく。

ひき-ぼし 引干【名】海藻などを、醬油又は鹽にて煮て、日光にて乾したる食品。古、茶の子などに用ひたり。〔古語〕。空穗「折敷(ヲシキ)四つして、ひきぼし・くだものなど」

ひき-ほす 引干す【動四他】引き採りて、日光に曝す。萬葉「小垣内(ヲカキツ)の麻を引き干し妹なねが作り著せけむ白妙の」

ひき-ほどく 引解く【動四他】『**ひき**(引)は接頭語』**ひきほぐす**(引解す)に同じ。ひっぽどく。天の網島「この風呂敷も氣づかひと、引きほどき、取散らし」

ひき-ぼん 挽盆【名】木を挽き刳(ク)りて造れる盆。織留「十枚の挽盆」

ひき-まうく 引儲く【動下二他】『**ぬきまうく**(拔儲く)を見よ』弓を射放たんと待ち構ふ。弓を引き絞りて待つ。保元「一定(イチヂヤウ)、彼奴(キャツ)は、引き設けてぞいふらん。一の矢をば射させんず。二の矢を番はん所を射落さんず」謠曲(攝待)「引き設けたる弓なれば、矢坪を指して、ひやうと放つ」

ひき-まかなふ 引賄ふ【動四他】前條に同じ。紀「彎レ弓、ユミヲヒキマカナヒ」

ひき-まく 引幕【名】横に引きて開閉する幕。(落幕(オトシマク)に對して)浮世風呂「芝居の引幕を寢卷に直したる、廣袖の著物」

ひき-まぐ 引曲ぐ【動下二他】引張(ヒッパ)りて曲ぐ。手荒く曲ぐ。ひんまぐ。

ひきま-ぐさ 延喜草【名】〔植〕**まつ**(松)㊀の異稱。〔古語〕藏玉集「延喜草。松。春の野や雪げの澤のひきま草花咲きにけり雪におはれて」

ひき-まくる 引捲る【動四他】引張(ヒッパ)りてまくる。手荒くまくる。ひんまくる。八笑人「夜具を、殘らず引きまくれば」

ひき-ます 彈增す【動四他】まさるやうに彈く。枕「きんの琴を、いかで人に彈きまさんとおぼせ」

ひき-また 【名】『蟇(ヒキ)股にて、蛙の股に象(カタド)るとの說あれど、匹股の義なるべしといふ』祝の時、昆布を、二端の布を一つに連ねて、兩端より卷きたる形に切ること。夫婦を祝ふ意ならんといふ。

ひき-まつふ 引纏ふ【動四他】**ひきまとふ**(引纏ふ)に同じ。紀「縛レ裳、モヲヒキマツヒテ」

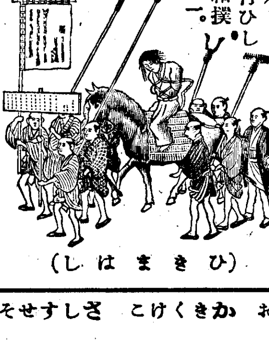
ひき-まつふ 引纏ふ【動下二他】身に引き寄せてまつはしむ。孕常磐「諸人の猜み惡むまで、引きまつへてあやかりたまへ」

ひき-まど 引窓・引窻【名】㊀**てんまど**(天窓)に同じ。其角「飼猿の引窻傳ふ時雨かな」㊁淨瑠璃「雙蝶蝶曲輪日記(フタツテフテフクルワノニッキ)」の第八段、人のために殺人の過を犯したる濡髮長五郎(ヌレガミ)が、山城國八幡(ヤハタ)の南(ナン)與兵衛の家に逃れ來りしを、與兵衛の義母にして、長五郎の實母なるお幸の、引窻の繩にて、假に捕へ縛することを述べたる場面の俗稱。

ひき-まとふ 引纏ふ【動四他】身に引き寄せてまとふ。ひきかく。ひき著(キ)る。ひきまつふ。まとふ。盛衰記「二位殿は、……練色の二衣(フタツギヌ)引きまとひ」

ひき-まとむ 引纏む【動下二他】引き寄せてまとむ。とりあつむ。

ひき-まはし 引廻【名】㊀ひきまはすこと。㊁德川時代に、斬罪以上の重刑に科せし附加刑の一。犯人を縛して、馬に乘せ、その罪狀を紙幟に記し、府内或は犯罪地或は犯罪人の住居地などを引き廻して、公衆に示しし後、本刑に行ひしこと。㊂相撲(スマフ)の手の一。相手の、體を寄せ來りし時、その首に手を掛けて、逃げながら引きまはすこと。㊃**まるがっぱ**(丸合羽)に同じ。膝栗毛「紺縞の、洗濯したる引廻を著て」㊄鋸の一種。長さ七八寸、廣さ五六分、肉厚く、齒やや粗にして、板を彎曲に挽き切るに用ふ。



(ひきまはし)

ひき-まはす 引廻す【動四他】㊀引張(ヒッパ)りてまはす。力をこめてまはす。ひきめぐらす。盛衰記「黑雲、經俊を引き廻し」㊁諸處を連れあるく。ひっぱり廻す。ひん廻す。曾我會稽山「小脇に突き立て引き廻す樣にいうても、合點しられぬ」㊂指圖して働かす。種種に導き敎へて爲さしむ。狂言(布施無)「手を取って引き廻して、たべ、傍輩達」八笑人「左樣なら、この者どもをお引き廻し下さいまし」㊃罪人を、引廻の刑に處す。

ひき-まゆ 匹繭【名】**ひとつまゆ**(一繭)に同じ。〔古語〕和名「獨繭、比岐萬由」後撰「引繭のかく二ごもりせまほしみ桑こきたれて泣くを見せばや」

ひき-まゆ 引眉【名】眉毛を剃りたる痕、又は元來薄き眉の上に、墨にて畫きたる眉。つくりまゆ。まよびき。ひきまゆげ。

ひき-まゆげ 引眉毛【名】前條に同じ。

ひき-み 引身【名】鯉の右の肉を、料理の用に供する時の稱。(打身(ウチミ)に對して)

ひき-むく 引向く【動下二他】引張(ヒッパ)りて向かしむ。强ひて向はす。ひんむく。源氏「いたくそむきたまへば、强ひてひき向けたまひつつ」太平記「伊豆守の馬の口を引き向けて」

ひき-むすび 引結 【名】 婦人の帯の結び方の一。

ひき-むすぶ 引結ぶ 【動四他】 ㊀引き寄せて繫ぎ止む。力をこめて結ぶ。ひきくくる。祝詞「敷きます大宮……引き結べる葛目(ツナメ)の緩(ユルビ)」榮花「薄色のしびらども、かごとばかり引き結びつけたり」 ㊁『ひき(引)は接頭語』むすぶ(結ぶ)㊀に同じ。義經記「草の庵を引結び」

ひ-きん 飛禽・蜚禽 【名】 とぶとり。飛鳥。

ひ-きん 費金 【名】 つひやす金。費用。

ひ-きん 卑近 【名】 程度低く手ぢかきこと。通俗。(高遠に對して)

ひ-きん 祕錦 【名】 ひごん(祕錦)を見よ。

ひ-ぎん 悲吟 【名】 悲しき聲にて、詩歌を吟ずること。

び-きん 鼻筋 【名】〔醫〕『獨 Nasenmuskel』はなすぢ(鼻筋)に同じ。

び-ぎん 微吟 【名】 小き聲にて、詩歌を吟ずること。かすかにうたふこと。

ひ-きんぞく 非金屬 【名】〔化〕『英 Non-metal』金屬に屬せざる鑛物の總稱。

ひきんぞく-くわうたく 非金屬光澤 【名】〔鑛〕『英 Non-metallic luster』玻璃・眞珠等の光澤に似て、金屬とは見えぬもの。

ひきんぞく-くわうぶつ 非金屬鑛物 【名】〔鑛〕『英 Non-metallic minerall』金屬にあらず、又、金屬の鑛石にあらざる鑛物の總稱。例へば、水晶・粘土など。

ひきんぞく-げんそ 非金屬元素 【名】〔化〕『英 Non-metallic elements』金屬元素にあらざるすべての元素。卽ち酸素・鹽素・臭素・硫黃・窒素・燐・砒素・炭素・硅素など。これらの元素は、形態も、氣體・液體・固體等一定せず、共通性も極めて少けれど、多くは、比重小に、熱・電氣の傳導性に乏しく、水素と安定なる化合物を造り、その酸化物は、酸性酸化物にして、中には、金屬元素と明確に區別しがたきものもあり。(金屬元素に對して)

ひきんぞく-さう 非金屬相 【名】〔化〕色及び光澤の、非金屬に似たるもの。石相。(金屬相に對して)

ひき-め 低目 【名】『低(ヒキ)き目の義』雙六(スゴロク)の小目。著聞「雙六の勝負、……賭物(ノリモノ)を出だして、ひき目打ちたらん者取るべしと定めてけり」

ひき-め 蟇目・引目 【名】『嚮(ヒビキ)目の義といふ』㊀鏃(ヤジリ)の一種。朴(ホホ)又は桐の木にて、中を空に作り、三箇又は五箇の孔を穿ちたるもの。長さは、普通四五寸なれど、長大なるは、一尺二寸に達するもありて、これを大具足の蟇目といへり。犬追物(イヌオフモノ)・笠懸などにて、射中てても、疵のつかぬための用とし、又、鏑(カブラ)のごとく、空氣、孔に入りて、高く嚮くが故に、能く妖魔を伏すといふ。犬射(イヌ)蟇目・笠懸蟇目などの種類あり。中を空にし、矢竹も、太きを擇びて用ひ、これを蟇目柄(ヒキメガラ)といへり。著聞「蟇目もて、海賊を射たるに」 ㊁蟇目を附けたる矢。ひきめの矢。御伽草紙「弓のまん中撮り、腰より引目を出だし、犬を追ひつめ」

蟇目の神事(ジン) 【句】 諸所の神社にて、神前にて、蟇目の法を行ふこと。下野國日光の二荒山中宮祠にて、二月四日(昔は陰曆正月四日)に行ふものなど、有名なり。

蟇目の番(バン) 【句】 妖魔降伏のため、蟇目法を行ひし番衆。とのゐひきめ。平家「これは、天狗の所爲といふ沙汰にて、晝は五十人、夜は百人の番衆を揃へ、蟇目の番と名付けて、蟇目を射させられけるに」

蟇目の法 【句】 古、妖魔降伏のため、弓弦を打ち鳴して、蟇目の矢を射しこと。めいげん(鳴弦)參照。

蟇目の役(ヤク) 【句】 古、貴人の出産の時、妖魔降伏のため、引目の法を行ひし役。男兒には三度、女兒には二度、鳴り響かす定なりしなり。東鑑「御臺所男子御平産……上總權介廣常蟇目役」

ひき-め 引目 【名】 次條を見よ。

引目・鉤鼻(カギバナ) 【句】 古の大和繪にて、人の顏を畫くに、目は、單に横に一線を引きてあらはし、鼻は、勾のやうに引きてあらはししこと。引目引鼻。

引目・引鼻(ヒキハナ) 【句】 前條に同じ。本朝畫史「輕筆一引以成二鼻目一、倭畫家、謂二之引目引鼻一」

ひきめ-がは 蟇目革・引目革 【名】 革の一種。黑塗にせる上に、赤漆にて、蕨手の紋を書きたるものとも、又、細き竪筋あるものともいふ。

ひきめ-かぶら 蟇目鏑・引目鏑 【名】 大鏑(オホカブラ)の矢。盛衰記「木の本、萱の本を打ちはためき、蟇目鏑を射上げてとどめき懸かりたれば」

ひきめ-がら 蟇目柄・引目柄 【名】 ひきめ(蟇目)㊀を見よ。太平記「箆(ノ)の太さは、尋常の人の蟇目柄にする程なる三年竹」

ひき-めぐらす 引廻らす 【動四他】 引きてめぐらす。ひきまはす。めぐらす。

ひきめ-くり 蟇目刳・引目刳 【名】 蟇目を製すること、又その工人。七十一職人歌合「ひきめくり。一尺に餘る御蟇目は、刳りにくくて、道がゆかぬ」

ひき-めくる 引捲る 【動四他】 ひきはがす(引剝す)に同じ。

ひきめ-さげを 引目下緒 【名】 引目革(ヒキメガハ)の下緒。

ひき-めし 引飯 【名】 ひきいひ(引飯)を見よ。

ひきめ-じり 蟇目尻・引目尻 【名】 蟇目㊀の先端。

ひきめ-つき 短女坏 【名】 坏(ツキ)の一種。丈低きもの。延喜式「短女坏(ヒキメツキ)・筥坏・小坏」

ひき-も-きら-ず 引も切らず 【句】 ひく(引く)の條下を見よ。

ひき-もち 引餅 【名】 粉米(コゴメ)にて搗きたる餅。〔常陸國・下野國の方言〕

ひき-も-ちぎらず 引きもちぎらず 【句】 ひく(引く)の條下を見よ。

ひき-もどす 引戾す 【動四他】 引張(ヒッパ)りて戾す。强ひて戾す。狂言(布施無羅)「後から引戾さるる樣で」

ひき-もの 引物 【名】 ㊀ひきでもの(引出物)の略。榮花「宮宮・殿ばら、御引物など、言ひ盡すべからず」 ㊁『ひきさかづき(引盃)を見よ。一說に、ひきでもの(引出物)の略なりと』客の膳部に添へて出す肴また

菓子など。だいひきもの。宗五大草紙「雁の皮いり、鵠(クグヒ)・鯨などの珍物の、引物などに候をば」 ㊂ひきて(引手)㊀に同じ。類聚雜要「東西遣戶障子、有二各引物一」 ㊃『引張る物の義』帳(トバリ)・壁代(カベシロ)などの類。〔古語〕字鏡集「㡘、ヒキモノ・トバリ」太平記「引物の內にたれこめて、人にも見えたまはで」

ひき-もの 彈物 【名】 彈きて鳴す樂器。卽ち琴・琵琶・三味線など。いと。絃器。(吹物に對して) 源氏「ひきもの、琵琶・和琴(ワゴン)ばかり」

ひき-もの 挽物 【名】 轆轤細工にて、挽き彫りて造りたる器物の總稱。

ひき-もの 疋物 【名】 一疋を單位として賣買する織物。

ひきもの-いうぜん 疋物友禪 【名】 疋物にしたる友禪染。多くは、婦人の著物に用ふ。

ひきもの-かみ ひきもの神 【名】 だうそじん(道祖神)の異稱。貫之集「あひ知りたる人の物へ行くに、幣(ヌサ)やるとて、行く今日も歸らん時も玉桙のひきもの神を祈れとぞ思ふ」

ひきもの-ぐわし 引物菓子 【名】 ひきぐわし(引菓子)に同じ。

ひきもの-ざいく 挽物細工 【名】 ろくろざいく(轆轤細工)に同じ。東海道名所圖會「箱根名品、挽物細工」

ひきもの-し 挽物師 【名】 ろくろし(轆轤師)に同じ。名物六帖「旋匠、ヒキモノシ」

ひ-きやう 非境 【名】〔佛〕邪非の境界。

ひ-きやう 悲境 【名】 不運なる境遇。逆境。

ひ-きやう 比況 【名】 ㊀ひゆ(比喩)に同じ。㊁〔語〕或語に、助動詞「ごとし」を添へて、その動作・狀態を、他に對比する意を表はすこと。

ひ-きやう 祕經 【名】 祕密の經典。意義深遠なる經文。たふとき佛經。

五部の祕經 【句】〔書〕密敎にて、祕密の經典とする、五部の書。東密にては、次條の三部の經典に、瑜祇(ユギ)經と要略念誦とを加へていひ、台密にては、瑜祇經と菩提場經とを加へていふ。

三部の祕經【句】〔書〕大日經・金剛經・蘇悉地經（ソシツチギヤウ）の三部の經典。平家「大日經・金剛頂經・蘇悉地經、この三部の祕經を受けさせたまひて」

ひ-ぎやう　日經【名】毎日、經を讀誦（ドクジユ）すること、又その讀誦する經。狂言（總八）「これを、日經に讀うでくれさしめ」

ひ-ぎやう　非形【名】いぎやう（異形）に同じ。謠曲（花筐）「道のほとりに、非形を戒め、面前に、行幸（ミユキ）の御先を淸めけり」

ひ-ぎやう　非行【名】〔佛〕次條を見よ。

ひ-ぎやう　非行・非坐の三昧（サンマイ）【句】〔佛〕しゆさんまい（四種三昧）を見よ。

ひ-ぎやう　飛行【名】㊀ひかう（飛行）に同じ。（佛敎に關する文章に用ふ）ちぎやう（地行）參照。盛衰記「飛行自在にて、天を翔らん者」㊁兵法の手の一。謠曲（鞍）「向ふ者をば拜打（ヲガミウチ）、……鶴翼・飛行の祕術を盡すと見えつるに」

び-きやう　微響【名】微弱なる音響。

び-きやう　鼻鏡【名】醫術にて、鼻孔をうかがふに用ふる、筒形の鏡。

ひ-きやうから-はふ　非强行法【名】〔法〕にんいはふ（任意法）に同じ。

ひぎやう-しや　飛香舍【名】㊀古の禁中の五舍の一。西北に位し、淸涼殿の北、弘徽殿（コキデン）の西にあり。庭前に藤を植ゑてありしより、藤壺ともいひ、女御入內の儀は、主にこの舍にて行はれ、又皇后の御居所たりしこともあり。西宮記「於二飛香舍一、有二藤花宴一」㊁今の京都の御所にて、皇后宮御殿の北、玄暉門內にある建物。

ひぎやう-ひざ-さんまい　非行非坐三昧【名】〔佛〕「非行・非坐の三昧」に同じ。

ひぎやう-せん　飛行仙【名】空中を飛行する仙人。

ひぎやう-やしや　飛行夜叉【名】〔佛〕空中を飛行する夜叉神。飛脚夜叉。

ひき-やか　低やか【貌】ひくやか（低やか）に同じ。〔古語〕宇治「たけ矮（ヒキ）やかにて、……通さじと立ち塞（フタ）がる男」

ひ-きやく　飛脚【名】㊀急用を、遠隔の地に知らする人夫。平家「兵衞佐殿、坂東にて謀叛起させたまふとて、君を擊ち進（マヰ）らせよと飛脚下著候」㊁江戶時代に、信書又は金銀・貨物などの送達を業とせし者。脚夫。㊂ひきやくぶね（飛脚船）の略。

ひきやく-こばや　飛脚小早【名】ひきやくぶね（飛脚船）に同じ。

ひきやく-せん　飛脚船【名】郵便物を積載して航海する船舶。郵便船。〔江戶時代の末より、明治の初にかけての語〕

ひきやく-ぶね　飛脚船【名】飛脚㊁のために、定期に發著・往復する船。飛脚小早。凡兆「初潮や鳴門（ナルト）の浪の飛脚ぶね」

ひきやく-まけ　飛脚負【名】多くの運賃を要するために、利益にならぬこと。

ひきやく-みち　飛脚道【名】飛脚の步み得る道程。甲陽軍鑑「飛脚道三日路、しかも切所ゆゑ」

ひきやく-や　飛脚屋【名】昔、飛脚㊁を業とせし家、又その人。飛脚。脚夫。

びきやく-やしや　飛脚夜叉【名】〔佛〕ひぎやうやしや（飛行夜叉）に同じ。謠曲（檀風）「飛脚夜叉は、不動明王の索（サツ）の繩を、舟に附けて」

ひきやく-やど　飛脚宿【名】昔、飛脚㊁を宿泊せしめし旅宿。

ひき-やふ　引合ふ【動四他】ひきあふ（引合ふ）の轉訛。浮世風呂「手を引きやってあるくが」

ひき-やぶる　引破る【動四他】引張（ヒツパ）りて破る。ひきさく。ひきやる。

ひき-やま　低山・短山【名】低き山。〔古語〕祝詞「高山の末、短山の末に」

ひき-やる　引破る【動四他】ひきやぶる（引破る）に同じ。〔古語〕源氏「げににくくも書きて侍るかなと、はづかしくて、ひきやりつ」

ひき-やる　引遣る【動四他】引退（ヒキノ）けて遠ざく。おしやる。落窪「この向ひなる車、少し引き遣らせよ」源氏「御木丁（ミキチヤウ）引き遣りたれば」

ひきゆ　率ゆ【動上二他】ひきゐる（率ゐる）の訛。

ひ-きゆう　閟宮【名】神を祀れる靈廟。

ひ-きゆう　匪躬【名】『易經の蹇卦に「王臣蹇蹇、匪二躬之故一」とあるに本づく』一身の利害を顧みず、君に忠を盡すこと。

ひき-ゆふ　引結ふ【動四他】引き寄せて結ふ。力をこめて結ふ。枕「いとうるはしく長き髮を引き結ひて」宇治「左右の袖つくろひ、括り、引き結ひ、片膝立てて」

ひ-きよ　飛去【名】飛びて去ること。

ひ-きよ　非據【名】道理に據らぬこと。非理。非道。盛衰記「たとひ、入道、いかなる非據を執（シフ）し申すとも」下學集「非據、ヒキヨ」

び-きよ　美擧【名】美（ホ）むべき企。

ひ-きよう　比興【名】㊀おもしろきこと。興あること。著聞「比興の事、かの卿聞かれて、入興せられけり」㊁『ひきよ（非據）の音便なるべしとも、又、ひきよう（非興）の誤なりともいふ』不都合。非理。著聞「供米（クマイ）の不法の事ありて、……、比興の事なりとて、それより、供米の沙汰きびしく成りて」鵜鷺合戰「今程いらぬ法式にて申せば、比興至極なれども」

ひ-きよく　祕曲【名】祕傳の樂曲。盛衰記「祕曲を彈じたまふ」十訓「皇帝（ワウダイ）以下の非曲を吹く間、白髮、忽に元のごとし」

ひ-きよく　悲曲【名】悲哀なる音調の曲。

び-きよく　美曲【名】優美なる音調の曲。一代女「櫻がさね・山越（ヤマゴシ）などいへる美曲を遊ばしける」五人女「この獅子舞も、……、美曲のある程は盡しける」

び-ぎよく　美玉【名】うるはしき玉。

ひき-よしかず　比企能員【名】〔人〕武將。通稱藤四郞。源賴朝に親近せられ、檢非違使となる。朝賴薨ずるや、賴家に仕へ、その妻は、賴家の乳母、その女は、賴家の寵を受けて、一幡（イチマン）を生む。建仁中、賴家と共に北條氏を亡さんと謀り、事漏れて、時政に謀殺せらる。

ひきよ-しや　被拒者【名】〔商〕支拂人より、支拂を拒絕せられたる爲替手形の所持人。

ひき-よす　引寄す【動下二他】引きて寄せつく。引きて手許に寄す。ひきつく。祝詞「遠き國は、八十綱（ヤソツナ）打ちかけて引き寄する事の如く」

ひき-よづ　引攀づ【動上二他】ひっぱる。引き寄す。〔古語〕萬葉「小里（ヲザト）なる花橘をひきよぢて折らむとすれどうら若みこそ」

ひき-よもぎ　引艾【名】〔植〕㊀玄參（ゴマノハグサ）科に屬する多年生の草。莖は方形にして、二三尺の高さに達し、葉は、對生にして、小く、薄く、深き缺刻を有し、やや艾のに似たり。夏秋の交、大さ二三分なる黃色・脣形の花開き、上脣は、やや褐色を帶び、蒴果を結ぶ。山野に自生す。くろくさ。せんねんかい。〔鬼油麻〕㊁いぬよもぎ（犬艾）に同じ。〔馬先蒿〕和名「馬先蒿、比岐與毛岐」㊂かはらよもぎ（河原艾）に同じ。〔茵陳蒿〕和名「茵陳蒿、比支與毛支」㊃ははこぐさ（母子草）に同じ。〔鼠麴草〕

ひき-らか　低らか【貌】ひくやか（低やか）に同じ。〔古語〕宇治「たけひきらかなる衆」

ひ-きり　火鑽・火切・燧【名】『「火を鑽る」を見よ』㊀上古、枯れたる檜の木口に、棒を當て、强く劇しく揉みて、火を出だししこと。和名「火鑽、比岐利」㊁火を鑽りとて祝ひ作れる餅。紫式部集「火きりとて、近江より供御（グゴ）に參らするもちひは、國司の料は、ことに夥しく大きにて」

ひ-ぎり　緋桐・赬桐【名】〔植〕馬鞭草（クマツヅラ）科に屬する落葉灌木。高さ四五尺に達し、葉は對生し、長き葉柄を具ふ。心臟形にして、細齒牙を有し、紅色にして、五裂せる合瓣花、圓錐花序をなして開き、果實は核果にして、靑黑色を呈す。東印度に自生し、我國にても栽培す。たうぎり。

ひ-ぎり　日切【名】㊀日數を限ること。日限。若風俗「約束の日切なれば」傾城反魂香「やがて別るる日切の女夫（メヲト）」鷓山比翼塚「さうして居られぬ日切の金」㊁周防國下關（シモノセキ）の飛脚船。㊂日數を限りて、病氣の平癒とを祈るに、効あること。〔日限〕「日切の地藏」

ひきり-うす 火鑽臼・火切臼・燧臼【名】火鑽杵と合はせ用ひて、火を鑽り出す臺。ひつぎ(火繼)・ひまつり(火祭)㊁參照。記「海布(メ)の柄(カラ)を鎌(カ)りて、燧臼(ヒキリウス)に作り」

ひきり-ぎね 火鑽杵・火切杵・燧杵【名】火鑽臼と合はせ用ひて、火を鑽り出す棒。記「海蓴(モコ)の柄(カラ)を、燧杵(ヒキリギネ)に作りて、火を鑽り出でて」

ひぎり-じようもん 日限證文【名】德川時代に、家主・五人組及び名主・組頭などより差し出だしし、日限尋(ヒギリタヅネ)の證文。

ひぎり-たづね 日限尋【名】德川時代に、罪人の逃走せし時、その地の家主・五人組及び名主・組頭などに命じ、三十日・五十日・百日・六箇月など、日數を限りて、搜索せしめしこと。

ひきり-び 火鑽火・火切火・燧火【名】きりび(切火)㊀に同じ。靈異記「燧、ヒキリ備乎」

ひき-りやう 引兩【名】『もと、引幕の模樣より出でしものにて、引幕は、布五幅(イツノ)を横に合はせ並べて作り、その二幅目と四幅目とを黒く染むるが普通なれば、太き黒線二條を横に引きたるが如き形となるより、後世、輪の中にこれを入れて、紋所とするに至りしものなるべしといふ。この說に依れば、二(フタツ)引兩が元にて、中央なる三幅目を黒く染むれば、一(ヒトツ)引兩となるなり』紋所の一。輪の中に、太き線一條乃至三條を、横に引きたるもの。一線なるは、一(ヒトツ)引兩、又は大中黑(オホナカグロ)、又は單に中黑といひて、新田氏の家紋、二線なるは、二(フタツ)引兩といひて、足利氏の家紋、三線なるは、三(ミツ)引兩といひて三浦氏の家紋たり。又、それぞれ、略して一引(ヒトツヒキ)・二引(フタツヒキ)・三引(ミツヒキ)ともいひしが、後、線を縱に引きたる立引(タチヒキ)、その他、種種の變形をも生ぜり。

ひきりやう-しげどう 引兩重籐【名】籐の卷き方、引兩に似たる重籐。

ひき-る 引入る【動下二他】ひきいる(引入る)の略。〔古語〕 紀「小林(ヲバヤシ)に吾をひきれてせし人のおもても知らず家も知らずも」

ひき-れ 挽入・引入【名】『ひきいれ(挽入)の略』轆轤にて、木を挽きて、合子(ガフシ)・皿などに作り、幾つも入子(イレコ)にしたるもの。ひきれ。七一職人歌合「ろくろし。嬉しくもひきれにしたる槻(ツキ)の木の月の缺けぬをこよひ見るかな」

ひ-ぎれ 日切【名】日限の滿つること。

ひき-れう 引料【名】德川幕府にて、宅地を引き上げ、代地を賜ふ時に交付せし引越料。

ひきれ-うり 挽入賣・引入賣【名】ひきれを賣る人。七一職人歌合「ひきれうり。これは、因幡合子にて候。めせ。わが戀はしはすの果のうりひきれぬるかとすればいそぐ別路」

ひきれ-がふし 挽入合子・引入合子【名】挽入の造り方なる椀。庭訓往來「引入合子」

ひき-わかる 引別る【動下二他】『ひき(引)は接頭語』わかる(別る)を强めていふ語。源氏「男女の賴むべき子どもにも引き別れてなん」奧州安達原「二世の夫(ツマ)にも引き別れ」

ひき-わく 引分く【動下二他】引き離して、別れしむ。離して、別別にす。盛衰記「景時は、義經を離れて、五百餘騎を引き分けて、蒲冠者(カマノクワンジヤ)に屬(ツ)きにけり」和合人「兩人を引き分けんと」

ひき-わけ 引分【名】㊀引き分くること。㊁相撲(スマフ)にて、永く勝負決せず、雙方の疲れたる時、引き分けて中止せしむること。わけ。㊂勝負を分たずして、中止せしむること。㊃古、八月の駒牽の時、國より奉れる馬を、院・東宮・執柄などに分け賜ひしこと。江次第「奏聞之次、奏二引分事一」 夫木「もち月の秋の光を誘ひきて雲井に見ゆる引分の駒」

引分の使【句】引分㊃のために、院・東宮・執柄などの許に遣されし使。建武年中行事「十六日、信濃の駒牽、……院・東宮など、引分の使にて、近衞司、御馬具して參る」

ひきわけ-ど 引分戶【名】引戶の一種。溝は一筋のみにて、戶は二枚あり、右と左とに開き得る樣に造れるもの。

ひき-わた 引綿【名】木綿(モメン)綿の上に、薄く引き延ばして被ふ眞綿。續世繼「雪ふりの御幸に、引綿の狩衣を著たまへり」

ひき-わたし 引渡【名】㊀引き渡すこと。此方より、彼方へ渡すこと。㊁手元にある人・物などを、他人の手に移すこと。交付。㊂本膳に、盃を三つ添へたる膳部。二の膳をうちみ、三つ膳をわたいりといふ。一代男「引渡の酒事過ぎて」

ひきわたし-いうよきん 引渡猶豫金【名】『英 Backwardation』受渡期日の到來したる現物の引渡を、猶豫せんとする賣方より、買方に出だす日步(ヒブ)。(引取猶豫金に對して)〔取引所の語〕

ひきわたし-こうばい 引渡勾配【名】〔建〕曲線屋根に於て、上下點を直線にて結び附けたる場合の、その直線の傾斜の度合。

ひきわたし-じやう 引渡狀【名】〔法〕『英 Written transfer』外國政府より、引渡の請求を受けたる逃亡犯罪人を引き渡す場合に、司法大臣の發する文書。

ひきわたし-せいきうしよ 引渡請求書【名】〔法〕『英 Demandant of extradition』逃亡犯罪人引渡條約を締結せる當事國の一方が、その條約の規定に基づき、他の一方に、逃亡犯罪人の引渡を請求する文書。

ひきわたし-でうやく 引渡條約【名】たうばうはんざいにんひきわたしでうやく(逃亡犯罪人引渡條約)の略。

ひきわたし-ねだん 引渡直段・引渡値段【名】〔商〕賣主が買主に商品を引き渡す時の直段。

ひきわたし-ばし 引渡橋【名】まるきばし(丸木橋)に同じ。

ひきわたし-はんざい 引渡犯罪【名】〔法〕『英 Crime of extradition』外國と締結せる逃亡犯罪人引渡條約の規定に依り、その外國の請求ある時、引き渡すべき犯罪。

ひきわたし-ばらひ 引渡拂【名】〔商〕賣買の當事者が、貨物の引渡と共に、代金を支拂ふ旨を約したる取引。

ひきわたし-めかた 引渡目方【名】〔商〕商品を引き渡す時に量りたる目方。

ひきわたし-やくぢやう 引渡約定【名】引渡をなす旨を定めたる契約。

ひき-わたす 引渡す【動四他】㊀引きつづけて、此方より彼方に屆くやうにす。此方より彼方へ渡す。源氏「こなた・かなたの霞みあひたる梢ども、錦引き渡せるに」㊁手元にある人・物などを、他人の手に移す。手ばなす。交付す。わたす。㊂『わたす(渡す)㊁を見よ』罪人を引き連れて、先から先へと進みゆかしむ。引きまはす。狂言(朝比奈)「一度ならず三度まで、鎌倉を引き渡さるる」

ひきわたす 引渡す【動四自】次條に同じ。太平記「敵に跡を切られじと、四條を東へ引渡して、先へは、態と進まれず」

ひき-わたる 引渡る【動四自】『ひき(引)は接頭語』わたる(渡る)を强めていふ語。蜻蛉「白川の關のせけばや來(コ)まうくてあまたの日をば引渡りつる」

ひき-わり 挽割【名】鋸にて挽き割ること、又その挽き割りたる木材。

ひき-わり 碾割【名】㊀臼にて碾き割ること。㊁ひきわりむぎ(碾割麥)の略。

ひきわり-だうぐ 引割道具【名】芝居にて、舞臺の裝飾を、左右に引き割りて、新しき場面に變ぜしめ、又は見物場を、左右より割りて、その間より俳優の現るること。

ひきわり-むぎ 碾割麥【名】割麥の一。臼にて粗く碾き割れる大麥。米と交ぜて、炊ぐ。ひきわり。(押割(オシワリ)麥に對して)

ひきわり-めし 碾割飯【名】米に碾割麥を交へて炊ぎたる飯。

ひき-わる 碾割る【動四他】臼にて碾きて割りくだく。

ひき-わる 挽割る【動四他】「て挽きて割る。

ひ-ぎゐん-ないかく 非議院內閣【名】〔法〕內閣制度の一。君主が、自己單獨の意思に基づき、國會の意思を參酌せずして、國務大臣を任免するもの。

ひき‐ゐる 率ゐる【動上一他】『引(ヒキ)率(ヰ)るの義』㊀引き連れて行く。したがへ行く。ともなふ。ひきつる。ゐる。引率(インソツ)す。ひく。ひきゆ。ひきふ。㊁進退・行動を監督・指揮す。統率す。

ひき‐を 引尾【名】雉又は山鳥などの尾羽。矢羽を矧ぐに用ふ。（太平記）「山鳥の引尾の征矢(ソヤ)」

ひき‐をる 引折る【動四他】㊀引き寄せて折り取る。（舞御覽の記）「軒の花を……、弓の弭にて、一枝引き折りて參らするけしき」㊁引きかづく。（増鏡）「女の眞似をして、白きうす衣ひきをり」

ひく 引く【動四自】㊀しりぞく。しさる。（新拾遺）「難波潟まさごち遠く引く潮の流ひるまにつもる白雪」（平家）「駈くべき所を駈け、引くべき所を引いて」㊁まかる。歸る。㊂後(アト)の方へ延びて、地面・疊などの上を摺る。ひきずる。「曳く」㊃關係無き身となる。のく。脫す。手を引く。（狂言（貰聟））「子中(コナカ)をなしたる中で、出るぞ、ひくぞといふ事は、あるまい」㊄官を罷む。辭職す。㊅遊女又は藝者など、廢業す。

引(ヒク)の山【句】多忙・煩雜の狀。（小町踊）「祇園會や詮議まちまちひくの山」

ひく 引く【動四他】㊀手にて、わが方へ寄す。わが方へ近づかしむ。ひきよす。ひっぱる。㊁拔き出だす。取りだす。（紀）「抽絲、イトヲヒクコト」㊂拔き採る。ひこぬく。（萬葉）「太刀の後(シリ)革に入野(イリノ)に葛引く吾妹(ワギモ)眞袖持ち著せてむとかも夏葛引くも」（詞花）「君引かずなりなましかばあやめ草いかなる根をか今日はかけまし」㊃獸が、人家の食物などを、ひそかに盜み去る。「猫が、鰹節を引く」㊄船・車又は馬などを、後(アト)より進み來らしむ。「牽く・挽く」㊅ひきゐる。引率す。（空穗）「宰相の中將たち、上達部(カンダチメ)、みこたち引きて參りたまふ」㊆後(アト)の方へ延ばして、地面・疊などの上を摺るやうにす。ひきずる。「曳く」「杖を曳く」（萬葉）「紅の赤裳(アカモ)の裾ひき」㊇延ばし張る。長く伸ばす。（曾丹集）「み山にはむら錦引けるかと見るにつけても秋霧ぞ立つ」（平家）「西八條の燒跡に、大幕引かせ」㊈矢を射んとて、弓の弦を張り開く。「彎く・控く」「弓を引く」㊉長く標(シルシ)をゑがく。劃す。「圖を引く」「線を引く」⑪長く又は廣くのばす。一面に塗り又は播(マ)く。（伊勢集）「前栽植ゑ、砂子(スナゴ)ひけるに」（太平記）「山を崩し、木を伐り捨てて、地を引くに」⑫例證として擧ぐ。引用す。（古今）「吉野川を引きて、世の中を恨み來つるに」（平家）「證據を、外に引くべからず」⑬綴ぢたる書籍・文書の中より搜し出す。（今昔）「速かに帳を引き見よ」⑭さそふ。みちびく。「客を引く」「水を引く」⑮誘ひためす。試にさぐる。計り試む。「氣を引く」「貫目を引く」⑯贔屓(ヒイキ)にす。（盛衰記）「源氏を引きおぼしめして、平家を憎ませたまふ」（根南志具佐）「蝦夷・松前の果までも、路考を引かぬ者なければ」⑰體內に入らしむ。「息を引く」「風邪(カゼ)を引く」⑱へらす。減ず。引算(ヒキザン)を行ふ。ひき去る。⑲後方に引拂ふ。撤退せしむ。（平家）「定めて、宇治・勢田の橋をば引いて候ふらん」（膝栗毛）「膝を引きたるに」⑳引出物(ヒキデモノ)とす。（盛衰記）「悅の御使なれば、……馬一匹に、太刀一振相副へて引き」㉑昔の船軍にて、敵が、幕を打つ。㉒昔の船軍にて、敵が、海中に綱を渡す。（張るに對して）㉓「刃(ハ)を引く」を見よ。㉔「湯を引く」を見よ。

引きて發せず【句】『孟子の盡心上篇に「羿不㆘爲㆓拙射㆒變㆗其彀率㆖。君子引而不㆑發、躍如也、中道而立。能者從㆑之」とあるに本づく』㊀弓を引きたるままにて、矢を發(ハナ)たず。㊁ただ道の常軌を說き、その妙用の點は、學ぶ者をして、自得せしむ。〔諺語〕

引きも切らず【句】ひききりなし(引切無し)に同じ。

引きもちぎらず【句】前條に同じ。（源氏冷泉節）「持槍・持弓・梓弓、引きもちぎらぬ行列」

引く手【句】㊀引く人。船などを、綱にて引く人。（源氏）「心ありて引く手の綱のたゆたはば打ち過ぎましや須磨の浦波」㊁いざなふ人。さそふ人。

引く手數多(アマタ)【句】『おほぬさ(大幣)㊁を見よ』誘ふ人の多きこと。招く手あまた。「引く數手數多の全盛」（源氏）「引く手多にとかや、さかしらなれば、いとほしくぞ侍るや」

引こ船【句】山中にて造作し、綱にて、引き下す船なりといふ。〔古語〕（萬葉）「足がりのあきなの山にひこ船のしりひかしもよここはこがたに」

ひく 挽く【動四他】『ひく(引く)の轉義』㊀鋸にて切り割る。のこぎりびきにす。（新後拾遺）「心なきいづみの杣の宮木だに挽く人あれば朽ちはてぬ世を」㊁轆轤鉋(ロクロガンナ)にて、挽物を造る。㊂ひく(引く)㊄を見よ。㊃ひく(碾く)を見よ。

ひく 彈く【動四他】『ひく(引く)の轉義』絃樂器を搔き鳴らす。かなづ。彈ず。

彈けや謠へ【句】酒宴を開きて、さかんに三味線を彈き、唄を謠ふ形容。（八笑人）「一升德利のてんつつも、彈けや謠への芝疊」

ひく 碾く・挽く【動四他】『ひく(引く)の轉義』碾臼(ヒキウス)を廻して磨り碎く。「茶を挽く」

ひく 轢く【動四他】『ひく(引く)の轉義』車輪が、物を壓して轢(キシ)り行く。

ひく 引く【動自】ひかる(引かる)の約。ひけざり(引島)參照。〔古語〕

ひく 低【名】ひくきこと。「高(タカ)・低(ヒク)」

ひく 低【接頭】低き意。

びく 【名】㊀繩にて作れる畚(フゴ)の類。〔塀〕㊁漁りたる魚を入るる竹籠。上部に、圓筒狀なる綱を取附く。〔魚籃〕

びく 比丘【名】〔佛〕㊀『梵 Bhiksu. 巴 Bhikkhu』出家せる男子。僧。法師。沙門。苾芻(ヒツシユ)。（比丘尼に對して）㊁びくに(比丘尼)の略。

び‐く 微軀【名】㊀取るに足らぬ、いやしきからだ。㊁自己の身の謙稱。

びく 【名】みみたぶ(耳埵)に同じ。（太平記）「耳のびくが、薄く坐(オハ)しけると欺いて」

び‐く 尾句【名】〔文〕㊀律詩の最後の二句。（西辰紀行）「一・二は、孫興公が天台山の賦の事を用ひ、三・四は、登覽の景をいひ、五・六は、懷古の感慨をのべ、尾句は、景精を合はせていふ」㊁短歌の第三句。尾の句。結句。（發句・胸句・腰句・腹句に對して）（萬葉集）「尾句不㆑可㆔重云㆓著㆑冠之辭㆒哉」

びく 【貌】びくりに同じ。（太功記）「百萬の强敵(ガウテキ)にも、びくともせぬ某が」

び‐ぐ 備具【名】ぐび(具備)に同じ。

ひ‐くう 非空【名】〔佛〕ひうひくう(非有非空)を見よ。

びく‐かい 比丘戒【名】〔佛〕比丘の持すべき戒(カイ)。

びく‐げ 比丘偈【名】〔佛〕法華經の方便品にある百二十一行の偈頌(ゲジユ)。釋迦が、その說法を聞くに堪へずとして退席せる、五千の比丘を許したる後の諫誡の意を綴りたるもの。

びく‐さき 比丘先【名】さしあま(指天)に同じ。

びく‐さだ 比丘貞【名】能(ノウ)の狂言の一。某、その一人の息子の成人せしため、兼て眷顧を受くる比丘尼を、名附親に賴みて、名を比丘貞と附け、祝宴を開きて、三人謠ひつ舞ひつすることを作れるもの。

ひく‐さま 低樣【名】低きありさま。（曾我）「左の肩より、右の乳の下へ打ち掛けられ、低さまに遣ふ所を」

ひくし 低し【形二】㊀高さ少し。高からず。下の方にあり。ひきし。〔卑し〕㊁地位・身分賤し。階級、下にあり。㊂張弓の弦と弓との間の距離、狹し。ほそし。（高しに對して）〔射藝の語〕

ひ‐くじ 非公事【名】非理なる訴訟。（甲陽軍鑑）「事を委しく聞召すに、非公事なり」（油糟）「調半(テウハン)問ふもつらき碁がたき（といふ句に）非公事を我に賴む禮錢」

ひく‐しま 引島・引嶋【名】〔地〕ひこしま(彥島)に同じ。（謠曲（和布刈））「海原や、博多の海も、程近く、汐ひく島も見ゆるかな」

ひく‐しまだ 低島田・低嶋田【名】つぶしまだ(潰島田)に同じ。（高島田に對して）

びく‐しやく【貌】びくびくに同じ。（室町千疊敷）「共に發心御供などとて、びくしやくせ

ば、今生・後生の勸當」梅暦「土段場（ドタンバ）へ直した鰻のやうに、びくしやくしても、齒は立たねえぜ」

ひ-く-しよ-せん 非口所宣【句】〔佛〕『口の宣（ノ）ぶる所に非ずとの義』意義高遠にして、口にて說くこと能はざること。大織冠「非口所宣・非心所測とて、口にも說かれず、心にも測られず」

び-く-せう 微苦笑【名】『微笑と苦笑との義』可笑（ヲカ）しさも交へて、苦笑すること。**くせう**（苦笑）參照。

ひくそす（英Hyksos）【名】『牧人の王の義といふ』埃及の古王朝の末、紀元前第二十世紀、國勢衰へし時、西南亞細亞より侵入して、數百年間抑壓を加へし遊牧民族。セム種に屬するものなるべしといふ。

ひ-ぐち 火口【名】㊀火災の火の燃口。盛衰記「火口といへば、燃え廣がらん」㊁銃砲の、火氣を筒に通ずる穴。火門。㊂行燈・燈籠などの、點火する口。〔灯口〕八犬傳「行燈の灯口推し向けて」俗曲（與話情浮名橫櫛）「行燈の火口さし向け、顏眺め」

ひ-ぐち 樋口【名】樋の在る處。ひのくち。

ひぐち 樋口【名】姓氏の一。本姓は藤原。高倉氏の支流。左近衞中將親具の第二子信孝を祖とし、世世廷臣となり、明治維新後、子爵を授けらる。

ひぐち-いちえふ 樋口一葉【名】〔人〕**ひぐちなつ**（樋口夏）に同じ。

ひぐち-いはみのかみ 樋口石見守【名】〔人〕太鼓の打方の一派。樋口流の祖。近江國小野澤の鄕士。豐臣秀吉の近習頭。技を觀世小次郎信光に學び、天正中、征韓の役に從ふや、法を石井勝左衞門に讓る。子甚七、德川氏に召され、子孫、世世、久左衞門と稱す。

ひぐち-かねみつ 樋口兼光【名】〔人〕武將。木曾義仲の四天王の一。今井兼平の兄。二郎と稱す。壽永三年、源行家を河內に攻めて、これを逐ひ、京師に還るや、義仲、既に粟津に戰死し、鎌倉勢、京師に在り、兼光これと鳥羽の郊外に戰ひしが、敗れて降り、翌日、朱雀に斬らる。

ひぐち-なつ 樋口夏【名】〔人〕女流小說家。甲斐國の人。幼より東京に住み、中島歌子に、國學・和歌を學び、一葉女史と號す。十八歲父を亡ひ、家計窮するに及んで、半井（ナカラヰ）桃水に、小說の添削を乞ひ、遂に一家を成せり。馬場孤蝶・島崎藤村・平田禿木・戶川秋骨等と共に、雜誌「文學界」の同人たり。明治二十九年歿す。年二十五。著す所、一葉全集・女子書簡文・一葉日記等あり。

ひぐち-ばん 火口番【名】德川時代に、江戶市中に火災ある時、火勢を視察して報告し、及び目付と共に、大名課役の消防夫を指揮し、又は定火消（ヂヤウビケシ）の火事場に於ける勤惰を考察して、上申せし使番。

ひぐち-りう 樋口流【名】太鼓の打方の一派。樋口石見守を祖とす。

ひ-くつ 卑屈【名】品性卑劣にして、意氣無きこと。

ひ-くづ 簸屑【名】茶又は穀物などを、箕にて簸て殘りたる屑。狂言（通圓）「簸屑どもを、ちやちやっと打入れて」

ひく-つく【動四自】ひくひくとす。

びく-つく【動四自】びくびくとす。怖ぢ恐る。びくめく。

ぴく-つく【動四自】ぴくぴくとす。

ひくて-あまた 引手數多【名】**ひく**（引く）の條下を見よ。

ぴくと（英Picts）【名】ケルト人中、アイルランド島・マン（man）島等に住し、スコットランドの北部にも侵入せしことある一種族。ぴくと族。

ぴくと-ぞく ピクト族【名】前條に同じ。

ひく-どり 頻鳥【名】〔動〕**かりようびんが**（迦陵頻伽）に同じ。

び-くに 比丘尼（梵 Bhikṣuṇī. 巴利 Bhikkhunī）【名】㊀〔佛〕出家せる女子。あま。（比丘に對して）㊁德川時代に流行せし、法體・法衣の賣女。勸進比丘尼の、一轉して、色を鬻ぐに至りしもの。まるた。業の一本「めった町よりあまた來る比丘尼の內にても、永玄・お姬・お松・長傳と申し候が、爰元で名取にて候」塵塚談「賣女比丘尼は、芝八官町・神田横大工町にて、美服を著し賣りける由、これに續きて、下直（ゲヂキ）の比丘尼は、淺草田原町・同三島門前・新大橋川端などにて」

比丘尼に笄【句】無理なる註文をする譬。〔諺語〕

比丘尼に櫛を出せ【句】前條に同じ。〔諺語〕

比丘尼に白髮（シラガ）を見せよ【句】前條に同じ。〔諺語〕

比丘尼に髭出せ【句】前條に同じ。〔諺語〕

比丘尼の頭（アタマ）に、島田結（ユ）ふ【句】不可能なる譬。〔諺語〕

比丘尼の櫛貯（クシタクハヘ）【句】「法師（ホフシ）の櫛貯」に同じ。〔諺語〕

びくに 美國【名】〔地〕後志國の十七郡の一。後志支廳の所管。

びくに-あしだ 比丘尼足駄【名】昔、比丘尼の專用せし下駄。齒の下面を□の形に造り、玉子捻（タマゴヒネリ）の鼻緒をすげたるもの。

びくに-ごしよ 比丘尼御所【名】德川時代に、皇女・王女、又は公卿・貴紳の息女などの出家せし者の住持たりし寺、又その住持たる皇女。皇女・王女の住持たりしを、御宮室といひ、公卿貴紳の息女等の住持たりしを、御禪室といひ、主として、京都及びその附近に存在し、奈良附近にも存し、宗旨は臨濟宗に屬する者、最も多かりき。尼御所。**もんぜき**（門跡）㊂參照。きのふはけふの物語「ある比丘尼御所、知行所へ、御遊山におこしなさるる」

びくに-せった 比丘尼雪駄・比丘尼雪蹈【名】昔、比丘尼の專用せし雪駄。裏面の革の後端を、踵の隱るる程に反（ソ）らせ、玉子捻（タマゴヒネリ）の鼻緒をすげたるもの。

ぴくにっく（英Picnic）【名】㊀野外の清遊。遊山。㊁各自飲食品を持寄りての宴會。

びくに-でら 比丘尼寺【名】比丘尼の住職たる寺。蕪村「紅梅や比丘より劣る比丘尼寺」

びくに-ぶね 比丘尼船【名】**くわんじんぶね**（勸進船）に同じ。二代男「比丘尼船の仕出（シダ）」

びくに-ん 比丘尼【名】**びくに**（比丘尼）の訛。狂言（比丘貞）「びく人の、烏帽子子（エボシゴ）を取る事は、これぞ、初の祝言なる」

比丘にんに、髭出せ【名】「比丘尼（ビクニ）に髭出せ」の訛。〔諺語〕昔米萬石通「百姓に捕物とは、びくにんに、髭出せの御難題ぢや」

びくに-や 比丘尼屋【名】昔、比丘尼㊁を抱へおきし家。びくにやど。

びくに-やど 比丘尼宿【名】前條に同じ。風俗文選（蕎麥切頌）「比丘尼宿の大寄（オホヨセ）に、錫の鉢をすゑ並ぶ」

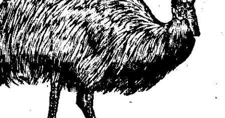
ひく-ひく【貌】氣力又は氣息の殆ど絕えて、辛うじて動くさま。ぴくぴく。奄奄。

びく-びく【貌】㊀『びっくりを見よ』絕えず怖ぢ恐るるさま。びくしやく。びっくりしやっくり。惴惴。㊁肉體の一部の、微かにふるへ動くさま。傾城酒呑童子「鼓も、耳にびくびく」

ぴく-ぴく【貌】前條㊁同じ。

びくびく-もの びくびく者【名】常にびくびくと怖ぢ恐れをる人。

ひくひ-どり 火食鳥・食火雞【名】〔動〕走禽類に屬する鳥。體形駝鳥に似て、やや小く、高さ約五尺、頭上に、淡黃黑色にして角質なる肉冠を戴き、嘴は扁く、頸部は短くして、頭部と同じく、羽毛を有せず、前面に紅色の肉垂あり、他部は黑色・毛髮狀の羽毛にて蔽はれ、簑を著けたるが如し。翼は小く、不完全なれども、脚は强大にして、よく奔馳するに適し、三箇の趾を具ふ。砂中に穴を穿ちて產卵す。濠洲ニウギニヤ（New Guinea）及びその附近の諸島に產す。小石・火燼などを食する性あり。羽毛は裝飾用に供す。かずわり。かずわる。かぞある。



（ひくひどり）

ひ-くひな 緋秧雞・緋水鷄【名】〔動〕なつくひな(夏秧雞)に同じ。

ひくま 引馬・引間・曳馬【名】〔地〕遠江國濱松市の古稱。**ひくまの**(引馬野)參照。東鑑「三品親王關東御下向也。……、廿五日、己酉、晝引間、夜池田」十六夜「引馬の宿といふ所に泊る。此所の大方の名は、濱松とぞいひし」

ひ-ぐま 羆【名】〔動〕『**しぐま**(羆)の轉訛なるべしとも、**ひ**は羆の字音なるべしともいふ』食肉類に屬する獸。普通の熊より大きく、體長、大なるは六七尺、毛はやや長くして、淡褐色又は暗褐色を呈し、光澤あり、幼きは、頸部に白輪を具ふ。齒・四肢共によく發達し、嗅官も亦甚だ鋭敏、性獰猛にして、力強けれども、聽力・視力共に鈍きため、捕獲せられやすし。巧に樹幹を攀ぢて、食を索め、或は溪流に來りて、魚類・蟹などを食す。北海道・西比利亞・カムチヤッカ・北米・歐羅巴などに產す。皮革は臥具・帽子・などに作り、肉と脂肪とは、食用に供し、腸の皮は、窓硝子の代用とし、又は假面(ン)に作りて、雪中の旅行に用ふ。あかぐま。しぐま。ひ。

ひくまじやう 引馬城・引間城【名】**はままつじやう**(濱松城)を見よ。

ひくまの 引馬野・引間野・曳馬野【名】〔地〕遠江國三方原(ミカタガハラ)の古稱。今の濱名郡曳馬村は、古名を傳へしものなるべしといふ。萬葉「引馬野に匂ふ榛原(ハリハラ)入りみだれ衣にほはせ旅のしるしに」東遊行囊抄「引馬野とも、或は濱松とも、古歌に詠めり。一所二名なり。或曰、濱松の庄、引馬野なりと」

ひく-み 低み【名】低き處。低き部分。曉野(胡及)「朝顏や低みの水に殘る月」

ひ-ぐみ 緋胡頽子【名】〔植〕**つるぐみ**(蔓胡頽子)に同じ。

ひ-ぐん 比郡【名】比鄰の郡。近郡。續紀「百姓口分、多授二比郡一」

び-くん 美君【名】**びじん**(美人)**三**に同じ。新可笑記「御寵愛の宮女……、この美君、兼ねて心痛の惱」置土產「鹽屋の藤崎といへる美君にこがれ」

び-くん 微醺【名】**びすゐ**(微醉)に同じ。

び-く-めく【動四自】**びくつく**に同じ。續無名抄「搐搦、ビクメク」

ひく-やか 低やか【貌】丈ひくきさま。ひきやか。ひきらか。

ひ-くらうど 非藏人【名】『非職の藏人の義』諸大夫の名家の子より選ばれ、昇殿を許され、藏人所に屬して、朝臣の雜用を辨ぜし官職。事務見習の如きものにて、六位の藏人に缺員生ぜし時、器に應じて補せらるるを例とし、定員四人若しくは六人なりしが、德川時代には、諸社の社司など、藏人の袍を著し、宮中に伺候して、女孺(ニヨジユ)代を勤むる者をも稱し、その數、二百人に及べり。非職(ヒシキ)の者。非職。

ひくらうど-ぶぎやう 非藏人奉行【名】德川時代に、非藏人を統轄せし役。納言・參議・三位の人、これを兼ねたり。

ひ-ぐらし 日暮【名】**一**〔動〕有吻類に屬する昆蟲。體小くして、長さ六分乃至一寸、擧動敏快なり。兩複眼の中央に、三箇の單眼あり。觸角短く、翅は透明にして長く、前翅は長楕圓形、後翅は、小くして、ほぼ三角形をなし、脈は綠褐色を呈し、前翅の端に黑點を列す。全身、褐色を帶ぶ。盛夏の候、日出及び日沒の頃鳴く。かなかな。かなかなぜみ。かんかんぜみ。〔茅蜩・蜩・寒蟬〕**二そのひぐらし**(其日暮)の略。一代男「西の宮のえびすまはし、日ぐらしの歌佛念」**三うたねんぶつ**(歌念佛)に同じ。日本永代藏「歌念佛の日暮といふは」**四みそ**(味噌)を云ふ。〔堂上方の語〕**五**〔植〕**うつぼぐさ**(空穗草)に同じ。**六**〔植〕**ねぶのき**(合歡木)を云ふ。〔周防國の方言〕

日暮の門【句】建築の美麗さに、人人見とれて、日の暮るるを氣附かずといふ門。織留「都につづく伏見の里、……、昔の春は、日暮の御門とて詠めし所も、間引葉(マビキナ)の畠となり」落穗集「豫州侯の御門、處がら人通も多く、見物人の絕ゆる間もなく、その頃、世間に於て、日暮の御門と申すよし」

ひ-ぐらし 日暮【副】ひねもす。終日。枕「日ぐらし見るに、目もたゆく苦しう」

ひぐらし-ぐさ 日暮草【名】〔植〕**なでしこ**(撫子)**一**の異稱。〔古語〕

ひぐらし-ごま 日暮獨樂・茅蜩獨樂【名】鳴る音の、茅蜩の聲に似たる獨樂。松風村雨束帶鑑「蟬の鳴く音や日ぐらし獨樂」

ひぐらし-に 日暮に【副】**ひぐらし**(日暮)に同じ。拾遺「日ぐらしに見れどもあかぬ女郞花野邊にやこよひ旅寢しなまし」曾根崎心中「愛で、晩まで、日ぐらしに、酒にするぢやと、贅言うて」

ひぐらし-の 日暮野【名】〔地〕**ひくれの**(日晩野)に同じきか。新撰後「ひぐらし野ゆきすぎぬるもかひもあらずひもとく妹の待たじと思へば」

ひぐらし-の-さと 日暮里【名】〔地〕『もと新堀(ニヒボリ)の意にて、**にっぽり**と云ひしに、日暮里の字を充て、それを、更に訓讀せるものといふ』東京府北豐島(キタトシマ)郡にある地。谷中(ヤナカ)の北に當る。德川時代には、春遊の名所たりしが、今、「にっぽり」の稱に復し、町制を布けり。

ひぐらし-ばう 日暮坊【名】歌念佛(ウタネンブツ)をうたふ男。日本永代藏「歌念佛の日暮といふは、伏見の御上代の時、諸大名の御成門(オナリモン)、軒を並べて輝き、……、かの京の鉦たたき、盂蘭盆(ウラボン)の頃、勸進に廻りしが、……それに心をとられ、……はや暮れて驚き、……空袋(アキブクロ)かたげて都に歸るを見て、人申し習はして、日暮坊と、その末末、今に名高し」

ひぐらし-もん 日暮門【名】**一**「日暮(ヒグラシ)の門」を見よ。**二やうめいもん**(陽明門)の別稱。

ひぐらし-やま 日暮山【名】〔地〕石見國美濃郡にある山。高さ五〇〇〇尺。後撰「日ぐらしの山路を暗みさ夜ふけて木(コ)の末ごとに紅葉照らせる」

ひくり【貌】**ひくひく**に同じ。

びくり・【貌】**びくびく**に同じ。一代女「これはと、びくりして、身をすくめ」

ぴくり【貌】**ぴくぴく**に同じ。

ぴくりん-さん ピクリン酸(英 Picrin acid)【名】〔化〕板狀又は柱狀の結晶をなし、淡黃色を呈する、一種の化合物。染料又は火藥に用ふ。

ひくる【動四自】**こまる**(困る)に同じ。〔肥後國の方言」

ぴくる 擔・扭【助數】**ぴこる**(擔)に同じ。

ひ-ぐるま 日車【名】〔植〕**ひまはり**(日廻)に同じ。

ひ-ぐれ 日暮【名】日のくれ方。ゆふぐれ。ゆふがた。たそがれどき。

ひ-ぐれ 檜榑【名】檜(ヒノキ)の丸太。名義抄「檜榑、ヒグレ」

ひくれ-ぐさ 日暮草【名】〔植〕**なでしこ**(撫子)**一**の異稱。

ひくれ-の 日晩野【名】〔地〕大和國吉野郡中莊(ナカシヤウ)村大字菜摘(ナツミ)にある野。

ひ-ぐろみ 日黑【名】日光に照されて、顏の色の黑くなること。ひやけ。長門平家「旅に出でてたまひたるしるしとおぼえて、日ぐろみして」

ひ-くわ 飛花【名】飛び散る花。

ひ-くわ 飛花・落葉(ラクエフ)【句】**一**春の飛び散る花と、秋の末の落ち散る葉と。謠曲(關寺小町)「飛花・落葉の折折は、好ける道とて、草の戸に硯を馴らしつつ、筆を染めて」**二**〔佛〕緣覺乘の人は、獨、山林に入りて、飛花と落葉とを見て、世の無常を覺り、涅槃(ネハン)の悟を開くといふにつきていふ語。異本曾我「卯の花の開きたるが落つるを取りて、飛花落葉のためし、目前なり。老少不定(フヂヤウ)の悲、爰に現る」謠曲(夜討曾我)「飛花・落葉のことわりと思し召されよ」

ひ-くわ 砒華【名】〔鑛〕『英 Arsenolite 又 Arsenic bloom』天然の亞砒酸。等軸晶系の八面體に結晶し、通常は、その白き集合體をなし、又は皮殼をなし、玻璃光澤又は絹光澤を呈す。

び-くわ 美化【名】**一**『英 Beautify』美しく變化すること、又美しく變化せしむること。**二じゆんくわ**(醇化)に同じ。

び-くわ 美花【名】美しき花。一代女「面影は、美花を欺き」

び-くわ 美果【名】**一**美しき果實。**二**よき結果。好結果。

び-くわ 薇科【名】〔植〕ぜんまいくわ(薇科)に同じ。

ひ-くわい 悲懷【名】悲しき思。うれひ。

ひ-くわい 鄙懷【名】自己の感懷の謙稱。

ひ-くわい 匪魁【名】匪徒の巨魁。

び-くわい 尾魁【名】すずつき(鈴附)に同じ。

ひ-くわう 飛黃【名】『淮南子の覽冥訓篇に出づ』背に角ありて、千年まで生くといふ、想像上の名馬。天馬の類。

び-くわう 微光【名】かすかなる光。微弱なる光。

び-くわう 備荒【名】豫め荒年に備ふること。凶年に對する準備をなすこと。

び-くわう 鼻廣・鼻荒【名】びかう(鼻高)に同じ。長秋記「仁澄著二鼻荒一參上」

びくわう-しよくぶつ 備荒植物【名】凶年の際、五穀の代用、又はその補充とする植物。例へば、甘藷(サツマイモ)・蕨(ワラビ)・薇(ゼンマイ)・菱(ヒシ)・栗・椎(シヒ)・櫧(カシ)・山芋(ヤマノイモ)などの類。救荒植物。

びくわう-ちよちく 備荒貯蓄【名】凶年に對する準備のために貯蓄すること、又その貯蓄したる物。

びくわうちよちく-きん 備荒貯蓄金【名】りさいきうじよきん(罹災救助基金)を見よ。

びくわう-はうでん 微光放電【名】〔理〕『英 Glow discharge』帶電體が、毛狀の微光を發して放電する現象。

びくわう-り 鼻廣履【名】びかうり(鼻高履)に同じ。和名「鼻高履、今僧侶所レ著、鼻廣履是歟」

ひ-ぐわし 干菓子・乾菓子【名】いつも乾燥狀をなせる菓子。(生(ナマ)菓子に對して) 三代男「薪・干菓子・番錢」

ひくわ-すゐそ 砒化水素【名】〔化〕『英 Arseniuretted hydrogen 又 Arsine』亞鉛に稀硫酸を加へて、水素を發生せしむる際に、砒素化合物の水溶液少量を加ふる時、水素と共に發生する、砒素と水素との化合物。無色・惡臭・劇毒の氣體にして、白烟を放ちて燃え、その焰に、白色の磁器を觸るれば、砒素遊離して、その面に、鏡の如くなりて附著し、謂はゆる砒素鏡を生ず。又この氣體を導く管を熱する時も、管の內面に、同樣の物附著す。

びくわ-はふ 美化法【名】〔文〕『英 Euphemism』讀者に、不快なる感觸を與ふべき事を、柔げて、美しく上品に言ひなす修辭法。例へば、遊蕩を「折花攀柳」、名物を食ふを「名物の箸を取る」といふ類。

ひ-くわん 被管【名】大寶令の制度にて、上官に直隷せし官。例へば、中宮職・內藏(クラ)寮・圖書寮等が、中務(ナカツカサ)省の被管なる類。

ひ-くわん 被官【名】『前條の語の管の字を官と書きて、轉用するに至りしもの』武家時代に、大・小名に隷屬して、その支配を受けし武士。ひせつくわん(被接官)參照。東鑑「熊谷二郎直實以下、平家被官之輩」太平記「公家(クゲ)被官の人」

ひ-くわん 祕卷・秘卷【名】容易に人に示さぬ書籍。秘密の文書。

ひ-くわん 祕館・秘館【名】ひかく(祕閣)㊁に同じ。

ひ-くわん 卑官【名】㊀階級の卑き官。賤しき官職。微官。㊁官吏の自稱。微官。

ひ-くわん 樋管【名】木の板にて作り、水を流通せしむるに用ふる、矩形の管(クダ)。

ひ-くわん 悲觀【名】㊀世界を、苦惡なるものと觀ずること。厭世觀を起すこと。(樂觀に對して) ㊁前途の望を失ふこと。絶望。

ひ-ぐわん 飛丸【名】飛び散り又は飛び來る彈丸。

ひ-ぐわん 悲願【名】〔佛〕佛・菩薩の大慈悲より發する誓願。慈悲の本願。卽ち、阿彌陀佛の四十八願、藥師如來の十二願など。盛衰記「口に彌陀の名號を唱へ、心に、引攝(インゼフ)の悲願を念ず」謠曲(土車)「凡そ彌陀の悲願には、破戒・闡提(センダイ)をも洩さず」

び-くわん 微官【名】㊀微賤なる官職。卑官。㊁官吏の自稱。卑官。

び-くわん 美官【名】すぐれたる官職。

び-くわん 美觀【名】美麗なる狀態。

び-くわん 美館・美舘【名】美麗なるやかた又旅館。

び-くわん 鼻管【名】〔醫〕淚囊より下行して、鼻の下腔に達せる管。

ひくわん-しゆう 被管衆【名】『地頭に支配せらるるよりいふ』ぢざむらひ(地侍)に同じ。

ひくわん-せつ 悲觀說【名】〔哲〕『英 Pessimism』えんせいくわん(厭世觀)に同じ。(樂觀說に對して)

びくわん-てうるゐ 美觀鳥類【名】色彩・形態・擧動などの、人目を樂ましむるがために飼養せらるる鳥類。例へば、鸚哥(インコ)・鸚鵡(アウム)・極樂鳥・丹頂鶴などの類。

ひくわ-らくえふ 飛花落葉【名】〔書〕慶長五年の頃より寬永六年の頃までの所在の落書を集錄せるもの。一卷。平賀源內の編。續史籍集覽に收む。

ひけ 引【名】㊀ひけること。退出。㊁勝負に負くること。まけ。おくれ。薩摩歌「女房かはいがったとて、ひけになるか、恥辱になるか」河原の達引「たとひ田舍に居るとても、心にひけのあるべきや」㊂肩身の狹きこと。嫋八卦柱曆「聟に無心言ひかけては、大事の娘に、ひけが附く」㊃商品の、價格の減ずること。㊄〔商〕おほびけ(大引)㊀の略。〔取引所の語〕㊅なかびけ(中引)とおほびけ(大引)㊂とを見よ。和合人「つい、ふらふらと素見(ヒヤカシ)に行(イ)って、九つ(ひけ)を打って」㊆ばんこ(番個)を見よ。

引が立つ【句】商品、缺點ありて、價減少す。

引を立つ【句】賣買せる品物に缺點などある時、相當の損害賠償をなす。

引を取る【句】負く。劣る。三河物語「ひけを取り、人に後指さされたる者」艷姿女舞衣「無理に引立(ヒッタ)て去(イ)んだは、娘にひけを取らせまいため」

ひ-げ 髭・鬚・髯【名】㊀主として、青年期以後の男子の鼻下・頤・頬の邊に生ずる毛。その位置によりて、髭(ウハヒゲ)・鬚(シタヒゲ)・髯(ホホヒゲ)と區別し、髭は、口ひげともいひ、鬚は、頤(アゴ)ひげともいふ。㊁陰部に生ずる毛。陰毛。宇治「衣の前を搔上げて見すれば、まことに、まめやか物は無くて、ひげばかりあり」㊂動物の口の邊に生ずる、長く銳き毛、又は觸角の俗稱。例へば、鯨のひげ、鯰のひげ、螽蟖(キリギリス)のひげなど。㊃ひげを生やしてある人。〔俚語〕㊄懷中時計、その他小形なる時計にて、細きぜんまいを、渦形に卷き、その內方の一端を、テンプの軸に固著し、外方の一端を、運動に關係なき部分に固著せしめしもの。これによりて、テンプに、振動等時性を與へ、廻轉運動の遲速を調節す。〔毛彈機〕

髭の塵助(チリスケ)【句】上官に媚ぶる、つまらぬ者。世間聽耳猿「髭の塵助」

髭の塵を取る【句】次條に同じ。諸藝太平記「太田屋六が髭の塵を取り」

髭の塵を拂ふ【句】「髭を拂ふ」に同じ。

髭を喰反(クヒソ)らす【句】髭を、口にくはへたる樣に生やし、その先端を反(ソ)り上りたるやうにす。(得意げなる態度の形容にいふ) 鶴筑波「髭くひそらし今日の喜(こといふ句に)子を生みし人に鯰の汁すゑて」根南志具佐「京の男の、髭喰ひそらして、あのおしやんす事はいな」

髭を反(ソ)らす【句】口を固く結びなどして、髭の反(ソ)り上るやうにす。(威を張る形容) 宇治「牙(キ)を咬み、髭をそらして居たり」

髭を拂ふ【句】『宋史の寇準傳に「初丁謂出二準門一至二參政一、事レ準甚謹。嘗會二食中書一、羹汚二準鬚一。謂起徐拂レ之。準笑曰、參政國之大臣、乃爲二官長一拂レ鬚邪」とあるに本づく』上官に媚ぶる形容。

鬚を燃(ヤ)く【句】『宋史に「韓魏公夜作レ書。侍兵執二燭傍一。燭然二公鬚一。以レ袖揮レ之、作レ書如レ故」とあるに本づく』度量の弘き形容。

ひ-げ 卑下【名】㊀『史記の武安侯傳に「武安侯新欲レ用レ事、爲レ相卑二下賓客一」とあり』へりくだること。高ぶらぬこと。謙遜。源氏「あまりひげしてもあらで、よきほどに、物なども聞ゆ」㊁『晉書の刑法志に「獄吏者、百姓之所レ懸レ命、而選用者之所二卑下一、王政之弊、未二必不一レ由レ之也」

とあり』 いやしみ見くだすこと。いやしきこと。下卑(ゲ)たること。 宇治「卑下なる聲にて、むといらへて立ちぬ」

卑下も自慢の中(チウ)【句】謙遜しながらも、自らその謙遜を美德なりとして誇るが、人情なり。ひげじまん(卑下自慢)參照。〔諺語〕

ひけ-あと 引跡【名】〔商〕立會(タチアヒ)の終りたる後に出來る直段。〔取引所の語〕

ひ-けい【名】おかげ。庇蔭。 傾城反魂香「貴殿の御ひけいにて、勅勘を許さるるも、一つは、娘が光ぞ」

ひ-けい 祕計・秘計【名】㊀祕密なる計略。 太平記「內奏・祕計に依り、只今までは朝敵なりつる者も、安堵を賜はり」 ㊁容易に人の知り得ざる計略。神策。

ひ-けい 鄙計【名】自己の計畫の謙稱。

び-けい 美形【名】㊀麗しき容貌。美貌。 一代女「姪婦の美形」 五十年忌歌念佛「さしも美形の淸十郎」 ㊁びじん(美人)㊂に同じ。

び-けい 美景【名】㊀美しき景色。㊁すぐれたる景品。(粗景に對して)

ひけ-いろ 引色【名】引けたる顏色。おぢけたる容子。 吉野忠信「一人の老人に引色見するは、臆病なり」

ひ-けう 飛橋【名】はねばし。つりばし。

ひ-けう 祕敎・秘敎【名】〔佛〕みっけう(密敎)に同じ。

び-けう 鼻竅【名】びこう(鼻孔)に同じ。

ひ-けういくてき 非敎育的【貌】敎育上の主旨に悖れるさま。

ひけういくてき-けうじゅ 非敎育的敎授【名】〔哲〕ヘルバルト派の敎育學にて、單に知識・技能を授くるに止まり、道念養成・品性陶冶の主旨に悖れる敎授。

ひ-けうさ-しゃ 被敎唆者【名】〔法〕『獨 Angestiftete Person』 他人に敎唆せられて、その敎唆に係る罪を犯せる人。(敎唆者に對して)

ひげ-かご 鬚籠【名】ひげこ(鬚籠)に同じ。

ひけ-かた 引方【名】〔商〕大阪堂島(ダウジマ)の米穀取引所にて、午前の立會(タチアヒ)を六節に分ちたる內の第三節、及び午後のを五節に分ちたる內の第二節。

ひげ-がち 髭勝・鬚勝【名】ひげの多きこと。 枕「ひげがちなる男の、椎つみたる」 榮花「この大臣(オトド)、ひげがちにて」

ひ-げき 悲劇【名】『英 Tragedy』 ㊀個人が、或目的のために、幾多の辛酸・艱苦と戰ひて、悲慘なる結果に終る事を脚色せる演劇。(喜劇に對して) ㊁悲慘なる人事。(喜劇に對して)

ひ-げき 飛檄【名】檄文を、急ぎて廻すこと、又その檄文。羽檄。馳檄。

び-げき 尾擊【名】つゐげき(追擊)に同じ。

ひけ-ぎは 引際【名】〔商〕立會(タチアヒ)の終る頃、又その頃の直段。〔取引所の語〕

ひけ-きん 引金【名】〔商〕送越(オクリコシ)取引にて、その月の受渡日の直段以下に、翌月受渡をなすべき契約をなしたる時、その月の直段より、翌月の直段を引き去りたる差額。〔取引所の語〕

ひげ-きり 髭切【名】『平家物語の劍の卷と平治物語の內裡勢揃の條とに出づ』 膝丸(ヒザマル)と共に、源氏累代の寶刀といひ傳ふるもの。共に、長さ二尺七寸。もと多田滿仲が、當時筑前國に渡來せし唐土の鍛工を招きて造らしめしもの。滿仲試みに罪人を斬らせしに、一は髭を加へて切り、一は膝を加へて切りしより、髭切・膝丸の名を附けたりといふ。又、一說に、髭切は、源義家、安部貞任を追討の時、生擒者十人の頭を切りしに、髭をも合はせて切りしより得たる名なりともいひ、保元物語には、膝丸を鎧の名とせり。

ひけ-ぐち 引口【名】分割して與ふべき處。分與すべき方面。

ひげ-ぐち 髭口【名】㊀口髭の生えてある口。 ㊁大人なる男の口。髭男の口。 百日曾我「辨慶親(オヤ)辨眞と僞りしを、鎌倉中の大名・小名のひげ口へ、らまうまと開しめしたるをかしさよ」

ひげ-くび 髭首・鬚首【名】顏にひげの生えたる首。 本朝三國誌「惟任(コレタフ)が髭首は、久吉(ヒサヨシ)が腰に附けたもの」

ひげ-ぐろ 髭黑・鬚黑【名】髭の、黑黑と生えてあること。 枕「髭黑に憎げなる人」 太平記「たけ七尺ばかりなる男の、髭黑に血まなこなるが」

ひけ-ご 引後【名】〔商〕立會(タチアヒ)の濟みたる後。〔取引所の語〕

ひげ-こ 鬚籠【名】竹籠の、編み殘したる部分の、鬚の如くなるもの。ひげかご。どぢやうかご。 中務集「正月七日、ひげこに、若菜入れて」

ひけご-あきなひ 引後商【名】〔商〕引後、相對にてなす賣買。取引所に屆け出づるによりて、立會(タチアヒ)中の賣買と同一に看做さる。〔取引所の語〕

ひけ-さうば 引相場・引相塲【名】〔商〕ひけねだん(引直段)に同じ。

ひげ-ざうむし 鬚象蟲【名】〔動〕まめざうむし(豆象蟲)を見よ。

ひ-けし 火消【名】せうばう(消防)に同じ。

ひけし-ぐみ 火消組【名】德川時代に、火消役一人の下に、與力六人、同心三十人にて組織せし組。初、四組を設置し、後、十組となり、更に十五組に達せしが、幕末には、また四組を存するに過ぎざりき。

ひけし-しやうぞく 火消裝束【名】くわじしやうぞく(火事裝束)に同じ。

ひけし-だうぐ 火消道具【名】火消に用ふる道具。

ひけし-つぼ 火消壺【名】熾火(オキビ)を入れ、蓋をし、密閉して、これを消すに用ふる壺。けしつぼ。すみけし。

ひけし-どうしん 火消同心【名】火消組の同心。

ひけし-にんそく 火消人足【名】德川時代の消防夫。とび。とびのもの。

ひげ-しば 鬚芝【名】〔植〕禾本科に屬する草。莖は根元より數本に分岐し、高さ七八寸に達し、葉は狹長にして、兩緣に細長き毛疎生し、莖・葉共にやや紫褐色を呈す。芒も毛も有せざる花、穗狀花序をなして開く。山野に自生す。

ひけ-しま 引島・引嶋【名】〔地〕ひこしま(彦島)に同じ。

ひげ-じまん 髭自慢・鬚自慢【名】髭の見事なるを自慢すること。ひげまん。

ひげ-じまん 卑下自慢【名】『ひげまん(卑下慢)及び「卑下も自慢の中」を見よ』 表面は卑下しながら、心の中にては自慢せること。

ひけし-やく 火消役【名】ぢやうびけしやく(定火消役)の略。

ひけし-やしき 火消屋敷【名】德川幕府より火消役に賜ひし役屋敷。江戶市內八代洲河岸(ヤヨスガシ)等諸所に在りて、邸內には、高さ三丈の火見櫓(ヒノミヤグラ)を設置し、附屬同心の火見番を備へたり。

ひけし-よりき 火消與力【名】火消組の與力。

ひけ-すぎ 引過【名】大引(オホビケ)の後、即ち夜の一時すぎ。〔東京の遊廓の語〕

ひけすぎ-うた 引過唄【名】東京の遊廓にて、引過に、廓內をながして步く、新內(シンナイ)節などの唄。

ひげ-すげ 鬚菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する草。高さ一尺。葉は根元より叢生して狹長、その質、寒菅(カンスゲ)のに似て硬く、花莖は叢生せる葉間より生じ、その頂上に、單性にして、一箇の穗狀花序をなせる雄花を著け、下部に、二箇の穗狀花序をなせる雌花を著く。

ひげ-そう 髭僧・鬚僧【名】下の文を見よ。 醒睡笑「人ありて、作善(サゼン)を勸むるに、僧と同じく、大俗列坐し、齋(トキ)を賜はるを、何者の言ひ出だしけん、鬚僧と、これを云ふ」

ひげ-だいもく 髭題目・鬚題目【名】㊀題目㊁を書くに、法の字の外の、六字の筆端を、鬚の如くに、左右四方に跳ね走らして書きたるもの。森羅萬象、悉く妙法の顯現・活動に外ならざる意を示すものといふ。はねだいもく。 ㊁拙き手跡を嘲りていふ語。

ひげ-たうじん 髭唐人・鬚唐人【名】㊀髭ある唐人。 ㊁支那人を嘲りていふ語。けたうじん。 國姓爺「髭唐人は和主(ワヌシ)よな」

ひけた-やき 曳田燒【名】ひきたやき(曳田燒)を見よ。

ひげ-だるま 髭達磨・鬚達磨・髯達磨【名】『達磨の顏は、髭多きさまに描くが普通な

るよりいふ』まる顏の、髭多くして、肥えたるを嘲りていふ語。

ひ-けつ 否決【名】會議に付したる議案を、成立せしむべからずと議決すること。(可決に對して)

ひ-けつ 祕結・秘結【名】大便の、しぶり滯りて、通ぜぬこと。便祕。

ひ-けつ 祕訣・秒訣【名】祕密の要訣。奧の手。奧義(アウギ)。

ひ-けつ 披抉【名】他の祕密をあばくこと。摘發。

ひ-けつ 碑碣【名】『碑は方形なる石碑、碣は圓形なる石碑の義』いしぶみ。石碑。

び-げつ 眉月【名】『眉の如く細き月の義』三日月(ミカヅキ)。新月。

び-げつ 彌月【名】『月を彌(ワタ)る義』一箇月をこすこと。

ひげ-づくり 髭作【名】髭のはやし方。蕪村「武者振の髭づくりせよ土大根」

ひけつ-しやう 祕結性・秘結性【名】祕結しやすき體質。

ひ-けっしやう 非結晶【名】〔鑛〕ひしやう(非晶)に同じ。

ひけっしやう-しつ 非結晶【名】〔鑛〕ひしやうしつ(非晶質)に同じ。

ひけっしやう-たい 非結晶體【名】〔鑛〕ひしやうたい(非晶體)に同じ。

ひげ-っ-つら 髭面・鬚面【名】ひげづら(髭面)の音便。

ひ-けってい-ろん 非決定論【名】〔哲〕じいういしろん(自由意志論)に同じ。

ひげ-つら 髭面・鬚面【名】髭の生えたる顏を罵りていふ語、又その人。ひげっつら。

ひけ-て 引手【名】圍碁にて、引目(ヒケメ)なる打方。

ひけ-どき 引時・退時【名】退散の時刻。

ひけ-どり 引鳥【名】一羽が飛び立てば、他もそれに引かれて共に立つ鳥。〔古語〕記「ひけ鳥の吾が引けいなば」

ひげ-にんじん 髭人參・鬚人參【名】〔植〕人參の類なる蔓草。高さ約一二寸。葉は人參のに似て小く、蔓は莖より分れ、地につきて根を生ず。根は藥用とす。

ひげ-ぬき 髭拔・鬚拔【名】毛拔にて、髭を拔き取ること。

ひげぬき-かがみ 髭拔鏡・鬚拔鏡【名】髭拔の時などに用ふる、小き鏡。俗曲(鬼怒川)「ここに髭拔鏡、稀有(ウケ)・怪幻(ケゲン)な御面相、それ、とっくりと見やしやれと」

ひけ-ね 引直・引値【名】㊀價を減ずること、又その價。ねびき。㊁〔商〕次條の略。〔取引所の語〕

ひけ-ねだん 引直段・引値段【名】〔商〕おほびけねだん(大引直段)に同じ。〔取引所の語〕

ひげ-ばうし 鬚帽子【名】熊の毛などにて鬚を植ゑつけたる帽子。

ひ-けふ 卑怯【名】卑劣にして、勇氣なきこと。臆病。

ひ-げふ 罷業【名】『罷の字の音、正しくはハイ』執務を罷(ヤ)むること。業務に就かぬこと。

ひ-げふ 非業【名】ひげふはかせ(非業博士)の略。

ひ-げふ 丕業【名】大なる業。鴻業。

ひげふ-の-みね 火氣布峰【名】〔地〕たかちほのみね(高千穗峯)に同じ。

ひげふ-はかせ 非業博士【名】國學㊁の博士の一。奉試及第せず、又、博士としての薦擧を蒙らずして任じ、俗務を事として、その職、史生(シシヤウ)と同じきもの。非受業博士。非業。

ひけふ-もの 卑怯者【名】卑怯なる人。

ひ-げぶり 火烟・火煙【名】火と烟と。火烟を散らす【句】激しく衝突する形容。凱陣八島「矢……左手の吹返(フキカヘシ)に、火烟ちらして立ったりけり」

ひげ-まひ 髭舞・鬚舞【名】髭を附けて舞ふ舞。若風俗「即座に髭舞と囃し出し、座中に腹抱へさせける」

ひげ-まん 髭慢・鬚慢【名】『次條の語に擬していへる語なるべし』ひげじまん(髭自慢)に同じ。宗因千句「かの澤にちっくりと咲く杜若(カキツバタ)（といふ句に）ひげまんをする野守なりけり」

ひげ-まん 卑下慢【名】〔佛〕四慢また七慢の一。ひげじまん(卑下自慢)參照。

ひけ-みち 引道【名】引けて行く方面。減少する所以。

ひげ-むしや 髭武者・鬚武者【名】㊀髭の多く生えてある武者。㊁髭のむさくろしく多く生えてあること、又その人。

ひげ-むしやくしや 髭むしやくしや・鬚むしやくしや【名】髭の、むさくろしく生えてあること。八笑人「眼の大きい、髭むしやくしやの、憎憎しいといふ面」

ひげ-むちや 髭むちや・鬚むちや【名】前條に同じ。

ひげ-むっちや 髭むっちや・鬚むっちや【名】前條の音便。白石噺「今一人は髯むっちや、目の大きい、熊か人かといふやうな」

ひ-けん 鄙見【名】㊀野鄙なる意見。㊁自己の意見の謙稱。愚見。

ひ-けん 披見【名】ひらきて見ること。太平記「告文(カウモン)を請け取りて、即ち披見せんとしけるを」

ひ-けん 比肩【名】『肩を比(ナラ)ぶる義』㊀並びて立ち、又は並びて歩むこと。㊁優劣なきこと。同等。

ひ-けん 疲倦・罷倦【名】疲れ倦むこと。疲勞。

ひ-けん 被堅【名】甲冑を著くること。

ひ-けん 疋絹【名】一疋の絹。ひきぎぬ。榮花「官の使部ばらに、ひけん賜はするほどのめでたさ」

ひ-けん 飛軒【名】びう(眉宇)に同じ。

ひ-けん 祕鍵・秘鍵【名】祕密の奧義。祕訣。祕鑰。醒睡笑「剃髮・染衣(ゼンエ)の僧、祕鍵をならふ」

ひ-げん 飛言【名】ひご(飛語)に同じ。

ひ-げん 鄙言【名】㊀野鄙なる言葉、ゐなかことば。鄙語。㊁自己の言葉の謙稱。

ひ-げん 鄙諺【名】鄙俗なることわざ。俚諺。

び-けん 美絹【名】美しき絹。よききぬ。盛衰記「飲食に能米(ノウマイ)八石、衣服に美絹八匹」

び-げん 美言【名】びご(美語)に同じ。

び-げん 微言【名】㊀『漢書の藝文志に「仲尼沒而微言絕」とありて、顏師古の註に「精美要妙之言」と見ゆ』すぐれてよきことば。微妙の語。㊁『列子の說符篇と呂覽の精諭篇とに「人可二與微言一乎」とあり』なぞ(謎)に同じ。

ひ-げんかう-はん 非現行犯【名】〔法〕現行犯及び準現行犯以外の犯罪、即ち犯罪事實と被告人との關係の明瞭ならざる場合の犯罪。

ひげんかうはん-にん 非現行犯人【名】〔法〕『英 Non-flagrant delictor』非現行犯の被告人。

ひけんげん-さうぎ 非權限爭議【名】せうきよくてきけんげんさうぎ(消極的權限爭議)に同じ。

ひげん-すう 被減數【名】〔數〕『英 Minuend』引算に於て、引かるる數。例へば、30—14=16に於ける30などの類。

ひけ-め 引目【名】㊀負くる氣味。缺點。㊁穀類・液體などの、引渡に際して、量目の減ずること、又その量目。

ひけ-もの 引物【名】『「引(ヒケ)が立つ」を見よ』缺點ありて、價の減りたる商品。八笑人「へん、面白くもねえ。そんな面(ツラ)を……。どうせ引物だ」

ひげ-やぐら 髯櫓【名】能(ノウ)の狂言の一。貧しき男、美髯を持てるため、祇園會(ギヲンヱ)の鉾持に選ばれたれども、自費にて、衣裳を調へざるべからざるため、妻、髯を剃り棄てても辭退せよと迫り、遂に近傍の女どもを驅り集めて、これを引き毟らんとせしかば、男、髯に要害の櫓を掛けて待ちたれども、負けて、大毛拔にて、髯を引き拔かるることを作りたるもの。

ひげ-やっこ 髭奴・鬚奴【名】奴㊁の、髭の多く生えたるもの。鎌髭(カマヒゲ)を生やせる奴。雙生隅田川「赤坂奴、髭奴」鶉衣「痂氣だまの川越(カハゴシ)の首に、髭奴のまたがりて」

ひけ-よつ 引四【名】中引(ナカビケ)の前、即ちおよそ今の夜十時頃。〔東京の遊廓の語〕萬紫千紅「色客の來るか來るかと待つ宵のよそに更けゆく引四の鐘」娼妓絹籭「折から、引四の拍子木を打つ」

ひけらかし-もの ひけらかし物【名】ひけらかす材料とする物。置土産「北國

衆は、文(ミ)を、國のひけらかし物に、人丸・貫之の筆より、おのおのの様の書捨を、大事にかけ」

ひけらかす【動四他】『ひからかす(光らかす)㊁の轉』**てらふ**(衒ふ)に同じ。一代女「纖の當ったを著た事は御座らぬと、八寸五分の袖口をひけらかし」膝栗毛「自慢らしく内中(ウチ ユウ)の者にひけらかすから」

ひ-げらふ 日下臈【名】六位の藏人(クラウド)四人の、日ごとに、一人づつ交代して、朝夕の供御(ゴク)に伺候し、その他の雜事をも務めしもの。

ひける 引ける【動下一自】㊀その日の職務濟みて、退き歸る。まかる。〔退ける〕㊁氣おくれす。臆す。遠慮せらる。負く。置土產「少しも引けぬ心根」曾我會稽山「兎(ウ)の毛ほども、祐經引ける扱ならば」㊂賣買に、價減ず。㊃或方面に引き取られ、又消費せらる。㊄碇、ずり去る。

ひげ-をとこ 髭男・鬚男・髯男【名】㊀ひげの多く生えてある男。髭を蓄へてある男子。太平記「むくつけげなる髭男」今國姓爺「髭男の朱一貫」㊁男子を、女子・小兒などと區別していふ稱。有鬚男子。

ひこ 小舌【名】**のどびこ**(喉小舌)に同じ。

ひ-こ 彥【名】男子の美稱。(姫に對して)〔古語〕

ひ-こ 孫【名】『ひは接頭語。こは子の義』子の子。まご。うまご。〔古語〕和名「孫、無萬古、一云、比古」

ひ-こ 曾孫【名】『ひひこ(曾孫)の略』孫の子。ひまご。ひいまご。曾孫(ソウソン)。

ひ-こ 貔虎【名】〔動〕虎の族なりといふ、一種の獸。㊂ひきう(貔貅)㊂に同じ。

ひご 籤【名】線狀に細く割りたる竹。籠に編み、又、提燈(チヤウチン)の骨などにす。

ひ-ご 鄙語【名】**ひげん**(鄙言)㊀に同じ。

ひ-ご 卑語【名】いやしきことば。下等なる言語。

ひ-ご 庇護【名】かばひ護ること。庇ひ「助くること。保護。

ひご 肥後【名】〔地〕西海道十二國の一。熊本市及び飽托(ハウタク)宇土・玉名・鹿本(カモト)・菊池・阿蘇・上益城(カミマシキ)・下益城・八代(ヤツシロ)・葦北(アシキタ)・球磨(クマ)・天草(アマクサ)の十二郡に分たれ、全國、熊本縣の管轄に屬す。

ひご 飛子【名】〔動〕**つばくらめ**(燕)を云ふ。〔播磨國の方言〕

ひ-ご 飛語・蜚語【名】無根なる事のうはさ。いひふらし。飛言。「流言・飛語」

ひ-ご 悲語【名】なげきのことば。かなしげなることば。

び-ご 美語【名】㊀よきことば。嘉言。美言。㊁うまきことば。甘言。

ひこいさせりひこ-の-みこと 彥五十狹芹彥命【名】〔人〕**きびつひこのみこと**(吉備津彥命)に同じ。

ひこいつせ-の-みこと 彥五瀨尊【名】〔人〕神武天皇の御兄。東征の途次、河內國にて、長髓(ナガスネ)彥と戰ひて、流矢に中り、遂に紀伊國竈山に至りて薨じたまふ。單に五瀨尊ともいふ。**かまやまじんじや**(竈山神社)參照。

ひ-こう 皮工【名】皮細工の工人。

ひ-こう 罷工【名】『罷の字の音、正しくはハイ』仕事を罷むること。ひげふ。

ひ-こう 罷講【名】『罷の字音、正しくはハイ』經文などの講義を終了すること。

ひ-こう 肥厚【名】肥えて、厚くなること。あつみ。ふくらみ。

ひ-こう 皮孔【名】〔植〕**ひもく**(皮目)に同「じ。

ひ-こう 蜚鴻【名】〔動〕**かつをむし**(蠛蠓)の漢名。

び-こう 鼻孔【名】鼻のあな。はなめど。「鼻腔。鼻竅。

び-こう 鼻口【名】㊀鼻と口と。㊁鼻孔の口もと。

び-こう 微功【名】微小なる功績。

び-こう 獼猴【名】〔動〕さる。ましら。沐猴(モクコウ)。獼猴(ミコウ)。

獼猴が帝釋天を嘲る【句】「獼猴(ミコウ)が帝釋天を嘲る」を見よ。

獼猴、水月を捉ふ【句】「獼猴(ミコウ)、水月を捉ふ」を見よ。

ひ-こうけん-にん 被後見人【名】〔法〕『英 Ward』後見に付せられたる人。即ち禁治產者なると、親權を行ふ者なきとの場合、及び親權を行ふ者あれども、管理權を有せざる場合の未成年者。

ひ-こうしき 非公式【名】公式にあらざること。表だちたる方式にあらぬこと。

びこう-しっしん 鼻口濕疹【名】〔醫〕鼻腔の下端に發する濕疹。

びこう-ずるめ 尾叺鯣【名】二番鯣の一種。尾部と胴との中央を、竹串にて貫き、麻殼にて、頭部を開張し、一日間日光に乾して、竹串を拔き去り、蓆の上に並べ、乾燥して伸ばし、形を整へたるもの。隱岐國・出雲國の特產。あなあきずるめ。

ひ-こうそ-にん 被控訴人【名】〔法〕控訴審に於ける控訴人の相手方。

ひこ-え 孫枝【名】枝より更に生ずる枝。〔古語〕萬葉「國も狹(セ)に生ひ立ち榮え春されば孫枝萠(モ)いつつ」字鏡「杪、比古江」

ひこ-おび 彥帶【名】『引(キヒ)帶の轉なるべしといふ』**つけひも**(附紐)に同じ。俳諧溫故集(一漁)「彥帶を母はひかへて柳かな」

ひご-ぎせる 肥後烟管【名】寬永の頃、肥後國にて製造し、流行せし烟管。熊本烟管。色音論「丹波烟草に肥後ぎせる」

ひ-こく 被告【名】〔法〕㊀訴訟事件に於ける、訴へられたる方、即ち原告の相手方。(原告に對して)政事要略「雖ㇾ不ㇾ拷二被告之人一、拷二傍證之者一」㊁刑事以外の訴訟事件に於ける、訴へられたる方。

ひ-こく 避穀【名】火食せぬこと。

ひご-くさ ひご草【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。高さ七八寸に達す。根莖の蔓延によりて繁殖し、葉は狹長。五月頃、葉間より花莖抽出し、その上端に、一箇の穗狀花序に排列せる雄花を著け、下部に、二三箇の穗狀花序をなせる雌花を著く。山野に自生す。

ひこく-じけん 被告事件【名】〔法〕『獨 Anklagefall』檢事又は司法警察官の搜索中の犯罪事件と、豫審又は公判にて審理中の犯罪事件との併稱。

ひ-こくじはん 非國事犯【名】〔法〕『獨 Nichtpolitisches Verbrechen』**じやうじはん**(常事犯)に同じ。

ひこく-にん 被告人【名】㊀被告たる地位に立つ人。㊁〔法〕刑事訴訟に於ける原告の相手方、即ち檢事より公訴せられたる人。(原告人に對して)

ひこくにん-こうりう-れいじやう 被告人勾留令狀【名】裁判所が、勾留すべき被告人に交付する令狀。

ひご-ぐは 肥後鍬【名】肥・筑地方にて用ふる風呂鍬。柄短く、その著基部に於て、著しく彎曲せり。

ひ-こくみん 非國民【名】國民としての觀念薄く、その義務に戻る行爲ある者。

ひ-ごけにん 非御家人【名】武家の臣下の、身分卑くして、知行なき者。

ひご-けん 庇護權【名】〔法〕**いんとくけん**(隱匿權)に同じ。

ひこさ 彥三【名】〔人〕**ひこさぶらう**(彥三「郎)の略。

ひこ-さしり-の-みこと 彥狹知命【名】『狹知は、度量をさし測りて知る義といふ』太玉(フトダマ)命に隷屬し、手置帆負(タオキホオヒ)命と共に、工匠を守りたまふといふ神。紀伊國の忌部(インベ)氏は、その後裔。

ひこさぶらう 彥三郎【名】〔人〕**ばんざうひこさぶらう**(坂東彥三郎)を見よ。

ひこ-さん 彥山【名】〔地〕**えひこさん**(英彥山)に同じ。

ひこさん-かたきうち 彥山敵討【名】安藝國廣島の城主毛利輝元の臣京極內匠(タクミ)、同藩の武術師範吉岡一味齋の長女を娶らんとせしに、一味齋の許さざりしに起因する敵討。天正十四年、內匠、一味齋を周防國岩國に殺して遁れしが、豐前國彥山の麓に毛谷村(ケヤムラ)六助といふ農民あり、彥山權現に祈りて、武術に練達す。內匠(當時の名、微塵彈正)の奸計によりて、試合の不義を憤れる折柄、一味齋の三女の來りて、助力を求めしため、翌年、長女の婿と稱し、三女をして、小倉城下に仇を復せしめたり。

ひこさん-ごんげん 彥山權現【名】**ひこさんじんじや**(彥山神社)の舊稱。

ひこさん-ごんげん-ちかひ-の-すけだち 彦山權現誓助劒【名】梅野下風・近松保藏の合作に係る淨瑠璃。毛谷村（ケヤムラ）六助の彦山敵討を、眞柴久吉（マシバヒサヨシ）卽ち豐臣秀吉の朝鮮征伐に結びつけて作れるもの。宮本武藏の復讐譚に本づく所多し。

ひこさん-じんじや 彦山神社【名】えひこさんじんじや（英彦山神社）に同じ。

ひこさん-しゆう 彦山衆【名】彦山派の山伏衆。

ひこさん-は 彦山派【名】修驗道（シユゲンダウ）の一派。豐前國田川郡彦山權現を本山とし、當山にて修行せしもの。中世以後より起り、戰國時代の盛時には、堂塔甍を駢べ、三千の山伏住居し、兵仗を蓄へ、富强諸侯に比せりといふ。

ひこざゑもん 彦左衞門【名】㊀［人］おほくぼひこざゑもん（大久保彦左衞門）を見よ。㊁田舍武士を嘲りていふ語。新五左。

ひ-ごし 日越【名】製造してより、日數を經てあること。鶉衣「ひしげたる小家に、日ごしの燒餅を食ふ」

ひこ-しま 彦島・彦嶋【他】【名】［地］下關（シモノセキ）海峽の西口に橫はれる島。長門國豐浦郡に屬し、六連（ムツ）島と共に、彦島村を成す。周回六里十六町。別稱、引島。

ひこ-じらふ 引こじらふ【動四他】とやかくして引く。ひっぱる。ひきずる。ひきじろふ。ひこづらふ。源氏「久しくひこじろひて、明けて入りたまふ」

ひこずり-どうふ 引摺豆腐【名】ひきずりどうふ（引摺豆腐）を云ふ。［備後國の方言］

ひこ-ずる 引こずる【動四他】引きずる。引き附く。壽の門松「三日ひこずる、摑んだ」

ひご-ずゐき 肥後芋苗【名】肥後國に產する白芋（ハスイモ）のずゐき。膾として、味美なり。重井筒「柄杓・緋緞子・蕓（ヒキガヘル）……ひらのやゑきやう・肥後ずゐき」

ひご-たい 平江帶【名】㊀支那宋代に、平江府、卽ち今の江蘇省蘇州府より產出せし帶。びんごうたい。庭訓往來「布衫・平江帶」㊁［植］菊科に屬する多年生の草。高さ二尺に餘る。葉は野薊（ノアザミ）のに似て刺なく、厚く、羽狀に分裂して互生す。秋、筒狀・青紫色の花冠を有する、球狀の頭狀花開き、各花に小穗苞あり。九州・臺灣等に自生す。平江帶（ヘイカウタイ）。

ひごたい-もどき 平江帶擬【名】［植］きくあざみ（菊薊）に同じ。

ひこ-たらう 比古太郎【名】夏の雲を云ふ。［九州の方言］

ひこ-ぢ 彦父【名】をっと（夫）の敬稱。［古語］記「その妻（メ）須勢理（スセリ）姬の命、蛇（ヘミ）の比禮（ヒレ）を、その夫（ヒコヂ）に授けて」

ひ-こつ 腓骨【名】［醫］下腿骨の一。細長くして、やや三角形をなし、脛骨と並びて、下腿の外側に位す。上端、僅かに方形にして、膨大せる分を、腓骨小頭と稱し、脛骨の腓骨關節面に接合し、下端の、扁平にして、三角なる部分を、外踝と稱す。

び-こつ 尾骨【名】尾のほね。太平記「羊、遂に二の角と、一の尾骨を突き折って」

び-こつ 鼻骨【名】［醫］顏面骨の一。一對あり。上顎骨の間にありて、鼻梁骨部の穹窿を閉合するもの。扁平にして、鑿狀をなし、前頭・上顎及び篩骨に接す。

ひこ-つかす【動四他】ひこつくやうにす。ひこひことせしむ。膝栗毛「蒲燒の匂に、二人は、鼻の先をひこつかし」

ひこ-つく【動四自】ひこひことす。浮世風呂「鼻をひこつかせて、ああ臭い」八笑人「私（ワツシ）が、鼻をひこつかせて」

ひこつ-しんけい 腓骨神經【名】［醫］坐骨神經の二分枝の一。腓骨に沿ひて下行し、更に深淺腓骨神經に分岐す。

ひご-つば 肥後鍔【名】肥後國熊本の鍔師なる重治の子孫と門弟との製作せる鍔。

ひこ-づらふ 引こづらふ【動四他】㊀ひこじらふ（引こじらふ）に同じ。［古語］萬葉「そほ舟に綱とりかけて引こづらひありなみすれど」㊁つかむ。つかむやうにす。［挐ふ・攫ふ］太平記「大鼓……臺には、八龍を挐（ヒコヅ）らはせたるが」

ひ-ごと 火事【名】くわじ（火事）に同じ。

ひ-ごと 日每【名】ひび。日日。每日。拾遺「秋風し日每に吹けばわが宿の岡の木の葉は色づきにけり」日中行事「日ごとの招魂の御祭」

ひこなぎさたけ-うがやふきあへず-の-みこと 彦瀲武鸕鷀草葺不合尊【名】あまつひだかひこなぎさたけうがやふきあへずのみこと（天津日高彦瀲建鷀草葺不合尊）の略。

ひご-にふだう 肥後入道【名】六月頃現るる白雲。［出雲國の方言］

ひこね 彦根【名】［地］㊀『犬上（イヌガミ）の縣主（アガタヌシ）の祖なる天津彦根尊を祀れる山の名より出づといふ』近江國犬上（イヌガミ）郡にある町。國中第二の都邑。琵琶湖の東岸。鐵道東海道線の一驛、同近江線の分岐點に當る。井伊氏の舊藩地。㊁明治の初年設置の縣の一。明治四年七月、近江國舊彦根藩の地に立てしもの。同年十一月、長濱縣に入り、長濱縣は、後、犬上縣と改稱し、更に滋賀縣の一部となれり。

彦根を言ふ【句】時代おくれの、頑固なる意見を吐く。［足利時代の語］おあん物語「今時の若い衆は、衣類の物ずき、心を盡し、黃金（コガネ）を費やし、食物に、いろいろ、好みごとを召される、沙汰の限な事とて、又しても、彦根の事をいふと叱りたまふ故、後後には、兒ども、しこ名を、彦根婆婆と云ひし。今も、老人の、昔の事をいひて、當世に示すをば、彦根をいふと、俗說にいふは」

ひこね-じやう 彦根城【名】近江國彦根町にある城。慶長八年井伊直勝の起工に係り、二十年にして成る。周圍一里、德川氏、京畿鎭壓の城地として、重要視せり。

ひこね-たちばな 彦根橘【名】紋所の一。橘を、太き輪の内に入れたるもの。舊彦根藩主井伊氏の家紋として名あり。

ひこね-は 彦根派【名】［文］俳諧の正風體の一派。近江國彦根の俳人森川許六の風を傳ふるもの。

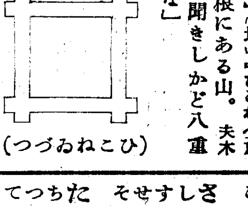
ひこね-ばば 彦根婆婆【名】「彦根を言ふ」を見よ。

ひこね-びやうぶ 彦根屛風【名】舊彦根藩主井伊伯爵家に藏する、風俗畫の屛風。現存せるは一隻のみにて、士女の、圍碁し、三絃を彈じなどして、遊樂に耽れる狀を描けり。岩佐又兵衞の筆と傳ふ。

ひこね-ぼり 彦根雕・彦根彫【名】近江國彦根の鍔師なる喜多川秀典一派の鍔の彫方、又その鍔。武者・仙人などを插透（イケスカシ）にせるものにて、衣裳に、布目象眼を施し、圖樣簡樸なり。

ひこね-やま 肥根山【名】［地］『ひこね（彦根）㊀を見よ』近江國彦根にある山。夫木「ひこね山あまねき門と聞きしかど八重の雲井にまどひぬるかな」

ひこね-ゐづつ 彦根井筒【名】紋所の一。舊彦根藩主井伊氏の家紋。下の圖を見よ。



（ひこねゐづつ）

ひご-の-かみ 肥後守【名】ナイフやうの、一種の小刀。

ひご-の-みや 彦後宮【名】［人］せいせいしやうぐんのみや（征西將軍宮）に同じ。

ひこ-ばえ 蘖・孫生【名】ひこばゆること、又その芽。わかばえ。またばえ。和名「蘖、比古波衣」

ひこばえ 比古婆衣【名】［書］日本書紀考・日本紀年曆考・仁倍魚の事、月日の蝕を「ばえ」といふ事等、諸種の考證を集錄せるもの。十六卷。伴信友の著。

ひこ-はち 彦八【名】まめざう（豆藏）㊀を見よ。［大阪の語］

ひこ-ばふ 蘖ふ【動下二自】次條の訛。字鏡集「蘖、ヒコバフ・ククサ」

ひこ-ばゆ 蘖ゆ【動下二自】『孫生（ヒコバ）ゆの義』伐りたる根株より、芽出づ。［古語］堀次「見渡せば山田のひつぢひこばえて穗に出づるほどになりにけるかな」

ひ-ごひ 緋鯉【名】［動］鯉の一品種。全身赤く、又は灰白色に赤色を混じ、又は黑・白相交れるもあり。愛玩用にして、食用には適せず。

ひ-ごひ 日乞【名】晴天にならんことを祈ること。

ひこ-ひこ【名】ひこのひこ。狂言（二千石）「ひこひこ・おほぢ・曾祖父・親である者」

ひこ-ひこ【貌】㊀ひくひくに同じ。俳家奇

人談（惟然）「彦山の鼻はひこひこ小春かな」 **二** 身ぶるひして、悔しがるさま。千両幟「何ぢや。なに、ひこひこするのぢや」

ひご-びは 肥後琵琶【名】薩摩琵琶の類にて、肥後國より行はれ初めしもの。

ひご-びやくぜん 肥後白前【名】〔植〕**ろくをんさう**(鹿園草)に同じ。

ひ-ごふ 非業【名】〔佛〕定業(ヂヤウゴフ)にあらぬこと。前世の惡業(アクゴフ)に依るにあらぬこと。 非命。 太平記「冥途に趣きたまふといへども、非業なれば、蘇生すべし」

非業の死【句】非業にして死ぬること。思ひがけぬ災にて死ぬること。假名手本忠臣藏「勿體ないが、父様は、非業の死でも、御年の上」

ひこ-ふね 引こ船【句】**ひく**(引く)の條下を見よ。

ひこ-べゑ 彦兵衞【名】『もと三馬の「浮世床」に記されたる人物の名』**かけあひ**(掛合)**二**を云ふ。〔江戸の語〕八笑人「なんでも、彦兵衞で（彦兵衞とは、御存じの通言、掛合の事）、おもいれ並べ立てよう」

ひこ-ぼし 彦星【名】『彦は男の義』俗に織女星(タナバタ)の夫なりといふ星。天文學上、鷲座に屬する河鼓の別名。二十八宿なる牛宿（牽牛ともいふ）の度分に在り、銀河の東南に位し、銀河を隔てて、織女星と相對す。いなみぼし。いぬかひぼし。かはつづみ。牽牛星。和名「牽牛。一名、河鼓、比古保之。又、以奴加比保之」

ひこほほでみ-の-みこと 彦火火出見尊【名】**あまつひだかひこほほでみのみこと**(天津日高彦火火出見尊)の略。

ひこほほでみのみこと-ゑことば 彦火火出見尊繪詞【名】〔美〕彦火火出見尊が、兄君なる火闌降(ホノスセリ)尊と、海の幸(サチ)と山の幸(サチ)とを交換せりといふ傳説を描きたる繪卷。一巻乃至四巻の數種あり。筆者に關しても、種種の説あり。

ひご-ぼり 肥後雕・肥後彫【名】肥後鐔の彫刻の風。多くは、梅の木・桐などの模様を透彫(スカシボリ)とし、品位に富む。

ひご-まい 肥後米【名】肥後國より産出する米。

ひこ-まご 曾孫【名】**ひまご**(曾孫)に同じ。

ひこ-まつじ 曾孫末寺【名】末寺の末寺の、その又、末寺なるもの。（直(ヂキ)末寺・孫末寺に對して）

ひこ-みこ 彦御子【名】天子の、男の御子。皇子。（姫御子に對して）〔古語〕

ひ-こん 悲恨【名】かなしみうらむこと。

ひ-こん 疲困【名】つかれはつること。

ひ-こん 緋紺【名】**ひこんいろ**(緋紺色)に同じ。

ひ-ごん 非言【名】非難の言。抗言。抗辯。松風村雨束帶鑑「北の御方、非言して」

ひ-ごん 祕錦・秘錦【名】**ひごんき**(緋金錦)に同じ。續紀「祕錦冠」空穗「二三十萬疋の、綾・ひごんを數へ納めても」

ひ-ごん 比金【名】**ひごんあを**(比金襖)の略。増鏡「比金の狩衣」

び-こん 鼻根【名】〔佛〕五根の一。即ち鼻。香氣に接觸して、知覺を生ずるもの。

び-こん 美魂【名】〔哲〕『獨 Schöne Seele. 獨逸のシルレル(Schiller)の命名に係る』感情と理性と、自然的性向と道德的希務との調和せる狀態。

ひごん-あを 比金襖【名】**一** 襲(カサネ)の色目の一。表は黄ばめる青、裏は二藍。ひごんなう。**二** 織色の一。經(タテ)は青黑、緯(ヌキ)は黄。太平記「浮線綾の比金襖の狩衣」

ひこん-いろ 緋紺色【名】赤くして、光澤を帶びたる紺色。ひこん。

ひごん-き 緋金錦【名】金襴などの類にて、金を織り附けたる錦なりといふ。ひごん。〔古語〕源氏「綾・ひごんきなど、今の世の物に似ず」

ひごん-なう 比金襖【名】**ひごんあを**(比金襖)に同じ。

ひ-ごもり 日籠【名】日ごもること。

ひ-ごもる 日籠る【動四自】神佛に、毎日參籠す。甲陽軍鑑「御跡目御運長久のために、諏訪へ日ごもる事」

ひ-こり 氷凝・冰凝【名】氷のかたまり。氷塊。謠曲（求塚）「澤邊なるひこりは、薄く殘れども」

ぴこる 擔・担（英 Picule 又 Pecul 又 Pekul）【助數】支那フイリッピン・暹羅(シャム)・瓜哇(ジャワ)等、東洋及び南洋方面の各地に廣く使用せらるる、秤目の單位。その値、土地によりて、多少異なれども、大約我國の百斤、即ち十六貫に當る。ぴくる。

ひ-ごろ 日頃【名】**一** 日數の重なること。多くの日。數日。土佐「手をひてて寒さも知らぬいづみにぞ汲むとはなしに日頃經にける」 **二** ふだん。つね。平生。平常。〔日來〕玉葉「よしさらば恨み果てなんと思ふまに日頃覺えぬあはれきぞ添ふ」 **三** このごろ。近ごろ。數日來。〔日來〕拾遺「空とぢて又この暮のいかならん日頃の雪に跡は絶えにき」芭蕉「花ざかり山は日ごろの朝ぼらけ」

ひ-ごろ 緋呉絽【名】緋色の呉絽。

ひ-ごろう 緋呉絽【名】前條に同じ。八笑人「緋呉絽の帶を締め」

ひころふ 孛ふ【動四自】彗星の長く尾を引く意なるべし。〔古語〕紀「有レ星孛二于天一（ホシ、ソラニヒコロヘリ）」

ひ-こゑ 乾聲・失聲【名】音聲の嗄れて出でぬこと。かれごゑ。〔古語〕和名「失聲、食療經云、食熱膩物、勿飲酢漿、失聲、嘶咽。師說、失聲、比古惠、嘶咽、古路路久」

ひご-をみなへし【名】〔植〕**一** きをん **一** に同じ。**二** しをん(紫苑) **一** に同じ。

ひさ 久【名】久しきこと。〔古語〕萬葉「梓弓引く豐國の鏡山見ず久ならば戀しけんかも」古今「すみのえのまつほど久になりぬればあしたづの音に鳴かぬ日ぞなき」

ひざ 膝【名】大腿の下部と下腿の上部との關節部の前面、又その部分より股までの間。

膝で京(キャウ)へ上(ノボ)る【句】「膝頭(ヒザブシ)で江戸へ行く」に同じ。〔諺語〕

膝とも談合【句】**一** 思案にくれたる時は、相談相手の欲しさに、抱ける己が膝をさへ相手として、相談する氣になる義。「膝を抱(イダ)く」參照。**二** 如何につまらぬ者を相手としても、相談すれば、それだけの甲斐はあり。〔諺語〕傾城反魂香「膝とも談合と申す」

膝の胴(カハラ)【句】**ひざかはら**(膝胴)に同じ。〔古語〕和名「膝胴、比佐乃加波良。野王按、髕、膝骨也」

膝の口【句】**ひざがはら**(膝胴)に同じ。謠曲（朝長）「膝の口を射させ、とかく煩ひたまひしが」

膝の聲【句】膝を打ちて、拍子を取る聲とも、鼓(ヒザ)を叩く聲とも、又、ひざは、諸物の拍子ならんともいふ。神樂（竈殿歌）「とよへつひ御遊(ミアソビ)すらし久方のあまの河原にひざの聲する」

膝の皿【句】**一** **ひざさら**(膝皿)に同じ。油糟「割れも割れたり繼ぎも繼ぎたり（こいふ句に）膝の皿痛みもあらぬ疵藥」 **二** ひざ(膝)を云ふ。〔中國の方言〕

膝の骨【句】**ひざぼね**(膝骨)に同じ。字鏡集「髕、賓骨、ヒザノホネ・ヒザノアハタ・アハタコ」

膝を抱く【句】我と我が膝を抱く。（孤獨なる生活の形容）新六「さりとてはさもあらましの床中に膝をいだきて幾夜あかしつ」

膝を容(イ)る【句】狹き場所に坐る。奧の細道「蜑の苫屋に膝を容れて、雨の霽るるを待つ」

膝を送る【句】居並べる人人、順次に、ゐざりて、身を移す。

膝を屈む【句】「膝を屈す」に同じ。太平記「我等を御助け候へと、手を合はせ、膝を屈め」聟女五枚羽子板「位牌・知行に膝を屈むる臆病者」

膝を固む【句】**一** 兩膝を固く合はす。一代男「色色嚇せば、女心の、はかなく押籠められて、聲をも得立てず……、膝を固め、泪を流し」 **二** 興行場などにて、客の來り集まるを待つ。

膝を屈す【句】**一** 膝を折り曲ぐ。かがみ伏す。**二** 屈服す。屈從す。膝を折る。腰を折る。

膝を崩(クヅ)す【句】端坐せる姿勢を崩して、樂に坐る。たひらに居る。

膝を組む【句】**一** あぐらをかく。足を組む。盛衰記「外侍(ソトサブラヒ)には、諸國の

大名、膝を組みて並み居たり」㊁相手の人と、膝を組み合はすやうに向ひあひて坐る。膝を交へ組む。同席す。膝を交ふ。㊂對等に著座す。膝を交ふ。源氏冷泉節「一門の參會にも、きやつ等と膝を組まんこと、伊東の家の瑕瑾なり」

膝を抱(イダ)く【句】㊀他人の膝頭を抱き込む。(媚び諂ふ形容) 甲陽軍鑑「前能き衆をば、中中重んじ……、御膝をだき入り頼み奉るべきと……、臺所よりねり入る程の器用者なれば」㊁「膝を抱(イダ)く」に同じ。俳諧新選（練石）「膝抱いて昔を思ふ暑さかな」

膝を正(タダ)す【句】坐りなほして、姿勢正しくす。膝を直す。

膝を突く【句】ひざまづく(跪く)に同じ。源氏「御前に出でて、御階(ハシ)の左右に膝をつきて奏す」盛衰記「右の膝を突き、左の膝を立てて」

膝を直(ナホ)す【句】「膝を正す」に同じ。源氏冷泉節「古の御主筋ぞと傅(カシヅ)きに、影も踏まず、後にせず、膝もなほさず。慇懃に」膝栗毛「やあ、來(ク)るぞ、來るぞと、膝を直してゐると」

膝を蹈む【名】膝を突き立つ。枕「落蹲(ラクソン)は、二人して、膝ふみて舞ひたる」

膝を交(マジ)ふ【句】「膝を組む」㊁に同じ。散木「かけまくもかしこき法(ノリ)のひじりとや忝くも膝をまじへん」

膝を折る【句】㊀「膝を屈す」㊁に同じ。著聞「鹿六十頭、膝を折りて、地に伏して、上人を敬ひけり」㊁「膝を屈す」㊂に同じ。甲陽軍鑑「折られぬ膝を折り、小身なる侍の樣に機づかひ有るは」

ひ-さい 非才【名】㊀才能あるに非ざること。才なきこと。㊁自己の謙稱。不才。劣才。

ひ-さい 菲才【名】㊀うすき才能。鈍才。微才。㊁自己の才能の謙稱。微才。

ひ-さい 比歲【名】ひねん(比年)に同じ。

び-さい 美才【名】すぐれたる才能。

び-さい 美菜【名】美味なるおかず。伊呂波字類「美菜」

び-さい 微才【名】ひさい(菲才)に同じ。

び-さい 微細【名】㊀かすかに小きこと。微小。㊁『史記』の劉敬叔孫通傳贊に「高祖起二微細一、定二海內一」とあり』びせん(微賤)に同じ。

び-ざい 美材【名】美なる材木。すぐれたる材木。良材。

び-ざい 微罪【名】微細なる罪。輕微なる罪。小罪。

微罪不檢擧【句】〔法〕微罪は、法律に問はずして罰せぬこと。

ひ-ざいく 非細工【名】細工に拙きこと、又その人。ぶさいく。

非細工の小刀減(コガタナヘラシ)【句】拙工は、徒に刃物をへらすにとどまりて、何の效果もなし。〔諺語〕

ひさいはう-どうぶつ 非細胞動物【名】〔動〕ふくさいはうどうぶつ(複細胞動物)に同じ。

ひさい-め 販女・販婦【名】ひさぎめ(販女)の音便。〔古語〕名義抄「裨販、ヒサイメ」

ひさい-や 販屋【名】酒店・蕎麥店などを云ふ。〔常陸國の方言〕

ひ-さう 非想【名】〔佛〕㊀三昧の一。想念を執著せしめぬこと。㊁ひさうひひさうてん(非想非非想天)の略。平家「非想の八萬劫、なほ必滅の憂に逢ふ」謠曲(和布刈)「上は非想の雲の上、下は下界の龍神まで」

非想摩尼(マニ)の天【句】〔佛〕非想非非想天の境界の、塵垢を離れて清淨なるを、摩尼珠の德に擬へていふ語。狹衣「ひさうまにの天は、いかにして、さしも片はに成りにけん」

ひ-さう 悲壯【名】㊀悲哀の中に、壯烈の氣味あること。㊁〔哲〕『獨 das Tragische』美の一種。現實界に於ける解決の道絕無なる時、これを超越せんとして、死を擇ぶこと。

ひ-さう 皮相【名】㊀表皮にあらはるる相(スガタ)。㊁うはべ。うはつら。㊂うはべのみを見てする、淺はかなる判斷。

ひ-さう 彼蒼【名】『詩經の秦風黃鳥篇に「彼蒼者天」とあるに本づく』そら。天。

彼蒼を期(ゴ)す【句】運命を、天に任す。謠曲(道明寺)「萬事は、皆、夢の如しよりより彼蒼を期すといふ」

ひ-さう 飛草【名】飛白(ヒハク)㊀の草書。

ひ-さう 肥壯【名】肥えて、勢つよきこと。肥大にして、强壯なること。太平記「肥壯・多力の鐵牛」

ひ-さう 悲愴【名】かなしみいたむこと。「悲傷。

ひ-さう 祕藏・秘藏【名】次條に同じ。著聞「宮內卿家隆卿ひさうの鵯・荻の葉といふを」

ひ-ざう 祕藏・秘藏【名】㊀容易に他に示さぬほどに、深くしまひおくこと、又その物。保元「鵜の丸と名づけられて、御祕藏ありけり」長町女腹切「これは、さて、我家の重代ぞや。親の祕藏が、年を經て廻(メグ)り來るも、不思議なり」㊁臣妾などを、珍重して愛すること、又その人。凱陣八島「わが君の祕藏におぼせし御內(ミウチ)の人」其角「御祕藏に墨を磨らせて梅見かな」

ひ-ざう 非常【名】ひじやう(非常)の約。〔古語〕枕「ひざうにをかしき事」源氏「鳴(ナリ)高し……。甚だひざうなり」

ひ-ざう 脾臟【名】〔醫〕內臟の一。胃の左側、膵臟の尾部に對在し、纖維膜と脾髓とより成れる大血管腺。扁くして、楕圓形をなし、灰白紅色にして、靑味を帶ぶ。血液、その內部を流れ、血球を破壞し又は新生せしむる作用を有す。脾。

び-さう 美相【名】美しき相好。源氏「耳はさみがちに、びさうなき家とうじ」

び-さう 美裝【名】うつくしく裝(ヨソホ)ふこと。盛裝。

ひざう-えん 脾臟炎【名】〔醫〕脾臟の炎症。多くは、他の疾患に隨伴して發す。脾炎。

ひざう-き 祕藏記【名】〔書〕眞言祕密の梗概を、百條に分類記述せるもの。作者は、東密にては、不空三藏の口訣を、支那唐の靑龍寺の惠果(ヱクワ)の記せるものとし、又、東密にては、概して、惠果の口訣を、我國の空海が親しく傳承・記述せるものと主張す。單に百條のみを擧げたる略本と、兩部曼陀羅の尊體及びその三摩耶(サマヤ)等の名稱等を附記せるものとあり。

ひざう-ご 祕藏子・秘藏子【名】祕藏する子。最愛の子。ひざうっこ。百日曾我「人の大事の祕藏子を、馬に代へて打ったるとは、人でなしの畜生め」

ひざう-せう 祕藏抄【名】〔書〕歌の本とすべき事、短歌・旋頭(セドウ)歌・俳諧の事等、歌學に關する諸種の論評を記せるもの。三卷。凡河內躬恆(オホシカフチミツネ)の著。

ひさう-せき 砒霜石【名】〔化〕ひせき(砒石)に同じ。

ひ-さうぞく-にん 被相續人【名】〔法〕『英 Ancestor』相續せらるる人、即ち家督の場合は、前の戶主、遺產の場合は、相續開始の當時までの遺產の權利者。

ひざ-うち 膝打【名】右の足を尻の下にし、左の膝を立ててする、射擊の身構。舊稱、折敷(ヲリシキ)。

ひざう-っ-こ 祕藏子・秘藏子【名】ひざうご(祕藏子)の音便。

ひざう-でし 祕藏弟子・秘藏弟子【名】祕藏の弟子。最愛の門人。

ひさう-てん 非想天【名】〔佛〕ひさうひひさうてん(非想非非想天)の略。太平記「猛火……、非想天の上までも上り」

ひ-さうてん 彼蒼天【名】ひさう(彼蒼)を見よ。運歩色葉集「彼蒼天、ヒサウテン」

ひさう-ひひさう 非想非非想【名】〔佛〕ひさうひひさうてん(非想非非想天)の略。榮花「燈火の光……上は非想非非想までに至るらんと見え」

ひさうひひさう-しよ 非想非非想處【名】〔佛〕次條の略。

ひさうひひさうしよ-てん 非想非非想處天【名】〔佛〕次條に同じ。

ひさうひひさう-てん 非想非非想天【名】〔最〕『梵 Naivasañ-jñānā-sañjñāyatana の譯語』無色(ムシキ)界の四天の中、最上に在るもの。三界二十八天中の最高天、即ち又、六道中の最高所。無色界の第二天なる識無邊處天の如き麁なる想なく、さりとて、第三天なる無所有處天に反し、細小

の想なきにしもあらず、有想と無想との兩者以上に出づる境界にして、ここに生る者は、壽八萬劫に達すれども、六道の一部なるが故に、未だ生死(シヤウジ)の域を脱するには至らずと説く。非想非非想處天。非想非非想處。非有想非無想處。非想非非想。非想天。非非想處。非非想天。非想。有項(ウチヤウ)天。太平記「その聲、天に響きて、非想非非想天までも聞えやすらんと夥し」用明天皇職人鑑「天に昇らば、非想非非想天まで追っかけ」

ひざう-ひん 祕藏品・秘藏品【名】祕藏する物品。

ひざう-ぶつ 祕藏物・秘藏物【名】前條に同じ。

ひざう-むすこ 祕藏息子・秘藏息子【名】祕藏子たる息子。大切に養ふ息子。はこいりむすこ。

ひざう-むすめ 祕藏娘・秘藏娘【名】祕藏子たる娘。大切に養ふ娘。いつきむすめ。はこいりむすめ。重帷子「祕藏娘、添はする殿御は、こな樣のけて、外にない」

ひざう-もの 祕藏者・秘藏者【名】祕藏する人。愛して大切にする者。甲陽軍鑑「法性院殿御祕藏者、大かた討死する事」

ひざ-おくり 膝送【名】ゐざりて、次第に身を送り移すこと。

ひざ-おほひ 膝覆【名】古、產兒を浴せしむる婦人の膝を覆ふに用ひし、生絹(キギヌ)の三幅・二重なるもの。玉藥「御湯殿始也。……、著二東床子一、取二膝覆一(生絹二重三幅、長五尺、如レ袴指二腰指一)」

ひ-さかき 柃【名】〔植〕山茶(ツバキ)科に屬する常綠灌木。高さ十五六尺に達す。葉はやや茶のに似て、卵形又は倒卵形、鋸齒あり、互生す。花は單性、雌雄異株、帶紫綠白色。三四月頃開く。果實は黑くして球形。山野に自生し、又、觀賞用として栽培す。變種多し。枝葉は、榊の代用として、神前に供へ、又、燒きて灰汁(アク)の灰とし、木材は小細工用とす。あくしば。いちさかき。びしやかき。みしやしやき。和名「柃、比佐加岐」

ひざ-かけ 膝掛【名】㊀婦人又は商人などの、紐にて腰に結びつけ、膝の邊に垂れ掛けて用ふる布帛。まへかけ。まへだれ。㊁馬車・人力車などに乘れる人の、膝の邊に掛くる毛織物又は布帛。

ひざ-がしら 膝頭【名】膝の先端。膝の關節の部分。ひざかぶ。ひざぐるま。ひざぶし。**ひざこぞう**(膝小僧)參照。醒睡笑「目……一つは膝頭につけ、夜陰の步行過なからん」

膝頭で江戸へ行く【句】『ゐざりて遠隔の地に赴かんとする義』骨折る割に効なき譬。膝で京へ上る。〔諺語〕

膝頭で、箱根は越されぬ【句】前條に同じ。〔諺語〕

ひさ-かた 久方・久堅【名】『次條の枕詞に基づきて轉用したる語』㊀そら。天。古今「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」㊁月。太陰。古今「桂に侍りける時……。久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ賴むべらなる」

ひさかた-の 久方の・久堅の【枕】㊀日刺方の義、日離(サカ)る方の義、天先づ成るが故に、地より久しき義、日榮足(サカタリ)の略、天は圓く虛(ウツロ)なるによりて、匏形(ヒサゴガタ)の義など、種種の説ありて、一定せざれども、**あめ**(天)・**あま**(天)・**そら**(空)にかけていふ。記「久方のあめのかぐ山」萬葉「久方のあまぢは遠しなほなほに家に歸りてなりをしまさに」土佐「影見れば浪の底なる久方の空漕ぎわたる我ぞわびしき」㊁轉じて、天空に關係ある**つき**(月)・**あめ**(雨)・**くも**(雲)・**よ**(夜)にかけていふ。萬葉「久方の月夜を清み梅の花心開けてわが思(モ)へる君」同「久方の雨は降りしくなでしこがいやはつ花に戀しき吾がせ」同「霜ぐもりすとにかあらむ久方の夜わたる月の見えぬ思へば」古今「久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞ過たれける」㊂都を、天になぞらへて、**みやこ**(都)をおきてにもかけていふ。萬葉「久方の都をおきて草枕旅ゆく君をいつとか待たむ」

ひさかた-の-みや 久方宮【名】あにじんじや(安仁神社)に同じ。

ひさかた-ぶり 久方振【名】ひさしぶり(久振)を洒落(シヤレ)ていふ語。

ひざ-がため 膝固【名】『「膝を固む」を見よ』演藝場などにて、客の集まるを待つこと。

ひさかた-や 久方や【枕】ひさかたの(久方の)に同じ。夫木「久方やあまの笘屋にさぬる夜は浦風寒み雁鳴きわたる」

ひ-ざかな 干魚・乾魚【名】ひうを(干魚)に同じ。一代女「明暮(アケクレ)、ひざかなより外なく」

ひざ-かはら 膝䯊【名】ひざさら(膝皿)に同じ。〔古語〕名義抄「膝䯊、ヒザカハラ」同「膞、ヒザカハラ・コムラ」

ひさ-がひ ひさ貝【名】〔動〕あさひがひ(朝日貝)に同じ。

ひざ-かぶ 膝株【名】ひざがしら(膝頭)に同じ。

ひざ-かみ 膝上【名】次條を見よ。

膝上の髕(アハタ)【句】あはた(髕)に同じ。〔古語〕字鏡「髕、膝之骨。髕同字。比佐加美乃阿波太」

ひ-ざかり 日盛【名】日の盛んに照る時。

ひ-さき 火先【名】㊀燃ゆる火の先端。ほのほ。㊁火の燃えひろがりゆく先の方。(火元に對して)

ひさき【名】〔動〕いさき(雞魚)に同じ。

ひさ-ぎ 久木・柃【名】〔植〕ひさかき(柃)に同じ。〔古語〕萬葉「ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる淸き河原に千鳥しば鳴く」字鏡集「柃、ヒサギ・ヒサカキ」

ひさ-ぎ 楸【名】〔植〕きささげ(梓)の同じ。和名「楸、比佐岐」

ひさき-ぐさ 久木草【名】〔植〕まつ(松)㊀の異稱。〔古語〕莫傳抄「春日野や雪消(ユキゲ)の澤の久木草花咲きにけり雪に後れて」

ひさぎ-ぐり 拉栗・挫栗【名】つきぐり(擣栗)に同じ。

ひさぎ-びと 販人【名】販ぎあるく人。行商。〔古語〕和名「裨販、比佐岐比止」

ひさぎ-め 販女・販婦【名】女のひさぎ人。行商する女。のざき。ひさいめ。ひさめ。ひしやめ。〔古語〕和名「販婦、比佐岐女」百日曾我「絲屋・組屋・ひさぎ女」

ひ-さく 柄杓【名】『ひさご(瓢)㊁の轉』ひしやく(柄杓)に同じ。字鏡「瓢、禮器也、一升曰レ爵、二升曰觚。佐可豆支。又、比佐久」徒然「ひさくの柄」

ひさく【名】〔植〕からすうり(烏瓜)に同じ。

ひ-さく 臂索【名】〔佛〕眞言の修行者が臂に懸くる珠索。眞言索。

ひ-さく 祕策・秘策【名】ひけい(祕計)に同じ。

ひ-さく 祕賾・秘賾【名】幽玄にして、深奧なること。太平記「佛法……祝二皇統一益二蒼生一者、法相圓頓之祕賾最勝」

ひさぐ 塞ぐ【動四他】ふさぐ(塞ぐ)に同じ。〔古語〕字鏡集「瞥、閉同。ヒサグ、シナクル・トビラ・フサグ」枕「ををと、目うちひさぎて讀む陀羅尼も、いとたふとし」

ひさぐ 鬻ぐ・販ぐ【動四他】賣る。あきなふ。販賣す。徒然「棺をひさぐ者」

ひさぐ 拉ぐ【動四他】おしつぶす。ひしぐ。ひしやぐ。みしやぐ。方丈記「平(ヒラ)に打ちひさがれて」

ひさぐ 拉ぐ【動下二自】ひさぎたるやうになる。おしつぶさる。ひしぐ。ひしやぐ。みしやぐ。撰集「釣鐘、俄かに落ちて……、家のひさげたる時に」

ひ-さぐ 提ぐ【動下二他】『ひきさぐ(引下ぐ)の略』手に下げて持つ。ひっさぐ。携帶す。風俗歌(知知良良)「調度をひさげて」

ひさく-がた 柄杓形【名】㊀柄杓の如き形、又その物。㊁方形屋根(ハウギヤウヤネ)又は塔の九輪などの上に据うる、火炎つきの寶珠。〔火珠〕和名「火珠、塔乃比散久賀太」

ひざ-ぐち 膝口【名】膝のさき。ひざのくち。ひざがしら。太平記「膝口切られて、血にまじり」

びさく-どうぶつ 尾索動物【名】〔動〕脊索動物の一綱。海に產し、生活狀態は、孤立・群棲・外物著生・自由生活等一定せず、形も、囊狀・樽狀等種種なれども、體の外面は、革質の硬き皮、又は白色の軟かなる皮にて被はれ、咽頭は、消食管の前頭なると同時に、呼吸作用をも營み、二箇乃至多數の開孔によりて、外界に通ず。雌雄同體にして、幼蟲は蝌蚪狀をなし、脊索を有

すれども、成長後は退化す。海鞘(ホヤ)の如き、これに屬す。被嚢類。

ひさくに 久國【名】〔人〕**あはだぐちひさくに**(粟田口久國)を見よ。

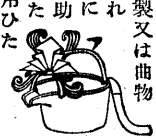
ひざ-ぐみ 組膝【名】㊀あぐらをかくこと。㊁膝を交ふること。對坐。甲陽軍鑑「男と男が出あひて、膝組にて」

ひ-ざくら 緋櫻・山櫻桃【名】〔植〕薔薇科に屬する落葉喬木。花は小形にして、瓣多く、花梗長く垂れて、葉に先だちて開き、萼は甚だ紅く、咲けばやや淡し。別に長州緋櫻・寒緋櫻と呼ぶ種類もあり。六帖「梓弓春の山べに烟立ちもゆとも見えぬ緋櫻の花」字鏡「木辛夷、比佐久良」

ひざ-くりげ 膝栗毛【名】㊀『旅行中、膝の邊の日に燒けたるを、馬の毛色の栗毛に擬へていふ』旅行するに、乘物の力を借らぬこと。徒歩旅行。丹波與作「五十三次を、居ながら歩むひざ、ひざ、栗毛馬、ははい、しい、道中雙六」風流吳竹男「かぬま川を越して、二里半の餘を膝栗毛」㊁〔書〕**だうちゆうひざくりげ**(道中膝栗毛)の略。

ひざ-ぐるま 膝車【名】㊀**ひざがしら**(膝頭)に同じ。㊁柔道にて、左足の土不蹈(ツチフマ)を、相手の右の膝關節に、又は右足の土不蹈を、相手の左の膝關節に、外方より柔かに當て、體を反(ソ)らせながら、兩手にて引き、右の前方の隅に倒すこと。

ひ-さげ 提・提子【名】形、鉉ある鍋に似て、やや小形なる、金屬製又は曲物(マゲモノ)製の具。液體を容れて提げ行き又煖むる等に用ひ、後には、銚子の補助として、盃の酒の減りたる時、注(ツ)ぎ足すに用ひたり。枕「物まゐる程にや……ひさげの柄の倒れふすも」宇治「金(カネ)のひさげ」



（ひさげ）

ひ-ざけ 日酒【名】毎日、酒を飲むこと。諺「左團扇(ヒダリウチハ)に日酒を飲む」

ひさげ-の-つぼ 提壺【名】鉉などありて提ぐるやうにせる壺。延喜式「黑漆提壺十四口」

ひさご 瓠・匏・瓢【名】㊀〔植〕ゆふがほ・へうたん・ふくべなどの總稱、又その果實。なりひさご。ひしやく。紀「匏、ヒサゴ」㊁水を斟むに用ふる器。もと瓢の實を縱に割きて用ひ、後には、木を刳りて、作り、後世の柄杓(ヒシヤク)の基となれり。〔杓〕神樂(杓)「大原やせか井の淸水ひさごもて鳥は鳴くとも遊びてを酌め」和名「杓、比佐古、斟水器也」㊂**ひしやく**(柄杓)㊀に同じ。㊃紋所の一。瓢㊀に象(カタド)れるもの。〔杓〕㊄〔書〕**ひさごしふ**(瓢集)の略。

ひさご 杓【名】〔文〕神樂歌の曲の一。

ひさご 鴡鳩【名】〔動〕**みさご**(鴡鳩)を云ふ。〔伊豆國の方言〕

ひざ-ご 膝兒【名】**ちのみご**(乳飲兒)に同じ。

ひさご-うり 瓢瓜【名】〔植〕**からすうり**(烏瓜)に同じ。〔古語〕

ひさご-がた 瓠形・匏形・瓢形【名】ひさごの如き形。へうたんなり。

ひさご-ぎり 瓢桐【名】紋所の一。五三の桐の、花を瓢の形に描けるもの。

ひざ-こし 膝腰【名】膝と腰と。膝又は腰。こしひざ。

ひさご-しふ 瓢集【名】〔書〕俳諧七部集の一。元祿三年の春、芭蕉の、伊賀國よりの歸途、近江國の濱田珍碩等の需に應じて撰びしもの。歌仙五卷を收む。

ひざ-こぞう 膝小僧【名】**ひざがしら**(膝頭)に同じ。(多くは、衣服の間より露れ出でたるにいふ) ひざっこぞう。ひざっこ。

ひさご-だる 瓢樽・匏樽・瓢樽【名】**へうたん**(瓢簞)㊁に同じ。擧國集「ひさご樽いだかせて」

ひさご-づら 【名】〔植〕**やぶからし**(藪枯)に同じ。

ひさご-づる 【名】〔植〕前條に同じ。

ひさご-ばな 瓠花【名】㊀ひさご㊀の花。㊁上古、十五六歳の小兒の間に行はれし、頭髮の結ひ方。形は詳かならず。〔古語〕紀「是時廐戸皇子、束髮於額、コノトキ、ウマヤドノミコ、ヒサゴバナニシテ（古俗、年少兒、十五六間、束髮於額、十七八間、分爲角子(アゲマキ)。今亦然）」㊂古、相撲(スマフ)の右方の者が、目じるしとして、頭髮に插しし造花。左方の者は、葵の造花を插したり。空穗「みなむすびの裝束し、ひさご花かざしなど、いと珍らかなる事もしつつ」㊃波の立つ形。散木「風、いたく吹きければ、沖に、ひさご花といへるものの立ちけるを」

ひさご-びをけ 瓠火桶・匏火桶・瓢火桶【名】瓠を刳りて造りたる火桶。蕪村「炭取の瓠火桶に並びゐる」

ひさご-まはし 瓢廻【名】相撲(スマフ)の手の一。相手が、わが足を取らんとする時、又は投の殘りたる時、その首を押へ、その褌を引き上げて廻すもの。

ひさ-さ 久さ【名】久しき間。久しさ。ひさ。〔古語〕萬葉「あひ見ては幾久さにもあらなくに年月のごと思ほゆるかな」

ひさ-さぎ 【名】〔植〕㊀**あせび**(梫木)に同じ。㊁**ひさかき**(柃)に同じ。

ひざ-さら 膝皿【名】膝頭の中央にある、皿の如き形の骨。ひざのかはら。ひざのさら。あはたこ。あはた。膝蓋。

ひ-さし 庇・廂【名】㊀寢殿造にて、母屋(モヤ)の外、簀子緣(スノコエン)の內なる、母屋よりはやや低き細長き間(マ)。母屋との境には、格子ありて、取り外すを得たり。後世、入側(イリガハ)と稱するものに相當し、武家造にては、大床(オホユカ)といへり。のき。ひろえん。ひろびさし。ひろのき。枕「職(シキ)の御曹司(ミザウシ)におはします頃、西の廂に、不斷の御讀經(ミドキヤウ)あるに」同「廂の御簾(ミス)高く捲き上げて、長押(ナゲシ)の上に」㊁家又は牛車(ギツシヤ)などにて、窓・出入口、又、家の緣側などの上に、別に作り添へて突出せしむる、小き屋根。**やびさし**(屋庇)參照。源氏「庇なき絲毛」㊂**ひさしのくるま**(庇車)の略。增鏡「菊の網代(アジロ)の庇にたてまつる」㊃軍帽・鳥打帽子などの、目の上に當る部分に、目に對する光線の直射を防ぐために、突き出だして取り附けたるもの。まびさし。㊄**ひさしがみ**(庇髮)の略。

庇の間(アヒダ)から日蝕を拜むやう【句】眇(スガメ)の形容。〔諺語〕

庇の間(アヒダ)の桃の木【句】「日陰の桃の木」に同じ。〔諺語〕

廂の御所(ゴシヨ)【句】鎌倉時代に、營中にて、將軍近侍の者の更直せし所。仙洞の制に倣ひて設けしものといふ。東鑑「廂御所、一日一夜結番事」

廂の御所(ゴシヨ)の結番(ケツバン)【句】廂の衆の結番。ひさしばん。東鑑「廂御所結番、更被二書改一」

廂の衆【句】鎌倉時代に、幕府の廂の間に宿直・侍衞せし番衆、即ち將軍に昵近を許されし者。正嘉十二年に制定し、十人を一番として、六番ありたり。東鑑「撰二要樞之輩一、始被レ結二番廂衆一」

廂の大饗【句】**だいきやう**(大饗)の條下を見よ。

廂の簡(フダ)【句】鎌倉時代に、將軍昵近の人人の、小侍所(コサムラヒドコロ)の結番に上るために、その姓名を記して、幕府の廂の間に掛け置きし札。「日給(ニツキフ)の簡」參照。東鑑「於二廂御簡一者、隨レ例仰二秋田城介一、於二御所一、令レ淸二書之一」

庇の間(マ)【句】**ひさし**(庇)㊀に同じ。保元「淸涼殿の庇の間に遷し奉る」

庇を貸して、母屋(オモヤ)を取らる【句】㊀所有物の一部の使用を許したるがために、延いて、その全體を奪ひ取らる。軒を貸して、母屋を取らる。〔諺語〕㊁庇護を加へ、却って災害を被る。軒を貸して、母屋を取らる。〔諺語〕

ひさ-し 久し・尙し【形二】㊀時遙かなり。時間又は時日永し。㊁代代榮えてあり。代代仕へてあり。甲陽軍鑑「關東中の久しき家にて」同「家に久しき侍の、殊に我が心安く使ふ者は」㊂命(イノチ)長し。長命なり。榮花「わが宿の岸に匂へる菊の花久しき君が影ぞ見えける」㊃永き時を隔てて、珍しく逢ひたり。久しぶりなり。久闊なり。狂言(墨塗)「この中(ヂユウ)は、久しうおりやる」同(磁石)「なんと、お久しいの」㊄極(キマ)り文句にて、珍しからず。陳腐なり。八笑人「ちよっと一口、元氣を附けていから。ええ、久しいもんだ」

久しき暮【句】暮るるに遲きこと、又そ

の時。玉葉「秋もここだ過ぎける君と聞くものを久しき暮は今日のみや知る」

ひ-ざし 日差【名】❶窓などに、日光の差し入ること、又そのさま。太祇「神無月旅なつかしき日ざしかな」❷ひあし(日脚)❶に同じ。

ひさし-か-ぶり 久しか振【名】ひさしぶり(久振)に同じ。膝栗毛「久しかぶりで、これから、又」

ひさし-がみ 庇髪【名】『庇の如く突き出でたる髪の義』前髪と鬢とを、特に突き出だして結ふ、一種の束髪」又その髪に結へる婦人。明治三十七年頃、女優川上貞奴(サダヤツコ)、西洋風を摸して始め、殊に女學生の間に多く行はれたり。ひさし。

ひさしざし-いとげのくるま 庇指絲毛車・廂指絲毛車【名】牛車(ギッシャ)の一種。廂ある絲毛車。

ひさしざし-の-くるま 庇指車・廂指車「【名】前條に同じ。

ひざしたくろ-の-つきげ 膝下黑月毛【名】馬の毛色の一。全體は白く、四足黑きもの。

ひさし-の-くるま 庇車・廂車【名】あじろびさしのくるま(網代庇車)の略。

ひさし-の-だいきやう 廂の大饗【句】だいきやう(大饗)の條下を見よ。

ひさし-ばん 廂番【名】「廂(ヒサシ)の御所の結番」に同じ。

ひさし-ぶり 久振【名】久しく出遇はずして、時日を經たること。ひさかたぶり。ひさしかぶり。ひさびさ。久闊。

ひざ-じろ 膝白【名】馬の毛色の一。膝より上方の白きもの。

ひさだ-やき 久田燒【名】寛文の頃製出せる、高麗(カウライ)燒に似たる陶器。

ひさだ-りう 久田流【名】茶道の一派。千利休の門人久田宗榮を祖とするもの。

ひ-さつ 飛札【名】至急を要する書面。飛脚に持たせて送る手紙。飛書。川中島合戰「兩家の飛札、飛脚の口上」

ひさづ【名】きんしつ(琴瑟)を云ふ。〔常陸國の古の方言〕塵添埃囊抄「瑟、この國には、ひさづと云ひける」

ひざ-つき 膝付【名】膝のさま。膝の恰好。

ひざ-つき 膝突【名】❶古、宮中にて、公事(クジ)などの時、地上に敷き、その上に膝を突きて跪くに用ひし、半疊程の大きさなる、布帛又は薄縁などの敷物。〔膝衝・軾〕徒然「近衞殿、著陣したまひける時、膝突を忘れて、外記(ゲキ)を召されければ」❷歌舞の師匠へ、稽古に通はんとする者の、弟子となりたるしるしに差し出す金。

ひざ-つぎ 膝繼【名】ふみつぎ(踏繼)に同じ。

ひざ-つく-ひつじ 羊躑躅【名】〔植〕『蓮華躑躅(レンゲツツジ)の漢名なる羊躑躅の字の直譯。つつじには、毒ある中にも、蓮華躑躅は花葉共に有毒にて、羊などこれを食へば、躑躅(テキチヨク)たる狀態となるとの意に出づ』つつじ(躑躅)に同じ。淸輔尙齒會「つつじにひざつくひつじの初に、人人來たり」

ひざ-っ-こ 膝子【名】次條に同じ。

ひざ-っ-こぞう 膝小僧【名】ひざこぞう(膝小僧)の音便。

ひざ-つぶし 膝つぶし【名】ひざ(膝)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

ひざ-なほし 膝直【名】里歸・花歸を終へて後、新婦、その元の家に、新郎を招ぎ、新婦の一門・親類うち混じて獻酬すること。世間娘氣質「一門・一家の膝なほし・振舞の場にて」

ひさ-の-うを【名】〔動〕あかうを(赤魚)に同じ。

ひさのはま 久濱【名】〔地〕磐城國雙葉(フタバ)郡の町。陸前濱街道の一驛。鐵道常磐線の停車場あり。夏期は海水浴にて賑ふ。

ひざ-ばさみ 膝挾【名】二人向ひあひて、互に膝を立て、脛と脛とを接觸せしめて、雙方より押し倒しあふ戲。すねおし。庭訓往來「膝挾・指引」

ひさ-ひさ【貌】喋るさま。べちやべちや。一説に、ひたひたに同じと。ひさめく參照。〔古語〕沙石集「湯屋にとめ湯して、女房入れ參らせんとて、ひさひさとひしめきて」

ひさ-びさ 久久【名】ひさしぶり(久振)に同じ。心中二枚繪草紙「久久で金氣に逢うた」

ひさ-びさ 久久【副】久しく。ながらく。ながなが。狂言(鬼養子)「久久參らぬが、何事もないか。心元なうござる」

ひざ-びやうし 膝拍子【名】膝を打ちて、拍子を取ること、又その拍子。盛衰記「膝拍子を打って、……唱歌せり」

ひざ-ぶし 膝節【名】ひざがしら(膝頭)に同じ。本朝三國誌「裾……、ひっからげたる膝節に」曠野(鹽車)「膝節を包めど出づる寒さかな」

ひざ-ぼね 膝骨【名】膝の骨。ひざざら。

び-さま 美樣【名】手紙の宛名の下の「樣」の字の、旁(ツクリ)を、美の字の草體の如くにくづして書くもの。德川時代に、同輩以上に對して用ひたり。たてさま。(永樣(エイザマ)・平樣(ヒラザマ)に對して)

ひざ-まき 膝卷【名】羅陵王の舞の手の一。

ひざ-まくら 膝枕【名】他人の膝を、枕とすること。一代男「そなたに惚れたかして、こけかかると云ひざま、膝枕して」

膝枕に頰杖(ホホヅエ)【句】氣樂なるさま。〔諺語〕

ひさまじ【形二】すさまじ(凄じ)の訛。〔京都の語〕

ひざ-まじり 膝交【名】膝を交へて坐ること。一代男「禿(カブロ)・遣手の膝まじりに恥ぢず、心安き内證咄の」

ひさまつ 久松【名】姓氏の一。菅原氏より出でし、尾張國知多郡阿古屋の人彈正左衞門道定の裔。道定五世の孫定氏、子なく、一色滿貞の第二子詮定、養はれてその後を嗣ぎ、詮定五世の孫俊勝、水野忠政の女にして、德川廣忠に嫁して家康を生みし謂はゆる傳通院夫人を娶りて、康元・康俊・定勝を儲けし關係より、子孫、松平氏を稱し、康元の子孫は、罪ありて、所領を收められたれど、康俊の後は、下總國多古(タコ)の藩主、定勝の後は、分れて伊豫國松山・伊勢國桑名・伊豫國今治(イマバリ)の三藩主となり、明治維新後、桑名藩主以外の三家は、久松の舊姓に復し、松山藩主の家は伯爵、その他は子爵を授けらる。

ひざ-まづく 跪く【動四自】臂を上げ、兩方の膝頭を衝きて屈まる。源氏「五位・四位ども、柑ひざまづきさぶらひて」

ひざ-まはし 膝廻【名】〔文〕うんざ(運座)に同じ。

ひざ-まはり 膝廻【名】❶膝のまはり。ひざのほとり。❷膝のまはること、又そのさま。つめひらき。

ひざ-まる 膝丸【名】❶源氏重代の寶刀の一。ひげきり(髭切)參照。謠曲(土蜘蛛)「膝丸にて切り伏せつるが」❷源氏重代の鎧の一。ひげきり(髭切)參照。保元「この膝丸と申すは、牛千頭が膝の皮を取り、縅したりければ」

ひさみ-ぐさ 久見草【名】〔植〕まつ(松)❶の異稱。〔古語〕莫傳抄「名にあらば幾代をか見ん久見草かりそめながら花は咲くとも」

ひ-さん 飛棧【名】かけはし(懸橋)❷に同じ。

ひ-さん 飛散【名】飛びて散亂すること。

ひ-さん 砒酸【名】〔化〕『英 Arsenical acid』無水亞砒酸を、硝酸又は王水にて酸化して得る、無色・菱板狀の結晶體。この物質及びその鹽類は、酸としての强度は、燐酸と同等、毒性は、亞砒酸に劣り、少しく熱する時は、水を放出して、無水砒酸に變ず。顏料の製造及び染料に供せらる。

ひ-さん 悲慘・悲酸【名】悲しくいたましきこと。みじめ。むざん。

び-さん 眉山【名】〔地〕❶がびさん(娥眉山)の略。❷肥前國島原港の上にある山。まゆやま。

び-さん 靡散【名】消えうすること。消滅。

び-さん 瀰散【名】❶ひろがり散ること。擴散。❷〔理〕くわくさん(擴散)❷に同じ。

ひさん-か-にん 被參加人【名】〔法〕手形の參加引受又は參加支拂の場合に於ける、その特定の手形債務者たる引受人又は支拂人。

ひ-さんぎ 非參議【名】參議にあらざる公卿、又はこれに次ぐ資格の者。三位以上にて、參議に任ぜられぬもの、參議以上の官にてありし者の、その任を辭せしもの、左右大辨・左右中將等四位にても、多年勤

績の功勞によりて、參議に任ぜらるべき資格を有するものの三種あり。

ひさん-ひいち 非三非一【句】〔佛〕分ちて、三諦(サンタイ)とするも、三諦を合して、一に歸せしむるも、共に絕對の實相にあらざること。太平記「肆神號二山王一、須レ有二非三非一之深理一矣」(この文にては、「山王」の山は竪三畫、橫一畫、王は竪一畫、橫三畫なるを附會していへるなり)

ひさ-め 販女・販婦【名】ひさぎめ(販婦)の略。

ひ-さめ 大雨・甚雨【名】ひため(大雨)の轉。〔古語〕萬葉「泣く涙ひさめに降れば」和名「霈、大雨也。……大雨、比佐女」

ひ-さめ 氷雨・冰雨【名】ひあめ(氷雨)に同じ。〔古語〕和名「霈……大雨、比佐女。氷雨、上同、今案、俗云二比布留一」

ひさ-めく【動四自】ひさひさと音す。ぺちゃぺちゃと話す。〔古語〕沙石集「結緣せんとて、ここら集まりひさめきて」

ひさめ-づか 氷雨塚・冰雨塚【名】貝塚などの一種。氷雨を火雨と誤り、上古、火の雨の降りし時、人の隱れたりと言ひ傳ふるもの。ひあめづか。

ひざ-もと 膝元・膝下・膝許【名】㊀膝の下。膝のほとり。徒然「大きなる鉢に、うづ高く盛りて、膝下に置きつつ」㊁身に近き處。手もと。著聞「わが膝元にて生れながら、我を忘れたるものなり」㊂宮城又は幕府の所在地(常に接頭語**お**(御)を添へて用ふ)。城下。曾我虎が磨「お膝元を騷がせしは、先づ、上へ對して狼藉者」

ひざもと-さら-ず 膝元不去【名】主君の信寵を蒙りて、常にその身邊に附き添ひてあること。幸若(富樫)「判官殿の御內(ミウチ)なる、膝許去らずの西塔(サイタフ)の辨慶」

びさもん 毘沙門【名】びしやもん(毘沙門)の約。宇治「びさ門にてぞおはしける」

ひ-ざや 緋紗綾【名】緋色の紗綾。若風俗「緋ざやの二布(フタノ)蹴返し」

ひざ-よろひ 膝鎧【名】はいだて(脛楯)に同じ。太平記「大立擧(オホタテアゲ)の臑當に、膝鎧かけて」

ひざら【名】古の藥の名。實物は、詳かならず、撰集抄「ひざらといふ藥を、骨に塗り」

ひ-ざら 火皿【名】㊀鳥銃の一部。火藥を盛る所。〔藥池〕㊁**がんくび**(雁首)㊀に同じ。一代男「烟管(キセル)……火皿にて押へける」八笑人「おれが吸ひつけて貰ふとって、つい、火皿から拔けたのだよ」㊂煖爐又は汽罐などの、燃料を焚く裝置の底部にある、鐵の格子。

ひざら-がひ 火皿貝【名】〔動〕**ぢいがせ**(石鼈)に同じ。

ひ-ざらし 日曝・日晒【名】日光にさらすこと。萬葉「日ざらしの麻手作(アサデヅクリ)を」

ひざ-わろ 膝和郎【名】**にんめんさう**(人面瘡)に同じ。

ひさゐ 久居【名】〔地〕㊀伊勢國一志(イチシ)郡にある町。郡の首邑。雲出(クモヅ)川の下流に沿ふ。津市より一里十二町。藤堂氏の舊藩地。㊁明治の初年設置の縣の一。みへ(三重)㊀參照。

ひ-さを 干小魚・乾小魚【名】小魚を乾したるもの。小き干魚(ヒウヲ)。〔古語〕延喜式「比佐魚一斗五升」

ひ-ざを 搠杖【名】『火竿の義』**こみや**(込矢)㊁に同じ。

ひさをり-しば ひさをり芝【名】〔植〕**せんりごま**(千里駒)に同じ。

ひし 菱【名】『ひしと壓しつぶしたるごとき形の義。ひし(緊)參照』㊀〔植〕芰(シ)科に屬する水生植物。長き莖と根狀の葉とは、水中に漂ひ、水面に浮ぶ葉は、菱形にして尖り、厚くして光澤あり。上緣に鋸齒あり、葉柄に浮囊を有す。夏、白色・四瓣の花を開き、果實は三角又は四角、堅き刺あり、銳く尖れる閉果にして、一種子を藏し、種子は食用に供す。みすもぐさ。〔蔆・芰〕和名「菱子、比之」㊁菱の實(ミ)。庭訓往來「菓子者、生栗・搗栗……菱」㊂**ひしがた**(菱形)・**ひしもやう**(菱模樣)の略。㊃紋所の一。菱形を描けるもの。普通の菱の外、劍菱(ケンビシ)・割菱(ワリビシ)・花菱(ハナビシ)・松皮菱(マツカハビシ)・幸菱(サヒハヒビシ)・三階菱・五階菱などの種類あり。㊄鐵串に、數條の尖りたる叉放出し、敵の人馬の進行を妨ぐるために、昔、戰場に蒔き散し、又は地に插しおきなどせし具。〔蒺藜〕平家「二丈ばかりありける岸の下に、菱を植ゑて突き落し奉れば」㊅棹の頭に、菱のごとき刺ある鐵を取り附け、魚を突き刺して捕ふるもの。やす(矠)參照。〔籰〕和名「籰、比之。以レ鐵施二棹頭一、因以取レ魚也」㊆鉛にて管狀・卵形に作り、鈎絲の間に多數附けて、錘(オモリ)とするもの。びし。㊇昔、航海の船の、四斗樽の鏡を拔き、中に、蠟燭立の如きものを作り、これに松明(タイマツ)を立てて燃しもの。樽の底に、鐶を附け、又は繩を輪にして出し、碇綱に結びつけて、碇を入れ、捨て置けば、後より來る船、これを見て、何等の疑慮をも起さず、この航路を通行せしなり。

菱の縫目(ヌヒメ)【句】菱縫(ヒシヌヒ)の板の縫目。梅松論「絲鎧の菱の縫目より切り捨て」

菱の餠【句】**ひしもち**(菱餠)に同じ。俳諧新選(天爵)「とにかくに揃はぬものや菱の餠」

ひし 叉【名】二またの鐵に、長き柄を附けたる武器。さすまたの類。和名「叉、文選、叉簇讀二比之一。今案、簇卽鏃字也。兩岐鐵、柄長六丈」三部抄「黑がねのひしは、まづ胸と眼(マナコ)とを刺す」

ひし【名】㊀〔植〕**はまびし**(蒺藜)㊁に同じ。㊁わざはひとなる物事。難儀。〔元祿時代の語〕重井筒「いとしい人のひし、一門中のにくしみ受け」㊂『干洲(ヒス)の轉といふ』**す**(洲)に同じ。**ひじ**參照。大隅國風土記「海中之洲者、隼人俗語、云二必志一」

ひ-し 祕史・秘史【名】㊀祕密の歷史。容易に見せぬ歷史。㊁明治九年、乘艦四文官の一なる祕書科に置かれて、科務を掌理せし上長官。大・中・少の三等あり。同十五年廢止せり。

ひ-し 罷士【名】疲れたる男。

ひ-し 臂使【名】『「臂(ヒヂ)の指を使ふが如し」を見よ』自由に、他人を使役すること。頤使。

ひ-し 飛矢【名】**りうし**(流矢)に同じ。

ひ-し 斐紙【名】**がんぴし**(雁皮紙)に同じといふ。〔古語〕和名「紙有二色紙……斐紙・薄用紙等名一」

ひ-し 婢子【名】㊀『禮記の檀弓篇に「如我死、則必太爲二我棺一、使二吾二婢子來一レ我」とあり』はしため。婢女。下婢。太平記「枝より餘る下露、婢子に落ち懸かりて、胎內に宿りしかば」㊁『左傳の僖公二十二年の條に「嬴氏對二太子圉一曰、寡君使三婢子侍執二巾櫛一」とあり』婦人の謙稱。わらは。

ひ-し 皮脂【名】〔醫〕『獨 Hauttalg』皮脂腺の產出する脂肪樣物質。腺細胞その物の脂肪化して、分泌物となるもの。他の腺に於けるがごとく、細胞の作用によりて分泌液を生產するとは異なり。

ひ-し 彼此【代】かれと、これと。かれこれ。あれこれ。

ひし 緊・犇【貌】㊀物のきびしく壓されて發する音。びし。みし。萬葉「この床のひしと鳴るまで嘆きつるかも」㊁すきまなきさま。ひっし。びっしり。みっしり。ひた。ひっし。著聞「庭の上に、ひしと居たりける」宇治「東光殿の脇の壺まで、兵(ツハモノ)、ひしと並(ナ)みゐたり」

ひじ【名】**ひし**㊂に同じとも、又、下に揭げたる萬葉集の歌、原本に「比自」と記し、その「自」の字は「目」の誤にて、紐なりともいふ。〔古語〕萬葉「花散らふこのむかつをのをなの峰(ヲ)のひじにつくまで君が代もがも」

ひ-じ 非時【名】〔佛〕㊀日中より後夜(ゴヤ)までの間。(時(トキ)に對して)㊁**ひじじき**(非時食)の略。空穗「堂童子は、初の夜のひじ……大德たちのひじ」富士見道記「當妙心寺東谷和尙仰せ下されたるとて、歷の非時あり」

ひじ 籠【名】割竹にて、蒲鉾形に編み作り、河中に沈め置き、魚(多くは淡水魚)を入り來らせて捕ふる具。

ひ-じ 鄙事【名】鄙俗なる事件又は事業。

ひ-じ 祕事・秘事【名】㊀祕密なる事。たやすく知らしむべからざる事柄。かくしごと。ひめごと。奧儀。祕傳。十訓「琵琶の祕事など、誰にか傳へおかれける」㊁

〔佛〕**ひじほふもん**（祕事法門）を見よ。御文章「祕事法門……。急ぎ、その祕事を言はん人の手を離れて、早く授くる所の祕事を、ありのままに纖悔して、人に語りあらはすべきものなり」

祕事は睫（マツゲ）【句】次條の略。〔諺語〕重帷子「傳授・許（ユルシ）は受けねども、祕事は睫毛、何でもない事」

祕事は睫（マツゲ）**の如し**【句】『韓非子の喩老篇に「智如レ目也。能見二百步之外一、而不レ能二自見二其睫一」とあり。睫は、目の緣に在りながら、自分には見えぬに譬へていふ』祕傳などは、日常・眼前の事物にも存するものなれども、心づかず、知りての後は、案外容易なるものなり。〔諺語〕

ひ-じ 祕辭・祕辤【名】電報用語の一。文字・數字の孤立若しくは聯集にて、その意味の通解し難きもの、又は普通辭及び隱語にあらざるもの。

ひ-じ 飛耳【名】次條を見よ。

ひ-じ 飛耳・長目【句】「長目・飛耳」に同じ。

ひ-じ 匪兕【名】次條の略。

ひ-じ 匪兕・匪虎（コ）の歎【句】『史記の孔子世家に「孔子於レ野不レ得レ行、絕レ糧。從者病莫二能興一。孔子講誦弦不レ衰。……、孔子知二弟子有二慍心一、乃知二子路一而問曰、詩云、匪レ兕匪レ虎、率二彼曠野一。吾道非邪、吾何爲於レ此」とあり。陳・蔡の厄の時の故事にて、詩は、詩經の小雅何草不黃篇』賢人・君子が、災厄に遭ひて、その不幸を歎ずること。

び-し 微志【名】㊀いささかの心。寸志。微意。微衷。㊁自己の志の謙稱。寸志。微意。微衷。

び-し 微旨【名】『びげん（微言）㊀を見よ』微妙なる趣旨。幽玄なる意味。

び-し 美士【名】美しき男子。

び-し 美紙【名】美麗なる紙。東鑑「美紙拾帖」

び-し 美絲【名】美麗なる絲。一代女「縫切の櫻鹿子（サクラガノコ）、なかなか百色の美絲を盡しける」

びし【名】ひし（菱）㊆に同じ。

びし【貌】ひし（緊）㊀に同じ。

び-じ 美事【名】うつくしき事がら。美（ホ）むべき事實。「嘉言・美事」

び-じ 美辭【名】㊀美感を與ふる文辭。巧妙なる用語。㊁しうじ（修辭）に同じ。

び-じ 美兒【名】姿の美しき小兒。美童。美少年。五人女「又あるまじき美兒」

び-じ 微時【名】身分低かりし時代。未だ出世せぬ頃。

び-じ 鼻茸【名】〔醫〕びじよう（鼻茸）の誤讀。

ひし-あふぎ 菱扇【名】紋所の一。三分の一ほどづつ開ける二本の扇を、左右に組み合はせて、菱形に描けるもの。

ひし-あまりゆう 菱雨龍【名】紋所の一。折れまがりて、ほぼ菱形をなせる浪の内に、柄の短き拂子（ホッス）の如きものを描けるもの。

ひし-いた 菱板【名】ひしぬひのいた（菱縫板）に同じ。

ひし-いてふ 菱銀杏【名】紋所の一。二枚の銀杏の葉を、上下に組み合はせて、菱形に描けるもの。

ひし-いなづま 菱稻妻【名】紋所の一。稻妻を、菱形に描けるもの。

ひ-しう 悲秋【名】ものがなしく感ずる秋。

ひ-しう 悲愁【名】かなしみと、うれへと。かなしみうれふること。

ひ-しう 飛舟【名】艪の多き早船なるべし。續紀「唐人王元仲、始造二飛舟一進レ之」

ひ-しう 埤圳【名】臺灣にて、水路を開き、貯水池を設けて、田畑灌漑の用に供する水利事業。

ひ-しう 比周【名】㊀『論語の爲政篇に「君子周而不レ比、小人比而不レ周」とあり』私に偏して、人に親しむことと、博く人に親しむことと。㊁『左傳の文公十八年の條に「頑嚚不友、是與比周」とあり』公私の別なく、一般に親しむこと。㊂『管子の立政篇に「人君唯毋レ聽二群徒比周一」とあり』惡事などをなさんがために、親しみあふこと。太平記「その衆阿黨・比周して、好（ヨ）んずる事あり」

ひ-しう 飛州【名】〔地〕ひだ（飛驒）の雅稱。

び-しう 美醜【名】㊀美と醜と。うつくしき事物と、見にくき事物と。よき事物と、あしき事物と。㊁みめよきと、みめわるきと、又その人。美人と醜婦と。

び-しう 尾州【名】〔地〕をはり（尾張）の雅稱。

びしう-ぐは 尾州鍬【名】尾張國・近江國の邊にて多く用ふる、一種の鍬。肩部は狹小、鑱（ヘ）は、刃部に至るに從ひて、幅廣く、柄は長さ三尺五寸乃至四尺、斜角は可なり大にして、輕鬆の地に適す。

びしう-け 尾州家【名】とくがは（德川）㊂を見よ。

びしう-こん 尾州紺【名】次條の略。

びしう-こんもめん 尾州紺木綿【名】尾張國より產する盲縞（メクラジマ）。明治初年以來のものなり。尾州紺。

ひし-うし 菱牛【名】河川工事の牛の一種。四本の雜木を合掌に組み、その下端に近き所に、雜木棚を造り、これに蛇籠（ジヤカゴ）を置きて、錘（オモリ）とせるもの。

びしうちゆうなごん-あふひ 尾州中納言葵【名】紋所の一。形、德川葵と同じにて、葉脈十五條あるもの。尾州の德川家の定紋。

ひし-がき 菱垣【名】竹を、こまかに菱形に打ち違へて結べる垣。武家義理物語「南うけに菱垣の奇麗に、詫人に似合ひたる宿なれば」

ひしがき-くわいせん 菱垣廻船【名】ひがきくわいせん（檜垣廻船）に同じ。

ひしがき-ぶね 菱垣船【名】ひがきぶね（檜垣船）に同じ。

び-じがく 美辭學【名】〔文〕しうじがく（修辭學）に同じ。

ひし-がくし 緊隱【名】『ひしと隱す義。一說に、祕し隱す義なりと』少しも打ち明けぬこと。

ひし隱はなほ知らる【句】祕密にする事は、却りて洩れ易し。〔諺語〕

ひし-がた 菱形【名】㊀『ひし（菱）を見よ』正方形を、對角線的に押しつぶしたる形。模様・紋所などにも用ふ。とりがた。ひしなり。菱形（リヨウケイ）。ひし（菱）㊃參照。歌本「庭はらんもん菱がたにして」㊁〔數〕りようけい（菱形）に同じ。㊂折烏帽子の後方の上面。

ひし-がたな ひし刀【名】さすが㊀に同じ。或は、ひもがたな（紐刀）の誤寫か。

ひしがた-むかひかりがね 菱形向雁【名】紋所の一。二羽の雁を向ひ合はせて、菱形に描けるもの。

ひしがた-もち 菱形餠【名】ひしもち（菱餠）㊁に同じ。

ひしがた-やらい 菱形矢來【名】唐竹を菱形に組みて造れる矢來。一間ごとに、杭を打ち込み、貫（ヌキ）は、上下三段に通す。ひしたけやらい。ひしやらい。

ひし-かぢのは 菱梶葉【名】紋所の一。一枚の梶の葉を、菱形に描けるもの。

ひしかは 菱川【名】〔人〕次條の略。一代女「菱川が書きし小氣味のよき姿枕を見ては、我を覺えず上氣して」

ひしかは-きちべゑ 菱川吉兵衞【名】〔人〕ひしかはもろのぶ（菱川師宣）を見よ。

ひし-がに 菱蟹【名】〔動〕甲の形菱形なる一種の蟹。螯（ハサミ）も脚も大にして、稜あり。我國の近海の特產なり。

ひしかは-そうり 菱川宗理【名】〔人〕㊀畫家。俵屋（タハラヤ）宗理ともいふ。住吉廣守に學ひ、後、尾形光琳の畫風を能くし、光琳と等しく、靑靑の號を用ふ。明和・安永頃の人。㊁初の名は宗二。浮世繪を能くし、三世俵屋宗理と稱せしが、後、菱川を名乘る。

ひしかは-は 菱川派【名】浮世繪の一派。延寶・天和の頃、菱川師宣の描き創めしもの。菱川流。

ひしかは-もろのぶ 菱川師宣【名】〔人〕畫家。通稱は吉兵衞。剃髮後、友竹と號す。もと安房國保田（ホタ）の縫箔師。後、江戶に住す。縫箔の上繪より轉じて、岩佐又兵衞の畫及び土佐風の畫を學び、遂に一家を成し、浮世畫をして、狩野・土佐と對峙せしむるに至れり。元祿七八年頃歿す。

ひしかは-やう 菱川樣【名】菱川派の繪の書き樣。續五元集「山城の吉彌結（キチヤムスビ）も松にこそ（其角）（といふ句に）菱川やうの吾妻

おもかげ（鼠雪）」

ひしかは-りう 菱川流【名】**ひしかはは**（菱川派）に同じ。

ひし-がら 菱殼【名】菱の實（ミ）のから。紀「ゐぐひ打つ川また江のひしがらの」

ひし-かり 菱雁【名】**ひしかりがね**（菱雁金）に同じ。

ひしかり 菱刈【名】〔地〕大隅國の舊郡の一。中世、郡境紛亂し、その北部は、薩摩國に入りて、後世、北伊佐郡となりしが、明治二十九年、北伊佐郡と合して、伊佐郡を立て、薩摩國に屬せしむ。

ひし-かりがね 菱雁金【名】**かりがねびし**（雁金菱）に同じ。

ひ-しき 引敷【名】㊀**ひしきもの**（引敷物）の略。㊁**ひっしきのいた**（引敷板）㊁に同じ。

ひ-しき 火敷【名】**かうしき**（香敷）に同じ。

ひ-しき 非職【名】「非職の者」の略。禁祕抄「非職小舍人（コドネリ）」

非職の辨【句】藏人（クラウド）に補せられざる辨官。

非職の者【句】**ひくらうど**（非藏人）に同じ。

ひしぎ 拉【名】ひしぐこと。ひしぎたること。日本振袖始「一ひしぎに取って伏せ」

ひしぎ【名】能樂などの笛の吹方の一。次第・一聲（イッセイ）・出端（デハ）などの大小鼓を出だす懸（カカリ）の相圖として、鋭く高音に吹きとどむるもの。松風村雨束帶鑑「神樂をさまる太鼓の頭、笛のひしぎに」俗曲（舌三番）「笛のひしぎのでんつくでん」

ひじき 鹿尾菜・鹿角菜・羊栖菜【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。海水の干滿する岩石上に簇生す。幼時は黃褐色にして、葉は太き錘狀なれども、長ずるに從ひて、黑褐色に變じ、葉狀部も線狀となる。二三月頃、新芽を生じ、翌年の夏に至れば枯死す。老大なるは、長さ二三尺に達し、下部の葉狀部は脫落す。食用となし、殊に幼きものは、袋鹿尾菜（フクロヒジキ）と呼び、その味最も可なり。北海道・對馬などに多し。ひじきも。ひずきも。字鏡「洵、比志支」

鹿尾菜の行列（ギャウレツ）【句】拙き筆跡の譬。かなくぎりう。

ひ-じき 非色【名】禁色（キンジキ）㊁㊂を許されぬこと、又その人。禁祕抄「諸家非色」

非色の人【句】堂上諸家の內の、禁色を許されぬ人。

ひ-じき 非食【名】〔佛〕**ひじじき**（非時食）の略。

び-しき 鼻識【名】〔佛〕六識の一。鼻根によりて、物のにほひを識別すること。

ひしき-おほの【名】『ひしきは、垂仁天皇の皇子圓目（ツブラメ）王の妻、伊賀比自支和氣（イカヒシワケ）の女が、天皇崩御の時、殯宮の事を掌りし故事に基づくとも、又、鹿尾菜（ヒジキ）を交ぜたるものともいふ。おほのは、**おもの**（御物）㊀の轉』殯宮に奉るおもの。〔古語〕紀「御ニ青飯一、ヒシキオホノヲメス」

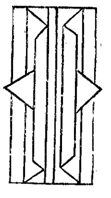
ひし-ぎく 菱菊【名】紋所の一。菊の花を、菱形に描けるもの。

ひしぎ-だけ 拉竹【名】㊀丸き竹を押しつぶしたるもの。一代男「お手水（テウヅ）の濡緣、ひしぎ竹の荒けなきに」㊁岩石ある海に船を繫ぐ時、碇綱を包むに用ふるもの。〔碎竹〕

ひしぎ-だて 拉楯【名】數枚の楯を、一つの竹竿に結び、數人にて舁き、敵の矢を防ぎつつ進むもの。太平記「持楯・ひしぎ楯を突き寄せ突き寄せ、かづき入りて攻めける程に」

ひしぎ-つく 拉附く【動下二他】拉ぐやうにして、壓しつけ、又は叩きつく。義經記「艫より舳先に向って、薙打（ナギウチ）にからかして、ひしぎつけてぞ通りける」女殺油地獄「與兵衛が兩脛かいて、ぎやっとのめらせ、膝を、脊骨にひしぎ附ける」

ひしき-づつみ 火敷包【名】折形の一。下の圖を見よ。



（みつづきしひ）

ひしぎ-め ひしぎ目【名】蟇目（ヒキメ）㊀の、後端に近き處にある刻み目。

ひじき-も 鹿尾藻【名】〔植〕**ひじき**（鹿尾菜）に同じ。伊勢「懸想（ケサウ）しける女のもとに、ひじきもといふ物をやるとて」

ひしき-もの 引敷物【名】**しきもの**（敷物）に同じ。〔古語〕伊勢「思あらば葎の宿に寢もしなんひしき物には袖をしつつも」

ひじき-もの 鹿尾菜【名】〔植〕『**ひじきも**（鹿尾藻）の誤か』**ひじき**（鹿尾菜）に同じ。山家「あま人のいそしく歸るひじきものは小螺（コニシ）蛤がうなしただみ」

ひし-きよく 祕史局【名】明治四年、兵部省の陸軍部・海軍部に置かれし局。少佐及び正・權の大・中・少錄の職員ありて、省中出入の文案を管せしもの。五年、兵部省廢せられ、海軍・陸軍の兩省これに代るに及び、各その省に屬し、海軍省にては、同年、職員を改めて、大・少祕書を置き、六年、祕書局と改稱し、陸軍省にては、六年廢止す。

ひしぐ 拉ぐ【動四他】『**ひし**（緊）に、語尾の添ひたる語』㊀壓してつぶし碎く。おしつぶす。ひさぐ。枕「よもぎの、車におしひしがれたるが」太平記「大竹をひしいで」㊁勢をくじく。頓挫せしむ。風來六部集「梅幸、浪花（ナニハ）をひしげば、富三、東都に名をあらはし」

ひしぐ 拉ぐ【動下二他】前條に同じ。蟬丸「兄が鼻までひしぐるか」

ひしぐ 拉ぐ【動下二自】『前前條を見よ』㊀壓されてつぶれ碎く。挫け碎く。ひさぐ。つぶる。宇治「草の葉の、蛙の上にかかりければ、蛙、ひしげて、死にたりけり」㊁壓されてつぶれ碎けたるやうに感ず。源氏「胸もひしげておぼゆ」

ひし-くえう 菱九曜【名】紋所の一。九箇の丸を、中央に一箇、各邊三箇づつになるやうに、菱形に配列せるもの。

ひし-くぎ 菱釘【名】兩端が菱形をなせる釘。

ひし-くさ 菱草【名】菱㊂の小きもの。

ひし-ぐざい 彼此俱罪【名】王朝時代の法律にて、枉法贓・不枉法贓・受所監臨贓並びに座贓の四つの場合に、取る者も、與ふる者も、俱に罪ありとせしこと。

ひし-くひ 菱食・鴻【名】〔動〕游禽類に屬する鳥。體長約二尺五寸、形、雁に似て、やや大く、嘴は扁平・柔軟、橙色を呈し、頸長く、尾短し。頸と背とは淡黑褐色、翼は黑色、腹部は白色なり。極北の地にて繁殖し、我國へは、秋來り、春去る、肉は、味美なり。おほかり。いぬがんし。ぬまたらう。ひしくひがん。運歩色葉集「菱食、ヒシクヒ」

ひしくひ-がん 菱食雁【名】〔動〕前條に同じ。

ひし-くみ 菱組【名】菱形に組むこと、又その組みたる物。

ひしくみ-ぬひ 菱組繡【名】刺繡にて、經（タテ）・緯（ヌキ）を掛け合はせつつ、菱形に組み合はせて繡ひゆくこと。

ひしくみ-らんま 菱組欄間【名】〔建〕組子（クミコ）㊁を菱形に組みたる欄間。

ひし-くわ 菱科・芰科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。これに屬する植物は、舊世界にのみ產し、一屬・三種ありて、何れも、水上に浮游する一年生の草なり。我國には、菱の一種を產するのみ。しくわ。

ひしげ-びやう 挫扁病【名】桑の樹に發する、一種の病。枝條の、手にて挫ぎたるが如く扁平となり、不完全なる芽、密接して著生し、葉は伸長せずして收縮す。

ひしこ 鯷魚・鯷【名】〔動〕次條の略。運歩色葉集「鯷魚、ヒシコ」

ひしこ-いわし 鯷魚・鯷【名】〔動〕背黑鰮（セグロイワシ）の幼きもの。これを素乾（スボシ）にしたるをごまめ、又は田作（タツクリ）といふ。かたくちいわし。くだいわし。ひしこ。しこ。和名「鯷魚、比之古伊和之。小鮎魚、黑而少レ味也」

ひしこ-づけ 鯷漬【名】小形の鯷を鹽漬にしたる食品。生（ナマ）のまま、洗はずに、鹽水に漬けて、樽の中に並べ置き、一升に鹽三合の割合にて和し、三日後、壓（オシ）を加へて貯藏せるもの。歐洲にて、アンチョビと呼ぶもの、即ちこれなり。續七部集「生きながらすぐに打込む鯷漬」

ひ-しごと 日仕事【名】㊀晝間行ふ仕事。㊁一日間に割り當てたる仕事。

ひし-このじ 菱小字【名】紋所の一。小の字を、菱形に描けるもの。

ひしこ-めし 鯷飯【名】鯷の骨を拔き去りて、たきこみたる飯。

ひじ-さい 非時齋【名】〔佛〕次條に同じ。

ひじ-じき 非時食【名】〔佛〕比丘(ビク)にして、非時に食を取ること、又その食事。この戒(カイ)を犯す時は、五百生の間、畜生道に墮つといふ。律僧は今に嚴守す。非時。非食(ヒジキ)。(齋食(サイジキ)に對して)

ひ-じじゆう 非侍從【名】侍從を歷ずして、至尊に侍するもの。江次第「歷二侍從一之人、皆入二侍從見參一(公卿次)、凡不レ歷二侍從一人、皆入二非侍從見參一」

ひし-しよくぶつ 被子植物【名】〔植〕被子類に屬する植物。(裸子植物に對して)

ひし-せん 皮脂腺【名】〔醫〕『獨 Talgdrüsen』眞皮中にある小き腺。葡萄狀をなせる腺體と、短き排泄管とを具ふ。排泄管は、直ちに皮膚面に開くものもあれど、大抵、毛囊內に開口す。皮脂を分泌して、表皮と毛髮とに、光澤と彈力性とを與へ、且つ表皮を柔軟ならしむ。頭部・顏面部に最も多く、掌・蹠には全くなし。毛囊腺。脂肪腺。にきび(面皰)參照。

ひし-だい 菱臺【名】三月の節句に、菱餅を載するに用ふる、菱形の高坏(タカツキ)。

ひし-だきがしは 菱抱柏【名】紋所の一。上下相向へる抱柏の輪廓を、菱形にせるもの。

ひし-だきめうが 菱抱蘘荷【名】紋所の一。抱蘘荷の輪廓を、菱形とせるもの。

ひし-たけやらい 菱竹矢來【名】ひしがたやらい(菱形矢來)に同じ。

ひし-だな 菱棚【名】床間(トコノマ)・書院などの脇に設くる棚の一種。上座には用ひずといふ。

ひし-ちやのみ 菱茶實【名】紋所の一。茶の實一箇に、葉二枚附きたるを、上下より向ひ合はせ、菱形に描けるもの。

ひ-しつ 卑濕【名】ひしふ(卑濕)に同じ。

び-しつ 美質【名】すぐれたる性質。うるはしき本質。太平記「假なる嬋娟にて、眞の美質に非ず」

び-しつ 備悉【名】悉くそなはること。完備。具備。

び-じつ 彌日【名】『日を彌(ワタ)る義』幾日にもまたがること。

ひし-つた 菱蔦【名】つたびし(蔦菱)に同じ。

ひしづま-みやうじん 菱妻明神【名】くぜまつり(久世祭)を見よ。

ひし-つむぎ 菱紬【名】紬の一種。好色伊勢物語「好色男ありけり。下女しける者のもとに、ひし紬といふ物をやるとて、思あらば六さい宿に寢もしなんひしつむぎをば袖にしつつも」

ひ-しづめ 鎭火【名】㊀火を鎭め消すこと。防火。消防。鎭火(チンクワ)。令義解「鎭火祭……爲レ防二火災一、故謂二鎭火一、ヒシヅメ」㊁次條の略。年中行事秘抄「小祀……鎭火」

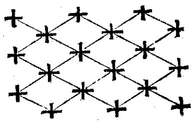
鎭火の祭【句】ちんくわさい(鎭火祭)に同じ。公事根源「鎭火祭(ヒシヅメノマツリ)、卜部(ウラベ)氏の人、火を打ちて、宮城の四隅にて祭ることとあり」

ひし-づる 菱蔓【名】菱の根より出づる蔓。新六「いかにして池の菱蔓うきことは始も果も思ひわくべき」

ひし-てふ 菱蝶【名】紋所の一。向蝶(ムカヒテフ)に似て、相合して、菱形に描けるもの。建部(タケベ)家の定紋なるによりて、建部蝶ともいふ。ひしむかひてふ。

ひし-とぢ 菱綴【名】ひしぬひ(菱縫)に同じ。最明寺殿百人上﨟「白絲にて菱綴したるまだら緘の鎧」

ひし-とんばう 菱蜻蛉【名】模樣の一。平行線を、斜に左右より食ひちがはせて、多くの菱形を造り、各線の各交叉點に、十の字を加へたるもの。


（ひしとんばう）

ひし-とんぼ 菱蜻蛉【名】前條に同じ。

ひし-なんてん 菱南天【名】紋所の一。南天の實五箇若しくば七箇に、葉二枚附きたるを、上下より向ひ合はせて、菱形に描けるもの。

ひし-なり 菱形【名】ひしがた(菱形)㊁に同じ。

ひ-じに 干死【名】ひしぬること。うゑじに。餓死。平家「干死にこそ死にけれ」

ひ-しぬ 干死ぬ【動奈變自】餓ゑて死ぬ。餓死す。八笑人「干死ねばとて、それやあ食へねえ」

ひし-ぬひ 菱縫【名】㊀『×形と×形との間の、おのづから菱形をなすによりていふ』兜の錏(シコロ)、鎧の袖・草摺及び栴檀板の裾板に、緘(ヲドシ)と同じ絲又は革にて、橫に二列に×形に綴ぢ附くる飾。ひしとぢ。㊁次條の略。太平記「長宗が鎧の菱縫、冑の吹返(フキカヘシ)に立つ所の矢」

ひしぬひ-の-いた 菱縫板【名】兜の錏(シコロ)、鎧の袖・草摺及び栴檀板の最下の板、即ち菱縫を施せる板。ひしいた。盛衰記「鞍爪・鎧の菱縫の板の浸るまで打入れ」

び-じねす (英 Business)【名】事務。商事。

ひし-のぞききやう 菱覗桔梗【名】紋所の一。細き條にて、菱形を作り、その下方の角より桔梗の花を少し見せたる狀に描けるもの。

ひし-のぞきぼたん 菱覗牡丹【名】紋所の一。細き條にて、菱形を作り、その下方の角より牡丹の花を少し見せたる狀に描けるもの。

ひじ-は 馬唐【名】〔植〕めひじは(馬唐)に同じ。

ひしば-かきどほし 菱葉垣通【名】〔植〕かてんさうに同じ。

ひし-はなびら 菱花瓣【名】ひしもち(菱餅)に同じ。

ひし-ばひ 菱灰【名】菱殼(ヒシガラ)を燒きて得る、褐色の灰。香爐などの灰に用ふ。

ひし-ひし 緊緊・犇犇【貌】『ひし(緊)を重ねたる語』㊀物の拉(ヒシ)がれて鳴る音。みしみし。源氏「足音ひしひしと踏み鳴らしつつ」㊁透間なくする音、又そのさま。びしびし。ひたひた。ひっしひっし。宇治「ひしひしと、ただ食ひに食ふ音のしければ」愚管抄「拷にかけて、ひしひしと問ひければ」

びし-びし【貌】前條㊁に同じ。「びしびしと叱る」

ぴし-ぴし【貌】前條に同じ。

ひ-しひね【名】『しひね(瘤)を見よ』いぼ(疣)に同じ。〔古語〕字鏡「疣、腫也。伊比保。又、太利。又、比志比子」

ひ-しふ 卑濕【名】土地の低くして、濕氣あること。又その土地。ひしつ。低濕。太平記「平安城を、福原の卑濕に移せし時も」

ひし-ふぐ 菱河豚【名】〔動〕はりふぐ(針河豚)に同じ。

ひ-しほ 醬【名】㊀味噌に類する一種の食品。大豆を熬り、輕く壓して、皮を去りたるを、小麥又は裸麥と共に水に浸して、麴に製し、鹽水を煮たるものに混じ、夏季、天日に乾して製し、そのままにても、又、これに瓜・蔬菜を漬けても食す。あへしほ。なめもの。和名「醬、比之保。豆醢也」㊁ししびしほ(肉醬)の略。今國姓爺「祕藏の醬……歐陽赫思が肉醬」

ひ-しほ 干潮【名】ひきしほ(引潮)に同じ。

ひしほ-いり 醬煎【名】魚と鳥とを搯りて、醬(ヒシホ)にし、山芋(ヤマノイモ)を湯びき、垂味噌を煮立てて、魚鳥を入れ、更に一とほり煮立てて、芋を入れたる食品。柚の皮を置きなどして食す。古事談「みやま鵜(イササ)のひしほいりを參らせたりし」

ひしほ-いろ 醬色【名】襲(カサネ)の色目の一。表・裏共に蘇芳にて、黑みを帶ぶ。

ひしほ-す 醬酢【名】ひしほと、すと。萬葉「醬酢に蒜(ヒル)搗きかてて鯛もがも我にな見せそ水葱(ナギ)の羹(アツモノ)」

ひしほ-づけ 醬漬【名】野菜などを、醬に漬くること、又その漬物。延喜式「醬漬瓜」

ひしほ-の-つかさ 主醬【名】しゆしやう(主醬)に同じ。

ひじ-ほふもん 祕事法門・秘事法門【名】〔佛〕眞宗の異安心(イアンジン)の一。親鸞の子善鸞の唱導に係り、一實眞如の理談を、淨土門に採用するより起れるもの。十劫祕事・不拜祕事・御庫(オクラ)祕事など、種種あり。御文章「越前國にひろまる祕事法門といへることは、更に佛法にてはなし。あさましき外道(ゲダウ)の法なり」

ひ-しまひ 日仕舞【名】德川時代の米相場にて、賣買の當日に、取引を結了せしめし取組方法。即ち今の即日仕切又は證據金未入賣買に相當す。

ひし-みつめ 菱三目【名】紋所の一。四目(ヨツメ)菱の、下に位する一箇を缺けるもの。

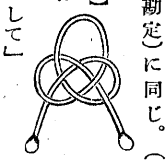
ひし-むかひざさ 菱向笹【名】紋所の一。五枚づつの笹の葉を、上下より向ひ合は

せて、菱形に描けるもの。「(蝶)に同じ。

ひし-むかひてふ 菱向蝶【名】ひしてふ(菱

ひし-むけ-ぐち 被仕向口【名】〔商〕せんぱうかんぢやう(先方勘定)に同じ。(仕向口に對して)

ひし-むすび 菱結【名】緒などを、菱形に結ぶこと。 一代女「大島田、幅疊の元結を、菱結にして」



(ひしむすび)

ひ-しん 披針【名】はばり(刃針)に同じ。

ひ-しん 非心【名】惡しき心。邪心。

ひ-しん 飛信【名】㊀大至急を要する書信。㊁各省・各府縣などの相互間に於て、非常・至急の信報を通ずる時、平常の規定に依らず、能力の及ぶ限りの速さを以て、繼立遞送をなさしむる、一種の特別郵便。明治七年の制定にて、今日は必要なし。

ひ-しん 皮疹【名】〔醫〕皮膚にあらはるる病變の總稱。 「悲酸。

ひ-しん 悲辛【名】かなしくつらきこと。

ひ-じん 鄙人【名】㊀身分・心・行爲などのいやしき人。野人。小人。〔卑人〕 ㊁自己の謙稱。小人。鄙夫。

び-しん 微臣【名】㊀微賤の臣。 ㊁臣下の、君主に對していふ謙稱。 太平記「微臣、爭でか、尺寸の謀を以て、強敵の圍みを出づべく候はんや」

び-しん 微震【名】㊀かすかにふるふこと。微少の震動。 ㊁〔地〕『英 Slight shock of earthquake 又 Microseism』地震計の外、靜止せる人又は注意せる人にして、始めて感ずるほどの地震。(激震・強震・弱震に對して)

び-じん 美人【名】㊀『詩經の邶風簡兮篇に「誰之思、西方美人」とありて、鄭玄の註に「思ニ周室之賢者ニ」と見ゆ』才德のすぐれたる人。佳人。 ㊁『王逸の離騷序に「離騷之文、依レ詩取レ興、靈脩美人、以媲ニ於君ニ」とあり』吾が君の尊稱。 ㊂『管子の七臣七主篇に「楚王好ニ小腰ニ、而美人好レ食」とあり』容貌の美しき女。美女。 狂言(米市)「米市御寮は、承り及うだ美人ちや」 ㊃支那漢代の女官十四等中の第五等。又、唐代の同十九等中の第十五等。

美人といふも、皮一重(ヒトヘ)【句】美人と稱せらるるも、ただ皮膚一重の如何によるのみなり。〔諺語〕

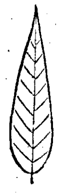
美人に愚人多し【句】美人にして、賢婦なる者は稀なり。〔諺語〕

美人に年なし【句】美人は、いつまでも若く見ゆ。〔諺語〕

美人は言はねど、隱(カクレ)なし【句】美人は、おのづから世に知れわたる。〔諺語〕 幸若(入鹿)「美人は、言はねど、隱なし。都の上下かつ知って」 〔語〕

美人薄命【句】「佳人薄命」に同じ。〔諺

ひしん-けい 披針形【名】〔植〕植物の葉の、披針卽ち刃針(ハバリ)の形なるもの。例へば、竹・栗等の葉の類。



(披針形)

びしん-けい 微震計【名】極微の地動のみの觀測を目的とする地震計、卽ち揣針の倍數を大ならしめたるもの。微動計。

びじん-けい 美人系【名】美人の多く生るる系統ある家又は地帶。

びじん-さう 美人草【名】〔植〕㊀『曾子固の虞美人草と題する詩の註に「項王亡滅、虞姬自刎。其墓上草、人呼爲ニ美人草ニ」とあり』**ひなげし**(雛罌粟)に同じ。 謠曲(項羽)「項羽の后虞氏と申せし人……の塚より生ひ出でたる草なればとて、さて美人草とは申し候」 ㊁**さねかづら**(南五味子)㊀を云ふ。〔大阪の語〕

ひじん-しよ 肥人書【名】太古に、肥前・肥後地方に行はれたりといふ文字。肥人は、「こまびと」と訓みて、朝鮮の諺文(オンムン)の類なるべしともいふ。**さつじんしよ**(薩人書)參照。 本朝書籍目錄「肥人書五卷」 釋紀「師說、大藏省御書中、有ニ肥人之字六七枚許ニ。先帝於ニ御書所ニ令レ寫ニ給其字ニ。皆用ニ假名ニ、或其字未レ明、或乃川等字、明見レ之」

ひ-しん-しよそく 非心所測【句】〔佛〕『心の測る所に非ざる義』人の心にては測り知るを得ざること。 大織冠「非口所宜(シヒヨクセシ)、非心所測とて、口にも說かれず、心にも測られず」 「(姬芭蕉)の漢名。

びじん-せう 美人蕉【名】〔植〕**ひめばせう**

びじん-ぞろへ 美人揃【名】多くの美人を揃ふること。 武家義理物語「古の美人揃は、見ぬ世の傳(ツタヘ)」

ひしん-にん 被審人【名】〔法〕特定の懲罰事犯に就き、當該官廳の審問又は審判を受くる人。

ひし-めき 犇【名】ひしめくこと。どよめき。騷動。 盛衰記「斯かるひしめきは出で來て候にこそ」 增鏡「東(アツマ)のひしめきのまぎれに」

ひし-めく 犇く【動四自】『**ひし**(緊)に、接尾語**めく**の添ひたる語』㊀ひしひしと音す。ひしひしとす。きしめく。 枕「いと重し。片つ方なれば、ひしめくに」 ㊁押しあひて騷ぎ立つ。押しあひ、揉みあふ。ごたごたとす。 堀川集「行幸に參らるるとて、出立(イデタチ)のひしめかるるけしきも聞ゆるに」 增鏡「ひしめき立ちぬる世の音なひを聞しめす先帝(センテイ)の御心地」

ひし-めゆひ 菱目結【名】**すみめゆひ**(角目結)に同じ。

ひし-もくかう 菱木瓜【名】紋所の一。木瓜を菱形に描けるもの。

ひし-もち 菱餅【名】㊀菱の實の仁を粉にして製したる餅。 ㊁菱形に切りたる餅。正月、鏡餅に載せ、又、三月の節句に、小口を青・白・紅の三色などに彩りて重ね、菱臺に載せて飾りなどす。 ひしのもち。 ひしがたもち。

ひしもち-いなづま 菱持稻妻【名】模樣の一。紗綾(サヤ)形稻妻と菱形とを配したる、四方連續のもの。

ひし-もん 被子門【名】〔植〕**ひしるゐ**(被子類)㊀に同じ。(裸子門に對して) 「し。

ひし-もやう 菱模樣【名】菱形の模樣。ひ

ひ-しや 飛車【名】㊀風に乘じて、空中を飛行すといふ車。とぶくるま。 和名「飛車。兼名苑注云、奇肱國人(今案、國人無ニ右臂ニ、故名レ之)。臣作ニ飛車ニ、從レ風飛行、故曰ニ飛車ニ」 ㊁將棊の駒の一。縱橫幾格にても、直線に進退するを得、成れば、金將及び銀將の作用をもなす。角行(カクカウ)と共に、最も有力なるものとす。 壽の門松「この飛車を、斯う引けば」 「土砂。

ひ-しや 飛砂【名】風のために飛び散る

ひ-しや【貌】**ひしやり**に同じ。 醒睡笑「五月五日競馬がへりの金藏主(コンザウス)槍に突かれてひしやとこそなれ」

びしや 毘舍・毗舍・鞞舍(梵 Veśa)【名】四姓(シシヤウ)の一。第三に位し、商業に從事せしもの。吠舍(ベイシヤ)。 「(毘舍離)の略。

びしや 毘舍・毗舍・毘耶【名】〔地〕**びしやり**

ひ-しやう 飛將【名】**ひしやうぐん**(飛將軍)の略。 「の略。

ひ-しやう 裨將【名】**ひしやうぐん**(裨將軍)

ひ-しやう 臂章【名】陸軍軍屬・諸工長・衞生部員など、特種の職務を有する者の、上衣又は外套の左臂に附著する徽章。

ひ-しやう 飛翔【名】鳥などの、空中を飛びかけること。

ひ-しやう 悲傷【名】かなしみいたむこと。かなしくいたましきこと。悲愴。傷悲。

ひ-しやう 非晶【名】〔鑛〕**ひしやうしつ**(非晶質)を見よ。 「に同じ。

ひ-しやう 非生【名】〔佛〕**ふしやう**(不生)

非生に生(シヤウ)を唱へ、非滅に滅を現ず【句】〔佛〕『妙法蓮華經文句(モングク)の卷九に「非生現レ生、非滅現レ滅」とあるに本づく』釋迦如來は、もと久遠成實(クヲンジヤウジツ)の古佛にて、眞如・法性(ホツシヤウ)の理に體達せるが故に、本身の壽量は、無限なる筈なれども、衆生(シユジヤウ)化益(ケヤク)のために、假に人間と同樣に、生滅(シヤウメツ)の相を示す。釋尊の降誕(ゴウタン)・入滅は、實は假の相にして、その本身は常住なり。 榮花「非生に生を唱へ、非滅に滅を現じたまひしが如く」

非生・非滅【句】〔佛〕佛の本體は、生滅の理を超越せること。前條參照。

ひ-じやう 非上【名】古、武家などにて、食物などを、內內にて調へし人。なかゐ。美女。 末女(ヒチ)。

ひ-じやう 非情【名】〔佛〕喜怒・哀樂の情なきこと、又その物。卽ち、草木・木石など。

無情。（有情(ウジヤウ)に對して）太平記「草木成佛(ジヤウブツ)疑なくば、非情までもあるまじ」謠曲（高砂）「有情・非情のその聲」

ひ-じやう 非常【名】㊀尋常にあらざること、又その事柄、又その程度。ひざう。異常。㊁平常と變れること、又その事。事變。㊂尋常よりすぐれてあること。㊃〔佛〕むじやう（無常）に同じ。㊄人の死。長秋記「三宮已非常」

非常の事ありて、然る後、非常の功を立つ【句】『司馬相如の喩二巴蜀父老一檄に見ゆ』無事の世には、功を立つる事難し。〔諺語〕

非常の赦(シヤ)【句】赦(シヤ)の一。朝廷の大事又は天變地異、その他、非常事件に際して、有罪者を悉く赦ししこと。非常の大赦。著聞「二十二社の奉幣、非常の赦を行はれしかども、更に益なし」平家「その日、非常の赦行はれて、去ぬる治承三年に流されたまひし人人、皆、都へ召し歸さる」

非常の大赦【句】前條に同じ。平家「今度、さしもめでたく、御産に、非常の大赦行はれたりと雖も、この俊寛僧都一人、赦免なかりけるこそ、うたてけれ」

ひ-じやう 肥壤【名】肥沃なる土壤。肥土。

び-しやう 微傷【名】輕微なる負傷。輕傷。

び-しやう 微晶【名】〔鑛〕『英 Microlite』火成岩中の玻璃その他の鑛物の中にある、微小なる柝狀の鑛物。いかなる鑛物なるかを知るに苦しむを例とす。

ひじやう-がうおん 非常號音【名】〔兵〕ひじやうこしふ（非常呼集）を見よ。

ひじやう-かんさつ 非常鑑札【名】火事、その他の事變の時、非常線を通過し得るための鑑札。

ひじやう-ぐち 非常口【名】常には閉ぢおき、火事・地震など、事變發生の時にのみ開くやうにせる戸口。

ひ-しやうぐん 飛將軍【名】行動の神速なる將軍。名將。飛將。

ひ-しやうぐん 裨將軍【名】副將軍。副將。裨將。太平記「堀口三郎貞滿を上將軍とし、大島讃岐之守、これを裨將軍として」太平記「諏訪・住吉大明神を副將軍・裨將軍として」

ひしやう-くわうぶつ 非晶鑛物【名】〔鑛〕非晶質を備へたる鑛物。例へば、天然玻璃・蛋白石など。鑛物界には稀に見る所なり。

ひじやう-けいさつ 非常警察【名】〔法〕戰時、その他事變に際して、普通警察を停止して、安寧・秩序を保つために、戒嚴令の下に行動する警察。非常保安警察。

ひじやう-けいはう 非常警報【名】非常のしらせ。

ひ-じやうこく-にん 被上告人【名】〔法〕上告審の被告、卽ち上告人の相手方。

ひじやう-こしふ 非常呼集【名】〔兵〕事變の際、部隊を武裝せしめて、集合・整列せしむること。普通、喇叭の號音を以て行ひ、これを非常號音といふ。

ひ-じやうごふ 非成業【名】一代にて、儒者となれる人。（成業(ジヤウゴフ)に對して）〔平安朝時代の語〕

ひじやう-じ 非常時【名】非常なる時。事變の發生したる時。

ひ-じやうしき 非常識【名】常識に外れてあること。沒常識。

ひしやう-しつ 非晶質【名】〔鑛〕『英 Amorphous』固體の分子排列に、方向に從へる集合の規則なく、光を通じても、割りても、熱にて膨脹せしめても、方向に從ひて、性質の差異を見ることなきもの。非結晶。非結晶質。

ひじやう-しや 非常赦【名】「非常の赦(シヤ)」に同じ。（大赦・常赦に對して）

ひじやう-じやうこく 非常上告【名】〔法〕第一審と第二審とを問はず、裁判官が、法律の解釋を誤りて、法律に於て罰せざる所爲に對して、刑を言ひ渡し、又は相當以上の重き刑を言ひ渡し、期間内に上訴する者無きため、判決の確定せる時、これが救濟の方法として、その事件につきての上告を受くる權ある裁判所の檢事が、司法大臣の命により、又は自己の職權を以て、その裁判所に提起する上告。

ひじやう-じやうそ 非常上訴【名】〔法〕さいしん（再審）㊁に同じ。

ひじやう-しやげき 臂上射擊【名】〔兵〕小銃を、他物に依託せず、左手にて支へ、照準をなしつつ行ふ射擊。

ひじやう-じゆんびきん 非常準備金【名】戰爭・凶荒・水害など、非常時の需要に備へんがために、平時に設定する準備金。

ひじやう-せうしふ 非常召集【名】戰時、その他の事變に於ける、在鄕軍人の召集。

ひじやう-せん 非常線【名】『英 Cordon』重大なる犯罪事件の發生し、或はその發生を豫期せる時、及び災厄の起れる時に、犯罪人逮捕のため、或は單に警備のため、警察官が、一定の區域を警戒すること。

非常線を張る【句】非常線の警戒を行ふ。

ひしやう-たい 非晶體【名】〔鑛〕『英 Amorphous』非結晶の鑛物。非結晶體。（結晶體に對して）

ひじやう-たいけん 非常大權【名】〔法〕戰時、その他、國家事變の際、法律に依らずして、臣民の自由權を制限するを得る、天皇の大權。帝國憲法に規定せらる。

ひじやう-ちようよう-けん 非常徵用權【名】〔法〕**せんじちようはつけん**（戰時徵發權）に同じ。

ひじやう-つうしん 非常通信【名】臺灣總督府の管轄區域内にて、非常急變の場合、その事變發生地に通信所を設け、郵便・電信或は電話によりて行ふ通信。

ひじやう-とくべつぜい 非常特別稅【名】㊀**せんじぜい**（戰時稅）に同じ。㊁『本稅を制定せる法律が、非常特別稅法と呼ばれしに本づく』日露戰役の際、增稅又は新稅設定の必要上より設けし租稅。

ひじやうとくべつぜい-はふ 非常特別稅法【名】〔法〕前條㊁を見よ。

ひしやう-にん 非商人【名】〔法〕『英 Non-trader』商行爲を、繼續的に爲すことを業とする者にあらざる人。（商人に對して）

ひじやう-ひ 非常費【名】㊀非常の場合に、支出又は消費すべき費用。㊁〔法〕**だいによびきん**（第二豫備金）に同じ。

ひじやう-ほあんけいさつ 非常保安警察【名】〔法〕ひじやうけいさつ（非常警察）に同じ。

ひじやう-もん 非常門【名】常には鎖しおき、火事・地震など、事變發生の時にのみ開くやうにせる門。

ひじやう-よう 非常用【名】事變發生の時に用ふること、又その物。

ひしや-おとし 飛車落【名】將棊の手合(テアハセ)にて、兩者の間に段位の差ある時、飛車を除きて指すこと。

びしや-かき 柃【名】〔植〕**ひさかき**（柃）の訛。

ひしやく 瓠・匏・瓢【名】〔植〕**ひさご**（瓠）㊀に同じ。**にがひしやく**（苦瓠）參照。盛衰記「與一が乘りたる馬は、……、鼻の先、瓠(ヒシヤク)の花の如く白かりければ、名をば夕貌(ユフガホ)といひ」

ひしやく 柄杓【名】『**ひさく**（杓）の訛』㊀竹・木又は金屬の筒、又は椀の如き物の横に、長き柄を附け、湯・水などを汲むに用ふる器具。狂言（通圓）「ひしやくを、腰に指し」㊁『「流(ナガレ)」を汲む」の義』**いうぢよ**（遊女）を云ふ。〔羽後國酒田の方言〕

柄杓で海を替へる【句】「貝殼で海を干す」に同じ。〔諺語〕

ひ-しやく 飛錫【名】『錫は錫杖の略』僧又は道士の遊行すること。行脚(アンギヤ)。雲水。（留錫に對して）

ひしやぐ 拉ぐ【動下二自】**ひさぐ**（拉ぐ）の訛。

ひしやぐ 拉ぐ【動四他】**ひさぐ**（拉ぐ）の訛。

び-じやく 微弱【名】微小にして、薄弱なること。

ひしやく-たて 柄杓立【名】**しやくたて**（杓立）に同じ。

ひしやく-ばな【名】『瓠花の義か。**ひしやく**（瓠）參照』鷹の尾の先の白きものなりといふ。

ひしやく-ふくべ 柄杓瓢【名】「混枝(ヒエダ)の瓢」に同じ。

ひ-しやくわい-せい 非社會性【名】〔法〕『獨 Antisozialer Karakter』人類の共同生存に危害を及ぼすべき性格。反社會性。

ひしやげ-ばな 拉鼻【名】ひしやげたるやうなる、低き鼻。

びしやご 鵙鳩【名】〔動〕みさご(鵙鳩)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

ひしやしやぎ【名】〔植〕ひさかき(柃)の訛。

びしやしやこ【名】〔植〕前條に同じ。

ひしや-て 飛車手【名】將棋にて、飛車を取らんとして打つ手。諺「王手・飛車手に角なりこむ」浮世風呂「飛車手・王手がはづれたら」

ひしや-とり 飛車取【名】次條を見よ。

飛車取・王手(ワウテ)【句】㊀將棊にて、飛車手と王手との兩手を掛くること。㊁一擧に、二つの利を得んとする譬。〔諺語〕和合人「へん、自身番で、飛車取・王手を狙ふやうに、斯くありたきもの、これは角(カク)成りたきといふ地口だが」

ひしや-ばうし-りん 飛砂防止林【名】保安林の一種。海岸その他の砂地にて、飛砂を防止せんがために仕立つる森林。

ひしや-ひしや【貌】びしやびしやに同じ。

びしや-びしや【名】〔植〕つりがねにんじん(釣鐘人參)を云ふ。〔山城國の方言〕

びしや-びしや【貌】㊀次條に同じ。㊁ひしがれてつぶるる音、又そのさま。㊂びしよびしよに同じ。

ぴしや-ぴしや【貌】平手などにて打つ音。ぴしやぴしや。和合人「ぴしやぴしやと撲(ナグ)るはずみに」

びしやぶ-ぶつ 毘舍浮佛(梵Vaiśvabhu)【名】〔佛〕過去七佛の一。過去の大劫に出でし第三の佛。

ぴしやん【貌】ぴしやり㊁に同じ。

ひしや-め 販女【名】ひさめ(販女)の訛。

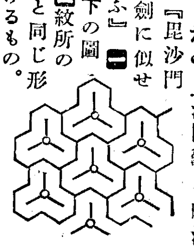
びしやもん 毘沙門・毗沙門【名】〔佛〕びしやもんてんわう(毘沙門天王)の略。

毘沙門の功德經(クドクギヤウ)【句】唱文師(シヤウモンシ)の、元日ごとに、朝早く來りて、高聲に唱へし文句。毘沙門天王經の「金銀無盡、福德・壽命無量」の說を述ぶるに擬し、後は、俗語に、めでたき事を集めて言ひ立てたり。

毘沙門の五童子【句】〔佛〕毘沙門天王に隨從する、禪尼只(ゼンニシ)・獨鍵・那吒(ナタ)・鳩跋羅(クバラ)・甘露の五體の童子。

毘沙門の眞言(シンゴン)【句】〔佛〕毘沙門天王を念ずる時の呪文(ジユモン)。盛衰記「十一面眞言百返、毗沙門眞言百返」

びしやもん-きつかふ 毘沙門龜甲・毗沙門龜甲【名】『毘沙門天の持てる劍に似せたるよりいふ』㊀模樣の一。下の圖を見よ。㊁紋所の一。前項のと同じ形を一箇描けるもの。



(ふかつきんもやしび)

びしやもん-きやう 毘沙門經・毗沙門經【名】〔書〕びしやもんてんわうきやう(毘沙門天王經)の略。

びしやもん-ぐ 毘沙門供・毗沙門供【名】〔佛〕毘沙門天王を供養して、福德を祈ること。古、立太子の御祈に用ひたり。

びしやもん-こう 毘沙門講・毗沙門講【名】毘沙門天王經を讀誦して、その福德に浴せんとする講中。盛衰記「式は觀音講、貌(カタチ)は毘沙門講、あなたふと、おそろし」

びしやもん-ごて 毘沙門籠手・毗沙門小手【名】籠手㊁の、上の方に、小き袖を作り附けたるもの。

びしやもん-すねあて 毘沙門臑當・毗沙門臑當【名】臑當㊀の、立擧(タテアゲ)を、十王頭(ジフワウガシラ)の狀にしたるもの。

びしやもん-だう 毘沙門堂・毗沙門堂【名】㊀毘沙門天王を祀れる堂。㊁山城國宇治郡山科(ヤマシナ)村大字安朱(アンジユ)にある天台宗の門跡。建久六年、平親範が、京都の上御靈(カミゴリヤウ)社內にありて、その佛事を修せし上出雲寺(カミイヅモジ)に創建せしもの。即ち、今の上京區毘沙門町は、その址なり。慶長中、山科に移して、同時に、延曆寺の別院なりしを、日光輪王寺の兼帶に歸す。世に毘沙門堂門跡といふ。謠曲〔西行櫻〕「毘沙門堂の花ざかり」㊂『その家、京都の毘沙門堂に近かりしよりいふ』和歌の師範家の一。藤原爲家の第二子爲敎を祖とす。爲敎の兄爲氏の二條家と、異母弟爲相の冷泉(レイゼイ)家と、各、門戶を構へ、互に家學の正統を傳ふと稱して、相下らざりき。一名、京極家。

びしやもんだう-もんぜき 毘沙門堂門跡・毗沙門堂門跡【名】天台宗の門跡。舊宮門跡の一。京都上出雲寺(カミイヅモジ)の毘沙門堂を本據とす。法印明禪(參議藤原成賴の子)を祖とし、その後、十一代忠承に至り、一時中絕せしを、德川時代に至り、日光輪王寺の公海(天海の弟子)、山城國山科(ヤマシナ)に堂舍を營みて再興し、入道守澄親王に傳へ、爾來、代代、輪王寺門主の兼帶する例となり、明治維新後、一旦門跡の稱を廢せられ、十八年、復び許さる。

びしやもん-だち 毘沙門立・毗沙門立【名】毘沙門天王の如くに、勇しく踏みはだかりて立つこと。仁王(ニワウ)立。吉野都女楠「毘沙門立に、すつく立」

びしやもん-てん 毘沙門天・毗沙門天【名】〔佛〕次條に同じ。盛衰記「五尺の毘沙門天像を造り始めらる」

びしやもん-てんわう 毘沙門天王・毗沙門天王(毘沙門は梵 Vaiśravaṇa)【名】〔佛〕『多聞(タモン)・普聞など譯す。その名、他の三天にまさりて、四方に普く聞ゆとていふ』四天王の一。もと暗黑の屬性なりしが、次第に光明の神となりて、佛法守護と福德施與とを兼ぬるに至り、多くは、その身は、黃色、忿怒(フンヌ)の相を示し、身に七寶莊嚴の甲冑を帶し、左手に寶塔を捧げて、六道の貧民に財福を與ふる姿を示し、右手に寶棒を執りて、十方の怨敵(ヲンテキ)を摧く意を示し、須彌山(シユミセン)の第四層北水精宮に居りて、北方を守護し、無量百千の夜叉・羅刹(ラセツ)を統領すと說く。本邦の俗、七福神の一とす。多聞天王。多聞天。北方天。毘沙門天。毘沙門。著聞「我是佛法擁護者、鞍馬寺毘沙門天王也」

びしやもんてんわう-きやう 毗沙門天王經・毗沙門天王經【名】〔書〕毘沙門天王の功德を稱讚したる佛經。唐の不空の漢譯と、宋の法天の漢譯に係る、佛說毘沙門天王經と題するものとあり。毘沙門經。

びしやもん-むかへ 毘沙門迎・毗沙門迎【名】大和國奈良にて、福を迎ふる神なりとて、正月三日に賣りあるきしもの。世間胸算用「南都……三日のあけ方に、毘沙門迎と賣りける」

ひし-やらい 菱矢來【名】ひしがたやらい(菱形矢來)に同じ。

ひしやり【貌】びしやりに同じ。

ぴしやり【副】㊀水中に蹈み込む音。ぴちやり。㊁扁き面を打つ音。ぴちやり。

びしやり 毘舍離・毗舍利・毘耶離(梵Vaiśāli)【名】〔地〕中天竺に在りし國。維摩(ユイマ)大士の住せし處、又、佛滅一百年に第二の結集の行はれし處。盛衰記「毗舍利國尋二佛跡一」

びしやり【貌】㊀ひしがれて潰るる音、又そのさま。ひしやり。ひしや。㊁重き物の落つる勢にて、水の、あたりに散る音、又そのさま。ひしやり。びつしやり。

ぴしやり【貌】㊀前條に同じ。㊁戶・障子を手荒く閉づる音。ぴしやん。ぴつしやり。

ひ-しゆ 匕首【名】頭部が匕(サジ)の形なる短劍。あひくち。

匕首の劍【句】前條に同じ。太平記「三つに折れて失せたりし匕首の劍」

ひ-しゆ 非修【名】〔佛〕次條を見よ。

非修・非學【句】〔佛〕修學せざること。修行も學問もせぬこと。徒然「非修・非學の男」

ひ-じゆ 非儒【名】儒にあらざること、又その人。本朝文粹「何必可レ弄二非儒之翟一」

非儒の官【句】非儒の者も任ぜらるる官。康富記「大辨非儒官也」

ひ-じゆ 鄙儒【名】㊀鄙(イヤ)しき儒者。腐儒。俗儒。㊁じゆしや(儒者)の謙稱。

び-しゆ 美酒【名】味の美なる酒。

び-しゆ 美珠【名】美麗なる珠(タマ)。

び-しゆ 美鬚【名】美しきあごひげ。

びしゆ 毘首・毗首【名】〔佛〕びしゆかつま(毘首羯磨)の略。榮花「倩二毗首一而加二意巧一、移レ孝、禮二尊顏一」

び-じゆ 眉壽【名】『眉毛の長きは、長壽の兆なりといふによりていふ』眉毛の長

く白くなるほどの長壽。

ひ-しゆう 祕宗・秘宗 【名】〔佛〕しんごんしゆう(眞言宗)に同じ。

びしゆかつま 毘首羯磨・毗首羯磨(梵 Visvakarman)【名】〔佛〕『巧業・造一切者など譯す』帝釋(タイシヤク)天の臣にして、その宮殿内に住し、諸天のために、種種の工巧物を製作し、又、建築を司るといふ神。故に、印度の工業者、多くこれを祭る。毘首。 榮花「四天王、いかめしく立たせたまへり。……毗首羯磨も、いと斯くやはえ造り奉らざりけんと見えさせたまふ」

びしゆかつま-てん 毘首羯磨天・毗首羯磨天 【名】〔佛〕前條に同じ。

び-しゆく 尾宿 【名】〔天〕二十八宿の一。東方に位するもの。あしたれ。び。尾星。

び-じゆく 糜粥 【名】ゆるきかゆ。かゆ。

ひ-じゆげふ-はかせ 非受業博士 【名】ひげふはかせ(非業博士)に同じ。

ひ-じゆつ 祕術・秘術 【名】祕密なる術。祕して他に示さぬ術。

び-じゆつ 美術 【名】『英 Fine art. 獨 Schöne Kunst. 明治六年、我國政府の、墺太利國博覽會に出品參加の際、平山成信の始めて充用せし譯語なりといふ』㊀色彩・形體・音律・言文などを手段として、美を表はすを目的とする技術、又その製作。即ち繪畫・建築・彫刻・音樂・文學など。藝術。㊁ぞうけいびじゆつ(造形美術)に同じ。

びじゆつ-か 美術家 【名】美術の研究・製作などに從事する人。

びじゆつ-かい 美術界 【名】美術家の社會。

びじゆつ-かうこがく 美術考古學 【名】『英 Archaeology of art』美術上の遺物に就きて研究する考古學。

びじゆつ-がくかう 美術學校 【名】㊀繪畫・彫刻・建築及び應用美術の技術者、又は普通の圖畫教員となるべき者を養成する學校。㊁とうきやうびじゆつがくかう(東京美術學校)の略。

びじゆつ-こく 美術國 【名】美術の發達せる國。

びじゆつ-し 美術史 【名】美術の變遷・發達の跡を研究して敍べたるもの。

びじゆつ-しん 美術心 【名】美術の趣味を解する心。

びじゆつ-しんさ-ゐゐん 美術審査委員 【名】美術審査委員會を組織する委員。文部大臣の奏請により、内閣にて命じ、文部大臣の定むる所により、日本畫・西洋畫・彫刻の三部の何れかに屬し、委員長の指揮を承けて、審査上の事務を掌るもの。任期は一箇年。

びじゆつしんさ-ゐゐんくわい 美術審査委員會 【名】文部大臣の監督に屬し、美術展覽會㊁の出品を審査し、その他、美術展覽會に關する事項を處理する委員會。日本畫・西洋畫・彫刻の三部に分ち、委員長と委員とを以て組織し、主事・書記の職員を置く。

びじゆつしんさゐゐん-ちやう 美術審査委員長 【名】美術審査委員會の委員長。文部大臣の奏請により、内閣にて命じ、會務を統理し、審査の成績を、文部大臣に報告するもの。任期は三箇年。

びじゆつ-てんらんくわい 美術展覽會 ㊀美術品の展覽會。㊁もんぶしやうびじゆつてんらんくわい(文部省美術展覽會)の略。

びじゆつてんらんくわい-づろく 美術展覽會圖錄 【名】美術展覽會㊁の陳列品の圖錄。

びじゆつ-ひん 美術品 【名】美術上の製作品。

ひ-じゆん 批准 【名】㊀『批は、表奏の末尾に、天子自ら答勅を記さるる義、准は許す義』臣下の奏上する文書又は事柄に對し、君主が、可否を判決して、裁許あらせらるること。㊁〔法〕『英 Ratification』主權者が、全權委員の協定したる條約案を嘉納・採用する形式。

批准交換 【句】〔法〕『英 Change of ratification』批准を經たる條約文を、當事國が互に交換すること。條約は、これによりて、効力を生ず。

ひ-じゆん 非順 【名】順當ならぬこと。盛衰記「非順の榮花に誇り」

ひ-じゆん 非巡 【名】前條の誤。盛衰記「非巡の官に昇り、君をもなみし奉り」

ひ-じゆん 肥潤 【名】地味肥えて、水分に富めること。

び-じゆん 彌旬 【名】『旬日に彌(ワタ)る義』十日間かかること。

ひじゆん-じよ 批准書 【名】批准を經たる條約書。

ひ-しよ 飛書 【名】㊀『揭傒斯の詩に「飛書九重天」とあり』ひさつ(飛札)に同じ。㊁『南史の孔奐傳に「爲二飛書所レ謗、將レ陷二重辟一」とあり』いづこよりとも知らず來れる書狀。投書。

ひ-しよ 祕所・秘所 【名】內證の所。ひめたる場所。

ひ-しよ 祕書・秘書 【名】㊀祕して、人に示さぬ書物。祕藏の書。祕本。 太平記「打物は、子房が兵法を得たまへば、一卷の祕書盡されずと云ふ事なし」㊁支那にて、天子所藏の書、又それを司る官。㊂明治五年、海軍省の祕史局に置かれし奏任官。初、大・少の二等に分れ、翌年大・中・少の三等に分れて、祕史局と軍務局とに置かれ、大祕書は奏任、その他は判任となり、同七年、兩局と共に廢せられたり。㊃乘艦四文官の一たりし祕書科に置かれ、大・中・少の三等に分れて、科務を掌りし士官。明治十五年廢せられたり。㊄賞勳事務局に置かれ、一級より三級まであり。祕書官の指令を受けて、各課の事務を分掌せし判任官。同年十二月、賞勳局と改稱せらるるに及びて、その職員となり、同十年廢せられたり。㊅官廳・軍隊などの長官又は司令官に直屬して、機密の事務を掌る職。

ひ-しよ 避暑 【名】涼しき地に轉じて、暑氣を避くること。あつさよけ。(避寒に對して) 江談抄「炎暑之時請レ暇、向二宇治別業一、以二避暑一爲レ事」

ひ-じよ 飛絮 【名】風に飛び散る柳又は茅・薄(ススキ)などの花。

ひ-じよ 裨助 【名】たすけ。すけ。裨補。

ひ-しよう 卑稱 【名】卑しめてとなふること、又そのとなへ。謙稱。

び-しよう 美稱 【名】ほめてとなふること、又そのとなへ。美名。尊稱。

び-じよう 鼻茸 【名】〔醫〕『獨 Nasenpolypen』鼻腔内に生ずる、腫瘍。通常、表面滑澤なる灰白色、又、稀に帶黃赤色なる、膠樣の外觀を呈す。慢性鼻炎・副鼻腔蓄膿症、鼻腔内の異物、その他、諸種の鼻腔粘膜疾患は、悉くその原因となる。はなたけ。はなふしべ。

ひしよう-じけん 非訟事件 【名】〔法〕民事・刑事の訴訟以外にて、司法裁判所の取扱に屬する事件。即ち、權利關係の成立・變更・消滅等に關し、權利を確認して、その紛爭を未然に防ぐを目的とする處分。民事非訟事件と商事非訟事件とに分つ。

ひじよう-すう 被乘數 【名】〔數〕『英 Multiplicand』乘法に於て、乘ぜらるる數。例へば 25×4＝100 に於ける 25 の類。實。(乘數に對して)

ひしよ-かく 避暑客 【名】ひしよきやく(避暑客)に同じ。

ひしよ-かく 祕書閣・秘書閣 【名】うちのごしよどころ(內御書所)の唐名。

ひしよ-かん 祕書監・秘書監 【名】㊀支那にて、古、經籍・圖書に關する事務を掌りし職。後漢の桓帝の時、初めて一人を置き、魏の文帝も、これに倣ひて置き、晉の代、中書省に入りしが、梁以後、隋・唐・宋にかけては、祕書省の長官の稱となり、元・明の代には、省の名を用ひずして、これを置き、明の洪武十三年、翰林院に併せられたり。㊁ずしよのかみ(圖書頭)の唐名。

ひしよ-きやく 避暑客 【名】避暑に赴く旅客。

ひしよ-きよく 祕書局・秘書局 【名】ひしきよく(祕史局)を見よ。

ひ-しよく 非職 【名】㊀現任にあらざること、又その人。 太平記「大塔宮を討ち奉りたらん者には、非職・凡下を言はず、伊勢車間の庄を、御賞に充て行はるべし」㊁官吏及び准官吏が、地位を失はずして、職務のみを免ぜらるること。

ひ-しよく 罷職 【名】『罷の字の音、正しくはハイ』職をやめしむること。職務をやめらるること。

ひ-しよく 賁飾 【名】『賁はかざる義』かざること。かざり。

び-しよく 美色 【名】㊀うつくしき色。㊁うつくしき顏色。美なる容色。女色。娼

妓娼麗「美色のために命を沒するを以て見れば」

び-しよく 美食【名】美味を食すること、又その食物。玉食。一代男「朝夕、おのが相應より、美食を好み」

び-しよく 美飾【名】身邊などを、うつくしく飾ること、又そのかざり。

ひしよく-くわんり 非職官吏【名】非職となりてある官吏。

ひしよく-けい 比色計【名】『英 Colorimeter』諸種の著色溶液の著色度を檢するに用ふる器械。並行せる二箇の管の一方に、既知著色度の標準液を入れ、他の一方に、檢査を要する液を入れ、その深さを比較して測るを、普通とす。

びしよく-ごのみ 美食好【名】美食を好むこと。一代女「遊女(アソビメ)ながら美食好」

ひしよ-くわ 秘書科・秘書料【名】明治六年、海軍に置かれし乘艦四文官の一。機密文書などを掌りしもの。職員は、初、正・權の秘書官、大・中・少の秘書及び秘書副を置きしが、同九年、正・權の秘書官を廢して、大・中・少の秘史を置き、同十五年廢せられたり。

ひしよ-くわん 秘書官・秘書官【名】〔一〕明治六年、海軍省に置かれし秘書局及び軍務局に屬し、正と權とありて、局務を掌理せし奏任官。翌年、二局と共に廢せられたり。〔二〕乘艦四文官の一なる秘書科に屬し、科務を掌理せし上長官。正と權とあり、明治九年、秘史と改稱せられたり。〔三〕賞勳事務局に置かれ、一等と二等とありて、各種の賞牌・從軍牌などを監守し、一切の文書及び會計の事を掌りし奏任官。同年十二月、賞勳局と改めらるるに及びて、その職員となり、同十九年廢せられたり。〔四〕内閣總理大臣・各省大臣・樞密院議長・總督などに專屬して、機密事務を掌る高等官。特別任用に依ることを得。

ひしよ-くわい 避暑會【名】納涼のために催す會。

ひしよ-しゆじ 秘書主事・秘書主事【名】〔一〕秘書省［一］の職員の一。その條を見よ。

〔二〕圖書屬(ヅショノサクワン)の唐名。

ひしよ-じよう 秘書丞・秘書丞【名】〔一〕秘書省［一］の職員の一。その條を見よ。〔二〕圖書允(ヅショノジョウ)の唐名。

ひしよ-せい 秘書省・秘書省【名】〔一〕支那にて、梁・隋・唐の代、經籍・圖書に關する事務を掌りし役所。長官を秘書監(一人)といひ、唐制にては、その下に少監(二人)・丞(一人)・郎(四人)・校書郎(八人)・正字(四人)・主事(一人)等の職員あり。著作・太史の二局、これに屬したり。〔二〕づしよれう(圖書寮)［一］の唐名。

ひしよ-せうかん 秘書少監【名】〔一〕秘書省［一］の職員の一。その條を見よ。〔二〕づしよのすけ(圖書助)の唐名。

ひしよ-ち 避暑地【名】避暑に赴く土地。避暑客の集まる地。

びしよっぷ (英 Bishop)【名】かんとくぼくし(監督牧師)に同じ。

ひし-よつめ 菱四目【名】紋所の一。四目を、菱形に描けるもの。

ひしよ-でん 秘書殿・秘書殿【名】ごしよどころ(御書所)の唐名。

びしよ-ぬれ びしよ濡【名】びしよびしよに濡るること。ずぶぬれ。八笑人「著物を著替へさっし。尻はびしよ濡だ」

びしよ-びしよ【貌】〔一〕こまかなる雨の、たえまなく降るさま。びしやびしや。〔二〕濡れそぼつさま。びしやびしや。びっしより。みさみさ。みぞみぞ。

びしよびしよ-あめ びしよびしよ雨【名】びしよびしよぶりの雨。そぼふる雨。

びしよびしよ-ぶり びしよびしよ降【名】雨の、びしよびしよと降ること。

ひしよ-ふく 秘書副・秘書副【名】〔一〕海軍省の秘史局及び軍務局に置かれ、秘書の下にありて、局務に從事せし判任官。二局の廢止に伴なひて廢せられたり。〔二〕乘艦四文官の一なる秘書科に置かれ、秘書の下にありて、科務に從事せし下士。明治十五年廢せられたり。

ひしよ-やく 秘書役・秘書役【名】會社その他の團體の主宰者に直屬して、機密事務を掌る役。

ひしよ-ゆき 避暑行【名】避暑に出掛くること。避暑のために轉地すること。

ひしよ-らう 秘書郎・秘書郎【名】〔一〕秘書省［一］の職員の一。その條を見よ。〔二〕づしよのかみ(圖書頭)の唐名。

びしより【貌】びしよびしよに同じ。

びじ-らう 微事郎【名】〔一〕支那唐代の正八品下の雅稱。〔二〕正八位下の唐名。

ひしり【貌】ひしめく音。ひしひし。びしり。義經記「薙鎌・熊手を、船に、からりひしりと取入れて」

ひ-じり 聖【名】『天皇を、日の食國(ヲスクニ)を知ろしめす日の神に擬へていへるが本來の意義にて、漢字の「聖」を充用せるより、他の意義をも生じたるなりといふ。一說には、日知の義にて、天下の事理を明かに知るを、日光の洽きに譬へていふと』〔一〕天皇の尊稱。聖天子。聖君。聖帝。［日知］萬葉「橿原(カシハラ)の日知の御代ゆ生(ア)れましし神のことごと」〔二〕德行秀でて、神に近き人。仙人。聖人。聖哲。紀「神仙、ヒジリ」同「大人、ヒジリ」〔三〕專門の技能に、極めてすぐれたる人。うし。大人。［日知］古今「柿の本の人麿なん、歌のひじりなりける」〔四〕佛道に歸依(エキ)して、固く戒行(カイギヤウ)を守ること、又その人。だいとこ。聖僧。高僧。清僧。聖者(シヤウジヤ)。源氏「深き岩の中にぞ、ひじり入りゐたりける」榮花「惟成(コレナリ)入道は、ひじりよりもけに、めでたく行ひてあり」〔五〕僧の尊稱。法師。ひじりほふし。［非寺里］枕「說經(セキヤウ)……、その事するひじりと物語して」〔六〕〔佛〕ひじりかた(聖方)の略。［非事吏］新著聞集「堯順と云ふ商(アキナヒ)聖あり」〔七〕『魏略に「太祖禁レ酒。而人竊飮。故難レ言レ酒、以二白酒一爲二賢者一、以二清酒一爲二聖人一」とあるに本づく』せいしゆ(清酒)の異稱。(賢人に對して) 萬葉「酒の名を聖(ヒジリ)とおほせし古の大きひじりの言(コト)のよろしき」

聖の君【句】〔一〕ひじり(聖)［一］を、一層尊みていふ語。聖天子。聖帝。聖君。紀「聖皇、ヒジリノキミ」〔二〕ひじり(聖)［五］

を、一層尊みていふ語。空穗「わが大事の聖の君、この事おもむけしめたまへ」

聖の時【句】聖［一］の御代(ミヨ)。聖時(セイジ)。聖代。聖世。年中行事歌合「唐人のかしこき影をうつしとめて聖の時と今日祀るなり」

聖の書(フミ)【句】聖人の手に成りし書物。聖書(セイシヨ)。艶狩劒本地「詩書・禮樂の道廣き聖のふみも渡り來て」

聖の御形(ミカタ)【句】聖の像。佛像。續後紀「護りなす聖の御像(ミカタ)、四十柱(ヨソハシラ)造りまつりて」

聖の御門(ミカド)【句】「聖の君」［一］に同じ。榮花「圓融院の上、世にめでたき御心おきて、たぐひなき聖の御門とさへ申しけるに」

聖の宮【句】聖［一］のいます宮。夫木「あづまにも跡ある事ぞまきもくのひじりの宮の深きみゆきは」

聖の御代【句】「聖の時」に同じ。

びしり【貌】びしびしに同じ。

ぴしり【貌】びしびしに同じ。

ひじり-あんどう 聖行燈・非時里行燈【名】『形、高野聖(カウヤヒジリ)の笈(オヒ)に似たるに因るとも、聖窗(ヒジリマド)の軒に掛けたるに因るともいふ』昔、局見世(ツボネミセ)の格子に掛けて、看板に代へたる掛行燈。二代男「非寺里行燈の光を受けて、大かた閑日(ヒマ)を暮しかねたる女郎」

ひじり-うし 聖牛【名】堤防具の一。勾配低き大川にて、砂石を押し流すほどの水勢ある場所に、雜木にて、棟木の如き狀に結び、その間に棚を設けて、蛇籠(ジヤカゴ)を數本並べおき、川よけとするもの。大さによりて、大聖牛・中聖牛などの別あり。

ひじり-かた 聖方【名】〔一〕〔佛〕德川時代に、紀伊國高野山の大衆の中、隱遁して、淨業を修し、問道・攻學・勸進などのために諸國を遍歷せし一派。念佛者。ひじり。高野ひじり。〔二〕德川時代に、吳服を背負ひて行商せしもの。せり吳服。ひじり。

ひじり-がたな 聖刀【名】聖柄(ヒジリツカ)の刀なるべし。藻鹽草「ひじりがたな」

ひじり-こき【貌】斑鳩(イカルガ)の鳴聲なりといふ。〔古語〕 著聞「斑鳩よ豆うましとは誰もさぞひじりこきとは何を鳴くらん」

ひじり-ごこち 聖心地【名】次條に同じ。〔古語〕 源氏「さるひじり心地にも、いと嬉しく覺えければ」

ひじり-ごころ 聖心【名】法師らしき心。出家せんとする心。道心。〔古語〕 源氏「疎(オロ)かならず思ひそめ奉りし一ふしに、……聖心は、さすがに違ひやしにけん」

ひじり-ことば 聖言葉【名】法師らしき言葉。〔古語〕 源氏「殊にをかしきふしもなきひじり言葉なれど」

ひじり-ざま 聖様【名】法師らしきこと。坊主くさきこと。〔古語〕 源氏「いと世づかぬひじりざまにて」

ひじり-たけ 聖茸【名】〔植〕**れいし**(靈芝)に同じ。

ひじり-だつ 聖だつ【動四自】法師らしく見ゆ。坊主くさきさまなり。〔古語〕 源氏「ひじりだつ驗者(ゲンザ)など」

ひじり-づか 聖柄【名】『その狀の、頭に髮なきに似たるよりいふとも、又、魚物を用ひざるにより、佛家の魚類を忌むに寄せていふともいひ、又、菱切柄(ヒシキリツカ)の略にて、柄頭の菱形なるものともいふ』刀劍の柄の、鮫皮を附けず、木地のままなるもの。**ひじりがたな**(聖刀)參照。 盛衰記「入道は、……聖柄の腰の刀を差し」

ひじり-ばうず 聖坊主【名】次條に同じ。

ひじり-ほふし 聖法師【名】**ひじり**(聖)㊄に同じ。 宇治「木槵子(モクレンジ)の念珠の大きなるくりさげたる聖法師」

ひじり-まど 聖窓・聖窻【名】『格子の內より、遊女の、遊客を見かけて、「もし、もし」と呼びかくるを、孔子と孟子との意に取りなしていふとぞ。**ひじりあんざう**(聖行燈)參照』昔、局見世(ツボネミセ)に設けたる、一種の窻。出格子に似て、それよりは小く、且つ箱の如く作りて、外方へ張り出し、櫺子(レンジ)には、短き子(コ)を雜へず、外より內部のよく見ゆるやうにせるもの。 六玉川「ひじり窻をも振らぬ錫杖」

ひし-りんだう 菱龍膽【名】紋所の一。菱龍膽の葉三枚に、花一箇を附けたるものを、上下向ひ合はせ。菱形に描けるもの。

ひじり-め 聖目【名】**せいもく**(聖目)㊀に同じ。 徒然「碁盤……、我が手元を能く見て、ここなるひじり目をすぐに彈けば、立てる石、必ずあたる」

ひ-しりやう 非思量【名】〔佛〕思量に執著せぬこと。邪思・妄念を拂ふこと。敎家(ケウ)にて、無分別といふと同義にして、坐禪の要術とす。〔禪家の語〕

ひじり-よ 聖世【名】出家の境界。(うき世に對して)〔古語〕 源氏「今さらに、ひじり世の者、世にかへり出でん心地すべきことと思ふに」

ひしる【動四自】鹿鳴く。〔古語〕 散木「山に遊びあるきけるに、鹿のひしる聲のしければ、 かせかけてひしるを鹿の聲聞けばねらふわが身ぞ遠ざかりぬる」

ひ-じる 聖る【動四自】ひじりとなる。出家す。〔古語〕 沙石集「一生不犯(フボン)の聖の故に、父に似て聖らんずらんと答へて、比興す」

ひし-るゐ 被子類【名】㊀〔植〕顯花植物の二大別の一。主なる特徵は、雌蘂に子房を具へ、その中に、種子となるべき胚珠を生ずる點に在り。種類に富めること、植物界中の首位に位す。單子葉門と雙子葉門との二類に分つ。(裸子類に對して) ㊁〔動〕ヒドロ蟲類の一目。群體を形成し、水母又は種囊によりて增殖し、水螅莢及び生殖莢を具ふ。軟水母類。

ひ-しろ 樋代【名】『樋は櫃の義にて、高天原(タカマガハラ)より降りたまふ時、納まりし御櫃の代(カハリ)ともいひ、又、日の代の義なりともいふ』伊勢大神宮の御神體を納め奉る御器。純金製にして、長方形なりといふ。 儀式帳「御樋代一具(深一尺四寸、內八寸三分、徑三尺、內一尺六分)」

ひ-じろ 火代【名】**ろ**(爐)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

ひしろ-の-みや 日代宮【名】**まきむくのひしろのみや**(卷纏日代宮)の略。

ひし-わちがひ 菱輪違【名】紋所の一。輪違を、菱形に描きたるもの。

ひし-ゐげた 菱井桁【名】㊀紋所の一。井桁を、菱形に描きたるもの。㊁模様の一。菱形の井桁を連續せしめたるもの。

ひず【動四自】勢挫く。ひしぐ。〔古語〕 紀「盜賊恐懾、ヌスビトオソレヒシ」

ひす 比す【動佐變他】㊀くらぶ。比較す。比例す。㊁たすく。かばふ。

比して周(シウ)せず【句】**ひしう**(比周)㊀を見よ。

ひす 祕す・秘す【動佐變他】隱して示さず。ひむ。祕密にす。 空穗「何かは、文書(モンジョ)などをさへひしはべらん」 源氏「祕したまふ御琴ども取り出でて」

祕すればこそ道は道なれ【句】宗敎・藝術などの尊さは、祕するによりて、はじめて維持せらる。〔諺語〕

びす【名】㊀**びすけっと**の略。〔俚語〕 ㊁**をんな**(女)を云ふ。〔肥前國長崎の方言〕

びす 尾す【動佐變自】㊀他人の後に附く。㊁他人の後をつけて行く。尾行す。追尾す。㊂つるむ。交尾す。

ひ-すう 卑陬【名】『陬の音、正しくはソウ』心に恥づること。

ひ-すう 祕樞・秘樞【名】祕密にて樞要なること、又その物事。 盛衰記「天文の淵源を盡し、占文の祕樞を極めたり」

ひすか 嚚【貌】ひすかしきさま。〔古語〕 名義抄「姦、ヒスカニ・カシカマシ・アサマク・カマビスシ」

ひすかし 嚚し【形二】心ひずみてあり。心ねぢけたり。かたまし。頑嚚なり。ひすし。いすかし。〔古語〕 名義抄「嚚、ヒスカシ・オロカ」

ひすか-しま 嚚【貌】『**しま**は、**あからしま**・**さかしま**(倒)・**よこしま**(邪)などの**しま**に同じ』ひすかしきさま。いすかしま。〔古語〕 字鏡集「嚚、ヒスカシマナリ・ヒカメク」

ひ-すがら 終日【副】ひねもす。ひもすがら。終日。 公任集「小忌衣(ヲミゴロモ)すりて書きつる露けさは春の日すがら又ぞ忘れぬ」

ひすか-わざ 嚚業【名】ひすかしきわざ。みだりがはしき行爲。〔古語〕 字鏡「奸、亂也。犯姪也。睢也。比須加和佐。又、太波久」

ひずき 鹿尾菜【名】〔植〕**ひじき**(鹿尾菜)に同じ。〔古語〕 字鏡「鹿尾菜、比須支」

ひずき-め 鹿尾菜【名】〔植〕前條に同じ。

ひずき-も 鹿尾菜【名】〔植〕㊀前條に同じ。〔古語〕 和名「鹿尾菜、比須岐毛」 ㊁**ふのり**(布海苔)に同じ。

びすけ【名】次條の略。〔俚語〕

びすけっと(英 Biscuit の訛)【名】小麥粉を原料とし、これに、バタ・牛乳・玉子などをまぜて捏ね、型に入れて、形を附け、蒸燒にせる、堅きパンの如き西洋菓子。

ひずし【形一】慾深し。ずるし。こすし。ひすかし。ひすらし。ひすらこし。 艶狩劒本地「このひすい人心、騙(カタリ)のあるまいものでもなし」

びすてき【名】『或は伊 Bistecca の訛か』**びふてき**の訛。

ひすてりい 比斯的里・弊私的里・歇私的里・臓躁(羅 Hysteria)【名】〔醫〕殊に婦人に多き神經病。失望・苦慮又は生殖器疾患などに基づき、身體症狀として、眩暈・頭痛・耳鳴・不眠・全身の倦怠等を覺え、限局性皮膚知覺の、亡失又は過敏・痲痺、痙攣・筋肉短縮などをも來し、精神上には、興奮し易く、小事に苦慮し、或は痴鈍となり、物事を等閑にする等の異常狀態を呈す。

ひすてりっく(英 Hysteric)【貌】ヒステリイの患者に似たる感情興奮のさま。

ひすてれしす(英 Hysteresis)【名】〔理〕鐵心を圍めるコイルに通ずる電流の方向を變へて、磁極を轉換せんとする際に發生する磁氣的抵抗。エネルギイ損失の結果を生ず。

ぴすとん(英 Piston)【名】〔理〕**くわっそく**(活塞)に同じ。

ぴすとる 拳銃・短銃(英 Pistol)【名】『伊太利國 Pistola 府にて創造せしによりていふ』極めて小く短くして、携帶に便なる銃。ふところでっぽう。短銃。拳銃。

ぴすとる-がうたう 拳銃強盜・短銃強盜【名】ピストルにて脅迫する强盜。

ひ-すばる【動四自】干てすぼまる。干からびて、小くなる。

ひ-すまし 樋清【名】樋箱をすまし淸むること、又その事を掌る下司(スゲ)の女。厠

を掃除などする賤しき女。〔古語〕空穗「ひすまし六人、青丹(アヲニ)のうへのきぬ著て歩み」東鑑「比須末志者二人」

ひすまし-わらは 樋淸童【名】ひすましの事などに從事するわらは。〔古語〕和泉式部物語「ひすましわらはして、右近の丞(ゾウ)にさし取らせて來(キ)ねとて遣る」

ひずみ 歪【名】㊀ひずむこと、又その形。ゆがみ。いびつ。㊁〔理〕『英 Strain』外力による、物體の形・體積などの變化。㊂ひづみを見よ。

ひずむ 潛む・潜む【動四自】ひそむ(潛む)に同じ。〔古語〕落窪「かいひすみて、心ぼそげなれど」

ひずむ 歪む【動四自】形、不正になる。形まがりくねる。いびつになる。ゆがむ。俳諧古選(埋角)「實の入って夕顏の宿ひずみけり」

びすむうと(獨 Bismuth)【名】〔化〕さうえん(蒼鉛)に同じ。

ひす-め【名】〔植〕こんぶ(昆布)に同じ。

ひすらぐ 磷ぐ【動四自】うすらぐ(薄らぐ)に同じ。〔古語〕名義抄「磷、ヒスラグ・ツブ・ウスラグ」

ひすら-こし【形二】ひすしに同じ。新永代藏「ひすらこき人の、出世・立身したる例なし」

ひすらし【形二】前條に同じ。日本永代藏「ひすらく、人に情を知らず」

ひすろぐ 磷ぐ【動四自】ひすらぐ(磷ぐ)に同じ。〔古語〕北條九代記「勢磷(ヒス)ぎ、運傾き、一朝に亡びて」

ひ-すゐ 翡翠【名】㊀〔動〕かはせみ(川蟬)に同じ。又、一種の鳥にて、翡はその雄、翠はその雌なりともいふ。㊁『前項の鳥の羽毛に譬へていふ』頭髮の美しくつややかなる形容、又その頭髮。濱松「髮は、少しいろなるが、筋も見えず、こまごまと、ひすゐなどいふらんやうに」盛衰記「翡翠のたをやかなるを剃り下し」㊂青青とつややかに美しきこと。㊃〔鑛〕ひすゐせき(翡翠石)の略。

翡翠の飾【句】『かざり(飾)㊁を見よ』曾我「翡翠の飾を剃りおろし、五戒を保ちけり」

翡翠の鬘(カツラ)【句】次條に同じ。謠曲(檜垣)「さも美しき紅顏の翡翠のかづら、花しをれ」

翡翠の髮差(カンザシ)【句】頭髮の、つややかにて長き狀態。みどりの髮。平家「翡翠の御簪附けても」

翡翠の毛【句】鷹のくつろぐ時、肩より出だす、赤き毛。

翡翠の簾【名】青青とつややかに美しきすだれ。太平記「翡翠の御簾、半より絕えて、微月の銀鉤、虛しく懸かれり」

翡翠の帳(トバリ)【句】青青とつややかに美しきとばり。謠曲(鐵拐)「翡翠の帳の內には、有漏(ウロ)の願力ありとかや」

ひ-すゐ 祕水・秘水【名】祕して用ふる水。太平記「五所の祕水として、峰通る山伏の祕して汲む水、この峰に有って」

ひ-ずゐ 脾髓【名】〔醫〕纖維膜と共に脾臟を構成する、顆粒狀の物質。網狀結締組織と無數の細胞とより成る。

び-すゐ 微醉【名】少し醉ふこと。ほろゑひ。微醺。

び-すゐ 微睡【名】少しねむること。まどろむこと。うたたね。

びすゐ-こつ 尾椎骨【名】〔醫〕びつゐこつ(尾椎骨)の誤讀。

ひすゐ-せき 翡翠石【名】〔鑛〕『英 Nephrite』輝岩の一種の分解產物。綠色にして、軟玉・硬玉と共に、玉(ギョク)と稱し、小器物に作りて、賞用す。滿洲地方及び亞細亞の東南部地方に產す。翡翠。

ひすゐ-だつ 翡翠だつ【動四自】翡翠の如くに見ゆ。翡翠に似て美し。源氏「髮……ひすゐだちて、いとをかしげに」

ひ-ずゑ 火末【名】香(カウ)の燃えゆきたるあと。たきがら。

ひずゑ-いり 火末入【名】香(カウ)のたきがらを入るるための器。

ひせ【名】かさぶた(瘡蓋)に同じ。

ひ-せい 秕政・粃政【名】よからぬ政治。惡政。

ひ-せい 批正【名】批評して訂正すること。

び-せい 美政【名】よき政治。善政。良政。

び-せい 美聲【名】うるはしき聲。よき聲。美音。

び-せい 微聲【名】かすかなる聲。小ごゑ。微音。

び-せい 尾星【名】びしゆく(尾宿)に同じ。

び-せい 尾生【名】〔人〕次條を見よ。

尾生の信【句】㊀『戰國策の燕國の條に「信如二尾生高一、則不レ過レ不レ欺レ人耳」、莊子の盜跖篇に「尾生與二女子一期二於梁下一。女子不レ來。水至不レ去、抱二梁柱一而死」とあり』徒らに約束を固守して、變通の才なきこと。愚直。馬鹿律義。㊁『鄒陽の獄中上二梁王一書に「蘇秦不レ信二於天下一、而爲二燕尾生一」とあり』約束を守ること。

ひ-せいがう 緋精好【名】緋色の精好織。最明寺殿百人上﨟「緋精好の長絹」

び-せいがう 美精好【名】美しき精好織。東鑑「美精好絹」孕常盤「美精好の大口」

び-せいぶつ 微生物【名】『獨 Mikroorganismus』微細なる生物。

びせいぶつ-がく 微生物學【名】微生物を研究する學問。細菌學より發達し、植物性の細菌のみならず、原生動物をも論究す。

ひ-せう 費消【名】せうひ(消費)に同じ。

ひせう 卑小【名】いやしきこと。卑下。謙遜。(尊大に對して)

ひ-せう 比照【名】『比較・對照の義』各個の性質・意義を比べ見ること。

ひ-せう 非笑【名】非(ヒ)なりとして笑ふこと。そしりわらひ。

ひ-ぜう 肥饒【名】地味肥えて、作物の多く出來ること。肥沃。

び-せう 美少【名】びせうねん(美少年)の略。若風俗「鹽井九郎右衞門座に見し岩井歌之介・平井靜馬(シヅマ)など申せしは、末代にもあるまじき美少なり」

び-せう 微小【名】極めてこまかきこと、又その物。微細。小微。

び-せう 微少【名】極めてすくなきこと、小量。輕少。少微。

び-せう 微笑【名】すこし笑ふこと。にっこりと笑ふこと。ほほゑむこと。

びせう-けん 美笑軒【名】〔人〕びせうりう(美笑流)を見よ。

ひせう-ざい 費消罪【名】〔法〕『獨 Verschwendungsverbrechen』ゐたくぶつひせうざい(委託物費消罪)の略。

びせう-じん 美少人【名】びせうねん(美少年)に同じ。諸國物語「寄って附く事ならぬ程の美少人を」

びせう-ぢよ 美少女【名】容色のすぐれたる少女。一代女「いづれを見ても、十一二三までの美少女なるが」

ひせう-なごん 非少納言【名】現任にあらざる少納言。江次第「非侍從一通、非少納言・非參議入レ之」

びせう-にん 美少人【名】次條に同じ。

びせう-ねん 美少年【名】容色のすぐれたる少年。美童。美少人。美少。

ひせう-ひぶつ 非消費物【名】ふせうひぶつ(不消費物)に同じ。

びせう-りう 美笑流【名】插花の一派。天文頃の人、後藤美笑軒道覺を祖とす。

ひ-せき 砒石【名】〔化〕むすゐあひさん(無水亞砒酸)に同じ。

ひ-せき 碑石【名】㊀碑の材たる石。㊁せきひ(石碑)に同じ。

ひ-せき 丕績【名】大なる功績。偉績。

ひ-せき 祕蹟・秘蹟【名】〔基〕さくらめんとに同じ。〔天主敎の語〕

ひ-せき 悲戚【名】かなしみうれふること。かなしみと、うれへと。哀戚。悲愁。

ひ-せき 肥瘠【名】身體又は地味の肥えたることと、瘠せたることと。肥瘦。

ひ-せき 匪石【名】『詩經の邶風柏舟篇に「我心匪レ石、不レ可レ轉」とあるに本づく』志の、堅固にして、動かすべからざること。確固不拔なること。

び-せき 美石【名】美しき石。

び-せき 美績【名】立派なる成績。すぐれたる治績。

ひ-ぜせり 火拵【名】火をせせること。聖

德太子繪傳記「火箸手ぐさの火ぜせりして」敵討襤褸錦「竹の火箸に火ぜせりして」

ひせつ 祕說・秘說【名】祕して人に示さぬ說。 正統記「これを、磤馭盧（オノコロ）島といふ。この名につきて祕說あり」

ひ-せつ 飛雪【名】風に吹かれて飛散しつつ降る雪。

び-せつ 微雪【名】雪の少し降ること、又その雪。こゆき。うすゆき。

び-せつ 眉雪【名】年老いて、眉毛が、雪の如く白きこと、又その眉毛。

び-ぜつ 美舌【名】うつくしき舌。美人又は美少年の舌。若風俗「この紋楊枝を手に觸れて、口中磨ける時は、戀の君が美舌をくはゆる心地のして」

ひせつ-くわん 被接官【名】『江戸時代の有職家の唱へ出しし名稱にて、古來、正史に所見なけれど、或は、中右記に「陰陽博士依レ爲二陰陽寮所攝之官一也」とあるなどより起りしにて、被接は被攝の義なるべしといふ』古、四部官以外の官を、その所屬の官司に對して稱せしもの。例へば、侍從・內記・監物（ケンモツ）は中務（ナカツカサ）省の被接官、文章（モンジヤウ）博士・助教などは、大學寮の被接官なる類。**ひくわん**（被官）參照。

ひ-ぜに 日錢【名】**一** 日毎に得る金錢。**二** **ひなしぜに**（日濟錢）に同じ。 建武以來追加「可レ取二高利竝日錢等之質物一」

ひ-せふ 婢妾【名】下婢と妾（メカケ）と。召使の女。はしため。そばめ。こしもと。

び-せふ 眉睫【名】**一** まゆと、まつげと。**二**『韓非子に「離朱易二百步一、而難二眉睫一。非二百步近而眉睫遠一也。道不可也」とあり』極めて近き處の譬。

眉睫の間に在り【句】「目睫（モクセフ）に迫る」に同じ。

眉睫の間に得（ウ）【句】『金史の趙元傳に「曰、此賊也、叱二左右一縛レ之。遂伏。僚吏問二其故一。元曰、偶得二於眉睫間一耳」とあり』人物の如何を、顏色によりて知る。

ひ-せん 飛仙【名】飛行する仙人。

ひ-せん 飛箭【名】**ひし**（飛矢）に同じ。

ひ-せん 飛泉【名】急に落下し、又は勢よく湧き出づる水。たき。瀑布。

ひ-せん 飛錢【名】支那唐・宋時代に行はれし、一種の爲替制度。

ひ-せん 肥鮮【名】肥えたるよき肉。

ひ-せん 卑賤【名】地位・身分などのひくくいやしきこと。賤卑。（尊貴に對して）

ひ-せん 被選【名】えらばるること。選擧せらるること。

ひ-ぜん 皮癬【名】**かいせん**（疥癬）に同じ。 一代男「ひぜんなほりて、未だ間もなき手を打ちかけらるるも」

ひぜん 肥前【名】〔地〕西海道十二國の一。佐賀・長崎・佐世保の三市及び佐賀・神崎（カンザキ）・三養基（ミヤギ）・小城（ヲギ）・東松浦（ヒガシマツウラ）・西松浦・杵島（キシマ）・藤津・東彼杵（ヒガシソノギ）・西彼杵・南高來（ミナミタカク）・北高來・南松浦・北松浦の十四郡に分れ、佐賀市と佐賀以下藤津までの八郡とは、佐賀縣の管轄に、その他は、長崎縣に屬す。

ひ-ぜん 斐然【貌】美しくして、文（アヤ）あるさま。

ひ-ぜん 怫然【貌】怒るさま。艴（フツ）然。

ひ-ぜん 靡然【貌】『靡の字の音、正しくはビ』なびき從ふさま。

び-せん 鼻尖【名】鼻の尖端。鼻端。

び-せん 美饌【名】うまき飲食。

び-せん 眉尖【名】眉のさき。眉端。

び-せん 微賤【名】地位のいやしきこと、又その人。賤微。卑賤。

び-せん 微纖【名】こまかに小さきこと。纖細。

び-せん 尾栓【名】『英Breech-plug』砲の發火の際、火藥・瓦斯の、後方に逃散するを防ぐために、砲尾を閉鎖するに用ふる栓。**へいさき**（閉鎖機）參照。

びぜん 備前【名】**一**〔地〕山陽道八國の一。岡山市及び御津（ミツ）・赤磐（アカイハ）・和氣（ワケ）・邑久（オク）・上道（ジヤウダウ）・兒島の六郡に分れ、全國、岡山縣の管轄に屬す。**二** **びぜんやき**（備前燒）の略。**三** **びぜんもの**（備前物）の略。

び-ぜん 美髯【名】立派なるほほひげ。

び-ぜん 美膳【名】美味なる膳部。珍膳。 著聞「ゆゆしき美膳を取出だしたり」

びぜん-うはに 備前上荷【名】大和田造（オホツダヅクリ）に似て横艫（ヨコトモ）なる上荷船（ウハニブネ）。

ひぜん-かき 皮癬搔【名】皮癬を患へをる人。しつかき。

ひぜん-がさ 皮癬瘡【名】**ひぜん**（皮癬）に同じ。

びぜん-がたな 備前刀【名】**びぜんもの**（備前物）に同じ。 庭訓往來「備前刀・出雲鍬」

びぜん-かぢ 備前鍛冶【名】備前の刀工。名匠多し。**びぜんもの**（備前物）參照。

ひぜん-がらす 肥前烏【名】〔動〕**かささぎ**（鵲）に同じ。

ひせんきよ-けん 被選擧權【名】〔法〕人民の公選により、一定の公職に就き得る權能、即ち帝國議會・地方自治體の議員又は地方自治體の公吏に選出せられ得る權能。被選權。被選資格。（選擧權に對して）

ひせんきよ-にん 被選擧人【名】〔法〕被選擧權を有する人。被選人。（選擧人に對して）

ひせん-ぎゐん 被選議員【名】選擧によりて當選したる議員。

びぜん-くにむね 備前國宗【名】〔人〕刀工。三郎と稱す。備前國の人。文永十三年歿す。年九十四。

びぜん-くらげ 備前水母【名】〔動〕水母類に屬する腔腸動物。傘狀部は、厚くして、藍靑色、緣邊に缺刻あり、外面は平滑。口腕は八箇ありて、上下の二部に分れ、數多の吸口を具へ、下腕には、先端尖れる圓形・寒天質の棒、多く垂下し、その先端に、細孔開き、上方は食道腔に通ず。備前國兒島灣內に多く產し、食用に適す。

ひせん-けん 被選權【名】〔法〕**ひせんきよけん**（被選擧權）に同じ。

びぜん-けんち 備前檢地【名】『伊奈忠次は備前守と稱せしよりいふ』新檢**一**の一。慶長年間、伊奈忠次が、關東諸國に行ひしもの。いなけんち。

びぜん-こう 美髯公【名】美髯ある人の敬稱。

ひせん-しかく 被選資格【名】〔法〕**ひせんきよけん**（被選擧權）に同じ。

びせん-しつ 尾栓室【名】〔兵〕胞腔の最後方に位して、尾栓を受入する室。直前に藥室あり、更に、前方に、彈丸を裝塡す。

びぜん-すりばち 備前擂鉢【名】備前燒の擂鉢。 千紅萬紫「すりこ木もれん木も同じ山椒こそ伊勢すりこ木に備前擂鉢」

びせん-たう 眉尖刀【名】『眉の尖端のごとき形に反（ソ）りてあるよりいふ』**なぎなた**（薙刀）に同じ。

びぜん-ちゆうなごん 備前中納言【名】**うきたひでいへ**（浮田秀家）の異稱。

びぜん-づくり 備前作【名】**びぜんもの**（備前物）に同じ。 盛衰記「備前作の二尺八寸の太刀、隨分祕藏したりけるを」

び-せんでき-き 鼻洗滌器【名】〔醫〕鼻腔を洗滌するに用ふる醫療器械。護謨製の喞筒と硬護謨製の嘴器とより成る。

びぜん-てふ 備前蝶【名】紋所の一。蝶の身幹を中心として、翼を左右に張りたる狀に描けるもの。備前國の舊藩主池田家の定紋。

ひ-せんとうゐん 非戰鬪員【名】『英Non-combatants』**一** 交戰國の人民にして、直接に軍隊の組織中に編入せられてあらぬもの。**二** 軍隊の組織中に編入せられながら、直接に戰鬪行爲に從事せぬ人。例へば、軍醫・主計官・僧侶など。交戰國兵力の一部なるが故に、戰爭法規の適用を受け、敵に捕獲せられたる場合には、俘虜として取り扱はる。（戰鬪員に對して）

びぜん-どくり 備前德利【名】備前燒の德利。

びぜん-どっくり 備前德利【名】前條の訛。

びぜん-なぎなた 備前長刀【名】備前物の長刀。 太平記「柄も五尺、身も五尺の備前長刀」

ひせん-にん 被選人【名】〔法〕**ひせんきよにん**（被選擧人）に同じ。

びぜん-のぶふさ 備前信房【名】〔人〕刀工。備前國の人。後鳥羽天皇の時の九月の番鍛冶。世に、信房（シンバウ）といふ。

びぜん-のぶふさ 備前延房【名】〔人〕刀工。備前國の人。後鳥羽天皇の時の三月の番鍛冶。世に、延房（エンバウ）といふ。

ひぜん-の-むし 皮癬蟲【名】〔動〕**かいせんちゆう**（疥癬蟲）に同じ。

びぜん-のりむね 備前則宗【名】〔人〕刀工。福岡一文字の祖。定則の子。刑部允、又、備前太夫と稱す。備前國福岡、卽ち今の郷内（ガウナイ）の人。後鳥羽天皇の時の正月の番鍛冶。その作を、俗に菊一文字といふ。建保二年歿す。年六十三。

びぜん-ばうちやう 備前庖丁【名】備前物なる庖丁刀。狂言（鱸庖丁）「まな板に備前庖丁」

びぜん-ばち 備前鉢【名】備前燒の鉢。生玉心中「備前鉢にて、天窻（アタマ）の鉢、覺えたか、覺えたかと打碎かれて」

ひぜん-ぶし 肥前節【名】㊀淨瑠璃節の一種。寛文の頃、杉山丹後掾藤原淸澄の子、肥前掾淸政の創めしもの。今は傳はらず。㊁演劇の囃子の一。物語・鐵砲場などに、三味線・鼓・太鼓を用ひて行ふもの。

ひぜん-ふどき 肥前風土記【名】〔書〕古風土記の一。肥前國の內、十一郡に亙りて記せるもの。一卷。延長年間の作といふ。寛政十一年、荒木久老、訓點を加へて發刊す。

びぜん-まさつね 備前正常【名】〔人〕刀工。通稱、左衞門三郎。源慶と號す。筑前國の人。岡崎正宗に學ぶ。相州傳の湯加減を知らんと欲し、禁を破りて、右手を湯槽に入れ、正宗にその手を斫らる。世に左正常と稱す。永延中の人。

ひぜん-むし 皮癬蟲【名】〔動〕**ひぜんのむし**（皮癬蟲）に同じ。

ひぜん-もの 肥前物【名】肥前國の刀工忠吉一家及びその門人の鍛へし業物（ワザモノ）。

びぜん-もの 備前物【名】備前國の刀工の鍛へし業物（ワザモノ）。我國刀工の有名なるもの一萬千餘人中、過半は備前に住したりといふ。びぜんがたな。びぜんづくり。びぜん。仕懸文庫「刀は、つがもなく長く、……、身は備前物の三分ぞり」

ひぜん-やき 肥前燒【名】肥前國より產出する陶器。唐津（カラツ）燒・波佐見（ハサミ）燒・伊萬利（イマリ）燒などの總稱。唐津燒の創始、最も古し。

びぜん-やき 備前燒【名】備前國和氣（ワケ）郡伊部（インベ）村にて製造する、一種の陶器。應永年間の開窯に係り、初は、種壺などを作りしが、天正年間より、茶器・德利・擂鉢などをも製するに至れり。素地赤黑にして、釉藥を施さず、質厚くして堅く、打てば、金屬樣の音を發し、雅致も多し。伊部（インベ）燒・火襷（ヒダスキ）などの種類あり。いんべやき。

備前燒の布袋（ホテイ）【句】色赤黑くして、肥滿せる人の譬。〔諺語〕

ひ-ぜめ 火責【名】火を用ひて行ふ拷問。平家女護島「水責・火責の苦みも」

ひ-ぜめ 火攻【名】火をかけて攻むること。やきうち。盛衰記「時刻な廻（メグ）らしそ。火攻にせよ」

ひ-そ 檜楚・檜曾・比蘇・比曾【名】檜木の細小なるものとも、細き素木ともいふ。〔古語〕和名「檜楚、比曾。俗用㆓檜曾二字㆒。今按、楚字是也」

ひ-そ 飛鼠【名】〔動〕『楊子方言に「蝙蝠自㆑關東、或謂㆓之飛鼠㆒」とあり』かうもり（蝙蝠）の異稱。

ひ-そ 砒素【名】〔化〕『英 Arsenic』金屬と非金屬との中間に位する、一種の元素。少量は游離して存すれど、多くは硫黃若しくは他の金屬と化合して、鷄冠石・雄黃（ワウ）・毒砂などとして產す。脆き灰白色の金屬光ある結晶をなし、比重五・七。高溫に於て、葱の如き惡臭ある黃色の蒸氣となりて昇華す。熱及び電氣の良導體にして、酸素中にて點火すれば、燃えて、白色の無水亞砒酸となる。砒素及びその化合物は甚だ有毒なり。銃丸の硬度を增すため、鉛に加ふるなどに用ふ。鉮。

び-そ 鼻祖【名】『楊子方言に「鼻、始也。獸之初生謂㆓之鼻㆒。梁益之間、謂㆑鼻爲㆑初、或謂㆓之祖㆒」とありて、註に「鼻祖皆始之別名也」と見え、許旌陽服氣書に「人受㆓胎于母㆒、其生始成㆑鼻。畫家畫㆑人、亦從㆑鼻始。故鼻云㆑祖」とあり』先祖。元祖。始祖。

ひ-そう 肥瘦【名】『瘦の音、正しくはシウ』肥ゆることと、瘦することと。肥瘠。

ひ-そう 飛走【名】㊀飛ぶことと、走ることと。㊁とびはしること。とく走ること。㊂『飛は鳥、走は獸』鳥獸。禽獸。

び-そう 美僧【名】美貌の僧。狂言（八尾）「昔は美僧であった」若風俗「可見といへる美僧あり」

ひそ-か 密か・窃か・竊か・私か・陰か【貌】『ひそむやうにする義』**しのびやか**（忍やか）に同じ。

ひそか-ごと 密事【名】**しのびごと**（忍事）に同じ。字鏡「聡、比曾加己止也」

ひそ-きやう 砒素鏡【名】〔化〕『獨 Arsenikspiegel』燃えつつある砒化水素の焰中に、冷かなる磁器を入るる時、砒素は燃えずして、その磁器の上に生ずる、光輝ある灰黑色・無定形の斑紋。この反應は極めて鋭敏なるを以て、微量の砒素をも檢出するを得べく、毒殺の疑ある時、胃腸の內容物等の檢査に應用せらる。

ひ-そく 祕色・秘色【名】㊀『高齋漫錄に「越州燒進、爲㆓供奉之物㆒、臣庶不㆑得㆑用。故曰㆓祕色㆒」とあり』古、支那越國に產し、飯などを盛るに用ひし、靑磁の器。〔古語〕空穗「ひそくの坏（ツキ）」源氏「御臺（ミダイ）、ひそくやうの、もろこしのものなれど」㊁**ひそくいろ**（祕色色）の略。〔古語〕雅亮裝束抄「からあや……ひそく・しろあを」

ひ-そく 否塞【名】『否は易の卦の一』天と地と隔絶して、萬物の生成せぬこと。（通泰に對して）**ひたい**（否泰）參照。

ひ-ぞく 匪賊【名】王化に從はぬ惡者ども。匪徒。

ひ-ぞく 卑屬【名】自己の子と同列以下にある親族、卽ち親等の下なる親族。直系卑屬と傍系卑屬とあり。卑行。卑屬親。（尊屬に對して）

ひ-ぞく 非俗【名】『俗人にあらざる者の義』**そう**（僧）に同じ。藻鹽草「こけ衣、非俗また俗と、八雲御說也」

ひ-ぞく 卑俗・鄙俗【名】ゐなかびたること、又その者。東海道名所記「常の卑俗は、一人も、門に入れられず」

び-そく 鼻息【名】**はないき**（鼻息）に同じ。

鼻息を仰ぐ【句】『後漢書の袁紹傳に「孤客窮軍仰㆓我鼻息㆒」とあり』相手の意向・機嫌の如何を窺ひつつ、おそるおそる事を爲す。鼻息（ハナイキ）を窺ふ。

び-そく 微速【名】微弱なる速力。

び-ぞく 美俗【名】うつくしき風俗・習慣。（惡俗に對して）

ひそく-あを 祕色襖・秘色襖【名】ひそく色のあを。〔古語〕

ひそく-いろ 祕色色・秘色色【名】㊀染色の一。瑠璃色。ひそく。〔古語〕㊁襲（カサネ）の色目の一。表は、經（タテ）紫、緯（ヌキ）靑の織色に、裏は薄色。

ひぞく-しん 卑屬親【名】〔法〕**ひぞく**（卑屬）に同じ。（尊屬親に對して）

びそく-とう 尾側燈【名】『英 Tail lamp』夜間又は隧道（トンネル）內にて、列車信號を示すために、列車の後部などに設くる燈。

ひそ-ざい 砒素劑【名】『獨 Arsenpräparate』砒素を含有せる藥劑。例へば、サルバルサン・アルセノゲンなどの類。

ひそ-しん 砒素疹【名】〔醫〕『獨 Arsenikexantheme』砒素劑の外用及び內服後に生ずる發疹。

ひ-そすう 非素數【名】〔數〕『英 Composite number』素數ならざる數。例へば、8・16・20・21などの類。

ひ-そそる 簸そそる【動四他】簸（ヒ）んがために搖り動かす。字鏡「搋、簸也。比曾曾留」

ひそっぷ（英 Hyssop）【名】〔植〕唇形科に屬する多年生の草。高さ二尺內外、葉は全邊・無柄にして、狹き披針形を呈し、靑紫色の唇形花を著く。西部亞細亞及び東部歐羅巴に自生し、我國にても、藥用・觀賞用として栽培す。

ひ-ぞなへ 火備【名】昔の戰にて、火をかくるを任務とせし軍隊。籾井日記「火備を、とりどりに構へ」

ひそ-ひそ 密密【名】**ひそひそばなし**（密密話）に同じ。平家女護島「耳をそばだて、息を詰め、窺ふ內のひそひそまで、洩るる方なく聞ゆらん」

ひそ-ひそ 密密 【貌】 ひそかに物語るさま。小聲にて話すさま。こそこそ。丹波與作「ひそひそ言うても、人も聞く」

ひそひそ-ごゑ 密密聲 【名】 ひそひそ話の聲。しのびごゑ。

ひそひそ-ばなし 密密話 【名】 **こそこそばなし**（こそこそ話）に同じ。和合人「三人はひそひそ話」

ひそひそ-もの 密密者 【名】 ひそひそと語ること。膝栗毛「必ず沙汰無（サタナシ）だと、ひそひそ者で、誠らしく言へば」

ひそまる 潛まる 【動四自】 ㊀ひそむやうになる。隱る。㊁**しづまる**（鎭まる）㊀に同じ。盛衰記「見る人、上下、恐をなして、ひそまる氣色なりけるに」㊂**しづまる**（鎭まる）㊃に同じ。土佐「心ち惡しみして、物も物したまはでひそまりぬ」

ひそみ 顰・嚬 【名】 顰むこと、又、顰みてあること。顰蹙。

顰に倣ふ 【句】『莊子の天運篇に「西施病レ心而矉二其里一。其里之醜人見而美レ之、歸亦捧レ心而矉二其里一・其里之富人見レ之、閉レ門而不レ出。貧人見レ之、挈二妻子一而去レ之走。彼知レ美レ矉、而不レ知二矉之所二以美一」とあるに本づく』是非・善惡を考へず、妄に、強ひて、人眞似をなす。顰（ヒソ）に倣ふ。

ひそみ-かへる 潛返る 【動四自】 甚しくひっそりとす。和合人「息（イキ）を殺して、ひそみかへって待つとも知らず」

ひそみ-ね 潛音 【名】 ひそかなる鳴聲。しのびね。蕪村「夕しぐれ蟇（ヒキ）ひそみ音に愁ふかな」

ひそむ 顰む・嚬む 【動四自】 うとみ又は憂へ悲しみなどして、眉の邊に皺を寄す。額（ヒタ）に八の字を寄す。しかむ。しわむ。源氏「母君の見えぬを求めて、らうたげにうち顰みたまへば」

口ひそむ 【句】 肉落ちたるため、又は泣かんとし、或はうとましく思ひなどして、口ゆがむ。すげむ。かひつくる。字鏡「吡、嗟貌。口由加牟。又、口比會牟」六帖「百とせに老い口ひそみなりぬともわれは忘れじ戀はますとも」

ひそむ 潛む 【動四自】 中に隱れて、ひっそりとす。隱れ忍ぶ。ひそまる。潛在す。

ひそむ 潛む 【動下二他】 ひそむやうにす。ひそます。かくす。しのばす。源氏「かいひそめ、人疎うもてなしたまへば」新版歌祭文「背（セ）撫でさすり、聲ひそめ」

ひそむ 顰む・嚬む 【動下二他】 次條を見よ。

眉を顰む 【句】 自動詞の**ひそむ**（顰む）に同じ。太平記「見る人、眉を顰め」

ひ-そん 干損 【名】 **かんそん**（旱損）に同じ。（水損（スヰソン）に對して）狂言、針立雷「干損も、水損もいかぬやうにして下されい」醒睡笑「夏の天に、數日雨ならて、民家、干損を歎き」

ひ-ぞめ 緋染 【名】 ㊀緋色に染むること、又その染めたる物。㊁血赤色の塊にて、水に溶解して、赤色液をなす、一種の染料。

ひそ-めく 密めく 【動四自】 ひそやかになす。ひそひそと語る。義經記「遙かに夜ふけて、内陣にひそめきたり」丹波與作「人足四五十人、ひそめいて來りしが」

ひそ-やか 密やか 【貌】 ㊀**ひそか**（密か）に同じ。俳諧新選（東殘）「ひそやかに來て居る鳥や枇杷の花」㊁ゆたかならぬさま。字鏡集「儆、ヒソヤカ」河原の達引「ひそやかな身代」

ひ-ぞり 干反・乾反 【名】 ㊀ひぞりてあること、又その物。今宮心中「乾反し直し、上下（カミシモ）を、盤にかけて打ちけるが」㊁すねて腹立つこと。

ひぞり-ごま 干反獨樂・乾反獨樂 【名】 殊更に正しく廻らじとせるもののやうに見ゆる獨樂。松風村雨束帶鑑「心すわらずぶりしやりの、〱ぶりぶり獨樂、そりやひぞり獨樂」

ひぞり-ば 干反葉・乾反葉 【名】 枯れて、反りかへりたる葉。

ひ-ぞる 干反る・乾反る 【動四自】 ㊀水分乾きて、反りかへる。㊁すねて腹立つ。御伽名代紙衣「助六、ひぞって言ふやうは」

ひ-た 引板 【名】『**ひきた**（引板）の略』**なるこ**（鳴子）に同じ。源氏「ひた引き鳴らす音もをかしく」

引板の庵（イホリ）【句】 引板を引く人の居る小屋。新勅撰「秋田守（モ）るひたの庵に時雨降りわが袖濡れぬほす人もなし」

引板の懸繩（カケナハ）【句】 **なるこなは**（鳴子繩）に同じ。玉葉「秋果つるひたのかけ繩引き捨てて殘る田面（タノモ）の庵のわびしき」

引板延（ハ）ふ 【句】 鳴子繩をかけわたす。引板を設く。伊勢集「ひたはへて守（モ）る綱をのみ引く時は稻葉に露ぞとまらざりける」

ひた（英 Hittites）【名】 太古、小亞細亞よりシリヤに亙りて、一時有力なる國を建てし民族。

ひた 直・頓 【貌】 ㊀一面に接觸するさま。ぴたり。ひったり。ぢか。きのふはけふの物語「紙を、少し引き裂きて、唾を附けて、男の鼻の先に、ひたと附ける」蕪村「木枯やひたと蹶く戻馬」㊁絕間なきさま。變らぬさま。運歩色葉集「常居、ヒタトヰル」蕪村「ひたと犬の啼く町越えて踊かな」

ひた 直 【接頭】 ただ、その物事又はその方向のみなる意。ひら。「ひた兜」「ひたおもむき」「ひた下（サク）りに下る」

ひだ 襞・襞積 【名】 衣服の類などに、細長く附きてある折目。ひだめ。

襞を取る 【句】 襞を設く。狂言、つたう山伏「布を黑く染め、ひだを取って、額にあつるを以て、兜巾（トキン）といふ」

ひだ 飛驒 【名】 ㊀〔地〕東山道十三國の一。大野・益田（マシ）・吉城（ヨシキ）の三郡あり。全國、岐阜縣の管轄に屬す。別稱、飛州。㊁〔地〕明治の初年設置の縣の一。元年五月飛驒國に置きしもの。翌月、高山縣と改稱し、四年廢して、筑摩縣に合はせ、九年、筑摩（チクマ）縣の廢止と共に、岐阜縣に入る。㊂**ひだたくみ**（飛驒工）㊁の略。甲陽軍鑑「大工（ダイク）をも、……、都へ上せ、菊亭殿御肝煎を以て、この大工、飛驒になされ」

飛驒の工（タクミ）【句】 **ひだたくみ**（飛彈工）に同じ。紀意竸和歌「琴の音のあはれなればやすめら君ひだのたくみの罪をゆるせる」

飛驒の工（タクミ）、和泉の杣（ソマ）【句】 飛驒國の土民は、建築の術にすぐれ、和泉國の者は、杣木樵る術に秀づ。〔諺語〕

ひだ 日田 【名】〔地〕 ㊀豐後國十郡の一。郡役所を、日田町に置く。㊁豐後國日田郡にある町。もと豆田（マメダ）・隈（クマ）の二町に分れしを、合併・改稱せしもの。㊂明治の初年設置の縣の一。明治元年、豐後國日田に立てしもの。四年、同國杵築（キツキ）・日出（ヒヂ）・府内・岡・森・臼杵（ウスキ）・佐伯（サイキ）の諸藩を廢して、各、縣となし、十一月に、以上八縣の地を合同して、大分（オホイタ）縣を置き、豐後全國を管せしめしが、九年、福岡縣より、豐前國宇佐・下毛（シモケ）の兩郡を割きて、兼轄せしむるに至りしもの、即ち現時の大分縣なり。

ひ-だ 飛蛇 【名】 雲霧に乘じて、空を飛ぶといふ、想像上の大蛇。龍の類。

びた 鐚 【名】 **びたせん**（鐚錢）の略。

鐚一文（イチモン）【句】「鐚錢（ビタセン）一文」に同じ。

鐚三文（サンモン）の値打（ネウチ）も無し 【句】 少しも價値なし。〔諺語〕

鐚ひらなか 【句】『**ひらなか**を見よ』「鐚一文」に同じ。博多小女郎浪枕「びたひらな、か我が物で、我が物ならず」

びた 【接頭】 **ひた**の轉訛。べた。「びた一面」

ひた-あやまり 直誤 【名】 ひたすらに罪を謝すること。ひらあやまり。

ひた-あを 直靑 【名】 一面に靑きこと。まっさを。今昔「隨身も、皆、ひた靑なる裝束をして」

ひ-たい 否泰 【名】 否塞と通泰と。凶と吉と。通塞。太平記「肆不レ遑レ卜二否泰一、振レ臂將レ發二京師一」

ひ-だい 肥大 【名】 肥えておほきなること。肥滿。

び-たい 媚態 【名】 媚ぶる狀態。

び-たい 眉黛 【名】 引眉の黛。まゆずみ。

び-だい 尾大 【名】 尾又は末の、首又は本よりも大なること。

尾大掉（フル）はず 【句】『淮南子の泰族篇に「禽獸之性、大者爲レ首、而小者爲レ尾。末大二于本一則折、尾大二于腰一則不レ

掉矣」、左傳の昭公十一年の條に「末大必折、尾大不ㇾ掉」とあり。獸の尾大なる時は、これを掉ひ搖かすこと自由ならぬ義。**てうび**（掉尾）參照』上（カミ）、弱小にして、下（シモ）、强大なる時は、制し難きことの譬。〔諺語〕

ひ-だいく 檜大工【名】**ひはだし**（檜皮師）に同じ。

ひた-いっさん 直一散【名】ひたすら一散なること。一目散。甲陽軍鑑「ひたいっさんにて、濱松へ引き取る」

ひ-たう 緋桃【名】〔植〕**ひもも**（緋桃）に同じ。

ひ-たう 悲悼【名】悲しみ悼むこと。悲傷。

ひ-だう 非道【名】㊀道理にはづること。みちならぬこと。非理。落窪「ひだうに腹だちたまふこそ」㊁人情にはづること。殘酷。㊂**びだう**（美道）に同じ。若風俗「衆道（シュダウ）……天竺にては、非道といふも可笑し」

び-たう 眉刀【名】**びせんたう**（眉尖刀）に同じ。

び-だう 美道【名】**なんしよく**（男色）に同じ。若風俗「美道のかたらひ淺からぬ中」

ひ-だうぐ 火道具【名】火を生ぜしむるための道具。即ち鐵砲など。火器。

ひ-だうし 緋唐紙【名】緋色に染めたる唐紙。

ひた-うち 直打【名】㊀ひたすら打つこと。しきりに打つこと。盛衰記「落武者をば……ひた打に打ちければ」㊁『**うつ**（打つ）㊉を見よ』たたきて、一面に延ばすこと。増鏡「杖……、銀にてひた打にして、先は、金にて鳩をすゑたりけり」㊂『**うつ**（打つ）㊃を見よ』

ひた-うち 引板打【名】引板を鳴すこと。俳諧新選（之房）「引板打に寢られぬ祖父（イヂ）の代りけり」

ひだう-もの 非道者【名】非道なる人。人非人。本朝廿四孝「ええ、まだ火がぬるいと、戀の意趣を炬燵にあたる非道者」

ひたうら-ごろも 直裏衣【名】表も裏も同じ色なる衣。一說に、**ひづり**の條に引ける萬葉集の原歌に「氷津裡」と記せるも、この語の「純裏」も、「ひづら」と訓ずべきものにて、兩者同一の語なりともいふ。〔古語〕萬葉「赤ぎぬの純（ヒタ）裏衣長くほりわが思（モ）ふ君が見えぬ頃かも」

ひた-え 直柄・混柄【名】別に取り附けたるにあらずして、初より、その物と續きてある柄。

直柄の瓢（ヒサゴ）【句】**ひさご**（瓢）㊁を、後世の柄杓（ヒシャク）と區別していふ語。更科「酒壺にさし渡したるひたえのひさごの、南風吹けば、北に靡き」

ひた-おし 直押【名】ひたすらに押すこと。

ひた-おとし 直落【名】ひたすらに落すこと。

ひた-おもて 直面【名】直接にさしむかふこと。面（メン）と向ふこと。うちつけ。覿面。〔古語〕紫式部日記「ひた面にさし向ひ」盛衰記「直頭（ヒタガシラ）・直面にては、爭（カイ）でか僉議仕るべき」

ひた-おもむき 直趣【名】一向に心の進むこと。一途（イチヅ）。一轍。〔古語〕源氏「ひたおもむきに進みたまへる御心にて」

ひたか 日高【名】〔地〕北海道十一國の一。浦河（ウラカハ）・沙流（サル）・新冠（ニヒカップ）・靜內（シヅナイ）・三石（ミツイシ）・樣似（シャマニ）・幌泉（ホロイヅミ）の七郡に分れ、全國、浦河支廳の管轄に屬す。

ひ-だか 日高【名】㊀太陽の、空高くある時。日中。一代男「いかなる旅人も、日高に泊り、曙を急がず」㊁〔動〕鰻の類。細くして、長さ三四尺あり。淺黃色を呈す。

ひだか 日高【名】〔地〕紀伊國九郡の一。郡役所を、御坊（ゴバウ）町に置く。

ひだか-がは 日高川【名】〔地〕紀伊國日高郡にある川。郡の東北隅なる山地に發し、紀州灘に注ぐ。長さ四十里二十町。

ひだかがは-いりあひざくら 日高川入相花王【名】竹田小出雲・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衞及び二歩堂の合作に係る淨瑠璃。紀伊國道成（ダウジャウ）寺の清姬の傳說に基づき、朱雀天皇の皇弟櫻木親王・藤原忠文・六孫王經基・藤原純友等の人物を配して作りたるもの。

ひだかがは-ざうし 日高川雙紙【名】〔書〕紀伊國道成（ダウジャウ）寺に於ける安鎭・清姬の事蹟を描ける繪卷物。一卷。繪は土佐廣周の筆と傳へ、詞書の筆者は詳かならず。道成寺緣起と共に、道成寺の所藏に屬す。

ひだか-ごばう 日高御坊【名】紀伊國日高郡御坊村にある本願寺の別院。

ひた-がしら 直頭【名】頭を包まずに、全部あらはすこと。盛衰記「たとひ勘定なればとて、ひた頭・直面（ヒタオモテ）にては、爭（カイ）でか僉議仕るべき」

びた-かす 鐚滓【名】㊀鐚錢を吹きたる鑛の屑。㊁取るに足らぬ物の譬。

ひだか-つんぼおり 日高聾織【名】『平四郎は聾なりしよりいふ』寛政年中、紀伊國日高郡御坊（ゴバウ）村の平四郎といふ人の織り出だしし織物。奥縞に似たるものと、紋を出だせるものとあり。

ひだ-がは 飛驒川【名】〔地〕飛驒國にある川。上流を益田（マシタ）川といひ、長さ二十八里餘。木曾川に入る。

ひた-かぶ 直甲【名】琵琶の甲の、一枚板なるもの。禁祕抄「琵琶二面　紫檀直甲也」

ひた-かぶと 直冑・混冑【名】一同揃ひて甲冑に身を固むること、又その人人。保元「ひた冑のつはもの三十騎」平家「侍五騎、童一人、我が身共にひた兜七騎」

ひだかみ-の-くに 日高見國【名】〔地〕古代の蝦夷の地の一部。今の陸前國北上川下流の邊なるべく、北上の名も、日高見の轉訛なるべしといふ。陸前國桃生（モノフ）郡に、今も鄕社日高見神社ありて、式內の社の一たり。又、常陸風土記に、後の信太（シダ）郡の地を指せるは、蝦夷人の、なほ西方にまで跋扈せし折の稱ならんといふ。

ひ-たき 火焚・火燒【名】㊀古、夜、家の內外を照し、又は警護しなどするため、篝火又は燎火（ニハビ）を燒きしこと、又その事を役とせし人。〔火炬〕〔古語〕記「その御火燒（ミタキヒ）の老人（オキナ）、御歌（ミウタ）を續ぎて」鴉鷺合戰「火燒に、篝焚かせて」㊁**ろ**（爐）に同じ。〔火爐〕〔古語〕和名「火爐、比多岐」㊂**ふいがうまつり**（鞴祭）に同じ。

火焚の神事（ジンジ）【句】阿蘇神社の末社霜神社にて行ふ祭儀。毎年八月十九日より、十月十六日まで、霜の神、別に常設せる火焚殿に神幸あり、十二三歲の少女、神座の下に、晝夜の別なく火を焚き、氏子部落は、その間、すべて謹愼を旨として、奉仕の意を表し、霜の神、本社に還御の後、更に十八日の夕刻より、又、火焚殿の一部にて、盛んに齋火（イミビ）を焚き、神職・巫女等の神樂、夜を徹して行はる。

ひた-き 直黃【名】一面に黃なること。（歌に、多く山吹の花の色にいふ）實方集「み垣より外のひたきの花なれば心とどめて折る人もなし」

ひ-たき 鶲【名】〔動〕『その內の一種に、鳴く聲、かちかちと聞えて、恰も燧石を打つ如くなるより、火燒の義にていふ』燕雀類に屬する鳥。黃（キ）鶲・鮫（サメ）鶲・上（ジャウ）鶲・瑠璃（ルリ）鶲などの種類ありて、何れも、雄はよく囀り、又、何れも、小蟲を食とし、益鳥なり。夫木「思ひかね柴とりくぶる山里をなほ寂しとや火たき鳴くなり」

ひたき-どり 鶲鳥【名】〔動〕前條に同じ。

ひたき-ぐさ 火燒草【名】〔植〕『新撰六帖の「水づての磯間のつつじ咲きしより海人（アマ）のいさり火よるとやは見る」といふ歌の意にていふならんといふ』**つつじ**（躑躅）の異稱なりといふ。〔古語〕

ひたき-や 火焚屋・火燒屋・火炬屋【名】衞士（ヱジ）などの、篝火・燎火（ニハビ）など燒きて、夜を守る小屋。〔古語〕和名「辨色立成云、助鋪、古夜、一云、比良岐夜。如㆓衞士屋㆒也」更科「火たき屋の火たく衞士」

ひた-ぎり 直切【名】ひたすら切ること。一途（イチヅ）に切ること。盛衰記「馳せ入って、人をば嫌はず、直切にこそ切り廻れ」

ひたきり-さう ひたきり草【名】〔植〕**ねぢばな**（綟草）に同じ。

ひたき-わらは 火焚童・火燒童・火炬小子【名】古、禁中にて、火燒㊀に使はれし童。延喜式「火炬小子四人（中宮不ㇾ在㆓此限㆒）、取㆓山城國葛野郡秦氏子孫堪ㇾ事者㆒爲之、齒及㆓冠婚㆒、申ㇾ省請替」

ぴ-たく　美澤【名】うるはしき光澤。

ひた-くだり　直下【名】ひたすら下ること。一途（イチヅ）に下ること。橘南谿、西遊記「馬の脊越を越えて、ひた下に下るに」

ひた-くち　直口【名】ひたすらなる言ひ方。あらはなる物いひ。澀柿（文覺上人消息）「故大將殿は、文覺をば、ひた口の强き者と思召して候ひしなり」

ひだ-ぐんだい　飛驒郡代【名】徳川幕府の職制の一。飛驒國一圓・越前及び加賀に於ける白山山麓等、總計約十三萬石の幕領を支配せし郡代。西國（サイコク）郡代の次席に位し、頭取・地役人などの屬僚ありて、安永年間、高山の領主金森氏斷絕の後、同六年、始めて設置せられ、明治元年に及べり。勘定奉行の支配に屬し、飛驒國高山に本陣あり。越前國武生（タケフ）の北郊なる本保（ホンボ）と美濃國の下河邊とに、出張陣屋を置きたり。

ひた-くれなゐ　直紅【名】一面に紅なること。みなくれなゐ。まっか。六帖「誰がまきし紅なれば三輪山をひたくれなゐに匂はせるらん」

ひた-くろ　直黑【名】一面に黑きこと。まっくろ。

ひ-だこ　火胼胝【名】常に炭火に炙られて、手頸より肱にかけて生ずる、赤き斑文。

ひた-ごころ　直心【名】ひたすらなる心。一途（イチヅ）なる心。〔古語〕蜻蛉「ひた心に、なくもなりつべき身を、そこにさはりで、今までであるを」

ぴたごらす-おんかい　ピタゴラス音階（英 Pythagorean scale）【名】〔音〕『希臘のピタゴラスの、始めて研究せしものなるによりていふ』主音の上下に、五度を反復することのみによりて作り得る音階。

ぴたごらす-こんま（英 Pythagorean comma）【名】〔音〕一の音と、その上に五度を十二回重ねたるものより八度を七回減じて得たる音との間の音程。その音程比は524288：531441.

ぴたごらす-の-ていり　ピタゴラスの定理（英 Pythagoras' theorem）【句】〔數〕『希臘のピゴタラスの發明に係るよりの名なりといへど、彼以前、埃及人も、既に知りゐたりといふ』初等平面幾何學の定理の一。直角三角形の斜邊上の正方形は、他の二邊の上の正方形の和に等しといふもの。**こうこげん**（鉤股弦）參照。

ぴたごらす-りんま（英 Pythagorean limma）【名】〔音〕四度音程より、二回、長全音を減じたる音程。ピタゴラス音階の半音に等しく、その音程比は256：243.

ひた-さがり　直下【名】ひたすら下ること。一途（イチヅ）に下ること。

ひだ-さんみゃく　飛驒山脈【名】〔地〕信濃・越中兩國の國界を成せる大山脈。越後の親不知（オヤシラズ）より、美濃の木曾川・飛驒川の會合點に至る。高山の連なれること、我國第一なり。日本あるぷす。

ひた-さわぎ　直騷・混騷【名】ひたすら騷ぐこと。一途（イチヅ）に騷ぐこと。十訓「物を聞き果てず、ひたさわぎに笑ふこと、あるまじき事なり」平家「混騷に見えつる間」

ひた-さ-を　直さ麻【名】『さは接頭語』麻のみにて、他の物を混ぜずに織れるもの。〔古語〕萬葉「直さ麻を裳には織り著て」

ひたし　臛【名】**ひたしもの**（臛物）の略。遊仙窟「雉臛、キジノヒタシ」

ひたし　浸【名】**ひたしもの**（浸物）の略。

ひた-し　直足【名】『直足（ヒタアシ）の略、即ちひたすらなる足の義』馬の足の運び方の普通なるもの、即ち、先づ左の前足を出し、次に左の後足、次に右の前足、次に右の後足といふ順序にて運ぶもの。（下足（オロシアシ）に對して）

ひ-だし　簸出【名】簸（ヒ）て出だすこと、又その出だしたる屑。「紅茶の簸出」

ひたし-もの　浸物【名】野菜をゆでて、醬油をかけたる食品。ゆでもの。ひたし。續俳家奇人談（沾洲）「梅咲くや三所同じ浸物」

ひたし-もの　臛物【名】肉類を料理して、羹（アツモノ）としたるもの。ひたし。

ひだ-しゅんけいぬり　飛驒春慶塗【名】飛驒國高山町より產する、一種の春慶塗。寛永年間、茶人金森宗和（飛驒國主の子）の、漆工を和泉國堺より呼び寄せて、折敷（ヲシキ）・盆などを作らしめしに創まるといふ。飛驒能代（ノシロ）。

ひた-しろ　直白【名】一面に白きこと。まっしろ。空穗「頭はひた白に、腰は二重（フタヘ）なる女なれど」

ひたしろ-うま　直白馬・騅【名】全身の白き馬。字鏡集「騅、ヒタシロムマ」

ひた-す　浸す・漬す【動四他】㊀液體の中に入る。ひたるやうにす。漬（ツ）く。㊁水上の物を映して、水面若しくは水面下に在るやうに見えしむ。盛衰記「前に望めば、滄海の天をひたせるあり」

ひ-だす　養す【動四他】『日足すの義。**ひたらす**（日足らす）・**ひだつ**（肥立つ）參照』そだて養ふ。養育す。〔古語〕記「その御子を治養（タヒ）しまつる」

ひ-だすき　火襷【名】備前燒の一種。その質白土にして、全體に釉なく、紅線の襷を掛けたるごとき、不定の赤き線あるもの。火度により、窯內にて、線の自然に生じたるを賞翫すれども、後世のは、人工を以て現したるもあり。

ひだ-すぎ　飛驒杉【名】飛驒國より產出する杉材。

ひた-すら　只管【副】何も構はず、ただそれのみに。ひとむきに。ひたぶる。ひたもの。ひたみちに。ひとすぢに。ひたそら。源氏「逢ふまでのかたみばかりと見し程にひたすら袖の朽ちにけるかな」

ひたすら-に　只管に【副】前條に同じ。源氏「いとあはれなれば、ひたすらにも、え恨みそむかず」

び-たせん　鐚錢【名】『鐚の字は、もと、錏と同字にて、「しころ」の意なるを、惡錢の義に取りて用ひたるもの』㊀室町時代に、永樂錢以外の錢の總稱。北條氏、關東を領して、永樂錢を貴みし以來、この名稱起り、又その結果、他錢はおのづから京都地方に集まるに至りしため、京錢（キャウセン）ともいへり。ざっせん。びた。㊁一文錢の寛永鐵錢。

鐚錢一文（イチモン）【句】極めて僅少なる錢。びた一文。膝栗毛「その日ぐらしに、……、鐚錢一文も殘らぬ身代」

ひた-ぜめ　直攻【名】ひたすら攻むること。一途（イチヅ）に攻むること。盛衰記「御方に、思ひ切りたる者どもがなければこそ、直責に攻められて、大勢は討たるらめ」

ひた-ぞめ　直染【名】一面に染むること、又その染方にしたる物。

ひた-そら　只管【副】**ひたすら**（只管）の轉訛。沙石集「ひたそらの山賤（ヤマガツ）にて侍りしは、かたはら痛く」

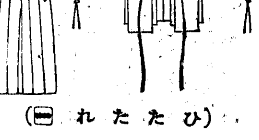
ひた-た　纔【副】**わづかに**（纔かに）に同じ。〔古語〕靈異記「纔、比多太」

ひた-たく　混く・叨く・滔く【動下二自】ばっとしたる狀に見ゆ。あらはに見ゆ。〔古語〕源氏「人繁くひたたけたらんすまひは、いと本意（ホイ）なかるべし」

ひだ-だいくわん　日田代官【名】**さいごくぐんだい**（西國郡代）に同じ。

ひだ-たくみ　飛驒工・飛驒匠【名】㊀古、飛驒國より、毎年員數を定められて、交番に京都にのぼり、木工（モク）寮に屬して、公役に服せし工匠。飛驒國は、山間の地にて、土民、木材の扱に慣れ、木工に從事する者多かりしため、朝廷、これを帳內（チヤウナイ）・資人等に補することなく、この制を設けらる。ひだびと。拾遺「とにかくに物は思はずひだたくみ打つ墨繩のただ一筋に」㊁**だいく**（大工）㊁に同じ。

ひた-たれ　直垂【名】㊀『もと直垂衾（ヒタタレブスマ）の稱にて、宿直（トノヰ）裝束などの上に著て、帶などもせず、ひたぶるに打ち垂れて著しよりの名ならんといふ』古、公武諸人の平日著用し、江戶時代には、侍從以上の禮服となり、又、堂上の人も用ふるに至りし、一種の服。仕立方は素襖（スアヲ）と同じく、生絹（キギヌ）・紗・精好などにて作り、方領にて、紋なく、袖括（ソデグクリ）あり、背と前方の兩腋と、後方の兩袖との五箇所に、組緒



（ひたたれ㊀）

の菊綴・胸紐あり。色は、多くは木蘭地にして、萌黃（モエギ）・朽葉などのもあり、紫と紅とは、將軍所用の色と定まりをり、又、近代、菊綴の上に、家紋を附くるに至れり。袴は、足利時代以後、長袴を用ふることと定まり、その制、素襖（スアウ）のとほぼ同じけれども、紐は白練を用ふ。出仕（シユツシ）直垂。ぬのびたれ（布直垂）・よろひびたれ（鎧直垂）參照。㊁ひたたれぶすま（直垂衾）の略。台記別記「次召二家行朝臣一、賜二比多多禮一（櫻萌黃）、仰云、路頭定有二寒氣一、以レ之禦レ寒」宇治拾「入りて寝んとするに、綿四五寸ばかりあるひたたれあり」

直垂の衆【句】直垂㊀にて出仕せし官職の者。東鑑「小泉四郎左衞門尉、可レ加二直垂衆一」

革緒の直垂【句】すあう（素襖）の異稱。

ひたたれ-うり 直垂賣【名】直垂を賣る人。七一職人歌合「ひたたれうり。雲まきの待びたたれのすきかげのさしてさはらぬ月の袖笠」

ひたたれ-がみしも 直垂上下【名】直垂と長袴とを著用すること、又その服裝。著聞「直垂上下に、編笠著たるのぼり人」

ひたたれ-ぎ 直垂著【名】直垂を著ること、又その人。太平記「外樣（トザマ）の大名五百餘騎、直垂著に相隨ふ」

ひたたれ-つき 直垂附【名】次條を見よ。

直垂附の小袖（コソデ）【句】うはぎ（上著）㊁に同じ。鎌倉年中行事「公方（クバウ）樣は、香（カウ）の御直垂に、精好の大口、御直垂附の御小袖」

ひたたれ-ぶすま 直垂衾【名】領（エリ）と袖とを附けて、形を直垂のごとくにし、綿を厚くしたる夜具。（古の衾は、領も袖も無き方形のものなりしより、特に區別していひ、直垂㊀は、この物の一轉せるなり）夜著（ヨギ）。ひたたれ。

ひたち 常陸【名】［地］東海道十五國の一。水戸（ミト）市及び久慈（クジ）・多賀・那珂・東茨城（ヒガシイバラギ）・西茨城・鹿島（カシマ）・行方（ナメカタ）・新治（ニヒハル）・筑波（ツクバ）・眞壁・稻敷（イナシキ）の十一郡に分たれ、全國、茨城縣の管轄に屬す。

ひ-だち 肥立【名】ひだつこと。日數を經るに從ひて、快くなること。和合人「然（サ）ういふ病人は、肥立の遲いものよ」

ひ-だち 樋太刀・樋劍【名】細太刀の、刀身に樋を設けたるものなるべし。「蒔繪（マキエ）の樋太刀」參照。

ひ-だち 非太刀【名】次條を見よ。

非太刀が入る【句】「非（ヒ）が入る」に同じ。甲陽軍鑑「ひだち入る事、有るまじく候」

非太刀を打つ【句】「非（ヒ）を打つ」に同じ。本朝三國誌「一言・一句、人に非太刀を打たれぬ春長」

ひたち-あや 常陸綾【名】後冷泉天皇の頃、常陸國の織工の製出せし綾。

ひたち-おび 常陸帶【名】㊀古、常陸國の鹿島（カシマ）神宮にて、正月十四日、參詣の男女の、布の帶に、我が名と、戀ひ慕ふ者の名とを紙に記し、紙撚（コヨリ）として、神前に供へ、參拜の後、東方なる玉垣に向ひて、その紙撚を、左手の二本指にてまはして結ぶに、神意に叶ふ者は結び得れども、結び得ざる者は、緣薄しとて、婚を卜定せりといふ神事。又、別に、常陸帶と呼びて、同神宮の寶藏に、俗に神功皇后御懷胎の時の御腹帶なりしものといふ帶あり、昔は、神事の當日、これを取出し、神官・供僧列座の上、式を行へりといふ。かしまのおび。六帖「東路の路のはてなる常陸帶かごとばかりもあひ見てしがな」㊁謠曲の一。常陸國の鹿島明神の常陸帶の神事に關する事を作れるもの。㊂茶壺の一種。尾張國瀨戶の藤四郎の燒きしもの。㊃［動］腹足類に屬する軟體動物。長さ約四五寸。殼質厚く、長卵形を呈し、內脣に斜襞を具へ、彩色極めて美し。稀に、我近海に產す。㊄［書］世人の、武門を尊び皇室を忘るるを慨し、經國の大事を論じたるもの。二卷。藤田東湖の著。

ひたち-くわうざん 日立鑛山【名】［地］常陸國多賀郡日立村・高鈴村と同國久慈郡中里村とに跨れる鑛山。足尾・別子（ベツシ）と共に、我國三大銅山として、世界に著る。佐竹藩時代よりの採掘に係るといひ、現時、久原（クハラ）鑛業會社の經營に屬す。

ひたち-さいもん 常陸祭文【名】淨瑠璃の一種。歌祭文より起り、天明の頃、結城（ユフキ）重太郎の創始に係り、常陸國にのみ行はれしもの。曲節は、歌祭文・ちよぼくれ・淨瑠璃などの混合折衷にて、三味線は、本調子にて、只、何となく鳴して、時時文句に合はす。日本祭文。

ひたち-ざらし 常陸晒【名】古、常陸國より產出せし晒木綿。令集解「常陸曝布」

ひたち-つむぎ 常陸紬【名】古、常陸國より產出せし紬。庭訓往來「常陸紬・上野綿」

ひたちばう-かいそん 常陸坊海存【名】［人］僧。丹波國の人。容貌魁偉、膂力比なく、嘗て牛若丸に擧兵を勸め、事泄るるや、踪跡を晦まし、後、又、義經に隨從し、屋島・壇浦の役に、軍功、最も多し。

ひたち-ふどき 常陸風土記【名】［書］古風土記の一。常陸國十一郡の事を記せるもの。一卷。奈良朝の初期、恐らくは、養老五年以後のものなるべしといふ。

ひたち-まる 常陸丸【名】日露戰爭の際、明治三十七年六月十五日、日の丸・佐渡丸・金澤丸・和泉丸・膽振（イブリ）丸・畿內丸・江浦（エノウラ）丸・芙蓉丸・羽後丸・吉林丸の十隻と共に、玄海灘にて、敵の裝甲巡洋艦ロシヤ・グロンボイ・リユウリックの三隻に擊沈せられし汽船。和泉丸（三千噸以上）、佐渡丸・常陸丸（共に、六千噸以上）は、郵船會社所有の御用船にて、和泉は、戰地より歸航の途中、又、常陸は、陸兵を、佐渡は、人夫・馬匹・鐵道材料等の軍需品を積載して、戰地へ向ふ途中の遭難に係る。

ひ-だつ 肥立つ【動四自】『日立つ』の義。ひたす（養す）參照』㊀病氣など、日を逐ひて快くなる。㊁日を逐ひて成育す。

ひた-づかひ 直使・頓使【名】副使・從者などを伴はぬ使。「雉（キジ）の直使」參照。［古語］

ひ-だつそ 脾脫疽［醫］脾脫疽菌によりて、牛・馬・羊に發する病。一週間以內の潛伏期を經て、皮膚面の癰、發熱、隣近淋巴腺の腫脹を來し、時には、全身症狀を來して斃る。人類には、感染すること稀なり。脾疽。炭疽。

ひた-つち 直土【名】地に直接せること。［古語］萬葉「伏廬（フセイホ）の曲廬（マゲイホ）の內に直土に藁解き敷きて」

びたつ-てんわう 敏達天皇【名】［人］第三十代の天皇。御名は譯語田（ヲサダ）、又、淳名倉太玉敷（ヌナクラフトタマシキ）尊。欽明天皇第二の皇子。母は石姬（イシヒメ）皇女。在位十四年（紀元一二三二年―一二四五年）。御卽位の十四年崩ず。御壽四十八。

ひだ-つむぎ 飛驒紬【名】もと飛驒國より產出し、經・緯に、やや太き紬絲を使用する紬。高山（タカヤマ）紬。世間手代氣質「上下とも、飛驒紬に著替へて」

ひた-つら 皆燒【名】刀の、鋒（キツサキ）の反（ソリ）深く、身の中程又は庵（イホリ）の上位まで、刀背（ムネ）に、刃紋（ハモン）樣の燒刃あるもの。

ひた-てり 直照【名】ひたすら照ること。一面に照ること。萬葉「大君はときはにまさむ橘の殿の橘ひた照にして」

ひた-にげ 直逃【名】ひたすら逃ぐること。一途（イチヅ）に逃ぐること。東海道名所記「ひたにげに、都まで逃げのぼりぬ」

ひた-ぬひ 直縫【名】一面に縫取（ヌヒトリ）をなすこと、又これをなしたる物。曾我五人兄弟「小袖……摺繪・ひた縫、結構・華麗を盡せしは」

ひた-ぬれ 直濡【名】一面に濡るること。「びしよぬれ。

ひ-だね 火種【名】火力を、他の薪炭に移らしむる種とする火。

ひた-ねぢ 直捩【名】ひたすら捩ること。一途（イチヅ）に捩ること。狂言（金師平六）「捩木を入れて、ひた捩に捩ぢつめられて」

ひだのくに-の-みやつこ 斐陀國造【名】姓氏の一。尾張連（ムラジ）より分れしもの。神別に屬す。

ひだ-のしろ 飛驒能代【名】ひだしゆんけい「ぬり（飛驒春慶塗）」に同じ。

ひだのたくみ-ものがたり 飛驒匠物語【名】［書］更科日記の中なる話を基として作れる小說。六卷。石川雅望（マサモチ）の著。天保十二年に刊行す。

ひだ‐の‐ほそえ 斐太細江【名】〔地〕今の大和國高市（タカイチ）郡鴨公（カモキミ）村大字飛驒（ヒダ）の地の川ならんといふ。萬葉「白まゆみ斐太の細江の菅鳥（スガドリ）の妹に戀ふれや寐（イ）を寢かねつる」

ひた‐のぼり 直登【名】ひたすら登ること。一途（イチヅ）に登ること。

ひた‐ばしり 直走【名】ひたすら走ること。一途（イチヅ）に走ること。

ひた‐はだか 直裸【名】全身はだかなること。あかはだか。すはだか。まっぱだか。〔古語〕撰集抄「さばかりの寒きに、ひたはだかにて」

ひたひ 額【名】一額の上部、毛髮の生際（ハエギハ）より、眉の邊までの處。和名「額、比太比」 二びんぶく（鬢服）に同じ。和名「蔽髮、比太飛。蔽二髮前一爲レ飾也」 三冠・烏帽子などの、額に當る部分。厚額・薄額・透（スキ）額などの別あり。源氏「上臈も亂れて、冠（カウブリ）のひたひ、すこしくつろぎたり」 正統記「裝束の強（コハ）くなり、烏帽子の額などいふことも、その頃より出で來にき」 四童舞（ワラハマヒ）の冠。源氏「例のみづらに、ひたひばかりのけしきを見せて」 五物の差し出でたる處。左京大夫集「波かくる岸のひたひのそなれ木の目なれて妹と寢（ヌ）るよしもがな」 太平記「岸の額なる草の根に」

額が抜上（ヌケアガ）る【句】額の生際（ハエギハ）、深く禿ぐ。

額刻む罪【句】ぼくけい（墨刑）に同じ。紀「黥、ヒタヒキザムツミ」

額で人を見る【句】上目使（ウハメヅカヒ）をして、相手を見る。

額と額を合はす【句】「額を合はす」に同じ。辨慶物語「額と額をさし合はせ、小聲になりて」

額に青筋を立つ【句】額に青筋をあらはして腹立つ。激昂す。

額に毛抜を當つ【句】「額に角（スミ）を入る」に同じ。曾根崎心中「額に毛抜を當てる身が、面恥（ツラハヂ）かいて」

額に筋を立つ【句】「額に青筋を立つ」に同じ。賀古教信七墓廻「上人、額に筋を立て」

額に角（スミ）を入る【句】「角（スミ）を入れる」に同じ。

額に手を當つ【句】一『宋史の司馬光傳に「光居二洛陽一十五年、赴レ闕。衞士望見、皆以レ手加レ額曰、司馬公也。所レ至民遮レ路聚觀」とあり』甚しく喜び望む時の態度。土佐「女・おきな、額に手をあてて悦ぶこと、二つなし」 二祈念する時の態度。源氏「額に手をあてて念じ入りて」榮花「額に手をあてて念じ奉りたり」

額に箭は立つとも、背（ソビラ）に箭は立たず【句】武士の、勇氣に富みて、ひたすら進み戰ひて、退くことを知らぬ形容。

額の金輪（カナワ）【句】ひたひがね（額金）に同じ。

額の波【句】「老（オイ）の波」に同じ。堀次「いやましに額の波はかかれども消えずも年の雪つもるらん」

額を集む【句】多人數、集まりて、相談をなす。鳩首（キウシユ）す。

額を合はす【句】額と額と相合ふほどに、近く寄りつどふ。竹取「御前に參りたれば、中納言、額をあはせて向ひたまへり」 太平記「手に手を取組み、額を合はせて、先づ悅泣にぞ泣きたりける」

額を叩く【句】はたと行きつまりたる時、己が額を、掌にて打つ。

額を突合はす【句】「額を集む」に同じ。

額を集（ツド）ふ【句】「額を集む」に同じ。空穗「三人の人、額を集へて」

額を寄す【句】前條に同じ。

ひ‐だひ 干鯛【名】薄鹽をかけて乾したる鯛。禮式の時、鮮魚の代に、贈物として用ふ。鯛のひもの。江次第「干鯛平盛」

ひたひ‐えぼし 額烏帽子【名】古、童男の額の處にあてし、三角の烏帽子。黑く染めたる紙にて作りしものなるべしといふ。夫木「篠ためて雀弓張る男（ヲ）のわらはひたひえぼしのほしげなるかな」

ひたひ‐かくし 額隱【名】もかう（帽額）一に同じ。

ひたひ‐がね 額金・題鐵【名】鉢卷の、額に當る部分に入れたる、薄き銅鐵の板。運歩色葉集「額金、ヒタヒガネ」

ひたひ‐がみ 額髮【名】額の上の髮。ぬかがみ。まへがみ。みみはさみ（耳狹）參照。源氏「額髮をかきさぐりて」 芭蕉「粽（チマキ）結ふ片手にはさむ額髮」

ひた‐ひき 直引・直退・混引【名】ひたすら退くこと。一途（イチヅ）に退くこと。太平記「將軍の十萬餘騎、混引に引き立てて、曾て後（ウシロ）を顧みず」

ひたひ‐ぎ 額木【名】大鳥打（オホトリウチ）の上部。〔弓工の語〕

ひたび‐ぎは 額際【名】額の頭髮のはえぎは。からぎは。

ひたひ‐ぐし 額櫛【名】昔、婦人の額の上に插しし櫛。古の宮女は、平額（ヒラビタヒ）の下に插せり。

ひたひ‐ぐち 額口【名】額のさき。ひたひ。俗つれづれ「日比（ヒゴロ）拔き上げたる額口」 八笑人「吹殼拔けて、仰向に寢て居し呑七（ノミシチ）が額口へ、ぽったり落ち」

ひたひ‐ぐり 平栗子【名】實物は詳かならねど、打栗（ウチグリ）の類ならんとも、又、おこし米ならんともいふ。〔古語〕金槐集「ことしよりよろづの人をひたひ栗おもてを君ぞおこしごめなる」

ひたひ‐さだめ 額定【名】ぢやうがく（定額）に同じ。

ひた‐ひしめき 直犇【名】ひたすら犇くこと。一向に押し合ひ騷ぎ立つこと。太平記「我も、いづこへか落ちゆかましと、……ひたひしめきにひしめく間」 曾我「ひた犇にひしめきけり」

ひたひ‐じろ 額白・髮白・戴白【名】つきびたひ（月額）一に同じ。運歩色葉集「額白・戴白、ヒタヒジロ。馬」 蕪村「駒迎ことにゆゆしや額白」

ひた‐ひた【貌】一隙間（スキマ）無きさま。緊密なるさま。ぴたりぴたり。狂言（佛師）「膠を以て、ひたひたと附けますれば」 二滯なきさま。ずんずん。さっさ。太平記「馬より、ひたひたと飛び下りて」 三全くひたすらなるさま。しみじみ。全然。二代男「今日は、ひたひたいやぢや」 四水の、物を浸すやうにして、打ち當る音。ぴちやぴちや。續猿蓑（此筋）「繭の花にひたひた水の濁かな」 五風の物に當る音。俳諧新選（古集）「ひたひたと風も光るや罌粟畠」

ひたひ‐つき 額付【名】一額の樣子。額のかたち。枕「鳥・蟲の額つき、いと美しうて、飛びありく」 紫式部日記「臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし」 二羈（オモガイ）の一部。馬の額に當る所。

ひたひ‐つき 額突【名】ぐわとうぐち（瓦燈口）に同じかるべしとも、差掛（サシカケ）の廂かともいふ。盛衰記「内へ責め入りて、寢殿をさし覗いて見れば、額突あり」

ひたひ‐つむじ 額旋毛【名】じゆせい（壽星）三に同じ。

ひだ‐びと 飛驒人【名】ひだたくみ（飛驒匠）に同じ。萬葉「かにかくにものは思はず斐太人の打つ墨繩のただ一みちに」

ひた‐ひとへ 直單【名】單物を、一枚のみ著ること。雅亮裝束抄「ひたひとへは、祭の頃より、六位は著るなり」

ひたひ‐なほし 額直【名】はんげんぷく（半元服）を見よ。

額直の親（オヤ）【句】額直を行ふ時の元服親。

ひたひ‐ほほづき 額酸漿【名】〔植〕いぬほほづき（犬酸漿）に同じ。

ひたひ‐よつじろ 額四白・五明【名】馬の毛色の一。四白（ヨツジロ）の馬の、額にも、白紋あるもの。

ひたひ‐わた 額綿【名】一わたばうし（綿帽子）に同じ。津國女夫池「丸綿・ほんぼり・ひたひ綿」 二古、月代（サカヤキ）を剃れる男優の、女に扮つ時、額を掩ふに用ひし綿。

ひ‐たふ 批答【名】上書などに、その不合の箇所に批點を加へて、返付すること。

ひた‐ぶり 直降【名】ひたすら降ること。俳諧新選（萬橘）「ひたぶりや夜は夜もすがら五月雨」

ひた‐ぶる 頓・一向【副】ひたすら（只管）に同じ。〔古語〕紀「永退矣、ヒタブルシリゾク」 源氏「なかなか、ひたぶるなる心もこそ附きはべれ」

ひたぶる‐ごころ 頓心【名】ひたすらなる心。一途（イチヅ）なる心。〔古語〕源氏「ぬ

す人などいふひたぶる心ある者も」同「男は、さもさばれと、ひたぶる心にて」

ひたぶる-に 頓に・一向に【副】**ひたぶる**(頓)に同じ。〔古語〕伊勢「みよしののたのむの雁(カリ)もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」

ひ-たま 瑎【名】玉に似たる石。〔古語〕字鏡「瑎、石似ㇾ玉。比太萬」

ひ-だま 火玉【名】㊀球状をなして、空中を飛び行く怪火。ひのたま。井筒業平河内通「井筒の中……火玉・水玉ほどばしれば」㊁烟管につめて、火をつけたる、烟草の小きかたまり。

ひた-まきゑ 比多蒔繪・直蒔繪【名】東山時代の蒔繪の一。寶德の頃、足利義政が、特に漆工に命じて、文箱の全體に施さしめしもの。

ひだまひ-の-ふだ 日給簡【句】「日給(ニツキ)の簡」に同じ。空穗「ひだまひのふだに、内侍のかみになす由書かせたまひて」

ひ-だまり 日溜【名】日光のよく照して、暖かなる空地。

ひた-み 直身【名】全身。總身。鎌倉志「賤(シツ)の女が戴く桶の底拔けてひた身にかかる有明の月」

ひだ-みそ 飛驒味噌【名】飛驒國より產する味噌。

ひた-みち-に 直道に【副】**ひたすら**(只管)に同じ。〔古語〕源氏「ゆくさき遠げなる御程に、いかでかは、ひたみちに、然は思したらん」同「萬のあはれをば、皆思し捨てて、ひたみちに出で立ちたまふ」

びたみん (英 Vitamin)【名】『發見者の一人なる英人ファンク (Funk) の命名』動物の營養分として、從來數へられ來りし蛋白質・脂肪・炭水化物・灰分等以外に、新陳代謝の調節と刺戟とを司るものとして、近來發見せられたる一要素。ビタミンA・ビタミンB・ビタミンCの三種あり。Aは、肝油・牛乳・バタ・卵黃等に多量に含み、脂肪性にして、その缺乏の結果は、代謝機能の不整、從って、疾病に對する抵抗力の減衰を來し、營養不良となり、呼吸器病に罹りやすし。Bは、玄米・大麥・大豆・野菜・果實等に含み、水溶性にして、その缺乏は、多く脚氣に犯さるる外、胃腸病・便祕・不姙症等を發し易し。Cは、新鮮なる野菜・果物・牛乳・鷄卵等に多量に含有し、その缺乏は、壞血病となりて現る。ばいたみん。生活素。

びたみん-ええ (英 Vitamin A)【名】前條を見よ。

びたみん-しい (英 Vitamin C)【名】前前條を見よ。

びたみん-びい (英 Vitamin B)【名】**びたみん**を見よ。

ひ-たん 飛湍【名】流のはげしき瀨。はやせ。急湍。

ひ-たん 飛端【名】**からすがしら**(烏頭)に同じ。

ひ-たん 悲歎・悲嘆【名】かなしみなげくこと。

ひ-だん 飛彈【名】飛びくる彈丸。流彈。

ひだん 左【名】**ひだり**(左)の音便。呂保殿歌合「歌合あり、ひだんのかたんだに參る」

び-たん 鼻端【名】鼻の先端。はながしら。はなさき。鼻尖。鼻頭。

び-たん 尾端【名】尾の先端。をさき。

び-たん 眉端【名】眉のさき。眉尖。

び-だん 美談【名】ほむべきものがたり。

ひだん-かい 避彈界【名】〔兵〕地區又は地物に遮蔽せられて、射彈を避け得る地界。

び-だんし 美男子【名】美貌の男子。好男子。美男子(ビナンシ)。

ひだん-ち 被彈地【名】〔兵〕『英 Beaten zone』彈丸、殊に榴霰彈の落下する地帶。

ひた-め 大雨【名】『直降(ヒタフリ)の雨の義』おほあめ。ひさめ。たいう。〔古語〕紀「大雨、ヒタメ」

ひだ-め 襞目・襞積目【名】**ひだ**(襞)に同じ。和名「襞積、比多米」

ひた-めん 直面【名】能樂を演ずるに、假面(メン)を著けぬこと。現在物の男の場合、素襖(スアウ)又は直垂(ヒタタレ)を著て、男舞を舞ふ時、少年にして、男に扮する時などにす。

ひた-もの 直物【副】㊀器に滿つるほど。ひともの。いっぱい。〔古語〕枕「これに、白からん所、ひたもの入れて持て來(コ)」㊁**ひたすら**(只管)に同じ。醒睡笑「ひたもの諸白(モロハク)を强ひて」五人女「ひたもの所望(シヨマウ)・所望」

ひた-ものぐるひ 直物狂【名】ひたすらの物ぐるひ。全くの氣ちがひ。盛衰記「この僧は、敢物狂(ヒタモノグルヒ)にてありけり」

ひたもの-に 直物に【副】**ひたもの**(直物)㊁に同じ。きのふはけふの物語「草鞋(ワラヂ)を踏み、木賊(トクサ)にて作りてはきければ、ひたものに足の裏磨かれて」同「ひたものに、ただ腫れて、頰先まで、ただ腫れた」

ひた-ものの-ぐ 直物具・混物具【名】一隊の者が、すべて、物の具を著くること。太平記「國國の兵をば、混物具にて、三千餘騎、閑かに小路を打たる」

ひだ-やき 飛驒燒【名】飛驒國高山町より產出する陶器。染附・青磁・白磁などの種類ありて、品質堅剛なり。

ひた-やごもり 直屋籠・直屋隱【名】ひたすらに家に引きこもり居ること。〔古語〕蜻蛉「幼き人のひたやごもりならん、消息(セウソコ)聞えにとて」

ひだ-やま 飛驒山【名】飛驒國の山。蕪村「飛驒山の質屋とざしぬ夜半の冬」

ひ-だら 干鱈【名】鱈を薄鹽にして、日に干したるもの。鱈のひもの。一代男「干鱈むしり喰うて」芭蕉「躑躅(ツツジ)いけてその陰に干鱈割く女」

ひ-たらす 日足らす【動四自】『日足るの敬語。**ひたす**(養す)參照』成長したまふ。〔古語〕萬葉「何時(イツ)しかも日足らしまして望月のたたはしけむと」

ひたり 一人【名】**ひとり**(一人)に同じ。〔古語〕紀「えみしをひたり、ももな人」

ひだり 左【名】㊀右と反對なる方向。左方(サハウ)。㊁左の手。ひだりて。左手(ユンデ)。左狂言(算勘聟)「右の手の指が五つ、左が五つ、合はせて十」㊂左大臣、又、左近衞府・左兵衞府・左衞門府など、すべて、左右に分れたる官職の左の方。源氏「右大將の君……、例の左に移りたまひぬ」十訓「官は、右大臣までにてありしかども、奉公、人にすぐれたるによりて、左に至る」㊃**ひだりまへ**(左前)㊁の略。柳樽「身代も左賣家の札も橫」㊄『鑿は左の手に持つものなるによりて、**のみて**(飮手)を、**のみて**(鑿手)の義に取りなしていふ』酒を飮むこと、又その量。浮世親仁形氣「次第に左あがりて、後には、生酒(キザケ)の辛口(カラクチ)なるを好みて」和合人「左とは何(ナン)ぢやな。ええ、じれってえ、酒の事さ」

左が利(キ)く【句】㊀左の手の方が、右の手より利く。㊁『前條㊄を見よ』能く酒を飮む。

左の獄(ゴク)【句】古、刑部(ギヤウブ)省囚獄司に屬して、京都左京の近衞の南、西洞院(ニシノトウヰン)の西にありし牢獄。東獄。(「右の獄」に對して)

左の脇の弟子【名】〔佛〕三尊の中の、左方の脇士(ケフジ)。左脇士(サケフジ)。(「右の脇の弟子」に對して) 著聞「我は、これ、極樂世界の教主なり。織姫は、我が左の脇の弟子觀世音なり」

左は勝手、右は得手(エテ)【句】何れにしても、都合よし。〔諺語〕

左も右も【句】かれも、これも。いづれも。**ひだりみぎに**(左右に)參照。榮花「宮たち、皆、さまざま美しう、いづ方にもおはしますを、左も右もとぞ思召さるるが内にも」

左を利(キ)かす【句】好みて酒を飮む。

一の左【句】歌合・舞人などの座次にて、左方の一番の座、又その位置に坐る人。ひだりざ。增鏡「一の左に、中院の大納言通顯の子通冬少將」

ぴたり【貌】㊀すきまなく接するさま。よく適合するさま。ひた。ぴったり。㊁ゆるがぬさま。ぴったり。「ぴたりと止まる」㊂しっくり出逢ふさま。ぴったり。

ひだり-あがり 左上【名】㊀左の方の、右に比して、高くなり過ぐること、又その物。(右上に對して) ㊁次條の略。(右上に對して)

ひだりあがり-えばうし 左上烏帽子【名】**ひだりまゆえばうし**(左眉烏帽子)に同じ。(右上烏帽子に對して)

ひだり-あふぎ 左扇【名】㊀左の手に、扇を持ちて、あふぐこと。㊁ひだりうちは(左團扇)㊁に同じ。小町踊(立圃)「秋扇。涼風は左扇か秋の空」 浮世親仁形氣「精出して、自慢せいと、左扇を使へば」

ひだり-いと 左絲【名】左撚(ヒダリヨリ)の絲。(右絲に對して) 空穗「左いと・右絲によりて、一ひろかたわきばかりすげたるを」

ひだり-うちいろ 左打色【名】八雲琴を、左の手の指にて、絲をおさへて彈くこと。

ひだり-うちは 左團扇【名】㊀左の手に、團扇を持ちて、あふぐこと。㊁活計に追はれず、安樂に暮して得意なる狀態の形容。ひだりあふぎ。

左團扇に日酒(ヒザケ)を飲む【句】安樂に日を暮す形容。〔諺語〕

ひだり-うつぼ 左靫【名】『靫を身の左の方に附けなほして通る所の義』岨路の嶮しき所。犬もどり。

ひだり-えぼし 左烏帽子【名】ひだりをりえぼし(左折烏帽子)に同じ。盛衰記「源氏の先祖八幡殿は、左烏帽子を著たまひ」

ひだり-えり 左襟【名】さじん(左衽)㊀に同じ。

ひだり-かたむすび 左片結【名】右方より左方へまはして結ぶ片むすび。(右片結に對して)

ひだり-がち 左勝【名】ひだりきき(左利)㊀に同じ。夜鶴庭訓抄「齋宮の女御は、左がちにおはしましけるとかや」

ひだり-がって 左勝手【名】㊀活花(イケバナ)、その他、床の間の配置など、左を本として構ふること。又、主人の右方に、客を坐らすること。本勝手。(右勝手に對して) ㊁ひだりきき(左利)㊀に同じ。和合人「左勝手の白齒の矢取」

ひだり-がな 左假名・左假字【名】左傍に施す振(フリ)假名。

ひだり-がは 左側【名】左の方の側。左側(サソク)。(右側に對して)

ひだり-きき 左利【名】『「左が利(キ)く」を見よ』㊀左の手の方が、右の手より利くこと、又その人。ひだりぎっちよう。ひだりぎっちよ。ひだりがち。ひだりがって。ぎっちよ。俳諧新選(必化)「七草や何にかけても左利」 ㊁さけのみ。のみて。酒客。四方のあか「左利ども、庖丁の切味を試み」

ひだり-ぎっちよ 左器用【名】前條㊀に同じ。

ひだり-ぎっちよう 左器用【名】前條に同じ。

ひだり-ざ 左座【名】「一の左」に同じ。置土產「洛中廣きに、歌仙分限とさされて、三十六人の中にも、左座の第一、二文字(ニモジ)屋の何がしとて」

ひだり-ざま 左樣【名】㊀左の方。㊁正道に違ふこと。左道(サダウ)。〔古語〕

ひだり-じんごらう 左甚五郎【名】〔人〕彫刻家。足利氏の臣、伊丹正利の子。播磨國の人。京都に住す。少にして、父を亡ひ、母に從ひて、伏見の番匠、與平治に賴る。工匠をも善くし、常に左手のみ用ひたりといふ。聚樂(ジユラク)第・桃山城、その他、神社・佛閣等に、手法を留む。寬永十一年歿す。年四十一。(京都西本願寺の日暮門、嵯峨法輪寺の彫龍、日光廟の眠猫など、その遺作と傳ふれども、子孫數代、同名を稱せしため、傳記混亂せしなるべしともいふ)

ひだり-す 左す【動佐變自】左に向ふ。左方に進む。

ひだり-せいがん 左星眼・左青眼・左精眼【名】ひらせいがん(平星眼)を見よ。

ひだり-そで 左袖【名】左の方の袖。芭蕉「遲き日に乾かぬ綱の左袖」

ひだり-っかは 左側【名】ひだりがは(左側)の音便。

ひだり-づま 左褄【名】㊀衣服の左の方の褄。㊁左褄を取ること。次條參照。和合人「口をかけたる藝者のお照(テル)、左褄のちよこちよこ歩(アユミ)」 ㊂げいぎ(藝妓)の異稱。

左褄を取る【句】㊀藝妓、出(デ)の時、裾の引きずらぬやう、左の褄を取りて歩む。㊁藝者の勤をす。藝者となる。

ひだり-て 左手【名】㊀左方の手。ひだり。左手(ユンデ)。(右手に對して) 萬葉「めづらしき君を見むとこそ左手の弓取る方の眉根(マヨネ)搔きつれ」 ㊁左の方。さはう。(右手に對して)

左手の規則【句】〔理〕磁力線と電流の方向と、これによりて生ずる導線の運動の方向との關係を示す規則。即ち左手の拇指と食指と中指とを、互に直角を爲すやうに擴げ、食指を磁力線の方向に、中指を電流の方向に向くれば、拇指の導線を運動せしめんとする力は、拇指の方向を取ること。もおとるるうる。

ひだり-どもゑ 左巴【名】紋所の一。左卷の巴。(右巴に對して) 謠曲 調伏曾我「左巴は、宇都宮の彌三郎」

ひだり-どもゑ-むすび 左巴結【名】ともゑむすび(巴結)を見よ。(右巴結に對して)

ひだり-なは 左繩【名】㊀左撚(ヒダリヨリ)の繩。夫木「御禊(ミソギ)する今日の淺茅(アサヂ)の左繩荒ぶる神も心解くらし」 一代女「うるはしき娘……、帶は三色(サンシキ)左繩、後(ウシロ)結にして」 ㊁物事の、思ふやうにならぬこと。ひだりまへ。夫木「つらかりし夢はさめても變らぬに逢ふと見つるぞ左繩なる」 丹波與作「斯う左繩になるからは」

ひだり-の-うまづかさ 左馬寮【名】ひだりのうまのつかさ(左馬寮)に同じ。空穗「左のうまづかさひきゐて」

ひだり-の-うま-の-かみ 左馬頭【名】さまのかみ(左馬頭)に同じ。源氏「左の馬のかみ、……御物忌に籠らんとて」

ひだり-の-うま-の-つかさ 左馬寮【名】さまれう(左馬寮)に同じ。和名「左馬寮、比多里乃牟萬乃豆加佐」

ひだり-の-おとど 左大臣【名】さだいじん(左大臣)に同じ。空穗「左のおとどは、太政大臣……になりたまひて」 今物語「宇治の左のおとどの御前に」

ひだり-の-おほいおほともひ 左大辨【名】さだいべん(左大辨)に同じ。

ひだり-の-おほいまうちぎみ 左大臣【名】さだいじん(左大臣)に同じ。古今「東三條の左のおほいまうちぎみ」

ひだり-の-おほいまちぎみ 左大臣【名】前條に同じ。

ひだり-の-おほとねり 左大舍人【名】㊀ひだりのおほとねりのつかさ(左大舍人寮)の略。(右大舍人に對して) ㊁左大舍人寮に屬する大舍人。(右の大舍人に對して)

ひだりのおほとねり-の-かみ 左大舍人頭【名】左大舍人寮の長官。

ひだり-の-おほとねりのつかさ 左大舍人寮【名】中務(ナカツカサ)省の被管の一。頭(カミ)・助(スケ)・大少允(ジヨウ)・大少屬(サクワン)の四部官及び大舍人・使部・直丁の職員ありて、左大舍人の名帳を記し、分番・宿直などを下知する事を掌りしもの。大同三年、右大舍人寮と倂せて、一の大舍人寮となせり。

ひだり-の-おほとねりれう 左大舍人寮【名】前條に同じ。

ひだり-の-おほどの 左大殿【名】さだいじん(左大臣)に同じ。空穗「左の大とののたまふべけれど」

ひだり-の-すけ 左佐【名】檢非違使(ケビイシ)廳の佐二人の内、左衞門權佐(サヱモンノゴンノスケ)より兼補せられたるもの。(右佐(ミギノスケ)に對して) 著聞「使廳(シチヤウ)の結緣經(ケチエンギヤウ)……、別當顯俊卿、雲林(ウンリン)院にて行ひたりけり。左の佐經兼已下(イゲ)著座したりけり」

ひだり-の-すないおほともひ 左少辨【名】させうべん(左少辨)に同じ。

ひだり-の-だいしやう 左大將【名】さだいしやう(左大將)に同じ。空穗「左の大將のは、いとすくよかにいかめしき人の、よろづの事思ひながら言はぬかな」

ひだり-の-ちかきまもりのつかさ 左近衞府【名】さこんゑふ(左近衞府)に同じ。

ひだり-の-ちゆうじやう 左中將【名】さちゆうじやう(左中將)に同じ。平家「西國にて、左の中將失せたまひぬ」

ひだり-の-つかさ 左司【名】左近衞府、及びその官人。源氏「左のつかさに、いとよしある官人多かる頃なり」

ひだり-の-つかさ 左馬寮【名】ひだりのうまのつかさ(左馬寮)の略。源氏「ひだりのつかさの御馬」

ひだり-の-つはものとねりのつかさ 左兵衞府【名】さひやうゑふ(左兵衞府)に同じ。延喜式「左兵衞府、ヒダリノツハモノ」

トネリノツカサ」

ひだり-の-つはもののくら 在兵庫【名】さひやうご(左兵庫)に同じ。

ひだり-の-なかのおほともひ 左中辨【名】さちゆうべん(左中辨)に同じ。

ひだり-の-ひはらじろ 左脾腹白・白帶劒【名】馬の毛色の一。左方の横腹の白きもの。

ひだり-の-みかいもりのつかさ 左衞士府【名】さゑじふ(左衞士府)に同じ。

ひだり-の-みさとづかさ 左京職【名】さきやうしき(左京職)に同じ。和名「左京職、比多利乃美佐止豆加佐」

ひだり-の-みさとのつかさ 左京職【名】前條に同じ。朝野群載「左右京職、ヒダリミギリノミサトノツカサ」

ひだり-の-ゆげひのつかさ 左靱負府【名】靱負府の、左右に分れたる内の、左の方。

ひだり-の-ゆげひふ 左靱負府【名】前條に同じ。

ひだり-ばらみ 左孕【名】胎兒が、母體の左側にかたよりてやどること。

ひだり-ひとつどもゑ 左一巴【名】ひとつざもゑ(一巴)を見よ。

ひだり-ふじ 左富士【名】舊東海道を、東より西へ向ひて進むに、富士山は右方に見ゆる筈なれども、駿河國原驛の邊にては、道路屈曲のために、左方に見えしこと。

ひだり-ふたつどもゑ 左二巴【名】ふたつざもゑ(二巴)を見よ。

ひだり-ぶみ 左文【名】ひだりもじ(左文字)に同じ。

ひだり-まき 左卷【名】㈠左の方へ卷くこと。(右卷に對して)㈡〔植〕ねぢばな(綬草)を云ふ。〔近江國の方言〕

ひだり-まき-まいまい 左卷蝸牛【名】〔動〕蝸牛の一種。殼は大形にして、徑七八分、淡き鼈甲色を呈して、左旋し、通常、螺層に一條の褐色線を具ふるもの。東北地方に多し。

ひだり-まさつね 左正常【名】〔人〕びぜんまさつね(備前正常)を見よ。

ひだり-まはり 左廻【名】㈠左方へ向ひてまはること。(右廻に對して)㈡次條㈡に同じ。

ひだり-まへ 左前【名】㈠衣を著るに、右の衽(オクミ)を、左の衽の上に重ね合はすること。左衽。若風俗「著物、左前に」㈡物事の、思ふやうにならぬこと。運の惡しくなること。衰へかかること。ひだりなは。ひだりまはり。ひだりむき。織留「近年、商賣、左前にて、立つ所、居る所にて、損銀重なり」世間手代氣質「金山の損から、する程の事、左前になって」

ひだり-まんじ 左卍【名】まんじ(卍)㈢を見よ。

ひだり-まゆ 左眉【名】次條に同じ。

ひだり-まゆ-えばうし 左眉烏帽子【名】烏帽子の、左方のみに眉あること、又その烏帽子。ひだりあがり。(右眉烏帽子に對して)

ひだり-みぎ 左右【名】㈠ひだりと、みぎと。みぎひだり。左右(サイウ)。源氏「左右の戸もよろぼひ倒れにければ」㈡左と右と、位置の顚倒してあること。㈢『英』Left, Right』小學校の教師などが、生徒の歩調を整ふるための號令。

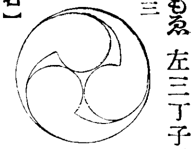
ひだり-みぎ-に 左右に【副】この事につけ、かの事につけて。とかくに。「左も右も」參照。源氏「左右に苦しく思へど」同「右左に安からずば、わが身も苦しくこそはあらめ」

ひだり-みぎり 左右【名】ひだりみぎ(左右)㈠に同じ。朝野群載「左右京職、ヒダリミギリノミサトヅカサ」發心集「これ等を、ひだりみぎりに据ゑ」

左右の眼(マナコ)【句】左右の眼の如く、共に缺くべからざるもの。榮花「有國・惟仲をば、ひだりみぎりの御まなことぞ仰せられける」

びだり-みつちやうじどもゑ 左三丁子巴【名】みつちやうじざもゑ(三丁子巴)を見よ。

ひだり-みつどもゑ 左三巴【名】みつざもゑ(三巴)を見よ。


（ひだりみつどもゑ）

ひだり-むき 左向【名】㈠左方へ向くこと、又その向方をしてある物。㈡ひだりまへ(左前)㈡に同じ。

ひだり-もじ 左文字【名】裏返(ウラガヘシ)に見たる如き形の文字。

ひだり-ゆがみ 左曲【名】夫の、妻より劣りてあること。盛衰記「貧しき者、たのしき妻を儲くるは、左曲と云ふ事なれば」

ひだり-ゆみ 左弓【名】右手にて弓を握り、左手にて弦を引きて射ること。即ち、普通の方法と、左右相反せるもの。

ひだり-より 左寄【名】左方に近き處。

ひだり-より 左縒【名】㈠右方より左方へまはして縒ること、又その縒方の物。㈡脫糞の形容。和合人「矢場七が寢像(ネザウ)の惡いので思ひついたが、味噌を一握、左縒に拵へて、糠味噌のゆるい所を、衣に掛けて、あの股ぐらへ、そっと當てがって置きやす」

ひだり-をり 左折【名】左の方へ折り曲ぐること、又その曲げたる物。謠曲(烏帽子)「烏帽子は、……平家一統の世にて候ふほどに、左折は思ひもよらぬことにて候ふ」

ひだり-をり-えぼし 左折烏帽子【名】風折(カザヲリ)烏帽子の、左折なるもの。ひだりえぼし。(右折烏帽子に對して)

ひたる 浸る・漬る【動四自】㈠『ひたひたと濡るる義』水に染みて濕ふ。ひづ。ひづつ。つかる。狹衣「黄金のいさごに、白銀(シロガネ)の浪寄せて、ひたれる松の深緑の心ばへ」㈡滿足す。甘心す。自得す。

ひだるさ-まぎれ 干だるさ紛【名】ひだるき餘りにすること。東海道名所記「ひだるさまぎれに、蕨餅なりと思ひて」

ひ-だるし 干だるし【形一】飢ゑたり。空腹なり。ひもじ。著聞「食物絶えて、術なくひだるく候ふままに」醒睡笑「喰うて、ひだるさ忘れう」

干だるい時、不味(マヅ)い物なし【句】飢ゑたる時は、何を食ひても、皆旨し。〔諺語〕

干だるくば、手の先にせたげよ【句】食を得んと欲せば、己が手を使ひて働くに若かず。〔諺語〕

干だるさ欠(アクビ)、寒さ小便【句】飢ゑたる時は、欠を催し、寒き時は、小便を催すものなり。〔諺語〕

ひだる-ばら 干だる腹【名】すきばら(空腹)に同じ。續鳩翁道話「わしがお飯(ママ)焚いてやらずば、家內中が、皆、ひだる腹かかへて、かつえをるであらう」

ひ-たれ 膠【名】あぶらじり(脂尻)に同じ。〔古語〕和名「比多禮、鳥尾肉也」

ひた-を 頓丘【名】ひたすらに丘のみ續きてあること、又その處。一說に、片倚れる丘。〔古語〕紀「頓丘、此云㆓毘陀烏㆒」

ひ-ち 比笞【名】笞罪に比して處斷すること。大寶律「若誣㆓僧尼應㆓還俗㆒者、比徒一年、其應㆓苦使㆒者十日、比笞十」

ひ-ち 髀胝【名】髀肉の硬くなれるもの。

ひぢ 日出【名】〔地〕豐後國速見(ハヤミ)郡にある町。別府灣の西北隅。鐵道九州大分線の一驛。商業盛んにして、日出城址あり。木下氏の舊藩地。

ひぢ 肘・肱・臂【名】㈠腕の關節の折れ曲る處、又その上下の部分。和名「臂、比知」㈡突き出で、且つ曲りて、臂の如き形をなせる物。㈢幕串(マクグシ)の上部に、幕の手を懸くるために打ち附けたる折釘。㈣ひぢてっぱう(肘鐵砲)の略。〔俚語〕

肘の懸(カカリ)【句】次條に同じ。太平記「祖父の圓喜が肘のかかりを、二刀刺して」

肘の節(フシ)【句】ひぢ(肘)㈠の關係の部分。ひぢしり。名義抄「肘、ヒヂノフシ・ヒテ・タブサカヒナ」

臂の指を使ふが如し【句】『漢書の賈誼傳に「令㆔海內之勢如㆓身之使㆑臂、臂之使㆑指、莫㆑不㆓制從㆒」とあり』意の如くならざるなき譬。

肘を掣(セイ)す【句】行動に、拘束を加ふ。制肘(セイチウ)す。「肘を掣して、跳梁する能はざらしむ」

臂を伸ぶ【句】僅かの勞力の形容。一擧手。三寶繪詞「阿彌陀佛……。一度、その名を唱ふれば……、臂を伸ぶる間に、十萬億の境を越えぬ」

肘を張る【句】ひぢばる（肘張る）㊂に同じ。太平記「勢を振ひ、臂を張らざれども、一度約をなして憑まれぬる後は、二心を存ぜず」同「武家奉公の族は、皆、國郡に臂を張る事は、何故ぞや」

肱を枕【句】次條の略。八笑人「淸貧を樂む器にあらねば、肱を枕の樂、その宅（ウチ）に居る事を嫌ひ」

肱を枕とす【句】『白居易の偶眠と題する詩に「放レ杯書案上、枕レ臂火爐前」とあり』己の肱を曲げて、枕に代用す。ひぢまくら（肱枕）參照。

肱を曲げて枕とす【句】そし（疏食）を見よ。

臂を折る【句】『白氏文集の新樂府中の新豐折臂翁と題する詩に本づきていふ』戰爭、しげくして、人人、徵發に堪へず。增鏡「ここも、かしこも、軍とのみ聞えて日數經るに、……、弓引く道もおぼおぼしき若侍などをさへぞ奉りける。げに、臂も折りぬべき世の中なり」

肱を折る【句】次條の略。折肱（セツコウ）。

三たび肱を折りて、良醫となるを知る【句】『左傳の定公十三年の條に「范氏・中行氏將レ伐レ公。齊高彊曰、三折レ肱知レ爲二良醫一、惟伐レ君爲二不可一、民弗レ與也」とあるに本づく。「折レ肱」は甚しく勤苦する義、「知レ爲二良醫一」とは、治療の法を知る義』人は、困難に遇へば、遇ふ程、經驗を長ずる形容。

ひぢ 泥・埿【名】どろ（泥）に同じ〔古語〕萬葉「ちりひぢの數にもあらぬ吾ゆゑに思ひわぶらむ妹がかなしさ」

びーち 美地【名】肥沃の地。

びーち 美池【名】うるはしき池。「良田・美池」

びーぢ 鼻痔【名】びじよう（鼻茸）に同じ。

ひぢーあがり 肱上・肘上【名】器械體操にて、鐵棒に兩肘又は片肘を掛けながら、足の力にて、體を前後に搖り動かし、後方に動く時の勢にて、上半身を鐵棒より高く伸し上ぐること。

ひぢーあめ 肱雨・肘雨【名】ひぢかさあめ（肱笠雨）に同じ。〔古語〕字鏡集「颰、ヒヂアメ・ヒヂカサアメ・オホアメ」

ひーぢい 曾祖父【名】ひぢぢ（曾祖父）に同じ。

ひぢーいた 肱板・肘板【名】『英 Bracket plate』普通、竪に置きて、二材を互に固著し、又は板を支ふるに用ふる、三角形の鋼鐵板。

ひーぢう【名】ひじやう（非上）に同じ。

ひぢーかき 泥搔【名】田の土をかきならすに用ふる農具。輮杷（ヒキザラヘ）と同樣にて、ただ木の柄を取り附けたる點に於て異なるもの。

ひぢーかけ 肱掛・肘掛【名】㊀肘を曲げて掛くること。㊁肘を靠せ掛くる處。㊂けふそく（脇足）に同じ。㊃ひぢかけまど（肱掛窓）の略。

ひぢかけーあがり 肱懸上・肘懸上【名】器械體操の一。肘にて鐵棒を握り、又は棚に臂を懸けて、體を引き掛け、その上に、引き上げ、吊し下げ、又は臂を立てなどすること。

ひぢかけーまど 肱掛窓・肘掛窓【名】『坐りながら肘を掛けて、外を見るほどの高さなるよりいふ』床の上、一尺二三寸ほどの高さに設けたる窓。でまど。

ひぢーがさ 肘笠【名】㊀肱を、頭に上げて、雨を凌ぐこと。**そでがさ**（袖笠）參照。㊁笠の一種なるべし。謠曲（蘆刈）「かづく袖笠・ひぢ笠の」東海道名所記「田の中には、早乙女（サヲトメ）どもおりたち、田蓑・ひぢがさ著て」

ひぢかさーあめ 肱笠雨・肘笠雨【名】『萬葉集の卷十一に「妹が門行き過ぎかねつ久方の雨も降らなむそを由（ヨシ）にせむ」とある歌の「ひさかた」を、六帖に「ひぢかさ」とせしより誤り傳へたるものなりとの說あれど、又、笠を取る暇も無きほどに俄かにて、肘を翳して凌ぐ雨の義かともいふ』にはかあめ。ひぢあめ。ひぢさめ。**そでがさあめ**（袖笠雨）參照。〔古語〕空穗「ひぢかさあめ降り、かみ鳴りひらめきて」

ひぢかた 土方【名】姓氏の一。淸和源氏より出づ。源滿仲の裔、宇野冠者賴治の孫親治の族、大和に居りて、大和源氏といひ、親治の孫秀治の土方太郎と稱せしを祖とし、その第十三世の孫信治、尾張國に下りて、斯波氏に仕へ、その子雄久（カツヒサ）、織田信雄に仕へて、片諱を賜はり、犬山城主となり、後、豐臣氏に從ひ、長子雄氏、關ケ原の役に、東軍に從ひて功あり、伊勢國菰野（コモ）の地に封ぜられ、貞享元年、一旦斷絕せしも、子孫、またその地を領し、明治維新後、子爵を授けらる。

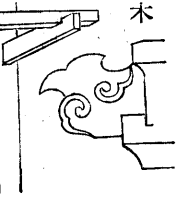
ひぢがたーせうくわせん 肘形消火栓・肱形消火栓【名】『英 Elbow hydrant. 肱を曲げたるがごとき形なるよりいふ』水管の行き止りたる處に使用する消火栓。

ひぢかたーとしざう 土方歲三【名】〔人〕舊幕府新撰組の士。武藏國多摩郡の人。文久三年、新選隊に入り、浮浪の徒を捕獲して功あり。明治元年、壯年者を率ゐ、官軍に抗し、後、榎本武揚の軍に合して、函館に據る。二年五月、五稜廓の戰に、銃丸に中りて死す。年三十五。

ひぢーがね 肘金・肱金【名】㊀鐵にて、折釘の如く曲げて作り、開戸の枠（ワク）に打ち附け、肘壺と相合ひて、開閉の用をなさしむる具。**ひぢづり**（肘釣）參照。㊁籠手（コテ）の肘に當る所に附けたる金。

ひぢーかむなぎ 肱巫【名】男の覡（カムナギ）なりといふ。〔古語〕古語拾遺「肱巫（今俗竈輪及米占也）」

ひぢーぎ 肘木・肱木【名】㊀〔建〕宮殿・神社などにて、上部の荷を承くる用をなす横木。**うでぎ**（腕木）參照。〔枅〕和名「枅、比知岐」㊁碾臼（ヒキウス）の把手。



（㊀ ひぢぎ）

ひぢきーのーなだ 比治木灘【名】〔地〕ひびきのなだ（響洋）の古稱といふ。萬葉「きのふこそ船出はせしかいさなとりひぢきのなだをけふ見つるかも」

ひぢきーばし 肘木橋・肱木橋【名】肘木を備へ、一端にて支ふる樣に造れる桁橋。うでぎばし。

ひーちく 肥筑【名】〔地〕肥前・肥後・筑前・筑後の四箇國の總稱。

びちーぐそ びち糞【名】びちびちと音して垂るる糞。びりぐそ。〔俚語〕

ひちーくどし ひち諄し【形二】ひちめきて、くどし。口やかましくくどし。

ひぢくる【動四他】種種の香を、蜜にひたす。今昔「野老（トコロ）・合薫（アハセタキモノ）を篡（ツクロ）ひひぢくりて」

ひぢーさめ 肘雨【名】ひぢあめ（肘雨）に同じ。名義抄「大雨、ヒヂサメ」

ひちーしや 被治者【名】〔法〕統治者に統治せらるる者、即ち臣民。統治客體。（統治者に對して）

ひぢーしり 肘尻【名】「肘（ヒチ）の節」に同じ。犬子集「上は下下は上にやなりぬらん（さいふ句に）膝にはかしら手にはひぢしり」

ひちーだい 筆臺【名】ひつだい（筆臺）に同じ。〔古語〕

ひぢーたま 臂玉・釧玔【名】くしろ（釧）に同じ。〔古語〕字鏡「玔、臂鐶也。女人挂二於臂上一也、釧同。比知玉」

ひぢーたわる 肘撓る・肱撓る【動四自】『かいたをり（搔撓）・たをり（撓）を見よ』道路のまがりかどをまがる。折れまがる。**ひぢをる**（肘折る）參照。狂言（磁石）「見附の町を一丁程行（イ）て、ひぢたわって、かどに、大きな藪がある」

ひぢーたをる 肘撓る・肱撓る【動四自】前條に同じ。狂言（磁石）「左へ ひぢたをらいで、右へ、きりりと廻れば」

ひーぢぢ 曾祖父【名】『ひは接頭語』そうそふ（曾祖父）に同じ。猿蓑（長和）「歲の夜や曾祖父を聞けば小手枕」

ひぢーぢか ひぢ近【名】身の丈低きこと。こづくり。一說に、昵近の義にて、げすげすしく、氣高からぬことともいふ。〔古語〕空穗「いと小く、ひぢぢかに、ふくらかに愛敬づきたまへり」源氏「頭つき・けはひ、あてにけだかきものから、ひぢぢかにあいぎやうづき」

ひーちぢめ 日縮【名】日限を短縮するこ

と。見た京物語「はやらぬ開帳など、日ちぢめの願あり」

ひぢ-つき 肘突・肱突【名】机などに凭りかかる時、その上に置きて、肘を突くための、小き蒲團。ひぢぶとん。

ひぢ-つき 肘付・臂付【名】ひぢもち(肘持)に同じ。

ひぢつき-しふ 臂突集【名】〔書〕きんえふわかしふ(金葉和歌集)の異稱。

ひぢ-つぼ 肘壺・肱壺【名】鐵にて、壺の如くに作り、開戸の扉に打ち附け、肘金と相合ひて、開閉の用に供する具。ひぢづり(肘釣)參照。一代女「寢間の戸閉(トザシ)を、外から、肱壺を打たせて」

ひぢつぼ-がね 肘壺鐵・肱壺鐵【名】前條に同じ。

ひぢ-づり 肘釣・肱釣【名】扉を開閉するに、肘金と肘壺とを取り附けてすること。

ひぢ-てつ 肘鐵・肱鐵【名】次條の略。〔俚語〕

ひぢ-でっぱう 肘鐵砲・肱鐵砲【名】㊀肘を張りて、突き退くること。ひぢてつ。ひぢ。㊁色を挑みたるをはねつくること。ひぢてつ。ひぢ。

ひぢ-どほる 肘通る・肱通る【動四自】ひぢたをる(肘撓る)の訛。狂言(右近左近)「これを眞直に行(イ)て、ひぢ通れば、すなはち御門ぢや」

ひぢ-はり 肘張・臂張【名】〔動〕はこねさんせうを(箱根山椒魚)に同じ。

ひぢ-ばる 肘張る・臂張る【動四自】㊀肘を張り出す。張肘(ハリヒヂ)をす。㊁氣勢を張る。ゐばる。〔古語〕榮花「しあやまつべき事かはと……、ひぢばらせたまふ」

ひち-ひち【貌】次條㊀に同し。〔古語〕落窪「腹、こぼこぼと鳴れば……、ひちひちと聞ゆるは、いかなるにかあらんと」

びち-びち【貌】㊀柔かなる物の、水にまじりて排出する音。ひちめく音。㊁次條に同じ。孕常盤「びちびち跳ねるすすき殿」㊂ちびちびに同じ。八笑人「又、びちびち始めるよ。まあ、相談のきまるまでは、尻へ踵(カカト)でも押附(オッツ)けて置かっし」

ぴち-ぴち【貌】魚などの、生生(イキイキ)とはねまはるさま。ばたばた。潑剌。

ひぢ-ぶくろ 臂袋【名】㊀臂に掛くる袋。㊁ふみぶくろ(文袋)に同じ。兵範記「貢士乘レ車、隨二身臂袋一」

ひぢ-ぶとん 肘蒲團・肱蒲團【名】ひぢつき(肘突)に同じ。

ひぢ-べんこう 肘辯口・肱辯口・臂辯口【名】張肘(ハリヒヂ)をして言ひ立つること。居丈高(ヰタケダカ)に言ひ爭ふこと。曾我會稽山「まばゆからぬ肱辯口」

ひぢ-まき 臂卷・釧【名】くしろ(釧)に同じ。〔古語〕和名「釧、比知萬岐」

ひぢ-まくら 肱枕【名】己の肱を曲げて、枕に代用すること。てまくら。

ひぢ-みそ 肘味噌・臂味噌【名】肘に附きたる垢。

ひ-ちん 日賃【名】一日の賃錢。日給。運歩色葉集「日賃、ヒチン」

ひ-ちん 披陳【名】意見をのぶること。開陳。披瀝。

ひ-ぢん 飛塵【名】とびあがる塵。

び-ぢん 微塵【名】みぢん(微塵)㊀に同じ。

ぴちん【貌】堅き物の相觸れ又は折れなどする時の音。

びぢん-せつ 微塵說【名】〔理〕びりふしせつ(微粒子說)に同じ。

ひち-めかす【動四他】ひちめくやうにす。ひちひちと鳴るやうにす。〔古語〕今昔「腹の鳴ることといとしきりなり。……板敷をおるるに、或は長押(ナゲシ)をおるるほどに、ひちめかして、垂れかけつ」

ひち-めく【動四自】㊀ひちひちと音す。犬筑波「合はする度にひちめきぞする(といふ句に)髮剃の砥臺の下なたまり水」㊁ひちくどく言ふ。やかましく言ふ。字鏡集「囂、ヒチメク・ヒヒメク・カマビスシ・コトゴトシ」

ひち-めんだう ひち面倒【名】ひち面倒臭きこと。

ひち-めんだうくさし ひち面倒臭し【形一】束縛を受けて、面倒くさし。ひちくどくして、面倒なり。

ひぢ-もち 肘持・臂持【名】張肘(ハリヒヂ)したる姿。ひぢつき。〔古語〕源氏「儀式官のねり出でたるひぢもち覺えて」

ひ-ちや 非茶【名】山城國宇治の茶。非の茶。(本茶に對して)

ひ-ちやう 日帳【名】にっきちやう(日記帳)に同じ。一代男「諸分(シヨワケ)の日帳」同「三月三十日の日帳を書いて送られける」

ひ-ぢやうぎ 樋定木【名】細長き溝を刻みたる定木。

ひちやう-きん 腓腸筋・腓膓筋【名】〔醫〕『羅 Musculus gastroenemius』下腿の後側、大腿骨に起りて、跗骨の後端に附ける、強大なる筋。內外の二頭ありて、踵を擧げ、且つ足を後方へ伸展せしむる作用をなす。こむら。ふくらはぎ。

ひ-ちやうばう 費長房【名】〔人〕支那後漢の代の仙人。

び-ぢやうふ 美丈夫【名】美しきますらを。立派なる男。

ひち-やかまし ひち喧し【形二】ひちめきてやかまし。ひちくどくやかまし。口やかまし。

びちや-くちや【貌】次條㊁に同じ。

びちや-びちや【貌】㊀水に濡れそぼちたるさま。びちよびちよ。びしよびしよ。㊁べちやべちやに同じ。

ぴちや-ぴちや【貌】㊀水の流れ動きて、物に當る音。ひたひた。㊁續けざまに、物の扁き部分を打つ音。

ぴちやん【貌】ぴちやりに同じ。

びちやり【貌】次條㊀に同じ。

ぴちやり【貌】ぴしやりに同じ。

ひ-ぢゆう 比重【名】〔理〕『英 Specific gravity』標準と定めたる或物質と試驗に供する他の物體との、任意同容積の質量の比。固體と液體とにありては、普通攝氏四度の蒸餾水を標準とし、氣體にありては、空氣を標準とするを常とすれども、時としては、水・水素・酸素などをも用ふ。又、多くの物體は、溫度によりて、その體積を增減するが故に、必ず攝氏何度に於ける比重と註するを要す。異重。みつど(密度)㊁・ふりよく(浮力)參照。

び-ちゆう 鼻柱【名】はなばしら(鼻柱)に同じ。

び-ちゆう 微忠【名】㊀わづかの忠義。㊁自己の忠義の謙稱。

び-ちゆう 微衷【名】びい(微意)に同じ。

び-ちゆうかく 鼻中隔【名】〔醫〕はなばしら(鼻柱)に同じ。

ひぢゆう-けい 比重計【名】〔理〕『英 Hydrometer』液體の比重を測るに用ふる器械。最も普通なるは、ゲエルサック(Gay Lussac)の發明に係り、度を盛りたる長き硝子管の底部に、水銀を入れて、液中に沈むやうにし、度の盛り方は、最初、これを攝氏四度の蒸餾水中に入れて、沈みし部分の容積を百等分し、上部にも、同じ割合の度を盛る。なほ、ニコルソン(Nicholson)比重計等、數種あり。うきばかり。

ひ-ぢゆうだい 非重代【名】譜代奉公の者に非ずして、自己一代の成上(ナリアガリ)者。著聞「家隆卿……非重代の身なれども」正統記「登用せられんに、人の謗あるまじき程の器ならば、今とても、非重代に依るまじき事とぞ覺えはべる」

ひぢゆう-びん 比重瓶【名】〔理〕『英 Pycnometer』比重計の一。液體又は砂の如き細かき物質の比重を測るに用ふる硝子製の瓶。形狀種種あれども、普通なるは、細孔ありて、密合する硝子製の栓あるもの。先づ蒸餾水を瓶に充たして、その重量を知り、次に、比重を知らんとする物を充たして、その重量を知り、かくて、雙方より、物を充たさざる瓶の重量を減じて得たる差は、その物の、水に對する比重なりと知るなり。

ひ-ちよ 匕箸【名】さじと、はしと。卽ち食物を口に運ぶ器。

ひ-ぢよ 婢女【名】ひし(婢子)に同じ。

び-ぢよ 美女【名】㊀美貌の女。美人。㊁『容貌の美しきを採用するよりいふ』ひじやう(非上)に同じ。〔采女〕

美女は惡女の仇(アタ)【句】『史記の外戚世家に「美女惡女之仇、豈不レ然哉」とあり』美女は、醜き女に妬み恨まる。〔諺語〕武道傳來記「美女は惡女の仇と申し傳へし」

美女は命を斷つ斧【句】『「伐性(バツセイ)の斧」を見よ』色道に溺るる者は早死す。〔諺語〕一代女「美女は命を斷つ斧と、古人もいへり」

美女は醜婦の仇（アタ）【句】『說苑の尊賢篇に「美女醜婦仇也」とあり』「美女は惡女の仇」に同じ。〔諺語〕

ひーぢよう【名】ひじやう（非上）に同じ。

びぢよーがね 美女金・鉸具【名】『みづをがね（水緖金）の訛』かこがしら（鉸具頭）に同じ。

ひーちよく 祕勅・秘勅【名】みっちよく（密勅）に同じ。

びぢよーざくら 美女櫻【名】〔植〕馬鞭草（クマツヅラ）科に屬する多年生或は一年生の草。莖は地上を蔓延し、上方に生長すること一尺餘。葉は長卵形にして、大鋸齒を有し、對生し、花は盆狀の合瓣花にして、紅色・淡紅色など種種あり。原產地は南米ブラジル。我國にても、觀賞用として栽培す。しきざくら。はながさ。

ひぢよーすう 被除數【名】〔數〕『英 Dividend』除法に於ける、割らるる數。例へば、250÷5=50に於ける250など。實（ジツ）。（除數に對して）

びぢよーなでしこ 美女撫子【名】〔植〕あめりかなでしこ（亞米利加撫子）に同じ。

びちよーびちよ【貌】水に濡れそぼちたるさま。びしよびしよ。びちやびちや。

ひちーら 饆饠【名】古、節會（セチエ）などの時、䭔子（ツヰシ）・黏臍（テンセイ）と共に、餲（キツ）の御膳に供せし、一種の唐菓子。餅にて作りて、表を燒き焦し、薄く扁く、恰も石決明（アハビ）のごとき形に作る。ひつら。ひら。和名「饆饠、比知良」

ひちーりき 篳篥・觱篥【名】形、笛に似て、竪に吹く、一種の管樂器。表に七孔、裏に一口あり。支那より傳來し、康保頃より既に我國に行はる。歌口に插す舌には、攝津國鵜殿（ウドノ）の葦を賞用せり。和名「篳篥、比知理岐」

（ひちりき）

ひちりきーし 篳篥師【名】古、雅樂寮にて、篳篥の吹奏を敎へし人。

ひちりきーせい 篳篥生【名】古、雅樂寮に屬して、篳篥の吹奏を學修せし生徒。

ひちりきーふき 篳篥吹【名】篳篥を吹く人、又その名手。盛衰記「市允茂光と云ふ篳篥吹あり」

ひぢりーこ 泥・埿【名】**ひぢ**（泥）に同じ。和名「泥、比知利古」

ひーぢりめん 緋縮緬【名】深紅色の縮緬。

緋縮緬、虎の皮より恐ろし【句】『緋縮緬は、若き女の腰卷、虎の皮は、鬼の犢鼻褌（フンドシ）』美女に溺るる害は、鬼に捕へらるるよりも恐るべし。〔諺語〕

ひぢーわた 肘綿【名】綿を、手の肘に掛けて廣ぐること、又その廣げたる綿。津國女夫池「綿をつむには、口傳も入らず、手品一つの肘綿や、引いて伸ばして」

ひぢーをなは 絭【名】**たすき**（襷）に同じ。〔古語〕字鏡集「絭、ヒヂヲナハ」

ひぢをりーしき 臂折敷【名】臂を曲げたるやうに、高麗緣（カウライベリ）を横に折りて敷くこと。貫首祕鈔「上皇御前座。一人在二座上一之時、頭不レ著二公卿座末一。若其座臂折敷之時、頭接レ之無レ憚」

ひぢーをる 肘折る・肱折る【動四自】肘を折りたる如く曲る。**ひぢたわる**（肘撓る）參照。〔古語〕枕「ひぢをりたる廊」

ひつ 櫃・匱【名】大形にして、上方に開口し、蓋を具へたる匣。韓櫃（カラビツ）・長櫃・小櫃・折櫃などあり。紀「匱、ヒツ」和名「櫃、比豆」

櫃を買ひて、珠を遺（ノコ）す【句】「玉を還して、櫃を留む」に同じ。〔諺語〕

ひつ 弼【名】㊀古の彈正臺の次官。定員は、初一人なりしが、弘仁十四年より、大弼一人、少弼一人を置けり。㊁紫微中臺の次官。定員は大弼二人、少弼三人。㊂明治二年設置の彈正臺の次官。勅任。後には、大弼・少弼の二階に分たれたり。

ひつ 畢【名】〔天〕二十八宿の一。西方に位す。あめふりぼし。和爾雅「二十八宿…畢、アメフリボシ・ヒツ」

ひつ 蹕【名】次條を見よ。

蹕を駐（ト）む【句】『蹕は、貴人通行の時、路上の人を拂ひのくる義より出づ』貴人、他行して、或地にとどまる。

ひつ 匹【名】**ひつぐう**（匹偶）㊁に同じ。

ひつ 必【名】次條を見よ。

必とす【句】必ずそのやうにす。鶉衣「袋は、入る物に隨って、己が方圓を必とせず」

ひっ 引【接頭】**ひき**（引）の音便。「ひっ重ぬ」「ひっ捕ふ」

ひーづ 氷頭・冰頭【名】鮭・鯨などの頭蓋骨。白色・透明にして、脆く柔く、刻みて食ふ。かぶらぼね。〔古語〕和名「氷頭、比豆」

ひーづ 比徒【名】徒罪（ヅザイ）に比して處斷すること。大寶律「凡除名者比徒三年、免官者比徒二年、免官居官者比徒一年」

ひづ 漬づ・沾づ【動四自】次條に同じ。〔古語〕古今「聲はして淚は見えぬ時鳥わが衣手のひづをからなん」

ひづ 漬づ・沾づ【動上二自】**ひたる**（浸る）に同じ。〔古語〕蜻蛉「袖ひづる時をだにこそ嘆きしか身さへしぐれのふりも行くかな」

ひづ 漬づ・沾づ【動下二自】**ひたす**（浸す）に同じ。〔古語〕土佐「天雲の遙かなりつる桂川袖をひでても渡りぬるかな」

ひーづ 秀づ【動下二自】**ひいづ**（秀づ）に同じ。〔古語〕字鏡「秝稜、二字、保爾比豆」

ひつーい 筆意【名】運筆の際の心意の狀態。ふでづかひ。

ひーついで 日次【名】**ひなみ**（日次）に同じ。〔古語〕源氏「御服（ブク）も、この月には脫がせたまふべきを、日ついでなんよろしからざりける」狹衣「とみには、日ついでもよろしからず侍りしかば」

ひーつう 悲痛【名】かなしみいたむこと。甚しく悲哀なること。

ひつーえう 必要【名】是非とも要用なること。無くてはならぬこと。必用。必須。切要。

必要は發明の母【句】『英 Necessity is the mother of invention』必要を感ずれば、自然に發明するに至る。〔諺語〕

ひつえうーきくわん 必要機關【名】〔法〕國家又は法人の存在に必要なる機關。

ひつえうてきーきようはん 必要的共犯【名】〔法〕『獨 Notwendige Teilnahme』數人共同せざれば成立するを得ざる共犯。即ち內亂罪・騷擾罪・決鬪罪の類。（任意的共犯に對して）

ひつえうーひ 必要費【名】事物の存留・持續に缺くべからざる費用。

ひつえうーひん 必要品【名】必要なる品物。

ひつえうーべんごにん 必要辯護人【名】〔法〕**きやうせいべんごにん**（强制辯護人）に同じ。

ひっーか 筆下【名】物を書く筆の先。

筆下、花を生ず【句】「筆頭、花を生ず」に同じ。

ひっーか 筆架【名】筆を載せかけおく臺。ふでかけ。筆格。蕪村「名月やわれを筆架の影法師」

ひっーかい 筆海【名】**すずり**（硯）の異稱。

ひっーかう 筆耕【名】『筆にて耕す義、即ち筆を農耕に代ふる義』賃金を得て、寫字すること、又その人。

筆耕硯田（ケンデン）【句】『筆にて、硯の田を耕す義』文筆によりて生活すること。

ひっーかがみ 引屈【名】**ひきかがみ**（引屈）の音便。

ひっーかかり 引掛・引懸【名】㊀ひっかかること、又その處。㊁血筋の關係。㊂或人の、或事件に對する關係。

ひっーかかる 引掛る・引懸る【動四自】㊀**ひきかかる**（引掛る）の音便。㊁詰問の論據を見出し得。㊂知らずに關係す。うかと釣り込まる。和合人「へん、とんだ羽目へひっかかるもんだ」㊃出先（デサキ）にて、知人の處に立ち寄る。

ひっーかき 引搔【名】ひっかくこと、又ひっかきたるための疵痕。

ひっかきーちらす 引搔散す【動四他】㊀引き搔くやうにして、散亂せしむ。㊁所嫌はず引き搔く。和合人「猿が、人眞似にひっかきちらす恥しさ」

ひっかきーまはす 引搔廻す【動四他】㊀物の全面に亙りて引き搔く。㊁事の全局面を、意のままに攪亂す。

ひっーかく 筆格【名】**ひっか**（筆架）に同じ。

ひっーかく 引搔く【動四他】『**ひっ**（引）は接頭語』**かく**（搔く）を強めていふ語。

ひっ-かく 引掛く・引懸く【動下二他】㊀ひきかく(引掛く)の音便。猿簑(去來)「ひっかけて行くや吹雪の豐島蓙(テシマゴザ)」㊁つりこむ。あざむく。たらす。㊂掛代金又は借金などを拂はず。㊃酒を、一いきに飲む。ぐいのみに飲む。あふる。博多小女郎波枕「石御器(イシゴキ)に一二杯、肝の束(タバネ)へ、諸白(モロハク)を引かっけた薩摩二歳」八笑人「茶碗で二三盃引っかけて、先へ出よう」

ひっ-かく 引闕く【動四他】**ひきかく**(引闕く)の音便。

ひっ-かくす 引隱す【動四他】**ひきかくす**(引隱す)の音便。

ひっ-かけ 引掛【名】㊀ひきかけ(引掛)の音便。㊁**ひっかけむすび**(引掛結)の略。㊂花合(ハナアハセ)㊁にて、己の手に二枚あるものを取りて、あとの札を、己の所に來るやうにすること。㊃さぎし(詐欺師)を云ふ。〔越中國の方言〕

ひっかけ-おび 引掛帶【名】ひっかけ結にしたる帶。

ひっかけ-がはら 引掛瓦【名】屋根瓦の墜落を防ぐめたに、その一端に設けたる突起を、葺下地(フキシタヂ)に豫め打ち附けたる瓦棧に引き掛くるやうにしたるもの。

ひっかけ-さんがはら 引掛棧瓦【名】瓦棧に引き掛くる棧瓦。

ひっかけ-づり 引掛釣【名】鮎の獵法の一。箱眼鏡(ハコメガネ)をかぶり、河中に入りて、鮎の行動をすかし覗て、錨鈎(イカリバリ)にて引き掛け上ぐるもの。

ひっかけ-むすび 引掛結【名】女の帶の、ただ一回締めたるのみにて、あとは、垂しおく結び方。即ち猫じやらしに似て、垂を一層長くしたるもの。ひっかけ。(御太鼓(オタイコ)に對して)

ひっ-かさぬ 引重ぬ・引襲ぬ【動下二他】『ひっ(引)は接頭語』**ひきかさぬ**(引重ぬ)の音便。醒睡笑「ほのぼのとあかねの小袖ひっかさね島がくれ行く尻をしぞ思ふ」

ひっ-かじめる 引っかじめる【動下一他】**おっかじめる**(押っかじめる)に同じ。八笑人「へん、卽効紙を張った睾丸(キンタマ)を見るやうに、ひどくひっかじめるぜ」

ひっ-かたぐ 引擔ぐ【動下二他】**ひきかたぐ**(引擔ぐ)の音便。聖德太子繪傳記「門の扉をひっかたげ」

ひっ-かつぐ 引擔ぐ【動四他】『ひっ(引)は接頭語』㊀前條に同じ。曾我會稽山「大の男をひっ擔ぎ」㊁**かつぐ**(擔ぐ)㊂を強めていふ語。八笑人「人をすっぱりひっかついだが、何と、面白くかついだぢやあねえか」

ひっ-かづく 引被く【動四他】**ひきかづく**(引被く)の音便。曾我會稽山「荒れたる庭の萩・薄引っ被いてぞ隱れゐる」

ひつ-かは 櫃川【名】〔地〕山城國紀伊郡堀内(ホリウチ)村と同宇治郡宇治村との境界を流れて、宇治川に注ぐ長瀨川の古稱。水源は北山科(キタヤマシナ)の小關(コゼキ)。もと、この川の橋邊は、奈良街道に於ける伏見以東の宿驛なりしが、明治二十二年、郡界と定む。四宮(シノミヤ)川。新勅撰集「都出でて伏見を越ゆるあけがたはまづ打渡す櫃川の橋」

ひっ-かぶる 引被る【動他四】**ひきかぶる**(引被る)の音便。

ひっ-かへ 引換・引替【名】**ひきかへ**(引換)の音便。

ひっかへ-けん 引換券・引替券【名】**ひきかへけん**(引換券)の音便。

ひっ-かへし 引返【名】**ひきかへし**(引返)の音便。一代女「八丈袖のひっかへし、素足(スアシ)に、藁草履はき」五人女「下に白ぬめのひっかへし、中に淺黄ぬめのひっかへし、上に樺つめのひっかへし」

ひっ-かへす 引返す【動四自】**ひきかへす**(引返す)の音便。保元「右の腕(カヒナ)を打落されて、引返す」

ひっ-かへる 引換へる・引替へる【動下一他】**ひきかふ**(引換ふ)㊀の訛。

ひっ-かん 筆翰【名】㊀**ふで**(筆)に同じ。㊁手紙の文章を書くこと。筆札。

ひっ-からぐ 引紮ぐ【動下二他】『ひっ(引)は接頭語』**からぐ**(紮ぐ)を強めていふ語。心中宵庚申「裾七の圖まで引っからげ」㊁**ひきまとむ**(引纏む)に同じ。本朝櫻陰比事「家内ひっからげて、身代百目が物は無かり」

ひっ-からまる 引絡まる【動四自】『ひっ(引)は接頭語』**からまる**(絡まる)を強めていふ語。

ひっ-からむ 引絡む【動四自】『ひっ(引)は接頭語』㊀**からむ**(絡む)を強めていふ語。㊁複雜なる關係を有す。こみいる。浮世風呂「雙方(ドツチラ)にも、引っからんだ綾は無(ネ)えから」

ひっかり【貌】**ぴかり**に同じ。聖德太子繪傳記「眼の光……見かへれば、又ひっかり」

ぴっかり【貌】前條に同じ。

ぴっかり千兩【句】晴天なる時は、多大の利益を得る職業の者の、その晴天を喜びていふ語。〔諺語〕

ひっかり-ひっかり【貌】前條の語を重ねていふ語。ぴかぴか。狂言(針立雷)「雷も頻に鳴るは、……ひっかりひっかり」

ひつき 斗【名】**さ**(斗)㊄に同じ。

ひ-つき 日月【名】日と月と。つきひ。日月(ジツゲツ)。萬葉「あめつち日月とともも足りゆかむ神の御面(ミオモ)と」

ひ-つき 氷調・氷調【名】次條を見よ。

氷調の祭【句】「氷(ヒ)の祈」に同じ。謠曲(氷室)「氷調の祭とは、如何なる事にあるやらん」

ひ-つき 火附【名】火の燃え附くこと、又その工合。つき。和合人「私(ツシ)が莨(タバコ)は、しめりくさって、と火附が惡いさかひ」

ひっ-き 筆記【名】㊀筆にて記すこと、又その記したる物。筆寫。㊁**ひっきちやう**(筆記帳)の略。

ひつ-ぎ 棺・柩【名】『**ひさぎ**(棺)の轉』**くわん**(棺)に同じ。紀「棺槻、ヒツギ」

ひ-つぎ 日次【名】㊀日ごと。毎日。ひなみ。萬代「君がため日つぎに立つる錦木のした朽つばかりなりにけるかな」㊁毎日供進する物。日のみつぎ。拾遺「朝まだききりふの岡に立つ雉は千代の日次の初なりけり」

日次の狩場【句】日次の御狩をする場所。新六「よそにやは日次の狩場立つ雉のしばしの程をありと頼まん」

日次の御狩(ミカリ)【句】日次の料に供する贄を獲るための狩。日なみの御狩。堀太「吹きわたす比良の吹雪の寒くとも日次の御狩せでやまめやは」

ひ-つぎ 日嗣【名】日神(ヒノカミ)の詔命にて、大業を承け嗣ぎて知ろしめすこと。**あまつひつぎ**(天津日嗣)參照。續千載「天地の開けそめける神代より絶えぬ日つぎの末ぞ久しき」正統記「天智、御兄にて、先づ日嗣を受けたまひ」

日嗣の君【句】次條に同じ。

日嗣の御子(ミコ)【句】皇太子の尊稱。日の御子。東宮。春の宮。儲君。紀「太子、ヒツギノミコ」

日嗣の宮【句】前條に同じ。

ひ-つぎ 火繼【名】㊀出雲の國造(クニノミヤツコ)の、新たに統を嗣がんとする時、上古は、同國八束(ヤツカ)郡熊野村なる熊野神社、後世は、同郡大庭(オホバ)村なる神魂神(カモシ)神社に赴き、國造家の寶物たる火鑽臼(ヒキリウス)・火鑽杵を以て、神火を受け繼ぐ儀式。この神火を以て、齋食を炊ぎ、熊野神・大國主神を始として、國内の諸神に供し、新國造も相嘗(アヒナメ)をなしたる上にて、統を嗣ぐ。㊁出雲の國造の代替(ダイガハリ)。

びっき【名】『疋の義にて、錢をいふかとも、又、**みき**(神酒)の訛かともいふ』神社へ參詣する旅人を、小兒の、途中に要して、錢を乞ふ時の語。

びっき【名】**あかご**(赤兒)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

びっき【名】〔動〕**ひき**(蟇)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

ぴっき(葡 Pik)【名】**ぺんき**に同じ。

ひっき-しけん 筆記試驗【名】問題の答案を筆記して差し出さしむる試驗。(口頭試驗に對して)

ひっき-ちやう 筆記帳【名】物を書きつけおく帳簿。のおとぶっく。筆記。

ひっ-きやう 畢竟【副】つまるところ。つまり。結局。

ひっきやうする-に 畢竟するに【副】前條に同じ。

ひっ-きり 引切・挽切【名】**ひききり**(挽切)㊀の音便。

ひっきり-なし 引切無【名】**ひききりなし**(引切無)の音便。

ひっ-きる 引切る【動四他】**ひききる**(引切

ひっ-きる 挽切る【動四他】**ひききる**（挽切る）の音便。

ひっ-きれる 引切れる【動下一自】『ひっ（引）は接頭語』**きる**（切る）を强めていふ語。

ひ-つく 干附く・乾附く【動四自】乾きて引きつく。ひからぶ。こびりつく。（諸藝太平記）「舌が干ついた。水を一盃」

びっく【貌】**びっくり**㊀に同じ。（津國女夫池）「雷が落ちかかっても、びっくとも思はぬ」

ひつ-ぐう 匹偶・匹耦【名】㊀なかま。たぐひ。あひて。對手。匹儔。匹敵。㊁『詩經の鄭風溱洧篇の箋に「男女相棄、各無二匹耦一」とあり』つれあひ。めをと。匹儔。匹敵。

ひっ-くくる 引括る【動四他】**ひきくくる**（引括る）の音便。

ひっ-くじく 引挫く【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**くじく**（挫く）を强めていふ語。（八笑人）「右の手っ首はひっ挫く。今夜は、とても彈けねえ」

ひっ-くはふ 引加ふ【動下二他】**ひきくはふ**（引加ふ）の音便。

ひっ-くはへ 引加【名】㊀ひっ加ふること。㊁**えんざ**（緣坐）に同じ。

ひっ-くむ 引組む【動四他】**ひきくむ**（引組む）の音便。（謠曲（敦盛））「馬上にて引っ組んで」

びっ-くら【貌】次條に同じ。

びっ-くり【貌】㊀不意又は意外の出來事に驚くさま。びく。びくり。びっく。びっくら。［吃驚］（俗曲（狐忠信））「忠信さん、わたしや、びっくりしたはいな」㊁辛うじて氣息を保ち、微かに動くさま。びくびく。びくり。（曾我會稽山）「許せ許せと、大聲上げて吠えたれども、びっくりとも動かせず」

びっくり仰天【句】非常に驚くこと。

ひっくり-かへす 引繰返す【動四他】くつがへす。うらがへす。顚覆せしむ。

ひっくり-かへる 引繰返る【動四自】くつがへる。うらがへる。顚覆す。

びっくり-がほ 吃驚顏【名】びっくりしたる顏つき。驚きたる顏つき。（津國女夫池）「伺候の諸武士、びっくり顏」

びっくり-しやっくり【貌】**びくしやく**に同じ。

びっくり-ばこ 吃驚箱・吃驚匣【名】小さき箱の、蓋をはづせば、中より、犬・猫などの形の物、ばね仕掛にて、俄かに高く現れ出づるやうにせる玩具。

ひっくり-ひっくり【貌】**ひくひく**に同じ。

びっくり-びっくり【貌】**びくびく**に同じ。

ひっ-くるまる 引括まる【動四自】『ひっ（引）は接頭語』**くるまる**（括まる）を强めていふ語。

ひっ-くるみ 引括【名】**ひきくるみ**（引括）の音便。

ひっ-くるむ 引括む【動四他】**ひきくるむ**（引括む）の音便。

ひっ-くるむ 引括む【動下二他】前條に同じ。

ひっ-くるめ 引括【名】**ひきくるめ**（引括）の音便。

ひっ-くわ 筆華【名】『「筆頭、花を生ず」を見よ』うつくしき詩歌・文章。

ひっ-くわく 筆畫【名】文字の畫。字畫。

ひっ-くわん 筆管【名】筆の軸。ふでづか。

ひ-つけ 火附【名】人家などに、火をつくること、又その事をなしたる罪人。放火。

火附の札（フダ）【句】「火の札」に同じ。（油糟）「是非共に又も來らば打ちやせん（といふ句に）火つけの札の主を突き出せ」

ひ-づけ 日附【名】文書又はその他の物に附記して、その作成又は呈出・送付などの日時を示すこと、又その文字。

ひ-づけ 日著【名】旅行して、その日の中に、目的の地に達すること。

ひっ-けい 必携【名】必ず携ふべきこと、又それほどの價値あること。

ぴっけえ（英 Pickey）【名】表面に凹凸ある、主として、木綿の織物。英國の創製に係り、寢臺のおほひ、洋服のチョッキなどに用ふ。

ひづけご-ていきばらひ 日附後定期拂【名】［商］『英 Payable on a fixed day after date』爲替手形又は約束手形の支拂期日を、振出の日附後、何日目又は何箇月目と定むること。

ひつけ-たうぞく-あらため 火附盜賊改【名】次條の略。

ひつけ-たうぞく-あらため-やく 火附盜賊改役【名】德川幕府の職制の一。與力・同心を率ゐて、江戸市中を巡廻し、火災の豫防、盜賊の逮捕、博徒の考察等を掌りしもの。寛文中に設け、定員一人又は二人、大抵は先手頭の兼職たりき。盜賊火方役。

ひづけ-へんかう-せん 日附變更線【名】［地］『英 Date line』船舶の、これを通過する時、東航する船（即ち地球自轉の方向を追ふ船）は、同一日を重算し、西航する船（即ち地球自轉の方向と反對に進む船）は、一日減じて、航海日誌の日附を一致せしむる基線。通常、經度百八十度の子午線を、これに當つ。地球上の一日、即ち二十四時間は、その一回の自轉によりて生じ、從って、地球上の各地は、經度の異なる每に、時間を異にするが故に、東航の船と西航の船との日子を一致せしむるために定む。**ちはうじ**（地方時）參照。

ひっ-けん 筆硯・筆研【名】㊀ふでと、すずりと。㊁文字を書くこと。文筆。「筆硯を事とす」「筆硯多忙」㊂書簡文にて、文筆に從事する者の起居などにいふ語。「筆硯益（マスマス）御多祥」

びっ-こ 跛【名】**ちんば**（跛）に同じ。

跛を引く【句】ちんばにて歩む。

びっ-こ【名】馬の兒を云ふ。［近江國の方言］

ひっ-こう 筆工【名】㊀筆を製造する職人。筆匠。筆師。㊁**ひっしや**（筆者）に同じ。（諸藝太平記）「筆工は、當時の名人牧村伊六に、祐筆を取らせ」

ひっ-こう 筆功【名】習字の年功。（運歩色葉集）「筆功、ヒッコウ」

ひっ-こかす 引轉す【動四他】**ひきこかす**（引轉す）の音便。（一代女）「男引っこかして」

ひっこき-がみ 引扱髮【名】**ひっこきわげ**（引扱髻）に同じ。［京都・大阪の語］

ひっこき-まはる 引扱廻る【動四自】あちこちと廻るを罵りていふ語。（聖德太子繪傳記）「軍立（イクサダテ）してひっこき廻る面さ」

ひっこき-わげ 引扱髻【名】鬢・髱（トツ）を出ださざる髮の總稱。［京都・大阪の語］

ひっ-こく 引扱く【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**こく**（扱く）を强めていふ語。

ひっ-こくる 引っこくる【動四他】**ひきこくる**（引きこくる）の音便。

ひっ-こし 引越【名】**ひきこし**（引越）㊁の音便。

ひつ-こし【形一】**しつこし**の轉訛。（和合人）「もういいぢやあねえか。ひっこいぞ」

ひっこし-いはひ 引越祝【名】**ひきこしいはひ**（引越祝）の音便。

ひっこし-がゆ 引越粥【名】**ひきこしがゆ**（引越粥）の音便。

ひっこし-ぐるま 引越車【名】**ひきこしぐるま**（引越車）の音便。

ひっこし-さき 引越先【名】**ひきこしさき**（引越先）の音便。

ひっこし-そば 引越蕎麥【名】**ひきこしそば**（引越蕎麥）の音便。

ひっこし-にもつ 引越荷物【名】**ひきこしにもつ**（引越荷物）の音便。

ひっこし-ぶるまひ 引越振舞【名】**ひきこしぶるまひ**（引越振舞）の音便。

ひっこし-れう 引越料【名】**ひきこしれう**（引越料）の音便。

ひっ-こす 引越す【動四自】**ひきこす**（引越す）の音便。

ひっ-こする 引擦る【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**こする**（擦る）を强めていふ語。（浮世風呂）「背中をひっこすってやらう」（和合人）「額を、疊でひっこすったから、實に目がくらんだぜ」

ひっ-こづく 引小衝く【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**こづく**（小衝く）を强めていふ語。

ひっ-こなす 引熟す【動四他】**ひきこなす**（引熟す）の音便。（聖德太子繪傳記）「ひっこなす文章も、誠の夫婦（メヲト）、戀を離れし戀の底」

ひっこ-ぬき 引拔【名】ひっこぬくこと、又ひっこぬきたる物。ひきぬき。

ひっこ-ぬく 引拔く【動四他】**ひきぬく**（引拔く）を强めていふ語。（八笑人）「物言はずひっこ拔いてやられる所だ。おお、怖しい」

ひっ-こます 引込ます【動四他】**ひきこます**（引込ます）の音便。

ひっ-こみ 引込【名】㊀ひっこむこと。ひきこみ。（浮世風呂）「あの女に入れ上げて、やうやう內へ引込の、晝も簞笥の環が鳴るといふ世界さ」㊁役者などが、舞臺より樂屋にひっこむ時の所作。（八笑人）「ちと中

通(チユウドホリ)の引込めくが」 ㊂ひっこみしんざう(引込新造)の略。俗曲(北洲)「露うちかけの菊がさね、菊のませたる禿(カムロ)菊、いつか引込・突出(ツキダシ)の約束堅き神無月」 ㊃賣値の、原價より減ずること。くひこみ。損失。 ㊄機を織るに、經絲(タテイト)を、綜絖又は宇麻絲などに通ずること。 ㊅麴を製造するに、蒸米を、室(ムロ)に搬入すること。

ひっこみ-さんぢゆう 引込三重【名】三重の一。俳優が舞臺より退く時に奏するもの。浮世床「尻ひっからげ、ぎっくりをして、引込三重を、口でいひながら」

ひっこみ-じあん 引込思案【名】ひきこみじあん(引込思案)の音便。

ひっこみ-しえ 引込紫衣【名】淨土宗の十八檀林の內、隱居して、紫衣を著るを許さるること。芝區西久保(ニシノクボ)の天德寺、深川區の靈巖寺の如き、これなり。千紅萬紫「引込紫衣の隱居となりては」

ひっこみ-しんざう 引込新造【名】『表立ちたる役をせぬよりいふ』江戶の遊廓にて、禿(カブロ)の、十四五歲に達して、女となり、始めて客に接するより、突出(ツキダシ)として、一人前の遊女となるまでの間。この間は、なほ、おの字名を用ひ、內證(即ち樓主)の許に起居せしめられ、服裝は振袖なり。ひっこみ。げんじな(源氏名)參照。

ひっこみ-しやう 引込性【名】ひきこみしやう(引込性)の音便。

ひっこみ-しゆぎ 引込主義【名】ひきこみしゆぎ(引込主義)の音便。

ひっこみ-どころ 引込所【名】引きこもる所。隱退する場所。胸算用「丹波に、大分田地買ひおき、引込所拵へけるは」

ひっ-こむ 引込む【動四自】㊀ひきこむ(引込む)の音便。娼妓絹籭「いよいよ懷姙にちがひなく、近近にひっこみ、寮へ行(イ)って脫(オ)すとの事」 ㊁物を賣りて得たる金、原價に達せず。缺損となる。ひけが立つ。くひこむ。

ひっ-こむ 引込む【動四他】ひきこむ(引込む)の音便

ひっ-こめる 引込める【動下一他】ひきこむ(引込む)の訛。

ひっ-こもり 引籠【名】ひきこもり(引籠)の音便。

ひっ-こもる 引籠る【動四自】ひきこもる(引籠る)の音便。

ひっ-ころばす 引轉ばす【動四他】ひきころばす(引轉ばす)の音便。八笑人「おい、早く引っころばしてくれねえか」

ひっ-さい 筆才【名】ぶんさい(文才)に同じ。

ひっ-さき-がみ 引裂紙【名】ひきさきがみ(引裂紙)の音便。

ひっ-さき-ばおり 引裂羽織【名】ぶっさきばおり(打裂羽織)に同じ。

ひっ-さき-もとゆひ 引裂元結【名】ひきさきもとゆひ(引裂元結)の音便。

ひっ-さく 筆削【名】『史記の孔子世家に「孔子爲ニ春秋一、筆則筆、削則削」とあり』書き加ふべきは書き加へ、削り去るべきは削り去ること。添削。訂正。

ひっ-さく 引裂く【動四他】ひきさく(引裂く)の音便。

ひっ-さぐ 引下ぐ・提ぐ【動下二他】ひきさぐ(引下ぐ)㊀㊁の音便。謠曲(熊坂)「例の長刀ひっさげつつ」

ひっ-さげ 提刀【名】『腰にさすことなく、手に提ぐる物の義』うちがたな(打刀)に同じ。運步色葉集「提刀、ヒッサゲ」

ひっ-さつ 筆札【名】㊀筆と紙と。筆牘。㊁ひっかん(筆翰)㊁に同じ。

ひっ-さばく 引捌く【動四他】つよく裂く。引き裂く。さく。さばく。

ひっ-さん 筆算【名】㊀さんぴつ(算筆)に同じ。㊁算用數字を書きて行ふ算術。洋算。(珠算に對して)

ひっ-さらふ 引浚ふ・引攫ふ【動四他】『ひっ(引)は接頭語』さらふ(浚ふ)を强めていふ語。

ひっ-さらふ 引浚ふ【動下二他】『ひっ(引)は接頭語』㊀前條に同じ。㊁悉く寄せ集む。夕霧阿波鳴渡「道頓堀の若衆方・女方引っ浚へても、けもない事」

ひっ-し 筆紙【名】㊀筆と紙と。㊁文章。文言(モンゴン)。「筆紙に盡し難し」

ひっ-し 必死【名】㊀死を決してなすこと。死力を盡すこと。しにものぐるひ。㊁萬死に一生の見込なきこと。生命に關するほどに危險なること。太平記「必死の鏃に死を遁れ、二十餘町落ち延びて」俗曲(初蝶千種の濡事)「突き飛ばせば、土を摑んで、必死のくるしみ」

ひっ-し 必至【名】その事の必ず到來すること。必ずそのやうになること。必然。「必至の勢」

ひっし 緊【貌】ひし(緊)㊂の音便。謠曲(熊坂)「鐵(カネ)の棒、その外、兵具(ヒヤウグ)を、ひっしと立て置かれて」丹波與作「二人(フタリ)、ひっしと抱きつき」

ひつじ 羊【名】㊀〔動〕有蹄類に屬する獸。牝・牡共に一對の小き螺旋狀の洞角を有す。齒列、牛のに似て、上顎には、門齒・犬齒なし。毛は、野生のは、極めて短小なれども、飼養のものは、槪ね、柔軟にして卷縮せる長毛を被り、色は、白色・白灰色・黑色、又は斑なるものなど、種種あり。性、溫和にして怯弱、寒氣と濕氣とを嫌ふ。普通、每年六七月頃、毛を剪りて、毛織物・毛絲類を製す。革は、書籍の表紙、諸種の袋物の料とし、肉と乳汁とは、美味にして、滋養に富む。種類極めて多し。めんやう。和名「羊、比都之」 ㊁〔基〕『英 Sheep.』信者を譬へていふ語。ぼくし(牧師)參照。

羊に虎の皮を著せたやう【句】「羊質、虎皮」に同じ。〔諺語〕

羊の步(アユミ)【句】㊀『「屠所(トシヨ)の羊」を見よ』死期の近づくこと。中務內侍日記「徒に明し暮す春秋は、ただ羊の步なる心地して、末の露、本の雫に後れ先だつ例(タメシ)の、はかなき世」 ㊁歲月。光陰。烏丸光廣卿歌「羝羊。とどまらぬ羊の步めぐりきて幾秋月の影になれけん」

羊を亡(ウシナ)ひ、牢を補ふ【句】『戰國策の楚國の條に「見レ兎而顧レ犬、未レ爲レ晩也。亡レ羊補レ牢、未レ爲レ遲也」とあるに本づく』過ちて、後に改むることの譬。〔諺語〕

羊を驅って、虎の群に入る【句】『「群羊を驅って、猛虎を攻む」を見よ』弱者を、强者の群に追ひ入れて、危害に遇はしむ。〔諺語〕

ひつじ 未【名】『羊の義』㊀十二支の第八位。㊁方角の一。西南と南との間。㊂『太陽が、子午線に對して、前項の方角に在る時の時刻なるよりいふ』昔の時刻の一。現今の午後二時頃。とき(時)參照。

未紙、申(サル)煙草(タバコ)【句】未の年には紙、申の年には、煙草が、よく賣れゆくとの俗說。〔信濃國の諺語〕

未の喰破(クヒヤブリ)【句】『羊は紙を喰ふよりいふ』未の日は、上るか、下るか、何れにしても、相場に大變動ありとていふ語。〔諺語〕

ひつ-じ 匹似【名】似かよふこと。匹如。

ひつじ-あぶら 羊脂【名】『英 Mutton tallow』羊の筋肉、又その他の部分などより取る脂。

ひつじ-あめ 未雨【名】未の刻に降りはじむる雨。

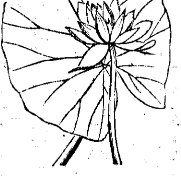
ひつじ-がゆ 羊粥【名】羊の肉を入れて煮たる粥。天神記「雞飯・羊粥」

ひっ-しき 引敷【名】こしあて(腰當)㊁に同じ。犬筑波「毛のある物はさせぬなりけり(といふ句に)ひっしきに高野聖(カウヤヒジリ)は紙をして」

引敷の板【句】鎧の草摺の、後腰(ウシロゴシ)にあるもの。(前板(マヘイタ)に對して) 太平記「陶山(スヤマ)が引敷の板を疊みあげ、あげざまに三刀刺したりければ」

引敷の草摺(クサズリ)【句】前條に同じ。

ひつじ-ぐさ 未草【名】〔植〕㊀『花の朝開きて、午後二時頃、即ち未の刻に閉づるよりいふ』睡蓮科に屬する多年生の草。葉は紐狀の長き葉柄を有し、水面に浮び、ほぼ心臟形を呈し、全緣にして、表面は槪ね綠色、裏面は紫紅色。花は、七八月頃、花莖を水面に抽きて開き、直徑一寸乃至四五寸あり、色は、色・紅・紫などあり、多數の瓣を有す。淡中水に自生し、又、栽培す。根は藥



(ひつじぐさ ㊀)

用とす。かめばす。これんげ。すゐれん。［睡蓮］㊁しをん(紫苑)㊀に同じ。㊂はくせん(白鮮)に同じ。和名「白鮮、比豆之久佐」㊃ひめくわんざう(姬萱草)に同じ。

ひつじぐさ-くわ 睡蓮科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。この科に屬するものは、水生の草にして、熱帶より寒帶に亙りて產し、凡そ八屬・五十三種を含む。すゐれんくわ。

ひっしごき-おび 引扱帶【名】**しごきおび**(扱帶)に同じ。當流小栗判官「引っしごき帶、しやらどけし」

ひっ-しごく 引扱く【動四他】**ひきしごく**(引扱く)の音便。

ひつじ-さう 未草・睡蓮【名】〔植〕**ひつじぐさ**(睡蓮)に同じ。

ひつじ-さる 未申・坤【名】西と南との間なる方角。

未申へ歪(ユガ)む【句】斜に曲ぐ。ななめにす。狂言(繩綯)「口をば、ひつじさるへ歪めて」

ひっ-しばる 引縛る【動四他】『ひっ(引)は接頭語』**しばる**(縛る)を強めていふ語。曾我會稽山「三股角の大鹿、荒繩掛けてひっ縛り」

ひっし-ひっし 緊緊【貌】**ひしひし**(緊緊)に同じ。文武五人男「桐に鳳凰、水に菊、ひっしひっしと打ちたるは、そも誰人の鎧ぞや」

ひっ-しむ 引締む【動下二他】**ひきしむ**(引締む)の音便。狂言(こんくわい)「狐どのが食ひにかかられまする所を、この罠でひっ締めて」

ひっし-めつど-ぐわん 必至滅度願【名】〔佛〕阿彌陀如來の四十八願の第十一願。淨土に往生せん者をして、必ず涅槃(ネハン)の大果に到達せしめんといふもの。

ひっ-しや 筆者【名】筆記する人。かきて。

ひっ-しや 筆寫【名】筆にて寫すこと。書きうつすこと。書寫。

ひっ-しやう 筆匠【名】**ひっこう**(筆工)に同じ。

ひっ-しやう 筆牀・筆床【名】**ひっか**(筆架)に同じ。

ひっしや-きやうそう 筆寫競走【名】學校の運動會などにて行ふ競走の一。白紙と鉛筆とを手にして走り出し、前方若干の距離に掲げてある文字・文章などを、早く寫し取りて、早く出發點に歸り來りし者を勝とするもの。

ひっしやり【貌】**ひしやり**の音便。

びっしやり【貌】**びしやり**の音便。新版歌祭文「塗文庫の中へ目錄、蓋びっしやり」

ぴっしやり【貌】**ぴしやり**の音便。壽の門松「頰がまち、ぴっしやりと見知らせ」

ひっしやり-ほん【貌】前條に同じ。一代女「扇……この頭(アタマ)つきと、ひっしやりほんと叩立(タタキダチ)にして行く」吉野都女楠「遊山どころはいかなこと、我等がしよざい、ひっしやりほん」

ひっしゆ 苾芻（梵 Bhikṣu）【名】〔佛〕**びく**(比丘)に同じ。盛衰記「佛は、苾芻の勢におはしませども、一切衆生(シユジヤウ)の導師たり」

ひっ-しゆ 必須【名】**ひつえう**(必要)に同じ。

ひつ-じゆ 筆受【名】弟子が、師の講述を傳へ受けて筆記編成すること。徒然「謝靈運は、法華の筆受なりしかど」

ひつ-じゆ 必需【名】**ひっしゆ**(必須)に同じ。

ひっ-しゆく 畢宿【名】**ひつ**(畢)に同じ。

ひつ-じゆつ 筆述【名】筆にて記し述ぶること。記述。

ひっしゆてき-せいやく 必須的制約【名】〔哲〕**ひつぜんてきでうけん**(必然的條件)に同じ。

ひつじゆ-ひん 必需品【名】**ひつえうひん**(必要品)に同じ。

ひつ-じよ 匹如【貌】**ひつじ**(匹似)に同じ。「匹如たり」

ひっ-しよう 必勝【名】必ず勝つこと。「必勝を期す」

ひっ-しよく 筆觸【名】〔美〕『英 Touch』西洋畫に於ける筆の使ひぶり。たっち。

ひっしよ-なし【形二】遣る瀨なし。心中萬年草「口惜涙(クチヲシナミダ)ひっしよなく、梯子、とんとん踏み鳴らし、駈けおりて」

びっしより【貌】**びしより**の音便。和合人「このとほり、びっしより汗だ」

ひつじ-らん 羊蘭【名】〔植〕**ひめくわんざう**(姬萱草)に同じ。

ひっしり【貌】**ひっし**(緊)に同じ。大藏流狂言(佛師)「軒と軒とを、ひっしりと建て並べ」

ぴっしり【貌】前條に同じ。

ひっ-す 必す【動佐變自】必ず斯くなるものと定む。必定なりとす。

ひっ-す 筆す【動佐變他】筆を用ひて記す。書く。記す。

ひっ-すう 引据う【動下二他】**ひきすう**(引据う)の音便。丹波與作「立ち上がれば、ひっすゑ、ひっすゑ」天の網島「胸ぐら取ってひっすゑ」

ひっ-すくふ 引掬ふ【動四他】『ひっ(引)は接頭語』**すくふ**(掬ふ)を強めていふ語。狂言(笠の下)「錫杖をおっ取って……ひっすくぎうてぽったり」

ひっ-すぐる 引選る【動四他】『ひっ(引)は接頭語』**すぐる**(選る)㊀を強めていふ語。太平記「逞兵を引っ勝って、敵の大勢を驅け破り」

ひっ-すゐ 必衰【名】かならず衰ふること。平家「盛者(ジヤウシヤ)必衰の理を顯す」

ひっ-せい 筆勢【名】運筆のいきほひ。ふでづかひ。筆力。曾我「筆勢・文章の體、まがはぬ范蠡が業なり」

ひっ-せい 筆生【名】㊀文字を筆寫するを職とする人。かきやく。寫字生。㊁明治の初年より同十年頃まで、八局・七官・各省・鞠獄司などに置かれ、淨寫・記錄などの事務に從事せし判任官。

ひっ-せい 畢生【名】**しゆうせい**(終生)に同じ。

ひっ-せき 筆蹟・筆迹・筆跡【名】**しゆせき**(手蹟)に同じ。

びつ-ぜつ 筆舌【名】筆と舌と。文章と言語と。「筆舌の盡す所にあらず」

ひっ-せふ 必捷【名】戰爭に必ず勝つこと。

ひっ-せん 筆尖【名】筆の穗先(ホサキ)。ふでさき。筆頭。筆端。筆鋒。

ひっ-せん 筆船【名】**ふでいれ**(筆入)に同じ。

ひっ-せん 筆洗【名】筆を使用し終へたる時、その毛を洗ふ器。ふであらひ。

ひっ-せん 筆戰【名】㊀文筆を以て、議論を戰はすこと。「筆戰・句鬪」㊁書體の巧拙を爭ふこと。

ひつ-ぜん 必然【名】必ず然(シカ)あるべきこと、又、然あること。必至。

ひつ-ぜん 必然【貌】〔哲〕**ひつぜんてき**(必然的)に同じ。

ひつぜん-せい 必然性【名】〔哲〕『英 Necessity』必ず然(シカ)あらざるべからざること。

ひつぜん-てき 必然的【貌】〔哲〕『英 Necessary』必ず然(シカ)あらざるべからざるさま。

ひつぜんてき-せいやく 必然的制約【名】〔哲〕次條に同じ。

ひつぜんてき-でうけん 必然的條件【名】〔哲〕『羅 Conditio sine qua non. 又、略して Sine qua non』或事柄の成立に缺くべからざる條件。必然的制約。必須的制約。

ひつぜん-ろん 必然論【名】〔哲〕**いしひつぜんろん**(意志必然論)の略。

ひっそ【貌】**ひっそり**㊀に同じ。丹波與作「本陣も、門(カド)しまり、あたりも、ひっそと靜まったり」壽の門松「耳を壁に押當てて聞けど、ひっそと音もせず」

ひっ-そぎ 引殺【名】ひっそぐこと、又、ひっそぎたる物。曾我會稽山「竹のひっそぎにて、左の眼突き潰し申し候」百合若大臣野守鏡「五寸まはりの野づら竹……ひっそぎに切ったる矢」

ひっそぎ-だけ 引殺竹【名】ひっそぎたる竹。斜に削り落して尖らせたる竹。

ひそぎ-やり 引殺槍【名】ひっそぎたる竹槍。太閤記「心はやたけ藪垣の、見越の竹をひっそぎ槍」

ひっ-そく 逼塞【名】『逼(ヒキ)塞の音便』㊀せまりふさがること。㊁零落して、世間に出られぬこと。武家義理物語「その身は、遠所の山里に逼塞して」㊂德川時代の刑罰の一。士分・僧侶に科せしもの。閉門よりは輕く、門扉を鎖して、白晝は出入することを得ざらしめ、夜中陰かに潛門(クグリモン)より出入することのみは默許し、期間は、罪の輕重によりて、五十日・三十日の二種に分ちたり。

ひっ-そぐ 引殺ぐ【動四他】『ひっ(引)は接頭語』**そぐ**(殺ぐ)㊀を強めていふ語。

ひっ-そばむ 引側む【動下二他】**ひきそばむ**

（引側む）の音便。傾城島原蛙合戰「刀ひっそばめ、兩方ためらひ控へたり」

ひっーそふ 引添ふ【動四自】**ひきそふ**（引添ふ）の音便。太平記「中間（チユウゲン）二人、鹿目が馬にひっ添うて」曾我會稽山「京の小四郎の不所存人さへ、ひっ添うて看病」

ひっーそふ 引添ふ【動下二他】**ひきそふ**（引添ふ）の音便。

ひっそり【貌】一 靜かにものさびしきさま。鷹筑波「ひっそりと鳴（ナリ）をしづむる壇の浦（といふ句に）月見に著るやしまの織物」 二 **ひそか**（密か）に同じ。

ひっそりーかん【貌】前條一に同じ。

ひった 疋田【名】**ひったしぼり**（疋田疋）の略。

ひつーだい 筆臺【名】筆を載する臺。筆架。江次第「書畢後、置二筆於筆臺一」甲陽軍鑑「紙・硯御用の時、上の紙に取添へ、筆臺の蓋ばかり持って參り」

ひったいさ【名】**ひたに**に同じ。

ひつーだう 筆道【名】**しょだう**（書道）に同じ。新可笑記「筆道の師匠」

ひったーがのこ 疋田鹿子【名】**ひったしぼり**（疋田絞）に同じ。

ひっーたくる 引たくる【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**たくる**一を強めていふ語。きのふはけふの物語「十ばかりひったくりて、聽て賞翫致す」八笑人「引ったくらんと、傘を引き合ひながら」

ひったーしぼり 疋田絞【名】粒の特にきはだてる鹿子（カノコ）絞。ひったがのこ。ひった。

ひっーたつ 引立つ【動四自】**ひきたつ**（引立つ）一二の音便。八笑人「ぐっと氣がひったって、狂言も、格別よく出來らあ」

ひっーたつ 引立つ【動下二他】一 **ひきたつ**（引立つ）一の音便。狂言（文藏）「下なる朕野を引っ立て」 二 **ひきたつ**（引立つ）五の音便。丹波與作「立歸れと引っ立つれば」

ひっーたて 引立【名】『英 Heading』墜道工事にて、上部に近く掘鑿すべき、矩形又は梯形の部分。

ひったてーえぼし 引立烏帽子【名】揉烏帽子（モミエボシ）の引立てたるもの。

ひったーのーかのこ 疋田鹿子【名】**ひったしぼり**（疋田絞）に同じ。色道大鑑「大夫の服、小袖・帷によらず、ひったの鹿子、地なし、縫紬の小袖」

ひっーたばぬ 引束ぬ【動下二他】『ひっ（引）は接頭語』**たばぬ**（束ぬ）を強めていふ語。浮世風呂「髮を引っ束ねやあがる」

ひっーたふ 筆答【名】筆にて書きて答ふること。（口答に對して）

ひっーたふす 引倒す【動四他】**ひきたふす**（引倒す）の音便。浮世風呂「足を引倒して、どさんと轉んだ所を」

ひっーたん 筆端【名】一 筆のさき。筆尖。筆鋒。 二 書畫・文章の勢。筆鋒。

ひつーだん 筆談【名】用事を文字に書きて、話しあふこと。（口談に對して）

ひっーだらこい【形】**ひらたし**（扁し）に同じ。〔陸前國仙臺の方言〕

ひったり【貌】一 **ひたり**に同じ。女殺油地獄「閉（サ）いたる店に、平蜘蛛の、ひったり身を附け、身を忍ぶ」 二 媚び附くさま。今宮心中「あちらへひったり、こちらへひったり、移り易い胴根性」

びったり【貌】一面に濡れたるさま。

ぴったり【貌】**ひったり**に同じ。

ひったれ 臀【名】**ひたれ**（臀）の音便。

ひっーち 筆致【名】筆にて、文字又は文章を書くおもむき。ふでつき。かきぶり。

ひつぢ 穭【名】刈り取りたる後に、再び自生する稻。結實せず。いたづらいね。おそおひ。おろかおひ。おろかぼ。ひつぢいね。ひつぢぼ。〔古語〕**もちなへ**（もち苗）參照。和名「穭、於路加於比。俗曰二比豆知一。自生稻也」古今「刈れる田におふるひつぢの穗に出でぬとは世を今更にあきはてぬとか」

ぴっち（英 Pitch）【名】一 **ちゃん**（瀝青）に同じ。 二 野球にて、球を擲つこと。 三〔音〕音の高度。音調。音節。 四 齒車の齒と齒との間隔。 五 端艇を漕ぐ時、オオルを往復せしむる回數を、一分間を基準としていふ語。

ひつぢーいね 穭稻【名】**ひつぢ**（穭）に同じ。〔古語〕堀次「十代田（トシロダ）の早稻田刈りての穭稻穗のさらさらに秋と見ゆらん」

ひっーちう 匹儔【名】一『韓愈の應二科目一時與レ人書に「非二常鱗凡介之品彙匹儔一」とあり』**ひってき**（匹敵）一に同じ。 二『曹植の詩に「中有二孤鴛鴦一、哀鳴求二匹儔一」とあり』**ひってき**（匹敵）二に同じ。

ひっーちがふ 引違ふ【動下二他】**ひきちがふ**（引違ふ）の音便。狂言（文藏）「鎧の袖をひっちがへ、馬の上にて、むづと組み」

ひっーちぎる 引ちぎる【動四他】**ひきちぎる**（引きちぎる）の音便。

ひつぢーだ 穭田【名】穭の生ひたる田。新千載「老いて世に有るかひもなきひつぢ田の霜を戴く身とぞなりぬる」芭蕉「ひつぢ田に霜の花見るあしたかな」

ひつぢーばえ 穭生【名】ひつぢ穗のごとく、疎に短く生ゆること。浮世風呂「ひつぢばえの眉毛（マミエ）が、りきんだばかりで」

ひつぢーはら 穭原【名】穭の生えてある廣き所。萬代「小山田のかりほの稻のひつぢ原ながくもあらぬ世を歎くかな」

ひつぢーぼ 穭穗【名】穭の穗。〔古語〕好忠集「わが宿の門田の早稻（ワセ）のひつぢ穗を見るにつけてぞ親は戀しき」

ひつーぢん 筆陣【名】『杜甫の詩に「筆陣獨掃千人軍」とあり』行文の雄健なるを、戰陣を張るに譬へていふ語。

ぴっちゃあ 投手（英 Pitcher）【名】野球の「投球者。」

ひつーぢやう 必定【名】かならず然ること。たしかなること。謠曲（木曾）「この度の軍に勝たんずる事、必定なり」

ひっーちゅう 筆誅【名】罪惡を、文字に書きあらはして、責めたつること。

びっちゅう 備中【名】一〔地〕山陽道八國の一。都窪（ツクボ）・淺口・小田（ヲダ）・後月（シツキ）・吉備（キビ）・上房（ジヤウバウ）・川上（カハカミ）・阿哲（アテツ）の八郡に分れ、全國、岡山縣の管轄に屬す。 二 次條の略。執政所抄「備中三百帖」 三 **びっちゅうぐは**（備中鍬）の略。

びっちゅうーがみ 備中紙【名】備中國より產する紙。備中。宗吾大草紙「備中紙に、高檀紙・小高檀紙を、一重二つに折りて」

びっちゅうーぐは 備中鍬【名】鍬の一種。首は、鐵にて作り、二本乃至五本の叉を分ちて、形、熊手の如く、その叉は、幅廣くして長く、その先端、やや廣し。水田を耕す時、その他、深耕を要する時に用ふ。くまでぐは。またぐは。備中。國姓爺「備中鍬に、め籠提げ」

びっちゅうーほふいん 備中法印【名】〔人〕**うんけい**（雲慶）に同じ。

びっちゅうーもの 備中物【名】備中國の刀工、靑江・片山・萬壽庄の一門一家の鍛へたる業物。地堅くして、品位を具ふ。

びっちゅうーやき 備中燒【名】昔、備中國阿哲（アテツ）・窪屋（クボヤ）の兩郡地方より產出せし陶器。應永年間の創始といふ。法曹（ホフソウ）燒。

ひっーちよう 筆塚【名】**ふでづか**（筆塚）に同じ。

ひっちようか 華澄茄・畢澄茄【名】〔植〕胡椒科に屬する蔓生灌木。叉狀に分岐し、葉はその膨大せる節より互生し、長卵形にて尖り、果實は豌豆大の漿果をなし、種子は、灰褐色又は暗灰色にして、香氣と辛味とを具へ、揮發油・グベン酸・樹脂等を含有し、專ら藥用とす。東印度諸島に自生す。

びっちり【名】〔植〕**やぶえんごさく**（藪延胡索）に同じ。

ひーづつ 火筒【名】**てっぱう**（鐵砲）に同じ。

ひづつ 漬つ【動四自】**ひづ**（漬づ）に同じ。〔古語〕萬葉「ひづち哭（ナ）けども」同「泣く涙ひさめに降れど白妙の衣ひづちて」

ひっーつかふ 引遣ふ【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**つかふ**（遣ふ）を強めていふ語。八笑人「何、何、あるじでも、內痔でも、用捨は無（ネ）え。ひっ遣ふ、ひっ遣ふ」

ひっーつかまへる 引摑まへる【動下一他】『ひっ（引）は接頭語』**ひっとらふ**（引捕ふ）に同じ。

ひっーつかまる 引摑まる【動四自】『ひっ（引）は接頭語』**つかまる**（摑まる）を強めていふ語。

ひっーつかむ 引摑む【動四他】『ひっ（引）は接頭語』**つかむ**（摑む）を強めていふ語。心中二枚繪草紙「追っつけ島を引っ摑み」

ひっ-つく 引附く・引著く【動四自】㊀隙間なく附く。強く附著す。くっつく。粘著す。八笑人「ああ、咽(ド)がひっつくやうだ。眼公(ガンコウ)、湯でも、水でも、一杯下っし」㊁男女私通す。狎れ合ひて、夫婦となる。くっつく。俗曲（雙紋刀銘月）「おのれを賣って食はうがため、夫婦にはなったはやい。ひっついたはやい」

ひっ-つくばふ 引蹲ふ【名】『動四自】『ひっ(引)は接頭語』つくばふ(蹲ふ)を強めていふ語。凱陣八島「ひっつくばうて、かいつくばうて」

ひっつけ-びん 引附鬢【名】なでつけびん(撫「附鬢」に同じ。

ひっ-つける 引附ける・引著ける【動下一他】㊀引っつくやうにす。粘著せしむ。くっつかしむ。用明天皇職人鑑「足らぬ所は、取りつけ、引っつけ」㊁男女を引き合はせて、密通せしむ。くっつける。

ひつ-っ-こし【形ー】ひつこしの音便。和合人「例(イツ)のひやかしが、あんまりひつっこいので」八笑人「もういいは。ああ、ひつっこい」

ひっ-つつむ 引包む【動四他】ひきつつむ(引包む)の音便。曾我會稽山「二重(フタヘ)・三重(ミヘ)にかけ隔て、ひっ包んで立ち騷ぐ」

ひっ-つまむ 引撮む【動四他】『ひっ(引)は接頭語』つまむ(撮む)を強めていふ語。曾我會稽山「大事の咄ひっ撮み、しどけなかばに言ひさして、駕籠を早めて急ぎゆく」

ひっ-つむ 引詰む【動下二他】ひきつむ(引詰む)㊀の音便。

ひっ-つめ 引詰【名】次條の略。浮世風呂「十二ばかりの小娘、ひっつめに結うたる後(ウシロ)のおくれ毛が、邪魔となる故」

ひっ-つめ-がみ 引詰髮【名】女の結髮に、根の方を引き詰むること、又その結髮。

ひっ-つめ-たぼ 引詰髱【名】髱を引き詰めて括ること、又その髱。

ひっ-つめ-びん 引詰鬢【名】ひっつけびん(引「附鬢」に同じ。

ひっ-つり 引釣【名】天然痘・やけどなどのために、皮膚の、縮み痙(ツ)ること、又その痕。

ひっ-て 引手【名】ひきて(引手)㊃の音便。甲陽軍鑑「轡の事、左の方を水つき、右の方をひってといふなり」

びってい【形】むさくるし(汚穢し)に同じ。「〔豐後國の方言〕

ひっ-てき 匹敵【名】㊀『魏志の郭后傳に「自當下與二卿門戸一匹敵者上」とあり』たぐふこと。つりあふこと。對等のあひて。敵手。對手。匹儔。匹偶。㊁『漢書の蒯錯傳に「人情非レ有二匹敵一、不レ能三久安二其所一」とあり』つれあひ。配偶。匹偶。

ひってん【名】無一物。貧窮。浮世床「ひってんな所ばかりは、曾我だ」娼妓絹籭「何(ナン)たるひってんらしい女郎だなう。茶漬店の奈良漬といふ薄い櫛に、水膠(ミヅカハ)を見るやうな笄を差してゐるぜえ」

ひっ-てん 筆硯【名】『硯は沾に通ず』少量の水を入れ置き、筆に墨を含ましむる前に、ひたして、その先端を柔ぐるに用ふる器具。

ひつ-でん 必傳【名】必ず後世に傳ることは「と。

ひっ-とう 筆頭【名】㊀ひったん(筆端)㊀に同じ。㊁書きはじめ。書きだし。いちふで。ふでがしら。初筆(シヨフデ)。

筆頭、花を生ず【句】『天寶遺事に「李白少時夢二筆頭生一レ花、自レ是才思贍逸」とあり』文詞巧妙なる形容。筆下、花を生ず。

ひっ-とう 筆筒【名】筆を入るる筒。ふでたて。ふでいれ。ふでづつ。

ひっとう-さい 筆頭菜【名】〔植〕つくし(筆頭菜)の漢名。

ひっ-とき 引解【名】かたわなむすび(片羂結)に同じ。

ひつ-とく 筆牘【名】筆と書札と。筆札。

ひつ-どく 必讀【名】必ず讀むべきこと。讀まねばならぬこと。

ひっ-と-ひ 一日【名】ひとひ(一日)の音便。

ひっ-とほる 引通る【動四自】『ひっ(引)は接頭語』とほる(通る)㊂を強めていふ語。狂言（佛師）「眞直に行(イ)て、左へひっ通れば、荒薦が垂れてある」

ひっ-とらふ 引捕ふ【動下二他】『ひっ(引)は接頭語』とらふ(捕ふ)を強めていふ語。天の網島「引っ捕へて」

ひっ-とらまふ 引捕まふ【動下二他】ひきとらまふ(引捕まふ)の音便。

ひっ-とり 一人【名】ひとり(一人)の音便。心中宵庚申「氣轉の利(キ)いたが、ひっとりもない」

ひっ-とる 引取る【動四他】ひきとる(引取る)の音便。春花五大力「宗十郎、こなして、徳次より引取り」

ひ-づな 緋綱【名】神輿の四隅に張りて、鈴を附けたる綱。

ひづ-なます 氷頭鱠・氷頭膾【名】氷頭(ヒヅ)を細かく刻みて、鱠としたるもの。さけなます。

ひつ-ば 匹馬【名】『左傳の僖公二十三年の條に「匹馬隻輪無レ還」とあり』一匹の馬。ばひつ。太平記「雞鳴、曉を催せば、匹馬、風に嘶(イバ)えて、天龍川を打渡り」

ひっ-ぱがす 引剝す【動四他】ひきはがす(引剝す)の音便。

ひっ-ぱぎ 引剝【名】『ひきはぎ(引剝)の音便』おひはぎ(追剝)に同じ。平家「高市(タカシ)山にて、ひっぱぎに遇ひ、辛き命ばかり生きつつ」

ひっ-ぱく 逼迫【名】『逼(ヒキ)迫の音便』㊀苦痛の、身に逼ること。惱み苦しむこと。太平記「身心惱亂して、五體逼迫しければ」㊁さしせまること。困窮。窮乏。しっぱく(質迫)參照。

ひっ-ぱぐ 引剝ぐ【動四他】ひきはぐ(引剝ぐ)の音便。娥歌加留多「侍のかづきし衣を引っ剝ぎ歸る」

ひっ-ぱさむ 引挾む【動四他】『ひっ(引)は接頭語』はさむ(挾む)を強めていふ語。和合人「隣から、ぐいと押し戻されたもんだから、すっぱり指をひっぱさんだ。ああ、痛え」

ひっ-ぱたく 引叩く【動四他】『ひっ(引)は接頭語』はたく(叩く)を強めていふ語。和合人「長竿でひっぱたかう」

ひつ-ばつ 必罰・必罸【名】罪ある者は、必ずこれを罰すること。「信賞・必罰」

ひっ-ぱつ 觱發【名】『詩經の豳風七月篇に「一之日觱發」とあり』風の寒きこと。

ひっ-ぱづす 引外す【動四他】はづす(外す)を強めていふ語。八笑人「おれも引っぱづして、又打込むと」義士銘銘傳「拔けつ潜りつ、飛鳥の如く、繰り出す槍先引外し」

ひっ-ぱなす 引放す【動四他】ひきはなす(引放す)の音便。八笑人「さあ、なぜ、己(オレ)が手を、二人で引っぱなしたのだ」

ひっ-ぱふ 筆法【名】㊀しよはふ(書法)に同じ。㊁文の書き方。文章の作り方。㊂やりかた。やりくち。方法。甲陽軍鑑「典廐様は、さすがに信玄公の甥子にてましますに、しかも、古典廐信繁の筆法ありて、御嗜ゆゑ、如レ此の御穿鑿までなさるる」

ひつ-はん 櫃飯【名】櫃に盛りたる飯。東鑑「櫃飯廿五具」

ひっぱら 畢鉢羅【名】〔植〕ぼだいじゅ(菩提「樹」㊀に同じ。

ひっ-ぱらふ 引拂ふ【動四他】『ひっ(引)は接頭語』はらふ(拂ふ)を強めていふ語。八笑人「むやみに、腕をひっ摑んだり、ひっ拂ったりして」

ひっ-ぱり 引張【名】㊀ひっぱること。㊁強ひて引き立て行くこと。拘引。盛衰記「新大納言の様に引張りなどせんずるにやと」㊂芝居にて、俳優の、二三人、互に引っぱり合ふ見え。㊃路傍などに立ちて、通行人の袖を引きとどめ、婬を勸むる女。婬賣婦。㊄衣服のよごれぬやうに、上にはおる衣。紐ありて、胸の左方にて結ぶやうにしたる、單(ヒトヘ)の衣。〔關西の語〕ひぢり參照。㊅一緒。合同。共通。膝栗毛「爰では、花も、ひっぱりに賞ふ極(キメ)と見えた」

ひっぱり-ぎり 引張切【名】肢體などを引っぱりて切ること。國姓爺「目前にて、一官を引張切にせん」

ひっぱり-だこ 引張凧【名】㊀一つの物又は一人に對し、互に我が物にせんと爭ひ競ふこと。浮世風呂「好い男ほど、浮虛(キヨ)で、飽っぽいものさ。その筈だものを。方方から引っぱりだこにするから」㊁はりつけ。磔刑。五十念忌歌念佛「片假名のきの空で、この様に手を廣げ、引張凧は知れた事」

ひっぱり-だす 引張出す【動四他】一ひきだす(引出す)一に同じ。二ひきだす(引き出す)に同じ。

ひっぱり-まはす 引張廻す【動四他】ひきまはす(引廻す)に同じ。

ひっぱり-もの 引張物【名】薦張(コモバリ)の見世物。こもばり。〔徳川時代の語〕

ひっ-ぱる 引張る【動四他】『引(ヒキ)張るの音便』一引き延ばして張る。張りのばす。張りひろぐ。二引きて近寄らしむ。三强ひて引き立て行く。拘引す。盛衰記「門外に引張られながら、御所の方を睨まへて」四はりつけにす。磔刑に處す。平治「若者どもの中に取籠め、引張りて殺し候はんに」博多小女郎波枕「海賊の仲間に入り……木の空で引っ張らるるは、今の事」五『袖を引っぱる義』女を挑む。六長引かす。のばす。薩摩歌「入相時分に膳立して、夕飯・夜食を引張り」七つっぱる。かわく。吉野忠信「慾頰(ヨクツラ)引張る傾城づれを言ひ上がり」八表に著る。ひっかく。ひっかぶる。新版歌祭文「お貰ひ申しました袷も、裄丈(ユキタケ)を直しに遣しまして、出來ましたなら、引張って、お禮に參りませう」膝栗毛「肩の所、縞柄變りたるきれを當てたる袷を引張り」

引張り足らず【句】活計に、不足を感ず。

ひつ-び 必備【名】必ず備ふべきこと。備へつくる必要あること。「萬人必備の書」

ひっ-ぴく 引彈く【動四他】『ひっ(引)は接頭語』ひく(彈く)を强めていふ語。奴俳諧「ひっぴけさ音を三味線の絲櫻」

ひっ-ぷ 匹夫【名】一『支那の古俗、大夫以上は妾あれども、庶人は、夫婦匹配せるのみなるよりいふ』賤しき一人の男。身分なき男。平民。庶人。盛衰記「春日大明神、老翁と現じて、匹夫の中に相交はり」二人足。人夫。〔疋夫〕東鑑「其後所レ令レ持二旅具一之疋夫等、進行之處」

匹夫罪無し。璧(マ)を懷きて罪有り【句】「小人罪なし、玉を懷きて罪有り」に同じ。〔諺語〕

匹夫の勇【句】『孟子の梁惠王下篇に「此匹夫之勇、敵二一人一者也」とあり』血氣にはやる小勇。腕だて。用明天皇職人鑑「智慧こそ無くとも、匹夫の勇でも、勇はある」

匹夫・匹婦【句】庶民の夫婦。一夫一婦。愚夫愚夫。

匹夫も志を奪ふべからず【句】『論語の子罕篇に「三軍可レ奪レ帥也。匹夫不レ可レ奪レ志也」とあるに本づく』一匹夫と雖も、志だに確固ならば、何人も、これを動かし變ぜしむるを得ず。〔諺語〕

ひっ-ぷ 匹婦【名】賤しき一人の女。身分なき女。

ひつ-ぶぎやう 櫃奉行【名】武家時代の職制の一。大名諸家にて、婚禮の際、嫁女の衣服を納れたる長櫃に附き添ひて、途中を監せしもの。おものぶぎやう。

ひっ-ぷく 引拭く【動四他】『ひっ(引)は接頭語』ふく(拭く)を强めていふ語。八笑人「船宿で、また塗りなほさうから、まあ、面(ツラ)を引拭いて仕舞はっし」

ひっ-ぷす 引伏す【動下二他】ひきふす(引伏す)の音便。雜八卦柱暦「ひっぷせ、ひっぷせ、高手・小手」

ひっ-ぺがす 引剝す【動四動】ひきへがす(引剝す)の音便。浮世床「爰の壁に張ってある……金時の繪をひっぺがして」和合人「爪ぎしを、みんなひっぺがしたあ」

ひっ-ぺき 引倍木【名】ひへぎ(引倍木)の音便。

ひっ-ぽう 筆鋒【名】ひったん(筆端)に同じ。

ひつ-ぼく 筆墨【名】一筆と墨と。ふですみ。二筆と墨とを用ひて記したるもの。

筆墨の如し【句】親みて離れぬ形容。春花五大力「傍友の交は、筆墨の如くと申すに違はず」

ひつぼく-しやう 筆墨商【名】筆墨を商ふこと、又その人。

ひっ-ぽどく 引解く【動四他】ひきほどく(引解く)の音便。雜八卦柱暦「不承不承に繩ひっぽどき」八笑人「袷を、一枚ひっぽどいて」

ひづみ【名】『ひずみ(歪)の義か。然らば、ずの假名なり』かたてをけ(片手桶)を云ふ。〔上野國の方言〕

ひつ-みやう 畢命【名】ひっせい(畢生)に同じ。平家「畢命を期(ゴ)として、この苦域の界を出で、かの極樂淨土の不退の土(ド)に往生したまはん事」謠曲(當麻)「畢命を期として、この草庵を出でじ」

ひつ-む 必無【名】必ず無きこと。必ず然らざること。絕無。

ひづむ 譴む【動下二他】責め苦しむ。引詰む。名義抄「譴、ヒヅム・ツム・イサフ」女殺油地獄「常常に身をひづめ、始末して」

ひ-づめ 蹄【名】〔動〕爪の一種。牛・馬その他の有蹄類に存するもの。角質にして、形大きく、靴狀をなして、趾端を包み、これを保護す。和名「蹄、比都米」

ひ-づめ 日詰【名】毎日詰め居ること。

ひづめ 日詰【名】〔地〕陸中國紫波(シハ)郡にある町。郡役所の所在地。鐵道東北本線日詰驛は、赤石村に屬す。

ひ-づめ 干詰【名】潮の、十分に干ること。

ひつ-めつ 必滅【名】必ずほろぶること。平家「生者(シヤウジヤ)必滅・會者(ヱシヤ)定離(チヤウリ)」

ひつ-もん 篳門【名】荊また竹などにて結ひたる門。貧家の門。

篳門・圭竇(ケイトウ)【句】『禮記の儒行篇に「篳門圭竇、蓬戶甕牖」とありて、註に「篳門、荊竹織門也」と見ゆ』篳門と圭竇と。貧者の住居の形容。

ひつ-よう 必用【名】ひつえう(必要)に同じ。

ひつ-ら 饆饠【名】ひちら(饆饠)に同じ。

ひづら【名】ひたうら(純裏)を見よ。〔古語〕

び-づら 角髮・鬟【名】みづら(角髮)に同じ。空穗「うなゐは、びづら結ひて」

ひつ-らう 筆勞【名】物を書く勞力。

ひづり【名】ひたうら(純裏)を見よ。〔古語〕萬葉「たすきかく這ふ兒が身には木綿肩衣(ユフカタキヌ)ひづりに縫ひき」

ひつ-りよく 筆力【名】運筆の勢。筆勢。

筆力、鼎を扛(ア)ぐ【句】『韓愈の詩に「龍文百斛鼎、筆力可二獨扛一」とあり』文章の强健なる形容。〔諺語〕

ひつ-れう 筆料【名】筆寫の勞に酬ゆる料金。かきちん。潤筆料。諸藝太平記「僅かなる寸珍の筆料、三百匁に及ぶ」

ひつ-ろ 筆路【名】文章の語句の續けぐあひ。文脈。「筆路暢達」「筆路纖弱」

び-つゐこつ 尾椎骨【名】〔醫〕尾骶骨を構造する四箇の椎骨。尾骶椎骨。尾閭骨椎。

ひ-て【名】批點なりとも、祕傳なりともいふ。〔古語〕枕「物語こそ、惡しう書きなどすれば、いひがひなく……ひて附くるまになどいふ人もありき(一說に、「ひてつくるま」は「一つ車」の誤なりともいふ)」

ひで 日出【名】〔地〕明治の初年設置の縣の一。ひだ(日田)二參照。

ひ-てい 飛蹄【名】馬の驅け走る蹄の音。太平記「流鏑の音驚二護法聽一、飛蹄の響騷二冥衆心一」

ひ-てい 悲啼【名】かなしみ啼くこと。悲泣。太平記「御前に候ひける老臣、皆、悲啼を含まぬは無かりけり」

ひ-てい 否定【名】一然らずと定むること。非とすること。(肯定に對して) 二〔哲〕論理上、二つの事物の間の不一致を表はす形式。否定判斷の形式。(肯定に對して) 三〔語〕うちけし(打消)二に同じ。

ひ-ていかう 比抵抗【名】〔理〕長さも切口も相等しき導體の、品質の異なるに從ひての抵抗の比率。

ひてい-きでう 扉底軌條【名】『英Bottom rail』扉の開閉を容易ならしむるために、その下底に當る部分に使用する軌條。

びてい-こつ 尾骶骨【名】〔醫〕『英Coceyx』脊柱の末端にあり、薦骨に類似せる、尖三角形の骨。三箇乃至五箇の尾椎骨の癒合して成れるもの。かめのを。尾閭(ビリヨ)骨。

ひ-ていだう-ろん 非定道論【名】〔哲〕『英Indeterminism』じいういしろん(自由意志論)に同じ。(定道論に對して)

びてい-つゐこつ 尾骶椎骨【名】〔醫〕びつゐこつ(尾椎骨)に同じ。

ひてい-はんだん 否定判斷【名】〔論〕『英Negative proposition』主辭と賓辭との不一致を立言する判斷。例へば、「甲は乙にあらず」の類。(肯定判斷に對して)

ひてい-めいだい 否定命題【名】〔哲〕『英Negative proposition』主辭と賓辭との不

一致を言ひ表はす命題。否定判斷を表はしたる命題。消極的命題。(肯定命題に對して)

ひていめい-ろん 非定命論 【名】〔哲〕**ひていだうろん**(非定道論)に同じ。(定命論に對して)

ひ-てう 飛鳥 【名】飛ぶ鳥。飛禽。

飛鳥盡きて、良弓藏る 【句】「狡兎死して、走狗烹らる」に同じ。〔諺語〕

飛鳥の翔(カケリ) 【句】「飛鳥の如し」に同じ。謠曲(熊坂)「獅子奮迅、虎亂入(コランニ)、飛鳥のかけりの手を碎き、責め戰へば」同(湛海)「湛海、飛鳥のかけりに、さそくを使ひて切りたまへば」

飛鳥の如し 【句】輕捷なる動作の形容。義士銘銘傳「拔けつ潛りつ、飛鳥の如く、繰り出す槍先引外(ハヅ)し」

飛鳥の術 【句】輕捷なる動作を以て、相手を惱ます方術。出世景淸「景淸は、飛鳥の術を得たれば、左右(サウ)なく討たれんやうもなし」

飛鳥懷に入る時は、狩人(カリウド)もこれを捕らず 【句】「窮鳥懷に入れば、獵師もこれを捕らず」に同じ。〔諺語〕釋迦如來誕生會「飛鳥懷に入る時は、狩人もこれを捕らぬ。情といふ事、汝も見事知ったよな」

ひ-てう 悲調 【名】悲哀なる曲調。

び-でう 【名】**ひじやう**(非上)に同じ。

ひ-てき 批摘 【名】批評して、缺點をあばくこと。

び-てき 美的 【貌】㊀物事の美醜の識別に關するさま。㊁物事の美なるさま。

びてき-くわいかん 美的快感 【名】〔哲〕『英 Aesthetical pleasure』美的の對象によりて惹き起さるる快感。

びてき-くわんねん 美的觀念 【名】美に關して起る觀念。

びてき-せいくわつ 美的生活 【名】『高山林次郎の唱へ出しし語』道學先生の煩瑣なる人爲的道德に律せられず、美を生活の中心として、世を樂しく送ること。趣味の生活。

ひでさと 秀鄉 【名】〔人〕**ふぢはらひでさと**(藤原秀鄉)を見よ。柳樽「越後屋の寺に秀鄉鐘を上げ」

ひでひら 秀衡 【名】〔人〕**ふぢはらひでひら**(藤原秀衡)は見よ。

ひでひら-こばん 秀衡小判 【名】**えいじこばん**(永字小判)に同じ。

ひでひら-わん 秀衡椀 【名】『藤原秀衡の創意に出づとていふ』**なんぶわん**(南部椀)に同じ。

ひ-でま 日手間 【名】手間賃を、一日若干と定めて働くこと。日やとひかせぎ。御伽名代紙衣「その日は、心(ネム)惡くて、……日でまにも行かず」

ひ-てん 批點 【名】㊀詩歌・文章などを添削して、評點を附すること、又その評點。、○◎などの種類あり。㊁非難すべき點。きず。〔非點〕

批點を打つ 【句】㊀詩歌・文章などに目を通して、評點を加ふ。㊁缺點を擧げて攻擊す。難を附く。批を打つ。

ひ-てん 飛天 【名】〔佛〕天人。天女。父子相迎「香風吹きて樂(ガク)をなせば、飛天、袂を翻して舞ふ」

ひ-てん 非天 【名】〔佛〕『果報、天人に似て、天人に非ざるよりいふ』**あしゆら**(阿修羅)に同じ。

ひ-てん 披展 【名】披き展ぶること。ひらき見ること。

ひ-でん 祕傳・秘傳 【名】容易に人に傳へぬこと、又その事柄。祕密の傳授。奧儀。

ひ-でん 飛電 【名】㊀ひらめく電光。㊁刀劍の光の譬。㊂至急の電報。

ひ-でん 飛傳 【名】**せいでん**(星傳)に同じ。

ひ-でん 悲田 【名】㊀〔佛〕三福田の一。悲しみ愍むべき貧窮・困苦の境界。**ふくでん**(福田)參照。沙石集「貧病・乞丐の悲田にも施(セ)せずして」㊁**ゑた**(穢多)に同じ。〔皮田〕

び-でん 美田 【名】肥沃なる田地。

ひ-でんかん 火癲癇 【名】火を見れば發する癲癇。(水癲癇に對して)

ひてん-げつ 卑點月 【名】〔天〕月の一箇月の長さの一。月が、白道上、最近點より最遠點に復歸するに要する時間。軌道の長徑は、月の運行する方向に移動するに因り、その時間は二十七日五五四六なり。

ひでん-じ 悲田寺 【名】㊀乞食・穢多の居る所。〔京都の語〕㊁**こじき**(乞食)を云ふ。〔京都の語〕

ひでん-しゆう 悲田宗 【名】〔佛〕**ふじゆふせは**(不受不施派)に同じ。

ひでん-しよ 祕傳書・秘傳書 【名】祕傳を記したる書。羅士產「喧嘩する祕傳書を預けて」

ひでん-しよ 悲田所 【名】古、京師の悲田院に倣ひて、地方に設け、行旅病者などを救濟せしめし所。續後紀「管內曠遠、行路多難、公私行旅、飢病者衆。仍於二多磨・入間兩郡界一置二悲田處一」

ひでん-ちゆう 避電柱 【名】**ひらいちゆう**(避雷柱)に同じ。

ひでん-は 悲田派 【名】〔佛〕**ふじゆふせは**(不受不施派)を見よ。

ひでん-ゐん 悲田院 【名】王朝時代に、京中の貧困なる病者・棄兒及び行旅病者などを救濟・療養せし所。光明皇后の、平城(ナラ)京に設立せられしに創まり、平安京にも、初は、東・西兩京に一箇所づつ設け、後には、鴨河の西畔一箇所に置き、施藥院(ヤクヰン)の別所となれり。現今の養育院の類。延喜式「凡京中路邊病者孤子、仰二九箇條令一其所レ見所レ遇、隨レ便必令レ取二送施藥院及東西悲田院一」

ひ-でり 日照・旱 【名】㊀日の照ること。日中、晴天なること。㊁**ひでりつづき**(日照續)の略。㊂『「日が照る」を見よ』物の不足がちなること。五人女「世界に、男の日照はあるまじ」

旱に不作なし 【句】旱の歲は、米の收穫多し。〔諺語〕

旱の朝曇(アサグモリ) 【句】旱の時は、朝、曇がちなり。〔諺語〕

旱の祈 【句】**あまごひ**(雨乞)に同じ。大鏡「一とせの旱の御祈にこそは、……、御賀茂まうでせさせたまひしには」

旱の神 【句】旱を司るといふ神。和名「魃、比天利乃加美。旱神也」

旱の高木履(タカボクリ) 【句】『旱の日に、足駄をはきて歩く義』不似合なる譬。〔諺語〕

ひでり-あめ 日照雨・旱雨 【名】日の照りながら降る雨。狐のよめいり。夫木「とにかくに御かさと申せ夏深き末の野原にひでり雨降る」

ひでり-がさ 日照笠・旱笠 【名】**あやゐがさ**(綾藺笠)に同じ。東鑑「自二金洗澤邊一御騎馬。奉二御日旱笠一」

ひでり-ぐさ 日照草 【名】〔植〕**いちはつ**(鳶尾草)を云ふ。〔伊豆國・駿河國の方言〕

ひでり-ぐも 日照雲・旱雲 【名】日照㊁の前兆なる雲。

ひでり-こ 【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する一年生の草。高さ六七寸。葉は三縱列に排列し、尖りて細長く、花は小くして、球形の小穗狀花序をなすもの、更に繖形に近き形に排列して開く。原野・田圃等に自生す。ひでりこてんつき。

ひでりこ-てんつき 【名】〔植〕前條に同じ。

ひでり-つづき 日照續・旱續 【名】幾日も、晴天のみ續くこと。ひでり。旱魃。

ひでり-どし 日照年・旱年 【名】日照つづきの年。旱魃の年。蕪村句「旱歲伏水(フシミ)の小菊買ひけり」和合人「日照年の泉水のやうな者だの」

ひでり-なます 日照膾・旱膾 【名】**ささがしなます**(ささがし膾)に同じ。

ひ-でる 日照る 【動四自】日光照りかがやく。〔古語〕記「朝日の日でる宮、夕日の日かげる宮」

ひと 人 【名】㊀動物中、進化の最上級に位するもの。最も發達したる思想と言語とを有し、社會を組織し、よく道理を辨知す。㊁〔法〕權利・義務の主體。自然人と法人とに分つ。㊂〔法〕出生より死亡するまでの自然人。㊃或特定の人以外の人。他人。源氏「とりわけてやんごとなう、人よりもことにすぐれて見奉らんとおぼししを」㊄世の中。世人。世間。記「たしたしに率寢(ヰネ)てむ後は人はかゆともうるはしとさ寢しさ寢てば」㊅おとな。大人。成人。「人と成る」㊆從者。家來。臣下。古今「これは、君も、人も、心を合はせたりといふべし」織留「餅米洗

貨、一斗二文にて埒の明く事、手前に人を持たぬ者は、勝手よし」 八すぐれたる人物。一かどの人物。偉人。源氏「氣色（ケシキ）取りつつあひ隨ふ程は、おのづから人と覺えて、やむごとなきやうなれど」 古歌「人多き人の中にも人ぞ無き人になれ人人になれ人」 九意中の人。こひびと。情人。妻。源氏「人がらは、宮の御人にて、いとよかるべし」 平家「人は十三、我は十五より見初め奉り」 十客。來客。（他人の家への來客には、敬意の接頭語お（御）を添へていふ） 十一心だて。人がら。ひととなり。性質。人物。「人が善い」 十二人以外の動物を親しみていふ語。萬葉「今朝（ケサ）の朝け秋風寒し遠つ人雁（カリ）が來鳴かむ時近みかも」 源氏「御猫ども、あまた集ひはべりにけり。いづら、この見し人は、と、尋ねて見つけたまへり」

人至って賢ければ、友無し【句】次條に同じ。〔諺語〕

人至って察なれば、友無し【句】『孔子家語に「水至清即無レ魚、人至察則無レ徒」とあるに本づく』餘りに明察なる時は、人恐れて親しまず。〔諺語〕

人至って善なれば、内に友無し【句】前條に同じ。〔諺語〕 貧我「水至って淸ければ、底に魚栖まず、人至って善なれば、内に友なしと見えたり」

人焉（イヅクン）ぞ痩（カク）さんや【句】『論語の爲政篇に「子曰、視二其所一レ以、觀二其所一レ由、察二其安一。人焉痩哉、人焉痩哉」とあるに本づく』人は、到底、その情を蔽ひ隱す事を得ず。〔諺語〕

人、一寸【句】身長は、僅かに一寸の差にても、著しく高低を感ず。〔諺語〕

人多ければ、天に勝つ【句】『史記の伍子胥傳に「人衆者勝レ天。天定亦能破レ人」とあり』人多くして、勢力强き時は、一時は、天理をも凌ぐ。〔諺語〕

人が助かる【句】人助（ヒトダスケ）となる。俳諧新選風英「白雨（ユフダチ）や人も助かる田のそよぎ」

人必ず自ら侮り、然る後、人之を侮る【句】『孟子の離婁上篇に「夫人必自侮、然後、人侮之」とあり』人は、自ら侮りて、身を修めざるがために、他人に侮らるるに至る。〔諺語〕

人が增せば、水も增す【句】家族多き時は、費用も增加す。〔諺語〕

人窮すれば、智短し【句】困窮する時は、智力も鈍る。〔諺語〕

人こそ人の鏡なれ【句】『「人を以て鑑となす」を見よ』他人の行跡は、善・惡共に、己の手本なり。〔諺語〕 重帷子「人こそ人の鏡なれ、人の振（フリ）見て我が振の、善きも、惡しきも、身の手本」

人、材木になるな【句】主義も、主張もなく、他人の道具にのみ使はるること勿れ。〔諺語〕

人盛んにして、神祟らず【句】「凡夫（ボンプ）盛んに神祟らず」に同じ。〔諺語〕

人定まる【句】『じんてい（人定）を見よ』人人寢靜まる。俳諧古選附錄（矩州）「名月や人定まって秋の月」

人樣樣（サマザマ）【句】多くの人の、それぞれに同樣ならぬこと。各人各樣。春の日（荷兮）「春めくや人樣樣の伊勢參」 俳諧新選（鶴英）「日の足らぬ人樣樣や年の暮」

人知れず【句】人に知られず。ひそかに。拾遺「戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」

人、その子の惡しきを知ることなし【句】『大學に「故諺有レ之、人莫レ知二其子之惡一、莫レ知二其苗之碩一」とあるに本づく』人は、愛情に溺れて、その子の惡行を知るを得ず。〔諺語〕

人たる人【句】ひと（人）八に同じ。五人女「人たる人の小娘は、斯くありたきものなり」

人でも杙（クヒ）でも無い【句】恩義を知らぬ人を罵りていふ語。

人と入物（イレモノ）は有次第【句】人と器物とは、多ければ、多きに任せて用ひ、少ければ、又、少くても事足る。〔諺語〕

人と數へらる【句】普通以上の人と思はる。平家「世に人と數へられ、官・加階に望をかけ、所帶・所職を帶する程の、一人も洩るるはなかりけり」

人と道具とは有次第【句】「人と入物は有次第」に同じ。〔諺語〕

人と爲（ナ）る【句】一『ひと（人）六を見よ』おとなになる。一人前になる。成人す。ひととなり（爲人）參照。萬葉「生れ出でたる白玉の吾が子古日（フルヒ）は……」 源氏「公（オホヤケ）にも仕うまつりぬべき程にもならば、今、人となりはべりなん」 二よみがへる。蘇生す。〔古語〕 源氏「護身など仕うまつりしに、やうやう生き出で、人となりたまへりければ」

人と屛風は、直（スグ）には立たず【句】世を渡るには、正しき道理のみにては、役に立たず。〔諺語〕「商人（アキンド）と屛風は、曲らねば世に立たず」參照。

人捕る龜は人に捕らる【句】他人を害する時は、己も他人より害せらる。〔諺語〕 岩淵夜話「下臈の諺に、人を捕る龜は人に捕らるるとかや」

人ならず【句】一人數（ヒトカズ）ならず。微賤なり。大鏡「人ならぬ程の者どもは、おのづからその御末にもや侍らん」 二人情に適へる行爲にあらず。人でなし。盛衰記「我、人に憑まれて、この兒を養ひ立てざらんも、人ならず」

人に剛臆無く、氣に進退あり【句】剛氣と臆病とは、精神の如何に因るのみ。〔諺語〕 太平記「人に剛臆なく、氣に進退ありと申す事候ふ間、人の心の習、敵に打懸らんとする時は、心武くなり、一足も引くとなれば、心臆病になる者にて候」

人に可なり【句】『唐書の溫造傳に「州刺史張建封聞二其名一、書幣招禮。造欣然曰、可レ人也、往從レ之」とあり』人の意に適す。

人に先んずれば、人の心を奪ふことあり【句】『左傳の宣公十二年の條に「軍志曰、先レ人有レ奪二人之心一」とあり』「先んずれば人を制す」に同じ。〔諺語〕

人に爲（ナ）す【句】『ひと（人）六を見よ』養育して成人せしむ。きのふはけふの物語「五つ六つの時より拾ひ、養育して、今、やうやう人になし」

人には添うて見よ。馬には乘って見よ【句】人の性行の判定は、先づ親しく交はりたる上に於てせよ。〔諺語〕

人に人鬼は無し【句】「渡る世間に鬼は無し」に同じ。〔諺語〕

人に一癖（ヒトクセ）【句】『人と、一と、頭韻を成す』世の中に、全く癖無き人は無し。「無くて七癖」參照。〔諺語〕

人に適（ユ）く【句】『儀禮の喪服篇の註に「凡女行二大夫以上一曰レ嫁、行二於庶人一曰レ適レ人」とあり』嫁（カ）す。とつぐ。よめいりす。

人に因りて事を成す【句】『史記の平原君傳に「毛遂招二十九人一曰、公等碌碌、所レ謂因レ人成レ事者也」とあり』獨立の氣力なく、他人に依り縋りて事を成す。

人に醉ふ【句】人多く立ち込みて、苦しさに、胸わるくなる。

人の秋【句】『秋に、飽（アキ）の意を含めていへるもの』人との交情の疎くなること。古今「忘れなん我と恨むるほととぎす人の秋にはあはんともせず」

人の秋風【句】前條に同じ。新葉「木にもあらず草にもあらぬ契だにうらがれてゆく人の秋風」

人の意見に餅をつく【句】「人の言條（イヒデウ）と餅はつく程善し」に同じ。〔諺語〕

人の意見は四十まで【句】四十歲以後は、精神成熟の域に達せるが故に、自己の思慮に任せて行動して可なり。〔諺語〕

人の痛いのは三年でも辛抱する【句】他人の苦痛を思ひやらぬ形容。〔諺語〕

人の一心、岩をも碎く【句】「念力（ネンリキ）、岩を徹（トホ）す」に同じ。〔諺語〕

人の一生は、重荷を負うて、遠き道を行くが如し【句】『もと德川家康の訓

言の一節』「任重くして道遠し」に同じ。〔諺語〕

人の一寸、我が一尺【句】次條の略。〔諺語〕

人の一寸より、我が身の一尺【句】『盍簪錄に「里語曰、見二他短一寸一不レ知二己短一尺一」とあり』他人の缺點は目につき易く、己の短所を知るは難し。〔諺語〕和合人「へん、人の一寸より、我が身の一尺だ。……、あんまり見っともよくもなかったぜ」

人の命は醫者の手習【句】『東坡の文に「學レ書者紙費、學レ醫者人費」とあり』醫者の技術は、多くの人命をそこなひて、始めて上達す。〔諺語〕

人の言條(イヒデウ)と、餅はつく程よし【句】『「つく」は、「搗く」と「附く」との兩意を兼ぬ』人の助言には附き從ふがよし。人の意見に餅をつく。〔諺語〕

人の噓(ウソ)は我が噓【句】他人の虛言を、よくも糺さず、輕輕しく他人に傳ふる時は、結局、自己捏造の虛言と見做さる。〔諺語〕

人の噂も七十五日【句】世人の噂も、永くは續かずして消え去るものなり。〔諺語〕

人の噂を言ふは、鴨の味がする【句】他人の長短を批評するは、極めて興味あり。〔諺語〕

人の上(ウヘ)【句】❶人間の身の上。百合若大臣野守鏡「人の上の善惡は、人相・さうじやう・生性(シヤウ)(ウマレ)、心の中にあること」❷他人の身の上。枕「身の上嘆き、人の上いひ」

人の上(ウヘ)に吹く風は、我が身に當る【句】「昨日(キノフ)は人の身、今日は我が身の上」に同じ。〔諺語〕幸若(築島)「人の上に吹く風の我が身に當らぬことやある。いかに心強くとも、など、あの女が、あはれを問うて得させぬか」

人の上(ヘ)は百日【句】「人の噂も七十五日」に同じ。〔諺語〕盛衰記「人の上は百日とこそ申すなれ。只、披露せぬには過ぎじ」

人の上(ウヘ)見て、我が身を思へ【句】「人の振(フリ)見て、我が振直せ」に同じ。〔諺語〕

人の馬に乘るな【句】主ある者に、手を附くること勿れ。〔諺語〕

人の患は、好んで、人の師たるに在り【句】『孟子の離婁上篇に「人之患、在レ好レ爲二人師一」とあり』自ら身を修むるだに容易ならざるに、好んで人の師たらんとするが如きは、最も患ふべき事なり。〔諺語〕

人の落した櫛を拾ふな【句】『櫛は、苦死と音相通ずるよりいふ』他人の遺失したる櫛を拾ふ時は、災難を蒙るといふ語。〔諺語〕

人の親【句】おや(親)❶に同じ。後撰「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」

人の皮を著る【句】義理・人情にはづれたる人を罵りていふ語。辨内侍日記「うき世を知らぬ人は、畜生に人の皮を著せたるとこそ聞きはべれ」新版歌祭文「辛抱した女房を嫌ひ、身上(シンシヤウ)のよい油屋の聟になったは、……、人の皮著た畜生め」

人の口【句】ひとぐち(人口)に同じ。平治「人の口ほど怖しかりける事はなし」

人の口に在り【句】今も、世間に言ひ傳へらる。十訓「我が朝の事、常に人の口にある外、一兩條申すべし」徒然「人の口にある歌、多し」

人の口に入る【句】「人の口端に掛る」に同じ。榮花「大かた、この頃の人の口に入りたる事は、これになんありける」

人の口に、戶は立てられず【句】世人の噂は、打ち消すこと難し。〔諺語〕

人の口端(クチ)に掛る【句】世人に噂せらる。世上の評判となる。

人の口安からず【句】善きにつけ、惡しきにつけ、世間の人人は、批評を加へて、うるさきものなり。〔諺語〕大鏡「よき風流と見えしかど、人の口安からぬものにて」榮花「人の口安からぬ世にて、一條殿と批杷殿と燒くべしと、いひののしれば」

人の國【句】『他人の國の義』❶都以外の土地。ゐなか。とつくに。地方。〔古語〕伊勢「宮仕いそがはしく、心もまめならざりければ、……、人の國へ去(イ)にけり」枕「人の國の遠きに行(イ)き隱れなどして、更に都の內に、さる者なかりけるに」❷外國。異國。他國。とつくに。ひとくに。源氏「御前の御遊にも、まづふんの司(ツカサ)を召すは、人の國は知らず、ここには、これを、物の祖(オヤ)としたるにこそあめれ」

人の氣(ケ)【句】ひとげ(人氣)に同じ。蜻蛉「南面(ミナミオモテ)の格子もあげぬ所、人の氣覺ゆ」

人の子【句】❶他人の子。他人の愛兒。榮花「人の子にて見んに、羨しく持たまほしかるべき子なりや」露沾「雪の日やあれも人の子樽ひろひ」❷親の許に居り、又は人の妻となれる、若き女。萬葉「大船の泊(ハ)つるとまりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の兒ゆゑに」十訓「人の子なりければ、斯くしながら、さすがにあはれにおぼえて」❸〔基〕『英 Son of man』基督が、自己を、神よりこの世に遣されたる救主なりとし、永世の昔より存在せりとの意識を有したると共に、一面に於ては、純然たる人間の一員たるを自覺して、その人格を暗示するに用ひし語。

人の心は面の如し【句】「人心(ジンシン)の同じからざる、その面の如し」に同じ。〔諺語〕

人の心は九合・十合【句】次條に同じ。〔諺語〕

人の心は九分(クブ)・十分(ジフブ)【句】人の思ふ所は、大抵相等しきものなり。「人の目は九分・十分」參照。〔諺語〕

人の牛蒡(ゴバウ)で法事する【句】次條に同じ。〔諺語〕

人の賽錢で、鰐口(ワニグチ)叩く【句】他人の物を借りて、義務を果す譬。〔諺語〕

人の七難より、我が八難【句】「人の一寸、我が一尺」に同じ。〔諺語〕

人の十難より、我が一難【句】己が災難は、他人のより程度輕くとも、一層苦しく感ず。〔諺語〕

人の正月【句】てんしやうぐわつ(天正月)を見よ。

人の疝氣を頭痛に病む【句】自己に無關係なる事に就きて、徒に心配す。〔諺語〕

人の寶を數ふ【名】空しく他人の富裕を羨む。〔諺語〕

人の種(タネ)【句】ひとだね(人種)に同じ。榮花「いかなりけん先の世に、人の種を絕ち、思ふ人の中をさけん」宇治「人の子どもを喰ひ、人の種を絕つかはりに」

人の短を言ふこと勿れ。己の長を說くこと勿れ【句】『崔瑗の座右銘(文選)に出づ」の語に本づく』他人の短所を擧げ、自己の長所を誇るは、避くべき事なり。〔諺語〕

人の爲(タメ)ならず【句】畢竟は、自己の利益となるべきを思ひてする事なり。諺「情(ナサケ)は人の爲ならず」義經記「これも、人のためならず、かほどまで果報拙き義經に、かやうに志深き面面の、行く末までもいかがと」

人の辛(ツラ)さは身の寶【句】逆境に立つは、修養上、却って利益あり。〔諺語〕

人の中の人【句】ひと(人)［八］に同じ。新可笑記「正道(シヤウダウ)、自然とあらはれ、人の中の人あり。家に杖突くまで、堅固に勤め、一子に家督を讓り」

人の値打は、死なねば定まらず【句】「棺を蓋うて事定まる」に同じ。〔諺語〕

人の日【句】じんじつ(人日)に同じ。一代女「人の日の始、……、春も今ぞと」

人の人たる人【句】ひと(人)［八］に同じ。新永代藏「人の人たる人と、廣き所にて沙汰あるぞかし」

人の美を成す【句】「君子は人の美を成す」を見よ。

人の褌(フンドシ)で相撲(スマフ)を取る【句】他人の物を、利益獲得の手段に利用する譬。〔諺語〕

人の振(フリ)見て、我が振直せ【句】他人の行爲に鑑みて、己が身を省みよ。人

の上見て、我が身を思へ。〔諺語〕 浮世風呂「他（ヒト）の風（フリ）見て、吾がふりをも、好歹（ヨシアシ）共に改めたまはば」

人の將に死なんとする、その言（ゲン）や善し【句】『論語の泰伯篇に「曾子曰、鳥之將ㇾ死、其鳴也哀。人之將ㇾ死、其言也善」とあるに本づく』人、窮する時は、本心に立ち返りて、その言ふ所正し。〔諺語〕

人の御門（ミカド）【句】外國の朝廷。異朝。 源氏「人のみかどにも、わが國にもありがたき程の才（ザエ）をひろめて」

人の目は九分（クブ）・十分（ジフブ）【句】人の見る所は、大抵相等しきものなり。「人の心は九分・十分」參照。〔諺語〕

人の目は天に著く【句】『寶語敎に「人眼著ㇾ天、勿二隱犯用一」とあり』「隱れたるより現るるは無し」に同じ。〔諺語〕

人の物は我が物【句】他人の所有物を、我物と同樣に心得る貪慾なる形容。〔諺語〕

人の物より自分の物【句】「借著（カリギ）より洗著（アラヒギ）」に同じ。〔諺語〕

人の山【句】ひとやま（人山）に同じ。 若風俗「人の山崩れて笑ふべらなれば」

人の行方（ユクヘ）と水の流【句】人の運命の定なきは、水の流の行く方定めぬが如し。〔諺語〕

人の代（ヨ）【句】㊀人間の世界。人界。㊁人皇の時代、即ち神武天皇以後の時代。（神代に對して） 著聞「神武天皇よりぞ、人の代とはなりにける」 謠曲（御裳濯）「神代より、今、人の代に至るまで」

人の世【句】じんせい（人世）に同じ。 後撰「人の世の思に叶ふものならばわが身は君におくれましやは」

人は一代、名は末代【句】形骸は、死すれば失すれども、名は、末の世かけて失せず。名譽は、生命よりも重んずべし。〔諺語〕 出世景淸「日本に唐を添へて賜はるとて、そもや訴人が成るべきか。……人は一代、名は末代」

人は氏より育（ソダチ）【句】「氏より育」を見よ。〔諺語〕 重帷子「人は氏より育かや。……おさいは、さすが茶人の妻」

人は落目（オチメ）が大事【句】㊀他人に對しては、その零落せる時に、特に親切に待遇せよ。〔諺語〕 鎌田兵衞名所盃「人は落目が大事なり。情（ナサケ）は人の爲ならず」 ㊁零落したる時は、自棄自暴に陷らず、特に行爲を愼むべし。〔諺語〕

人は蔭（カゲ）が大事【句】人は、他人の見ぬ處に於て、却って特に行爲を愼むべし。〔諺語〕

人は蔭（カゲ）が本（モト）【句】前條に同じ。〔諺語〕

人は心が百貫目【句】人は、心だてが、何よりも大切なり。〔諺語〕

人は心が目貫（メヌキ）【句】前條に同じ。〔諺語〕

人は、死して、名を留む【句】『五代史の王彥章傳に「豹死留ㇾ皮、人死留ㇾ名」とあり』人は、名譽を重んずべし。〔諺語〕

人は十歲、木は一丈【句】人は十歲の頃、木は高さ一丈の頃に達すれば、前途も、ほぼ察せらる。〔諺語〕

人は天地の靈【句】「人は萬物の靈」に同じ。 徒然「人は天地の靈なり。天地は、限る所なし。人の性（シヤウ）、何ぞ異ならん」

人は善惡の友に依る【句】『「水は方圓の器に隨ふ」を見よ』人は、交友次第にて、善人にも、惡人にもなる。〔諺語〕

人は情（ナサケ）の下に立つ【句】人は、互に親愛の情をかはして生存す。〔諺語〕

人は盜人（ヌスビト）、火は燒亡（セウマウ）【句】人と火とは、油斷しがたきものなり。〔諺語〕

人は萬物の靈【句】『書經の泰誓篇に「天地萬物父母、惟人萬物之靈」とあり』人類は、萬物中、最もすぐれたるものなり。〔諺語〕

人は人、己（オレ）は己（オレ）【句】『孟子の萬章上篇に「爾爲ㇾ爾、我爲ㇾ我」とあり』他人の上をかれこれと評せんは、各自、その分を盡すに若かず。〔諺語〕

人は人中（ヒトナカ）【句】世に交りて、經驗を積むに非ざれば、人として役に立たず。〔諺語〕

人は人果（ヒトハテ）【句】人間には、人間の果報あり。〔諺語〕

人は人、我は我【句】「人は人、己は己」に同じ。〔諺語〕

人は武士【句】「花は櫻に、人は武士」を見よ。 柳樽「人は武士なぜ傾城にいやがられ」

人は武士、花は櫻【句】「花は櫻に、人は武士」に同じ。〔諺語〕

人は武士、女は京【句】人の中にては、武士が最もすぐれ、女は京都の者が最も美し。〔諺語〕

人は見掛に依らぬもの【句】『孔子家語に「以ㇾ容取ㇾ人、則失二之子羽一、以ㇾ辭取ㇾ人、則失二之宰予一」とあり』人は、外貌のみにて、輕輕しく判定すべきにあらず。〔諺語〕

人は見掛に依る【句】前條の語を、態と反對にいへる語。 和合人「ははあ、よもや、よもやと思ってをったが、なる程、人は見かけによるものでござるな」

人は見目（ミメ）より唯心【句】人は、容貌よりは、心だてのすぐれたるを貴しとす。〔諺語〕

人は病の器（ウツハ）【句】人の身の、病に犯され易き形容。〔諺語〕

人增せば、水增す【句】「人が增せば水も增す」に同じ。〔諺語〕

人を待つ女【句】客引（キヤクビキ）の女。おちやれ。でをんな。ひととめをんな。 一代女「松坂に行きて、旅籠屋の人待つ女となりて」

人も無（ナ）げ【句】人を人と思はぬやうなる態度。傍若無人の振舞。

人、我に辛（ツラ）ければ、我、また人に辛し【句】人我を愛せざる時は、我も人を愛せず。〔諺語〕 浦島年代記「人我に辛ければ、我、また、人に憂し」

人醉ひて、本心を現す【句】人は、酒に醉ひたる時、その本性を現す。生醉（ナマヱヒ）、本性（ホンシヤウ）違はず。〔諺語〕 曾我「人は醉ひて本心を現す、思ふ事こそいはれ候へ」

人を祈らば、穴二つ【句】「人を呪はば、穴二つ」に同じ。〔諺語〕

人を射んとせば、先づ馬を射よ【句】『杜甫の前出塞と題する詩に「射ㇾ人先射ㇾ馬、擒ㇾ賊先擒ㇾ王」とあり』敵を屈伏せしめんためには、これに先だちて、敵の恃む所を除き去るべし。〔諺語〕

人を怨むより、身を怨め【句】『淮南子の繆稱篇に「怨ㇾ人不ㇾ如二自怨一」とあり』他人を怨まんよりは、己の行の缺けたる所を省みよ。〔諺語〕

人を思ふは、身を思ふ【句】「情（ナサケ）は人の爲ならず」に同じ。（「人を憎むは身を憎む」に對して）〔諺語〕

人を喰（ク）ふ【句】『「食（ク）へない」を見よ』他人を輕んじ侮る。相手を愚弄す。「隨分人を喰った遣口（ヤリクチ）」

人を喰（ク）ふ狼【句】ひとくひおほかみ（人食狼）に同じ。 和合人「牙（キバ）尖らして、人を喰ふ狼あり」

人を喰（クラ）ふ【句】「人を喰（ク）ふ」に同じ。 八笑人「面白くもねえ。あんまり人を喰った奴等（ヤツラ）だ」

人を殺さば、血を見るべし【句】「毒を食はば皿を舐れ」に同じ。〔諺語〕 八犬傳「毒を食はば、皿を舐れ。人を殺さば、血を見るべし」

人を誹るは雁の味【句】「人の噂を言ふは鴨の味がする」に同じ。〔諺語〕

人を助くるは菩薩の行（ギヤウ）【句】『「自利・利他」を見よ』他人を救助するは、菩薩にも比すべき善行なり。〔諺語〕 御伽草紙（猿源氏）「人を助くるは、菩薩の行なり」

人を恃むは、自ら恃むに如かず【句】『韓非子の外儲說右下篇の語に本づく』他人の助勢を恃まんよりは、自己の力によりて、世に立つ方、結局、自己の利益なり。〔諺語〕

人を使ふは、苦を使ふ【句】次條に同じ。〔諺語〕

人を使ふは、使はるる【句】人を使役

するには、苦勞多し。使はるる身となるとも、使ふ身になるな。〔諺語〕

人をつけ【句】次條の略。

人をつけにす【句】『つけはうつけ（空）の略か』人を侮る。人を馬鹿にす。浮世風呂「朝寢な奴等（ラツ）だぜえ。ええ、人をつけにした。何時だと思ふ」

人を罪する拏までにせず【句】『孟子梁惠王篇に「王政可ㇾ得聞與、對曰、……罪ㇾ人、不ㇾ拏」とあり』罪を犯したる者あれば、その犯罪者を刑するに止めて、妻子に連坐せしめず。

人を取る【句】㊀人を捕へて、手ごめに伴なひ去る。㊁人の生命を奪ふ。蕪村「人を取る淵はかしこか霧の中」一茶「人を取る茸果して美しき」

人を憎むは、身を憎む【句】他人を害せんとする時は、己も、害を受く。〔「人を思ふは身を思ふ」に對して〕〔諺語〕

人を呪（ノロ）はば、穴二つ【句】前條に同じ。〔諺語〕八笑人「それ見さっし。他（ヒト）を呪はば、穴二つといふは」

人を呪（ノロ）へば、身を呪ふ【句】前條に同じ。〔諺語〕忠臣青砥刀「人を呪へば、身を呪ふ。己が怒れる胸の火は、己を燒くと知りながら」〔同じ。

人を人臭しとも思はず【句】次條に

人を人とも思はず【句】傲慢不遜なる態度の形容。枕「人を人とも思ひたらず」薩摩歌「さあ、首斬って取らせんと、人を人とも思はぬ顏」

人を見たら、鬼と思へ【句】「人を見れば、盜人と思へ」に同じ。〔諺語〕

人を見て、法を說け【句】「人（ニ）見て法說け」に同じ。〔諺語〕

人を見れば、盜人（ヌスビト）と思へ【句】人は、輕輕しく信用すべからず。人を見たら鬼と思へ。「人は盜人、火は燒亡」參照。〔諺語〕

人を以て、鑑（カガミ）となす【句】『唐書の魏徵傳に「以ㇾ人爲ㇾ鑑、可ㇾ明㆓得失㆒」とあり』他人の善惡を見て、自ら戒む。

人を以て、言を廢せず【句】『論語の衞靈公篇に「君子不㆓以ㇾ言擧ㇾ人、不㆓以ㇾ人廢ㇾ言」とあるに本づく』人物としていかがはしき人の言葉にても、その言葉に取るべき所あれば取る。〔諺語〕

人を以て、鳥にだも若かざるべけんや【句】『大學に「詩曰、緡蠻黃鳥、止㆓于丘隅㆒。子曰、於ㇾ止㆓知其所㆒ㇾ止、可㆓以ㇾ人而不ㇾ如ㇾ鳥乎㆒」とあるに本づく』人と生れながら、鳥にも劣る程の行爲ありて可ならんや。〔諺語〕

その人【句】㊀ある人。それがし。なにがし。枕「その年、その月、何のをり、その人の詠みたる歌」㊁意中の人。こひびと。萬葉「思ふらむその人なれやぬばたまの夜ごとに君が夢（イメ）にし見ゆる」伊勢「京に、その人の御もとにとて、文（フミ）書きて附く」㊂その事又はその身分に適合する人。枕「むげに斯くてはその人ならず」正統記「官にその人ある時は、君は垂拱してますます」

その人ありと知られたり【句】或社會の中にて有名なり。

ひと　毗登・人【名】姓（カバネ）の**びと**（首）と**ふびと**（史）とを、天平勝寶九年九月二十六日より寶龜元年九月三日まで、凡そ十四年間、一時改められし名稱。理由は、首は聖武天皇の諱、史は外祖父藤原不比等（フヒト）の諱に觸るるに因るものにて、斯くては、首・史の兩姓混同の弊ありとて、舊に復せられたり。

ひ-と　丕圖【名】**こうと**（鴻圖）に同じ。

ひ-と　匪徒【名】㊀**ひぞく**（匪賊）に同じ。㊁臺灣總督府の管轄區域内に棲息して、未だ王化に浴せず、常に暴行・殺戮を事とする蠻民の團體。

ひ-と　費途【名】金錢のつかひみち。

ひ-と　飛渡【名】㊀とびてわたること。㊁大河などを、勢よく渡り越ゆること。

ひと　一【數】**ひとつ**（一）に同じ。萬葉「一二（フタ）の目のみにあらず五つ六つ三つ四つさへあり雙六のさえ」

ひと　一【接頭】㊀一つの意。萬葉「一手には木綿（ユフ）取りもたし、一手には和妙（ニギタヘ）まつり」㊁多くの中の一つの意。或（アル）。「一頃流行の品」「一歳の旱」㊂一度の意。謠曲（安達原）「鬼一口に喰はんとて」㊃普通とは異なる意。枕「一ふしあはれとも、をかしとも聞きおきつるものは」㊄或場所、或物又は或時間の全部の意。「日ひと日」「一京（ヒトキヤウ）」萬葉「ひと嶺（ネ）ろに言はるものから青嶺（アヲネ）ろにいざよふ雲のよそり妻はも」

ひ-ど　肥土【名】㊀地味の肥えたる土。こえつち。沃土。肥壤。㊁〔農〕『英 Marl』肥養の効ある土。粘土と石灰との混合せるもの。粘質肥土と砂質肥土とに分つ。

ひ-ど　飛奴【名】〔動〕『天寶遺事に「張九齡家養㆓群鴿㆒、毎ㇾ與㆓親知㆒書、繫㆓鴿足上㆒、依㆓所ㇾ教處㆒投ㇾ之。九齡目ㇾ之爲㆓飛奴㆒」とあるに本づく』**はと**（鳩）の異稱。

ひと-あいさつ　人挨拶【名】他人との應對。ひとあしらひ。

ひと-あか　人垢【名】㊀人體の肌に生じたる垢。㊁他人の垢。

人垢は身に附かず【句】「惡錢、身に附かず」に同じ。〔諺語〕

ひと-あきなひ　人商【名】人の子をかどはかして賣買すること。鎌倉時代、特に多く行はれ、禁令の發布を見るに至れり。

ひと-あきびと　人商人【名】人商（ヒトアキナヒ）をする人。謠曲（櫻川）「かやうに候ふ者は、東國がたの人商人にて候ふが」

ひと-あげ　一上【名】〔商〕一旦は騰貴すること。（一押に對して）〔取引所の語〕

ひと-あし　人足【名】人人の往來。狂言（猿座頭）「人足が繁うなった」八笑人「隅田堤（スダツツミ）崩るるばかりの人足は、蟻の往來（ユキキ）に異ならず」

ひと-あしらひ【名】人をあしらふこと。人あつかひ。ひとあいさつ。織留「世渡の人あしらひ、在家に變る事なし」

ひと-あせ　一汗【名】㊀一度汗をかくこと。又、汗をかく程に、一度働くこと。㊁責馬（セメウマ）の時、馬の汗流れて、胸繫（ムナガイ）より爪先に至ること。（二汗（フタアセ）・三汗（ミアセ）に對して）

ひと-あたり　人當【名】**ひとづき**（人附）に同じ。浮世風呂「人當は、言分（イヒブン）なし」

ひと-あつかひ　人扱【名】**ひとあしらひ**（人あしらひ）に同じ。

ひと-あつめ　人集【名】興業者などが、呼びたてて、人を集むること。

ひと-あて　一當【名】一度仕掛けて試むること。保元「汝、向って、一當當てて見よ」

ひと-あと　人跡【名】人の足跡。人跡（ジンセキ）。

ひと-あな　人穴【名】㊀太古、人の棲みてありし洞穴。㊁火山の麓にある洞穴。熱のために熔解せる岩石の、外部は冷却し、内部の凝結せざる部分の溢れ出でたるあとに生ぜるもの。富士山の麓にあるものの如き、有名なり。

ひと-あな　人孔【名】**まんほおる**㊀に同じ。

ひと-あなづられ　人侮【名】人に侮らるること。源氏「近き程に交らひては、なかなか、いと目馴れて、人あなづられなる事どもぞあらまし」

ひと-あなづり　人侮【名】人を侮ること。著聞「法師めが、人あなづりして」

ひと-あひ　人間【名】**ひとづき**（人附）に同じ。平家「人間・心樣、誠に優なりければ」

ひと-あんしん　一安心【名】ちょっと安心すること。

ひと-あめ　一雨【名】一度の降雨。ひとさめ。

ひと-あらため　人改【名】人（通行人など）を調べただすこと。一代男「つまりつまりに番を据ゑ、かかる人改なるぞ」

ひと-あれ　一荒【名】一しきり吹き荒るること。夫木「一あれの風より後はしづまりて竹の葉しらむ夕暮の空」

ひと-い　一寢・一寐【名】ひとねむり。一睡。〔古語〕貫之集「慰めてひといだにねん月影に山時鳥鳴きもゆかなん」

ひと-いかだ　人筏【名】人を、筏の如く、水上に浮ばしむること。吉野忠信「吉野川に人筏流して遊ばん」

ひと-いき　人息【名】人のつく息。人の呼吸。

ひと-いき　一息【名】㊀一度の息つぎ。一呼

吸。［二］一度吸ひ込む息の間。一氣。「一いきに飲む」［三］休まず、勢に乘じて續けなすこと。一氣。一擧。「一いきに攻む」［四］一度力をこむること。今すこしの努力。「今一いきで出來上る」

一息突く【句】一度、息を突く。ちよっと休息す。用明天皇職人鑑「馬乘にしっかと乘り、一息、ほっとついたるは」

ひと-いきれ 人熅【名】多人數混雜して、暑きこと。

ひと-いくさ 一軍【名】一度のいくさ。一戰。平治「かかる大事を思ひ立ちて、一軍だにせず」

ひと-いちばい 人一倍【名】世間普通の人に比べて、倍ほど多きこと。

ひと-いぢめ 人窘【名】人をいぢむること、又その事柄。

ひと-いでに【副】ひとりでに（獨手に）に同じ。〔俚語〕

ひと-いはひ 一齋【名】一箇處祀りてあること。一社。〔古語〕宇治拾遺「神社をぞ、一いはひすゑてあなる」

ひと-いへ 一家【名】家内殘らずの者。家内中。擧家。全家。大鏡「ひと家、いみじき事におぼし亂れしほどに」宇治拾遺「ひと家、泣きののしる」

ひと-いれ 人入【名】昔、大名屋敷・旗本屋敷などに、折助（ヲリスケ）の雇人を周旋せしこと、又その職業の者。

ひと-いれ-かげふ 人入稼業【名】雇人周旋の業を營むこと。

ひと-いれ-やど 人入宿【名】雇人の周旋を業とする宿。慶庵。

ひと-いろ 人色【名】にくいろ（肉色）に同じ。敎訓抄「人色の面、眉白」

ひ-とう 飛騰【名】とびあがること。

ひ-どう 飛動【名】とびうごくこと。

ひ-どう 被動【名】〔語〕しよどう（所動）に同じ。

ひ-どう 悲慟【名】悲しみて慟哭すること。

び-とう 鼻頭【名】びたん（鼻端）に同じ。

び-どう 美童【名】［一］美貌なる兒童。美少年。［二］美しき若衆。五人女「さても、世に、かかる美童もあるものぞ」若風俗「見るにまばゆき程の美童なり」

び-どう 微動【名】少し動くこと。かすかにゆるること。

びどう-がね びどう金【名】『みづをがね（水緒金）の訛』かこがしら（鉸具頭）に同じ。

ひ-とうき-しや 被登記者【名】身分登記簿に登記せらるる人。

ひどう-くわう 砒銅鑛【名】〔鑛〕『英 Domeykite』成分は銅と砒素とにして、白色又は灰色を呈し、金屬光澤を有する鑛物。空氣中にては、淡黃褐色などを呈す。硬度は三乃至三・五、比重は七・二乃至七・八。

ひと-うけ 人受【名】他人の氣受（キウケ）。他人の信用。

ひと-うけ 人請【名】奉公人・雇人などの身元保證。

びどう-けい 微動計【名】びしんけい（微針形）に同じ。

ひとうけ-しようもん 人請證文【名】みもとひきうけしよう（身元引受證）に同じ。

びとう-じしう 尾藤二洲【名】〔人〕儒者。名は孝肇、字は志尹、通稱は良佐（リヤウスケ）。別に約山・靜寄軒・流水子とも號す。伊豫國の人。初、片山北海に就きて、復古學を學び、後、專ら朱子の學を奉ず。文章を巧にす。昌平黌の敎官となり、古賀精里・柴野栗山と共に、寬政の三博士と稱せらる。文化十年歿す。年六十九。

ひと-うち 一打・一擊【名】［一］一度打つこと。［二］ただ一度にて打ち伏せ、又は切り捨つること。

ひと-うち 一內【名】或家又は場所の內部の全體。今昔「音（コヱ）は、……、物言へば、一內響きてぞ聞えける」

ひと-うとし 人疎し【形二】人に親しまず。他人に馴れず。〔古語〕源氏「この姬君は、かく人うとき御癖なれば」

ひと-うま 人馬【名】［一］德川時代の初期に流行せし、一種の曲藝。［二］能（ノウ）の狂言の一。或大名、冠者を新に增し抱へんとし、新參の者に、得意の藝能を問ふに、人を馬に變らしむべき由の答を得、故參の冠者の身に、その術を試みしめしに、額のみは、藥液によりて馬らしく變らしめ得たれど、その他は元のままにて、失敗して逃げ去る事を作れるもの。

ひとうら-ごろも 一裏衣【名】裏の一重なる衣。一說に、「ひたら衣」と訓むべしとも、「ひづらの衣」と訓むべしともいふ。〔古語〕萬葉「赤ぎぬの一裏衣長くほりわが思（モ）ふ君が見えぬ頃かも」

ひと-うり 人賣【名】人商（ヒトアキナヒ）に、かどはかされたる者を賣る人、又その行爲。（人買に對して）狂言（磁石）「そっと起きて、立聞してゐたれば、人賣に出逢うた」

ひと-えらみ 人選【名】次條に同じ。一茶「人選して一人なり花の陰」

ひと-えり 人選【名】人をえらぶこと。人選（ニンセン）。源氏「人えりして、いらへなどはせさせよ」

ひと-おき 人置【名】元祿時代に、雇人周旋屋などにて、一時奉公人を宿らせ置きしこと、又それを職業とせし人。一代女「その道を鍛錬したる人置、竹屋町の花屋角右衞門」置土產「人置仲間の使して、手かけ奉公人の著替を持って供するも、口惜しからず」

人置の嚊（カカ）【句】次條に同じ。二代男「人置の嚊が、平（ヒラ）に物せよ」

ひとおき-かか 人置嚊【名】ぜげん（女衒）に同じ。

ひと-おし 一押【名】［一］一度押すこと。［二］〔商〕一旦は下落すること。（一上（ヒトアゲ）に對して）〔取引所の語〕

ひと-おぢ 人怖【名】ひとおめ（人怖）に同じ。

ひと-おと 人音【名】人の居り、又は來る音。萬葉「朝日照る島のみ門におぼほしく人音もせねばまうらがなしも」醒睡笑「人音、數多くして、かの堂に來り」

ひと-おどし 人嚇【名】人をおどすためにすること、又その物。女殺油地獄「人おどしの、腕（カヒナ）に色色の彫物して」

ひと-おに 人鬼【名】鬼の如き殘忍なる心を有し、又その行をなす人。

ひと-おめ 人臆【名】小兒などの、見知らぬ人を見て怖るること。ひとおぢ。賀古敎新七幕遡「稚き癖の面嫌（オモギラヒ）、人おめせしも、おのづから、共に冥途の友達」

ひと-おもて 人面【名】人の顏。〔古語〕空穗「人おもても知らず、口をしうなりぬ」

ひと-おもひ 一思【名】ちよっとの間のくるしみ。天の網島「刃（ヤイバ）で死ぬるは、一おもひ」

ひとおもひ-に 一思に【副】思ひ立ちたるに任せて。寧ろ一度に。斷然。「一おもひに、喉を突いて死ぬ」

ひと-が 人香【名】人のにほひ。〔古語〕源氏「ほそ長の、人がなつかしう染（シ）みたるを」

ひとかい-ぶね 一櫂船【名】最初に漕ぎ出だす船。謠曲（自然居士）「一櫂舟とは僻事（ヒガゴト）か」

ひと-かかへ 一抱【名】一度かかふるほどの容積。

ひと-がき 人垣【名】［一］古、儀式の時などに、人を、垣の如く立ち並ばしめしこと。儀式帳「人垣仕奉男女」［二］上古、貴人の陵墓に、殉死者を、陵墓の周圍に生埋にし、又は、それに代へて、埴輪（ハニワ）を立て並べしこと。記「倭日子命（ヤマトヒコノミコト）この王（ミコ）の時、始めて、陵（ミハカ）に、人垣を立てたりき」

ひと-かげ 人影【名】人の影。人の姿の、映りて見ゆるもの。空穗「人影もせずありしを思ひ出でたまふに」

ひと-かさ 人量【名】人かず。にんず。

ひと-かさ 一嵩【副】ひときは（一際）に同じ。

ひと-かざり 一飾【名】臺子・供餅・蓮臺の三者の具はれること、又その物。

ひと-がしら 人頭【名】されかうべ。髑髏。〔古語〕和名「髑髏、俗云、比度加之良」

ひと-かず 人數【名】［一］人の數。人數（ニンズ）。人員。［二］『「人と數へらる」を見よ』然るべき人人の一人として數へらるること。ひとなみ。源氏「右近は、何の人數ならねど、……、らうたき者におぼしたればにや」十訓「人かずなる由をもてなしたまひければ、いみじき面目にて」

ひと-かすみ 一霞【名】［一］一すぢの霞。基佐集「ひと霞野中の庵にたなびきて烟にま

がふ朝あけの空」㊁見渡す限の廣き土地。日本振袖始「あの樋(ヒ)の口から、むかふの松まで、一かすみ讓りし上田」

ひと-かすみ 一霞【副】ひときは(一際)に同じ。增鏡「遙かに漕ぎ出だすほど、今一かすみ心細うあはれにて」

ひと-かせぎ 一稼【名】一度稼ぐこと。狂言(雷)「一稼かせいで見よう」

ひと-かた 一肩【名】㊀駕籠など、前方と後方とに分れてかつぐ場合の一方。㊁負擔の一部分。分擔。

ひと-かた 一方【名】いっぱう(一方)に同じ。源氏「今一方は、ぬし强くなるとも」

一方ならず【句】一とほりならず。なみなみならず。なのめならず。さまざまに。拾愚「ふる里の時雨につけてことづてよ一かたならず思ひやるとは」謠曲(通小町)「夕暮は一方ならぬ思かな」

一方一方【句】何れか一方。源氏「一かた一かたにおぼし定めよ」

ひと-がた 人形【名】㊀にんぎやう(人形)に同じ。和名「史記云、土偶人・木偶人、俗云二比止加太一」㊁かたしろ(形代)㊀㊁に同じ。〔古語〕源氏「陰陽師召して祓へさせたまふ。舟に、ことごとしき人がた乘せて流すを見た」夫木「いかにせんわれからさきの夏祓その人がたの數ならぬ身を」㊂人相。人相書。

ひと-がた 人方【名】ひとたち(人達)に同「じ。

ひと-がたき 人敵【名】人の敵となること。あだ。かたき。榮花「人がたきは取らぬこそよけれ」

ひと-かたち 人形【名】ひとがた(人形)㊁に同じ。名義抄「人形、ヒトカタチ・カタシロ」

ひと-かたな 一刀【名】一うちに斬り、又は刺し通すこと。天の網島「鍔元まで差し通したる一刀」

ひと-かたまり 一塊【名】一つにかたまりてあること、又その物。

ひとかた-や 人形屋【名】古、相撲(スマフ)を取るべき場所より三四間離れて、人の圓形に並び居し所。

ひと-かたゐ 人癩【名】精神上の不具者。盛衰記「人と生れて、仁義を顧みず、恥を知らざる者をば、人癩と云ふ」

ひと-がち 人勝【名】人數の多きこと。狹衣「人がちにむつかしとおぼせど」

ひと-かど 一角【名】㊀一つのかど。㊁特にきはだちて見ゆること。並すぐれたること。ひとふし。いっかど。〔一廉〕室町千疊敷「一かど大名に取立てる契約」

ひと-かどひ 人勾引【名】人をかどふこと、又それを職業の如くになしをる者。かどはかし。ひとあきなひ。ひとかひ。東鑑「人勾引事、有二其沙汰一。兄弟者不レ可レ爲二人勾引之儀一。以二他人一可レ爲二人勾引一也。其科准二盜犯一」

ひと-かは 一皮【名】㊀一枚の皮。皮一重。㊁うはべのみなること。淺薄。甲陽軍鑑「一段がさつにて、……、何事も一かはばかりに分別し」

ひと-がはり 人代【名】だいにん(代人)に同じ。空穗「あやしの人代や」

ひと-かひ 人買【名】人商(ヒトアキナヒ)より、そのかどはかしたる者を買ひ取る人、その行爲。(人賣に對して)尺素往來「勾引(カドヒ)・辻斬」謠曲(自然居士)「人買と申しつるは」

ひと-がひ 人甲斐【名】人の人たる資格。人らしきしるし。謠曲(烏帽子折)「人がひもなき今の身を語れば、主從と知らるるぞ」

ひとかひ-ぶね 人買船【名】人買の乘れる船。謠曲(自然居士)「この船をば、何船と御覽じて候ふぞ。その人買船の事ざふよ」

ひと-かへり 一返【名】㊀一度。一回。一返(イツペン)。謠曲(絃上)「今一かへりも鹽汲めや人人」

ひと-かへり 一返【副】ひとしほ。一層。ひとかさ。狹衣「今一かへり、悲しさの數添ふここちしたまひて」

ひと-がほ 人顏【名】人の顏。人のすがた。一代男「明日(アス)の夜は、人顏の見ゆる内も、苦しからず」若風俗「霜月廿四日の曙前、未だ人顏も見えわかず」

ひと-がまし 人がまし【形二】㊀普通の人間らし。一人前らし。人らし。人人し。

人めかし。盛衰記「ふたら詞を主に言はせて、人がましき」鴉鷺合戰「振舞の拙さ、食事のきたなさ、何を見るも、人がましからず」㊁一かどの人物らし。人に知られをる程なり。人人し。人めかし。榮花「人がましき名僧などは」

ひと-かまへ 一構【名】一軒の家。增補手習鑑「九重近き片ほとり、新に建てし一かまへ」

ひとかみ-いぬ 人噛犬【名】ひとくひいぬ(人喰犬)に同じ。狂言(月見座頭)「人噛犬ぢやといふが、はて、氣味の惡い事ぢや」

ひとかみ-うま 人噛馬【名】ひとくひうま(人喰馬)に同じ。

人噛馬に乘ったやう【句】「人喰馬(ヒトクヒウマ)に乘ったやう」に同じ。〔諺語〕

ひと-かんがへ 一考【名】一度考ふること。ちょっと考ふること。一考(イツカウ)。一工夫。一思案。一分別。一了簡。

ひと-がら 人柄【名】㊀ひとざま。じんぴん。品格。人物。鳩翁道話「親を泣かせたり、弟を憎んだり、……、御當所には、さやうの人柄はござるまいけれども」㊁すぐれたる人品。よき人物。

ひと-かり 人借【名】人を借ること。人を借りて使ふこと。雙生隅田川「再再人を借る故、人借の總太と異名附けしを」

ひ-とき 日時【名】日と時と。時日。〔古語〕續後紀「茜さすひねもすがらにぬば玉のさ夜通すまで日時經て思へる時に」

ひと-き 一木・一樹【名】一本の樹。一本立ちてある木。榮花「數へやる方こそなけれ住吉の松の千とせは一木ならねば」謠曲(熊坂)「あれに見えたる一木の松」

一樹の陰(カゲ)も契【句】「一樹(イチジユ)の陰、一河の流も他生の緣」に同じ。〔諺語〕文明五年親長卿家百卅番歌合「暮れにけりひときの陰も契ぞと山路の花に宿や借らまし」

ひと-き 棺【名】『人城(キ)の義』ひつぎ(棺)に同じ。〔古語〕和名「棺、比度岐」

ひと-ぎき 人聞【名】ぐわいぶん(外聞)㊀に同じ。源氏「いまいましき身の添ひたてま

つらんも、いと人聞うかるべし」

ひと-きざみ 一刻【名】㊀一段。一階級。ひとくらゐ。源氏「今一きざみの位をだにと、贈らせたまふなりけり」㊁一かどの者。第一位。源氏「御前の御遊などに、一きざみに選ばるる人人」

ひと-きは 一際【名】ただ一つのわけ。簡單なる理由。源氏「世の中はいと常なきものと、一きはに思ひ定めて」

ひと-きは 一際【副】ひとかさ。ひとしほ。ひとくらゐ。更に。一層。源氏「一きは人の目を驚かして」同「位高く、時世(トキヨ)の寄(ヨセ)、今一きはまさる人には」

ひとき-ぼうこう 一季奉公【名】一季を期限として奉公すること。にき(二季)㊁參照。三河物語「一季奉公をして、世をめぐるもあり」

ひと-きやう 一京【名】京都の全部。京中。蜻蛉「ひと京響きつづきて」大鏡「一京まかりありきて」

ひと-ぎらひ 人嫌【名】人に逢ふことを「嫌ふこと。

ひと-きり 人切・人斬【名】㊀人を斬ること。㊁罪人を斬るを職とする人。くびきり。

ひと-きり 一切【名】㊀一つの區切。ひとくさり。ひとっきり。一段。一段落。㊁ひところ。ひとっきり。一時。

ひときり-ばうちやう 人切庖丁【名】かたな(刀)の異稱。〔俚語〕

ひと-きりやう 一器量【名】一かどの器量。一種の才力。ひとこぶし。壽の門松「一器量ある男」

ひと-きれ 一切【名】一つのきれ。僅かのきれ。一片。平家「綴延(オリノベ)を一きれもえぬ我等さへ薄恥をかく數に入るかな」

ひと-ぎれ 人切【名】㊀僅かの人。人のはしくれ。ひとげ。一代女「向は五加木(ウコギ)の生垣にて、人切なし」㊁人足(ヒトアシ)の絶ゆること。通行者のとだゆること。人の來ぬこと。ひとだえ。

ひとき-をり 一季居【名】ひときぼうこう(一季奉公)に同じ。一代男「一季をりの女」

ひ-とく 非德【名】はくとく(薄德)に同じ。

ひ-とく 否德【名】ふとく（不德）に同じ。

ひと-く【感】『人の來る義に聞きなしていふ』鶯の鳴聲。〔古語〕 古今「梅の花見にこそ來つれ鶯のひとくひとくといとひしもをる」

ひ-どく 披讀【名】書籍・書狀などを披（ヒラ）きて讀むこと。

び-とく 美德【名】すぐれたる德行。

ひと-くくり 一括【名】一つに括ること、又その括りたる物。一括（イックワツ）。

ひと-くさ 人草【名】あをひとぐさ（靑人草）に同じ。〔古語〕 和名「人民、日本紀云、比止久佐、一云、於保太加良」

ひと-くさ 一種【名】いっしゅ（一種）に同じ。 空穗「指貫（サシヌキ）を脱ぎたてまつりたまへば、いなや、今一くさとのたまへば」

ひと-くさ【名】〔植〕しやくやく（芍藥）に同じ。〔古語〕

ひと-くさし 人臭し【形二】㊀人間らしき臭す。 狂言（朝比奈）「人くさい。罪人が來たさうな」 ㊁人間らし。人めかし。

ひとくさ-もの 一種物【名】いっすもの（一種物）に同じ。 輔親集「藏人所の人人、一くさ物して參れといへるに」

ひと-くさり 一齣【名】遊藝などの一きり。一段落。

ひと-くせ 一癖【名】㊀一つの癖。㊁その人の、尋常ならぬ賦性。「一癖ある顏つき」

ひと-ぐせ 人癖【名】人のくせ。各自の性癖。

ひと-くぜつ 一口說【名】一度仕掛くる口說。 曾我虎が磨「お的……馴染は無くとも一口說」

ひと-くち 一口【名】㊀一度口を開きて、飲食し又は語ること。少しく飲食し、又は語ること。 義經記「一口笑ひたれば」 八笑人「ちよっと、一口、元氣を附けていかう」 ㊁多くの中の一つ。一部分。 八笑人「出目（デメ）公も、一口やってくれるだらう」

ひと-ぐち 人口【名】㊀人のうはさ。世間の評判。ひとごと。人口（ジンコウ）。 ㊁人の口まへ。他人の甘言。

ひとくち-あきなひ 一口商【名】㊀一言の下に賣買の決定する商。㊁一言の下に、諾否を決せしむること。 國姓爺「頼まれうか頼まれぬか、一口商。いやと言はば、即座の敵」

ひとくち-うた 一口歌【名】つづしりうた（戲歌）に同じ。

ひとくち-じやうるり 一口淨瑠璃【名】座興などに、淨瑠璃中の、僅かに一くさりを語ること。

ひとくち-なす 一口茄子【名】一口に食ひ得るほどの小き茄子。花落（ハナオチ）の茄子。 柳樽「橋の鬼一口茄子も追っぱらひ」

ひとくち-なすび 一口茄子【名】前條に同じ。

ひとくち-に 一口に【副】㊀飲食するに、ただ一度口を開きて。 伊勢「鬼、はや一くちに食ひてけり」 ㊁簡單なる言葉にて。一言の下に。一概に。「一口に評し去る」 ㊂性質・種類などの異なる物事を、同類の物事と考ふるが如き口ぶりにて。ひとつくちに。 狂言（竹子爭）「竹の子と牛の子とは、一口には言はれまい」

ひとくち-のみ 一口飲【名】一口に飲むこと。ぐいのみ。 酒飯論「しめ飲・荒飲・一口飲」

ひとくち-ばなし 一口話【名】㊀ひとつばなし（一話）に同じ。 一代女「道すがらの一口咄にも、人の耳をこすりて」 ㊁ちよっとしたる滑稽ばなし。短き笑話。

ひとくち-へんじ 一口返事【名】簡單に言ひ切りて返事すること。すげなき返事。 鎌田兵衞名所盃「身はずんど息災で、藥湯などは嫌だと、一口返事に、ぎよっとして」

ひとくち-まぜ 一口交【名】話の一くぎりごとに言ふこと。「一口まぜに譽める」

ひとくち-もの 一口物【名】一口に食ひ得るほどの、少しの物。

一口物に頰を燒く【句】かりそめに手を著けしために、意外の失敗を招く譬。〔諺語〕 八犬傳「我に一碗振舞ひし一口物に頰を燒かれて、取逃せしこそ口惜しけれ」

ひと-くづ 人屑【名】人間として、價値なき者。 東海道名所記「かかる人屑ならば、中中、親のため、子無きにはしかず」

ひと-くづれ 人崩【名】集まりたる多人數の、退散せんとして、混雜すること。 二代男「踊の人崩」

ひと-くどり 人來鳥【名】〔動〕『ひとくを見よ』うぐひす（鶯）㊀の異稱。 俗曲（花舞臺霞猿曳）「新玉の春ぞと告げて、人來鳥」

ひと-くに 人國【名】「人の國」㊀に同じ。〔古語〕 萬葉「人國はすみ惡しとぞいふすむやけくはや歸りませ戀ひ死なぬとに」

ひと-くに 一國【名】㊀一つの國。一箇國。 空穗「一くにを治むる程に」 ㊁その國全體。全國。

ひとくに-やま 人國山【名】〔地〕紀伊國西牟婁（ニシムロ）郡にある山。 萬葉「見れどあかぬ人國山の木の葉をぞおのが心になつかしく思ふ」

ひと-くばり 人配【名】人員の配置。てくばり。部署。

ひと-くひ 人喰【名】人に喰ひつくこと。人類の肉をくふこと。ひとくらひ。

ひとくひ-いぬ 人喰犬【名】人にくひつく惡癖ある犬。ひとくらひいぬ。ひとかみいぬ。 狂言（犬山伏）「人くひ犬がある」

ひとくひ-うま 人喰馬【名】㊀人にくひつく惡癖ある馬。ひとかみうま。 太平記驗鐙「乘らず乘らせぬ人喰馬」 ㊁ひとくひおほかみ（人喰狼）㊁に同じ。 中將威古跡之松「王子・御臺（ミダイ）の人喰馬、上座に、むづと押直り」

人喰馬に乘ったやう【句】「騎虎（キコ）の勢」に同じ。〔諺語〕

人喰馬にも合口（アヒクチ）【句】㊀人喰馬にても、能くこれに馴るる者あり。㊁無賴・強暴の者にも、意氣相投合する者はあり。〔諺語〕 膝栗毛「人喰馬にも相口の販元、太鼓を打って賣り弘めたる故、祥（サイハヒ）に乘人（ノリテ）ありて」

ひとくひ-おほかみ 人喰狼【名】㊀人にくひつく狼。㊁他人を巧に欺きて、自己の利をはかる者の譬。おほかみもの。ひとくひうま。

ひと-くふう 一工夫【名】一きはの思案。ひとかんがへ。一分別。

ひと-ぐま 人隈【名】人の居らぬ處。ひとま。〔古語〕 紫式部日記「誰もとりはづしては隱なけれど、人ぐまをも用意するに隱れてぞ侍るべき」

ひと-ぐんじゆ 人群集【名】ひとごみ（人込）に同じ。 河原達引「參（マヰリ）・下向の人群集」 根南志具佐「摑みあひ、組んづこけつの人群集、格子はめりめり」

ひと-くめん 一工面【名】ちよっと工面すること。

ひど-くめん 甚工面【名】非常なる遣繰（ヤリクリ）。

ひとくら-ずみ 一倉炭【名】いけだずみ（池田炭）に同じ。 毛吹草「攝津一倉炭、ヒトクラズミ（此所より、池田の市に出だして賣るなり。故に、これを、池田炭ともいふ）」

ひと-くらひ 人喰【名】ひとくひ（人喰）に同じ。 室町千疊敷「人喰の鬼女よ、蛇よ」

ひとくらひ-いぬ 人喰犬【名】ひとくひいぬ（人喰犬）に同じ。 醒睡笑「人くらひ犬のある處へは、何とも行かれぬ」

ひとくらひ-うま 人喰馬【名】ひとくひうま（人喰馬）に同じ。

ひと-くらゐ 一位【副】ひときは（一際）に同じ。 女殺油地獄「一くらゐ見事ごとではあるぞ」

ひと-ぐり 人繰【名】人の繰合（クリアハセ）。

ひ-どくりつ-きくわん 非獨立機關【名】〔法〕統治機關の一。直接に國家及び國民を拘束すべき意思を發表するを得ざるもの。例へば、帝國議會・樞密院・中央衞生會などの類。（獨立機關に對して）

ひと-ぐるし 人苦し【形二】人聞（ヒトギキ）惡し。外聞わろし。〔古語〕 取替「人ぐるしう聞きにくく物いひのありしはや」

ひと-くるしめ 人苦【名】人を苦しむること。 後拾遺「近江にかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼」

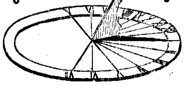
ひと-くるめ 一括【名】一つにとり集むること。ひとくくり。ひとまとめ。一括（イックワツ）。 國姓爺「帝も后も一くるめ」

ひと-け 一蹴【名】一度に蹴破り、又は蹴散らすこと。一蹴（イッシウ）。 鵜鷺合戰「山城守ほどの敵は、一けにも足らじ」

ひと-げ 人氣【名】人のけはひ。ひとい

き。源氏「ひたき屋、かすかに光りて、人げ少く」同「下(モ)つ方の京極わたりなれば、人げ遠く」

ひ-どけい 日時計【名】『英 Sun-dial』圓盤の周圍に、時刻を示す文字を刻み、その中心に針を立てたるを、日光の直射する處に、正午の印を南に向けて、水平に置き、盤上に生ずる針の影と周圍の文字とによりて、時刻を知る裝置。日晷儀。


（ひどけい）

ひと-げしき 人氣色【名】人の來り、又は居る樣子。ひとげ。源氏「人げしき見はべりなば、なかなかにいと惡しかりなん」

ひと-げづくり 一毛作【名】〔農〕いちまうさく(一毛作)に同じ。

ひと-げなし 人氣無し【形二】普通の人間らしく取り扱はず、又取り扱はれず。人がましからず。落窪「然(カシ)人げなく懲(チヨ)じたまふな」源氏「身は沈み、位ひくくて、人げなき恥を隱しつつ」

ひと-けぶり 人烟・人煙【名】『遠方より望めば、烟の如く見ゆるよりいふ』多人數の動き走るによりて、地上に立ちのぼる塵埃。今國姓爺「北の方より人烟、道を取りきられては不覺」

ひと-ご 一ご【名】鞠・遣羽子などを突く回數の第一回。俗謠「ひとごにふたご、みわたし、四めご」

ひ-どこ 火床【名】㊀木箱の中に、土を塗りて造りたる竈。ぬりがま。㊁竈・ボイラアなどの底部、即ち、その燃料を燃燒する所。

ひ-どこ 火所【名】『英 Fire-place』火を用ふる暖房裝置の、建築物に造り附けたるもの。「に同じ。

ひとこ-いと 一子絲【名】かたいと(片絲)に同じ。

ひと-ごこち 人心地【名】人らしき心もち。源氏「など、もろ共に出でては惜しみたまはぬ、さらばこそ人ごこちもせめ」

人心地出で來(ク)【句】「人心(ヒトゴコロ)附く」に同じ。盛衰記「やや勞り奉りければ、人心地出で來たまひて」

ひと-ごころ 人心【名】㊀人の心。人間の精神。新六「人心賴まれがたき狐矢はただそのままにまた音ぞせぬ」㊁ひとごこち(人心地)に同じ。㊂なさけ。情(ジヤウ)。情愛。人情。

人心附く【句】よみがへる。正氣(シヤウキ)づく。氣が附く。太平記「人心は附きたれども、流るる血、目に入りて」

人心に爲(ナ)る【句】前條に同じ。

ひと-こし 一腰【名】腰にさしてある一本の刀。ふたこし(二腰)參照。狂言(禁野)「諸ざむらひの一腰が、遣らるる物か」二代男「書置して、今はと、一腰拔く時」

ひと-こと 一言【名】一つのことば。一言(イチゴン)。簡單なることば。ひとくち。源氏「別るとて遙かにいひし一こともかへりて物は今ぞ悲しき」

ひと-ごと 人言【名】㊀他人のことば。世人の言ふ所。人言(ジンゲン)。後撰「人ごとはまことなりけり下紐の解けぬにしるき心と思へば」㊁人のうはさ。世間の評判。ひとぐち。人言(ジンゲン)。萬葉「ねもころに思ふ吾妹(ワギモ)を人ごとのしげきによりて絶えし頃かも」榮花「人ごとの、あるまじかりけるを」

ひと-ごと 人事【名】㊀他人に關する事。よそごと。狂言(暇袋)「人ごとを言ひ、特に大酒までたべて、醉狂を致し」㊁世間一般の事。人事(ジンジ)。

人事言はば、筵敷け【句】次條の轉訛。〔諺語〕重井筒「人ごと言はば筵敷け」

人事言はば目代(メジロ)置け【句】「壁に耳」に同じ。〔諺語〕曾我五人兄弟「人事言はば目代おけ。今申したる大磯の虎、あれ、あれ」

人事言はんより、我が蜂拂へ【句】他人の事をかれこれ評せんよりは、自己を省みよ。〔諺語〕

人事言はんより、我が胸を知れ【句】前條に同じ。〔諺語〕

人事言へば、影がさす【句】「噂をすれば影がさす」に同じ。〔諺語〕

人事言へば、人が來る【句】前條に同じ。〔諺語〕

人事で無い【句】やがて、我が身の災となりて現る事もあるべければ、他人の事と思ひて、油斷すべきに非ず。

人事と小侫(コハダ)【句】『結ひ樣に依るとの意に言ひかけたる語』物事は、言ひ樣に依り、いかやうにも感ぜしむる意の洒落(シヤレ)。〔諺語〕

ひとこと-ざか 一言坂【名】〔地〕遠江國磐田(イハタ)郡井通(ヰドホリ)村大字一言にある坂路。元龜三年十月、德川家康の、武田信玄の兵を迎へ擊ちし地。

ひと-ごと-に 人毎に【副】いづれの人も。毎人。各人。萬葉「人ごとに折りかざしつつ遊べどもいや珍しき梅の花かも」

ひとことぬし-の-かみ 一言主神【名】禮讓・敬虔の德を司るといふ神。素盞嗚(スサノヲ)尊の御子なりといひ、雄略天皇の大和國葛城(カツラギ)山に狩獵を試みたまひし時、山中に現れ、天皇の歸途を來目(クメ)川まで送れりと傳ふ。

ひと-ことわり 一理【名】いちり(一理)に同じ。運歩色葉集「一理、ヒトコトワリ」

ひと-こなし 一こなし【名】一言にけなすこと。世間娘氣質「女の口から、一こなしに言ひますが」

ひと-ごのかみ 人兄【名】一群の人の長。魁帥。首長。〔古語〕紀「魁者也(魁帥、此云二比登誤廼伽彌一)」

ひと-こぶし 一拳【名】㊀一度鷹を放つこと。心中宵庚申「殿には、今一拳遊ばし、お入り有るぞ」㊁ひときりやう(一器量)に同じ。

ひと-ごみ 人込【名】人のこみあふこと、又その場處。群集。雜沓。

ひと-ごや 人小屋【名】人の住む小屋。

ひと-ごろ 一頃【名】ひときり(一切)㊁に同じ。

ひと-ごろし 人殺【名】㊀人を殺すこと、又、人を殺したる人。殺人(サツジン)。狂言(胸突)「人ごろし。出合へ」㊁をとこごろし(男殺)に同じ。一代男「愛でての人殺、小金といふ

に約束して」若風俗「今の世の人殺め、生きながら墓へ遣らるるはと」

ひとごろし-ぐさ 人殺草【名】〔植〕とりかぶと(鳥頭)に同じ。

ひと-ころぶ 僭ふ【動四他】上位の者を、敬はず、勝手なる振舞をなす。僭上の行爲をなす。太平記駁鎧「武家、朝廷を僭(ヒトコロ)ひ、わが儘なる御位定、叡慮安からず」

ひと-ごゑ 人聲【名】人のこゑ。人の發する聲。人聲(ジンセイ)。

ひと-さがし 人探【名】人をさがすこと。

ひと-さかり 一盛【名】暫時の繁榮。一時の流行。古今「いざ櫻われも散りなん一さかりありなば人にうきめ見えなん」

ひと-さき-に 人先に【副】他人よりも先に。義經記「人先に内に入りて」

ひと-さき-へ 人先へ【副】前條に同じ。和合人「へん、そんな奴が、晩方には、人先へ青くなるものだ」

ひと-さし 一指【名】『昔、一文錢を、百枚づつ、緡(サシ)に貫きて、一本とせしよりいふ。ひやくざう(百銅)參照』錢百文の隱語。〔京都五山の僧などの語〕

ひと-さし 人差【名】ひとさしゆび(人差指)の略。名義抄「食指、ヒトサシ・ヒトサシノユビ」

人差の指(オヨビ)【名】次條に同じ。〔古語〕和名「食指、比斗佐之乃於與比。第二指也」

人差の指(ユビ)【句】ひとさしゆび(人差指)に同じ。名義抄「食指、ヒトサシ・ヒトサシノユビ」

ひとさし-ぐさ 人刺草【名】〔植〕いらくさ「(蕁麻)に同じ。

ひとさし-ゆび 人差指・食指【名】手の拇指と中指との間にある指。とうし。

ひと-さと 一里【名】その村里の全體。

ひと-ざと 人里【名】人の集まり住める處。さと。源氏「人里遠きところに」芭蕉「一さとは皆花守の子孫かや」

ひと-さま 人樣【名】たにん(他人)の敬稱。二代男「それこそ、思ひ當りたる人樣なり」八笑人「人樣のおっしゃる事も、親の言ふ事も」

ひと-ざま 人様・人狀【名】ひとがら。人品。〔古語〕竹取「人ざまもよき人におはす」源氏「人ざまの、あくまで思ひあがりたるさまの、あてなるに」

ひと-さめ 一雨【名】ひとあめ(一雨)に同じ。

ひと-さわがせ 人騷【名】はたさわがせ(傍騷)に同じ。

ひとし 等し・齊し・均し【形二】『ひと(一)に語尾の添ひたる語』㊀互に同じ。殆ど相同じ。伊勢「思ふことといはでぞただにやみぬべきわれとひとしき人しなければ」㊁亂れたる所なし。ととのひてあり。紀「齊二天下一、アメガシタヲヒトシクシテ」

と等しく【句】云云の時と共に。云云と同時に。太平記「打寄すると等しく、馬を踏み放ち、踏み放ち」

ひどし 【形一】㊀むごし。きびし。殘酷なり。㊁過度なり。甚し。てづよし。きつし。和合人「龜の尾の骨をついて、ひどくなやだつけ」

ひと-しあん 一思案【名】一度思案すること。ひとかんがへ。

ひと-しきり 一頻【副】暫時つづきて。一時。榮花「今一しきりのどよみの程、あさましきまでおどろおどろしきに」浮世風呂「一頻は、頭(ツム)の上へ、髷がおっかぶさってをりましたが、又、昔へ返って」

ひと-しぐれ 一時雨【名】時雨の一しきり降ること。風雅「秋寒き有明の空の一時雨曇るもつらきなさけなりけり」

ひと-しご 等碁【名】あひご(相碁)に同じ。〔古語〕枕「頭中將とひとしごなり。なおぼしわきそ」

ひと-しごと 人仕事【名】他人に雇はれてする仕事。浮世風呂「仕附けもしねえ人仕事をして、主を看病したよ」

ひと-しごと 一仕事【名】一度の仕事。ちよっと仕事をすること。

ひと-じこみ 人仕込【名】他人の手によりて教育せらるること。

ひと-じち 人質【名】㊀誓約又は親好の證として、妻子などを質として、先方に遣し置くこと。しよにん。東鑑「人質事有二沙汰一、被レ定二其法一」㊁人を質入すること。新編追加「人質事。……、任二證文一可レ流二質人一也」

ひとじち-くるわ 人質郭【名】古、本城の脇の後方なる空地を、四面を堅固に築き、一方に口をあけて、人質を置きし處。

ひとし-なみ 等並【名】なみ。同列。尋常一樣。普通一般。源氏「其奴(スヤツ)ばらを、ひとしなみにはしはべりなんや」

ひと-じに 人死【名】怪我(ケガ)などにて、人の死ぬること。若風俗「勸子の習とて、……、花といふ一字にて、自由に詠(ナガ)めらるる事なればこそ、人死の無けれ」

ひと-しほ 一鹽【名】魚・菜などに、淡く鹽を引くこと、又その鹽を引きたる物。

ひと-しほ 一入【名】『しほ(入)を見よ』染物を、染汁に、一回入れひたすこと。はつしほ。名義抄「一入、ヒトシホ」新六「しのぶてふただ一しほのすり衣淺きものゆゑ何亂れけん」

ひと-しほ 一入【副】『前條の語の轉義』ひときは。一層。一段。壬二「紫にいくへか染むる藤の花ひとしほまさる松の綠に」

ひとしほ-ずり 一入摺【名】一度摺り染むること、又その衣。新六「梅が枝の一しほ摺の小忌衣(ヲミゴロモ)色濃きよりも目にぞ立ちける」

ひとしほ-ぞめ 一入染【名】一入染むること、又その物。續古今「口なしの一入染の薄紅葉いはでの山はさぞしぐるらん」

ひとしほ-もの 一鹽物【名】魚・菜などの淡く鹽を引きたるもの。

ひと-しぼり 一絞【名】㊀絞るほどに濡れとほること。ずぶぬれ。狂言(どぶかっちり)「これは如何な事、一絞となった」㊁雨の、一しきり強く降ること。風雅「一しぼり雨は過ぎぬる庭の面に散りてうつろふ萩が花ずり」

ひとしむ 等しむ【動下二他】等しくす。齊しからしむ。〔古語〕撰集抄「然る上は、何しにか、俊忠の歌には等しむべき」

ひと-しめ 一締【名】一度締むること。盛衰記「二人をば、左右の脇に搔い挾んで、一しめ締めて」

ひと-しゆう 人主【名】人の主たる人。主。狂言(福渡)「人しゆうには成りたいもので御座る」

ひと-しゆから 一趣向【名】一つの趣向。一種のおもむき。曾我虎が磨「歌よみに見せばや、此處の一趣向」

ひと-じらし 人じらし【名】他人をじらすこと。膝栗毛「馬の沓がはかれるものか。人じらしな」

ひと-しれ-ず 人知れず【句】ひと(人)の條下を見よ。

ひと-ずき 人好【名】人のすくこと。人の好むこと。

ひと-ずくな 人少【名】人數の少きこと。榮花「廣き所に、人ずくなにおぼゆるままに」

ひと-すぢ 一筋【名】㊀一條。一本。枕「今一すぢ、御廚子(ミヅシ)のもとなりけるを取り出で」㊁一途(イチヅ)なること。源氏「いと若くおほどきたまへる一筋にて」㊂心だての單純なること。まっすぐ。無邪氣。染模樣妹脊門松「一筋な子供心で、埒もない事などして」㊂次條を見よ。

一筋ならず【句】「一方(ヒトカタ)ならず」に同じ。新千載「鵜舟さす夜河の手綱(タヅナ)ひきはへて一筋ならず物ぞ悲しき」

一筋では行かず【句】「一筋繩では行かず」に同じ。春花五大力「一筋ではゆかぬ源五兵衞」

ひとすぢ-がけ 一筋懸【名】平元結(ヒラモトユヒ)を、ただ一本、髮の根に懸くること、又その元結。元祿時代に流行せり。吉野忠信「小枕無しの高島田、一筋懸の隱結(カクシムスビ)」

ひとすぢ-ぎ 一筋氣【名】一途(イチヅ)に思ひ詰むる心。いっぽんぎ。ひとへごころ。持統天皇歌軍法「女心の一筋氣」

ひとすぢ-なは 一筋繩【名】㊀一筋の繩。㊁尋常の仕向方(シムケカタ)。普通の手段。

一筋繩では行かず【句】普通の手段にては、制御し難し。容易に手に乘らず。一筋では行かず。〔諺語〕

ひとすぢ-に 一筋に【副】ひたひら(只管)に同じ。盛衰記「一筋に、敵の打入らんずるを相待ちて」續古今「一すぢにいとふつらさは忘られて戀しきにのみ濡るる袖かな」

ひとすぢ-みち 一筋道【名】㊀一筋のみの道路。いっぽんみち。みち。假名手本忠臣藏「一筋道の後(ウシロ)から」㊁一直線。一向。一途(イチヅ)。

ひと-ずる 人摩る【動下二自】世なれて、生れつきの純眞なる氣質を失ふ。

ひと-せせり 人拼【名】人をせせること。人を弄ぶこと。兒教訓「人せせりして、口ききて」

ひとせ-まち 一畝町【名】一畝ばかりの田畑。狹き田畑。〔古語〕拾玉「山里の外面(ソトモ)の小田のひとせ町あらしめ延(ハヘ)て種蒔きにけり」(この歌、一本には「ひらせ町」とありて、「ひらせ」は「平畔(ヒラアゼ)」の略かといへど、「ひらせ」は誤なるべし)

ひと-ぜり 人競【名】互に先立たんとて、人人の爭ふこと。女殺油地獄「七八町行(イ)たれど、餘り人ぜり」

ひと-ぞう 一族【名】いちぞく(一族)に同じ。〔古語〕源氏「ひとぞうのみ、かへすがへす榮えたまふこと、限なし」

ひと-そぢ 一十【數】とを(十)に同じ。〔古語〕撰集抄「御年一そぢ餘とかや」

ひと-ぞなへ 人備【名】必要の方面に、然るべき人を備へ置くこと。

ひと-そばへ 人戲【名】人にそばふること。他人の前にて、調子に乘りて戲れさわぐこと。風來六六部集「念佛の聲、遠近(ヲチコチ)に響く人そばへの朝まゐり」

ひと-ぞめき 人騷【名】人の混雜して、かまびすしきこと。

ひと-そろひ 一揃【名】一組揃ふこと、又その揃ひたる物。つゐ。

ひと-ぞろひ 人揃【名】人數の揃ふこと。

ひと-ぞろへ 人揃【名】人數を揃ふること。

ひと-だえ 人絕【名】ひとぎれ(人切)㊀に同じ。一代女「この女房見に、暫時も人絕なくて、家榮え」

ひと-たがひ 人違【名】次條に同じ。吉野都女楠「これは人たがひ、目元・口元、義貞殿には似ても附かず」

ひと-たがへ 人違【名】ひとちがへ(人違)に同じ。源氏「人たがへにこそ侍るめれ」

ひと-だかり 人集【名】或物事を見んとて、その周圍に、人の寄り集まること。ひとだち。

ひと-だくさん 人澤山【名】人の澤山なること。人數の多きこと。

ひと-たけ 一丈・一長【副】すこしの高さだけ。盛衰記「入道は……、大納言に向ひて、一長押上りたる所に、尻打ちかけて」

ひと-だけ 人丈・人長【名】人の身の丈に等しき長さ。身長。太平記「人長に、人形を、二三十作って」

ひと-だすかり 一助【名】その人の身にとりて、一つの便利となること。平假名盛衰記「そこて、おらは、一だすかり、大船に乘った心」

ひと-だすかり 人助【名】或物事のために、世人の困難の救はるること。

ひと-だすけ 人助【名】他人の困難を救ひたすくること。

ひと-たち 人達【名】ひと(人)㊀の複數。ひとびと。

ひと-たち 一太刀【名】太刀にて、一度斬りつくること。一刀(イツタウ)。

一太刀恨む【句】一太刀斬りつけて、恨をはらす。

ひと-だち 人立【名】ひとだかり(人集)に同じ。狂言(磁石)「人立がある。何事ぢや」八笑人「この通り人立がして、外聞が惡い」

ひとだち-まぎれ 人立紛【名】人立の混雜にまぎれてすること。天の網島「人立まぎれに、ちよこちよこ走とっかはち屋へ駈けこめば」

ひと-だつ 人立つ【動四自】大人らしくなる。成人す。〔古語〕源氏「人だちたまひなば、おとどの君もたづね知り聞えたまひなん」

ひと-だね 人種【名】㊀あるだけの人の數。落窪「馬のやうに手な觸れたまひそ。人種の絶えたるぞかし」盛衰記「東西の城戸口(キドグチ)、人種は盡くるとも」㊁使用すべき人數。㊂じんしゆ(人種)に同じ。

ひと-だのみ 人頼【名】他人の力を頼(タノミ)にすること。一代男「用心時の自身番にも、人頼するこそあれ」

ひと-だのめ 人頼【名】そらだのめ(空頼)に同じ。〔古語〕古今「かつ越えて別れも行くか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ」

ひと-たび 一度【名】いちど。いっぺん。

一度澄める水【句】『「千代(ヨチ)に一たび澄む水」を見よ』世治まりて、のどかなるさまの譬。榮花「有栖川の一たび澄める水の心のどけき世に」

ひと-たび-に 一度に【副】一緒に。同時に。一度(イチド)に。源氏「内にも……、行幸あり……。春宮も……、一たびにと思しめしけれど、日をかへて渡らせたまへり」

ひと-だま 人玉・人魂【名】㊀流星、又は、燐火の尾を引きて飛び行くもの。一種の鬼火。古來、人の魂なりと思ひていへる語。萬葉「人魂の眞青(サヲ)なる君がただひとりあへりし雨夜は久しく思ほゆ」紀略「流星出レ自二空中一……觀者奇怪、謂二之人魂一」㊁昔の芝居にて、前項の人魂と見えしむるために、銅にて、丸き物を作り、火焰の形なせる透(スカシ)を彫り、これに赤紙又は紅絹(モミ)を貼り、中に蠟燭の灯を入れ、日覆(ヒオホヒ)に釣り上げて、呼絲にて動かすやうにせるもの。

ひと-だまひ 人給【名】㊀人人に給ふこと、又その物。空穗「いかで人だまひならん御几帳參らんに、いかに里へと取りに遣はするなん」㊁『從者に給ひて乘らしむる車の義』隨行者の乘る車。副車(ソヘグルマ)。後乘。〔古語〕和名「副車、曾閉久流滿。俗云、比度太萬比。後乘也」源氏「御車ども立てつづけければ、人だまひの奥におしやられて」

ひとだま-び 人玉火・人魂火【名】ひとだま(人玉)に同じ。

ひと-たまり 一溜【名】㊀戰に、一時踏みとどまりて支ふること。(打消の語を伴ふ)太平記「敵、一たまりもたまらず、谷底へまくり落ちて」㊁議論に、一時負けぬこと。(打消の語を伴ふ)

ひと-だまり 人溜【名】多人數の集まり控ふる所。ひかへ。

ひと-ため 人爲【名】他人のため。世人の利益。謠曲(仲光)「この度の御不審、人爲にあらず、かまひて、手習・學問、懇におはしませ」

ひと-だめし 人試【名】人を試むること。

ひと-たらし 人誑【名】人をたらすこと、又その行爲をする人。一代男「都の人たらしぞかし」一代女「旅泊の人詐(ヒトタラシ)」

ひと-ぢかし 人近し【形二】人の耳目に觸れやすし。(人遠しに對して)枕「檜(ヒノキ)人近からぬものなれど」

ひと-ちがひ 人違【名】次條に同じ。盛衰記「人ちがひか。所ちがひか。あやしき賤(シヅ)が庵なり」

ひと-ちがへ 人違【名】あらぬ人を、その人と誤認すること。ひとちがひ。ひとまちがひ。ひとたがひ。

ひと-ぢから 一力【名】㊀一度、力を出だすこと。運歩色葉集「一力、ヒトチカラ」㊁一度助力すること。

ひと-ぢから 人力【名】人の力。人力(ジンリヨク)。紀「功夫、ヒトチカラ」

ひと-ちぢみ 一縮【名】一言のもとに恐れ入ること。「一ちぢみになる」

ひ-どぢやう 緋鰌【名】〔動〕鰌の一種。色のやや赤きもの。信濃國野澤地方に產す。

ひと-つ 一【名】㊀その物事のみなること。單一。㊁同じきこと。同一。和名「母兄、波良比度豆能古乃加美」㊂ひとしきこと。似通ふこと。類似。甲陽軍鑑「前に強すぎたる大將、末に、弱き大將に一つなり」㊃器物一箇に入れてある物。狂言(靫猿)「飲め……。一つ御座ります」㊄二つ以上の物事の、相混じ、又は同時に合すること。源氏「けがらひ忌みたまひしも、一つに滿ちぬる夜なれば」㊅一方。一面。狂言(布施無)「一つは、この下心も御座り」

ひと-つ 一・一箇【數】數の始。いち。ひと。

一つ餘って、大津(オホツ)に戻る【句】道中雙六にて、賽の目の數、僅かに一つ多かりしため、殘念にも、上(アガリ)とならず、更に後退して、一つ手前の大津の驛の欄に入る。

一つ餘る【句】前條の略。蕪村「短夜や一つ餘りて志賀の松」

一つとせ【句】次條に同じ。

一つとや【句】㊀數歌(カゾヘウタ)㊁の發端にいふ語。御伽草子(和泉式部)「一つとや、ひとりまろ寢の草枕袂しぼらぬ曉もなし。二つとや、ふたへ屛風の內に寢て戀しき人をいつか見るべき」㊁かぞへうた(數歌)㊁に同じ。

一つになる【句】㊀一緒になる。合同す。㊁惡事を企てなどして、心を合はす。ぐるになる。中將姬古跡の松「さては、繼母と一つになり、無實で科(トガ)を重ぬるかの」

ひと-つ 一【副】一回。ちよっと。すこし。一代男 狂言(鈍根草)「寒い程に、一つ飲まう」「一つ成(ナ)る口なれば……、小盃でてんがう飲」

ひとつ-あな 一穴【名】㊀同じ穴。㊁穴を同じくして棲むこと。同穴。㊂死を共にすること。同穴。重帷子「一つ棺に一つ穴、互に心を合はせてて」

一つ穴の狐【句】次條に同じ。膝栗毛「貴樣も、一つ穴の狐だ」

一つ穴の貉(ムジナ)【句】『漢書の楊惲傳に「古與レ今如二一丘之貉一」とありて、顏師古の註に「言二其同類一也」と見ゆ』心を合はせて、事をたくらむ者を罵りていふ語。

ひとつ-あふぎ 一扇【名】紋所の一。開きたる扇の、要(カナメ)を下にして描けるもの。

ひとつ-あふひ 一葵【名】紋所の一。葵の葉を、一枚描けるもの。

ひとつ-あゆ 【名】『あゆのかぜ(あゆの風)を見よ』きたかぜ(北風)を云ふ。〔北國の方言〕

ひとつ-いかり 一碇【名】紋所の一。碇を、一箇描けるもの。

ひとつ-いし 一石【名】紋所の一。一箇の正方形を描けるもの。

ひとつ-いたらがひ 一伊多良貝【名】紋所の一。伊多良貝を、一箇描けるもの。

ひとつ-うちは 一團扇【名】紋所の一。團扇を、一箇描けるもの。

ひとつ-いほ 一庵【名】人里離れて、ただ一つある庵。ひとつや。若風俗「けうとき鹿の通路(カヨヒヂ)……隱坊(オンボウ)の住めるひとつ庵」　「一箇を描けるもの。

ひとつ-うめ 一梅【名】紋所の一。梅の花

ひとつ-うろこ 一鱗【名】紋所の一。一箇の三角形を、一片の鱗に擬へて描けるもの。

ひとつ-えり 一襟【名】衣を二枚以上重ね著る時、一枚の如く見ゆるやうに、下の衣の襟を、上の衣の襟にて包み隱し、一枚なるが如く見せたるもの。

ひとつ-えり 一選【名】一つづつえり抜くこと、又そのえり抜きたる物。ひとつぶえり。精選。吟味。博多小女郎浪枕「一選の大人參、一斤あまり投げ出し」

ひとつ-おぼえ 一覺【名】理解力鈍くして、一つづつ、念入りに覺ゆること。諺「馬鹿(バカ)の一覺」

ひとつ-がき 一書【名】㊀はなちがき(放書)に同じ。狹衣「娘のひとつがきなれば、散らさじとて」㊁いちうち(一打)㊁に同じ。甲陽軍鑑「ひとつ書にて言上致せ」

ひとつ-がさ 一笠【名】紋所の一。緒の附きたる笠を、一箇、側面のやや下部より見たる形に描けるもの。播磨國舊林田藩主建部(タケベ)家の定紋として名高し。

ひとつ-がしは 一柏【名】紋所の一。柏の葉を、一枚描けるもの。

ひと-つかね 一束【名】一つに束ぬること。ひとまとめ。ひとたば。

ひとつ-がね 一鐘【名】一回打鳴らす鐘の音。芭蕉「さらでさへ秋よ野寺の一鐘」

ひと-つがひ 一番【名】㊀一つのつがひ。㊁番舞(ツガヒマヒ)にて、左右、各、一曲づつ奏すること。

ひとつ-がひ 一買【名】一選(ヒトツエリ)にして買ふこと。嫗山姥「傾城の一買も仕り」

ひと-づかひ 人使【名】㊀つかひ。使者。

書聞「所所、人づかひを走らかして」㊂人を使役すること、又その方法。〔人遣〕狂言(止動方角)「御慈悲が深い。その上、人遣はよし」

ひとつ-かぶ 一蕪菁【名】紋所の一。葉の五枚附ける蕪菁を、一箇描けるもの。

ひとつ-がま 一鎌【名】紋所の一。柄に緒の附きたる鎌を、一箇、刃を上部にして、左方に向けて、やや下方へ斜に描けるもの。

ひとつ-かまど 一竈【名】㊀一つのかまど。㊁同一のかまどにて煮炊すること。

ひと-つかみ 一摑・一攫【名】いっくわく(一攫)に同じ。

ひとつ-がん 一雁【名】次條に同じ。

ひとつ-かり 一雁【名】紋所の一。雁金を、一羽描けるもの。ひとつがん。

ひとつ-ぎ 一木【名】紋所の一。拍子木に象(カタド)りたるものを、一箇横に描けるもの。

ひとつ-ぎ 一著【名】衣類を、ただ一枚著ること。皇都午睡「三四月ごろ、一著の比も、他出には、薄綿にして」

ひと-づき 人附【名】㊀他人に應接する態度。つきあひぶり。交際ぶり。ひとあたり。ひとあひ。㊁他人の氣うけ。ひとうけ。ひとあたり。ひとあひ。

ひと-づきあひ 人附合【名】他人とのまじはり。ひとまじはり。交際。織留「分に過ぎたる人づきあひせず」

ひとつき-おき 一月置【名】一箇月づつ、間をおくこと。　「(月代)に同じ。

ひとつき-がはり 一月代【名】つきがはり

ひとつ-きね 一杵【名】紋所の一。杵を、一箇、縱に描けるもの。

ひとつき-まぜ 一月交【名】ひとつきおき(一月置)に同じ。　「音便。

ひとっ-きり 一切【名】ひときり(一切)の

ひとつ-くぎぬき 一釘抜【名】紋所の一。釘抜を、一箇描けるもの。

ひとつ-くちなし 一梔子【名】紋所の一。梔子の花を、一箇、上面より見たる形に描けるもの。

ひとつ-くちに 一口に【副】ひとくちに(一口に)㊂同じ。源氏「今は、一つ口に、詞なまぜられそ」

ひとつ-ぐも 一雲【名】紋所の一。一團の浮雲を、扁圓形に描けるもの。

ひとつ-くるま 一車【名】同一の車輛。源氏「宰相の君は……、大將の君、ひとつ車にて、道の程物語したまふ」

ひとつ-ぐるま 一車【名】その一臺より外には所有せぬ車。著聞「殿は、幾度も調じかへたまはんこと、易かるべし。家茂が一車を濡らしては、又、調へ難ければ」

ひとっ-くるめ 一括【名】ひとくるめ(一括)の音便。　「(微凸頭)に同じ。

び-とっけい 微凸形【名】〔植〕びとっとう

ひとっ-こ 人子【名】ひと(人)㊀に同じ。(但し一人もの意にて、打消の語を伴なはせて用ふ)〔關東の方言〕和合人「これ程の狹い家に、人っ子が一人居ねえは」

ひとつ-ご 一子【名】ひとつぶだね(一粒種)に同じ。〔古語〕萬葉「秋萩を妻といふ鹿こそひとつごふたつご持たりといへ」

ひとつ-こそで 一小袖【名】小袖を重ねずに、ただ一枚著ること。一著(ヒトツギ)の小袖。　「事。

ひとつ-こと 一事【名】同じ事。一樣の

一つ事は同じ事【句】言葉は換へても、指す所の事物は相同じ。〔諺語〕

ひとつ-ごま 一駒【名】紋所の一。將棊の駒を、一箇描けるもの。

ひとつ-ごま 一獨樂【名】紋所の一。側面のやや上部より見たる形の獨樂を、一箇描けるもの。　「音便。

ひとっ-ころ 一頃【名】ひところ(一頃)の

ひとつさげ-たばこいれ 一提烟草入・一提煙草入【名】烟草入を、革類・織物・羅紗などにて製し、烟管筒を添へずに、緒と根附とを附けて、帶に下ぐるやうにしたるもの。

ひとつ-ざし 一差【名】刀を、一本さすこと。二代男「朱鞘の一差」置土産「長柄(エナガ)の一差」

ひとつ-さみごま 一三味駒【名】紋所の一。三味線の駒を、一箇描けるもの。

ひとつ-じまひ 一仕舞【名】清酒の釀造にて、醪(モロミ)を、毎日製造すること。ひじまひ。

ひとつ-じやうど 一淨土【名】〔佛〕ひとつはちす(一蓮)に同じ。謠曲(柏崎)「西の空の、彼の國に迎へつつ、一つ淨土の緣となし」

ひとつ-しゆろ 一棕櫚【名】ひとつたちしゆろ(一立棕櫚)に同じ。　「に同じ。

ひとつ-すまひ 一住【名】あひずみ(相住)

ひとつ-たちしゆろ 一立棕櫚【名】紋所の一。棕櫚の葉を、一枚描けるもの。ひとつしゆろ。

ひとつ-たま 一玉【名】紋所の一。寶珠の玉を、一箇描けるもの。

ひとつ-ちがみ 一地紙【名】紋所の一。扇の地紙を、一箇描けるもの。

ひとつ-ちやうじ 一丁字【名】紋所の一。丁子を、一箇描けるもの。

ひとつ-ちやのみ 一茶實【名】紋所の一。茶の實を、一箇描けるもの。

ひとつ-つち 一槌【名】紋所の一。槌を、一箇描けるもの。

ひとつ-つないかり 一綱錨【名】つなつきいかり(綱附錨)に同じ。

ひと-つつみ 一包【名】金百兩。ひとはこ(一箱)參照。〔江戸時代の語〕

ひとつ-つるあふひ 一蔓葵【名】つるまるひとつあふひ(蔓丸一葵)に同じ。

ひとつ-つるがしは 一蔓柏【名】つるひとをりがしは(蔓一折柏)に同じ。

ひと-づて 人傳【名】他人を、仲介者を經て知ること。間接に聞き知ること。またづて。寄語。枕「人づてならで申すべき事なんといへば」

び-とっとう 微凸頭【名】〔植〕『英 Mucronate』葉先(エフセン)の一形。平扁にして、中央に、短小なる尖點の突起せるさま、恰も中肋の抽出せるに似たるもの。微凸形。

ひとつ-ところ 一所【名】ひとところ(一所)に同じ。　「の音便。

ひとっ-ところ 一所【名】ひとところ(一所)

ひとつ-どもゑ 一巴【名】紋所の一。巴を、一箇描けるもの。廻轉の方向によりて、左一巴・右一巴の二種あり。大織冠「一巴の波の音」

ひとつ-なみどもゑ 一波巴【名】紋所の一。はね上りたる形の波を、一巴のやうに圓く描けるもの。

ひとつ-ね 一寢【名】ともね。同寢。同衾。梅暦「不思議な縁で、兄弟となって、斯うして一寢も」

ひとつ-のほし 一星【名】ほくきよくせい(北極星)を云ふ。〔上總國の方言〕

ひとつ-ば 一葉【名】〔植〕㊀水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。根莖は細長くして、匍匐し、茶褐色の鱗毛密生し、常綠にして、夏、新葉を生ず。葉は質厚くして、八九寸餘の廣披針形を呈し、根莖より長き葉柄散生し、下裏面に子嚢群密生す。暖地の山野に自生し、又、觀賞用とす。いはぐさ。いはぐみ。いはがしは。いはし。いはのかは。かのしたぐさ。からひとつば。せきらん。〔石韋・石花〕㊁いぬまき(犬槇)に同じ。㊂ひとつばらん(一葉蘭)㊁の略。㊃ひとつばかへで(一葉楓)を云ふ。〔信濃國の方言〕

ひと-っぱ 一葉【名】ひとは(一葉)の音便。

ひとつ-ばうさう 一疱瘡【名】足又は掌などに、ただ一つ發疹する、輕症の疱瘡。

ひとつば-かへで 一葉楓【名】〔植〕槭科に屬する落葉喬木。高さ三丈に達し、葉は、卵形にして平滑、鋭尖頭にして、基部は深き心臟形をなし、細鋸齒を具ふ。五月頃、淡綠色の細花、複總狀花序をなして咲き、雙翅果を結ぶ。いたごかへで。いたぎ。ひとつば。まるばかへで。

ひとつ-ばさみ 一鋏【名】紋所の一。吳服鋏を、一箇描けるもの。

ひとつ-ばし 一橋【名】㊀いっぽんばし(一本橋)に同じ。和名「獨梁、比度豆波之。縱橫一本之梁也」六帖「津の國の難波の浦のひとつ橋君をし思へばあからめもせず」㊁『徳川家康入城の頃は、大なる一本橋なりしよりいふとぞ』ひとつばしもん(一橋門)を見よ。㊂『東京市神田區一橋通に在るよりいふ』東京商科大學及びその前身たる東京高等商業學校の俗稱。

一橋を渡るやう【句】危きことに瀕する譬。危き場合の譬。〔諺語〕

ひとつ-ばし 一橋【名】『江戸城一橋門内に、その邸宅ありしよりいふ』姓氏の一。徳川氏の支族。清水・田安兩家と共に、三卿の一。第八代將軍吉宗の第四子宗尹(ムネタヾ)を祖とす。その第九世慶喜(ヨシノブ)は、慶應二年宗家を襲ぎて、將軍となるや、尾州侯徳川慶勝の弟茂榮入りて、第十世となり、明治維新後、伯爵を授けらる。

ひとつばし-とよちよ 一橋豐千代【名】〔人〕とくがはいへなり(徳川家齊)の幼名。

ひとつばし-みつけ 一橋見附【名】一橋門にありし見張番所。

ひとつばし-もん 一橋門【名】江戸城の内郭諸門の一。神田橋の西に在りて、外濠(ソトボリ)の一端に在りしもの。橋を一橋といひ、神田橋と共に、麴町・神田兩區の間の交通路に當る。

ひと-っぱしり 一走【名】ひとはしり(一走)の音便。八笑人「今度の隱居役に、一っ走行って來て下っし」

ひとつ-ばた 一旗【名】紋所の一。中央に丸き印ある旗の、短き旗竿を添へたる形を、一箇描けるもの。

ひとつば-たご 一葉たご【名】〔植〕木犀科に屬する落葉喬木。高さ一丈に達し、葉は卵形又は楕圓形にて、對生す。梅雨の頃、白色・四裂の合瓣花、圓錐花序に排列して咲き、小形の核果を結ぶ。我國、尾張・伊勢・紀伊及び臺灣などに產し、支那にも生じ、稀に觀賞用として栽培せらる。あんにゃもんにゃのき。いちえふしんぴ。ろくだうのき。

ひとつ-はちす 一蓮【名】〔佛〕いちれん(一蓮)に同じ。保元「西方極樂に往生し、父御前(チチゴゼ)と、一つ蓮に生れ合ひ奉らん」天の網島「一蓮の頼には、一夏(イチゲ)に一部、夏書(ゲガキ)せし、大慈大悲の普門品」

ひとつ-ばなし 一話【名】折につけて語り出づる、一條の話柄。一代男「隨分物に驚かぬ人も、見て來ての一つ咄ぞかし」浮世風呂「私がひとつ話だが、……越後の雪と來たら、大怱(タイソウ)さね」

ひとつ-はね 一羽根【名】紋所の一。羽根を、一箇描けるもの。

ひとつば-ね 一葉根【名】〔植〕かぢめ(搗布)に同じ。

ひとつ-はばうき 一羽帚【名】紋所の一。羽帚を、一箇描けるもの。

ひとつば-はぎ 一葉萩【名】〔植〕大戟(タカトウダイ)科に屬する落葉灌木。高さ二三尺に達し、葉は全邊・長卵形にして、花冠無き小花開き、蒴果結ぶ。山野に自生す。にれはぎ。

ひとつ-はまぐり 一蛤【名】紋所の一。蛤の貝を、一箇描けるもの。

ひとつ-ばん 一半【名】火事の告知に、半鐘を、一打づつ、間をおきて打ち鳴すこと。遠き土地の出火を報ず。(二半(フタツバン)・三半(ミツバン)・擦半(スリバン)などに對して)

ひとっぱ-も 一つ葉も【副】すこしもいささかも。一寸も。浮世風呂「内の事は、一っぱも構はねえ」人間萬事嘘ばかり「一っ葉も、ろくそっぱうな事は無(ネ)え」

ひとつば-よもぎ 一葉艾・蘿蕪【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は長楕圓形にして尖り、不齊の鋸齒を有す。表面は淡綠色、裏面は白色を呈し、淡黃色の花、小頭狀花序に排列して開く。

ひとつば-らん 一葉蘭【名】〔植〕㊀いちえふらん(一葉蘭)に同じ。㊁ばらん(蜘蛛抱蛋)に同じ。

ひとつ-び 一火【名】㊀一片の火。孤燈。記「湯津津間櫛(ユツツマグシ)の男柱(ヲバシラ)一つ取闕きて、一火(ヒトツビ)燭(モト)して入り見ます時に」㊁一回の火入(ヒイレ)を行ひたる清酒。その後、貯藏中、なほ變味の兆ある場合には、更に火入を行ひ、これを二火(フタツビ)又は二番火といひ、三回目は、三火(ミツビ)又は三番火といひ、火入の度數多きに從ひて、色澤も、香味も劣化す。

ひとつ-びき 一引【名】次條の略。

ひとつ-ひきりやう 一引兩【名】ひきりやう(引兩)を見よ。太平記「一つ引兩に、三つすあまの笠印(カサジルシ)」

ひとつ-ひさご 一瓢【名】紋所の一。瓢を、縱に一箇描けるもの。

ひとつ-びし 一菱【名】紋所の一。菱形を、一箇描けるもの。

ひとつ-びとつ 一つ一つ【副】一つごとに。いちいち。蜻蛉「ひとつびとつをだになす事にはべらん」

ひとつ-びる 獨子蒜【名】蒜の根の一箇。分ち植うる時は、その年の内には、增殖せざるによりていふ。〔古語〕和名「獨子蒜、比度豆比流。一云、獨子葫」

ひとつぶ-えり 一粒選【名】㊀一粒づつえり拔くこと、又そのえり拔きたる物。春色惠の花「黃粉(キナコ)も、餡も、一粒選」八笑人「取卷いてゐるのは、どれも一粒えりだ。あっあ、りりしいもんだ」㊁ひとつえり(一選)に同じ。

ひとつぶ-がのこ 一粒鹿子【名】極めてこまかなる鹿子絞。根掛に多し。浮世風呂「おやおや、鬠結(マゲユヒ)の裁(キレ)だ。一粒鹿子かえ」

ひと-つぶぎん 一粒銀【名】一つの粒銀。一箇の豆板銀(マメイタギン)。續猿蓑(荻子)「引き結ぶ一粒銀や年の暮」

ひとつ-ぶくろ【名】〔植〕いちえふらん(一葉蘭)に同じ。

ひとつぶ-だね 一粒種【名】㊀雜種ならぬこと、又その物。純粹なる種。㊁ただ一人なる、最愛の子。ひとりご。

ひと-つぶて 人礫・人飛礫【名】人を捉へて、礫の如くに、輕輕と投ぐること。太平記「金乘を取って、中(チュウ)に差上げたれども、人飛礫に打つまでは、さすが叶はず」先代萩「寄りくる忍(シノビ)を人礫、ばらりばらりと投げ散らす」

ひとつぶ-より 一粒選【名】ひとつぶえり(一粒選)に同じ。

ひと-っぷろ 一風呂【名】ひとふろ(一風呂)の音便。

ひとつ-へいじ 一瓶子【名】紋所の一。瓶子を、一箇描けるもの。

ひとつ-べっつひ 獨竈【名】㊀火床の一つのみなる竈。㊁剃髮者の、髮を蓄へて、未だ結髮に適するまでに延びざる時、た

だ月代(ツキシロ)及び額を剃りたるもの。

ひとつ-ぼし 一星【名】夕方に、始めて一つ見ゆる星、又曉に、一つ殘る星。「一星を見附けたら長者(チヤウジヤ)に爲らうな」【句】一つ星を見附けたる者は、金持になるを得べし。〔夕方、星の現れそむる頃、小兒のいふ諺語〕

ひと-づま 人妻【名】他人の妻。〔古語〕萬葉「紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我戀ひめやも」

ひとづま-ころ 人妻子等【名】『ころはこら(子等)の訛』前條に同じ。〔古語〕萬葉「あずの上に駒を繋ぎて危(アヤ)ほかど人妻子ろをいきに吾がする」

ひとつ-ます 一枡【名】紋所の一。枡を、上面より見たる形を、一箇描けるもの。

ひとつ-まぜ 一交【名】㊀一つおきに交ふること。交互に配置すること。㊁練貫(ネリヌキ)の、紅梅の筋と、緯白(ヌキシロ)の筋と、一つまぜに織りたるもの。昔、男は、若き間、女は、年ふけても、著用せりといふ。

ひとつ-まつ 一松【名】㊀ただ一本生ひ立ちてある松。一本松。孤松。記「尾津(ヲツ)のさきなるひとつ松吾兄(アセ)を」萬葉「ひとつ松幾代か經ぬる吹く風の聲のすめるは年深みかも」㊁紋所の一。三階松のと同樣なる松を、一つ描けるもの。

ひとつ-まつば 一松葉【名】紋所の一。松葉を、一箇描けるもの。

ひとつ-まへ 一前【名】衣を、二枚以上重ね著る時、褄先を一つに揃ふること。一代女「黃無垢に、紋縞を、一つ前に重ね」鶉衣「髮、當流に取り上げ、褄も、一つ前に亂れたり」

ひと-つまみ 一撮【名】㊀三指(ミツユビ)にてつまむ程の量。㊁僅少の量。㊂敵を容易に負かすこと。

ひとつ-まゆ 一繭【名】一匹の蠶の作りたる繭。ひきまゆ。(二(フタツ)繭に對して)

ひとつ-み 一身【名】一・二歳の小兒の著る料として、身頃を、長さ八尺乃至一丈一尺の並幅の布片一枚にて仕立つる、脊縫(セヌヒ)なき衣服。浮世風呂「一つ身の著物をひろげ」

ひとつ-みち 一道【名】ひとすぢみち(一筋道)に同じ。新可笑記「或夕暮に、野澤の一つ道行くに」

ひとつ-みなは 一水繩【名】みなは(水繩)「を見よ。

ひとつ-むかでのまる 一蜈蚣丸【名】紋所の一。一匹の蜈蚣を、一巴(ヒトツドモエ)に似たる形に、圓く描けるもの。

ひとつ-むすび 一結【名】女の帶の結方「の一。

ひとつ-むすめ 一娘【名】ひとりむすめ(一人娘)に同じ。〔古語〕源氏「致仕のおとども、またなくかしづくひとつむすめを」

ひとつ-め 一目【名】㊀ひとつめこぞう(一目小僧)に同じ。和合人「一目ならで幽靈、下(シモ)が無(ネ)え」㊁ひとつめゆひ(一目結)の略。

ひとつ-めうが 一蘘荷・一茗荷【名】紋所の一。蘘荷を一箇、橫に描けるもの。

ひとつ-めうがどもゑ 一蘘荷巴・一茗荷巴【名】紋所の一。蘘荷を一箇、一巴(ヒトツドモエ)に似たる形に描けるもの。

ひとつめ-こぞう 一目小僧【名】僧形にて、額にただ一眼ある、小供の妖怪。

ひとつめ-にふだう 一目入道【名】僧形にて、額にただ一眼ある大人の妖怪。

ひとつ-めゆひ 一目結【名】紋所の一。目結を、一箇描けるもの。

ひとつ-もの 一物【名】㊀同じ物。同一物。一樣。同樣。源氏「帝(ミカド)は、赤色の御衣(オンゾ)奉れり……、太政大臣(オホキオトド)……同じ赤色を著たまへれば、いよいよ、ひとつ物とかがやきて見えまがはせたまふ」㊁鯛を、鱗の附きたるまま煮て、一の土器に盛りたる料理。

ひとつ-もん 一紋【名】背に一つ附けたる紋所。ひとところもん。(三所紋(ミトコロモン)・七紋(ナナツモン)などに對して) 若風俗「うき世の字は、並べてなき一紋」

ひとつ-もり 一森【名】くも(雲)の異稱といふ。〔古語〕秘藏抄「花咲かば吉野の山のひとつもりあなたこなたに嵐吹くらん」

ひと-づもり 人積【名】人物・人數などの見つもり。

ひとつ-や 一家・一屋【名】㊀人里離れて、ただ一戶ある家。はなれや。一軒屋。孤屋。㊁東京市淺草觀音の境內なる明王院の姥池(ウバガイケ)の傳說に、江戶開府以前、その地、荒涼たる野中なるが、一軒の家あり。その家の老婆、旅人を宿泊せしめて、石の枕に臥させ、上より石を落して、衣裝を奪ひきといふ、その家。柳樽「一つ家の頃は用事の無い所」(その邊、德川時代には、楊枝店多く、店頭に妙齡の女子を置きて、客を引きしより、用事に楊枝をかけていへるなり) 根南志具佐「淺草の一つ家の姥(ババ)」

ひとつ-や 一矢【名】紋所の一。矢を一箇、箆(ノ)を短く、縱に描けるもの。

ひとつやなぎ 一柳【名】姓氏の一。越智(ヲチ)氏の支族。河野四郞通信の裔。一柳の稱は、鞠の上手にて、鞠の懸(カカリ)には、柳を植うるに因るとも、尾張國一柳の御厨(ミクリヤ)に住せしに因るともいふ。德川時代に三家となり、本家は、伊豫國の西條(サイデウ)に居り、一家は播磨國小野を領し、一家は伊豫國小松を領す。西條の本家は、寬文五年、領地を沒收せられ、小野・小松の兩家は、明治維新後、子爵を授けらる。

ひと-つら 一列【名】いちれつ(一列)に同じ。蕪村「一行(ヒトツラ)の雁や端山に月を印す」

ひとつ-らふそく 一蠟燭【名】紋所の一。蠟燭一本を、縱に描けるもの。

ひと-つれ 一連【名】一つのつれ。一隊。夫木「一つれは裾野に出でて小倉山峯にも殘るさをしかの聲」

ひとつ-れんげ 一蓮華【名】紋所の一。一輪の蓮華を描けるもの。

ひとつ-わきざし 一脇差【名】一本差したる脇差。五人女「金鍔の一脇差」

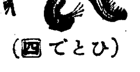
ひと-づゑ 人杖【名】人を、杖の如く輕輕と扱ふこと。宇治「尻蹴つる相撲(スマフ)をも、人杖に使ひて、投げ碎くめり」

ひとつ-をりばせう 一折芭蕉【名】紋所の一。一枚の芭蕉の葉を、中肋の中部にて二つに折れたる形にし、且つその折目を上方にして、圓く描けるもの。

ひと-て 一手【名】㊀一方の手。かた手。隻手。萬葉「一手には木綿(ユフ)取りもたし一手には和妙(ニギタヘ)まつり」㊁一人のしわざ。いって。獨力。㊂一つにまとむること。いって。一括。㊃一つの手なみ。一度のわざ。狂言(惡坊)「長刀……一手遣うて見せう」㊄一組。一隊。㊅『助數詞のて(手)を見よ』射藝に於ける、內向(ウチムキ)の矢と外向(トムキ)の矢との二本。

ひとで 稭【名】ひつぢ(稭)を云ふ。〔越前國の方言〕

ひと-で 人手【名】㊀人のしわざ。人爲。人工。輔親集「人手には染むとも見えぬもみぢ葉の色は錦に立ちぞまされる」㊁他人のしわざ。他人の力。㊂働く人。はたらきて。㊃〔動〕海盤車(ヒトデ)類に屬する棘皮動物の總稱。〔海盤車〕㊄〔動〕ほしひとで(星人手)の略。


(㊃でとひ)

人手に掛る【句】他人の力にて、殺され又は育つ。盛衰記「人手に懸らんより。聟にて侍れば、爲範に預け給はり候へ」

人手に廻(マハ)す【句】世人の手より手へと渡る。日本永代藏「年久しく內藏に隱れ、世間見なんだ銀(カネ)が、人手にまはりて」

人手に渡す【句】賣り渡しなどして、他人の所有物とす。丹波與作「夏の物ども、人手に渡し、朋輩にも、無心いひ」

人手に渡る【句】賣り渡しなどして、他人の所有物となる。胸算用「定めて、佛具も、人手に渡るべし」

ひと-で 人出【名】或物事の場所に、人の出で集ること。

ひと-で【名】〔植〕きんぽうげ(毛茛)に同じ。

ひと-でいり 人出入【名】或家に、多くの人の出つ入りつすること。狂言(拔殼)「鬼に番をさせたらば、出入もあるまい」

ひとて-じんどう 一手神頭【名】射藝に於ける神頭の矢の一手。ひとて(一手)㊅參照。

ひとて‐じめ 人手四目【名】射藝に於ける四目の矢の一手。ひとて(一手)㊅參照。

ひと‐で‐なし 人無【名】人にして、人らしからぬ所行をなす者。恩義・人情に悖りたる者。人非人(ニンピニン)。諸國物語「人でなしなどと云はるるが無念さ」

ひとて‐はんばい 一手販賣【名】〔商〕いってはんばい(一手販賣)に同じ。

ひとて‐や 一手矢【名】一手㊅の矢。諸矢(モロヤ)。(片手矢に對して) 狂言(富士松)「一手矢を片手は天へくり上げて上にかたかた下にかたかた」七一職人歌合「心も更に變らで一手矢の同じ節にはいつか馴れまし」

ひと‐てら 一寺【名】一つの寺の全部。てらぢゆう。〔古語〕大和「ひとてら求めさすれど、更に逃げて失せにけり」

ひと‐てらふ 人衒ふ【動四自】てらふ(衒)に同じ。〔古語〕紀「やまのめの小じま子ゆゑに人てらふ馬のやつきは惜しけくもなし」

ひとで‐るゐ 海盤車類【名】〔動〕棘皮動物の一綱。體軀扁平にして、五稜をなし、又は數腕(普通は五腕)を、輻狀に突出し、歩足は下面にのみ存在し、口も、下面の中央に在り。蜘蛛人手(クモヒトデ)・てづるもづる・星人手(ホシヒトデ)・絲卷人手・紅葉貝(モミヂガヒ)など、これに屬す。

ひと‐とき 一時【名】㊀しばらくの間。いっとき。一時(イチジ)。暫時。古今「秋の野になまめき立てるをみなへしあなかしがまし花も一時」㊁ある時。一時(イチジ)。

ひと‐ところ 一所【名】㊀一つの場處。一箇所。一つ所。俳諧新選(龍眠)「鳴く鹿の別れかねてや一ところ」㊁同じ場處。

ひとところ‐もん 一所紋【名】ひとつもん(一紋)に同じ。

ひと‐とせ 一年【名】㊀いちねん(一年)に同じ。萬葉「一年に七日の夜のみ逢ふ人の戀もつきねば夜のふけゆくも」㊁ある年。さきつとし。先年。源氏「一とせの東宮の御元服」

ひととせ‐まぜ 一年交【名】一年づつ間をおくこと。一年(イチネン)おき。隔年。

ひと‐と‐なり 爲人【名】『「人と爲る」㊀を見よ』うまれつき。もちまへ。たち。性質。紀「性、ヒトトナリ」蕪村「掛香(カケガウ)や啞の娘の人となり」

ひと‐との 一殿【名】殿内の全部。〔古語〕落窪「一との内、ゆすり滿ちてののしる」榮花「あさましう人笑はれなる御ありさま、一との内思ひ嘆き」

ひと‐どほし 人遠し【形二】他の人の耳目に觸れがたし。近くに、人居らず。(人近しに對して) 源氏「御前の、人どほくのどやかなる折」

ひと‐とほり 一通【名】よのつね。なみ。普通。尋常。

ひと‐とほり 一通【副】ひとわたり。あらまし。一往。「一とほり取調ぶ」

ひと‐どほり 人通【名】人の通行。ゆきき。ひとゆき。往來。俳諧古選(貝丸)「三條こ人どほり見ん衣がへ」

ひと‐どめ 人留【名】人の通行を禁止すること。往來を遮斷すること。

ひとどめ‐どころ 人留所【名】旅客を呼びとめて、宿泊を勸むる土地、卽ち宿驛。東海道名所記「道中一番の人とめ所にて、紙子など著たる人は、通る事ならず」

ひとどめ‐をんな 人留女【名】とめをんな(留女)に同じ。二代男「一兩二分……人留女にくれて立ちける」

ひと‐とや 一鳥屋【名】鷹の、鳥屋に居ること、一年間なるもの。

ひと‐どり 人取【名】㊀怪物などの、人を捕りて喰ふもの。ぬし。著聞「この堂には、人取するものはべるに」㊁多數の兒童、二組に分れ、互に敵の方の者を、わが方に捕へ來らんことを爭ひ、全部捕へ盡したる方、又は敵の首領と定めたる者を捕へたる方を勝とする遊戲。

ひとどり‐がめ 人取龜【名】〔動〕すっぽん(鼈)に同じ。

ひと‐なか 人中【名】㊀人人の居る中。衆人の中。衆中。紀「衆中、ヒトナカ」油糟(といふ句に)「にがにがしくもをかしかりけり 人中でころぶ女の前出して」㊁他人の中。世人の生活・交際などの實狀。諺「人は人中」浮世風呂「私どもの二番目も、人中が藥だと申して、本店(ホンテン)へ遣しておきました」

ひと‐なかせ 人泣【名】人を、泣くほどに困らすること、又その所行。

ひと‐ながれ 一流【名】㊀一すぢの流水。㊁いちりう(一流)に同じ。續拾遺「一流の書を書きはべるとて、谷川のわが一ながれ書留めて絕えざりけりと人に知らせん」

ひと‐なだれ 人雪頽【名】群れる人の、押されて、なだれ頽るること。太平記「遙かに深き谷底へ、人雪頽をつかせて落ち重なれば」

ひと‐なつこし 人懷し【形二】なつこしに同じ。

ひと‐なぬか 一七日【名】㊀いっしう(一週)に同じ。㊁人の死後、七日目の忌日。一周忌。

ひと‐なぶり 人嫐【名】他人をなぶること。萬葉「さす竹の大宮人は今もかも人なぶりのみ好みたるらむ」

ひと‐なびき 一靡【名】一すぢに靡くこと。夫木「里遠き烟の末の一なびきさらでは野べの雪のみの色」

ひと‐なみ 人波【名】群れる人の、押しあひて搖れ動く狀態。「人波を打つ」

ひと‐なみ 人並【名】一般の人と同樣なる狀態。人間なみ。萬葉「わくらばに人とはあるを人並に吾(ア)もなれるを」

ひとなみ‐なみ 人並並【名】前條に同じ。順集「君はいざ人並並にいでたちて沈みに沈むわれにあゆなよ」平治「人並並に、馬に乘らんと引寄せさせたれども」

ひと‐ならはし 人習【名】一般の人のならはし。世間のならはし。風習。〔古語〕源氏「なべての世をも思ひめぐらし、深きなさけをもならひたまひにける、いとほしの人ならはしや」

ひと‐なる 人馴る【動下二自】㊀世人との交に馴る。交際に馴る。源氏「男の御數なれば、すこし人馴れたる事やまじらん」㊁禽獸など、人に馴れ親しむ。なじむ。源氏「から猫…心をかしく人馴れたるは」

ひと‐にぎり 一握【名】片手にて握るほどの容積。一握(イチアク)。

ひと‐にくし 人憎し【形二】他人に、憎憎しく見ゆ。はしたなし。源氏「さりとて、人にくくはしたなくはもてなしたまはぬ御けしきかな」

ひと‐には 一庭【名】庭の全部。庭一面。宇治「醉聲を出だして、一庭を走りまはり舞ふ」徒然「錦の屑を、車に積みて、多く奉りたれば、一庭敷かれて」

ひと‐にんげ 人にんげ【名】人によく、親しまるること。

ひと‐ぬし 人主【名】請人(ウケニン)に對して、更に奉公人の身元保證に立つ人。〔江戸時代の語〕

ひと‐ねいり 一寢入・一寐入【名】次條に同じ。

ひと‐ねむり 一睡【名】一度ねむること。ひよっと睡ること。一睡(イッスヰ)。

ひ‐どの 樋殿・械殿【名】『ひ(械)㊂を見よ』かはや。便所。〔古語〕小右記「御樋殿顚倒」今物語「ひどのへ行きけるに、屁ばかりひりて、物もなかりけり」

ひと‐のし 一伸【名】一度にのすこと。一たび發展すること。新永代藏「仕合(シアハセ)の向きたる時に一伸のさざれば」

ひと‐のひ 人の日【句】ひと(人)の條下を見よ。

ひと‐のみ 一呑【名】㊀一口に呑み込むこと。狂言(磁石)「太刀……きっさきから、ただ一呑にせうぞ」㊁相手を呑み込んでかかること。相手を、少しも恐れぬこと。吉野都女楠「一呑に侮って、油斷したる追手の勢(セイ)」

ひと‐は 一羽【名】翼をひろげて、一度飛ぶこと。保元「鷲だに、一羽に千里を飛ぶといふに」

ひと‐は 一葉【名】㊀一つの葉。一葉(イチエフ)。ひとっぱ。年中行事歌合「流れての名にや立ちなん紅の一葉を浮けし水莖の跡」俳諧新選(嘯山)「一葉出て一葉古りゆく芭蕉かな」㊁いちえふ(一葉)㊁に同じ。

一葉の舟【句】「一葉(イチエフ)の舟」の直譯。ひとはぶね。夫木「散りやすき一葉の舟の内ながらさすが月日を渡りかねつつ」

ひと‐ばえ 人映【名】ひとばへ(人ばへ)を見よ。

ひとはぐさ　一葉草【名】〔植〕㊀いはちどり（岩千鳥）に同じ。㊁きり（桐）㊀に同じ。〔古語〕藏玉集「一葉草、桐」㊂すみれ（菫）㊀に同じ。〔古語〕藏玉集「一葉草。菫。命をやかけてぞ惜しむ一葉草月にや花の咲かん夜な夜な」㊃よし（葦）に同じ。

ひとはこ　一箱【名】㊀物を入れたる箱一箇、又それに入るべき分量。㊁金千兩又は銀十貫目。**せんりやうばこ**（千兩箱）・**ひとつつみ**（一包）參照。〔江戸時代の語〕

ひとはし　一箸【名】一度、箸に挾みて食ふこと、又それに適する分量。俳諧新選（鶴英）「一箸に程よき石花の一つかな」

ひとはし　一端【名】**かたはし**（片端）に同じ。太平記「わが思の深き色を御息所（ミヤスンドコロ）に一端申して、心安く臨終をもせばや」鴉鷺合戰「あはれ、一はし承りて、及ばざる耳をも驚かし候はばや」

ひとばし　人橋【名】次條を見よ。

人橋を掛く【句】『「橋を掛く」を見よ』人に、橋わたしを頼む。使者又は仲立の者に言ひ傳へさす。吾吟我集「思河隔ててこねばしきなみに人橋掛けて戀ひ渡りぬる」世間子息形氣「人橋をかけて、呼びにやれば」

ひとばしら　人柱【名】古、橋を架け、堤防又は島を築きなどするに、工事の困難を極むる時、河の神の心に背く所あるがためなりとし、その犧牲として、生きたる人を水底に埋めしこと、又その埋められし人。人身御供（ヒトミゴクウ）の類。平家「福原の經が島人柱立てらるべしなんど、公卿僉議ありしかども」

ひとはしり　一走【名】急用などありて、ちよっと走りゆくこと。ひとっぱしり。

ひとはた　一杯【名】器物に一杯なること。〔古語〕宇治「湯ぶねに、藁を、こまごまと切りて、一はた入れて」

ひとはた　一旗【名】次條を見よ。

一旗擧ぐ【句】㊀一度旗を擧ぐ。一かどの旗擧をなす。㊁一生面を打開して隆盛を致す。新に運命を開く。

ひとはだ　人肌・人膚【名】㊀人の皮膚。人のはだへ。狹衣「この猫は、しばし預けさせたまへかし、人はだに附くるよりはと宣ふを」㊁人の膚のあたたみ。體溫。狂言（佛師）「いろうて見ましたれば、まだ人肌でござった」俳諧新選（立流）「人肌に合はす湯婆（タンポ）や加減物」

ひとはだ　一肌【名】次條を見よ。

一肌脫ぐ【句】㊀一度肌を脫ぐ。ちよっと肌を脫ぐ。㊁助力す。助勢す。「肌を脫ぐ」參照。

ひとはたご　一葉たご【名】〔植〕**ひとつばたご**（一葉たご）に同じ。

ひとはたらき　一働【名】奮發して、一度「働く」こと。

ひとはて　人果【名】「人は人果」を見よ。

ひとはな　一花【名】㊀一輪の花。夫木「霜枯の草のしげみに隱ろへて一花殘る女郎花かな」㊁一時榮ゆること。ひとさかり。康資王母集「春秋もただ一花ぞ山里は峰の嵐ぞ絕えず音する」

一花咲かす【句】一時、花を咲かす。「花を咲かす」參照。

ひとはなごころ　一花心【名】一時のあだなる心。盛衰記「一花心にもてなし、思ひ著く者あって、勢（セイ）附きなば」

ひとはなごろも　一花衣【名】ただ一回、染めたるほどの、淺き色の花衣。源氏「くれなゐの一花ごろも薄くともひたすらくたす名をし立てずば」

ひとはなずり　一花摺【名】ただ一回、花摺をなすこと、又そをなしたる布帛。夫木「初萩の一花ずりの旅ごろも露おきそむる宮城野の原」

ひとばなる　人離る【動下二自】人里離る。人遠き處に住む。源氏「人ばなれたる御すまひ」

ひとばば　一馬場・一馬塲【名】一回馬場乘をすること、又それと同様に、乘りたる馬を、一氣に驅けさせて、中間にて休息せしめぬこと。曾我「二十餘町のその程を、ただ一馬場に驅けつけ」

ひとはばおび　一幅帶【名】一幅の布帛にて仕立てたる帶。五人女「段染（ダンゾメ）の一幅帶」

ひとはばもの　一幅物【名】一幅の布帛にて仕立てたるもの。織留「帶は、……、茶の繻子の一幅物」

ひとはぶね　一葉舟【名】「一葉の舟」に同じ。廻國雜記「木がくれに浮べる秋の一葉舟さそふ嵐を河長（カハヲサ）にして」

ひとばへ　人ばへ【名】**ひとそばへ**（人戲）の「そ」の字の脫落せるならんとも、又は人映（ハエ）にて、人中に出でて、映ゆることならんともいふ。〔古語〕枕「人ばへするもの。ことなる事なき人の子の、かなしくしならはされたる」

ひとはぼたん　一葉牡丹【名】紋所の一。牡丹花に、一枚の葉を添へて描けるもの。

ひとはら　一腹【名】腹一杯。滿腹。沙石集「河に投げ入れてけり。衣裳ぬらして、水、一腹呑みて、死なぬばかりにて」

ひとばらひ　人拂【名】㊀密談などのために、その場より他人を退去せしむること。㊁貴人の通行の時、往來の人を避け去らしむること。喝道。

ひとはりぬき　一針拔【名】物を縫ふに、一針毎に、針を拔きて、更にさし縫ふこと。

ひとはる　一春【名】春の間の全部。春ぢゆう。續拾遺「花の色は一春咲けど歸る雁今年越路の空だのめして」

ひとばん　一晩【名】**ひとよ**（一夜）に同じ。

ひとばんおき　一晩置【名】一夜づつを隔つること。ひとよまぜ。隔夜。

ひとばんどまり　一晩泊【名】一夜とまること。ひとよどまり。一泊。

ひとひ　一日【名】㊀日數一つ。一日（イチニチ）。萬葉「妹が袖わかれて久になりぬれどひと日も妹を忘れて思へや」㊁ひねもす。終日。一日（イチニチ）。日一日（ヒトヒ）。㊂その月の第一日。朔日。一日（イチニチ）。狂言（文藏）「治承三年八月朔日（ヒトヒ）」㊃ある日。先日。一日（イチジツ）。源氏「ひとひの源氏の御夕かげ、ゆゆしうおぼされて」

ひとひおき　一日置【名】一日づつ隔つること。隔日。ひとひまぜ。

ひとひき　一引【名】一度引張（ヒッパ）ること。一息に引くこと。狂言（膏藥煉）「鎌倉へ、一引に引いてくれう」俳諧新選（龍眠）「一引に餘の田を越えて鳴子（ナルコ）かな」

ひとひさご　一瓢【名】「一簞の食（シ）、一瓢（イッペウ）の飮」を見よ。父子相迎「原憲が百（モモ）つづり、顏子が一ひさご」

ひとひしぎ　一拉・一挫【名】一度に挫ぐこと。たやすく挫ぐこと。日本振袖始「一挫に取って伏せ」㊁各個の人。各人。

ひとびと　人人【名】㊀多くの人。人たち。

人人、互に相敵とす【句】「萬人（バンジン）、萬人を敵とす」に同じ。

ひとびとし　人人し【形二】**ひとがまし**（人がまし）に同じ。枕「頭中將のとの居所に、すこし人人しきかぎり、六位まで集りて」盛衰記「退（ノ）け、奴（ヤツ）ばら、人人しきとて、海の中へ踏み入れ、取り入れ」

ひとひまぜ　一日交【名】**ひとひおき**（一日置）に同じ。方丈記「地震（ナヰ）、二三十度ふらぬ日はなし。……ひとひまぜ、二日・三日に一度など、大かた、その名殘、三月ばかりや侍りけん」

ひとひめぐり　一日廻・太白神【名】**たいはくじん**（太白神）に同じ。和名「太白神、比度比女久利」

ひとびやく　人嶭【名】次條を見よ。

人嶭を打つ【句】『「嶭（ビヤク）を打つ」を見よ』多勢の者、崩れ散る。八犬傳「終に怺（コラ）へず、皆、共侶（モロトモ）に、人嶭打って崩れにければ」

ひとひろわに　一尋鰐【名】〔動〕長さ一ひろにも達する、大なる鰐。**やひろわに**（八尋鰐）參照。記「一尋わに」

ひとふ　一腑【名】次條を見よ。

一腑拔ける【句】少し腑拔（フヌケ）なり。醒睡笑「一腑拔けたるおうすのろなり。かた立ちて」

ひとふう　一風【名】**いっぷう**（一風）に同じ。

ひとふきかぜ　一吹風【名】一しきり吹く風。

ひとふし　一節【名】特に他に異なる一點。ひとかど。枕「一ふし、あはれとも、をかしとも聞き置きつるもの」源氏「やうやう、ひじりになりし心を、一ふしたがへそめて」

ひと-ふで 一筆【名】㊀ちよっと書きつくること。短き文。一筆（イッピツ）。徒然「この雪いかが見ると、一筆のたまはぬほどのひがひがしからん人」㊁墨つぎをせず、一氣に、書きつづくること。無造作に書くこと。一筆（イッピツ）。今昔「繪……只一筆に書きたるに、をかしき事、限なし」㊂一筆切に書き載せたる檢地帳の各項。

ひとふで-がき 一筆書【名】㊀黑つぎをせず、一氣に書きつづくること、又その書き方の書畫。一筆書（イッピツガキ）。㊁ひとつがき（一書）㊁に同じ。

ひとふで-がらす 一筆烏【名】一筆書に畫きたる烏。百日曾我「さっと隈どる一筆烏」

ひとふで-ぎり 一筆切・一筆限【名】德川時代に、檢地帳に、田・畑・屋敷を、一件づつ、一書（ヒトツガキ）にして書き載せしこと。

ひとふで-ゑ 一筆繪【名】一筆書にゑがきたる繪。一筆畫（イッピツグワ）。小町踊（立圃）「空に飛ぶ雁や霞の一筆繪」

ひと-ふね 人船【名】昔の船軍の場合に、從卒などを乘せて渡海する船。荷船に似て、船底より二三重に屋形を造る。渡海船。

ひと-ふんべつ 一分別【名】ひとかんがへ（一考）に同じ。川中島合戰「名に負ふ武士の一分別、名將の家風芳しき」

ひと-ぶる 人ぶる【動四自】人らしく振舞ふ。鵜鷺合戰「かたはら痛き花香風體をのみ好みて、人ぶりては、腰を振り」

ひと-ぶろ 一風呂【名】一度風呂に入ること。一回の入浴。ひとっぷろ。二代男「さっと一風呂してから」

ひとぶろ-ごころ 一風呂心【名】一風呂浴したるあとの快き感じ。三代男「一風呂心、小者に浴衣かつがせゆけば」

ひと-へ 一重【名】㊀その物一つのみにて、重なりてあらぬこと。紀「臣（シオ）の子が八重の紐解く一重だにいまだ解かねば皇子（ミコ）の紐解く」㊁花の、花瓣の一片づつ並びて、重なりてあらぬこと。單瓣。（八重（ヤヘ）に對して）〔單〕拾遺「わが、宿の八重山吹は一重だに散り殘りなん春のかたみに」

ひとへ 單【名】㊀ひとへぎぬ（單衣）の略。枕「單は、白うてぞ、男も、女も、よろづのことまさりて」㊁ひとへもの（單物）㊁の略。〔鎌倉・室町時代の語〕㊂前條㊁に同じ。

ひと-へ 一日【名】ひとひ（一日）の轉訛。五人女「今、思死（オモヒジニ）ひとへ・二日（フツカ）を、うき世のかぎり」本朝二十不孝「命（イノチ）十六の卯月ひとへの明方に」

ひとへ-あこめ 單衵・單褟【名】裏を附けぬ衵。枕「日の裝束（サウゾク）の紅（クレナヰ）のひとへ衵」

ひとへ-いくわん 單衣冠【名】下著の上に、單衣（ヒトヘギヌ）を著、次に袍を著用すること。袴は、指貫（サシヌキ）を用ふ。

ひとへ-いと 單絲【名】ひとへよりいと（單撚絲）の略。

ひとへ-うめ 一重梅【名】㊀花の單瓣なる梅。徒然「ひとへ梅をなん、軒近く植ゑられたりける」㊁襲（カサネ）の色目の一。表は白、裏は紅。十一月より二月までの間用ふ。しらうめ。ゆきのした。㊂紋所の一。一輪の單瓣梅花を、上より見たる形に描けるもの。

ひとへ-おび 一重帶・單帶【名】裏を附けぬ帶。俳諧古選（なか）「白無垢に單帶して」曾我扇八景「黃昏（タソガレ）の物とや團扇一重帶」

ひとへ-がさね 單重【名】單衣（ヒトヘギヌ）㊂を二枚捻（ネヒ）り重ねて著用し、專ら五月五日より、秋まで、暑さを避くるために、五衣（イツツギヌ）に代へたるもの。空穗「ひとへがさねの綾、かいねりの衵（アコメ）著たる童（ワラハ）」榮花「朽葉の單重」同「黑き御單重」

ひとへ-かりぎぬ 一重狩衣・單狩衣【名】裏を附けざる狩衣。著聞「花田のひとへ狩衣に、青袴著て」

ひとへ-ぎぬ 單衣【名】㊀裏を著けぬ衣。ひとへごろも。ひとへもの。ひとへ。帷子（カタビラ）類。和名「單衣、比止閇岐沼」㊁男子の、束帶の時には、衵（アコメ）の下、禮服の時には、小袖の下に著る、裏なき衣。その制、衵に似て、丈はそれよりも一寸長く、袖幅は一寸五分廣く、身は衵に同じく、地は綾、色は普通紅にて、張り又は板引にし、若年者は重菱（シゲビシ）の紋、老年者は遠菱（トホビシ）、極老は白を用ひ、四季共に著用し、夏は白の生絹（スズシ）をも用ひたりといふ。ひとへ。ひへぎ（引倍木）參照。㊂女子の、五衣（イツツギヌ）の下に著る、裏なき衣。地は綾紋幸菱（サイハヒビシ）、色は上著の色によりて一定せず。ひとへ。

ひとへ-ぎり 一重切【名】ししぐち（獅子口）㊂に同じ。

ひとへ-ぐさ 一重草【名】〔植〕ききやう（桔梗）㊀の異稱。〔古語〕藻鹽草「桔梗。一重草、異名也。このはをも裏に打たばや一重草葉はうすやうの露はおけども」

ひとへ-ごころ 偏心【名】ひとへなる心。ひとすぢに前後を考へぬ、無分別なる心。ひとすぢ。〔古語〕源氏「幼き程の御ひとへ心にかかりて、いと苦しきまでぞおはしける」

ひとへ-ごろも 一重衣・單衣【名】ひとへぎぬ（單衣）㊀に同じ。萬葉「つるばみの一重衣の裏もなくあらむ子故に戀ひわたるかも」

ひとへ-ざくら 一重櫻【名】花の單瓣なる櫻。

ひとへ-しだ 一重羊齒【名】〔植〕やぶそてつ（藪蘇鐵）に同じ。

ひとへ-じゆばん 一重繻袢・單襦袢【名】裏を附けぬ襦袢。（袷襦袢に對して）日本永代藏「肌に單襦袢」

ひとへ-たばね 單束【名】しまだくづし（島田崩）に同じ。

ひとへ-づかひ 單使【名】副使の無き使。〔古語〕紀「單使、ヒトヘヅカヒ」

ひとへ-に 偏に【副】『一重にの義』ひたすら（只管）に同じ。

ひとへ-ばおり 一重羽織・單羽織【名】裏を附けぬ羽織。夏季著用す。なっぱおり。（袷羽織・綿入羽織に對して）續猿蓑（我眉）「涼しさや一重羽織のだまり」

ひとへ-ばかま 一重袴・單袴【名】裏を附けぬ袴。源氏「黃なる生絹（スズシ）のひとへ袴長く著なしたる童（ワラハ）」

ひとへ-はちまき 單鉢卷【名】鉢卷㊀の、長さ一まはり卷くに足る程のもの。

ひとへ-びし 一重菱【名】紋所の一。一重の線にて描ける菱。若風俗「ありあと、一重菱の內に三引（ミツヒキ）を切りぬ。これこそ、小りんが定紋なれ」

ひとへ-びたたれ 一重直垂・單直垂【名】裏を附けぬ直垂。

ひとへ-もの 單物【名】㊀裏を附けぬ衣。夏季に著用し、その麻織なるを、今、特に帷子（カタビラ）といふ。ひとへぎぬ。ひとへ。㊁すあを（素襖）の異稱。うらうち（裏打）㊁參照。〔鎌倉時代の語〕鎌倉年中行事「五月朔日、……、同五日御祝御同前、公方樣御單物、御紋蓬菖蒲」教言卿記「龜若丸新調單物、繪（松竹）、薄を散すなり。小袖紅梅」㊂きぬかたびら（絹帷子）の異稱。〔江戶時代の語〕

ひとへ-やま 一重山【名】㊀甲・乙の兩地を、一重隔ててある山。萬葉「一重山隔（ヘナ）れるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ」㊁〔地〕信濃國埴科（ハニシナ）郡屋代（ヤシロ）町の東方にある山。姨捨（ヲバステ）山より見渡す十三景の一。謠曲（姨捨）「はや色づくか、一重山、薄霧も立ちわたり」名寄「花はなほ名のみなりけり一重山八重にかさなる峰の白雲」㊂〔地〕山城國相樂（サウラク）郡の南端にある山。木津町と加茂村とに屬し、大和國添上（ソフノカミ）郡に界す。

ひとへ-やまぶき 一重山吹【名】花の單瓣なる山吹。和泉式部續集「さもこそは深き谷には咲かざらめ色さへ淺き一重山吹」

ひとへより-いと 單撚絲【名】かたよりいと（片撚絲）に同じ。

ひと-べらし 人減【名】人員をへらすこと。減員。

ひとへ-わた 一重綿【名】衣に、綿を薄く少く入るること。新六「秋の來る夜半の衣の一重綿ひとへになほぞ風は身にしむ」

ひ-どほし 火通【名】大砲の發火演習。〔明治維新頃の語〕

ひとぼし-ごろ 火點頃【名】ひともしごろ（火點頃）に同じ。

ひとぼし-どき 火點時【名】前條に同じ。

ひと-ほね 一骨【名】一骨折ること。

一骨折る【句】一度骨を折る。ちよっと盡力す。

ひと-ほほ 一頰【名】ほほ一杯。沙石集「米を、一ほほ打ちくくみて」

ひと-ま 人間【名】『あまま（雨間）・くもま（雲間）・なみま（波間）㊁などと同類の語』

人の見て居らぬ時。〔古語〕竹取「人まには、月を見て、いみじく泣きたまふ」蜻蛉「おぼつかなき事ども、人間に、こまごまと書きてあり」

ひと-まうけ 人設【名】ひとまち（人待）に同じ。〔古語〕宇治「淀にて、船に乗りけるほどに、人まうけしたりければ」

ひと-まかせ 人任【名】他人にのみ任せおくこと。他人に一任すること。一代女「人まかせの髪結ふ姿も、氣に入らず」

ひと-まく 一幕【名】㊀芝居などの幕と幕との間の一くぎり。㊁事物の小段落。

ひと-まく-み 一幕見【名】芝居にて、狂言の或一幕だけを見物すること。

ひと-まく-もの 一幕物【名】『英 One act play』ただ一幕にて演じ終る戲曲。

ひと-まじはり 人交【名】ひとづきあひ（人附合）に同じ。歌祭文「大阪中に指さされ、人まじはりがなりませうかいの」

ひと-ます 人枡【名】昔、城外に設けて、軍勢を、その中に入れ、人數をはかりし枡形。

ひと-ます-がめ 一升瓶・一枡瓶【名】一升入の瓶。枕「一ますがめ、二ますは入るや」

ひと-まぜ 人交【名】他の人を交へ加ふること。太平記「西國名譽の打物と、北國無雙の馬上の達者と、……人まぜもせず戰うて」風流軍配團「人まぜもせず、只一人、寄手の大勢の中に、をめいて走り入り」

ひと-まち 人待【名】人を待つこと。來る人を待ち合はすること。ひとまうけ。

ひと-まちがひ 人間違【名】ひとちがひ（人違）に同じ。

ひと-まちがへ 人間違【名】前條に同じ。

ひと-まち-がほ 人待顔【名】人を待つらしき顔つき。待ち受くる如き樣子。拾遺「人知れぬ人待顔に見ゆめるは誰が賴めたる今夜なるらん」

ひと-まづ 一先【副】何れにしても、まづ。とにかく、第一に。ちよつと。一往。狂言（七騎落）「一まづ御開あるべき」

ひと-まど 一まど【副】前條の轉。盛衰記「一間戸も立ち忍ばんとて」東關紀行「身を亡ぼすべきになりにければ、一まども延びんとや思ひけん」

ひと-まどころ 一間所【名】『まどころ（間所）を見よ』ひとま（一間）に同じ。義經記「一間所に請（シャウ）じ奉り」

ひと-まどはし 人惑【名】人を惑はすこと。

ひと-まとまり 一纏【名】㊀一度まとまること。㊁全部を、一つにまとまること。

ひと-まとめ 一纏【名】㊀一度まとむること。㊁全部が、一つにまとむること。一括。

ひと-まね 人眞似【名】他人の眞似。人間の眞似。源氏「心淺げなる人まねどもは、見るに、かたはら痛くこそ」

人眞似・小眞似（コマネ）【句】人眞似するを嘲りていふ語。

人眞似・小眞似（コマネ）、酒屋の猫は、田樂燒くとて、手を燒いた【句】前條に同じ。〔諺語〕

ひと-まはり 一廻【名】㊀一度まはること。㊁七日間。一週間。三代男「有馬の湯……始、一まはりといひしが」㊂生年（ウマレドシ）のと同じ十二支が、再びめぐりくるまでの年數、即ち十二年間。重帷子「母（カカ）は三十七の酉、父（トト）樣は、一まはり上の酉で、四十九」浮世風呂「年……一まはり違はあ。もう丁度だはな」

ひと-まへ 人前【名】人人の居る所。公衆の面前。ひとみえ。著聞「これは人まへぞかしと思ふ心候うて」

人前を作る【句】人人の居る前にて、よく見え、又はよく聞ゆるやうに裝ふ。人目を飾る。俗曲（小春治兵衛）「人前作る涙の笑顔（エガホ）」手習鑑「人前つくつて、にこにこと、泣かぬ別ぞあはれなる」

人前を繕ふ【句】前條に同じ。

ひ-どまり 火止【名】『ひ（火）㈧を見よ。即ち別火を構へぬに至りたる義』月經の止まること。

ひ-どまり 日泊【名】「夜泊（ヨドマリ）・日泊」を「見よ。

ひと-まる 人丸【名】〔人〕かきのもとひとまる（柿本人丸）を見よ。

ひと-まる-く 人丸供【名】歌聖柿本人丸を供養すること。人丸の影供（エイグ）。著聞「修理大夫顯季卿、六條東洞院の亭にて、柿本大夫人丸供を行ひけり」

ひと-み 瞳・眸・睛【名】『人見の義』どうこう（瞳孔）に同じ。和名「廣雅云、眸、比度美」

ひと-み 人見【名】㊀間隙を設けて、外部を見通し得るやうにせる處。五人女「幕の人見より、目を放さず」㊁他人の見る所。ひとめ。

ひと-み 一身【名】身體の全部。全身。總身（ソウミ）。〔古語〕宇治「目鼻ともいはず、ひと身に取附きて螫せども」

ひと-み 蔀【名】〔建〕ひとみばり（蔀梁）の略。

ひと-み 【名】〔植〕くさぼけ（草木瓜）に同じ。

ひと-みえ 人見【名】人人の見る所。外見。〔古語〕源氏「下の心ばへ、をしからず、癖ありて、人みえ憎きところ附きたまへる人なり」

ひと-み-ごくう 人身御供【名】㊀古、人の身を生贄（イケニヘ）として、神に供せしこと、又その生贄に供せらるる人。犧牲。㊁ぎせい（犧牲）㊁に同じ。

ひと-みしり 人見知【名】小兒が、見馴れぬ人を見て、はにかみ嫌ふこと。

ひと-みせ 人見【名】うはべの狀態。みえ。「外見。

ひと-みち 一道【名】㊀いちづ（一途）に同じ。〔古語〕萬葉「かにかくに物は思はず飛驒人の打つ墨繩のただ一道に」㊁道路の、出發點より到著點までの全部。〔古語〕大鏡「東宮行啓ある御車にさぶらはせたまひて、一みち、……と、同じ事をぞ啓せさせたまひける」

ひと-み-ちくどう 人見竹洞【名】〔人〕儒者。江戸の人。名は節、字は宣卿、通稱は又七郎、後、友元と稱し、又、鶴山・葛民・括峯等の別號あり。林春齋の續本朝通鑑及び武德大盛記の編輯に與る。元祿九年歿す。年六十九。

ひと-みどり 一綠【名】一面に綠色なること。芭蕉「初秋や海も靑田も一みどり」

ひと-みな 人皆【名】皆の人。すべての人。萬葉「人みなの見らむ松浦（マツラ）の玉島を見ずてや吾は戀ひつつ居らむ」

ひとみ-ばり 蔀梁【名】〔建〕しとみばり（蔀梁）の轉訛。

ひとみ-ぼうさい 人見懋齋【名】〔人〕儒者。名は傳、字は士傳、通稱は又左衞門。卜幽軒の養子。水戸藩の人。林春齋・朱舜水に學び、天明三年、修史館の總裁となる。後、寺社奉行に轉じ、義公の、淫祠を毀ち、破戒の僧に蓄髮せしむるに際し、功勞最も多し。元祿九年歿す。

ひとみ-ぼくいうけん 人見卜幽軒【名】〔人〕儒者。名は壹。字は道生。白賁園・林塘庵などの別稱あり。丹波國の人。菅得庵・林羅山に學び、後水尾天皇の勅命に依り、宋朝類苑に訓點を加へて獻ぜしより、播紳爭ひて、その門に遊ぶ。寬永系譜の纂輯に參與し、又、本朝通鑑の編修を輔く。寬文十年歿す。年七十二。

ひと-みや 一宮【名】宮殿の全部。みやぢゆう。〔古語〕源氏「ひと宮のうち、忍びて泣きあへり」

ひと-むかし 一昔【名】『二十一年を一昔とせしは、「昔」の字の上部を分解すれば、「廿一」の字となるに因るかといふ』過ぎ去りし、十年又は二十一年などの間。盛衰記「二十一年を一昔とす」元服曾我「昔は六十六年を一昔とし、中頃は三十三箇年、當代は二十一箇年を一昔とす」

ひと-むき 一向【名】いちづ（一途）に同じ。

ひと-むし 一蒸【名】㊀一度蒸すこと。㊁一度強く圍み攻むること。吉野都女楠「眞中に包んで、一蒸むす程ならば、朝敵、一戰に亡びん」

ひと-むすび 一結【名】煙などの一むら。夫木「をち方にただ一むすび立つけぶり思ひとくにぞ小野の炭がま」

ひと-むち 一鞭【名】馬を走らするために、一度鞭を當つること。曾我扇八景「馬上の達者、一鞭くれて、ちやうと煽る」

ひと-むね 一棟【名】㊀一つの棟。一つの家。㊁同じ長屋。

ひと-むら 一村【名】㊀一つの村。㊁その村の全部。一村（ソン）。全村。㊂一箇所に集まりむらがれること。ひとむれ。一

圃。一群。【一叢】 新古今「露すがる庭の玉笹うち靡き一むら過ぎぬ夕立の雲」

ひと-むらさめ 一村雨 【名】 一しきり降る村雨。 林葉集「今ぞ知る一むら雨の夕立は月ゆゑ雲の塵洗ひけり」 謠曲(空蟬)「旅人の著るてふ笠のすげなくも、一むらさめとふり捨てて」

ひとむら-すすき 一村薄 【名】 一かたまりに生えてある薄。 古今「君が植ゑし一むらすすき蟲の音のしげき野邊ともなりにけるかな」

ひとむら-はぎ 一村萩 【名】 一叢の萩。 萬葉「我が宿の一村萩を思ふ子に見せずほとほと散らしつるかも」

ひと-むれ 人群 【名】 人のむらがり。多人數のあつまり。群集。 萬紫千紅「淺草の市に引かれて梓弓矢大臣門出づる人むれ」

ひと-むれ 一群 【名】 一つのむれ。一群(イチグン)。 現六「わかの浦にわが一むれの葦たづの數はためしもあらじとぞ思ふ」

ひと-んど 人人 【名】 ひとびと(人人)の音便。

ひと-め 人目 【名】 人の目に附くこと。人の見て知ること。衆目。 萬葉「空蟬(ウツセミ)の人目をしげみ逢はずして年の經ぬれば生けるともなし」 源氏「こころの人目も見苦しう」

人目に餘る 【句】 著しく他人の目に附く。 續千載「ほしわびぬ小野の篠原忍びかね人目に餘る袖の白露」 太平記「人目に餘る程の軍、一たびして、死にたらば」

人目に現る 【句】 前條に同じ。 大鏡「人目にあらはれては、このさぶらひぞ、よく聞かんと、あど打つめりし」

人目の網 【句】 人目の繁きを、網の目に譬へていふ語。 薩摩歌「人目の網の繁ければ、……、逃げ出づる隙間(スキマ)もがなと尋ねまはれど」

人目の垣 【句】 人目の、邪魔になりて、思ふに任せぬを、垣の、人を隔つるに譬へていふ語。 ひとめまがき。

人目の關(セキ) 【句】 人目の、邪魔になりて、思ふに任せぬを、關所の、人を通さぬに譬へていふ語。 俳諧新選(里鳥)「野良猫も人目の關に晝寢かな」 和合人「人目の關をごまかす」

人目守(モ)る 【句】 他人の見ぬ間を伺ふ。〔古語〕 萬葉「心なき雨にもあるか人目守りともしき妹に今日だに逢はむを」 新六「戀ひわびぬありしばかりの隙(ヒマ)もがなこしのすがはら人目もりつつ」

人目を飾る 【句】「人前(マヘ)を作る」を見よ。

人目を忍ぶ 【句】「目を忍ぶ」に同じ。

人目を包む 【句】『つつむ(愼む)㊀を見よ』 他人に見つからぬやうにす。 平治「人目を包む身なり」

人目を盜む 【句】「目を盜む」に同じ。

ひと-め 一目 【名】 ㊀一度見ること。ちよつと見ること。 萬葉「足曳の山鳥の尾の一尾越え一目見し子に戀ふべきものか」 俳家奇人談(萬子)「岩踏んで一目一目の櫻かな」 ㊁目の中の全部。〔古語〕 源氏「涙を一目浮けておはするに」

一目千本(センボン) 【句】 花の木の、一面に咲きつづけるを、高處より見渡す形容。(主に、大和國吉野山の櫻花にいふ) せんぼんざくら(千本櫻)參照。

ひ-どめ 火止 【名】 ㊀採取したる石油を精製して、引火點を高からしむること。 ㊁次條の略。

ひどめ-あぶら 火止油 【名】 ひどめせきゆ(火止石油)に同じ。

ひとめ-がくれ 人目隱 【名】 人目にかからぬ樣に隱るること。 曾我「人目がくれに交はりて、敵の後を見送れば」

ひと-めかし 人めかし 【形二】 ひとがまし(人がまし)に同じ。 源氏「入道の宮も、この世の人めかしき方は、かけ離れたまひぬれば」

ひと-めかす 人めかす 【動四他】 人めくやうになす。〔古語〕 枕「わざと取立てて、人めかすべきにもあらぬさまなれど」

ひと-めく 人めく 【動四自】 人らしく見ゆ。人の人たる品格を備へて見ゆ。 源氏「かの白く咲けるをなん、夕顏と申しはべる。花の名は人めきて」 同「けはひ、いたう人めきて、よしある聲なれば」

ひと-めぐり 一周 【名】 ㊀一度めぐること。 ㊁一周忌。一回忌。 新千載「兼好法師が母みまかりける一めぐりの法事の日」

ひどめ-せきゆ 火止石油 【名】〔化〕 比較的安全なる燈用石油。分溜法によりて、揮發性の引火し易き部分を去り、硫酸・苛性曹達・水などにて、洗滌・精製し、不純物を除きたるもの。澄明・無色、又、稀には微黃色を呈し、比重〇・八、引火點四十五度以上なるを良しとす。ひどめ。火止油。

ひとめ-せんげん 一目千軒 【名】〔書〕『遊女を花に譬へ、「一目千本」の語あるによりていふ』 昔、行はれし、京都島原遊廓の細見。

ひとめ-だつ 人目立つ 【動四自】 めだつ(目立つ)に同じ。 娼妓絹籭「おいらん、その打掛は人目だつ。私(ワタシ)が下著のこの小袖を、上へ著てお出でなんし」

ひとめ-づつみ 人目包 【名】『「人目を包む」を見よ』 人目を憚ること。(歌に、多くは堤(ツツミ)に言ひかけて用ふ) 隆信集「朽ちはてて桁をも橋は渡るとも人目包になほやせかれん」 新後拾「せきわびぬ洩らしやせまし淚川人目づつみも心なりけり」

ひとめ-なし 人目無 【名】 他人の見てをらぬこと。 義經千本櫻「ここ、幸の人目なしと、……御著長(キセナガ)を取出だし、君と敬ひ奉る」

ひとめ-まがき 人目籬 【名】「人目の垣」に同じ。 俗曲(名酒盛色の中汲)「今日の今までも、人目まがきに隔てられ」

ひと-めんだう 人面倒 【名】 他人の面倒を見ること。人の世話。

ひどめ-ゆ 火止油 【名】 ひどめせきゆ(火止石油)に同じ。

ひと-も 人面 【名】 古、伊勢大神宮の神衣祭(カンミソマツリ)に、男子にて、織人と共に、宮司・禰宜(ネギ)等に率ゐられて、男衣を供進せしもの。

ひ-ともし 火點 【名】 ㊀松明(タイマツ)などに、火をともすこと。點火。 謠曲(熊坂)「三條の衞門、壬生(ミブ)の小猿、火ともしの上手」 ㊁古、送葬の時、炬火(タイマツ)を持ちて前行せし者。 榮花「御さきに、火ともしばかりにて」 ㊂てしよく(手燭)を云ふ。〔關西の語〕

ひと-もじ 一文字 【名】 ㊀一つの文字。一字。 土佐「一文字を知らぬ者しが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ」 空穗「一もじをだに聞かせたまはぬ」 ㊁〔植〕『古は、單にきとのみ呼びしより、假名一字の名といふ義にていふ。ふたもじ(二文字)㊁參照』 ねぎ(葱)を云ふ。〔女の語〕 重井筒「ひよ子・ひしこ・ひともじ」

ひともし-いし 火點石 【名】 手水鉢の附近なる石燈籠に、火をともす時の足掛(アシガカリ)として据ゑ附くる石。又、後には、單に、燈籠の臺石の側に据ゑ附くる石。

ひともし-ぐも 火點蜘蛛 【名】〔動〕 蜘蛛の一種。通常の蜘蛛に類すれども、山中の樹間に網を結び、晝も隱れざるものといふ。はなぐも。

ひともし-ごろ 火點頃 【名】 燈火を點ずべき時刻。たそがれ。ゆふまぐれ。ひとぼしどき。ひともしどき。

ひともし-どき 火點時 【名】 前條に同じ。 榮花「火ともし時になりぬ」

ひともし-びと 火點人 【名】 燭を執りて、貴人の傍に伺候する人。〔古語〕 紀「秉燭者、ヒトモシビト」

ひともと-ぎく 一本菊 【名】 ただ一本生えてある菊。 榮花「一もと菊・むら菊などの、あるは盛に、あるはうつろひたる」

ひともと-ぐさ 一本草 【名】〔植〕 ひきおこしに同じ。

ひともと-すすき 一本薄 【名】 ㊀ただ一本生えてある薄。 古今「君が植ゑし一もと薄蟲の音のしげき宿ともなりにけるかな」 ㊁〔植〕 禾本科に屬する多年生の草。大なるは、高さ六尺内外に達す。葉は細長くして、平行脈を有し、互生して、三縱列に排列し、淡黃色の花、一旦小穗狀花序をなし、更に簇りて、繖房花序をなして開く。

ひともと-やなぎ 一本柳 【名】 ただ一本生えてある柳。 堀太「わが宿の一もと柳春來れば吹きくる風にかつ亂れけり」

ひと-もの 一物 【副】 器物に滿つるまでに。ひたもの。一杯。今昔「大きなる壺の有りけるに、水を一物入れて」

ひと-もん 一文 【名】 錢一文だけの廣さ。宗五大雙紙「紐はひと文とて、昔より定まりたる事にて候を、殊の外、今は廣く候」

ひと-や 人屋・獄 【名】 らうや（牢屋）に同じ。和名「獄、比度夜」

ひと-や 一矢 【名】 一度矢を射ること。保元「件（クダン）の大矢を打交（ウチツガ）ひ、只一矢に射落さんと」

ひと-やう 一様 【名】 心の偏（カタヨ）りてあること。源氏「さも女しき所なかめるぞ、ひとやうなる」

ひと-やど 人宿 【名】 ㊀はたごや（旅籠屋）に同じ 室町千疊敷「この邊に人宿を致す者なれども」 ㊁雇人の口入宿（クチイレヤド）。

ひと-やどり 人宿 【名】 人の宿る處。宿泊所。盛衰記「小峠坂の人宿に、人あまた晋しけり」

ひと-や-の-かみ 囚獄正 【名】 囚獄司の長官。

ひと-や-の-つかさ 囚獄司 【名】 令制の官司の一。刑部（ギヤウブ）省の被管。職員に正（カミ）・佑（ジヨウ）・大少令（サクワン）各一人及び物部（モノベ）四十人、物部丁二十人ありて、罪人の囚禁、徒役の功程、配流・決杖等の事を掌りし所。大同三年、贓贖司を併す。檢非違使（ケビヰシ）の設置以後、その實務、殆どこれに移れり。囚獄司（シコクシ）。和名「囚獄司、比止夜乃官」

ひとやのつかさ-の-かみ 囚獄正 【名】 囚獄司の長官。

ひと-やま 人山 【名】 群衆の立ち重なれるさまを、山に譬へていふ語。人の山。

人山を築く 【句】 群衆立ち重なる。

ひと-やま 一山 【名】 ㊀山の全部。山ちゆう。滿山。宇治「ひと山を尋ねありけども、つひに在所なし」 ㊁積み重ねたる果物、野菜どの一かたまり。

一山百文（ヒヤクモン） 【句】 數は多けれど、價安き物の形容。［諺語］

ひと-や-やぶり 人屋破 【名】 らうやぶり（牢破）に同じ。

ひと-やり 人遣 【名】 ㊀我より思ひ立ちてするに非ずして、他より爲さしむること。（下に打消の語を伴なふ）［古語］ 古今「人やりの道ならなくに大方は生（イ）きうしといひていざ歸りこん」 源氏「人やりならぬ徒然（ツレヅレ）に」 ㊁人を歸り去らしむること。［古語］ 新六「月影はまだ夜深しとやすらへばはや人やりの鳥は鳴くなり」

ひと-ゆき 人行 【名】 ひとどほり（人通）に同じ。

ひと-よ 一夜 【名】 ㊀一度の夜。ひとばん。一夜（イチヤ）。紀「ささらがた錦の紐を解きさけてあまたは寢ずとただ一夜のみ」 ㊁ある夜。一夜（イチヤ）。源氏「一夜の深山風に過ちたまへる惱ましさなり」

一夜明く 【句】 除夜過ぎて、元日となる。一夜（イチヤ）明く。四方のあか「一夜明くれば、賑かに、春の初の初芝居」

一夜の秋 【名】 秋立ちての一夜。秋の一夜。玉葉「葎の葉に一夜の秋を吹きこなしけふより涼し池の夕風」

一夜の松 【句】 ひとよまつ（一夜松）に同じ。風雅「思ひ初めし一夜の松の種しあれば神の宮居も千世や重ねん」

ひと-よ 一世 【名】 いっしやう（一生）㊀に同じ。萬葉「一世には二たび見えぬ父母をおきてや長くあが別れなむ」 謠曲（籠祇王）「薄き契は、親と子の一世に限る夢の内を」

ひとよ-ぎり 一節切 【名】 『よ（節）を見よ』節一つ込めて切りたる竹にて造り、尺八に似て、細く短く、長さ、曲尺にて、一尺八分なる笛。後世、小竹（コチク）といふ。二代男「一節切の連吹」

一節切の尺八 【句】 前條に同じ。

ひとよ-ぎり 一夜切 【名】 一夜を限とすること。ひとよづま（一夜妻）參照。一代女「一夜切に身を賣れば」

ひとよぎり-しやくはち 一節切尺八 【名】 ひとよぎり（一節切）に同じ。絲竹初心集「一節切尺八切りやうの事」

ひとよぎり-ぶし 一節切節 【名】 文祿・慶長の頃より、元祿・寶永の頃にかけて、一節切に合はせて唱ひし小唄。

ひとよ-ぐさ 一夜草 【名】 ［植］ すみれ（菫）㊀の異稱。［古語］ 藏玉集「一夜草。菫。一夜草夢さましつつ古の花と思へば今も摘むらん」

ひと-よけ 人除 【名】 人の入るを防ぐために設くること、又そのための物。一代男「しのべ竹の人除」

ひと-よさ 一夜さ 【名】 ひとよ（一夜）に同じ。井筒業平河内通「君と寢初めて一夜さも」

ひとよ-ざけ 一夜酒 【名】 『一夜の間に熟するよりいふ』あまざけ（甘酒）に同じ。公事根元「一夜ざけとは、けふ造れば、明日は供するなり」

ひと-よし 人好 【名】 こころよし（心好）㊀に同じ。

ひとよし 人吉 【名】 ［地］ ㊀肥後國球磨（クマ）郡にある町。郡の首邑。鐵道九州幹線の一驛。球磨川に跨り、後に城山（シロヤマ）を控ふ。相良（サガラ）氏の舊藩地。舊稱、球磨。㊁明治の初年の縣の一。やつしろ（八代）㊁參照。

ひとよし-じやう 人吉城 【名】 前條㊀に在りし城。文明年間、相良長頼の十代の裔爲續の創築といふ。さがら（相良）㊁參照。球磨（クマ）城。

ひとよ-ずし 一夜酢 【名】 いちやずし（一夜鮓）に同じ。膝栗毛「唯一夜鮓の飯盛（メシモリ）」

ひと-よせ 人寄 【名】 ㊀人を寄り集まらしむること、又その手段として行ふ音樂・演藝など。昔昔物語「その次に、人寄とて、和田酒盛一流、前淨瑠璃にして濟まし」 ㊁次條の略。

ひとよせ-せき 人寄席 【名】 よせ（寄席）に同じ。

ひとよせ-だいこ 人寄太鼓・人寄太皷 【名】 演藝場又は興行場にて、開場時間に先だちて、客を寄り集まらしむるために打つ太鼓。（散（チラ）太鼓に對して）

ひとよせ-ば 人寄場・人寄塲 【名】 ひとよせせき（人寄席）に同じ。

ひとよ-だけ 一節竹 【名】 『よ（節）を見よ』一節の長さに切り取りたる竹。著聞「一丈五尺の曼陀羅を織りあらはして、一よ竹を軸にして、捧げ持ちて」

ひとよ-づま 一夜妻 【名】 ㊀始めて、一夜逢へる女。ただ一夜のみ契る女。いちやづま。萬葉「我が門に千鳥しば鳴く起きよ起きよわが一夜妻人に知らゆな」 ㊁たなばたづめ（棚機津女）㊁に同じ。新和歌集「秋を待つ天の川原の一夜づま朝霧隱れ立ち歸るらん」 謠曲（鳥追船）「我等も、年に一夜妻、逢ひもやすると、天の川」 ㊂『ひとよぎり（一夜切）を見よ』うかれめ。遊女。

ひとよ-どまり 一夜泊 【名】 ひとばんどまり（一晩泊）に同じ。謠曲（白樂天）「一夜泊と聞くからに」

ひとよ-ながれ 一夜流 【名】 『「流の身」を見よ』 ひとよづま（一夜妻）㊂に同じ。俗曲（纖路山色毬）「一夜ながれの仇夢も、數へて見れば、三四歳（ミヨトセ）を」

ひと-よばはり 人呼 【名】 人を呼はること。

ひとよ-まぜ 一夜交 【名】 ひとばんおき（一晩置）に同じ。

ひとよ-まつ 一夜松 【名】 せんぼんまつ（千本松）㊀に同じ。續千載「一夜松千代の末葉の老木まで木高くなりぬ年も位も」 毛吹草（重頼）「洛中の門や北野の一夜松」

ひとよまつ-じんじや 一夜松神社 【名】 京都の北野天滿宮の末社の一。一夜松の傳說に基づきて建てしもの。

ひと-よみ 【名】 ［植］ こばのがまずみ（小葉莢蒾）に同じ。

ひとよ-めぐり 一夜廻 【名】 ひとひめぐり（一日廻）に同じ。［古語］ 金葉「君こそは一夜めぐりの神と聞けなど逢ふことの方たがふらん」

ひと-より 一より 【名】 ひとたび。一回。一度。［古語］ 夫木「暮れぬとてはつとやだしのはしだかを一よりいかがあはせざるべき」

ひどら （英 Hydra） 【名】 ［動］ ヒドラ類に屬する腔腸動物の一屬。體は圓筒狀にして、長さ一寸内外、一端に圓錐丘をなせる口あり、他端に吸盤ありて、他物に吸著するが故に、海藻と誤らる。口の周圍より、五本以上の觸手を出だして、水中の小動物を捕食し、又、敵を防禦す。分芽によりて繁殖すれども、群體をなさず、又、體壁中に雌雄の生殖物を生じ、有性的に生殖

す。褐色のと、綠色のとあり。各地の池・沼・河・湖等、淡水の水草の間に棲息す。

ひど-らし 人らし【形二】❶人間のやうにてあり。人の如し。❷普通の人らし。相當の人らし。人めかし。落窪「まろも、今少し人らしくなりて」先代萩「人らしい者の手にかかつても死ぬことか、素性賤しい源兵衞が女房づれの刄にかかり」

ひどらじん（英 Hydrazines）【名】〔化〕水素の窒素化合物なる、無色の液體。數種の方法にて製するを得。水とは、いかなる割合にてもよく化合し、强きアルカリ性反應を呈し、皮膚・コルク・ゴム類を腐蝕すること、苛性アルカリの如し。有機物の研究上、屢ば使用せらる。

ひどら-るゐ ヒドラ類【名】〔動〕**するゐそくちゆうるゐ**（水螅蟲類）に同じ。

ひど-り 一人【名】一個の人。一人（イチニン）。

「一人言へば、三人聞く【句】事の漏れ易き形容。〔諺語〕國姓爺後日合戰「一人言へば三人聞き、一里言へば、一國に沙汰し」

「一人一人【句】どちらか一人。〔古語〕竹取「思ひ定めて、ひとりひとりに逢ひ奉りたまひね」

「一人も一人柄（ヒトリガラ）【名】一人子にても、その性質の如何により、愛すべきも、愛すべからざるもあり。〔諺語〕本朝二十不孝「一人も一人がらと悲しく、今は敎訓の言葉も盡きける」

ひ-どり 火取・火採【名】❶香爐の類。中古、薰物（タキモノ）をくゆらすに用ひしもの。全部、銀にて作り、又は外部を木製にして、蒔繪などを施し、内に銅又は陶器を塡めたる上に、金の伏籠（フセゴ）を覆ひ、使用せぬ時は、室内裝飾の具として、二階棚の上段・右方に据ゑおくを例としたり。〔薰爐〕空穗「白かねの火取に、白かねの籠（コ）造りおほひて」❷居金にて作り、鉉（ツル）あり、炭火を入れて、他に移し取るに用ふる具。

「火取の童（ワラハ）【名】五節（ゴセチ）の舞姬の參入する時、火取を持ちて、先に立つ女（メ）の童。〔古語〕枕「火取のわらは、小忌（ヲミ）の公達（キンダチ）もいとなまめかし」

ひど-り 獨【名】『**ひどり**（一人）の轉義』その物事のみなること。只それぎりなるさま。單獨。後拾遺「見んといひし人ははかなく消えにしをひとり露けき秋の花」

「獨を好む【名】『荀子の大略篇に「迷者不ㇾ問ㇾ路、溺者不ㇾ問ㇾ達、亡人好ㇾ獨」とあるに本づく』他人に謀らずして、自ら計を用ふ。

「獨を愼む【名】『大學に「君子愼㆓其獨㆒也」とあるに本づく』人の見聞せぬ所にても、心を正しくす。風來六六部集 菩提樹の辨「本尊も、念佛もいらず、儒者の獨を愼み、神道者の正直ばかりで濟みさうなものなれど」

ひど-り 獨・特【副】ただ。單獨に。（助詞のみと打消の語、又は反語とを伴なふ）

ひ-どり 日取【名】日取ること。ひえり。期日。戀八卦柱曆「元服よしの日取もよしや」

「日取・時取（トキドリ）【句】時日の吉凶を占ふこと。

ひどり-あそび 一人遊・獨遊【名】❶一人にて遊ぶこと。❷春畫を見て樂しむこと。一代女「菱川が書きし、小氣味のよき姿枕を見ては、我を覺えず上氣して、…、ひとり遊もむづかしく、まことなる戀を願ひし」

ひどり-あんない 獨案內【名】**ひどりまなび**（獨學）㊁に同じ。「英語獨案內」

ひどり-あんま 一人按摩・獨按摩【名】身體を起居・屈伸して、他人の手を煩さず、みづから按摩すること、又その法、又これを行ふに用ふる具。あんまいらず。

ひどり-あるき 一人步行・獨步行【名】附き添ふ者なく、單身にてあるくこと。獨行（ドクカウ）。

ひどり-うた 獨歌【名】管絃なしに、一人にて唄を謠ふこと。いたづらうた。字鏡集「謠、ヒトリウタ・ウタフ・ウタ・イタヅラウタ」

ひどり-うど 獨人【名】**ひどりびど**（獨人）の音便。著聞「男に後れて、賴む方なきひとりうどにて候」

ひどり-うま 獨馬【名】單獨にて、馬に乘ること。單騎。左經記「御㆓馬場殿㆒、……有㆓獨馬事㆒」

ひどり-うらなひ 一人占・獨占【名】身の上の吉凶を、占者の力を煩さず、みづから占ふこと、又その類の事を記せる書物。

ひどり-おき 一人起・獨起【名】他の人人は寢ねたるに、ただ一人起きゐること。太祇「朝顏や小詰役者の獨起」

ひどり-がかり 一人掛【名】**いちにんがかり**（一人掛）㊁に同じ。

ひどり-かご 火取籠・火採籠【名】**ひどりご**（火取籠）を見よ。

ひどり-がち 一人勝・獨勝【名】❶他は悉く負けて、ただ一人のみ勝を得ること。（一人負（ヒトリマケ）に對して）八笑人「一人勝・一人負は拔けて、殘った者を、三助としよう」❷ただ一人居ることの多きこと。

ひどり-がてん 獨合點【名】周圍の事情を考へず、自分一人のみにてうなづくこと。いちぶがてん。ひとりのみこみ。

ひどり-かぶり 一人被【名】仲間の責任を、一人にて負ふこと。和合人「口口に笑はれ、土場六（ドバロク）ひとりかぶりとなりしかば、今は土場六も、やけになり」

ひどり-ぎめ 一人極・獨極【名】自分一人の考にて定むること。獨斷。

ひどり-きやうげん 獨狂言【名】自分一人のみにて、芝居の所作をすること。油糟「ゆるりと居てはまたかしこまる（といふ句に）主從者眞似する獨狂言に」八笑人「獨狂言も大層だあ。その三津五良（ミツゴラウ）のつもりといふのが、糞船の上乘（ハノリ）をして」

ひどり-きやく 獨客【名】客人の、ただ一人なること。

ひどり-ぐさ 日取草【名】〔植〕**つつじ**（躑躅）の異稱。〔古語〕莫傳抄「花咲けば秋かと思ふ日取草見るに紅葉の色にまがへて」

ひどり-ぐち 一人口【名】一人にて、生計を立つること。

一人口は喰へぬが、二人口は喰へる【名】夫婦にて、生計を營む方、經濟上、獨身よりも、却って得策なり。〔諺語〕

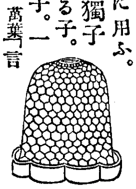
ひど-りくつ 一理窟【名】一かどの理窟。聖德太子繪傳記「一理窟ある顏の色」

ひどり-ぐらし 一人暮・獨暮【名】ただ一人にて、生活を立つること。ひとりすぎ。獨身生活。

ひどり-げい 獨藝【名】自分一人のみにて遊藝をなすこと。

ひどり-げいこ 獨稽古【名】**ひどりまなび**（獨學）㊀に同し。

ひどり-ご 火取籠・火採籠【名】火取㊀の伏籠（フセゴ）。衣をかけて乾かし、又香をたきしめなどするに用ふ。



（ごりとひ）

ひどり-ご 一人子・獨子【名】ただ一人なる子。兄弟・姉妹の無き子。一子。ひとりっこ。萬葉「言（コト）問はぬ木すら妹（モ）と背ありとふをただ獨子にあるが苦しさ」

一人子は國にはばかる【句】一人子は、親の愛に狎れて、我儘なる振舞をなす。〔諺語〕

ひどり-こぎ 一人漕【名】**いちにんこぎ**（一人漕）に同じ。

ひどり-ごつ 獨言つ・獨語つ【動四自】『**のりごつ**（宣言つ）・**はかりごつ**（謀つ）・**まつりごつ**（政つ）などと同類の語』ひとりごとを言ふ。〔古語〕源氏「うちながめて、ひりごちおはす」

ひどり-ごと 獨言【名】相手なく、ただ一人にて物いふこと、又その言葉。獨語（ドクゴ）。土佐「この歌を、獨言にしてやみぬ」

ひどり-ごと【名】〔書〕『前條の語の義』平泉鬼貫（オニツラ）が、自己の俳論・俳話・感想等を、隨筆的に記したるもの。二卷。天明四年の刊行。

ひどり-ごと 獨事【名】師に就かず、自分一人にて、事を習ふこと、又その方法によりて覺えたる事。源氏「遊の方の才（ザエ）は、なほ廣う合はせ、かれこれに通はしはべるこそかしこけれ。ひとり事にて、上手となりけんこそ、珍しき事なれ」

ひどり-ころび 獨轉【名】自然にころぶこと。三河物語「内前を蹈みつぶすに及ばず、獨ころびにならん」

ひどり-しづか 一人靜【名】〔植〕❶金粟蘭（チャラン）科に屬する多年生の草。高さ一尺

に餘る。莖は、節を具へ、その上部に、四枚の葉輪生す。葉は楕圓形にして、先端尖り、鋸齒を有し、輪生せる葉の中央より、長さ二寸ほどの花莖を抽き、四五月頃、細長き白色の雄蘂と綠色の雌蘂とありて、花被を缺ける花、穗狀花序をなして開き、花序の數は、通常一箇なり。まゆはきさう。まゆはけぐさ。［銀線草］ふたりしづか(二人靜)參照。㊁くさやつで(草八手)に同じ。

ひとり-じまん 獨自慢【名】自分免許にて慢心すること。うぬぼれ根性。一分自慢。

ひとり-じめ 獨占【名】ただ一人にて專有すること。壟斷。獨占(ドクセン)。

ひとり-しやうじ 獨床子【名】三位・參議以上の腰掛。西宮記「參議座立㆓獨床子㆒」

ひとり-じやうらふ 獨上臈【名】人は許さぬに、自分一人にて、上臈なりと思ひあがること。ひとりぎめの上臈。

ひとり-すぎ 一人過・獨過【名】ひとりぐらし(一人暮)に同じ。一代女「女の獨過の面白からず」

ひとり-ずまひ 一人住・獨住【名】一人にて住むこと。やもめぐらし。ひとりずみ。

ひとり-ずまふ 一人相撲・獨相撲【名】㊀相手なく、自分一人にて力むこと。鶴岡職人盡歌合「日は入りて月こそ空にねり出づれひとりずまひの心ちのみして」㊁相手なく、自分一人にて、相撲の眞似をする遊戲。又、昔、その動作をなして、錢を乞ひあるきし者。

ひとり-ずみ 一人住・獨住【名】ひとりずまひ(一人住)に同じ。落窪「習はぬひとりずみにて、……、さらざらしくおぼさる」

ひとり-ずみか 一人住處・獨住處【名】ひとり住のすみか。義忠百首「山深みひとりすみかの優婆塞(ウバソク)は郭公とやことは語らふ」

ひとり-だち 一人立・獨立【名】㊀一人にて立ち上ること。他人の手を煩さず、自己の力にて立つこと。空穗「宮をかしげにて、ひとりだちし、歩みはじめたまふほどなり」㊁他人の助を借らず、自分一人の力にて、事を爲すこと。獨立(ドクリツ)・伴なひ助くる者なきこと。味方なきこと。㊂孤立。甲陽軍鑑「去年、景虎に隨うては、今年隨はずして、ひとり立ならねば」㊃ひとりびとりに立ち去ること。一人づつ立ち去ること。今昔「すさまじく成りぬれば、獨立に立ちて、皆去りぬ」

ひとり-たび 一人旅・獨旅【名】一人にて旅行すること。同行者なき旅。太功記「諸國修行の一人旅、近頃申しかねたれど、お宿の報謝に預かりたし」

ひとり-だま 火取玉【名】ひとるたま(火取玉)に同じ。風來山人六六部集(菩提樹の辨)「心が卽ち火珠(ヒトリダマ)にて、まことの如來映らせたまへば、その時、悟を開くなり」

ひとり-っこ 一人子・獨子【名】ひとりご(一人子)の音便。

ひとり-でに 一人手に・獨手に【副】おのづから。自然と。浮世風呂「おやおや、この手が、ひとりでに、上へあがる」

ひとり-でんか 一人天下・獨天下【名】敵する者なく、一人にて、思ふがままに威勢を振ふこと。ひとりぶたい。獨擅。

ひとり-てんぐ 一人天狗・獨天狗【名】人は許さぬに、自分一人にて思ひあがること。譽むる者の無きに、自慢すること。

ひとり-なき 一人泣・獨泣【名】思ひ出しなどして、相手もなきに、泣くこと。

ひとり-ね 一人寢・獨寢・一人寐・獨寐【名】妻もなく、ただ一人にて寢ぬること。ひとりぶし。やもめぶし。源氏「心ぼそきひとりねのなぐさめにも」

ひとり-のみこみ 一人呑込・獨呑込【名】ひとりがてん(一人合點)に同じ。

ひとり-のり 一人乘【名】ただ一人乘ること、又、乘物の、それだけの大いさなるもの。いちにんのり。「一人乘の車」

ひとり-ばうず 一人坊主・獨坊主【名】獨住の坊主。ひとりぼふし。鶉衣「ひとり坊主の、佛供をや調じけん」風俗文選(旅賦)「獨坊主には、宿を貸しかね」

ひとり-ばみ 一人食・獨食【名】㊀一人にて食ふこと。字鏡「饌、於到反、妬食也、比止利波彌須」㊁若き女が、己一人の考にて、男を設くること。傾城酒呑童子「わしらが若い時分は、祕傳・口傳も入ったれども、……今の娘は一人食」

ひとり-ばら 一人腹・獨腹【名】己一人にて、腹を立つること。今宮心中「滅多無上に一人腹、人も知らぬ心を苛ち」重帷子「權三が方を尻目にかけ、相手知れずの獨腹」

ひとり-びと 獨人【名】ひとりもの(獨者)に同じ。「夕人」に同じ。

ひとり-びと 械取人【名】てうじやくにん(朝

ひとり-びとり 一人一人【副】一人ごとに。一人づつ。てんでに。各人。各自。

ひとり-ひめ 一人姬【名】一人子(ヒトリゴ)なる姬。貴人の一人娘。出世景淸「一人姬のをの姬と聞えしを、景淸にめあはせ」雪女五枚羽子板「この國の大名古川權頭淸氏殿の一人姬、琵琶の君とて、美人あり」

ひとり-ぶし 一人臥・獨臥【名】ひとりね(一人寢)に同じ。後撰「定めたる妻(メ)も侍らず、ひとりぶしをのみす」

ひとり-ぶたい 一人舞臺・獨舞臺【名】㊀役者の、ただ一人、舞臺に出でて、伎を演ずること。八笑人「獨舞臺の內が、眼公(ガンコウ)には、ちと大役(タイヤク)だよ」㊁演伎中、役者の中の一人が、伎術、特にすぐれて、他の者は見ばえなき程なること。どくせんじやう。㊂或一人の伎倆・權威の、特にすぐれて、周圍の者を壓して振舞ふこと。肩を比(ナラ)ぶる者なきこと。ひとりでんか。獨擅。

ひとり-ぼし 一人法師・獨法師【名】次條に同じ。俳諧古選(菊峰)「花鳥や散らば鳴子の獨ぼし」生寫朝顏話「それから、又、獨ぼし、この邊まで、その歌をうたうてあるきましたが」

ひとり-ぼっち 獨法師【名】『次條の訛』連(ツレ)の者なく、ただ一人なること。

ひとり-ぼふし 獨法師【名】㊀ひとりばうず(獨坊主)に同じ。堀川狂歌集「苔。山寺の獨法師はついこけてころりとぬるか苔のむしろに」㊁前條に同じ。

ひとり-まけ 一人負・獨負【名】㊀他の者は皆勝ちたるに、ただ一人負くること。(一人勝に對して)八笑人「一人勝・一人負は拔けて、殘った者を、三助(サンスケ)としよう」㊁ちからまけ(力負)に同じ。

ひとり-まなび 獨學【名】㊀師に就かず、己れ一人の力にて勉學すること。獨學(ドクガク)。獨習。㊁他人に問はずとも學び得るやうに記せる書物。ひとりあんない。どくあんない。獨習書。

ひとり-まへ 一人前【名】いちにんまへ(一人前)に同じ。續俳家奇人談(柳居)「一人前に見足らぬ花や庭の雪」

ひとり-み 獨身【名】ひとりもの。獨身(ドクシン)。方丈記「獨身なる者は、人に輕しめらる」戀娘昔八丈「又、かの方も、若い身の上、何時までも獨身でも濟まぬ程に」

ひとり-むし 火取蟲【名】㊀夏の夜、燈火を目がけて飛び集まる蛾。ひむし。燈蛾。拾玉「身を捨つる火取蟲こそあはれなれなど後の世をかくは思はぬ」㊁［動］燈蛾科に屬する大形の蛾。熊毛蟲の成蟲。**うちすずめ**(內雀)參照。

ひとり-むしや 一人武者【名】無雙の武者。隨一の武者。謠曲(土蜘蛛)「賴光の御內(ミウチ)に、その名を得たる一人武者」傾城酒呑童子「一人武者保昌は、綱がつれづれ尋ねんと」

ひとり-むすこ 一人息子【名】ただ一人にて、兄弟なきむすこ。男の一人子(ヒトリゴ)。

ひとり-むすめ 一人娘【名】ただ一人にて、姉妹なきむすめ。女の一人子(ヒトリゴ)。狂言(八幡聟)「美人のひとり娘を持った。一藝ある聟を取りませう」

一人娘に聟八人【句】㊀一人の娘に對して、聟たらんことを希望する者の多きこと。㊁一つの物事に對して、望手の多き譬。［諺語］

ひとり-もの 一人者・獨者【名】獨身の人。やもめぐらしの人。ひとりうど。ひとりみ。獨身者。

獨者が茶を貰ったやう【句】喜びてにこにこする譬。［諺語］

ひとり-やく 一人役【名】ただ一人にて、

役を勸むること。俳諧新選（乙總）「蓑笠の果や案山子（カカシ）の一人役」

ひとり-ゆみ 一人弓・獨弓【名】相手なく、ただ一人にて、弓を射ること。東鑑「九番、棗右近三郎、獨弓」

ひとり-よがり 獨善がり【名】他人の考を顧みず、自ら善しと思へること、又その人。うぬぼれ。

ひとり-れんが 獨連歌【名】一人にてする連歌。筑波問答「中古までは、一二句を連ね、あるひは、獨連歌・有心（ウシン）・無心の句などにてありしほどに」

ひとり-わんきう 獨椀久【名】**ににんわんきう**（二人椀久）を見よ。

ひとり-わらひ 一人笑・獨笑【名】㊀相手無く、ただ一人にて笑ふこと。㊁『**わらひゑ**（笑繪）・**わらひぼん**（笑本）を見よ』**まくらゑ**（枕繪）に同じ。一代男「かた樣御殘し置き候ふ獨笑の御肌著」

ひとり-ゐ 獨居【名】**どくきよ**（獨居）に同じ。狹衣「かきくらされたまふ程は、かかるひとりゐをしたまひつつ」太祇「獨居や足の湯沸かす秋の暮」

ひとり-ゑみ 獨笑【名】相手無く、ただ一人にて微笑すること。源氏「御ひとりゑみは、と咎めあへり」

ひとり-をとこ 獨男【名】獨身の男。蜻蛉「ただひとり男にてあれば、年比も、ここかしこに詣でなどする所には」

ひとり-をんな 獨女【名】獨身の女。

ひ-どる 火取る【動四他】火にてあぶる。あぶりて乾かす。

ひ-どる 日取る【動四自】日を選び定む。日がらの吉凶を定む。日取（ヒドリ）をす。落窪「この二十八日になん、舟に乗りなんと日どりたりければ」

ひとる-たま 火取玉・火珠・火精【名】昔、太陽の光線を通して、その焦點にて、艾などを燃して、火を取りし玉。（水取玉（ミヅトルタマ）に對して）〔古語〕和名「火珠、一名陽隧。比止流太萬。火精也」

ひとる-ゐ 一類【名】**いちぞく**（一族）に同じ。〔古語〕榮花「このひとるゐの外の殿ばら」

ひと-れうけん 一了簡【名】㊀**ひとかんがへ**（一考）に同じ。㊁一かどの了簡。

ひどろ-きかん（英 Hydroquinone）【名】〔化〕有機化合物の一。アニリンを、重クロム酸カリウム及び硫酸にて酸化し、又は、キノンを、亞硫酸にて還元しなどして得るもの。無色にして、一斜系板狀結晶又は六角柱の結晶を成し、微かに甘味あり。水・酒精・エテルに溶解す。還元性强きにより、寫眞の現像藥などに用ふ。

ひどろくらげ-るゐ 水螅水母類【名】〔動〕腔腸動物の一綱。體、概ね小形にして、透明なる寒天樣物質より成り、鐘狀若しくは圓筒狀の部分と、その下面に下垂する柄の如き部分とありて、構造簡單なり。ヒドラ・花笠水母（ハナガサクラゲ）など、これに屬す。

ひどろちゆう-るゐ 水螅蟲類【名】〔動〕前條に同じ。

ひと-わき 人別【名】人のわかち。人に差別を附くること。〔古語〕伊勢集「ゐる雲の人わきもせぬものならば水と涙は流れざらまし」

ひと-わけ 人分【名】多くの人を、二つ以「上の組に分くること。

ひとわすれず-やま 人不忘山【名】〔地〕陸奥（ミチノク）にありといふ山。今の磐城國白河町の東約二里に在るもの、これなりといふ。夫木「みちのくの逢隈（アフクマ）川のあなたなる人わすれずの山ぞさかしき」

ひと-わたり 一渡【副】ひととほり。一往。一かへり。一回。源氏「一わたりはつらしと思はれ、人には少し謗らるとも」

ひと-わらはれ 人笑はれ【名】他人に笑はるること。わらひぐさ。ひとわらへ。ひとわらひ。落窪「ここらの年頃、ひとへに作りて、人笑はれにやならんとするに」

ひと-わらひ 人笑【名】前條に同じ。

ひとわらひ-ぐさ 人笑種【名】人笑の材料。わらひぐさ。雅莚醉狂集「願はれて硯に向ひ書きつくるよしなしごとや人わらひぐさ」

ひと-わらへ 人笑【名】**ひとわらはれ**（人笑はれ）の約。〔古語〕源氏「人わらへにならんことをおぼす」

ひと-わる 人惡【名】人の性質のねじけること、又その人。いぢわる。

ひと-わろし 人惡し【形二】人に見られて、體裁よからず。見っともなし。外聞わろし。〔古語〕源氏「人わろくはしたなかりける御物語かな」著聞「をのこの身は、いついかになるべしとても、人わろかるべき事はなしとて、ものともせざりけり」

ひと-ゑひ 人醉【名】人に醉ふこと。人込（ヒトゴミ）のために、心地惡しくなること。人いきれにて、心地わるくなること。家長日記「人ゑひもしぬべきほど參りこみたり」

ひと-を 一峯・一峰【名】山の一つの尾。萬葉「足引の山鳥の尾の一峰越え一目見し子に戀ふべきものか」

ひと-をね 一尾根【名】前條に同じ。芭蕉「ひと尾根はしぐるる雲か富士の山」

ひな 雛【名】㊀鳥の子の孵化してよりいまだ間もなきもの。ひなどり。ひよこ。枕「鷄のひなの、足だかに白うをかしげなる」㊁女兒の玩具とする、小き人形。ひな。ひなにんぎやう。昔昔物語「昔のひなは侍烏帽子なり」㊂ひなあそび。ひなまつり。

雛の遊【句】**ひなあそび**（雛遊）に同じ。

雛の家【句】雛人形を飾れる家。奥の細道「草の戸も住みかはる世ぞ雛の家」

雛の宴【句】雛祭の時、白酒を酌む宴。

雛の駕籠【句】「雛の使」を見よ。猿蓑（狹子）「春風にこかすな雛の駕籠の衆」

雛の酒【句】**ひなざけ**（雛酒）に同じ。

雛の節句【句】雛祭を行ふ、三月三日の節句。洛陽集「來（コ）し方や子持見なほす雛の節句（セク）」

雛の使【句】元祿の頃、節句の禮とて、雛人形を、乘物に乘せ、甘酒の樽・草餠の行器（ホカヰ）などを、釣臺に乘せて、親類へ贈りしこと。雛人形の乘物は、鋲打にて、蒔繪を施し、赤き總（フサ）を附けなどして、雛の駕籠といへり。俳諧日本國「奥深き疊の上のありがたさ（といふ句に）雛の使の酒の弱足」

雛の櫃（ツヒ）【句】雛人形と共に、雛壇に飾る櫃。續猿蓑（桃市）「雀子や姉に貰ひし雛の櫃」

雛の行器（ホカヰ）【句】雛人形と共に、雛壇に飾る行器。一代男「茶菓子は、雛の行器に入れ」

雛の別（ワカレ）【句】親鳥が、雛と別るること。堀太「庭鳥の雛の別の悲しきに曉ごとに音（ネ）をや鳴くらん」

雛を祭る【句】雛祭を爲す。蕪村「雛祭る都はづれや桃の月」

後（アト）の雛【句】九月九日の雛祭。正德の頃行はれたり。

ひな 鄙【名】都を離れたる土地。ゐなか。〔古語〕萬葉「あまざかるひなに五とせ住まひつつ都のてぶり忘らえにけり」

鄙の都【句】諸國の國府（コフ）。一說に、次の萬葉集の歌（卷十八）に、「比奈能都夜故」とある「都夜故」は、「夜都故（ヤツコ）」の誤なりと。〔古語〕萬葉「あまさかる鄙のみやこにあめ人のかく戀すらば生けるしるしあり」

鄙の都路（ミヤコヂ）【句】鄙の都、即ち國府（コフ）に通ずる路。謠曲（田村）「鄙の都路隔て來て、九重の春にいそがん」

鄙の別（ワカレ）【句】都遠き鄙へ別れ來ること。古今「思ひきや鄙の別に衰へて海人の繩たぎいさりせんとは」

ひな 雛【接頭】小くやさしげなる意。「ひながた」「ひな人形」「ひな芥子（ゲシ）」

ひな-あそび 雛遊【名】雛人形に、種種の調度を添へて、飾りて遊ぶこと。古は、季節を定めて遊ぶことは無かりしが、後土御門天皇の御代には、已に上巳の節供を、雛遊の期と定むるに至り、德川時代に至りては、五節句の一となり、男兒の端午に對する、女兒の祝日となれり。ひなまつり。ひひなあそび。雛會（ヒナエ）。月刈藻集「都には彌生（ヤヨヒ）の空ののどけくて雛の遊も思ひやるかな」

ひない 肥内【名】〔地〕陸奥（ミチノク）の五十四郡の一。今の陸奥（ムツ）國二戸（ニノヘ）郡に當

るとも、又、今の羽後國山本郡に、上檜内（カミヒナイ）・下檜内の二村あれば、その地に當るべしともいふ。

ひな-いし ひな石 【名】 のざかのうら（野坂浦）を見よ。

ひな-いち 雛市 【名】 雛人形をはじめ、雛遊に用ふる種種の調度を賣る市。

ひな-うた 鄙歌 【名】 ㊀ゐなかの歌。ひなぶりの歌。地方の俗謠。㊁きやうか（狂歌）に同じ。萬紫千紅「ここに、その歌をうつして、鄙歌に詠み續けぬるも」

ひなう-どうぶつ 被嚢動物 【名】〔動〕 びさくどうぶつ（尾索動物）に同じ。

ひなう-るゐ 被嚢類 【名】〔動〕 前條に同じ。

ひな-え 【名】〔植〕 蘭科に屬する多年生の草。高さ八寸ばかり。葉は、長楕圓形又は長卵形、全緣にして、平行脈あり。花は淡紫色にして、總狀花序をなす。各地の山中に自生す。

ひ-なか 日中 【名】 ひるひなか（晝日中）に同じ。丹波與作「ありや、皆、私等（ワシ）の身がはり、今日の日中に斬らるるげな」

ひ-なが 日永 【名】 日中の時間の長きこと、又その季節。春の日。永陽。一茶「待ち待ちし日永となれど田舍かな」

ひなが 日永 【名】〔地〕 伊勢國三重（ミヘ）郡にある村。東海道に當り、字追分は、參宮街道の分岐點たり。鴨長明「行き詑ぬいざ濱村に立寄らん朝明すぎては日永なりけり」

ひなが-うちは 日永團扇 【名】 前條の地より產出する團扇。

ひな-かざり 雛飾 【名】 雛人形を飾ること。

ひな-がた 雛形 【名】 ㊀實物に似せて、小く象（カタド）り作りたる物。製作物の小模型。典型。樣式。㊁手本とすべきもの。則るべきもの。㊂折烏帽子の前方、山形の下の小く突出したる部。

ひながた-ざし 雛形尺 【名】 鯨尺を縮めて、その三寸五分を一尺とせる、竹の物差。

ひなか-ぢ 日中路 【名】 日中に歩む路。炭俵（坂野）「日中路を照られて來るや桃の花」

ひな-がやつり 雛莎草 【名】〔植〕 莎草（カヤツリグサ）科に屬する草。高さ一尺內外。葉は根生、細長くして、先端尖る。夏季、葉叢の間より、花莖を抽き、梢上に、多數の小穗を著く。各地の水田の邊に生ず。

ひな-ぎきやう 雛桔梗・細葉沙參 【名】〔植〕 桔梗科に屬する多年生の草。莖は、細くして、斜出し、高さ七八寸。葉は銳尖頭の披針形にして、互生し、短き葉柄あり。夏秋の交、五瓣・青紫色の、桔梗のに似たる小花を開く。觀賞用に供す。いときぎやう。ひめぎきやう。

ひな-ぎく 雛菊 【名】〔植〕 菊科に屬する多年生の草。高さ三四寸。葉は倒卵形又は篦形にして、鋸齒あり。葉柄長し。四時花を開き、頭狀花序をなす。周邊は舌狀花にして、純白又は白色紅心、中部は筒狀花にして、鮮黃色なり。原產地は歐洲。觀賞用とす。えんめいぎく。

ひな-ぎぬ 雛衣 【名】 ひひなぎぬ（雛衣）に同じ。

ひなぐ 日奈久 【名】〔地〕 肥後國葦北（アシキタ）郡にある町。海に臨み、熊本市と鹿兒島市との間の國道に當る。溫泉あり。

ひな-くさ 雛草 【名】〔植〕 かもじぐさ（髢草）に同じ。

ひな-くさし ひな臭し 【形一】 きなくさし（きな臭し）に同じ。〔東北の方言〕

ひなくさ-びな 雛草雛 【名】 竹筒を身とし、千代紙又は染紙にて、著物を作り、雛草にて、下髮（サゲガミ）を作りたる雛人形。昔、三河地方にて、八朔の日に、女子玩べり。

ひな-ぐもり ひな曇 【枕】 日の曇の意にて、曇りたる日影は、光の薄きものなるより、薄日と同音なる地名うすゐ（碓氷）にかけていふ。一說に、純（タヒ）溟涬（クグモリ）の義にて、流水の凍りて滯る意より、薄氷（ウスヒ）と同音なる緣にてかけていふと。萬葉「ひなぐもりうすひの坂を越えしだに妹が戀しく忘らえぬかも」

ひなぐ-やき 日奈久燒 【名】 明治十年、肥後國葦北（アシキタ）郡日奈久の人村田英晤の燒き創めたる陶器。質、八代（ヤツシロ）燒に似たり。

ひ-な-くれ 日暮 【名】 ひのくれ（日暮）の轉訛。〔關東の方言〕

ひな-ぐわし 雛菓子 【名】 三月の節句に、雛壇に供ふる菓子。

ひ-なげ 杼投 【名】 織物を織る時、緯絲（ヌキイト）を通ずるため、杼を、左右より、杼道（ヒミチ）に投げ入るること。

ひな-げし 雛罌粟・麗春花・錦被花・虞美人草・美人草 【名】〔植〕 罌粟科に屬する一年生又は二年生の草。高さ二尺に達す。莖・葉共に毛あり。葉は羽狀に深裂し、互生す。花は單瓣又は重瓣にして、白・紅など種種ありて、美麗なり。原產地は歐洲。觀賞用とし、又、果實より阿片を製すること、通常の罌粟に同じ。さいぼたん。

ひな-ご 【名】〔動〕 小き鯋（イサ）。〔紀伊國和歌浦邊の方言〕

ひな-ごと 雛事 【名】 ひなあそび（雛遊）に同じ。雍州府志「倭俗以㆑紙作㆓小偶人夫婦之形㆒。……是謂㆓雛遊㆒、又稱㆓雛事㆒」

ひな-さかづき 雛杯・雛盃 【名】 雛酒を飲む杯。俳諧新選（山嘯）「雛さかづき投ぐれば疊に流れけり」

ひな-さかる 鄙離る 【動四自】 鄙の方へ遠ざかる。〔古語〕 萬葉「すめろぎの御言（ミコト）かしこみ夷放（ヒナサカ）る國を治むと」

ひな-さき 雛尖 【名】 ㊀烏帽子の眉の中央の、小さく尖れる部分。㊁女子の陰部の溺孔の上の突肉。さね。〔吉舌・陰挺〕和名「吉舌、比奈佐岐」

ひな-ざくら 雛櫻 【名】〔植〕 櫻草科に屬する多年生の草。高さ二三寸ばかり。葉は根生、倒卵形にして、先端に粗鋸齒あり、葉柄を缺く。夏季、葉間に、花莖を抽き、繖形花序をなして、櫻草に似たる小白花を開く。

ひな-ざけ 雛酒 【名】 雛祭の時に供ふる白酒。几董「雛酒や汐干を語る國家老」

ひな-ざさ 雛笹 【名】〔植〕 禾本科に屬する多年生の草。高さ一尺內外、一部は地上に匍匐す。葉は小形・披針形にして、互生す。花は細小にして、相集りて、圓錐花序をなす。

ひ-なし 日濟 【名】 ㊀借錢を、毎日、少しづつ返すこと。膝栗毛「米は無し、日濟はせがむ」 ㊁ひなしがね（日濟金）の略。

ひなし 日生 【名】〔地〕 備前國和氣（ワケ）郡にある町。岡山市の東九里餘にして、一小港をなす。

び-なし 便無し 【形一】 びんなし（便無し）の略。〔古語〕 柳樽「どうだなと戶へ寄りかかる日なし貸」 榮花「なにがしなどがためにこそ、びなう侍らまし」

ひなし-かし 日濟貸 【名】 日濟金を貸すこと、又これを業とする人。八笑人「むむ、二七・三八・四九・五十、日濟貸で押し分けられめえ」

ひなし-がね 日濟金 【名】 日濟の約束にて、貸借する金。ひがね。ひぜに。ひなし。

ひなし-ぜに 日濟錢 【名】 前條に同じ。

ひなせ 日生 【名】〔地〕 ひなし（日生）に同じ。

ひ-なた 日向・日南 【名】『日の方（カタ）の約』 日のさす方。日の照らす所。

日向に氷 【句】 物事の、次第次第に消えゆく譬。〔諺語〕

日向に氷貧乏 【句】 次第に貧乏すること。〔諺語〕 日本新永代藏「始末・始末といひて、簡略にのみ氣をくれて、銀をまうくる筋を見附けぬ者あり。これを、日向に氷貧乏といへり」

日向の氷 【名】「日向に氷」に同じ。〔諺語〕

ひな-だか 雛鷹 【名】 さほひめだか（佐保姬鷹）に同じ。

ひなたかみいは 日向神岩 【名】〔地〕 筑後國八女（ヤメ）郡大淵（オホブチ）・矢部二村の間を流るる矢部川の川峽。奇石・怪岩羅列す。

ひな-たく 鄙闌く 【動下二自】 ゐながびたり。野鄙なり。太平記「こはごはしく鄙闌けたる鹽冶判官」

ひなた-くさし 日向臭し 【形一】 ㊀物を日光に晒して、一種の臭氣あり。㊁田舍じみて、のろし。

ひなた-くわうりんうめ 日向光琳梅 【名】 紋所の一。梅の花一輪を、合瓣花のやうにして、輪廓を、二重の線にて示し、その中心に、藥に擬したるもの五箇を、瓜の種子のやうに描けるもの。

ひな-だな 雛棚【名】ひなだん（雛壇）に同じ。

ひなた-の-やま 日向山【名】〔地〕相模國中郡にある山。大山（オホヤマ）の東方に連なる。相模集「さしてこしひなたの山を頼むには目も明かに見えざらめやは」

ひなた-ぶくり【名】次條に同じ。

ひなた-ぼくり 日向ぼくり【名】次條に同じ。

ひなた-ぼこ 日向ぼこ【名】次條に同じ。一茶「御地藏と日向ぼこして鳴く千鳥」

ひなた-ぼこう 日向ぼこう【名】次條に同じ。

ひなた-ぼこり 日向ぼこり【名】日向に出でて暖まること。てんたうぼこり。ひなたぼから。ひなたぼっこ。負暄。著聞「ひなたぼこりして居たりけるに」

ひなた-ぼっこ 日向ぼっこ【名】前條に同じ。

ひなた-ぼり 日向雕・日向彫【名】ほり目を浮き上げたる彫刻。陽彫。

ひなた-みづ 日向水【名】汲み置ける水の、太陽の熱にて、なまぬるくなりしもの。

ひなた-むき 日向向【名】日に當る方に向ふこと。日向に向へること。

ひな-だん 雛壇【名】㊀雛人形を並べて飾る壇。ひなだな。㊁『前項の雛壇のごとくに、並び坐するよりいふ』芝居にて、長唄の出囃子（デバヤシ）に、演奏者が、上段には、唄及び三味線、下段には、笛・大鼓（オホツヾミ）・小鼓・太鼓と、二段に坐すること。

ひなた-もん 日向紋【名】おもてもん（表紋）に同じ。

ひな-ちどり 雛千鳥【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。高さ二三寸。葉はやや大きく、花は數多からずして、密槽瓣細裂し、嘴、多少長し。我國、伊勢國の北部山中に自生す。

ひなつ-ぼし 熒惑星【名】〔天〕けいこくせい（熒惑星）の異稱。〔古語〕夫木「あまの原南にめぐるひなつ星何の草ともとよさとに問へ」

ひな-つ-め 鄙女【名】鄙（ヒナ）の女。田舍娘。〔古語〕紀「あまさかるひなつめのいわたらすせと」

ひな-づる 雛鶴【名】鶴の雛。榮花「雛鶴をやしなひ立てて松が枝の陰にすませんことをしぞ思ふ」

ひな-どり 雛鳥【名】ひな（雛）㊀に同じ。元眞集「雲居にも今は待つらん葦べなる聲ふりたつるたづの雛鳥」

ひな-にんぎやう 雛人形【名】雛祭に飾る人形。ひな。

ひな-の-かんざし 雛簪【名】〔植〕遠志（ヒメハギ）科に屬する一年生の草。莖は細長くして直立し、高さ五六寸。卵形の小葉互生し、七八月の頃、梢上に、紫紅色の小花、穗狀花序をなして開く。所在に自生す。

ひな-の-きんちやく 雛巾著【名】〔植〕遠志（ヒメハギ）科に屬する草。高さ三四寸に達し、枝を分つ。葉は卵形・全緣にして、互生す。各枝の上部に、小花、總狀花序又は穗狀花序をなして開く。我國山野に自生す。

ひな-の-しやくし 雛杓子【名】〔植〕たつなみさう（立浪草）に同じ。

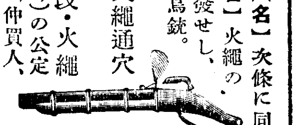
ひな-の-しやくぢやう 雛錫杖【名】〔植〕雛錫杖科に屬する寄生草。高さ五寸内外に達し、葉は小さくして、鱗片狀をなし、小形の花、聚繖花序をなして開く。我國、九州の南部地方の山地に產す。

ひ-なは 火繩【名】㊀檜皮（ヒハダ）・竹の纖絲又は木綿絲にて繩を作り、これに硝石を吸收せしめ、火を點じ置きて、昔、雷汞發火裝置の發明なかりし時代に、鳥銃又は煙草の火などに用ひ、今も爆破作業などに使用するもの。北條五代記「鐵砲に、火繩を插み」太祇「岩角や火繩すり消す苔の花」㊁ひなはねだん（火繩直段）の略。大阪繁昌詩「米市……朝稱二寄附一（辰時諸人漸來）、晝稱二火繩一（午後萬人既已全聚。火繩、繩頭點レ火之稱。其點レ火也、擊二拆于街上一報レ之。繩長一寸。火滅市乃畢。於レ是灑二水於路上一」㊂次條の略。㊃でかたに同じ。

ひなは-うり 火繩賣【名】昔、芝居にて、見物人の煙草の火として、火繩を賣り歩きし座員。ひなは。根南志具佐「仕切場・留場（トメバ）・棧敷・半疊・中賣・火繩賣」

ひなは-じゆう 火繩銃【名】次條に同じ。

ひなは-づつ 火繩筒【名】火繩の火を、導火線に移して、發せし、古製の銃砲。火繩銃。鳥銃。種子島（タネガシマ）。



（ひなはづつ）

ひなはどほし-の-あな 火繩通穴【名】火繩筒の一部。

ひなは-ねだん 火繩直段・火繩値段【名】帳合米（チヤウアヒマイ）の公定相場。その相場は、午後、仲買人、再び市場に集まり、火を、寸餘の火繩に點じて、函の内に釣り下げ、これを高所におき、火繩の燃え盡くるまでに、定むるものとす。その燃え盡くるまでに値段決せざる時は、當日の相場は成立せざるものと看做したり。ひなは。

ひな-びと 鄙人【名】田舍の人。謠曲（花筐）「都に馴れぬ鄙人」

ひな-ぶ 鄙ぶ【動上二自】㊀ゐなかめく。〔古語〕伊勢「歌さへぞひなびたりける」㊁なまる（訛る）に同じ。〔古語〕字鏡集「訛、ヒナブ・アヤマル」

ひな-ぶき【名】〔植〕あふひすみれ（葵菫）に同じ。

ひ-なぶり 火弄・火嬲【名】ひいぢり（火いぢり）に同じ。重井筒「人待つ宵の火嬲や」

ひな-ぶり 夷振【名】㊀『宮人振・天田（アマダ）振など、すべて、古代の歌曲の何振といふ名は、歌の初の語を取りて呼ぶ例なれば、日本書紀神代の卷に、夷振の一例として、下照（シタテル）姬の詠とて記せる「天ざかる夷（ヒナ）つ女（メ）のい渡らす瀨と石川片淵片淵に網張り渡しめろよしによし寄り來（コ）ね石川片淵」の「ひな」といふ語を取りて名づけしものなるべしといふ』上古の歌曲の節奏の名。〔夷曲〕記「天（アメ）なるや弟機織女（オトタナバタ）のうながせる玉の御統（ミスマル）……この歌は夷振なり」㊁『生白庵行風の「古今夷曲集」「後撰夷曲集」を撰びしより以來の名稱』きやうか（狂歌）㊁に同じ。へなぶり參照。

ひな-べ 鄙邊【名】ひなの方。ゐなかの方。〔古語〕萬葉「大君の御言（ミコト）かしこみあまさかる夷部（ヒナベ）にまかり」

ひ-なほる 日直る【動四自】天氣晴る。雨霽る。〔近江國の方言〕。續膝栗毛「明日は、どうやら日直りさうでござります」

ひな-まつり 雛祭【名】ひなあそび（雛遊）に同じ。一茶「花咲かぬ片山陰も雛祭」

ひ-なみ 日並・日次【名】㊀毎日すること。ひつぎ。夫木「今日いくか日なみの御狩かりくらし片野のを野を行きかへるらん」㊁日の次第。日の順序。日どり。公事根源「かねて日次を定めらる」㊂ひがら（日柄）に同じ。狂言（薩摩守）「今日は、日並もようござる程に」

ひな-みせ 雛店・雛見世【名】雛人形を賣る店。蕪村「雛見世の灯（ヒ）を引く頃や春の雨」

ひなみ-の-き 日次記【名】〔書〕攝家歷代の日記を編次せるもの。二百二十卷。二條良基の著。

ひなみ-の-みこ 日並皇子【名】〔人〕くさかべのわうじ（草壁皇子）に同じ。萬葉「日並の皇子（ミコ）の命（ミコト）の馬並（ナ）めて御獵（ミカリ）立たしし時は來向ふ」

ひなむらさき-ゐなかげんじ 偐紫田舍源氏【名】〔書〕にせむらさきゐなかげんじ（偐紫田舍源氏）の誤讀。

ひ-なん 非難【名】非として難ずること。難非（ナンヒ）。

非難を打つ【句】「非を打つ」に同じ。國姓爺後日合戰「非難打たれぬ至極の理」

ひ-なん 避難【名】災難を避くること。

び-なん 美男【名】容色のうるはしき男。美男子。好男子。

ぴなん 卑南【名】〔地〕臺灣臺東廳の治所たる市街。一名、臺東市街。

ひなん-かう 避難港【名】船舶が、危難を避けんがために、一時假泊する港。

びなん-かづら 美男葛・南五味子【名】㊀〔植〕さねかづら（南五味子）に同じ。㊁南五味子の莖を水に浸して採りたる粘汁。結髮の時、鬢附油に代へて用ひたり。びなんせき。かづらつぼ（蔓壺）參照。㊂能（ノウ）の狂言にて、女に扮つ者が、頭に、布又は木綿を卷き、餘れる部分を、兩側に垂らし下ぐること。

び-なんこつ 鼻軟骨【名】〔醫〕鼻の中央部より先端までの間にある軟骨。

びなん-さう 美男草【名】〔植〕びなんかづら（美男葛）に同じ。

び-なんし 美男子【名】びなん（美男）に同じ。

びなん-せき 美男石【名】びなんかづら（美男葛）㊁に同じ。 狂言（烏帽子折）「この筒の中に、美男石がござりまする所で、御前(オマヘ)ごのつむりへ附けねば、結(イ)はれませぬ」

ひなん-そくせん 避難側線【名】列車の運轉中、連結器の切斷等によりて、車輛が、下勾配線に沿ひて下り、停車場構内の車輛に衝突する危險を防ぐために設置する側線。

ひなん-ち 避難地【名】避難したる地、又、避難すべき地。

ひなもり 夷守【名】〔地〕『邊地を守る者の義にて、もと防人(サキモリ)の別稱なりしなるべしといふ』古、筑前國にありし一驛。今の糟屋郡中原(ナカハル)村大字阿惠(エア)の日守といふ地とも、今の同郡多多羅村なるべしともいふ。 紀「巡二狩筑紫國一、始到二夷守(ヒナモリ)一」 萬葉「相二送驛使一到二夷守驛一」

ひな-や 雛屋【名】㊀雛人形を飾り立つる、小き家。ひひなや。〔古語〕 御堂關白集「高松の君の御許より、ひなや參らせたまふ」 ㊁雛人形を商ふ家。ひひなや。

びなや 毗奈耶・毗那耶（梵 Vinaya）【名】〔佛〕りつ（律）に同じ。

ひなや-ざいく 雛屋細工【名】雛屋立圃が作れる、泥畫の器具。

ひな-やしろ 雛社【名】雛遊の調度の一。神社に象(カタド)れるもの。

ひなや-りふほ 雛屋立圃【名】〔人〕『京都にて、雛屋㊂を營みしよりいふ』ののぐちりふほ（野野口立圃）に同じ。

ひ-なら-ず 不日【副】『日は一日にて、一日經ぬ内にの意』多くの日を經ずに。遠からず。ちかぢか。不日(フジツ)。

ひ-ならぶ 日並ぶ【動下二自】日を重ぬ。〔古語〕 萬葉「足引の山櫻花日並べてかく咲きたらばいたも戀ひめやも」

ひな-らん 雛蘭【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。高さ四五寸乃至七八寸。葉は長楕圓形又は長卵形、全緣にして、平行脈を有す。花は小形・淡紫色にして、莖頂に總狀花序をなす。

ひな-ゑ 雛會【名】ひなまつり（雛祭）に同じ。

ひな-をとこ 雛男【名】小づくりのやさ男。 曾根崎心中「雛男、一つなる口、桃の酒、柳の髮もとくとくと」 御伽名代紙衣「公家(クゲ)の落胤ともいふべき雛男」

ひに 鬢【名】びん（鬢）の音便。〔古語〕 字鏡「鬍、比爾乃加美」

ひ-にく 飛肉【名】とり（鳥）の異稱。

ひ-にく 肥肉【名】肥えたる肉。

ひ-にく 腓肉【名】ふくらはぎの肉。

ひ-にく 髀肉・髀肉【名】ももの肉。

髀肉の嘆(タン)【句】『三國志の蜀志に「備曰、常時身不レ離レ鞍、髀肉皆消。今不二復騎一、髀裏肉生。日月如レ流、老將レ至、功業不レ達。是以悲耳」とあり』功業を立つる機會なきを歎くこと。

ひ-にく 皮肉【名】㊀『起世經に「燒二其皮肉一」とあり』皮と肉と。（骨髓に對して） ㊁遠まはしに言ふ。非難。

皮肉の見(ケン)【句】『次條㊁に引ける傳燈錄の文を見よ』眞髓に徹せぬ見解。淺薄なる見解。

ひ-にく-こつ 皮肉骨【名】㊀皮と肉と骨と。㊁傳燈錄に「達磨欲三西返二天竺一、乃命二門人一曰、時將レ至矣、汝等盍三各言二所レ得乎。時門人道副對曰、如二我所見一、不レ執二文字一、不レ離二文字一、而爲二道用一。師曰、汝得二吾皮一。尼總持曰、我今所レ懷、如二慶喜見二阿閦佛國一、一見更不二再見一。師曰、汝得二吾肉一。道育曰、四大本空、五陰非レ有、而我見處無二一法可一レ得。師曰、汝得二吾骨一。最後慧可禮拜、後依レ位而立。師曰、汝得二吾髓一」とあり』能樂にて、囃子(ハヤシ)・謠(ウタヒ)・能(ノウ)の三つを、又、謠の聲と節と文章とを、それぞれ人體の皮・肉・骨に譬へて、輕重の位を示したる語。㊂俳諧又は筆道に於ける三體。骨は强、肉は愛、皮は優を意味し、骨を以て本體と爲す。古の筆道にて、三蹟をこの三體に比して、佐理を皮、行成を肉、道風を骨といへり。

ひにく-や 皮肉屋【名】他人に對して、皮肉㊁の言葉を發する癖ある人。

ひ-に-け-に 日にけに【句】ひ（日）の條下を見よ。

ひ-にち 日日【名】㊀何月何日といふ日。期日。㊁ひかず。日數(ニッスウ)。㊂にちにち（日日）に同じ。 俗曲（おどけ俄煮珠取）「八百八町、毎日・日にちお手遊、子供衆寄せて、辻辻で」

ひ-にっき 日日記【名】日日の雜事を記したる日記。 貞丈雜記「日記と日日記とは、別の事なり。日記といふは、表立ちたる事を記して、後證のためにせるをいふ。日日記といふは、その日日の晴雨を始め、雜事を記せるをいふ。……。されば、蜷川親元が記せし殿中日日記といへるも、即ちその日日の事を注せし故、日日記(ヒニツキ)なるにや」

ひ-に-ひ-に 日に日に【句】ひ（日）の條下を見よ。

ひ-に-まし 日增【副】ひましに（日增に）に同じ。

ひ-にん 非人【名】㊀『左傳の昭公七年の條に「孟、非人也。將レ不レ列二於宗一、不レ可レ謂レ長」とありて、註に「足跛非二全人一、不レ可三列爲二宗主一」とあり』かたは。廢人。 海道記「名利(ミヤウリ)の敵は覗ふとも、非人の身を敵とせし上界・天人の快樂(ケラク)も、心にくからず」 ㊁〔佛〕にんぴにん（人非人）に同じ。 ㊂つみびと。ざいにん。 今昔「この獄にいましめられたる多くの非人」 ㊃僧。法師。 著聞「かやうにて候ふ非人の、山伏の禮法正しうして通り候はん事は」 一言芳談章冠註「和俗に、遁世の僧を、非人といふなり。金剛寶戒章にもあり」 ㊄かたゐ。乞食。 十訓「山田の法師は、非人にて、同じく集(ツド)ひを汚す」 ㊅德川時代に、穢多(エタ)と共に、特殊の賤民として取扱はれし、一階級の者。刑場の雜役に使役せらるる外、殆ど定職なく、貧しき者は、市中に食を乞ひて生活したり。結髮を許されざる等、嚴重なる制裁を受け、常人も交際を避けたり。 天の網島「死んだ跡では、袖乞・非人の飢死もなされうかと」 膝栗毛「二十一二ばかりの、女の非人」

非人施行(セギヤウ)【句】非人㊅に、物を施し與ふること。 東鑑「供二養衆僧一可レ有二非人施行一之由、將軍家年來御素願也」

ひ-にん 否認【名】是認せぬこと。承認せぬこと。（是認に對して）

否認の訴【句】〔法〕妻の分娩せる子を否認するため、即ち、その嫡出にあらざる由を主張するために提起する訴。

ひ-にん 避妊・避姙【名】藥物その他の方法を用ひて、姙娠せぬやうにすること。

び-にん 美人【名】びじん（美人）に同じ。 運歩色葉集「美人、ビニン」

ひにん-がしら 非人頭【名】昔、非人㊅の一部落を取締せし者。江戸淺草の車(クルマ)善七、品川の松右衞門など有名にして、何れも穢多頭彈左衞門に隷屬し、公役に從ふ廉にて、特に黑元結を用ひて、結髮するを許されたり。

ひにん-けん 否認權【名】〔法〕或法律事實を否認する權利。例へば、子の嫡出の否認、妻の代理權に對する夫の否認、外國法人成立の否認などの類。

ひにん-ごや 非人小屋【名】非人㊅の住む小屋。非人㊅を收容し置く小屋。 塵塚談「傳通院山内……。山内に、非人小屋あり」

ひにんごや-あづけ 非人小屋預【名】德川時代に、罪人中の無宿又は急病の者などを、非人㊅の家に預けしこと。

ひにんごや-がしら 非人小屋頭【名】ひにんがしら（非人頭）に同じ。

ひ-にんじやう 非人情【名】〔文〕人生を、その圈外に立ちて、徐に觀察する、創作上の態度。夏目漱石の自己の態度を説明するに用ひし名稱。

ひにん-だめ 非人溜【名】非人㊅の收容所。非人小屋。

ひにん-てか 非人手下【名】德川時代の、庶人の附加刑。非人頭に渡して、その籍に編入せしこと。特に重き者は、遠國に送りて、遠國の非人手下とせり。又、入墨・晒などに處したる上、これを科する等の事もありたり。

ひにん-ばんしよ 非人番所【名】德川時代

に、非人〘三〙を市内各所に在番せしめて、非常の警戒に備へし、その番所。

ひにん-むら 非人村【名】非人〘六〙のみより成る村。非人の部落。

ひにん-よりば 非人寄場・非人寄場【名】徳川時代に、無宿の非人〘六〙を收容せしめし場所。

ひに-らう 檳榔【名】びんらう（檳榔）に同じ。〔古語〕字鏡「檳榔。比爾良有」

ひ-ぬか 乾糠【名】乾燥せる糠。丹波國より產するは、特に丹波乾糠とて、名あり。

ひ-ぬま 涸沼・日沼【名】〔地〕常陸國東茨城・鹿島（カシマ）の二郡に跨る沼。周囘凡そ七里餘。

ひぬ-やま 比沼山【名】〔地〕丹後國竹野（タカノ）郡の西北隅なる比沼里にある山。頂に眞名井（マナヰ）といふ沼あり、古、天女八人下り浴せしが、その一人、今の同郡深田村大宇船木の地に留まりしもの、即ち同地奈具社（ナクノヤシロ）の祭神なりとの傳說あり。

ひ-ね 晚稻【名】おくての稻。〔古語〕箋注和名「稻。晚稻。比禰」

ひ-ね 陳【名】『前條の語の轉義』❶米・麥などの、年を經て、古くなりたるもの。❷物のふるくなりたること、又その物。❸小兒の、その年齡よりませたる言語・擧動なること。ませ。

ひね 日根【名】〔地〕和泉國の舊郡の一。明治二十九年、南郡と合して、泉南（センナン）郡となる。

ひね-あづき 日根小豆【名】〔植〕『和泉國日根より多く產出するよりいふ』赤小豆の一種。果實の莢、やや闊く、種子はやや扁平にして、大きく、短く、種皮薄くして、餡に製するに適す。おほあづき。

ひ-ねう 泌尿【名】尿を分泌すること。

ひねう-き 泌尿器【名】〔醫〕『獨 Harnorgan』尿を分泌・排泄する器官。腎臟・輸尿管・膀胱及び尿道より成る。尿器。

ひねう-くわ 泌尿科【名】醫科の一分科。專ら泌尿器の治療をするもの。

ひね-かうぢ 陳麴【名】ふるくなりたる麴。（新麴に對して）

ひね-くさし 陳臭し【形一】❶穀物など、ひねたるために臭し。❷ませたり。おとなめきたり。

ひねくり-まはす 捻廻す・拈廻す【動四他】ひねりまはす（捻廻す）に同じ。

ひねくる 捻くる・拈くる【動四他】❶ひねりて弄ぶ。いぢくる。❷すなほにせずして、理窟をこねる。すねる。兒教訓「たびたび使をえても、ひねくりて、たまたまここへ來てだにも」

ひね-くれる 陳くれる【動下一自】ふるくなる。老成す。ませる。心中宵庚申「嫁菜ざかりもひねくれて」

ひねくれる 捻くれる・拈くれる【動下一自】すなほならぬ性質となる。ねぢく。ひがみまがる。

ひね-くろし 陳くろし【形二】古めきたり。じみなり。長町女腹切「ぼんぼり綿もひねくろしく、脊中に皺をよるべなき」

ひね-こびる 陳ねこびる【動上一自】ませる。こましやくれる。〔俚言〕

ひね-ごめ 陳米【名】年を經て古くなりたる米。ひねまい。こまい。

ひ-ねずみ 火鼠【名】〔動〕『くわそ（火鼠）の直譯』その毛、火に燒けずして、火浣布の材料となるといふ鼠。

火鼠の皮衣（カハゴロモ）【句】くわくわんぷ（火浣布）〘一〙に同じ。竹取「ひねずみの皮ごろもといふなるもの、買ひておこせよ」

ひね-だいこん 陳大根【名】古き澤庵漬の大根。

ひね-たいざん 日根對山【名】〔人〕畫家。名は盛長。字は小年。長次郎と稱す。和泉國日根の人。京都に住む。一時、母の姓中原を冒、稱せしことあり。明治二年歿す。年五十七。

ひ-ねつ 比熱【名】〔化〕『英 Specific heat』物體の溫度を一度だけ高むるに要する熱量と、その物體と等質量なる水を、同じ度に熱するに要する熱量との比。氣體のには、その壓力を變ぜざる場合の空壓比熱と、體積を變ぜざる場合の空積比熱とありて、前者は、後者の一・四倍なるを常とす。例へば、黃金の比熱は〇・〇三二にして、空氣の空壓比熱は〇・二四なる類。

び-ねつ 微熱【名】わづかなる熱。

ひねっ-こびる 陳ねっこびる【動上一自】ひねこびる（陳ねこびる）の音便。〔俚語〕

ひねの-がた 日根野形【名】兜の鉢の、日根野流の形。全形さく、鉢附（ハチツケ）より菱縫の板までの間、丸きふくらみなく、平直なるもの。

ひねの-じころ 日根野錏【名】日根野形の錏。蝗錏（イナゴジコロ）。

ひねの-まんぢゆう 日根野饅頭【名】いちまんぢゆうじころ（一饅頭錏）に同じ。

ひねの-りう 日根野流【名】甲冑の製作の一派。日根野織部正吉明を祖とす。

ひね-ばり 撚鍼【名】ひねりばり（撚鍼）に同じ。

ひね-ひねし. 【形二】ひねたるさまなり。ふるし。時久し。一說に、滿ちて盛んなるさまなり。たけなはなり。〔古語〕萬葉「荒き田のしし田の稻を倉に積みてあなひねひねしわれが戀ふるは」

ひね-まい 陳米【名】ひねごめ（陳米）に同じ。

ひね-むぎ 陳麥【名】前年に收穫したる、ふるき麥。猿蓑（木節）「ひね麥の味なき年や五月雨」

ひね-むしや 陳武者【名】老熟せる武者。老巧の武士。幸若（敦盛）「ひね武者の熊谷にて、事の數ともせざりけり」

ひ-ねん 比年【副】ひさい（比歲）に同じ。「比年登（ミ）らず」

ひね-もす 終日【副】次條に同じ。文選「日、ヒネモス」蕪村「春の海ひねもすのたりのたりかな」

ひねもす-に 終日に【副】朝より夕まで。ひねもす。ひめもす。終日（シユウジツ）。〔古語〕萬葉「をふのさき漕ぎたもとほりひねもすに見ともあるべき浦にあらなくに」著聞「日ねもすに、夜もすがら、身を絞りて、曉、織法を讀みて、罪障を消除するは」

ひね-もの 陳者【名】老熟せる者。老巧者。曾我「かやうのひね者をば……小首責に責めて」

ひねり 捻・拈・撚 ❶ひねること。紫式部日記「縫ふ物のかさね・ひねり敎へなど、つくづくとしゐたるに」❷紙に、祝儀の金、又は賽錢などを包みて、その上部をひねりたるもの。（接頭語のお（御）を添へていふ）❸袖搦（ソデガラミ）の類なる武器。ねぢ。❹扉に取り附け、開閉の際、手に持つ所と定めたる部分。つまみ。❺世の常と、一風變りてあること。❻相撲（スマフ）の手の一。相手の體を拈りて倒すもの。頭捻（ツヒネリ）・跍捻（ケヒネリ）・腕捻（カヒナヒネリ）・四手捻（ヨツデヒネリ）・鬢捻（ビンヒネリ）・跌腰（ヰゴシ）・蹉腰（イシゴシ）・行下力草（ユキノシタチカラグサ）・蹰腰（チヤンビネリ）・撒拚（ツマドリ）・小撒杵（コツマドリ）・得智後捻（エチゴヒネリ）の十二種あり。

ひねり 捻【助數】くわつ（括）を見よ。

ひねり-いだす 捻出す・拈出す・撚出す【動四他】工夫して考へいだす。案じだす。土佐「船君の、からくしてひねりいだして、よしと思へることを」

ひねり-いる 捻入る・拈入る・撚入る【動下二他】ひねりて入る。ねぢ曲げて入る。宇治「まめやか物を、下の袋へ捻れ入て」

ひねり-かさぬ 捻重ぬ・拈重ぬ・撚重ぬ【動下二他】表を裏へ折り捻りて重ぬ。端を縫ひ寄せ、捻りて重ぬ。ひねりぬふ（捻縫ふ）參照。榮花「殿の女房の裝束は、うすものを、撫子（ナデシコ）にて、色色にてひねり重ねたり」花鳥餘情「女房の裝束、五月五日よりひとへ重（ガサネ）を著るなり。單（ヒトヘ）二つをひねり重ねたるものなり」

ひねり-がさね 捻重・拈重・撚重【名】ひねり重ねて著ること。又その衣。〔古語〕新六「世を安み民の煩かへりみてひねりがさねは著る人もなし」

ひねり-こ 捻子・拈子【名】〔建〕細き正方柱の材の稜を、正面及び上方に向けて作りたる格子。

ひねり-ごし 捻腰・拈腰・撚腰【名】ひねりねぢるやうにする腰つき。

ひねり-ころす 捻殺す・拈殺す・撚殺す【動四他】❶ひねりて殺す。つまみ殺す。❷難なく殺す。容易に殺す。

ひねり-そ 捻苧・拈苧・撚苧【名】ひねりたる苧。丹波與作「をごけの掛子（カケゴ）、底意

(イツコ)には、戀に心をひねり、その苧(ヲ)が亂いた胸のうち」

ひねり-と 捻斗・拈斗【名】〔建〕さらど(皿斗)に同じ。

ひねり-どめ 捻止・拈止・撚止【名】いとぞこ(絲底)に同じ。

ひねり-ぬふ 捻縫ふ・拈縫ふ・撚縫ふ【動四他】指先にて挾み、ねぢまはしつつ縫ふ。**ひねりかさぬ**(捻重ぬ)參照。落窪「物縫ふ事を習ひけるが、いとをかしげにひねり縫ひたまひければ」

ひねり-のし 捻熨斗・拈熨斗【名】熨斗の一種。小き紙片を、細長く、四折ほどに疊み、中部を捻りて作りたるもの。

ひねり-ばなし 捻放・拈放【名】捻りたるままなること。

捻放は目が廻る【名】「爪の極樂、火の地獄、捻放は目が廻る」を見よ。

ひねり-ばり 捻鍼・拈鍼・撚鍼【名】鍼術にて、人さし指・中指及び拇指にて、鍼の柄を撮み、その先を、徐徐に捻りながら、刺し入るるもの。ねんしん。

ひねり-ぶくさ 捻袱紗・拈袱紗・撚袱紗【名】財布の一種。今の胴卷(ドウマキ)は、その變じたるものといふ。もぢぶくさ。〔德川時代の語〕一代女「ひねり袱紗より、こまがね取出だして」

ひねり-ぶみ 捻文・拈文・撚文【名】㊀數枚の短册、又はその他の細長き紙に、事を記し、捻りて鬮とし、これを探りて、占ふこと。もみくじ。〔短籍〕〔古語〕紀「坂上連藥、取二短籍一(ヒネリブミ)卜二謀反之事一」㊁たてぶみ(立文)に同じ。置土產「捻文に、五兩ばかり持ち添へ」

（ひねり文㊃）

ひねり-まはす 捻廻す・拈廻す・撚廻す【動四他】手先にてひねり弄ぶ。ひねくりまはす。

ひねり-もぐさ 捻艾・拈艾・撚艾【名】指先にて小く捻りたる艾。艶狩劔本地「捻艾の生火傷」

ひねり-もち 捻餅・拈餅・撚餅【名】㊀手にて捻りて造りたる餅。㊁清酒釀造の原料たる米の蒸(ム)加減を檢するため、その一部分を取り、手にて強く捻り潰して、餅狀にすること。㊂手にて、身體の一部を捻ること。曾我會稽山「あんばく者め。又、捻餅喰ひたいか」

ひねり-もとひ 捻元結・拈元結・撚元結【名】次條の略。

ひねり-もとゆひ 捻元結・拈元結・撚元結【名】紙撚(コヨリ)にて作りたる元結。重井筒「引裂紙の拈元結、體で火廻しを」

ひねる 捻る・撚る・拈る【動四他】㊀指先にてねぢまはす。つまみて曲げめぐらす。㊁身體の一部を、ねぢ曲ぐ。枕「外樣(トザマ)にひねり向きて」㊂種種に工夫す。土佐「からくして、あやしき歌ひねり出だせり」㊃試に爲す。試みる。五十年忌歌念佛「若い時は、小相撲(コズマフ)の一番も捻った己(オレ)ぢや」㊄咎め責む。源氏「今はいふかひなし。ことわりは、かへすがへす聞えさせても餘あらば、罪もひねらせたまへ」

ひねる 捻る・拈る・撚る【動四自】すなほならぬ事を言ひ、又は行ふ。世の常に變れる事を行ふ。片意地なる事を行ふ。すねる。浮世風呂「役者最屓も、ひねって、濡事師よりは、敵役(カタキヤク)や半道を引く世の中」

ひねる 陳ねる【動下一自】『ひね(陳)に語尾の添ひたる語』ふるくなる。古臭くなる。老熟す。ませる。平假名盛衰記「千鳥と源太が狂うてゐる。ええ、年よりひねた徒者(イタヅラモノ)」

ひの 日野【名】㊀〔地〕伯耆國の三郡の一。郡役所を、二部(フニ)村に置く。㊁〔地〕武藏國南多摩郡にある町。甲州街道に當る。㊂〔地〕山城國宇治郡醍醐村の大字。醍醐寺の南。日野家累世の所領。日野資業の修築せし法界寺の在りし處。その址には、今、阿彌陀堂ありて、特別保護建築物たり。㊃〔地〕近江國蒲生(ガマフ)郡にある町。蒲生川の上流に沿ふ。附近の西大路(ニシオホヂ)村に日野城址あり。行商人多し。㊄**ひのぎぬ**(日野絹)の略。㊅姓氏の一。本姓は藤原。右大臣內麿の長子眞夏より出で、眞夏第七世の孫資業(スケナリ)、山城國宇治郡日野に別業を營み、日野の三位と稱せしより起る。第十一世資名(資朝の兄)、北朝に仕へ、子孫、足利將軍と結びて、繁榮し、明治維新後、伯爵を授けらる。又、廣橋・柳丸・烏丸・竹屋・日野西・勘解由小路(カデノコウヂ)・三室戸(ミムロド)・北小路等の諸家は、その一門にして、日野家と總稱す。

ひ-の-あし 日脚【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひの-ありみつ 日野有光【名】〔人〕朝臣。晚年に、薙髮して、祐光と稱す。從一位・權大納言に至る。嘉吉三年、南朝の遺臣恢復を圖りし時、これに應じて、禁闕を犯し、神器を奪ひて、比叡山に登り、小倉皇子の子空因を奉じて、南帝と稱せしが、將軍義敎の軍と戰ひて、空因自殺し、有光も亦死す。

ひ-の-いへ 火の宅【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-いん 火の印【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-いり 日入【名】太陽の沒すること、又その時刻。ゆふぐれ。日沒。(日出(ヒノデ)に對して) 柳樽「日出より日のいりまでに下戶の禮」

ひ-の-いる-くに 日の入る國【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-いろ 火の色【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-うち 日の中【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-うへ 樋上【名】樋口(ヒノクチ)の附近の地。膝栗毛「長町通(ナガマチドホリ)を北へ、樋の上より、高津(カウヅ)新地へ出で」

ひ-の-え 丙【名】『火の兄(エ)の義』**えと**(干支)を見よ。

ひのえ-うま 丙午【名】㊀**へいご**(丙午)に同じ。㊁次條に同じ。五人女「その夜は、心よく祝言の盃を取りかはし、我は、世の人の嫌ひたまふひのえ午なると語れど」繼娘昔八丈「いやいや、丙午ぢゃあるまいし、男を殺すといふ事が、どこの國にあるものぢゃ」

丙午の女【句】『火は物を燒き、馬は、跳ね上りなどして、氣の荒き獸なりとて、言ひ出でしもの』丙午の歲に生れし女。心荒くして、夫をも害すとて、嫁娶を避くとの俗說あり。一代女「ひのえ午の女なれども、それにはよらず、男に喰はれて、心地惱みしに」

ひ-の-おまし 晝の御座【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひのおみ-の-みこと 日臣命【名】〔人〕**みちのおみのみこと**(道臣命)を見よ。

ひ-の-おもの 日の御膳【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひのかかびこ-の-かみ 火之炫彥神【名】**ひのやぎはやをのかみ**(火夜藝速男神)に同じ。

ひのかぐづち-の-かみ 火之迦具土神【名】前條に同じ。

ひの-がけ 日野掛【名】**ささきがけ**(佐佐木掛)に同じ。

ひの-かねみつ 日野兼光【名】〔人〕**ふぢはらかねみつ**(藤原兼光)に同じ。

ひ-の-かは 簸川【名】〔地〕㊀出雲國にある、國中第一の大川。上流の地は、素盞嗚(スサノヲ)尊の八岐蛇(ヤマタノヲロチ)を斬りし故事によりて名高し。同國仁多(ニタ)郡の船通(センツウ)山を發し、簸川郡の東部を繞り、數流に分れて、宍道(シンヂ)湖に注ぐ。長さ二十一里半餘。一名、大川(オホカハ)。〔斐伊川・肥川・氷川〕**ひかはじんじゃ**(氷川神社)參照。記「出雲國の肥(ヒ)の河上(カハカミ)」平家「出雲國氷の河上」㊁出雲國六郡の一。郡役所を、今市町に置く。

ひの-かは 日野川【名】〔地〕㊀**にほがは**(仁保川)に同じ。㊁越前國にある川。九頭龍(クヅリユウ)川に注ぐ。長さ十八里餘。㊂伯耆國にある、國中第一の川。源を西南隅船通山・三國山等の諸山に發し、小原川・石見川、その他の諸川と合し、美保(ミホ)灣に注ぐ。長さ十八里二十七町。

ひ-の-かぶら 緋蕪【名】〔植〕**ひかぶら**(緋蕪)に同じ。

ひの-かぶら 日野蕪菁【名】〔植〕『近江國犬上郡日野村の產なるよりいふ』蕪菁の一品種。根は扁平にして、天王寺蕪菁に類し、外皮深紫色、內部は白色。莖・葉も紫色を呈す。鹽漬とするに最も宜し。むらさきかぶら。

ひ-の-かみ 日神【名】**あまてらすおほみかみ**

（天照大御神）に同じ。紀「日神、ヒノカミ」正統記「地神第一代大日孁(オホヒルメ)尊、これを天照大神と申す。又、日の神とも、皇祖とも申すなり」

ひ-の-かみ 火神【名】❶火を司る神。❷**ひのやきはやをのかみ**（火之夜藝速男神）に同じ。

ひ-の-からす 日の烏【句】**ひ**（日）の條下を見よ。

ひ-の-き 檜・檜木【名】〔植〕❶『火の木の義。鑽(キ)れば、火の出づるよりいふ。檜の字は、實は柏槇(ビャクシン)の義なるを、古來誤用し來れり』松柏科に屬する常綠喬木。樹幹直立し、高さ數丈に達し、樹皮は赤褐色にして、縱裂し、層をなして剝落す。葉は鱗片狀をなして密著し、裏面は白し。四月頃、花を開く。雌雄同株にして、豌豆大の毬果を生ず。木理直通し、用途廣し。樹皮は、屋根を葺き、又、繩を作る。各地の山野に自生す。〔扁柏〕字鏡「檜、比乃木」❷**あすならう**（翌檜）に同じ。❸**ねずこ**（鼠子）に同じ。

ひのき-いた 檜板・檜木板【名】檜にて造りたる板。若風俗「一尺餘の檜木板」

ひのき-かご 檜籃・檜木籃【名】昔、紀伊國日高郡山地(サンチ)莊・龍神村及び同國牟婁(ムロ)郡本宮(ホングウ)邊にて、もとは檜、後には槭(カヘデ)の木の皮にて作りし籃。

ひのき-がさ 檜笠・檜木笠【名】もと檜のへぎ板、後には槭(カヘデ)の木の皮を編みて作りたる笠。昔、紀伊國の檜木籃の生產地より多く作り出し、大和國大峯入(オホミネイリ)の修驗者など、晴雨兩用にかぶりたり。發心集「ひのき笠を著たり」芭蕉「芳野にて櫻見せうぞ檜木笠」

ひのき-ごけ 檜苔・檜木苔【名】〔植〕檜苔科に屬する蘚類。林間の陰地に生ず。葉は線狀にして、銳く尖り、三裂せる鋸齒あり。蘚朔は圓筒形にして、平滑なり。みやまごけ。

ひのきごけ-くわ 檜苔科【名】〔植〕頂生子囊類に屬する一科。樹上に生ずるもの多く、又、時に、岩石の上、或は地上に生ず。主に南半球の熱帶及び亞細亞熱帶地方に產す。五屬約三十五種あり。いたちのしぼっ科。

ひのき-たけ 檜茸・檜木茸【名】〔植〕檜に生ずる菌。

ひのき-づくり 檜造・檜木造【名】檜の材にて造りたること。主として、建築・木像などにいふ。博多小女郞浪枕「檜木造・節無(フシ)の見世」

ひのき-づな 檜綱・檜木綱【名】檜皮(ヒハダ)にて綯ひ造りたる綱。

ひの-ぎぬ 日野絹【名】❶昔、近江國日野より產出し、京都より賣り出だしし、薄地の生絹(キギヌ)。一代女「日野絹の幅廣」❷上野國より產出する薄地の生絹(キギヌ)。地合、前記のに似たるより、その名稱を襲用す。和漢三才圖會「日野上野邑名也。今上州松井田・富岡之絹爲ㇾ上」

ひのきば-やどりぎ 檜葉寄生木【名】〔植〕槲寄生(ヤドリギ)科に屬する寄生植物。莖は綠色にして、高さ三四寸。葉は小くして、鱗片狀を成し、形、やや檜の枝に似たり。花は甚だ小し。山茶(ツバキ)・冬青(ソヨゴ)・柃(ヒサカキ)等の樹に寄生して、害を與ふ。

ひのき-ぶたい 檜舞臺・檜木舞臺【名】❶芝居などの檜造の舞臺。大劇場の舞臺。❷自家の技倆をあらはす晴(ハレ)の場。

ひのき-も 檜藻・檜木藻【名】〔植〕**あかうきぐさ**（赤浮草）に同じ。

ひのき-もの 檜物・檜木物【名】檜の材にて作りたる物。炭俵（嵆氷）「喰積(クヒツミ)や木曾の匂のひのき物」

ひのき-やしき 檜屋敷【名】東京市赤坂區檜町にありし、長州侯毛利家の中屋敷。その址は、今、步兵第一聯隊の營舍たり。

ひのき-やま 檜山・檜木山【名】檜の多く生えてある山。ひやま。續俳家奇人談（杜國）「蓬萊や御國のかざり檜木山」

檜山の火は、檜より出でて、檜を燒く【句】「身から出た銹」に同じ。〔諺語〕國姓爺「檜山の火は、檜より出でて、檜を燒く。仇も、情も、我が身より出づる」

ひのきやま-じけん 檜山事件【名】古、南部藩の江戶家老の失策より、自藩の檜山を、津輕藩に橫領せられしを憤り、もと南部の藩臣たりし相馬大作の、津輕侯を殺害して、舊主家のために恨を霽さんとせし事件。

ひ-の-ぎよざ 晝の御座【句】**ひ**（日）の條下を見よ。

ひのきゑん-うめあき 檜園梅明【名】〔人〕狂歌師。姓は田中、俗稱は小島屋重兵衞。江戶馬喰(バクロ)町の商人。好みて幽玄體の歌を詠じ、天保調と唱ふる一派を起す。安政六年歿す。年六十七。

ひ-の-くち 樋口【名】用水を放出し又塞ぐ所。ひ。いひ。ひぐち。水門。閘。

ひのくち-まもり 樋口守【名】〔動〕**みぞごゐ**（溝五位）に同じ。

ひ-の-くに 肥國・火國【名】〔地〕『日本書紀には、景行天皇熊襲(クマソ)を征して還幸の時、葦北(アシキタ)より乘船したまひしに、海上の靈火によりて、著岸の便を得たまひしに因る名なりとあり。肥前風土記には、この傳說の外に、崇神天皇の御代に、肥後國益城(マシキ)郡の土蜘蛛叛し、肥の國の祖建緖組(タケヲクミ)、勅命によりて、これを伐ちし時、火光を見、還りて奏せしより、天皇の命じたまひし名稱なりとの異說をも揭ぐ。**しらぬひ**（不知火）參照』今の肥前國・肥後國地方の古稱。紀「名二其國一曰二火國一」

ひの-くにみつ 日野邦光【名】〔人〕**くまわかまる**（阿新丸）に同じ。

ひのくま-がは 檜隈川【名】〔地〕大和國高市郡にある川。高取山より發し、眞弓の岡の東を過ぎ、久米寺の西を經て、重坂(ヘサカ)川に入る。一名、眞弓川・相川・久米川。萬葉「さ檜の隈檜隈川の瀨を早みゐで越す浪の音のさやけく」

ひのくま-じんぐう 日前神宮【名】紀伊國海草(カイサウ)郡宮村に鎭座せる官幣大社。祭神は天照大神。三種の神器の御鏡に先だちて作らしめたまひし御鏡を神體とし、石凝姥(イシコリドメ)命・思兼(オモヒカネ)命を配祀す。崇神天皇の御代の創建。國懸(クニカカス)神宮と共に、二殿、一所にありて、日前・國懸と倂稱す。一名、檜隈宮・萬代(ヨロヅヨ)宮。**なぐさはまみや**（名草濱宮）・**ひほこ**（日矛）參照。

ひのくま-じやう 日隈城【名】豐後國日田郡日田町にありし城。文祿年間、豐臣氏の臣宮木長次郞、同郡の代官となりて、創築せしもの。寬永年中、廢城となる。

ひのくま-の-あこのをか-の-みささぎ 檜隈安古岡陵【名】文武皇の山陵。大和國高市郡阪合(サカアヒ)村大字栗原の西南にあり。檜隈安古山陵。

ひのくま-の-あこやま-の-みささぎ 檜隈安古山陵【名】前條に同じ。

ひのくま-の-いほりぬ-の-みや 檜隈廬入野宮【名】宣化天皇の皇居。大和國高市郡阪合(サカアヒ)村大字檜前(ヒノクマ)の地、その址なるべしといふ。

ひのくま-の-おほうち-の-みささぎ 檜隈大內陵【名】天武天皇と持統天皇との御合葬の御陵。近年、大和國高市郡高市村大字野口にあるものと決定せられたれど、同郡五條野村字丸山にあるものなるべしとの說もあり。

ひのくま-の-さかあひ-の-みささぎ 檜隈坂合陵【名】欽明天皇の御陵。大和國高市郡阪合(サカアヒ)村大字平田にあり。

ひのくま-の-はか 檜隈墓【名】皇極・孝德兩天皇の御母吉備姬王の御墓。大和國高市郡阪合(サカアヒ)村大字平田にあり。

ひのくま-の-みや 檜隈宮【名】**ひのくまじんぐう**（檜隈神宮）に同じ。

ひ-の-くるま 火車【名】❶〔佛〕**くわしや**（火車）❶に同じ。一代女「世に長生の恥なれや、淺ましやと、胸に火の車を轟かし」俳家奇人談（北枝）「夏酒やわれと乘り込む火の車」❷貧に苦しむことの譬。「內證は火の車」

ひ-の-くれ 日暮【名】ゆふぐれ。ひぐれ。たそがれ。ゆふがた。萬葉「ひのくれに碓氷(ウスヒ)の山を越ゆる日はせなのが袖もさやに振らしつ」和合人「呑み直さうといふがはじまりで、……日の暮も氣が附かず」

ひ-の-け 日の氣【句】**ひ**（日）の條下を見よ。

ひ-の-け 火の氣【句】**ひ**（火）の條下を見

ひ-の-げらふ 日の下﨟【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-こ 火粉【名】火災などの時に、火片の飛び散るもの。火片。

ひ-の-ござ 晝の御座【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-こし 火の輿【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-こと 火の事【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-ごもん 日御門【名】けんしゆんもん(建春門)に同じ。

ひ-の-ざう 脾臓【名】ひ(脾)に同じ。

ひ-の-さうぞく 緋の裝束【句】ひ(緋)の條下を見よ。

ひ-の-さうぞく 晝の裝束【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-さけ 樋酒【名】能(ノウ)の狂言の一。主人、その不在毎に二人の冠者の酒宴を開きて亂舞するを知り、一日、兩人を、相隣れる別別の室に留守せしめて、外出せしに、豫て酒を用意せる一人の冠者は、隔の壁の鼠穴に樋をかけて、他の冠者の室に流しやり、斯くて、例の如く且つ飲み且つ謠ひ、兩人共に醉臥せし處へ、主人歸り來りて、大いに怒り、兩人を逐ひ出すことを作れるもの。

ひ-のし 火熨斗【名】底の滑かなる金屬製の圓き物に、木の柄を取附け、全形、柄杓の如くにし、中に火を入れ、その底の熱氣にて、布帛の皺を展ばす器。くわとのし。鈷鍬。

ひのし-ずり 火熨斗摺【名】物の上を、誤りて、火熨斗にて摺りて損ふこと。

ひ-の-した 日下【名】㊀あめのした。天下(テンカ)。盛衰記「日の下に住したまふ諸の神に、憎まれを蒙らん」㊁日附(ヒツケ)を記したる下の處。

ひ-の-した 火下【名】かうもと(香元)に同じ。

ひのした-かいさん 日下開山【名】武藝又は相撲(スマフ)道などにて、天下第一の元祖又は達人。

ひのした-はん 日下判【名】次條に同じ。

ひのした-はんぎやう 日下判形【名】日附(ヒツケ)の下に捺印すること、又その印。ひのしたはん。

ひの-じやう 日野城【名】がまふじやう(蒲生城)に同じ。

ひ-の-しやうぞく 緋の裝束【句】ひ(緋)の條下を見よ。

ひの-すけとも 日野資朝【名】〔人〕朝臣。本姓は藤原。權大納言俊光の子。才學衆に秀で、後醍醐天皇の親寵を蒙り、從三位・權中納言に進む。藤原俊基等と北條高時を滅さんとし、謀泄れて、佐渡に流され、居ること七年にして殺さる。日野中納言・日野大納言、又、壬生(ミブ)大納言と稱す。

ひの-だいなごん 日野大納言【名】〔人〕前條に同じ。

ひ-の-たたし 日の縦【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-たて 日の經【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-たま 火の玉【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-ためし 氷の樣【句】ひ(氷)の條下を見よ。

ひのためし-の-そう 氷樣の奏【句】ひ(氷)の條下を見よ。

ひ-の-ちや 非の茶【句】ひ(非)の條下を見よ。

ひの-ちゆうなごん 日野中納言【名】〔人〕ひのすけとも(日野資朝)に同じ。

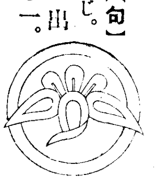
ひ-の-つじ 日の辻【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-て 火の手【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-で 日出【名】㊀朝日の、東方にさし出づること、又その時刻。(日入(ヒイリ)に對して)㊁勢の新しく盛んなるに譬へていふ語。曾我會稽山「浪人の吾吾が錆太刀と、奉公日の出の殿ばらが刃を試(タメ)して、討死せん」

日出の勢(イキホヒ)【句】「朝日の勢」に同じ。

ひので-ちやうじ 日出丁字【名】紋所の一。下の圖を見よ。


（ひのでちやうじ）

ひ-の-と 丁【名】『火の弟(オト)の義』えと(干支)を見よ。

ひ-の-とう 日の頭【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひの-としもと 日野俊基【名】〔人〕ふぢはらとしもと(藤原俊基)に同じ。

ひ-の-との 晝の殿【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひの-にし 日野西【名】姓氏の一。本姓は藤原。日野氏の支族。廣橋權大納言總光の第三子總盛を祖とす。子孫相繼ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

ひ-の-ぬき 日の緯【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひの-ぬり 日野塗【名】近江國日野町より製出する漆器。多くは椀にて、日野椀の名あり。その始は詳かならねど、元祿年間には、既に京師又は隣國に輸出し、正徳の頃は一層盛んになれりといふ。

ひ-の-はかま 緋の袴【句】ひ(緋)の條下を見よ。

ひ-の-はしら 火の柱【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-はた 日の旗【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-はな 火の花【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-ばん 火番【名】㊀火災を豫防するために、夜中、拍子木を打ち又は金棒を曳きなどして、町町を巡りて警戒すること、又その役を勤むる人。㊁江戸幕府の職制の一。江戸城内の火の元の番を掌りしもの。本丸・西丸、共に奥・表の二種あり。目付の支配に屬し、燒火間(タキビノマ)詰、上下役たりき。㊂江戸幕府の女中の職制の一。大奥の、時半(トキナカ)に部屋部屋を見まはりて、火元を注意する事を掌りしもの。

ひのばん-くみがしら 火之番組頭【名】江戸幕府の職制の一。火の番の頭として、部下を管せしもの。

ひのばん-ごや 火番小屋【名】町内の火の番の人人の控所たる小屋。

ひの-はる 日野春【名】〔地〕甲斐國北巨摩(キタコマ)郡にある村。八ケ嶽(ヤツガタケ)の南方にあり。鐵道中央線の一驛。

ひ-の-ふだ 火の札【句】ひ(火)の條下を見よ。

ひ-の-べ 日延【名】期日を延すこと。延期。

ひの-べぼん 日延盆【名】日を繰延べて行ふ盂蘭盆(ウラボン)。一茶「山里やあのからのと日延盆」

ひ-の-まはり 火廻【名】火の用心の夜廻。諺「燒けた後(アト)の火の廻」

ひ-の-まる 日丸【名】㊀紋所の一。赤色にて圓形を描き、日輪に象(カタド)りたるもの。古、軍扇などに描き、又、德川時代の船旗の徽章なりしが、今は我國の國旗の徽章と定まれり。㊁げつけい(月經)の隱語。

日丸の幟【句】日の丸の徽章ある白地の幟。德川時代の末、異國船と見分け易からしめんがために、船印として用ひたり。

日丸の旗【句】㊀日の丸の徽章ある旗。見聞雜録「紺地に日の丸の旗を見て」㊁白地に、赤く日の丸の徽章を現はしたる旗。日本の國旗。日章旗。日の御旗(ミハタ)。

ひのまる-あふぎ 日丸扇【名】紋所の一。五本骨の扇の中央に、日の丸を現はしたるもの。

ひのまる-べんたう 日丸辨當【名】梅干を副食物として添へたる、簡單なる辨當。〔俚語〕

ひ-の-み 火見【名】ひのみやぐら(火見櫓)の略。

ひ-の-みかげ 日の御陰【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-みかど 日の御門【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-みかど 檜の御門【句】ひ(檜)の條下を見よ。

ひ-の-みく 日の御供【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-みこ 日の御子【句】ひ(日)の條下を見よ。

ひ-の-みさき 日御崎【名】〔地〕㊀出雲半島の西端の岬。杵築(キツキ)西灣の西北に斗出す。長門國高山岬の東北約六十七浬。岬端に日御崎神社あり。㊁紀伊國日高郡の岬角。郡の西に三十餘町斗出し、紀伊水道外口の東角を成す。風浪の險を以て聞ゆ。御崎神社あり。一名、比井崎。

ひのみさき-じんじや 日御崎神社【名】出雲國簸川(ヒノカハ)郡日御崎村にある國幣小社。上・下の二社あり、上社は、素盞鳴(スサノヲ)尊を祀り、田心姫(タゴコロヒメ)命・湍津姫(タギツヒメ)命・市杵島姫(イチキシマヒメ)命を相殿とし、下社は、天照大神を祀り、天忍穗耳(アマノオシホミミ)尊・天穗日

（アメノホヒ）命・天津彦根（アマツヒコネ）命・生津彦根（イクツヒコネ）命・熊野樟日（クマノクスビ）命を相殿とす。

ひ-の-みつぎ 日の貢 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-みつな 日の御綱 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-みはた 日の御旗 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひのみ-ばんにん 火見番人 【名】 火見櫓にて番をする人。

ひ-の-みや 日の宮 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-みや 火宮 【名】〔人〕『女御となりて間もなく內裡燒亡せしよりいふ』花山院の御妹、尊子（タカコ）內親王の異稱。 榮花「參らせたまひて、程もなく內など燒けにしかば、火の宮と、世の人申し」

ひのみ-やぐら 火見櫓 【名】 火災を發見し、その場所の遠近を望み知るために設けたる櫓。ひのみ。望火樓。

ひのみや-びと 日宮人 【名】 おほみやびと（大宮人）に同じ。〔古語〕 紀「今日もかも酒（サカ）みづくらし高光る日の宮人言（コト）の語言（カタリゴト）もこをば」

ひの-むらさき 日野紫 【名】 紫色の日野絹。 二代男「日野紫の棲高に」

ひ-の-め 日の目 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-もと 日本 【名】〔地〕 ひのもとのくに（日本國）に同じ。 源氏「日の本の末の世に生れたまひつらん」 玉葉「わが國は天照（アマテ）る神の末なれば日の本としもいふにぞありける」

ひ-の-もと 火元 【名】 火を取扱ふ場所。火災の起るもと。ひもと。

ひ-の-もと-の 日の本の 【枕】 わが國は、日の神（天照大神）の子孫の經營統治の下に在る國なる意にて、やまとに冠らせていふ。やまとは、大和一國の名より起りて、わが國全部の意となり、日本の字をも充つるに至れるなり。 萬葉「富士の高ねは……日の本のやまとの國のしづめともいます神かも」

ひのもと-の-くに 日本國 【名】〔地〕『前條の枕詞より起りて、國號として用ひらるるに至りしもの』我國の異稱。日本（ニホン）。 續千載「代代たえず法のしるしを傳へきてあまねく照らす日の本の國」

ひ-の-もの 火の物 【句】 ひ（火）の條下を見よ。

ひ-の-もの 氷の物 【句】 ひ（氷）の條下を見よ。

ひのもの-だち 火物斷 【名】 火の物を斷ちて食せざること。願掛（グワンガケ）などの時にすることあり。

ひのやきはやを-の-かみ 火之夜藝速男神 【名】 火を司るといふ神。伊弉諾（イザナギ）尊の御子。一名、火之炫彦（ヒノカガビコ）神・火之迦具土（ヒノカグツチ）神・火產靈（ホムスビ）神。

ひの-やくし 日野藥師 【名】 ほふかいじ（法界寺）の俗稱。

ひ-の-やま 標山 【名】 ひをのやま（標山）に同じ。

ひ-の-やまひ 火の病 【句】 ひ（火）の條下を見よ。

ひ-の-ようじん 火用心 【名】 ㊀火の元に注意すること。㊁火の番が見廻の時に呼ばはる語。ひようじ。 丹波與作「本陣は、火の用心の聲ばかり」

ひ-の-よこ 日の橫 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-よこし 日の橫 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-よそひ 晝の裝 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひのりとめ-の-かみ 比乃理刀咩神 【名】 太玉（フトダマ）神の御后神。

ひ-の-わがきみ 日の我君 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-わかみや 日の少宮 【句】 ひ（日）の條下を見よ。

ひ-の-をか 日岡 【名】〔地〕 山城國宇治郡山科（ヤマシナ）より京都の粟田口に通ずる坂路。日岡山に、琵琶湖疏水の船繫所あり。まつざか（松坂）㊁參照。 猿蓑（正秀）「日の岡やこがれて暑き牛の舌」

ひの-わん 日野椀 【名】 日野塗の椀。 風俗文選「日野椀の壺皿」

ひのをか-の-みささぎ 日岡陵 【名】 景行天皇の皇后稻日大郞姬（イナビノオホイラツメ）命の御陵。播磨國加古郡氷丘（ヒノヲカ）村にあり。

ひのをくわんしんじ-の-みささぎ 檜尾觀心寺陵 【名】 ひのをのみささぎ（檜尾陵）に同じ。

ひのを-の-そうづ 檜尾僧都 【名】〔人〕 じつゑ（實慧）に同じ。

ひのを-の-みささぎ 檜尾陵 【名】 後村上天皇の御陵。河內國南河內郡川上村大字寺元、觀心寺の後山にあり。檜尾觀心寺陵。

ひ-ば 乾葉 【名】 ㊀枯れて乾きたる葉。㊁乾したる大根の葉。味噌汁の實とし、又、腰湯の中に入れて用ふ。ほしな。 續七部集「暮の月ひばのうで汁わる臭し」

ひ-ば 檜葉 【名】 ㊀檜（ヒノキ）㊀の葉。㊁〔植〕あすならう（翌檜）に同じ。㊂〔植〕ひのき（檜）㊀に同じ。

ひ-ば 飛馬 【名】 飛ぶが如くに疾驅する馬。

ひ-ば 比婆 【名】〔地〕 備後國九郡の一。郡役所を、莊原（シャウバラ）町に置く。

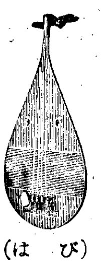
ひ-ば 疲馬 【名】 疲れたる馬。

ひ-ば 疲馬は鞭箠（ベンスヰ）を畏れず 【句】『鹽鐵論に「疲馬不レ畏二鞭箠一、弊民不レ畏二刑法一」とあるに本づく』人民は、疲弊困窮すれば、如何なる嚴刑をも顧みず。〔諺語〕

ひ-ば 肥馬 【名】 肥えたる馬。「肥馬に跨り、輕裘を著る」

ひ-ば 肥馬の塵を望む 【句】『「塵を望む」を見よ』貴顯の人に諂ふ形容。 太平記「望、勳業の上に達せしかば、同官も、肥馬の塵を望み」

びは 琵琶・批把 【名】『風俗通に「此近世樂家所レ作。不レ知レ誰也。以レ手批把。因以爲レ名。長三尺五寸、法三天地人與二五行一、四絃象二四時一」、釋名に「批把本出二於胡中一。馬上所レ鼓也。推レ手前曰レ批、却曰レ把、象二其鼓時一以爲レ名也」とあり。一說には、もと印度の樂器にて、梵 Vīṇā の訛なりと』四絃・四柱の一種の絃樂器。木にて作り、體は卵形・扁平、上部狹まりて棹を爲し、頭部なる轉手（テンジュ）、後方に屈折す。膝の上に抱きて、撥にて彈ず。奈良朝の頃、支那より渡來し、鎌倉時代以前は、雅樂に用ひしが、後、平家物語に合はせて彈ずる平家琵琶始まり、今は薩摩琵琶・筑前琵琶・肥後琵琶などありて、少しづつ製作を異にす。よつのを。なかばの月。びはごと。


（びは）

琵琶の琴（コト） 【句】 前條に同じ。 枕「無名（ムミヤウ）といふ琵琶のこと」

琵琶の法師 【句】 びはほふし（琵琶法師）に同じ。 源氏「入道、琵琶の法師になりて」

びは 枇杷・比巴 【名】〔植〕『葉の形、琵琶に似たるよりいふ』薔薇（イバラ）科に屬する常綠喬木。高さ二丈餘に達す。葉は長楕圓形にして、厚く、鋸齒あり、裏面に褐色の毛茸密生す。冬の頃、五瓣・帶黃白色の小花、複總狀花序をなして簇り開く。果實は、翌年の夏熟し、球形・黃色、大さ金柑の如く、味美なり。原產地は支那。こふくべ。

び-は 微波 【名】 小き波。さざなみ。

びは-あはせ 琵琶合 【名】 人人集まり、琵琶を出し合はせて、その優劣を競ふ遊。

ひ-はい 碑背 【名】 ひいん（碑陰）に同じ。

ひ-はい 鄙倍 【名】『倍は、背に通ず』野鄙にして、道理にそむくこと。

ひ-はい 疲憊 【名】 疲れよわること。疲弊。

ひばい-どうめい 罷買同盟・非買同盟 【名】 ぼおいこっとに同じ。

ひばい-ひん 非賣品 【名】 世間一般の人に賣らぬ品。賣買せぬ品物。

ひ-はう 庇保 【名】 かばふこと。庇護。

ひ-はう 祕方・秘方 【名】 祕して他人に知らせぬ藥方。 生寫朝顏話「大明國祕方の目藥」 合邦ケ辻「神酒と僞り、……勸めた酒は、祕方の毒酒」

ひ-はう 飛報 【名】 突然の知らせ。急報。

ひ-はう 悲報 【名】 死亡・災難などの類の、かなしき事の知らせ。

ひ-はう 比方 【名】 くらぶること。

ひ-はう 誹謗 【名】 ひばう（誹謗）を見よ。

ひ-ばう 非望 【名】 身分に過ぎたる望。惡しきのぞみ。

ひ-ばう 誹謗 【名】『謗の字の音、正しくはハウ』そしること。ひはう。 枕「いかばかりそしり誹謗せまし」

誹謗の木【句】『史記の孝文紀に「古久治㆓天下㆒、朝有㆓進善之旗・誹謗之木㆒」、又、淮南子の主術訓篇に「堯置㆓敢諫之鼓㆒、舜立㆓誹謗之木㆒」とあり』上古、支那の聖天子が、人民に政治の過失を書かしめんがために建て置きたりといふ木標。

びはう 微芳【名】かすかなる芳香。すこしのかをり。

びはう 未萌【名】『萌の字の音、正しくはバウ』事變の、いまだ萌(キザ)さざること。みはう。未發。正統記「未萌の禍を防ぐ」

未萌を見る【句】「智者は未萌を見る」を見よ。

びばう 美貌【名】うるはしきかほ。

びばう 彌望【名】『廣く彌(ワタ)りて望む義』遠く眺むること。

びばう 備忘【名】忘れたる時の用意に備ふること。

びばう 未萌【名】びはう(未萌)を見よ。

びばう 微茫【貌】かすかなるさま。ぼんやり。「燈火微茫」

びばうじん 未亡人【名】㊀『夫死ぬれば、その後を追ひて死ぬべきに、未だ死なず生き殘れる人の義。左傳の莊公の二十八年の條、又、成公の九年及び十四年の條に見えて、何れも、自稱の語として用ひたり』寡婦の、自ら謙遜して稱する語。みばうじん。㊁(誤りて)他人より寡婦を指していふ稱。やもめ。ごけ。みばうじん。

びはうた 琵琶歌【名】琵琶に合はせて謠ふ歌曲。

びばうろく 備忘錄【名】おぼえちやう(覺帳)に同じ。

びはえふたう 枇杷葉湯【名】枇杷の葉の褐毛を去りて乾したるものを主劑として煎じたる汁。暑氣を拂ふ藥として服用す。八笑人「お振舞ひ申す枇杷葉湯は、陰德者の婦人」

びはかう 琵琶行【名】〔文〕支那唐の白樂天の作れる長篇の詩。長安の娼女なりし者、年長じ、色衰へて、賈人の婦となり、潯陽江の船中にて、秋の夜に琵琶を彈ずるを聞きて、その事を歌へるもの。

ひはかた 緋博多【名】緋色の博多。(多くは帶にいふ)衣食住記「天明頃、緋博多、世に腹切帶と稱す」八笑人「黑羽二重に緋博多の帶」

びはがらいし びはがら石【名】〔動〕珊瑚類に屬する動物。群體生活を營み、樹枝狀を呈す。骨骼は、石灰質にして堅硬。各箇體は螺旋狀に配列す。近海の岩礁に著生す。

ひばかり 日計・熇尾蛇【名】〔動〕『和漢三才圖會に「中㆓其毒㆒者卽日死。故俗曰㆓日限㆒」と見えたれど、實際は無毒なれば、他種の蛇を誤り認めしものなるべし』蛇類に屬する爬蟲類。深黃色にして、細かなる黑點あり、大なるは、長さ一二尺。主として野生の小獸を食ふ。毒無し。

ひはぎ 引剝【名】『ひきはぎ(引剝)の略』おひはぎ(追剝)に同じ。〔古語〕宇治拾「ひはぎに遭はせたまひたり」

びはき 琵琶記【名】〔書〕支那元末の高則誠の作れる傳奇小說。主人公を蔡邕といひ(漢の蔡邕とは關係なく、全く假託の名なり)、科擧の事に關して、功名と戀愛と父子の情との錯綜を寫せるもの。「と。

びはぎよ 琵琶魚【名】〔動〕あんかう(鮟鱇)の異稱。

ひはく 肥白【名】身體肥えて、色白きこと。

ひはく 飛白【名】㊀漢字の書體の一。墨色のかすれたるさまなるもの。字體、八分(ハツプン)に似たり。漢の蔡邕の創始せるものといふ。〔飛帛〕浮世床「浮世と書きたる筆法は、無理な所に、飛帛を附けて、蝕字(ムシクヒ)とやらん號(ナヅ)けたる提燈(チヤウチン)屋の永字八法」㊁絣縞(カスリジマ)の模樣。

ひはく 悲魄【名】死者の悲しき魄。

ひはく 菲薄【名】うすきこと。いささかなること。

ひはく 靡薄【名】『靡の字の音、正しくはび』輕薄。浮薄。浮靡。

ひばく 飛瀑【名】『瀑の字の音、正しくはボク』高處より落つるたき。

びはく 靡薄【名】ひはく(靡薄)を見よ。

ひはくがん 飛白岩【名】〔鑛〕はんれいがん(斑糲岩)に同じ。

びはくび 琵琶頸【名】頸の形の、琵琶に似たること。鵜鷺合戰「ちと琵琶頸なれども、さわさわとして、金黑に尋常なる禪門なり」

びはくわい 琵琶會【名】相集まりて琵琶を彈ずる會。

ひばこ 火箱【名】爐の底とする箱。

ひばこ 樋箱・槭箱【名】廁の床の孔の周圍に塡むる框(ワク)。

ひばこ 杼箱【名】バッタン及び力織(リキシヨク)機の筬框(ヲサワク)の兩側に裝置して、杼道(ヒミチ)を通過する杼を受け入れて、反對の方向に進行せしめんがために、一時保持するやうに仕掛けたる箱。

びはこ 琵琶湖【名】〔地〕『全體の形、樂器の琵琶に似たりとて名づけたり』近江國の中央にある、我國第一の大湖。長徑十六里十町弱、幅は廣狹一樣ならず、周回六十里弱。岸には港灣多く、湖中には竹生(チクブ)・多景(タケ)・奧などの小島あり。その水は、一部は、疏水によりて、京都市に落ち、一部は、勢多(セタ)川となりて、山城國宇治に出で、共に淀川の水源となる。孝靈天皇の五年に生ぜりと云ひ傳ふ。別稱、鳰(ニホ)の海・近江の海。

びはこそすゐ 琵琶湖疏水【名】琵琶湖畔の大津市より京都市に通ずる疏水。明治十八年より九年を費やして竣工し、舟運・灌漑等の目的に使用す。

びはごと 琵琶琴【名】びは(琵琶)に同じ。俳諧新選(嘯山)「琵琶琴の合うて合はざる夜寒かな」

びはざか 琵琶坂【名】〔地〕美濃國土岐郡十三峠の附近にある坂路。

ひばさみ 火挾【名】火繩銃の一部。

ひはし 檜橋【名】檜木にて造れる橋。〔古語〕萬葉「さし鍋に湯沸せ子ども櫟津(イチヒツ)の檜橋より來む狐(キツ)に浴(アム)さむ」

ひばし 火箸・火筯【名】火を挾むに用ふる、金屬製の箸。

びはし 琵琶師【名】古、雅樂寮に屬して、琵琶を彈ずることを職とせし人。大寶令「琵琶師」

びばし 毘婆尸(梵 Vipasyin)【名】〔佛〕過去七佛の第一。

びばしぶつ 毘婆尸佛【名】〔佛〕前條に同じ。

びはじま 枇杷島・枇杷嶋【名】㊀〔地〕尾張國西春井郡にある町。笈瀨(オヒセ)川を隔てて、名古屋市に對す。庄内川、これを貫流す。㊁越後國刈羽(カリ)郡にある村。柏崎町の南に隣接す。琵琶島城址あり。

びはしゆ 枇杷酒【名】枇杷の實を以て釀したる酒。安房國の名產。

ひばしら 火柱【名】空中に立ちのぼりて、柱のごとく見ゆる赤氣。俗に鼬(イタチ)の吹氣なりと稱す。蓋し燐の作用なるべし。東鑑「赤氣一條出現四尺。……異名火柱也」

びはすき 枇杷犁【名】犁の一種。柄と床と弧三角形の鑱(ハ)とより成り、前方に彎曲し、その端に丁字形の梢あり、この部を握り、後退しつつ曳きて使用す。京阪地方にて、中耕・畦立(アゼタテ)等に使用す。

ひはすひめ 日葉酢姫【名】〔人〕丹波道主(タニハノミチノウシ)王の長女。垂仁天皇の后。卽位の十五年、天皇、皇后狹穗姫(サホヒメ)の言を納れて、媛とその妹とを召す。八月、立ちて皇后となり、景行天皇及び諸皇子を生む。三十二年崩ず。

ひはた 日機【名】日日織りたる織物。狂言(吃)「今まで織った月はた・日はたの算用しておこしやれ」

ひはだ 檜皮【名】㊀檜の皮。屋根を葺き、その他、種種の用に供す。まいはだ(槇皮)參照。榮花「この屋に、今年、ひはだを葺きあへずなりはべりぬる事の口惜しさ」著聞「鐘樓の上に……、檜皮と裏板とのあはひに」㊁ひはだぶき(檜皮葺)の略。月詣「古鄕の軒のひはだに草あれてあはれ狐のふしどころかな」㊂次條㊀の略。空穗「ひはだの唐衣(カラギヌ)」㊃襲(カサネ)の色目の一。表は、黑ばみたる蘇芳、裏は縹(ハナダ)。中年以上の人、四季共に用ふ。增鏡「二藍の狩衣、成俊、ひはだ、具民」

ひはだいろ 檜皮色【名】㊀蘇枋色の、なほ黑みがかりたる染色。ひはだ。源氏「ひはだ色の紙のかさね、ただ聊かに書きて」平家「ひはだ色の御衣を參らせたまふに」㊁經(タテ)は淺黃の絲、緯(ヌキ)は赤絲を用ひたる織色。

ひ-はたき 火はたき【名】烟草の吸殼をはたき捨つるに用ふる具。多くは煙草入の根附とす。

ひはだ-し 檜皮師【名】檜皮にて屋根を葺くを業とする人。ひだいく。ひはだぶき。

ひはだ-だいく 檜皮大工【名】前條に同じ。東鑑「被ㇾ立二御堂一。……檜皮大工・壁塗・鍛冶等、各給二馬一疋一」

ひはだ-たくみ 檜皮工【名】前條に同じ。續後紀「檜皮工二人」

ひはだ-ぶき 檜皮葺【名】㊀檜皮にて屋根を葺くこと、又その屋根。空穗「ひはだぶきの船」榮花「三間・四面のひはだ葺の御堂」㊁ひはだし(檜皮師)に同じ。七一職人歌合「ひはだぶき。この棟瓦がおぞき」

ひはだ-や 檜皮屋【名】ひはだ葺の家。枕「いたくふりてもなきひはだ屋に、菖蒲うるはしく葺きわたしたる」

ひはだや-づくり 檜皮屋造【名】家の造り方の一。檜皮葺にして、切妻とし、破風(ハフ)を入れたるもの。

ひ-ばち 火鉢【名】灰を入れて、炭火をおこし置き、暖を取り、湯・茶を沸かしなどする具。木製・金屬製・陶製などあり、又、長火鉢・客火鉢・箱火鉢など、種種あり。

ひばち-うり 火鉢賣【名】火鉢を賣るを業とする人。三二職人歌合「ひばちうり、風呂火鉢瓦灯塗桶(グワトウヌリヲケ)水こぼしよきあきなひと奈良の土かな」

ひばち-ざけ 火鉢酒【名】火鉢の傍にて飲む酒。冥途飛脚「男交ぜずの火鉢酒、拳(ケン)の手品の手も撓(タユ)く」

ひ-はつ 被髮【名】髮を結ばずに振下げてあること。

被髮・左衽(サジン)【句】『論語の管仲篇に「微二管仲一、吾其被髮左衽矣」とあり』支那にて、夷狄の風俗の形容。

ひ-はつ 華茇【名】〔植〕胡椒科に屬する蔓草。概形胡椒に似、葉は卵形にして尖り、基部、心臟形をなす。葉脈の五條乃至七條なると、花穗の甚だ長きとは、胡椒に異なり。印度・馬來地方に產し、未熟なる果實を香辛料に供す。安南地方の土人は、葉を咀みて身心を興奮せしむ。ありたか。

ひはづ 纖弱【貌】ひわづ(纖弱)を見よ。

び-はつ 美髮【名】美しきかみ。

びは-づか 琵琶塚【名】攝津國神戶市東逆瀨川町眞光寺の傍にある塚。琵琶の妙手平經政が、一谷にて戰歿せし後、緣者の築きて、その靈を弔ひしものといふ。

ひばつ-しや 被罰者・被罸者【名】處罰を受くる者。

ひはづ-もの 纖弱者【名】ひわづもの(纖弱者)を見よ。

びは-どの 枇杷殿【名】『枇杷を多く植ゑしより名づく』藤原基經の邸。京都近衞の南、室町の東にありきとも、鷹司の南、東洞院(ヒガシノトウヰン)の西一町にありきともいふ。仲平・道長に傳はり、三條天皇の中宮妍(カズ)子の居となる。榮花「をば北の方、……枇杷殿にてぞ養ひ奉りたまひける」

ひ-ばな 火花【名】㊀勢よく飛び散る火。はしりび。ひのこ。㊁灼熱したる鐵などを鍛ふる時發する火光。㊂〔理〕『英Electric spark 又 Spark』放電の時、電極より發する、青紫色にして、樹枝狀又は鋸齒狀なる火光。レイデン瓶又は感應コイルによりて放電する時、兩極少しく遠き時に發し(兩極近ければ直線狀)、又、電(イナヅマ)は、空中電氣の放電の際に生ずる火花なり。

火花を散らす【句】㊀勢烈しく切り結ぶ形容。鎬(シノギ)を削る。火を散らす。「火出づるほど」參照。㊁勢烈しく相爭ふ形容。

ひばな-はうでん 火花放電【名】〔理〕『英Disruptive discharge』火花を放ちて放電すること。

びは-の-うみ 琵琶湖【名】〔地〕びはこ(琵琶湖)に同じ。芭蕉「琵琶の湖雨よ疎顏が松の律」

びは-の-おとど 枇杷大臣【名】〔人〕『びはどの(枇杷殿)を見よ』ふぢはらなかひら(藤原仲平)の異稱。

びは-の-おほぎさき 枇杷大后【名】〔人〕びはのきさき(枇杷后)に同じ。

びは-の-かふ 琵琶甲【名】『槫を二つに割れば、その一方は、樂器の琵琶の甲に似て丸みあるよりいふなるべしといふ』くれ(槫)に同じかるべしといふ。一說に、樂器の琵琶の甲に用ふる、一種の木材なるべしと。あむのこほり(阿武郡)㊁參照。太平記「五六八九寸の琵琶の甲・安郡(アンノコホリ)なんどを鐫(エ)り貫(ヌ)きて、したたかに塀を塗り」

びは-の-きさき 枇杷后【名】〔人〕『枇杷殿に居りしよりいふ』ふぢはらかずこ(藤原妍子)の異稱。

びは-の-こと 琵琶の琴【句】びは(琵琶)の條下を見よ。

びは-の-さく 琵琶柵【名】いづみじやう(泉城)に同じ。

びは-の-は 枇杷葉【名】次條の略。

びはのは-ぐは 枇杷葉鍬【名】鍬の一種。鐵(ハ)の形狹くして尖り、枇杷の葉の如し。硬き土壤を掘り起すに便にして、溝などの開浚に用ひ、又、稀に中耕にも用ふ。びはのは。

ひ-ばば 曾祖母【名】『ひは接頭語』そうそぼ(曾祖母)に同じ。

び-ばば-がし 枇杷葉樫【名】〔植〕ちりめんがし(縮緬樫)に同じ。

びは-ばこ 琵琶箱【名】琵琶を入れ置く箱。

びは-ひき 琵琶彈【名】琵琶を彈ずる人。大鏡「いで、この高名の琵琶ひきよ」

ひ-はふ 祕法・秘法【名】祕密の法。祕術。ひほふ(祕法)參照。

ひ-はふ 非法【名】法にはづれたること。無法。

ひは-ぼそ 纖弱細【名】ひわぼそ(纖弱細)を見よ。

びは-ほふし 琵琶法師【名】㊀琵琶を彈ずる法師。新猿樂記「琵琶法師之物語」㊁平家物語を語りつつ琵琶を彈ずる法師。多くは盲人にして、鎌倉時代の生佛(シヤウブツ)に始まり、その弟子に如一、如一の弟子に覺一(足利尊氏の從弟。播磨國明石を領せしより、明石撿挍と稱せり)と城一とあり、覺一の流派を一方(イチカタ)流又は都方(イチカタ)と呼び、城一の弟子城玄(久我通光の甥。京都の八阪(ヤサカ)に住す)の流派を、八阪流又は城方(ジヤウカタ)と呼び、兩派、共になほ數派に分れ、足利時代の初世にかけて最も盛んに行はれたり。へいけびは(平家琵琶)參照。㊂昔、地神經を誦し、竈祓(カマバラヒ)をなして、米錢を乞ひあるきし盲人。

びは-ぼん【名】びやぼんに同じ。

びは-むし 枇杷蟲【名】〔動〕㊀かぶとむし(兜蟲)を云ふ。〔伊勢國の方言〕㊁琉球の一種の舟。〔薩摩國の方言〕〔比巴蟲〕

ひ-はん 裨販【名】㊀小あきんど。㊁人を賤しめ罵りていふ語。盛衰記「裨販の女御、……亂行の驗者たち」

ひ-はん 批判【名】批評して判斷すること。批評的に研究して、判斷を下すこと。

ひ-ばん 日番【名】晝間、番をすること。太平記「日番・夜廻、隙も無く」

ひ-ばん 非番【名】當番にあらぬこと。下番(カバン)。(當番に對して)

非番・當番して【句】「間(マ)がな、隙がな」に同じ。太平記「鳥羽の御所に候(コウ)ぜし時には、非番當番して、目にかからん、詞にかからんとこそ振舞ひしか」

び-はん 尾藩【名】尾張國の藩領。

び-はん 備藩【名】備前國の藩領。

ひはん-しやう 肥胖症【名】〔醫〕しばうくわたしやう(脂肪過多症)に同じ。

ひはん-せつ 批判說【名】〔哲〕『獨Kritizismus』**ひはんてつがく**(批判哲學)に同じ。

ひはんてき-くわんねんろん 批判的觀念論【名】〔哲〕『英Critical idealism』**せんけんてきくわんねんろん**(先驗的觀念論)に同じ。

ひはんてき-けいけんろん 批判的經驗論【名】〔哲〕『英Critical empiricism』思惟と經驗との何れをも偏重することなく、思惟に經驗の作用して認識を生ずとする立脚地。

ひはんてき-じつざいろん 批判的實在論【名】〔哲〕『英Critical realism』科學研究の結果、吾人は、知覺の必ずしも外物の眞相を示すものに非ざるを知りしより、實在論に批判を加へ、以て對象の性質を決定せんとする立脚地。(素朴的實在論に對して)

ひはん-てつがく 批判哲學【名】〔哲〕『獨

Kritische Philosophie』認識を批判して、その論理的基礎を闡明する哲學。カント(Kant)が、自己の哲學を、他と區別せんがために名づけしもの。批判論。批評哲學。(獨斷哲學・懷疑哲學に對して)

ひはん-びやう 肥胖病【名】〔醫〕**ひはんしやう**(肥胖症)に同じ。

ひはん-ろん 批判論【名】〔哲〕**ひはんてつがく**(批判哲學)に同じ。

ひはんろん-しや 批判論者【名】〔哲〕批判論を持する哲學者。

ひば-めし 干葉飯【名】葉干㊁を採みて混ぜ、鹽を少し加へて炊ぎたる飯。

ひ-はも 干鱧【名】鱧の干物。

びは-もも 琵琶股【名】馬の後脚の上股の、幅廣く、內の高く隆起したる部分。

ひは-やか 纖弱【貌】**ひわやか**(纖弱)を見よ。

ひ-ばやし 火早し【形二】**くわじばやし**(火事早し)に同じ。諺「鳶飛べば、火ばやし」

ひはやび-の-かみ 熯速日神・樋速日神【名】伊弉諾(イザナギ)尊の、御子迦具土(カグツチ)神を斬りたまひし時、その血の、岩群(イハムラ)に附きて成りませりといふ神。

ひば-やま 比婆山【名】〔地〕伊弉册(イザナミ)尊を葬れる所なりと言ひ傳ふる山。その場所に就きては數說あれども、出雲國能義(ノギ)郡井尻村にある山にて、その大字日次(ヒナミ)は、比婆を比波とも書きたるものの訛訓に出でしものなるべしといふ。

ひ-はら 脾腹【名】腹の傍。よこばら。ひいはら。名義抄「肚、ヒハラ・ヘラ」和合人「脾腹を踏みつけられて」

ひ-ばら 檜原【名】檜の林ある野。〔古語〕萬葉「古にありけむ人もわがごとか三輪の檜原にかざし折りけむ」

ひはら-じろ 脾腹白【名】**ひだりのひはらじろ**(左脾腹白)を見よ。

ひばら-とり 皮肚取【名】相撲(スマフ)の手の一。詳かならず。異本曾我「胸反(ムナソリ)・辻搏(ツジツカミ)・皮肚取、相撲の手ども、その數を盡し」

ひばら-やま 檜原山【名】〔地〕大和國磯城(キシ)郡纒向(マキムク)山鳴神の麓。萬葉「(カナルカミし)の音にのみ聞く卷向の檜原の山をけふ見つるかも」

ひ-ばり 火針・火鍼【名】灼熱したる鍼。膿などを出す時に用ふ。沙石集「醫師……いそぎ療治すべしとて、大なる火針にて、頰を燒き破る」

ひばり 雲雀・鷚・告天子・天鷚【名】〔動〕鳴禽類に屬する益鳥の一。形、雀に似て、すこし大きく、頭と背とは、暗黑色にして、黑き斑點あり。眼の邊白く、胸と腹とは灰白色、脚細長く、爪長し。春の末、晴空に高く舞ひのぼりて囀る。和名「雲雀、比波利」雲雀の床(トコ)【句】雲雀のねどこ。雲雀のふしど。雲雀の巢。詞花「ひさぎ生ふる澤邊の茅原(チハラ)冬來れば雲雀の床ぞ現れにける」

(ひばり)

ひばり-かげ 雲雀鹿毛【名】**ひばりげ**(雲雀毛)に同じ。

ひばり-がはら 雲雀原【名】〔地〕磐城國相馬郡太田村と原町(ハラノマチ)との間にある野。南北一里、東西二里半。夜の森・本陣山・館の山などの小丘散在し、野馬追(ノマオヒ)祭、駒取の神事等の執行地たり。德川時代には、藩の牧場にして、曠野なりしが、近年、次第に開墾せらる。

ひばり-げ 雲雀毛【名】馬の毛色の一。黃色と白色との斑をなし、鬣と尾とは黑く、多くは脊に黑き筋あり。ひばりかげ。

ひばり-こかしじる 雲雀こかし汁【名】小鳥の肉を敲きて、小く丸め、魚の擂身(スリミ)にて包み、細く切りたる大根を加へて實としたる味噌汁。

ひばり-ごま 雲雀獨樂【名】昔、眞鍮にて製したりといふ、一種の獨樂。

ひばり-ざめ 雲雀鮫・驍魚【名】馬の毛色の一。雲雀毛にて、兩眼の部の白きもの。

ひばり-だか 雲雀鷹【名】練雲雀(ネリヒバリ)の力衰へたるに乘じて、鷹を合はせて、これを捕ふること、又その鷹。

ひはり-ど ひはり戶【名】ひはりたる戶。〔古語〕神樂(早歌)「あふり戶やひはり戶ひはり戶やあふり戶ゆすり上げよ」

ひばり-の 雲雀野【名】〔地〕**ひばりがはら**(雲雀原)に同じ。

ひばり-の-とこ 雲雀床【名】〔地〕豐前國下毛(シモケ)郡如水(ジヨスキ)村にある古蹟。土俗、征西將軍懷良(カネナガ)親王の墳なりと言ひ傳ふれども、確かならず。一名、將軍塚。

ひばり-ぶえ 雲雀笛【名】㊀雲雀を捕ふるために、その聲に似たる音を發するやうに作りたる笛。㊁細き竹にて作りたる一種の笛。中央に、土製の鳥を取附けて飾とし、その先を水中に入れて吹けば、雲雀の聲に似たる音を發するもの。一代男「芥子(ケシ)人形・おきあがり・雲雀笛を取揃へ」

ひばり-ぼね 雲雀骨【名】『雲雀の脚は細長きよりいふ』瘦せ細りたる骨格。

ひばり-やま 雲雀山【名】㊀〔地〕大和國宇陀郡宇賀志村の東にある山。吉野郡に跨る。山中に青蓮寺あり。俗に、中將姫苦行の古跡なりといふ。〔日張山・鶴山〕㊁〔地〕紀伊國有田郡絲我(イトガ)村にある山。中將姫の庵を結びて扶育せられし所なりといふ。今、雲雀山得生寺あり、曼陀羅の大幅を藏す。〔鶴山〕㊂謠曲の一。奈良の都の橫佩(ヨコハキ)右大臣藤原豐成、讒言を信じて、臣下をして、息女中將姫を雲雀山にて失はしめんとせしに、その臣、これを勞り、山中に庵を結びてかくまひ、乳母の侍從、花を賣りてこれを養ひしが、後、右大臣、前非を悔い、山中にて、父子面會すとの筋に作れるもの。

ひ-はる【動自】罅(ヒビ)が入る。裂く。ひわる。〔古語〕字鏡「坼新、……、比波留」

ひ-ひ 狒狒【名】㊀〔動〕猿猴類に屬する獸。亞弗利加大陸に產し、不毛の岩地に群居するを常とす。大なるは身長五尺に達す。全身橄欖色にして、顏面長く、容貌醜惡、尾短く、臀部に大なる胼胝あり。四肢ほぼ同長にして、攀登よりは步行に適す。食物は雜食、性兇暴・多力なり。やまわらは。やまわろ。㊁淫慾の盛んなる人を罵りていふ語。

(㊀ひひ)

ひ-ひ 披靡【名】『靡の字の音、正しくはび』ひらきなびくこと。おそれ伏すこと。辟易。

ひ-ひ 比比【貌】物の、多く並び列なり、又は事の重なり續くさま。比比として【句】何れも。「比比として是れなり」

ひ-ひ 比比【副】前條の略。「比比皆然り」

ひ-ひ【感】㊀笑ふ聲。㊁泣く聲。㊂馬の嘶く聲。**ひひらぐ**㊀參照。〔古語〕落窪「ひひといななきて」㊃鳥などの鳴く聲。ひい。**ひひなく**(ひひ鳴く)參照。

ひ-ひ 霏霏【貌】雨・雪などの、絕間なく降るさま。

ひ-ひ 菲菲【貌】㊀草の茂るさま。㊁花などの香るさま。

ひ-ひ 披披【貌】絲・衣・髮・旗などの長くなびくさま。

ひ-ひ【接頭】その下の名詞の示す血統より、上又は下へ一世を隔てたる意。**ひ**參照。「ひひ祖父(オホヂ)」「ひひ祖母(オホバ)」「曾孫(ヒヒコ)」「玄孫(ヒヒマゴ)」

ひ-び 罅【名】『割るる時の音より出でたる語。**ひひらぐ**㊂參照』㊀陶器などの、こまかき裂目ありて、未だ全くは割れぬもの。ひびき。ひびり。ひびれ。〔璺〕㊁曩(サキ)に病に罹りて、身の弱くなりたること、又は罪を犯して、身に汚點の生じたることの譬。きず。御所櫻「御兄弟の中惡しく、御身のひびになつてはと思ひ」罅が入る【句】㊀陶器などに、ひび生ず。㊁曩(サキ)に病に罹りて、身弱くなり、又は刑餘の身となる。

ひ-び 皸・皹【名】『前條㊀の轉義』多くは寒冷の候に、皮膚の表皮乾燥して、上皮細胞の間に小き龜裂生じ、同時に、眞皮に鬱血を來すもの。殊に水仕事をなし、又は素手・跣足にて働く者に多く、その龜裂の深く眞皮に達するに至れるものは、「あかぎれ」といふ。ひみ。皹が切れる【句】皹(ヒビ)生ず。

ひび 篊【名】㊀海中などに、枝の附けるままの竹などを並べ立てて、一方にのみ出入口を設け、魚の、一旦入りたる上は、出でられぬやうにせるもの。㊁海苔（ノリ）又は牡蠣（カキ）を採集する目的にて、その胞子或は胚子を附著・成長せしめんため、海中干潟の處に立て並ぶる竹又は粗朶（ソダ）。

ひび 籠【名】肥後國地方にて、割竹を蒲鉾形に編み、中に燒酎粕と粘土とを混じたるものを入れて、河中に沈めおき、入り來る雜魚を捕ふる具。ひじ（籠）參照。

ひび【名】〔動〕近江國琵琶湖に生じ、長さ六七寸ばかりにて、名吉（ナヨシ）に似て、鱗細かしといふ魚。

ひび 日比【名】〔地〕備前國兒島郡にある町。備讚海峽の要衝に當る小港。岡山市の南八里餘。製銅所の所在地、又、製鹽の產地として有名なり。

ひ-び 披靡【名】ひひ（披靡）を見よ。

ひ-び 日日【副】ひびに（日日に）に同じ。

び-び 微微【貌】かすか。わづか。ささやか。「微微として振はず」

び-び 娓娓【貌】倦まずに、こまかく說くさま。

び-び 瀰瀰【貌】水の盛んに滿ちわたるさま。

び-び 亹亹【貌】㊀つとめて倦まざるさま。㊁奥深くして高遠なるさま。

ひ-びう 紕謬【名】たがひそむくこと。錯誤。

ひひ-おほぢ 高祖父【名】『ひひは接頭語』かうそふ（高祖父）に同じ。〔古語〕

ひひ-おほば 高祖母【名】『ひひは接頭語』かうそぼ（高祖母）に同じ。〔古語〕

ひひ-おほをば 高祖姑【名】『ひひは接頭語』高祖父の姉妹。〔古語〕

ひびかす 響かす【動四他】㊀音聲の響くやうにす。源氏「琴・笛の音にも、雲井をひびかし」㊁評判し騷ぐやうにす。源氏「かくこの世にあまるまでひびかし營みたまふは」㊂遠まはしに誹る。諷す。

ひび-がや ひび榧【名】〔植〕いぬがや（犬榧）に同じ。

ひびき 響【名】㊀ひびくこと。聲の長く傳はること。音響。㊁音の末尾。餘韻。㊂傳はり及ぶ震動。佛足石歌「御跡（ミアト）つくる石のひびきは天（アメ）にいたり地（ツチ）さへゆすれ父母がために諸人のために」㊃さしひびき。影響。㊄世上に聞ゆること。とりざた。評判。源氏「春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほしかりし御ひびきにおとさせたまはず」㊅ひび（皹）㊀に同じ。

響の聲に應ずるが如し【句】『四十二章經に「猶ニ響之應レ聲、影之隨レ形」とあるに本づく』反應又は應答の迅速なる譬。きやうおう（響應）參照。盛衰記「自性（ジシヤウ）の本佛、もとより己身（コシン）に備ふと觀ずれば、無窮（ムクウ）の聖應（シヤウオウ）、響の聲に應ずるがごとし」

響の育（ソダチ）【句】相手を、その人の居ぬ所にて譽め、人傳（ヒトヅテ）に聞ゆるやうにして、喜ばしむること。〔京阪地方の德川時代の遊廓の語〕

ひびき-あふ 響合ふ【動四自】互に響く。呼應す。響應す。源氏「松風、はしたなくひびきあひたり」

ひびき-いし 響石【名】〔鑛〕あうむせき（鸚鵡石）㊀に同じ。

ひびき-がね 響金【名】たちぎき（立聞）㊁に同じ。

ひびき-なだ 響灘【名】〔地〕筑前國遠賀（ヲンガ）郡の北、長門國豐浦（トヨラ）郡の西にある海灣。日本海と玄海灘とに續く。

ひびき-のあな 響孔【名】古制の星兜の鉢の左右にある、二箇又は四箇の小孔。內より、緒を出だして、外面にて一結して留むるためにせり。後世の兜は、星を略して、筋のみとせるもの多きため、緒の結目を護るために、特に、長き鋲を、この孔の上に一つ打ち、四天の鋲と呼べり。しやうぞくあな。「忍（シノビ）の緒」參照。

ひびき-のなだ 響灘【名】〔地〕播磨灘の一部の古稱なるべし。一說に、播磨國印南（インナン）郡の沖なりと。ひぢきのなだ（比治木灘）の轉訛ならんといふ。忠見集「音に聞き目にはまだ見ぬ播磨なるひびきの灘といふはまことか」源氏「ひびきの灘も、…過ぎぬ。……川尻といふ所近づきぬ」

ひびき-のぼる 響上る【動四自】次第に高く鳴り響く。源氏「和琴（ワゴン）……。言ふ方もなくこそ響きのぼれ」中務內侍日記「玄上（ゲンジヤウ）の御撥音、ことに響き上りて一」

ひびき-め 響目・罅目・璺目【名】ひびの入りたる處。われめ。

ひびき-や 響矢【名】鳴鏑（ナリカブラ）の矢。

ひびき-わたる 響渡る【動四自】㊀くまなく響き傳はる。㊁廣く世に聞ゆ。

ひびく 響く【動四自】『ひび（皹）と同じく、音聲より出でて、語尾の添ひたる語』㊀聲とどろき傳はる。鳴りわたる。㊁餘韻を生ず。㊂世に聞ゆ。世人に知らる。名聲、廣く傳はる。榮花「この度は、まして、今一きは光添ひて、ひびきて入らせたまふ」和合人「山屋（ヤマヤ）の酒も、千町・萬町にひびくといへど」㊃評判しさわぐ。〔古語〕榮花「大嘗會とて、また、人人ひびきののしる」㊄感通す。反響す。こたふ。とどく。「忠言、君の心に響く」㊅さしひびく。影響す。㊆皹（ヒビ）生ず。ひひらぐ。

ひびく 疼く【動四自】刺す如く痛む。ひりひりと痛む。うづく。ひりつく。ひひらぐ。ひひらく。〔古語〕記「垣本（カキモト）に植ゑしはじかみ口ひびくわれは忘れじ擊ちてしやまむ」

ひび-ぐすり 皸藥【名】皸を治療するために用ふる藥。

びび-くま びび車【名】かたぐるま（肩車）を云ふ。〔豐後國の方言〕

ひひ-くめ 比比丘女【名】こをとろことろ（子捕子捕）に同じ。骨董集「比比丘女」

ひひ-こ 曾孫【名】『ひひは接頭語』孫の子。曾孫（ソウソン）。〔古語〕和名「曾孫、比比古」

ひひこ【名】〔動〕つばめ（燕）に同じ。

ひ-ひさう 非非想【名】〔佛〕㊀全くの無想には非ざること。非無想。㊁ひひさうてん（非非想天）の略。

ひひさう-しよ 非非想處【名】〔佛〕ひさうひひさうしよ（悲想非非想處）の略。

ひひさう-てん 非非想天【名】〔佛〕ひさうひひさうてん（非想非非想天）の略。

び-びし 美美し【形二】うつくし。うるはし。花やかなり。枕「隨身だちて、細やかにびびしきをのこの、傘（カラカサ）さして」紫式部日記「もてなしなど、いと美美しく花やかにぞ見えたまへる」

ひ-びそ 皮鼻疽【名】ばびそ（馬鼻疽）に同じ。

ひび-だけ 篊竹【名】ひびに用ふる竹。

ひひ-ぢい 高祖父【名】『ひひは接頭語』かうそふ（高祖父）に同じ。

ひ-びつ 火櫃【名】ひばち（火鉢）に同じ。〔古語〕今物語「火びつの火にうち入れたまひたりければ」

び-ひつ 美筆【名】見事なる書きぶり。若風俗「浮世繪の名人花田內匠（タクミ）といへる者、美筆を盡しける」

ひび-づり ひび釣【名】上潮（アゲシホ）の時、潮先に船を繫ぎ、袋磯目（フクロイソメ）を餌にして行ふ錘釣（オモリヅリ）。海鯽（カイヅ）を釣る時に行ふ。

ひ-ひてい【副】次條の訛。〔駿河國・奥州の方言〕

ひ-ひとひ 日一日【副】朝より夕まで。ひねもす。終日。〔古語〕紫式部日記「日ひと日、……、起き臥し暮させたまひつ」

ひひな 雛【名】ひな（雛）㊁に同じ。〔古語〕源氏「いとうつくしげに、ひひなのやうなる御ありさまを」

雛の車【句】雛を乘する車。中務集「ひひなの車のかた」

雛の裳（モ）【句】雛に著する裳。空穗「ひひなの裳に、葦手にて」

ひひな-あそび 雛遊【名】ひなあそび（雛遊）に同じ。〔古語〕源氏「ひひな遊にも、繪書いたまふにも、源氏の君と作り出でて」

ひひな-あはせ 雛合【名】物合（モノアハセ）の一。人人、各自に雛人形を持ち出でて、その優劣を競ふこと。〔古語〕中務集「七夕の繪の、中宮のひひなあはせに」

ひひ-なき ひひ鳴【名】ひひ鳴くこと。

ひひな-ぎぬ 雛衣【名】雛に著する衣。ひなぎぬ。〔古語〕蜻蛉「縑（カトリ）のひひなぎぬ、三つ縫ひたり」

ひひ-なく ひひ鳴く【動四自】ひひと鳴く。盛衰記「鵼（ヌエ）の聲して、ひひ鳴きて立つ所を」

ひひな-ぐさ 雛草【名】〔植〕かもじぐさ（髢草）に同じ。

ひひな-し 雛師【名】雛人形を作るを業とする人。

ひひな-まつり 雛祭【名】ひなまつり(雛祭)に同じ。

ひひな-や 雛屋【名】ひなや(雛屋)に同じ。〔古語〕御堂關白集「若宮の御ひひなや」

ひび-に 日日に【副】日ごとに。毎日。にちにち。ひび。萬葉「月にけにひびに見れども今のみに飽き足らめやも」置土產「東山の櫻も、日日には見られぬぢやが」

ひび-ぬり 罅塗【名】一種の漆塗。蠟色(ロイロ)漆又は花漆にて上塗をなし、やや乾ける時、卵白を引き、その乾燥して罅の生じたる時、卵白を洗ひ去り、乾かして、朴炭(ホホズミ)にて輕く研き、摺漆を施し、更に角粉(ツノコ)にて磨を掛けて製す。雅致に富む。

ひひ-ばば 高祖母【名】『ひひは接頭語』かうそぼ(高祖母)に同じ。

ひび-はり【名】〔動〕はこねさんせううを(箱根山椒魚)を云ふ。〔下野國日光の方言〕

ひひ-まご 曾曾孫・玄孫【名】『ひひは接頭語』曾孫の子。玄孫(ゲンソン)。

ひ-ひん 妃嬪【名】**一**妃と嬪と。**二**女官。宮女。

び-ひん 備品【名】**一**備へつけの物品。**二**備へつけて、やや長き期間、使用に堪ふる物品。椅子・火鉢等、これなり。

びひん-かんぢやう 備品勘定【名】〔商〕じふきかんぢやう(什器勘定)に同じ。

ひひ-めく【動四自】ひひなく(ひひ鳴く)に同じ。平家「虛空(コクウ)に、しばしぞひひめいたる」

ひびや 日比谷【名】〔地〕『古は、この邊、海に臨み、漁村たりし地にて、篊(ヒビ)を立てたる入江なりしよりの名。德川氏入國の後、住民は、南方芝の地に移れりといふ』東京市麴町區櫻田門より虎の門に至る東方一帶の地、即ち今の西日比谷町・內山下町・內幸町(ウチサイハヒ)及霞ケ關二丁目の地。

ひ-ひやう 批評【名】物事の是非・善惡・醜美等につきて評論すること。

ひひやう-か 批評家【名】批評をする人。批評の筆を取りて世に立つ人。

ひひやう-がん 批評眼【名】批評する眼識。

ひひやう-てつがく 批評哲學【名】〔哲〕ひはんてつがく(批判哲學)に同じ。

ひびやう-ゐん 避病院【名】法定の傳染病に罹れる人を收容して、その傳播を防ぐための病院。

ひび-やき 罅燒・璺燒【名】陶器の釉(ウハグスリ)に細かきひびの現るるやうに燒きなすこと、又その陶器。

ひびや-こうゑん 日比谷公園【名】〔地〕東京市麴町區にある公園。西日比谷町の大部分と內山下町二丁目との地を占め、明治三十六年の開園に係り、洋式の新設備を施せる公園の最初のものなり。

ひびや-ざ 日比谷座【名】『東京市麴町區日比谷の一部內幸(ウチサイハヒ)町にひるよりいふ』帝國議會の建築物を、劇場に擬へ、その議員及び出席の大臣・政府委員等を俳優に擬へて、嘲りていふ語。〔俚語〕

ひびや-だいじんぐう 日比谷大神宮【名】東京市麴町區有樂町三丁目にある神社。祭神は天照大神。明治維新後、伊勢の太神宮を勸請(クワンジヤウ)し、傍ら神宮敎院を設置す。

ひびや-みつけ 日比谷見附【名】江戶城日比谷門にありし見張番所。

ひびや-もん 日比谷門【名】江戶城內郭諸門の一。外櫻田門の東、馬場先門の南、今の日比谷公園の東北隅にありしもの。

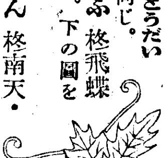
ひひらがす【動四他】ひひらぐやうになす。〔古語〕紫式部日記「おこなひがちに、口ひひらがし、數珠の音高きなど」

ひひら-ぎ 柊【名】**一**〔植〕『疼(ヒヒラ)ぐ木の意。葉緣の鋸齒の人を刺すによりていふ』木犀科に屬する常綠喬木。葉は對生し、卵形にして、銳き鋸齒あり、厚くして光澤あり、秋冬の交、香氣ある小白花を開く。材は細文ありて、色白く、質堅く、印・櫛・算盤玉などに作る。葉に刺なきを雌柊といひ、これに對して、常のを鬼柊といふ。ひらぎ。〔枸骨・紅谷樹〕**二**紋所の一。柊の葉を、種種の形に組み合はせて描きなしたるもの。抱(ダキ)柊・二割(フタツワリ)柊・丸に割柊など、種類多し。

柊の八尋矛(ヤヒロボコ)【句】柊の木にて作れる長き矛。景行天皇が、日本武(ヤマトタケ)尊及び吉備武彥(キビノタケヒコ)に命じて、東國の夷を平げしめたまひし時、これを賜ひしことあり。くにむけのほこ。記「比比羅木の八尋矛」播磨風土記「比比良木八尋桙」

ひひら-ぎ【名】〔植〕**一**こがねばな(黃金花)に同じ。**二**たかざうだい(高燈臺)二に同じ。

ひひらぎ-とびてふ 柊飛蝶【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(ひひらぎとびてふ)

ひひらぎ-なんてん 柊南天・十大功勞【名】〔植〕『樹の全形は、南天に似、小葉に銳き鋸齒を具ふるさまは、柊の葉に似たるよりいふ』小蘗(ギ)科に屬する常綠灌木。高さ四五尺。葉は羽狀複葉にして、小葉は卵狀披針形をなし、針狀の鋸齒を具へ、各葉柄に五箇乃至二十五箇を著く。四月頃、黃色・六瓣の花、長さ三四寸の總狀花序をなして開く。果實は小形の卵球形にして、熟すれば紫黑色となる。原產地は支那。觀賞用に供す。からなんてん。ひらぎなんてん。

ひひらぐ 疼ぐ【動四自】ひびく(疼く)に同じ。字鏡「疼、痛也、疹也。比比良久」發心集「この病の苦痛にせめられて、寢られはべらず、切り燒くがごとくうづき」

ひひらぐ【動四自】**一**『ひひ三四を見よ』馬・鳥など、さわがしく鳴く。いななく。さへづる。〔古語〕名義抄「嘶、ヒヒラグ・イナナク・馬イナナク・コロロク」**二**しやべりちらす。〔古語〕源氏「馬の頭(カミ)、物さだめの博士になりて、ひひらぎ居たり」**三**罅(ヒビ)生ぜんとして、音を發す。ひびく。名義抄「罊、カメ・ヒ・ヒヒラグ。罊破聲」

ひびら-くわうざん 日平鑛山【名】〔地〕次條に同じ。

ひびら-どうざん 日平銅山【名】〔地〕日向國東臼杵(ヒガシウスキ)郡北方村にある銅山。良質の銅鑛を多く產出す。日平鑛山。

ひびり 罅【名】ひび(罅)一に同じ。

びびり-っ-こ ひびりっ子【名】びびる子供。〔俚語〕浮世風呂「あの兒めが……びびりっ子で」

ひひる 蛾【名】〔動〕が(蛾)に同じ。〔古語〕字鏡「蛾、螘也、蟻也。安利。比比流」和名「蛾、比比留。蠶作二飛蟲一也」

ひひる 沖る・冲る【動四自】ひらひらと舞ひ上る。空中に飛び上る。ひひめく。ひゐる。冲(チユウ)す。〔古語〕紀「飄、ヒヒリテ」同「飄、ヒヒル」

びびる【動四自】はにかむ。しぐむ。〔俚語〕

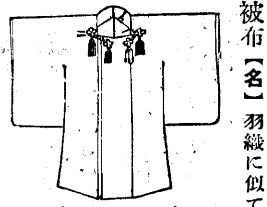
ひびろ 紕【名】絲を拚車(カセグルマ)に卷けるもの。その若干箇を、一拚(カセ)として數ふ。

ひび-わる 罅割る【動下二自】罅(ヒビ)生ず。ひびわれ、生ず。ひわる。油糟「夏の日や五條の上に照すらん(といふ句に)ひびわれにけり白川の橋」

ひび-われ 罅割【名】ひびわるること。罅の割目。ひわれ。罅裂(カレツ)。

ひ-ふ 一二【名】『一(ヒ)・二(フ)・三(ミ)・四(ヨ)と數へつつ行ふによりて名づく』手玉の類の遊戲。ひふつき。盛衰記「片手に、數百千の一二を突き、左右の手にて、數百萬を突き」

ひ-ふ 被風・披風・被布【名】羽織に似て、襟肩に圓みある小襟を附け、又、上下の前身頃(マヘミゴロ)に竪襟を附け、上衣の上に著て、左右の竪襟を合はせ、紐にて留むるやうに製したるもの。もと僧・隱者などの用ひしものなるが、今は老人・女兒なども、多く著用す。ひいほん。



(ひふ)

ひ-ふ 鄙夫【名】ひじん(鄙人)に同じ。

ひ-ふ 皮膚【名】動物體の表面を掩ひ包める薄き膜。觸覺及び分泌を司る。高等動物のは、眞皮・表皮の二層より成り、毛・爪など、これに附屬す。はだ。はだへ。

皮膚の見(ケン)【句】『文中子序に「此皮

膚見非㆓心解㆒也」とあり』表面のみの淺き見解。皮相の見。

ひ-ふ 皮傅【名】『後漢書の張衡傳に「方言非㆓其事㆒曰㆓皮傅㆒、言㆓皮膚淺近、强相傅會㆒也」とあり』淺はかなる考にてこじつくること。

ひ-ふ 祕符・秘符【名】ごふ(護符)に同じ。

ひ-ふ 祕府・秘府【名】貴重品を祕藏するくら。祕閣。

ひ-ふ 蚍蜉【名】大いなる蟻。おほあり。

蚍蜉・蟻子の援(ヱン)【句】『韓愈の張中丞傳後敍に「當㆓其圍守時㆒、外無㆓蚍蜉蟻子之援㆒」とあり』僅かのたすけの譬。

蚍蜉、大樹を動かす【名】『韓愈の詩に「蚍蜉撼㆓大樹㆒。可㆑笑自不㆑量」とあり』己れの微力を顧みずして、不相應なる事を成さんとする譬。太平記「この兵を以て彼の大敵に合はん事、蚍蜉の大樹を動かし、蟷螂の隆車を遮るに異ならず」

ひ-ふ 被覆【名】『覆の字の音、正しくはふう』おほひかぶすること。

ひ-ぶ 日賦【名】ひなし(日濟)に同じ。(月賦・年賦に對して)

ひ-ぶ 日步【名】㊀日割にて定めたる利息。㊁元金百圓に對する一日の利率。㊂〔商〕とりひきいうよきん(取引猶豫金)に同じ。〔取引所の語〕　「美人。美婦人。」

び-ふ 美婦【名】㊀美貌の妻。㊁美女。

び-ふ 媚附【名】媚びて附きしたがふこと。へつらひつくこと。

び-ぶ 媚嫵【名】なまめかしきこと。

ひ-ふう 悲風【名】人をかなしく思はする風。

ひ-ふう 祕封・秘封【名】他見を憚りて固く封ずること、又その封じたる物。

ひ-ふう 被覆【名】ひふ(被覆)を見よ。

び-ふう 微風【名】そよそよと吹く風。そよ吹く風。そよかぜ。　「風習。」

び-ふう 美風【名】譽むべきうつくしき風。

ひぶ-かし 日步貸【名】金錢を、日步にて貸すこと、又それを業とする者。ひがねかし。ひがし。ひまはし。

びふ-かつ【名】びいふかつれつの略。〔俚語〕

ひふ-がっぱ 被布合羽【名】合羽と同樣に、降雨の時などに用ふる、一種の被布。昔時は男子用のもありたれど、現今は女子用のみにて、多くは木理(メモク)織の眞岡(マヲカ)木綿にて作る。

ひふ-かんかく 皮膚感覺【名】〔醫〕『哲英 Cutaneous sensation』皮膚の、刺戟によりて發生する感覺。觸覺・溫覺・痛覺の三種に分つ。

ひ-ふき 火吹【名】火を吹き起すに用ふる具。火吹竹・火吹達磨などの總稱。運步色葉集「火吹」

ひふき-だけ 火吹竹【名】小き竹筒にて作りたる火吹。一端の節の中央に、小孔を穿ち、その方を火に近づけ、他の一端より氣息を吹き入る。ひふき。ふきだけ。八笑人「いや、もうこの薪には困るぞ。又いぶりだしたは。この又火吹竹は、なんだらう。さっぱり役に立たねえ」

火吹竹で釣鐘を鑄る【句】『火吹竹にて起すほどの僅かの火にて、鐘を鑄る義』事を成すに、力の甚しく足らざる譬。〔諺語〕

ひふき-だるま 火吹達磨【名】銅などにて、小き達磨の形を造り、小き口を穿ち、中に水を貯へて、炭の火の傍に置き、水の沸く時、口より吹き出づる蒸氣によりて、火を起すやうにしたる具。

ひ-ふく 被服【名】衣服を著用すること、又その衣服。

ひ-ふぐ 干河豚・乾河豚【名】河豚の皮を剝ぎて乾したるもの。夏季、羹(アツモノ)として賞味す。

び-ふく 美服【名】美しき衣服。美衣。

び-ふく 微服【名】服裝をやつすこと、又その服裝。忍の姿をなすこと。

ひふく-しやう 被服廠【名】りくぐんひふくしやう(陸軍被服廠)の略。

びふく-もん 美福門【名】『壬生(ミブ)氏の造營せし所なるより、壬生と音相近き美福の字を充てしもの』平安京の宮城十二門の中、南方二條通に面する三門の一。大內裏の北面、朱雀門の東に當る。

びふく-もんゐん 美福門院【名】〔人〕鳥羽天皇の后。中納言藤原長實の女。名は得子。大いに天皇の寵を受け、近衞天皇その他諸皇子を生み、皇儲の問題より、遂に保元の亂を起すに至れり。三宮に准ぜられ、永曆元年崩ず。年四十四。　「訛。」

ひ-ぶくら 樋袋【名】ひぶくろ(樋袋)の轉

ひ-ぶくれ 火脹【名】火傷のたのに、皮膚の脹れ脹れてあるもの。和合人「足の裏は痛む筈だあ。明日(アシタ)は火ぶくれになって、步行(アル)かれる事ではねえぜ」

ひ-ぶくろ 火袋【名】㊀石燈籠の火入(ヒイレ)。鬼貫「宵闇に火袋深き木の間かな」㊁ちやうちん(提燈)。㊂煖爐の火床(ヒドコ)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

ひ-ぶくろ 樋袋【名】板を剝ぐに用ふる一種の鉋。ひぶくら。

ひふ-けっかく 皮膚結核【名】〔醫〕『羅 Tuberculosis cutis』皮膚に來る結核。種類多く、何れも結核菌の直接作用によりて起る。

ひふ-こきふ 皮膚呼吸【名】〔醫〕皮膚の外皮が、酸素を攝取し、炭素と水分とを排泄する作用。但し、機能、甚だ微弱なり。

び-ふじん 美婦人【名】美しき婦人。美婦。美人。

ひふ-しゅっけつ 皮膚出血【名】〔醫〕ひかいっけつ(皮下溢血)に同じ。

ひふ-すゐしゅ 皮膚水腫【名】〔醫〕すゐき(水氣)に同じ。

ひ-ぶせ 火防・火伏【名】修驗者(シュゲンジャ)などの、神佛に祈請して、火難を防ぐこと。ひよけ。「火防の符」

ひふ-せんびやう 皮膚腺病【名】〔醫〕皮膚結核の一。結核菌の感染によりて、結節を生じ、漸次軟化して、皮膚の表面に潰瘍又は瘻孔を作り、瘢痕を形成するに至るもの。　「の火口を被ふ蓋。」

ひ-ぶた 火蓋【名】火繩筒の一部。火皿

火蓋を切る【句】㊀火蓋を開きて、點火の用意をなす。㊁或物事に就きて、行動を開始す。

ひ-ふっ【貌】ひいふっに同じ。延慶本平家「二つの矢……、ひふっと射切って」

ひ-ぶつ 祕佛・秘佛【名】㊀祕藏の佛像。厨子の中に祕めて、人に拜ませぬ佛像。㊁大切にして、容易に人に見せぬ物の譬。置土産「いかな、いかな、脇の男には、緋縮緬の戸帳(トチヤウ)拜ませず、この女郎を、祕佛の太夫と名高く」

ひ-ぶつ 被物【名】ひもつ(被物)に同じ。運步色葉集「被物、ヒブツ」

び-ぶつ 麋沸【名】『漢書の揚雄傳に見ゆ』麋(カユ)の煮えただるる如くに亂るること。

び-ぶつ 美物【名】鳥・魚などの、美味なるもの。庭訓往來「雜事廚調㆓種種之美物㆒」

び-ぶつ 微物【名】いささかなる品物。ささやかなる物。　「じ。」

ひふ-つき 一二撞【名】ひふ(一二)に同

びふつ-きどう 麋沸蟻動【句】『淮南子に見ゆ』天下の騷ぎ亂るること。

ひ-ぶっしつ-ろん 非物質論【名】〔哲〕『英 Immaterialism』物質的實在を否定する哲學說。即ち存在とは、知覺せらるるをいふに外ならずとし、客觀的物質界を、すべて主觀の表象なりとするバアクレエ(Berkeley)の主觀的唯心說などの類。

びふ-てき(佛 Bifteck)【名】西洋料理の一。ヒレ肉・ロオス肉などを、五分ほどの厚さに切り、麥酒瓶などにて敲き、兩面に鹽と胡椒粉とをふりかけ、バタを少しく入れたるフライ鍋にて、兩面を程よく燒きたるもの。びいふすてえき。びすてき。

ひ-ぶね 檜船【名】檜木にて作れる船。

ひ-ぶね 火船【名】昔の船軍にて、薪・藁などを積み、流に從ひて、風上より敵船に火をかくるに用ひし船。

ひふ-びやう 皮膚病【名】〔醫〕『英 Skin-disease』身體內外の原因によりて、皮膚及び肉眼の及ぶべき粘膜に、異狀を呈し、障害を受くる諸病症の總稱。即ち霜燒・胼胝(アカガレ)・疣(イボ)・雀斑(ソバカス)・黑子(ホクロ)・濕疹・蕁麻疹・白癬(シラクモ)・禿頭病・面皰(ニキビ)・疥癬・田蟲・癩疹・疱瘡・結核疹など。

ひふ-ぺすと 皮膚黑死病【名】〔醫〕ペス

トの一。皮膚に、膿疱又は癰の如き腫物生じ、遂に化膿して組織を破り、大なる潰瘍面を生じ、遂に死に至るもの。(腺ペスト・肺ペストに對して)

ひぶ-ほけん 日歩保險【名】〔商〕日歩によりて、保險料を計算したる火災保險。

ひ-ふみ 一二三【名】皮膚病に用ふる、一種の藥。

ひ-ふみ 日文【名】神代文字の一と云ひ傳へたる、一種の文字。朝鮮の諺文(オンムン)に象(カタド)りて僞作せしものなるべし。

ひ-ぶみ 日文【名】毎日送る文。長町女腹切「飽かぬ別の朝(アシタ)より、日文・血文の附屆(ツケトドケ)」

日文・矢文(ヤブ)【名】毎日續けて出す手紙。矢の催足の手紙。

ひ-ふん 緋褌【名】緋色のふんどし。八笑人「いい時分に、ぼいと引拔(ヒキヌキ)で、赤裸(マッパダカ)、緋褌(ヒフン)一つになって」

ひ-ふん 悲憤【名】悲しみいきどほること。憤慨。

ひ-ぶん 碑文【名】石碑に彫る文章。

ひ-ぶん 匪文【名】文事に暗きこと。學問の道に通ぜざること。

ひ-ぶん 非分【名】㊀分(ブン)を超えてあること。分際以上。保元「分の敵を擊って、非分の者を擊たず」㊁道理に協はぬこと。平家「非分の害を遁れんがために」盛衰記「非分の事を祈り申されければ」

び-ぶん 美文【名】修辭を巧にし、語句を美しく飾りたる文。

び-ぶん 微分【名】〔數〕㊀『英 Differrentiate』或函數の微係數を求むること。㊁『英 Differrentials』或函數の極微の變差。$y=f(x)$、即ちyがxの函數なる時、xの値に微小の變化を與ふれば、$f(x)$即ちyの値も微小の變化を生ずるを通例とし、その變化を、$f(x)$に對して呼ぶ稱。微分數。(積分に對して)

びぶん-がく 微分學【名】〔數〕『英 Differrential calculus』數學の一分科。一の函數の微係數を求め、これを代數學・幾何學・力學等に應用することを攷究するもの。微分法。

び-ぶんがく 美文學【名】『獨 Schöne Literatur』ぶんがく(文學)に同じ。

び-ぶんし 微分子【名】こまかき分子。

びぶん-すう 微分數【名】〔數〕びぶん(微分)㊁に同じ。

びぶん-せきぶん-がく 微分積分學【名】微分學と積分學と。微積分學。

びぶん-はふ 微分法【名】〔數〕びぶんがく(微分學)に同じ。

ひ-ふり 火振【名】松明(タイマツ)などを振りまはすこと。謠曲(折烏帽子)「火振の親方として、一番に斬って入りしを」曠野(含咕)「秋の暮鵜川鵜川の火振かな」

びぶりお (羅 Bibiio)【名】〔醫〕只一つ捻れたる形の病原體。例へばコレラ菌など。

ひぶり-しま 日振島・日振嶋【名】〔地〕伊豫國北宇和郡にある島。周圍五里三十三町。島の中央窄りて、殆ど東西に二分せんとす。天慶の昔、藤原純友の、一時、據りし所といふ。

ひ-ぶるひ 日震【名】日毎に發病する「瘧(オコリ)」。

ひふろん 祕府論・秘府論【名】〔書〕ぶんきやうひふろん(文鏡祕府論)の略。

ひ-べ 氷戶・氷戸【名】古、主水司(モヒトリノツカサ)に屬して、氷室(ヒムロ)の事を掌りし戸。

ひ-へい 皮幣【名】古、支那にて、白き鹿の皮にて造りし貨幣。

ひ-へい 疲弊・罷弊【名】㊀氣力衰ふること。疲れ弱ること。疲憊。㊁經濟上、窮乏すること。

ひ-へい 靡敝・費弊【名】『靡の字の音、正しくはビ』すたれやぶること。おとろふること。

ひ-へぎ 引倍木・曳倍支【名】『ひきへぎ(引倍木)の略』四月より九月頃まで、晴(ハレ)の場合に、東帶の下に著用する、一種の衣。祖(アコメ)の裏をひきへがし、綿を拔き取りたるもの。濃き色なるを普通とし、もとは、打ち、後には、板引にして艶を出だしたり。ひっぺぎ。榮花「關白殿の御下襲(シタガサネ)の菊のひへぎ、かがやきて」

ぴぺっと (佛 Pippete)【名】全形細き中に、中腹圓く、先端は、殊に極めて細き硝子管。化學の實驗などの時、その下端を液に浸し、上端を口にて吸ひ、液の、漸次に管内に上りて、劃線以上に達したる時、指にて、上端の口を塞ぎて取り出し、少量づつ他の中に點下せしむるに用ふ。

ひ-へん 日偏【名】漢字の偏の一、「晦」・「昨」・「曉」などの左方にある日の字。

ひ-へん 火偏【名】漢字の偏の一。「煙」・「灯」・「煩」などの左方にある火の字。

ひ-へん 飛變【名】にはかに起れる變事。

ひ-べん 皮冕【名】古、支那にて、鹿の皮にてつくりし冠。

ひ-ほ 裨補【名】たすけおぎなふこと。

ひぼ 紐【名】ひも(紐)に同じ。濱松「から組のひぼ、長やかにうるはしきを」

ひ-ぼ 悲母【名】我に悲を垂るる母。慈母。ひも(悲母)參照。海道記「悲母の目前に、中懷を謝して」

ひ-ほう 飛蓬・蜚蓬【名】㊀風に吹かれて飛ぶよもぎ。斷蓬。㊁動搖定まらざる物事の譬。

飛蓬、風に乘ず【句】『商子に「今夫飛蓬遇二飄風一而行、千里之勢也」とあり』人の、勢に乘じて行動する譬。〔諺語〕

飛蓬の如し【句】『詩經の衞風伯兮篇に「自二伯之東一、首如二飛蓬一、豈無二膏沐一、誰適爲レ容」とあるに本づく』頭髮の亂れてある形容。

飛蓬の問(トヒ)【句】『管子に「無二儀法程式一、蜚搖而無レ所レ定、謂二之蜚蓬之問一。蜚蓬之問、明主不レ聽也。無度之言、明主不レ許也。故曰、蜚蓬之問、不レ在レ所レ賓」とあるに本づく』法則に合はぬ問。

ひ-ぼう 祕謀・秘謀【名】ひけい(祕計)に同じ。

び-ほう 彌縫【名】補ひ合はすること。失敗又は缺點を取り繕ふこと。とりなすこと。とりつくろひ。

びほう-さく 彌縫策【名】一時をつくろふ策略。

ひぼ-おとし 紐落【名】ひもおとし(紐落)に同じ。

ひぼ-かは 紐革【名】㊀ひもかは(紐革)㊀に同じ。運歩色葉集「紐革、ヒボカハ」㊁ひもかは(紐革)㊁に同じ。

ひ-ぼく 婢僕【名】下女と下男と。めしつかひ。奴婢。僕婢。

ひ-ぼく 比目【名】次條を見よ。

比目の枕【句】「比目(ヒモク)の枕」に同じ。謠曲(砧)「鴛鴦の衾の下には、立ち去る思を悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁あり」

ひぼく-ぎよ 比目魚【名】〔動〕ひもくぎよ(比目魚)に同じ。

ひ-ぼけ【名】〔植〕ぼけ(木瓜)に同じ。

ひ-ほけん-しや 被保險者【名】〔法〕『英 Insured』保險契約によりて保險せらるる者、即ち、損害保險にありては、保險者より損害の塡補を受くべき者、生命保險にありては、生死を保險に付せられたる者。被保險人。

ひ-ほけん-にん 被保險人【名】〔法〕前條に同じ。

ひ-ほけん-ぶつ 被保險物【名】〔法〕被保險利益の存する物件。

ひ-ほけん-りえき 被保險利益【名】〔法〕損害保險契約の目的たる金錢上の利益。

ひ-ほこ 日矛【名】天照大神の天岩屋戸(アメノイハヤド)に籠りたまひし時、思兼(オモヒカネ)神の發議に基づき、大神の像を造りて招(ヲ)ぎ奉らんがために、石凝姥(イシコリドメ)の、天香具(アメノカグ)山の金を採りて作りたりといふ矛。後、紀伊國日前(ヒノクマ)神宮の神體となれりといふ。

ひ-ほご-こく 被保護國【名】〔法〕ほごこく(保護國)に同じ。

ひぽこんでりい 依卜昆垤兒 (獨 Hypochondrie)【名】〔醫〕事實病患なきを、あるが如くに考へ、又は微症なるを、重症なるが如く考へて、異常に憂ふる病症。煩悶苦慮、常に疲勞愁嘆し、遂には、精神に變徵を來すに至ることあり。心氣症。氣鬱病。鬱憂病。憂鬱病。

ひぽこんどりや 依卜昆垤兒 (英 Hypochondria)【名】〔醫〕前條に同じ。

ひ-ぼこり 火伐【名】火の、盛んなる勢にて燃えひろがること。火勢の盛んなること。〔古語〕

ひ-ぼし 日乾・日干【名】日光に晒し乾す

こと、又その晒し乾したる物。空穂「黒ばうを、日ぼしのやうになして」運歩色葉集「日干、ヒボシ。米」

ひ-ぼし 火乾・火干【名】火にて炙り乾すこと、又その炙り乾したる物。和名「炒熕、比保之乃以乎。俗云、火干。火乾也」

ひ-ぼし 干乾【名】飢ゑて、痩せ衰ふること。絶食。**ひじに**(干死)參照。

ひぼつき-ぶくろ 紐附袋【名】**ひもつきぶくろ**(紐附袋)に同じ。天の網島「綯交(ナヒマゼ)のひぼつき袋おし開き」

ひぼ-つけ 紐附【名】**ひもつけ**(紐附)に同じ。孕常盤「十二の菊綴、四の紐附」

ひぼ-とき 紐解【名】**ひもとき**(紐解)に同じ。

ひぼ-なほし 紐直【名】**ひもなほし**(紐直)に同じ。

ひぼ-のり 紐海苔【名】〔植〕**ひものり**(紐海苔)に同じ。

ひ-ほふ 祕法・秘法【名】〔佛〕『**ひみつ**(祕密)㊃を見よ』㊀眞言宗などにて行ふ祕密の祈禱。㊁狹義にては、修法(スホフ)を、大法・准大法・祕法・通途(ツウヅ)法の四段に分ちたるものの一。傳法灌頂(デンボフクワンヂヤウ)以後に於て、これを行ふを許さる。通途法とは、通常の修法をいふ。増鏡「祕法とり行はせらる」謠曲葵上「大法・祕法、醫療さまざまの御事にて候へども」

ひ-ほふ 非法【名】〔佛〕自然に反すること。「非法の死」「非法・貪著(ドンヂヤク)」

ひ-ほん 祕本・秘本【名】祕藏せる書籍。盛衰記「祕本にいはく」

ひ-ぼん 非凡【名】平凡にてあらぬこと、又その人。超凡。

び-ほん 美本【名】體裁の美しき書籍。

び-ほん 尾本【名】馬の身體の一部。尾の附根(ネツケ)の處。

ひぼん-ぎやう 非梵行【名】〔佛〕淫慾の行爲。不淨行。(梵行に對して) 盛衰記「凡夫の眼前には、非梵行の婚嫁と見奉れども」

ひ-ほんせき-にん 非本籍人【名】現住する市町村の區域内に、本籍を定めぬ人。(本籍人に對して)

ひほんせきにん-みぶんとうきぼ 非本籍人身分登記簿【名】身分登記簿の一。戸籍吏が、その管轄地内に在住する非本籍人及び本籍不明なる人の身分に關する事項を登記するために調製するもの。

ひほん-たまくしげ 祕本玉くしげ【名】〔書〕矯弊・御民・治財・尙武・敬神等の要を論述せるもの。二卷。本居宣長の、君侯の問に答へたる意見書。

ひぼろぎ 神籬【名】**ひもろぎ**(神籬)に同じ。〔古語〕和名「神籬、比保路岐」

ひぼろぎ 胙【名】**ひもろぎ**(胙)に同じ。名義抄「胙、ヒボロギ」

ひ-ま 隙【名】㊀**すきま**(隙間)㊀に同じ。和名「隙、比末。壁際孔也」㊁時の間。時間。光陰。萬葉「その雪の時じくがごと間(ヒマ)もおちずわれはぞ戀ふる妹がただかに」㊂利用すべき機會。間隙。源氏「例のひまもやと、うかがひありきたまふ」㊃**いとま**(暇)㊀に同じ。〔暇〕源氏「例のなぐさめの手習を、おこなひのひまにはしたまふ」㊄暫時の休暇。〔暇〕狂言(二千石)「下人の下人めが、某に、ひまをも請はずに、いづ方へやら下(オ)りそへてござる」㊅交情のあしきこと。なかたがひ。不和。隙(ゲキ)。源氏「うはべはいとよき御中の、昔より、さすがに、ひまありけるに」

隙が明く【名】用事無く、樂(ラク)になる。手すきになる。**ひまあき**(隙明)參照。

隙が入る【句】長き時間を要す。手間どる。ひまどる。おそくなる。狂言(烏帽子)「いかうひまのいる物ぢやげな程に、急いで來て給へ」一代男「夜上(ヨアガリ)忙しく、連は五人、よろづ隙入る折節」

隙が出(デ)る【句】奉公人、解雇せらる。暇になる。

隙が取れる【句】**ひまどる**(隙取る)に同じ。

隙過ぐる駒【句】「隙(ヒマ)行く駒」に同じ。掘太「ひま過ぐる駒よりも疾きかげろふのたまきはる五十路(イソヂ)の春にあひにけるかな」

隙に飽かす【句】多くの時を、惜しまず費やして、事を爲す。

隙の駒【句】「隙(ヒマ)行く駒」に同じ。曾丹「與謝(ヨサ)の海はひまの駒にはあらねども雲間をすぐすほどぞ苦しき」

隙の光【句】次條に同じ。紀「隙駒、ヒマノヒカリ」

隙行く駒【句】『「白駒(ハクク)隙を過ぐ」を見よ』光陰の、速かに過ぎ行くこと。〔古語〕夫木「とどめあへぬ隙ゆく駒といひながらいかにあけゆく秋の風ぞも」増鏡「隙ゆく駒の足に任せて、文永も、五年になりぬ」

隙を明く【句】忙しからぬやうにす。一代男「首くくりて、浮世の隙を明けんと」俳諧古選(雲鼓)「天窓(アタマ)から隙を明けけり初櫻」

隙を缺く【句】「隙を潰す」に同じ。

隙を出す【句】奉公人を解雇す。隙を遣る。暇を出す。

隙を潰(ツブ)す【句】空しく時間を費やす。隙を缺く。

隙を取る【句】奉公人又は妻妾などが、自ら乞ひて、その家を離る。暇を取る。義經腰越狀「無體に去狀書かせ、望んでひまを取りし身が」

隙を偸む【句】忙しき中より、無理に暇を作る。

隙を貰ふ【句】「隙を取る」に同じ。丹波與作「參宮するとて、隙貰ひ」

隙を遣る【句】㊀暫時の休暇を與ふ。醒睡笑「明日は、とく起き來り、門を叩けと、隙を遣りぬ」㊁奉公人又は妻妾などに對して、主從又は夫婦の關係を絕つ。暇を遣る。天の網島「うちの女房、いらぬもの。おさんに、ひまやりや」㊂衣類・器具などを、不用に歸したるため、賣り拂ひ又は棄て去りなどす。一茶「南無阿彌陀どてらの綿よ隙遣るぞ」

ひ-ま 披麻【名】〔美〕皴(シユン)の一。抜きたる麻の葉を散したるやうに描くもの。

ひ-ま 蓖麻【名】〔植〕**たうごま**(唐胡麻)の漢名。

ひま-あき 隙明・暇明【名】用事無く、樂(ラク)になること。猿蓑(丈草)「隙明や蚤の出てゆく耳の穴」

ひま-いり 隙入・暇入【名】長き時間を要すること、又要せしこと。手間どること。ひまどり。諸國咄「十日ばかりの暇入にして、御越(オコシ)あれ」義經腰越狀「今、少し隙入の用事あり。町はづれに待つてゐよ」

ひま-かき 隙缺・暇缺【名】**ひまつぶし**(隙潰)に同じ。

ひ-まう 被毛【名】身體をおほふ毛。

び-まう 美毛【名】美しき毛又は羽毛。

ひ-まく 皮膜【名】皮膚と粘膜と。

ひまく-さいはう 皮膜細胞【名】〔醫〕**じやうひさいはう**(上皮細胞)に同じ。

ひまく-そしき 皮膜組織【名】〔醫〕**じやうひそしき**(上皮組織)に同じ。

ひ-まけ 日負【名】太陽の熱に當りて弱ること。鷹筑波「朝顏に日まけをさすな桔梗がさ」

ひ-まご 曾孫【名】『**ひ**は接頭語。**ひこ**(曾孫)參照』**ひこ**(曾孫)に同じ。盛衰記「この子預け奉つる。御ためには、ひまごなり」

ひま-さぎり 【名】『隙を遮る義』魚貝類を捕ふる仕掛の一。石を組みて、梁(ヤナ)の如くし、水を遮りて捕ふるものなるべしといふ。〔古語〕紀「比滿沙伎理梁、ヒマサギリノヤナ」

ひ-まし 日增【名】食物などの、製してより、又、果實・野菜などの、採りてより、日數を經たること、又それらの物。

ひ-まし 蓖麻子【名】蓖麻(タウゴマ)の種子。

ひまし-あぶら 蓖麻子油【名】**ひましゆ**(蓖麻子油)に同じ。

ひまし-に 日增に【副】日毎に增して。日毎にますます。日に增し。

ひまし-の-あぶら 蓖麻子油【名】**ひましゆ**(蓖麻子油)に同じ。

ひま-じん 隙人・閑人【名】用事なき人。閑暇のある人。一茶「隙人や蚊が出た出たと觸れあるく」

ひまし-もの 日增物【名】日增となりてある物。

ひまし-ゆ 蓖麻子油【名】蓖麻(タウゴマ)の果實の皮を去り、仁(ジン)を搾りて採りたる、黄色・濃稠の油。アルコオルに溶解す。醫藥にも、工業用にも供し、又、印肉に合は

せ、紙に引く等、用途多し。ひましあぶら。

ひ-まぜ 日交【名】一日づつ隔つること。一日おき。隔日。〔古語〕蜻蛉「日まぜなどに、うち通ひたれば」

ひ-まち 日待・日祭【名】『「日を待つ」を見よ。待の字は假借にて、實は祭の義』前夜より潔齋し、翌朝の日出を待ちて拜むこと。だいまち。(月待に對して) 醒睡笑「日待の座敷にて、手拍子を打ち」一代男「夜明を急ぐ日待の遊」

ひ-まつ 飛沫【名】飛び散る水沫。とばしり。しぶき。とばっちり。

ひま-っ-かき 隙缺・暇缺【名】ひまかき(隙缺)の音便。

ひま-っ-つぶし 隙潰・暇潰【名】次條の音便。

ひま-つぶし 隙潰・暇潰【名】空しく時日を費やすこと。ひまかき。ひまっかき。ひまっつぶし。

ひ-まつり 火祭【名】㊀火災を除くための祭。鎭火祭。大鏡「村の行事などいできて、火祭や何やと、わづらはしく責めしを」㊁出雲大社にて、毎年正月元日に、神寶として、神代より傳來せる火切臼・火切杵を祭る祭式。㊂ひつぎ(火繼)㊀參照。「鞍馬(クラマ)の火祭」を見よ。

ひま-どり 隙取・暇取【名】『「隙を取る」を見よ』雇人の、自ら乞ひて解雇せらること。

ひま-どり 隙取・暇取【名】ひまどること。ひまいり。

ひま-どる 隙取る・暇取る【動四自】長き時間を要す。隙が入る。手間どる。ひまいる。八笑人「彼是ひまどる内、往來の人立がしをるは」

ひ-まなご 日眞名子【名】天津神(アマツカミ)の御まな子。〔古語〕祝詞「いざなぎの日眞名子加夫呂伎熊野(カブロギクマノ)の大神」

ひま-はざま 隙狹間・隙廹【名】ひま(隙)㊀に同じ。平家「兵ども、隙はざまも無うぞ並(オ)み居たる」

ひ-まはし 日廻【名】ひなしかし(日濟貸)に同じ。

ひ-まはし 火廻【名】數人圓坐し、點火せる線香若しくは紙撚(コヨリ)を、順次に、文字鎖(モジグサリ)の歌を詠み、或は尻取(シリトリ)の語、又は頭に同音を帶びたる物の名等を言ひながら送り廻し、言ひ詰りて、持ちたる指に、火の迫りて困るを興とし、又、窮せる間に、火の消ゆるを負とする遊戲。ひまはり。ひもじぐさ。ひもじぐさり。ひわたし。重井筒「引裂紙の捻元結(ヒネリモトヒ)で、火廻を火の字日野絹、房(フサ)さま、なんと。私(ワシ)はひとり寢、ああいまいまし」百物語「日待の夜、色色の興ありて後、火廻を始めて」

ひまはし-がね 日廻金【名】日まはしの金。からすがね。ひがね。世間子息形氣「家業の日廻金の算用さへ知らず」

ひ-まはり 火廻【名】㊀ひまはし(火廻)に同じ。㊁火の燃え移りゆくこと。ひあし。

ひ-まはり 日廻・向日葵【名】〔植〕菊科に屬する一年生の草。高さ八尺に達し、莖・葉共に毛茸あり。葉は卵形に鋸齒ありて、先端尖り、葉柄長くして、互生す。夏秋の交、黄色にして、周邊は舌狀花冠、中央は筒狀花冠を有する花、頭狀花をなして、梢頭に開き、その形、菊花に似て、大きさ六七寸、太陽に向ひて廻轉する性あり。種子より淡黄色の油を採りて、食用・燈用・石鹼原料・ペンキ油などに供す。にちりんさう。ひぐるま。

（ひまはり）

ひまはり-さう 日廻草・向日葵【名】〔植〕前條に同じ。

ひま-び 隙日・閑日【名】隙なる日。手すきの日。二代男「閑日を暮しかねたる女郎」

ひま-びま 隙隙【名】㊀處處のすきま。あひだあひだ。源氏「半蔀(ハジトミ)はおろしてけり。ひまびまより見ゆる火の光」㊁用事の無き折折。暇のある度(タビ)。すきずき。源氏「御念珠のひまびまには」

ひ-まん 肥滿【名】肥えふとりてあること。

び-まん 彌漫・瀰漫【名】ひろがること。はびこること。

ひまん-しやう 肥滿症【名】〔醫〕しばうくわたしやう(脂肪過多症)に同じ。

ひ-まや 日間屋【名】伊勢國・信濃國などの習にて、婦人の、月經中移り居る家。

ひ-まゐり 日參【名】㊀宮中に部屋・局などを構へず、里より日毎に參ること。㊁神社・佛閣などに、毎日參詣すること。につさん。盛衰記「月詣(ツキマウデ)・日參、夜も、晝も、踵(クビス)を繼ぎて參る上下男女」

ひ-まをどし 間緘【名】まいろをどし(間色緘)に同じ。

ひ-み 皹【名】ひび(皹)に同じ。〔古語〕和名「瘃、比美」

ひ-み 日見【名】戲に、夏の炎天に、日光を見て樂むこと。和合人「今(コン)九つ時、拙宅物干において、日見の宴を相催し、…………大かた、月見は誰(ダレ)しもする事だから、ひねって日見といふ思附だらう」

ひみ 氷見・冰見【名】〔地〕㊀伊豫國新居(ニヒ)郡にある町。八十八箇所札所の一なる吉祥寺あり。㊁越中國の八郡の一。郡役所を、氷見町に置く。明治二十九年、射水郡より分設せり。㊂越中國氷見郡にある町。富山灣の西岸にある漁港。

氷見の合戰【句】天正十三年、佐佐・前田兩氏の、越中國氷見町にての戰。

び-み 美味【名】うまきあぢはひ、又その食物。

ひみ-いわし 氷見鰯・冰見鰯【名】〔動〕越中國の海上に產する魚。鰯に類して大きく、乾して食すれば、甚だ美味なり。同國射水郡氷見港を最とすれば名とす。

ひ-みじか 日短【名】冬季の日の短きこと。晝間の短きこと。日沒の早きこと。短日。(日永に對して)

ひ-みず 日不見【名】〔動〕㊀ぢねずみ(地鼠)に同じ。㊁次條の略。

ひみず-がひ 日不見貝【名】〔動〕かつをぶしがひ(鰹節貝)に同じ。

ひみず-むぐら 日不見鼴鼠【名】〔動〕食蟲類に屬する獸。體は鼴鼠に酷似すれど、大さは、その三分許に過ぎず。前足の發達著しからず、尾長し。相模・武藏・甲斐・大和・紀伊などの諸國に產す。

ひ-みち 杼道【名】機(ハタ)織る時、杼の通過する道。

ひ-みち 干滿【名】みちひ(滿干)に同じ。

干滿の珠(タマ)【句】潮涸瓊(シホルタマ)と潮滿瓊(シホミツタマ)と。干珠(カンジユ)と滿珠(マンジユ)と。艶狩劔本地「龍女は、干滿の珠を捧げ」

ひ-みつ 祕密・秘密【名】㊀隱して、人に知らせぬこと。ひそかにすること。㊁公開せぬこと。公にせぬこと。㊂ひじゆつ(祕術)に同じ。重帷子「祕密の手綱繰りひかへ、繰りゆるめ」㊃〔佛〕教義の、祕奧・深密にして、容易に人に示さぬもの。盛衰記「祕密・瑜伽(ユガ)の教法を傳授したまひしよりこの方、……東寺・天台祕密の上乘たり」㊄〔佛〕眞言宗にて、自家の教義をいふ稱。**みっけう**(密教)參照。盛衰記「高野山は……、祕密修行の室、念佛三昧の砌(ミギリ)もあり」

祕密の法味(ホフミ)【句】〔佛〕眞言の法を聽き味ふこと。謠曲(雷電)「聞法(モンボフ)、祕密の法味に預かり」

祕密を侵す罪【句】〔法〕**ひみつろうせつざい**(祕密漏泄罪)に同じ。

ひ-みづ 氷水・冰水【名】氷を入れてとかしたる水。〔古語〕源氏「大御酒(オホミキ)參り、ひみづ召して」

ひ-みづ 火水【名】㊀火と水と。水火(スヰクワ)。和合人「火水で責めてくれう」㊁交情の甚しく惡しきこと。敵視し合ふこと。水火(スヰクワ)。梅松論「公家(クゲ)と武家、火水の爭にて」

火水に入る【句】水火をも恐れず盡力す。艱難辛苦を厭はずして勞力を捧ぐ。榮花「この御葬送の夜、志のかぎり、火水に入り、惑ひあつかひ明し奉りければ」

火水に爲(ナ)**る**【句】一所懸命に働く。激しく働く。曾我「火水になりて戰ひしが」

火水の底【句】「火の中、水の底」に同じ。蟬丸「長追に力盡き候ふを、火水の底もと存ぜしかど」

火水の地獄【句】『火に燔かれ、水に溺るる地獄の義』甚しき苦に出會ふことの譬。緋縮緬卯月の紅葉「火水の地獄も厭はねど、夫婦別れて行かうかと」

ひみつ‐かい 祕密戒・秘密戒【名】〔佛〕密敎の戒律、卽ち三昧耶(サンマヤ)戒。

ひみつ‐きやう 祕密境・秘密境【名】たやすく入り込むことの出來ぬ土地。

ひみつ‐きやう 祕密經・秘密經【名】眞言宗の經典。密經。

ひみつ‐くわい 祕密會・秘密會【名】❶祕密に催す集會。❷關係者以外の者の傍聽又は入場を禁ずる會。(公會に對して)

ひみつ‐ぐわいかう 祕密外交・秘密外交【名】國民に公表せず、政府當局者の間に、祕密に行ふ外交。

ひみつ‐くわいぎ 祕密會議・秘密會議【名】議會・集會などにて、關係者以外の者の傍聽又は入場を禁ずる會議。

ひみつ‐くわんぢやう 祕密灌頂・秘密灌頂【名】〔佛〕❶眞言宗一切の灌頂法。密灌。❷狹義にては、五種三昧耶(サンマヤ)の中の第五の三摩耶を證する灌頂。傳法灌頂を受けたる後に受くるものにて、後世は絶えたりといふ。密灌。著聞「三部の大法、諸尊別行(ベツギヤウ)護摩祕法を受け、祕密灌頂を傳へたまへり」

ひみつ‐けう 祕密敎・秘密敎【名】❶〔佛〕**しんごんしゅう**(眞言宗)の異稱。❷〔佛〕天台宗の化儀(ケギ)の四敎の一。一人一人の機に對して、祕密に法を說き、一會(イチエ)の人をして自他互に知らしめざるもの。❸〔佛〕『敎理甚深にして、二乘の見聞せざる所なるよりいふ』**ゑんけう**(圓敎)の異稱。❹『英 Occultism』加入者以外の者には祕密にする特殊の修行をなす宗敎。

ひみつ‐けっしや 祕密結社・秘密結社 加入者以外の者、殊に政府などに對して存在・組織又は目的などを祕密にする結社。宗敎的性質を有するものに端を發すること多し。

ひみつ‐ざう 祕密藏・秘密藏【名】〔佛〕祕密の法藏。甚深祕奧にして、佛と佛との間にのみ了知せらるる法門。

ひみつ‐しふくわい 祕密集會・秘密集會【名】ひみつくわい(祕密會)❶に同じ。

ひみつ‐しんり‐しゆぎ 祕密審理主義・秘密審理主義【名】〔法〕裁判の對審判決を祕密にして傍聽せしめぬ主義。(公開審理主義に對して)

ひみつ‐じゆ 祕密呪・秘密呪【名】〔佛〕祕密の呪文(ジユモン)、卽ち眞言陀羅尼の總稱。太平記「一持祕密呪、生生而加護」

ひみつ‐しゆう 祕密宗・秘密宗【名】〔佛〕**みっけう**(密敎)に同じ。

ひみつ‐しゆっぱん 祕密出版・秘密出版【名】規定の手續を履みて屆け出づることなく、祕密に發賣・頒布する方法を取る出版。

ひみつ‐じよう 祕密乘・秘密乘【名】〔佛〕眞言の敎法。

ひみつ‐しようしよ 祕密證書・秘密證書【名】〔法〕時期の到來まで、利害關係人に知らしむることを避けて製作する證書。

ひみつ‐せんきよ 祕密選擧・秘密選擧【名】〔法〕祕密投票によりて行ふ選擧。

ひみつ‐だん 祕密壇・秘密壇【名】〔佛〕祕密の法を修する壇場。護摩壇・灌頂壇・曼陀羅壇の三種あり。

ひみつ‐だんたい 祕密團體・秘密團體【名】加入者以外の者、殊に政府などに對して存在・組織又は目的などを祕密にする團體。

ひみつ‐づしよ 祕密圖書・秘密圖書【名】祕密にして、一般に示さぬ圖書。

ひみつ‐でうやく 祕密條約・秘密條約【名】當事國以外の國に知らしめぬ條約。

ひみつ‐とうへう 祕密投票・秘密投票【名】〔法〕**むきめいとうへう**(無記名投票)に同じ。(公示投票に對して)

ひみつ‐ばこ 祕密箱・秘密筥【名】〔佛〕灌頂式の時に、大阿闍梨(ダイアジヤリ)の受用する金剛杵・散杖・寶冠・臂釧(ヒクン)・白拂(ビヤクホツ)・扇・塗香器(ヅカウキ)等の器具を容るる箱。

ひみつ‐びやう 祕密病・秘密病【名】**くわりうびやう**(花柳病)に同じ。

ひみつ‐ぶっけう 祕密佛敎・秘密佛敎【名】〔佛〕みっけう(密敎)に同じ。

ひみつまんだら‐じふぢゆうしんろん 祕密曼陀羅十住心論【名】〔書〕眞言宗の敎相判釋及び眞言行者の住心轉昇の次第を、漢文にて述べたるもの。十卷。空海の、勅を奉じて著せるもの。註釋書多し。十住心論ともいふ。

ひみつ‐ゆがだん 祕密瑜伽壇・秘密瑜伽壇【名】〔佛〕祕密の瑜伽法を行ふ壇場、卽ち金(コン)・胎兩部の曼陀羅壇。盛衰記「祕密瑜伽壇を立てて、七日加持して」

ひみつ‐り 祕密裡・秘密裏【名】祕密のうち。「祕密裡に取調ぶ」

ひみつ‐ろうせつざい 祕密漏泄罪・秘密漏泄罪【名】〔法〕封緘せる信書を披き、又は一定の身分ある者が、その業務上取扱ひたる事件につきて、知り得たる他人の祕密を漏泄する場合に成立する罪。親告罪の一とす。

ひみ‐の‐え 比美江【名】〔地〕越中國射水郡にある江。**ひみ**(氷見)❸參照。萬葉「松田江の濱行きくらし、つなし捕る比美の江過ぎて、多胡の島行きたもとほり」

ひ‐みやく 皮脈【名】皮膚と血脈と。

ひみ‐ゆみ 肥美弓【名】**へみゆみ**(へみ弓)に同じきか。〔古語〕東大寺獻物帳「肥美弓一張」

ひ‐む 非無【名】〔佛〕「非有(ウヒ)・非無」を見よ。

ひむ 祕む・秘む【動下二他】隱して、人に示さず。內證にす。祕す。〔古語〕源氏「いといたうひめさせたまふ」

ひむか 日向【名】〔地〕**ひうが**(日向)の古稱。

ひ‐むがし 東【名】**ひがし**(東)に同じ。〔古語〕萬葉「ひむがしの野(ヌ)に陽炎(カギロヒ)の立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」

ひむかしり【名】**たたりがた**(榪形)に同じ。〔古語〕

ひ‐むく 緋無垢【名】『**むく**(無垢)❷を見よ』上著も下著も共に緋色なる絹の衣服。重井筒「緋無垢・冷酒・引舟・火桶」

ひ‐むし 火蟲【名】❶〔動〕**ひとりむし**(火取蟲)に同じ。紀「夏蟲の火蟲の衣まれに著てかくみやたりはあによくもあらず」❷盛夏の候、一種の絲狀菌によりて馬に生ずる皮膚病。關東と九州とに多し。

ひむじゆん‐りつ 非矛盾律【名】〔哲〕『英 Law of non-contradiction』**むじゆんりつ**(矛盾律)に同じ。

ひ‐むろ 氷室・冰室【名】❶古、山陰に穴室を穿ち、氷を夏まで貯へ置きし所。「氷(ヒ)の樣(タメシ)」參照。玉葉「水むすぶ夕べよりなほ涼しきは氷室に向ふ杉の下蔭」❷謠曲の一。氷室の故事と、氷の貢捧ぐる樣とを、神に寄せ、祝言に寄せて述べたるもの。

氷室の節會(セチエ)【句】古の禁中の行事の一。氷室に藏めたる氷を、六月一日に出だして、群臣に分ち賜ひしもの。

氷室の節句【句】德川時代に、六月一日、各所より、氷室の氷を、宮中主水司(モヒトリノツカサ)に獻上し、又、舊臘雪水にて製したる粉餅(ヘギモチ)、或は攝津國勝尾(カチヲ)又は富士山などより出づる氷餅を祝ひ食せしこと。古、堂上にては、盛夏に氷室を開くこと常なりしに、四民は氷を得るに由なかりしより起りしなるべしといふ。氷餅の祝。

氷室の使【句】氷室の節句に、氷室の氷を、主水司(モヒトリノツカサ)に獻りし使者。

氷室の雪【句】氷室に圍ひおける雪。

ひ‐むろ 檜榁【名】〔植〕❶花柏(サハラ)の變種。葉、軟かくして、裏面の白きもの。しもふりひば。しやじも。〔檜柏〕❷**むろ**(榁)に同じ。

ひむろ‐ぐさ 氷室草・冰室草【名】〔植〕**よし**(葭)の異稱。〔古語〕藏玉集「難波にはあしといふなる氷室草代代のためしにかかる葉もなし」

ひむろ‐どの 氷室殿・冰室殿【名】氷室の家。〔古語〕夫木「氷室殿稻散る末の夕風に夏と秋とを吹きみだりぬる」

ひむろ‐もり 氷室守・冰室殿【名】氷室の番人。犬筑波「六日朔日寒ければ、氷室守ここへ死ぬべき今年かな」百日付鵞「とけぬ心の氷室守」

ひむろ‐やま 氷室山・冰室山【名】〔地〕山城國愛宕(オタギ)郡大宮村にある山。古、氷室のありし所。堀太「水無月(ミナヅキ)の空のけしきは變らねどあたり涼しき氷室山かな」

ひん 品【名】❶くらゐ。たぐひ。品種。

二ほど。しな。すがた。みえ。樣子。體裁。品格。「品のよい人」

ひん 貧【名】一まづしきこと。財貨の乏しきこと。貧乏。貧困。貧窮。芭蕉「苣(チサ)摘みて貧なる女機(ハタ)に倚る」柳樽「宮芝居いかにも曾我が貧に見え」二まづしき人。貧乏人。貧民。

貧すれば鈍(ドン)する【句】貧乏すれば、智者も愚鈍になる。人窮すれば、智短し。〔諺語〕膝栗毛「借錢を負うたる馬に乗り合はせひんすりやどんと落されにけり」

貧の一燈【句】「長者の萬燈、貧の一燈」を見よ。

貧の病(ヤマヒ)【句】『「貧(ヒン)は病より苦し」を見よ』貧乏を病の一と見立てていふ語。卯月の潤色「貧の病に、肩身もすぼり」

貧の樂は寢樂(ネラク)【句】貧乏すれば、寢ぬるが、唯一の樂なること。〔諺語〕

貧の盜(ヌスミ)【句】貧乏の苦しまぎれに、止むを得ず盜をなすこと。

貧の盜(ヌスミ)に戀の歌【句】一貧乏すれば、盜をもなし、戀に溺るれば、歌をも詠むに至る。〔諺語〕八百屋お七「貧の盜に戀の歌、三十一文字書き習ひ」二必要に迫られ、止むを得ずして事を爲す譬。〔諺語〕

貧の花好(ハナズキ)【句】一貧乏しながらも、花を見て樂しむ。貧乏花好(ハナズキ)。〔諺語〕二貧乏しながらも、風流を解する餘裕あり。〔諺語〕

貧は士の常【句】『列子の天瑞篇に「榮啓期曰、貧者士之常也。死者人之終也。處レ常得レ終、當二何憂一哉」とあるに本づく』士たる者は、志す所、道に在るが故に、利慾の念淡し。〔諺語〕

貧は諸道の妨【句】貧乏は、萬事の障碍となる。〔諺語〕竹齋物語「貧は諸道の妨、阿彌陀も錢ほど光る故なり」

貧は世界の福の神【句】貧乏は、人の發憤を促し、却って後日の幸福の原因となる。〔諺語〕集義和書「俗に、貧は世界の福の神と申し候」

貧は道心の妨【句】貧乏すれば、慾心生じ易く、道心起り難し。〔諺語〕

貧は道心の妨ならず【句】次條に同じ。〔諺語〕海道記「樂(タノシミ)は、大驕慢の仇なり。仇は則ち惡趣に引きおとす。貧は、又、道心の妨ならず。則ち善所に引き上ぐ」

貧は菩提(ボダイ)の種、富(トミ)は輪廻(リンヱ)の絆(キヅナ)【句】貧乏すれば、執著なきため、却って菩提に入り易く、富貴なれば、これに反す。〔諺語〕一言芳談「貧は菩提の種、日日に佛道に進む。富は輪廻の絆、夜夜に惡業(アクゴフ)を益す」

貧は病(ヤマヒ)より苦し【句】貧乏は、病氣よりも苦痛なり。〔諺語〕

貧ほど辛(ツラ)き者は無し【句】「四百四病の病より、貧ほど辛き者は無し」を見よ。

貧ほど深き隱家(カクレガ)は無し【句】貧乏人は、人に知らるること稀なれば、世に隱るるには、却って都合よし。〔諺語〕西明寺百首「軒近き隣にだにも訪はれぬは貧ほど深きかくれがはなし」

ひん 顰・嚬【名】ひそみ(顰)に同じ。

顰に倣ふ【句】「顰(ヒソミ)に倣ふ」に同じ。

ひん 牝【名】獸類の女性。めす。め。(牡(ボ)に對して)「牝・牡」

ひん 賓【名】一ひんかく(賓客)に同じ。二主たる物事に副ひ加はる物事。諺「名は實(ジツ)の賓」

ひん 嬪【名】一宮女。官女。女官。二君主に侍する女。君主の御寢に侍する女。嬪御(ヒンギョ)。三古の後宮職員の一。天皇の御寢に侍せし女の內、夫人に亞ぎしもの。定員四人、位は四位又は五位。四ぢよし(女子)の美稱。ひめ。

ひん 殯【名】ひんきゆう(殯宮)に同じ。

ひん 引【接頭】ひき(引)の音便。「ひん捩(ネヂ)る」「ひん曲げる」

ひん 品【助數】品物の種類の數。「二三品誂ふ」

びん 鬢【名】頭の左右の側面の髮。びんづら。枕「鏡こひて、鬢など搔きなほし」

鬢の鏡【句】びんかがみ(鬢鏡)に同じ。義經記「鬢の鏡を取り出だして、これこそ、朝夕に顏をうつしつれ、……とて」

鬢の櫛【句】びんぐし(鬢櫛)に同じ。(但し、古は、男のには「鬢櫛」、女のには「鬢の櫛」といひて、區別せり)

鬢の霜【句】びんさう(鬢霜)に同じ。東關紀行「齡は、百年の半に近づきて、鬢の霜、漸く冷しと雖も」芭蕉「爐開や左官老いゆく鬢の霜」

びん 便【名】一たより。たのみ。たづき。ついで。便宜。都合。空穗「びんある所をなん、僧坊にしける」玉葉「びん惡しくて、御對面なかりければ」二おとづれ。たより。音信。

びん 瓶【名】『漢字の宋音』一陶製又は金屬製などの、口のすぼまれる器。二硝子製の德利。がらすびん。玻璃壜。〔罎・壜〕

びん 緡【名】一さし(緡)に同じ。二びんせん(緡錢)の略。

びん 敏【名】さときこと。すばやきこと。機敏。「機を見るに敏なり」

びん 便【接尾】物を送り屆くる方法の種類。「鐵道便に託す」「速達便」

ぴん 針(英 Pin)【名】とめばり。はり。

ぴん 一(西 Punta の訛)【名】『原語は、英 Point と、語原相同じき語、即ち點の義』一骨牌(カルタ)又は博奕の采の目などの、一の數。二第一。はじめ。〔俚語〕

一(ピン)から切(キリ)まで【名】始より終まで。〔博奕の語〕

ぴん【貌】一少しもたるみなきさま。雙生隅田川「ぴんと反ったる髭八文字」和合人「品(ピン)よく、ぴんとして、よっぽど飲める酒だ」二相場の、引き返して、上向(ウハムキ)となり、又引き締るさま。〔取引所の語〕三固き物の、罅(ヒビ)入りなどして割るる音。四相手の言葉などの、頭の痛む程に強く感ずるさま。

びん-おや 鬢親【名】深除(フカソギ)又は鬢除(ビンソギ)の日、髮もしくは鬢の末をそぐ役。深除にては、嘗てその兒の髮置(カミオキ)の式に從事せし者、これに當るを例とし、鬢除にては、その女子の許嫁の夫婿、これに當り、若し未だ許嫁せざる時は、父兄等代りてこれに當るを例とす。烏帽子(エボシ)親・元服親の類。

ひん-か 貧家【名】まづしき家。貧乏人の家。

貧家には故人疎(ウト)し【名】貧家には、舊知の人も寄り附かず。〔諺語〕大織冠「貧家には故人疎しとは、今、身の上に知られし」

びんが 頻伽【名】かりようびんが(迦陵頻伽)の略。

頻伽の聲【句】一迦陵頻伽の鳴く聲。二美しき聲。國姓爺「數多の女官、同音に、凱歌(カチドキ)揚ぐる頻伽の聲」

ひん-かい 瀕海【名】海に臨みてあること、又その地。

ひん-かい 品海【名】〔地〕武藏國品川(シナガハ)の海。

ひん-かう 品行【名】一おこなひ。身持(ミモチ)。行跡。行狀。操行。二人がら。人品。品格。

ひん-かう 貧交【名】互にまづしき者の交際。まづしき友人同志。

ひん-かう 貧巷【名】貧乏人の多く住めるちまた。

びん-かう 岷江・珉江【名】〔地〕支那四川省にある大河。岷山の南麓に發し、諸流を併せて、遂に楊子江に入る。

珉江、楚に入って、觴(サカヅキ)を濫(ウカ)ぶ【句】らんしやう(濫觴)を見よ。

びんかう-にっそ 岷江入楚【名】〔書〕みんこうにっそ(岷江入楚)を見よ。

びん-かがみ 鬢鏡【名】鬢の形を映し見るに用ふる、小形の鏡。鬢のかがみ。五人女「鬢鏡取出だして、面(オモテ)を見るこそ、やさしけれ」織留「比丘尼、大笑して、鬢鏡落した程に、呼び返せば、勸進一文に替へて行きける」

びん-かき 鬢搔【名】鬢を搔き付くるに用ふる、小き櫛。

ひん-かく 品格【名】しながら。みえ。しな。品(ピン)。「品格よし」

ひん-かく 賓客【名】まらうど。きやく。かく。客人。

ひん-かく 賓格【名】〔語〕かくかく(客格)に同じ。

ひん-がし 東【名】『ひむがし(東)の音便』ひがし(東)に同じ。〔古語〕

東の南面(ミナミオモテ)【句】寢殿・對屋(タイノヤ)な

どの東の間（マ）の南面。榮花「上も、東の南面におはします」

東の院 【句】東隣にある邸。源氏「東の院造り立ちて」榮花「一條の攝政の大上（オホウヘ）は、九の方共に、東の院に住ませたまひて」

ひんがし-おもて 東面 【名】ひがしおもて（東面）に同じ。〔古語〕蜻蛉「ひんがしおもての朝日のけ、いと苦しければ」源氏「寢殿のひんがしおもて拂ひあけさせて」

ひんがし-がは 東川 【名】〔地〕ひがしがは（東川）に同じ。空穗「御祓（ハラヘ）……ひんがし川に、車三つばかりして出でたまふ」

ひんがし-やま 東山 【名】〔地〕ひがしやま（東山）㊀に同じ。伊勢「京……、ひんがし山に住まんと思ひ入りて」續世繼「ひんがし山の如意寺におはし」

びんが-てう 頻伽鳥 【名】かりようびんが（迦陵頻伽）に同じ。盛衰記「頻伽鳥は、卵（カヒコ）の中にてあれども、その聲、諸鳥に勝れたり」

ひん-かん 貧寒 【名】まづしきこと。寒貧。

ひん-がん 玢岩 【名】〔鑛〕『英 Porphyrite』火成岩の一。斑狀をなし、主合分の長石が、主として斜長石なるもの。種類多し。小紋岩（コモンガン）。

ひん-き 擯棄 【名】ひんせき（擯斥）に同じ。

ひん-ぎ 稟議・禀議 【名】㊀事の可否を論じて申し出づること。㊁官廳・會社などにて、新なる事項生じ、その會議を開く手續を履む程に重要ならざる事項なる場合に、主管者が、決定案を作り、重役間又は關係者間に廻付して、その承認を求むるのみにて濟ますこと。

びん-ぎ 便宜 【名】㊀たよりよきこと、又その時。好機會。便宜（ベンギ）。徒然「この事、かの事、便宜に忘るな」㊁たより。おとづれ。音信。淀鯉出世瀧德「勝様からは、便宜も無し」曾根崎心中「時貸（トキガシ）に貸したるが、三日・四日に便宜せず」

ひん-ぎう 牝牛 【名】めすの牛。めうし。

びんぎ-しよ 便宜所 【名】びんしよ（便所）に同じ。室町殿年中行事「將軍家出二御于便宜所二」

ひん-きやう 貧境 【名】まづしき境遇。

ひん-きやく 賓客 【名】ひんかく（賓客）に同じ。

ひん-きやく 擯却 【名】ひんせき（擯斥）に同じ。

びんがら 頻伽羅 【名】『梵 Pingala（賓伽羅）、即ち龍樹の中觀論を釋せる梵文の書名と混じて誤用せるものなるべし』かりようびんが（迦陵頻伽）に同じ。太平記「好堅樹は、地の底にありて、芽、百圍をなし、頻伽羅は、卵（カヒコ）の中にありて、聲、衆鳥に勝れたり」

ひんがら-め 瞟眼 【名】ひがらめ（瞟眼）に同じ。

ひん-きゆう 殯宮 【名】かりもがり（殯）に同じ。

ひん-きゆう 貧窮 【名】まづしくして、せん方なきこと。貧困。困窮。貧苦。

ひんきゆう-たいふ 殯宮大夫 【名】昔、大喪の時、殯宮の事を司りし職。

ひんきゆうもんだふ-の-うた 貧窮問答歌 【句】〔文〕貧窮の苦しさを、一人が問ひ、又、一人が答ふる體に作れる長歌。山上憶良（ヤマノウヘノオクラ）の作。萬葉集卷五に出づ。

ひん-きよ 貧居 【名】まづしきすまひ。わびずまひ。貧家。

ひん-ぎよ 嬪御 【名】主上の御寢に侍る宮女。

びん-きよう 閔凶 【名】『左傳の宣公十二年の條に「寡君少遭二閔凶一、不レ能レ文」とあり』父母の喪。

びん-きり 鬢切 【名】明暦以後、天和頃にかけて、女が、鬢の髮を短く切りしこと、又その髮。一代男「その頃、下坂小八かかりとて、鬢切して、たて懸に結（ユ）ふ事時花（ハヤ）りけるに」

ひん-く 貧苦 【名】まづしくして、苦しむこと、又その苦。貧困。貧窮。

ひん-く 貧窶 【名】まづしくして、衣食住の粗末なること。

ひん-ぐう 貧窮 【名】ひんきゆう（貧窮）に同じ。運歩色葉集「貧窮、ヒングウ」

びん-ぐき 鬢莖 【名】鬢の毛すぢ。〔古語〕源氏「しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき」

びん-ぐし 鬢櫛 【名】鬢を搔き上ぐるに用ふる櫛。多くは黄楊（ツゲ）・梅などの材にて、横に長く齒を粗く作りたるを用ふ。「鬢の櫛」參照。

ひんく-てう 貧苦鳥 【名】かんくてう（寒苦鳥）に同じ。虚栗「貧苦鳥明日（アス）餅搗からとぞ鳴きける」

ひん-くわ 貧果 【名】〔佛〕ひんぽう（貧報）に同じ。（福果に對して）海道記「もし、それ、過去の業因（ゴフイン）を植ゑずして、現在の貧果を得たるか」

ひん-くわ 蘋科 【名】〔植〕でんじさうくわ（蘋科）に同じ。

びん-くわい 敏快 【名】すばやきこと。敏捷。

びん-くわつ 敏活 【名】才能の、敏捷にして、よくはたらくこと。敏慧。

ひん-けい 牝雞 【名】めすのにはとり。めんどり。

牝雞晨（アシタ）す 【句】『書經の牧誓篇に「牝雞之晨、惟家之索也」とあるに本づく』一家内にて、婦人の勢を振ふは、災の基なり。〔諺語〕太平記「牝雞晨するは、家の盡くる相なりと、古賢の云ひし言葉の末」

牝雞、晨（アシタ）を司る 【句】前條に同じ。〔諺語〕

牝雞、晨（アシタ）を作る 【句】前條に同じ。〔諺語〕持統天皇歌軍法「后ばかりを立ておいて、天下、何とて治まるべき。牝雞、晨を作るとかや」

びん-けい 敏慧 【名】かしこきこと。悧口。慧敏。

ひん-けつ 貧血 【名】〔醫〕强度の出血・惡液質・腸寄生蟲・慢性化膿症・黴毒・營養不良等のために、血液中のヘモグロビンの量減じ、身體の營養に適せぬに至る病。皮膚と粘膜との蒼白色、動悸・耳鳴・頭痛・眩暈・矇氣・嘔吐、脈膊及び呼吸の頻數（ヒンサク）などを招き、又、屢ば浮腫をも來す。

ひんけつ-しつ 貧血質 【名】貧血なる體質。貧血のたち。ひんけつしやう。

ひんけつ-しやう 貧血性 【名】前條に同じ。

ひん-こ 牝虎 【名】めすの虎。

牝虎、子を含む 【句】「老牛（ラウギウ）、犢を舐り、牝虎、子を含む」を見よ。〔諺語〕

ひん-こ 秉炬 【名】あこ（下火）に同じ。〔禪宗の語〕

びんご 備後 【名】㊀〔地〕山陽道八國の一。尾道（ヲノミチ）市及び御調（ミツギ）・世羅（セラ）・沼隈（ヌマクマ）・深安・蘆品（アシナ）・神石（ジンセキ）・甲奴（カフヌ）・雙三（フタミ）・比婆（ヒバ）の九郡に分れ、全國、廣島縣の管轄に屬す。㊁びんごおもて（備後表）の略。

ひん-こう 貧貢 【名】朝貢を納ることの謙稱。

ひんごう-たい 平江帶 【名】ひごたい（平江帶）㊁に同じ。太平記「紫藤の屈曲せる枝ごとに、高く平江帶を掛けて」

びんご-おもて 備後表 【名】疊表の、備後地方より產するもの。疊表中、最上なるものとして貴重せられ、特に沼隈（ヌマクマ）郡山南（サンナ）村の產を最とす。丸藺（マルキ）の莖を泥中に漬けて乾し、多くは麻苧を經（タテ）絲として織る。びんご。

びんご-がすり 備後絣 【名】備後國御調（ミツギ）郡因島（インノシマ）・賀茂郡內海（ウツミ）町及び蘆品（アシナ）郡より產する、木綿織の絣。內海地方の製品は、內海絣とも稱す。

ひん-こく 貧國 【名】㊀まづしき國。㊁我が治め居る國の謙稱。

びんご-さぶらう 備後三郎 【名】〔人〕こじまたかのり（兒島高德）の異稱。

びんご-じま 備後縞 【名】備後國深安郡等より產する、木綿織の縞物。福山縞。

ぴんこ-しやんこ 【貌】ぴんしやんに同じ。〔俚語〕

びんご-なだ 備後灘 【名】〔地〕瀨戶內海の一部。備後・伊豫兩國の間の邊。東は、鹽飽（シアク）瀨戶によりて播磨灘に、西は、三原・來島（クルシマ）の兩瀨戶によりて安藝灘に通ず。西南部は、特に燧（ヒウチ）灘と呼ぶ。

びんご-にふだう 備後入道 【名】『出雲國の西方は備後國なるよりいふ』西天にあらはるる入道雲。〔出雲國の方言〕

びんご-まさいへ 備後正家 【名】〔人〕刀工。備後國三原の人。始祖は、天平年間の人。德治年間（一說に、正和年間）の人なる中興の祖を第一世とし、以下、第二世・第三世・第四世等、皆、正家を名とす。

第四世は應永年間の人なり。

ひん-こん 貧困【名】まづしく困しきこと。困窮。貧苦。

びんご-もの 備後物【名】備後國の刀工なる三原及び法華一乘の一門等の鍛へたる業物。

びん-ざいく 瓶細工・罎細工・壜細工【名】圓形又は角形の硝子瓶の中に、材料を插入し、その中にて、ピンセットを用ひて、造花・摘(ツマミ)細工・縢絲(カガリイト)細工などを組み立て作り上ぐる手藝。

ひん-さう 貧相【名】貧乏の運命を具へてあるらしき人相。（福相に對して）

ひん-さう 品藻【名】『品位と文藻との等級を定むる義』しなさだめ。品評。

びん-さう 鬢霜【名】『蘇軾の詩に「鬢霜未レ易レ掃、眉斧親自誇」とあり』鬢に白髮生じたるを、霜に譬へていふ語。鬢の霜。

ひん-さく 頻數【名】一定の時間内に、普通より、回數の多く重なること。頻繁。「呼吸頻數」

(らさざんび)

びん-ざさら 編木・編木子・拍板【名】『柏板の字は、支那傳來の柏板(ハクバン)に似たるより、この語にも充用するに至れるなり』田樂法師などの用ひし、一種の樂器。長さ約五寸、幅約二寸にて、疊みたる扇のごとき形の薄き板を、數十枚合はせ、絲にて一端を綴ぢ、他端は遊離せしめ、兩手にて引張り、相打ちて鳴ししもの。

編木子の祭【句】昔、三月十七日と六月十五日とに、江戸淺草觀音の三社權現にて、神輿を本堂に遷座し、編木子にて調子を取りつつ田樂を奏せし祭。

びん-さし 鬢插【名】婦人の純日本式結髮に、鬢を張り出だすため、中に籠むる具。鯨鬚(クヂラヒゲ)又は細き鐵などを撓めて、鍋鉉(ナベヅル)の如き形に作りたるもの。びんはり。**つとあげ**(髱上)參照。浮世風呂「鬢插を入れはじめた事は、近頃のやうに存じました。その前は……、みんな、摘髷(ツマミタボ)でございました」

びん-さつ 憫察【名】㊀あはれみ思ひやること。㊁上立つ人の、下を思ひやることの敬稱。

びん-ざん 岷山・岐山・汶山【名】〔地〕支那の四川省と甘肅省との境なる山脈の總稱。

ひん-し 貧士【名】㊀貧乏なる人士。㊁貧乏なる武士。

ひん-し 賓師【名】大名より客分として、待遇せらるる者。

ひん-し 品詞【名】〔語〕『英Parts of speech』單語を、その性質又は職掌によりて分類せるもの。即ち名詞・代名詞・形容詞・動詞・接續詞など。**はっぴんし**(八品詞)參照。

ひん-し 瀕死【名】死期の迫れること。死にかかること。「瀕死の狀態」

ひん-じ 貧兒【名】貧家の兒童。

ひん-じ 品字【名】物の、三つ、品の字の形のやうに並べること。しなもじ。

ひん-じ 賓辭【名】㊀〔語〕立言又は命題の主題に就きて、その意味を言ひ表はす語。㊁〔哲〕『英Predicate』論理學上、判斷の敍說的部分を表示する語。例へば、「山高し」、「人は動物なり」の「高し」「動物」の類。客語。敍語。（主辭・繋辭に對して）

びん-し 鬢絲【名】年老いて、まばらになりたる鬢の毛。

鬢絲・茶烟(サエン)の感【句】『支那唐の杜牧の題二禪院一詩に「觥船一棹百分空、十歲青春不レ負レ公、今日鬢絲禪榻畔、茶烟輕颺落花風」とあるに本づく』年若き間を豪遊に耽りて過しし人の、老後、淡泊なる生活の中に晩年を樂しむ感。

鬢絲・禪榻(ゼンタフ)【句】前條に同じ。

ひんじ-かやつり 品字莎草【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する草。高さ四五寸。花莖の頂に、小さき球狀の穗、三箇、品字形をなして集まる。水田の附近に多し。ぬかぼしさう。ひんじくぐ。みつぼしがや。

ひんじ-くぐ 品字莎草【名】〔植〕前條に同じ。

ひんじ-ざ 品字坐【名】**ひんじ**(品字)を見よ。**いざ**(鼎坐)に同じ。

ひん-しつ 品質【名】物の性質。しながら。たち。もちまへ。

ひんし-へん 品詞篇【名】文法書の中にて、品詞の構造・變化・用法を說明する部分。普通、音韻篇の次、文章篇の前に置く。

ひん-じん 貧人【名】**ひんじや**(貧者)に同じ。

ひんじ-も 品字藻・品藻【名】〔植〕浮萍(ウキクサ)科に屬する多年生の草。池澤・溝渠等の淡水に生じ、水面に浮出す。體は葉狀にして扁く、品字形に結合すること多く、根は一箇づつ單生し、七八月頃開花す。

ひん-じや 貧者【名】まづしき人。貧乏人。貧人。

〃貧者の一燈【句】「長者の萬燈よりも貧者の一燈」に同じ。〔諺語〕

貧者・有德(ウトク)者・苦者・樂者【句】世の中には、千差萬別の人の居る形容。〔諺語〕

貧者の夕張(ユフハリ)より長者の朝起【句】貧者は、徒らに夜遲くまで寢ねず、長者は、却って心掛よく早起す。〔諺語〕

ひん-しやう 嬪嬙【名】こしもと。侍女。

びん-じやう 便狀【名】**びんしよ**(便書)に同じ。

ひん-じやく 貧弱【名】㊀『史記の周本紀に「發二鉅橋之粟一、以賑二貧弱萌隷一」とあり』貧乏にして弱きこと。㊁『英Poor』見すぼらしきこと。見劣(ミオトリ)のすること。

ぴん-しやん【貌】はねあがり、反(ソ)りかへりなど、活潑に動くさま。ぴんぴん。ぴんこしやんこ。

ひん-しゆ 品種【名】㊀たぐひ。種類。㊁〔生〕『英Race』**へんしゆ**(變種)に同じ。

びん-しゆ 瓶酒【名】土瓶に入れて、茶のやうに裝ひて飮む酒。般若湯(ハンニヤタウ)。〔僧侶の語〕

ひん-じゆう 賓從【名】**ひんぷく**(賓服)に同じ。

ひん-しゆく 顰蹙・嚬顣【名】眉をひそめてうれふること。顏をしかむること。

ひん-しゆつ 擯出【名】**ひんせき**(擯斥)に同じ。盛衰記「一門に擯出せられて」

ひん-しゆつ 頻出【名】**ひんぱつ**(頻發)に同じ。「事故頻出す」

びん-しよ 便書【名】たよりの書狀。てがみ。便狀(ビンジヤウ)。

びん-しよ 便所・鬢所【名】室町時代に、貴族の家にて、鬢髮を理め、衣服を著けなどするに充てし所。便宜所(ビンギシヨ)。

便所の禁【句】**めしこめ**(召籠)㊁を見よ。

ぴん-しよ【名】『米一升にて情を賣る義。**ぴん**㊀參照。一說に、びんしよにて、便船の訛なりともいふ』明治維新前、大阪にて、小舟を乘りまはして、船人に淫を賣りし女。初、南堀江六丁目にありしより、六丁目ともいふ。

びん-じよう 便乘【名】船などに、便宜を以て乘り込むこと。

ひん-しよせい 貧書生【名】貧困なる書生。貧生。寒生。窮措大。

ひんし-るゐ 貧齒類【名】〔動〕哺乳動物の一目。齒は、全く缺くか、又は具ふるも、多くは臼齒のみにて、發育不完全、琺瑯質を被らず、又、決して更齒せず、概ね長き舌を有す。體は骨甲又は角鱗にて被はれ、指趾に長大なる銳き鉤爪を具へ、樹木に攀ぢ、或は地を穿つに便す。性愚鈍にして、昆蟲を食するものと、植物質を食するものとあり。穿山甲(センザンカフ)・蟻食(アリクヒ)・樹懶(ナマケモノ)など、これに屬す。

ひん-す 瀕す【動他變自】迫る。近づく。「死に瀕す」「危機に瀕す」

ひん-す 殯す【動佐變他】かりもがりす。

ひん-ずり 蘩蔞【名】〔植〕**はこべら**(蘩蔞)を云ふ。〔丹波國の方言〕

びん-ずゐ【名】〔動〕**きひばり**(木雲雀)に同じ。

ひんすゐけつ-しやう 貧水血症【名】〔醫〕廣き面積に亙る火傷などのために、血液中の水分減少して發する、劇烈なる下痢病。循環機能遲鈍の結果を來す。

ひん-せい 貧生【名】**ひんしよせい**(貧書生)に同じ。

ひん-せい 品性【名】㊀人がら。人品。人格。性格。「品性高潔」「品性下劣」、㊁〔哲〕『英Character』意志の習慣確立し、常に一定の主義に基づきて行動すること。性格。「彼は品性の人なり」

ひん-せい 稟性・禀性【名】天より稟（ウ）けたる性質。うまれつき。天性。天稟。稟賦。「に同じ。

ひん-せい 稟請・禀請【名】しんせい（申請）

ひん-せう 顰笑・嚬笑【名】顔をしかむると、笑ふと。悲と喜と。「ふこと。

びん-せう 憫笑・閔笑【名】あはれみて笑

ひん-せき 擯斥【名】しりぞくること。のけものにすること。擯却。擯棄。擯出。

びん-せき 珉石【名】玉に次ぐ美石。

びん-ぜつ 泯絶【名】ほろびたゆること。泯滅。

ぴんせっと（佛 Pincette）【名】小き物を挾むに用ふる器具。長さ三寸ほどにて、一端薄く扁き金屬棒二本を、他の一端にて固定し、毛拔のごとき形にせるもの。

ひん-せふ 嬪妾【名】貴人のそばめ。

びん-せふ 敏捷【名】すばやきこと。敏活。敏快。

ひん-せん 貧賤【名】まづしくして、身分低きこと。（富貴に對して）

貧賤なれば、親戚も離る【句】『曹攄の感舊詩に「富貴他人合、貧賤親戚離」とあるに本づく』人情の輕薄なる形容。〔諺語〕

貧賤の交（マジハリ）は忘るべからず【句】『「糟糠（サウカウ）の妻は堂より下さず」を見よ』貧賤の時の交友は、一生忘れがたし。〔諺語〕

貧賤も移す能はず【句】『孟子の滕文公下篇の語に本づく』いかに貧賤の身になりても、志を變ぜず。「に同じ。

びん-せん 便箋【名】しよかんせん（書簡箋）

びん-せん 便船【名】便乘すべき船、又それに乘ること。盛衰記「千尋の底に沈みなばやと思ひつつ、艐船（コブネ）に便船して」

びん-せん 緡錢【名】㊀緡（サシ）にとほしたる錢。㊁孔のある錢。

びん-ぜん 憫然・愍然【貌】あはれむべきさま。かはゆさうなるさま。

びんせん-しふ 便船集【名】〔書〕俳諧の附合（ツケアヒ）に用ふる材料を、いろは別に記したるもの。七册。高瀬梅盛の著。

ひん-そ 貧素【名】せきひん（赤貧）に同じ。

ひん-そう 貧僧【名】貧乏なる僧。

貧僧の重齋（カサネドキ）【句】不如意なる者の、一度に多くの物を得る譬。〔諺語〕

びん-そぎ 鬢削・鬢除・鬢曾木【名】古、女子、十六歳にして、鬢の毛を剪りし儀式。男子の元服の類。六月十六日に行ひ、その夜、百味を臺に盛りて、月に供へ、中央に大饅頭一箇を置き、女子、その饅頭の中央に、箸にて孔を穿ち、孔の中より月を覗ふ作法あるより、月見とも呼べり。かみそぎ。**びんおや**（鬢親）參照。御湯殿上日記「上らう、鬢削にて、五色二か、御てんしんまゐる」

ひん-そく 秉燭【名】『漢字の宋音』燈火を用ふる頃。日暮。東鑑「及二秉燭一」

びん-そく 敏速【名】すばやきこと。はやきこと。敏快。

ひんそく-るゐ 貧足類【名】〔動〕**まうそくるゐ**（毛足類）を見よ。

ひん-そん 貧村【名】貧乏なる村。寒村。

ぴん-ぞろ 一揃【名】『**ぴん**㊀を見よ』㊀博奕にて、二つの采（サイ）の、共に一の數の出づること。㊁單衣を、二枚重ねて著ること。ひとへものの重著（カサネギ）。〔俚語〕

びんた【名】**かうべ**（頭）を云ふ。〔薩摩國鹿兒島の方言〕。

ひんたあ-らんど（英 Hinterland）【名】㊀背後の土地。㊁占領地の背後に位せる、未占領の土地。

ひんたあらんど-しゆぎ ヒンタアランド主義【名】〔法〕國際法上、占領地の先占の効果は、その背後に位せる未占領地にも及ぶとなす主義。

ひん-たい 品胎【名】〔醫〕『獨 Drilling』三子（ミツゴ）㊀を孕むこと。

ひん-だい 品題【名】しなさだめ。品評。品藻。「臺。

びん-だい 鬢臺【名】鬢道具を載せおく

ひん-だう 貧道【代】『釋氏要覽に「我寡二少此道一、故曰二貧道一」、又、石林燕語に「晉宋間佛敎初行、未レ有二僧稱一。通曰二道人一、自稱則曰二貧道一」とあり。**しやもん**（沙門）㊀參照』僧侶の第一人稱の謙稱。小道。拙僧。

びん-だうぐ 鬢道具【名】櫛・笄など、すべて頭髮を結ひ又は飾るに用ふる物。

ひん-だかへる 引抱へる【動下一他】**ひんだく**（引抱く）に同じ。一谷嫩軍記「邪魔しやんなと駈けゆくを、ひんだかへ」俗曲（八重霞浪花濱荻）「風呂敷包をひんだかへ」

ひん-たく 貧宅【名】**ひんか**（貧家）に同じ。謠曲（千引）「彼の貧宅を富貴の家に、建石宿（タテイシヤド）の榮ゆる事も」

ひん-だく 引抱く【動四他】『**ひん**（引）は接頭語』**だく**（抱く）を強めていふ語。一谷嫩軍記「小次郎を、無理に引き立て、小脇にひん抱き」

びん-だたら 鬢多多良【名】今樣風の謠物の一。豐明節會（トヨノアカリノセチヱ）の五節（ゴセチ）の帳臺の試ある時、后町（キサイマチ）の廊にて謠ひしもの。平安朝時代に、舞姬を宮中に獻じたる尾張守某が、髮の毛薄く、鬢落ちて、後向にて步むさまの愛敬づきたるにより、殿上人等の作りしものの由、今昔物語に見ゆ。建武年中行事「帳臺におはします程、亂舞あり。びんだたらなど謠ふ」

ひんだ-の-をどり 日田踊・飛驒踊【名】『**ひんだ**は、**ひだ**（日田）の音便にて、出雲於國（イヅモノオクニ）の歌舞伎の詞にも見え、出雲國の地名なりといふ。一説に、飛驒なりと』寛永の頃行はれし、一種の踊。松の葉「舟の中には……ひんだの踊を一をどり」

びん-たぼ 鬢髱【名】〔植〕**おきなぐさ**（翁草）㊀に同じ。「ふる、小さき盥。

びん-だらひ 鬢盥【名】鬢水を盛るに用

ひんだ-をどり 日田踊・飛驒踊【名】**ひんだのをどり**（日田踊）に同じ。

ひん-ち 品致【名】おもむき。がら。ひん。

ひん-ち 貧地【名】貧弱なる地内（チナイ）。新永代藏「上京（カミギヤウ）の、さる貧地の寺の住持」

ひん-ちや 品茶【名】㊀茶を品評すること。㊁數種の茶を飲み分けて、その品質を言ひ當つるを勝とする遊戲。

びん-ちやう 鬢長【名】〔動〕**びんなが**（鬢長）を云ふ。〔東京地方の語〕「炭）の略。

びん-ちやう 備長【名】**びんちやうずみ**（備長

びんちやう-がま 備長窯【名】『元祿中、紀伊國田邊の人備後屋長右衞門の創案なりといふ』備長炭を製する石の窯。形、ほぼ土佐窯と同じく、ただ、煙出の、長方形にして、下底八寸四方、上底二寸、口六寸なるを異なりとす。熊野窯。

びんちやう-ずみ 備長炭【名】姥女樫（ウバメガシ）を備長窯にて燒きたる、良質の木炭。火勢強く、火持よし。紀伊國熊野地方の產、最も名あり。熊野炭。

ひんちや-くわい 品茶會【名】人人相集まりて、品茶㊁をする會。「よ。貧婦。

ひん-ぢよ 貧女【名】貧乏なる女。ひんに

びん-つき 鬢付【名】鬢のすがた。鬢の格好。一代男「一つ脇差して、鬢つき厚く」

びん-つけ 鬢附【名】次條の略。置土產「六十に過ぎて、鬢付たしなみ」

びんつけ-あぶら 鬢附油【名】煉油の一種。蠟と胡麻油とを固く煉り、香料を加へたるもの。頭髮のそそけを防ぐに用ふ。かたあぶら。びんつけ。

びんつけ-いれ 鬢附入【名】**びんみづいれ**（鬢水入）に同じ。

びんつけ-かづら 鬢附葛【名】〔植〕**さねかづら**（南五味子）㊀を云ふ。〔筑前國の方言〕

びん-づめ 瓶詰・罎詰・壜詰【名】瓶に詰むること、又その詰めたる物。

びん-づら 鬢頰【名】**みづら**（角髮）の轉。〔古語〕狹衣「びんづら結（ユ）ひて、いとをかしきわらは」增鏡「いと小き御程に、びんづら結ひて」

びんづる 賓頭盧（梵 Pindola）【名】〔人〕『具さには Pindola Bhāradvāja（賓頭盧頗羅墮）。賓頭盧（不動の義）は字、頗羅墮（捷疾・利根・重瞳などの義）は姓』十六羅漢の第一。婆羅門族の出。白髮・長眉にして、佛勅を受けて涅槃（ネハン）に入らず、恒に南天竺の摩利支山に住して、滅後の衆生のために大福田となるといふ。今、和漢の諸寺にて、その像を安置して飲食を供す

るは、晉の道安法師、その夢の告を受けしに始まるといふ。邦俗、その像を摩でて疾病の快癒を祈る迷信あり。

びんづる-そんじや 賓頭盧尊者【名】〔佛〕前條の敬稱。

びんづる-はらだ 賓頭盧頗羅墮【名】〔佛〕びんづる(賓頭盧)に同じ。

びん-てう 頻鳥【名】びんがてう(頻迦鳥)の略。盛衰記「頻鳥の音(コヱ)和(ヤハラカ)に、仙女の袖妙(タヘ)なりければ」

びん-てき 貧的【名】びんぼふ(貧乏)に同じ。〔俚語〕

びん-てん 旻天【名】㊀『書經の大禹謨篇に「日號二泣于旻天一于父母一」とあり』秋のそら。㊁『爾雅の釋天に「秋爲二旻天一」とあり』上天。

ひんと(英 Hint)【名】仄めかし知らすること。暗示。諷示。

ひん-ど 貧土【名】財貨の乏しき地。

ぴんと(蘭 Punt の訛か)【名】寫眞のレンズの焦點。「ピントを合はす」

ひん-とう 品等【名】しながら。品位。

ひんどう-ずり ひんどう摺【名】馬具の力革(チカラガハ)の先端の、圓き部分。

ぴんと-がらす ピント硝子【名】次條に同じ。

ぴんと-ぐらす ピント硝子【名】寫眞機械の暗箱(アンバコ)の後方、レンズの前方にある摺硝子。撮影の際は、これを取除きて、種板を插入す。焦點板。

ぴんとこ【名】芝居にて、唐人に扮するに用ふる襟袈裟(エリゲサ)。よだれかけ。

ぴんとこな【名】芝居にて、和事(ワゴト)の一種。強みを持ちたる役柄。「天網島(テンノアミジマ)」に於ける紙屋治兵衞、「伊勢音頭」に於ける福岡貢など。

ひんど-けう 溫都敎【名】いんどけう(印度敎)に同じ。

ひんどすたん(英 Hindostan 又 Hindustan)【名】〔地〕いんど(印度)に同じ。

びん-なが 鬢長【名】〔動〕ひれなが(鰭長)に同じ。

ひん-なぐる 引擲る【動四他】㊀『ひん(引)は接頭語』なぐる(擲る)を強めていふ語。㊁しばる。捕縛す。〔俚語〕

びん-なご【名】〔動〕びんなが(鬢長)の轉訛。

びん-なし 便無し【形二】㊀たよりわろし。都合わろし。不都合なり。びなし。源氏「人目しげからん所に、びんなき振舞やあらはれん」㊁氣の毒なり。いたはし。心ぐるし。びなし。落窪「殿をば、びんなしとも思ひきこえざりしかども」

ひん-ならべる 引並べる【動下一他】『ひん(引)は接頭語』ならぶ(並ぶ)を強めていふ語。

ひん-なり【貌】しんなりの轉訛。膝栗毛「ひんなりとして色男」

ひん-なる【動四自】おひんなる(御晝成る)を見よ。

ひん-にぎる 引握る【動四他】ひきにぎる(引握る)の音便。

ひん-によ 貧女【名】ひんぢよ(貧女)に同じ。孕常盤「貧女が一錢」

貧女が一錢【句】次條に同じ。〔諺語〕

貧女が一燈【句】次條に同じ。〔諺語〕盛衰記「貧女が一燈とかやも斯くこそと覺え候ふ」

貧女の一燈、長者の萬燈【句】「長者の萬燈よりも貧者の一燈」に同じ。〔諺語〕

ひん-ぬき 引拔【名】ひきぬき(引拔)の音便。

ひん-ぬく 引拔く【動四他】ひきぬく(引拔く)の音便。出世景淸「小屋の小柱ひん拔いて」

ひん-ねぢる 引捩ぢる【動上一他】ひきねぢる(引捩ぢる)の音便。世間娘氣質「この文(フミ)一つ持って行けと、さらさらと書いてひんねぢ、用人に渡せば」

ひん-ねん 頻年【名】としどし。比年。累年。

びん-の-くし 鬢の櫛【句】びん(鬢)の條下を見よ。

ひん-ば 牝馬【名】めすの馬。めうま。

びん-ばうし 鬢帽子【名】烏帽子の兩側に布を垂れて、鬢のあたりまで覆ふやうにしたるもの。太平記「鬢帽子したる雲客、うちほほゑみて」

びんば-くわ 頻婆果(頻婆は梵 Bimba)【名】頻婆といふ樹の果實。皮の色赤くして、林檎の實に似、色は鬱金色を呈すといふ。榮花「靑蓮華(シヤウレンゲ)の御眼(マナコ)は、四大海を湛へ、御脣は、頻婆果のごとし」

頻婆果の脣(クチビル)【句】〔佛〕頻婆果のごとく色赤き脣。八十種好(ハチジフシユコウ)の一。丹果の脣。果脣。

びん-はさみ 鬢挾【名】鬢の毛を挾み留めて、そのそそけを防ぐ具。髱留(タボドメ)と同樣にて、小きもの。

びんばしやら 頻婆娑羅(梵 Bimbisāra)【名】〔人〕古代印度の摩揭陀(マカダ)國シスナアガ(Sisunāga)王朝第五代の王。釋迦と同日に生れたりといふ。王舍城に居る。釋迦佛敎を崇信し、竹園に精舍(シヤウジヤ)を建て、釋迦を請じて、衆を敎化せしむ。晩年、太子阿闍世(アジヤセ)のために、幽閉せられて餓死す。正妃は波斯匿(ハシノク)王の妹、又、別に韋提希夫人(ヰダイケブニン)あり。謠曲 仲光「阿陀世太子は、頻婆娑羅を害せずや」

びんばしやら-わう 頻婆娑羅王【名】〔人〕前條を見よ。盛衰記「昔、天竺に、摩訶陀國の大王頻婆娑羅王の、太子阿闍世(アジヤセ)に禁ぜられたまひしに」

ひん-ぱつ 頻發【名】事の、頻(シキリ)に起ること。頻出。

びん-ぱつ 鬢髮【名】鬢の毛。びんまう。

鬢髮を落す【名】「髮(カミ)を落す」に同じ。盛衰記「十善の鬢髮を落し、九品の蓮臺を志したまふ」

ひん-ばふ 引奪ふ【動四他】『引(ヒキ)奪(バウ)ふの略訛。ばふ(奪ふ)參照』ひったくる(引ったくる)に同じ。舞の本(富樫)「白柄(シラエ)の長刀(ナギナタ)引ん奪(バ)うて、飛んで懸らんずる若者どもを、一一に追っ拂ひ」

ひん-ぱん 頻繁【名】事の、繁く度度なること。しばしばなること。頻數(ヒンサク)。

ひん-ぱん 蘋蘩【名】次條を見よ。東鑑「致二蘋蘩禮奠一」

蘋蘩・薀藻(ウンサウ)【句】蘋(ウキクサ)と蘩(シロヨモギ)と薀(水草)と藻(モ)と。何れも、古來、支那にて淸淨なる物として、死者を祭る時に捧げ供へ、我邦にても、往往、これに倣ふ。太平記「金銀幣帛の奠、蘋蘩薀藻の禮」

びん-はり 鬢張【名】びんさし(鬢插)に同じ。野良の玉子「大通(タイツウ)、直うして、髮(ハツ)の如く、野暮曲って、鬢張の如し」

びんび【貌】ばっぱに同じ。冥途飛脚「鼻紙、びんびと遣ふ者は、曲者(クセモノ)ぢゃ」

びん-ぴ 閔妃【名】〔人〕朝鮮李太王の妃。閔氏の一族閔義祿の女。權略に長じ、大院君の政を專にするを喜ばず、これを斥けて、王をして親ら國政を執らしめ、露國の勢力に依賴して、日本を排斥せしより、大院君、我が公使三浦梧樓と謀り、明治二十八年、宮中に入りて閔族を斥け、改革を斷行せし時、亂民のために殺害せらる。

びんび-ぐるま びんび車【名】かたぐるま(肩車)を云ふ。〔關西の方言〕

びん-ひげ 鬢鬚【名】びんと、ひげと。宇治「鬢鬚に白髮まじりたるが」

びん-ひま 便隙【名】都合よきすきま。好機會。謠曲(伏木曾我)「敵の祐經に逢はばやと、便隙を待つ所に」

ひん-ひん【貌】ぴんぴん㊀に同じ。大藏流狂言(文山だち)「黑黑に、ひんひんとはねて書くは」

ひん-ひん【感】馬の嘶く聲。ひいひい。

ひん-ぴん 頻頻【貌】物事の、頻(シキリ)に發生するさま。

ひん-ぴん 彬彬・斌斌【貌】文・質ともに備はりて盛んなるさま。

ぴん-ぴん【貌】㊀跳ぬるさま。㊁活氣あるさま。いきいき。㊂疼痛のはげしく起るさま。

ぴんぴん-かづら ぴんぴん葛【名】〔植〕つづらふぢ(葛藤)に同じ。

ぴんぴん-ぐさ ぴんぴん草【名】〔植〕ぺんぺんぐさ(ぺんぺん草)に同じ。

ひん-びやう 貧病【名】㊀貧しきことと、病むことと、又、貧しき者と、病める者と。沙石集「貧病・孤獨の悲田にも施さず」㊁「貧(ヒン)の病」に同じ。

ひん-ぴやう 品評【名】しなさだめ。批評。品藻。品題。

ひんぴやう-くわい 品評會【名】しなさだめの會。

ひん-ぷ 貧婦【名】ひんぢよ(貧女)に同じ。

ひん-ぷ 貧富【名】まづしきと、とみたると。貧者と富者と。徒然「貧富分く所なし」

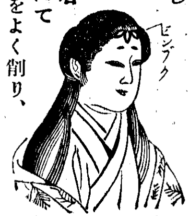
ひん-ぷ 稟賦・禀賦【名】ひんせい(稟性)に同じ。

びん-ぷう　便風【名】㊀じゆんぷう（順風）に同じ。㊁びんぎ（便宜）に同じ。東鑑「時ニ彼便風ニ、被ㇾ獻ニ御歌於七條院並修明門院等ニ」

ひん-ぷく　貧福【名】貧乏と裕福と。貧富。續猿蓑（山蜂）「貧福の誠を知るや涅槃像」八笑人「賢愚・貧福、おしなべて」

ひん-ぷく　賓服【名】外國人の來朝して服從すること。賓從。

びん-ぶく　鬢幅【名】『鬢の毛を服（クフ）らまする義なるべしといふ』㊀中古の公卿の童形（ドウギヤウ）の時の髪の結ひ方。解櫛にて髪を解きまはして、平笄にて分目（ワケメ）の筋より項（ウナジ）を分け下し、まづ、右方の髪を紙撚にて結び、左方の髪をよく削り、裾の方をよく解き下したる後、耳の後方の髪を、耳の後の隱るるほどに脹らませしもの。㊁近世の公卿の男女の、額の上部に、義髪にて、輪のごとき物二つ三つを作り附けて飾とせしもの。



（㊀ びんぶく）

ひん-ぶつ　品物【名】種種の物。萬物。

ひん-ぷん　繽紛【貌】花・雪などの入りまじり亂るるさま。

びん-べん　黽勉【名】黽（ト）め勉むること。出精。勉强。

ひん-ぼ　牝牡【名】獸類のめすと、をすと。

びん-ぼ　貧乏【名】びんぼふ（貧乏）の訛。

ひん-ぽう　貧報【名】〔佛〕薄命の果報。貧果。（福報に對して）發心集「貧報の冠者」

びん-ぼ-がき　貧乏柿【名】びんぼふがき（貧乏柿）の訛。

びん-ぼ-かづら　貧乏葛【名】〔植〕びんぼふかづら（貧乏葛）の訛。

ひん-ぼつ　秉拂【名】〔佛〕『漢字の宋音』禪寺にて、上位の役僧の、住持に代りて、拂子を秉（ト）り、法座に上り、法を說きて、衆に開示すること、又その儀式。きのふはけふの物語「ひんぼつに、西國の僧、東國の僧に問うて曰く」

秉拂の五頭首（ゴチウシユ）【句】〔佛〕『てうしゆ（頭首）を見よ』禪寺にて、秉拂の資格ある五種の役僧、即ち前堂首座（ゼンダウシユソ）・後堂首座（ゴダウシユソ）・東藏主（トウザウス）・西藏主（セイザウス）・書記。

ひんぼつ-じしや　秉佛侍者【名】〔佛〕禪寺にて、秉拂を爲す者に拂子を捧ぐる侍者。聖僧（シヤウソウ）侍者、これに任じ、方丈侍者の下位に立つ。

びんぼ-づる　貧乏蔓【名】〔植〕びんぼふづる（貧乏蔓）の訛。

びん-ぼふ　貧乏【名】まづしくして、物に乏（トボ）しきこと。貧困。貧窮。貧（ヒン）。困乏。

貧乏、子澤山（コダクサン）【名】「貧乏人の子澤山」に同じ。〔諺語〕

貧乏、怖（コハ）い者無し【名】貧乏なれば、盜賊などの恐、少しも無し。〔諺語〕

貧乏する程、樂（ラク）をする【句】貧乏なれば、交際上などの面倒少く、却って氣樂なり。ひんらく（貧樂）參照。〔諺語〕

貧乏な鳥は、盆に霍亂（クワクラン）をする【句】『運のわるき鳥は、墓場に供物の多き盂蘭盆（ウラボン）に病みて、これを食ふことを得ざる意』不運にして、利益を目前に見ながら、これを得る能はざる譬。〔諺語〕

貧乏に棒無し【句】『乏と棒と、國音相通ずるによりて、洒落ていふ』貧乏にして、振廻（フリマハシ）が附かず。〔諺語〕

貧乏は達者の基【句】貧乏人は、働かざるを得ざるに因りて、自ら强健になる。〔諺語〕

貧乏、花好（ハナズキ）【句】「貧の花好」に同じ。〔諺語〕

貧乏、暇（ヒマ）なし【句】『貧と暇と、頭韻を成す』生計を立つるに汲汲として、閑暇を得ず。〔諺語〕

びんぼふ-がき　貧乏柿【名】㊀小くして味わるき柿の實。㊁〔植〕しなのがき（信濃柿）に同じ。

貧乏柿の核（サネ）澤山【句】『「貧乏人の子澤山」をもぢりていへるなるべし』前條㊀の形容。〔諺語〕

びんぼふ-かづら　貧乏葛【名】〔植〕やぶからし（藪枯）に同じ。

びんぼふ-がみ　貧乏神【名】㊀人を貧乏ならしむといふ神。窮鬼。（福の神に對して）世間長者形氣「貧乏神……澁團扇を持って」一茶「わが宿の貧乏神も御供せよ」㊁じふりやうとり（十兩取）を見よ。

貧乏神の定宿（チヤウヤド）【句】常に貧乏なる家の形容。

貧乏神の澁團扇（シブウチハ）【句】繪畫にて、貧乏神の持てる物として描く習なる澁團扇。

びんぼふ-くじ　貧乏鬮【名】㊀最も不利益なるくじ。㊁多くの人の中にて、最も不幸・不利益なる位置に立つ運命の譬。

貧乏鬮を取る【句】次條に同じ。醒睡笑「衆僧、皆上戸なり。明朝の座敷、はれがまし。大器にて銘銘控へなば見苦しからん、貧乏鬮を取らせ、せめて一人は下戸にせんは、いかん」

貧乏鬮を引く【句】㊀鬮引にて、貧乏鬮㊀を引き當つ。㊁多くの人の中にて、最も不幸・不利益なる位置に立つ。

びんぼふ-ぐらし　貧乏暮【名】貧乏なる生活。

びんぼふ-げい　貧乏藝【名】その職にあらざる者が耽る時は、本職をおろそかにして、次第に貧乏になる遊藝。

びんぼふ-しんしやう　貧乏身上【名】びんぼふじよたい（貧乏世帶）に同じ。

びんぼふ-しやう　貧乏性【名】金錢に不自由せぬ身にてありながら、好んで吝嗇なる生活をするうまれつき。

びんぼふ-じよたい　貧乏世帶【名】貧しき世帶。貧乏身上。

びんぼふ-せうゐ　貧乏少尉【名】軍人の少尉が、常に生活に困難すること。中尉になりても、とかく遣繰（ヤリクリ）算段をせねばならぬより、遣繰中尉といひ、大尉になれば、かつがつ生計を立て行くを得るより、やっとこ大尉の語あり。〔俚語〕

びんぼふ-ぜはし　貧乏忙し【形二】貧苦に追はれていそがし。

びんぼふ-だけ　貧乏竹【名】次條を見よ。

貧乏竹か、福竹（フクダケ）か【句】竹を鞭などに作る時、指を、順次に、一つ一つの節に當てながら唱へゆく語。福竹に當る節にて截るを、めでたしとす。

びんぼふ-だる　貧乏樽【名】貧乏德利の代りに用ふる樽。形、柳樽に似て、小く、漆を塗らず、五合若しくは一升を容る。鶉衣「貧乏樽に、唐辛（タウガラシ）を植ゑて」

びんぼふ-づる　貧乏蔓【名】〔植〕やぶからし（藪枯）に同じ。

びんぼふ-どくり　貧乏德利【名】圓筒形の上部に口をつけたる、瀬戸燒の德利。

びんぼふ-にん　貧乏人【名】貧しき人。貧乏者。貧民。貧人。貧者。

貧乏人が灰を播けば、大風が吹く【句】『田地の肥料として播きたる灰、風に吹き飛ばされて、効を奏せずとの義』貧乏人には、不運重なり易し。泣面（ナキツラ）に蜂。〔諺語〕

貧乏人の系圖話（ケイヅバナシ）【句】㊀貧乏人が、先祖の自慢をして、現在の境遇を飾らんとすること。〔諺語〕㊁徒に昔を偲ぶは愚なる譬。〔諺語〕

貧乏人の子澤山（コダクサン）【句】貧乏人には、子の生るること、富者より却って多きこと。貧乏、子澤山。「律義者（リチギモノ）の子澤山」參照。〔諺語〕

貧乏人の正月【句】『餅無しを、持無しの意に通はせていふ』所持せざるを洒落ていふ語。

貧乏人の先祖探（センゾサガシ）【句】「貧乏人の系圖話」に同じ。〔諺語〕

貧乏人の嫁入【句】『長持が無しとの意にて、道具の名なる長持を、長く持つ（保つ）意にかけていふ』長くは保たざるを洒落ていふ語。

びんぼふ-なる　貧乏馴る【動下二自】常に貧乏なるがために、貧乏を苦しと感ぜざるに至る。一茶「藪村の貧乏馴れて夕すずみ」

びんぼふ-ばなを　貧乏鼻緒【名】棕梠又は竹の皮を撚りて作りたる鼻緒。庭下駄又は水汲の下駄などに用ふ。

びんぼふ-もの　貧乏者【名】びんぼふにん（貧乏人）に同じ。

びんぼふ-ゆすり　貧乏搖【名】㊀腰を掛

け又は坐せる時に、膝の拐を、絶えず搖り動かすこと。びんぼふゆるぎ。㊁身體を、極めて少し搖り動かすこと。（下に打消の語又は反語を伴なふ）八笑人「もう、こちとらが目にかかっては、貧乏ゆすりもさせねえぞ」

びんぼふ-ゆるぎ 貧乏搖【名】前條に同じ。吾吟我集「木木の葉の落ちては陰や寒からん貧乏ゆるぎの森の白鷺」

ぴん-ぽん 卓球（英 Ping-pong）【名】テニスに似たる、一種の室内の球戲。卓上にネットを張り、セルロイド製のボオルを用ひて行ふ。卓球（タクキウ）。

びん-まう 鬢毛【名】鬢の毛。鬢髮。

ひんまう-るゐ 貧毛類【名】〔動〕環蟲類の一。體は圓筒形をなし、小剛毛の外に、附屬物を有せず、雌雄同體なるを普通とす。土又は淡水の中に產す。蚯蚓（ミミズ）・絲蚯蚓（イトミミズ）など、これに屬す。

ひん-まく 引卷く【動四自】『ひん（引）は接頭語』まく（卷く）を强めていふ語。舞の本（富樫）「勸進帳……讀み上げて、くるくると引ん卷いて、もとの笈へ投げ入れたる武藏坊が有樣」

ひん-まぐ 引曲ぐ【動下二他】ひきまぐ（引曲ぐ）の音便。

ひん-まくる 引捲る【動四他】ひきまくる（引捲る）の音便。俗曲（與話情浮名橫櫛）「尻ひん捲り、押上り、坐り込んだる權幕に」

ひん-まげる 引曲げる【動下一他】ひきまぐ（引曲ぐ）の訛。

ひん-まはす 引廻す【動四他】ひきまはす（引廻す）の音便。八笑人「まはらぬ筆を、ぶんまはしへはめて、きりりとひん廻し」

びん-みづ 鬢水【名】鬢を撫で附くるに用ふる液。德川時代には、美男葛（ビナンカヅラ）の汁を用ひたり。平治「御所へ參らんとて、鬢を搔きけるに、鬢水に面相を見れば」

びんみづ-いれ 鬢水入【名】鬢水を入るる器。

びん-みの 鬢蓑【名】『蓑はみのげ（蓑毛）の義か』女の頭髮の添毛（ソヘゲ）。すゑ。みの。

ひん-みん 貧民【名】まづしき民。

ひんみん-がくかう 貧民學校【名】貧民の子弟を教育する、特設の學校。

ひんみん-くつ 貧民窟【名】貧乏人の多く住める、一區域の土地。

ひんみん-けいさつ 貧民警察【名】〔法〕貧民を救護するための警察。例へば、貧民を强制して、勞役に就かしめ、衞生取締を嚴かにし、又、不良少年に懲治處分を行ふ類。

ひん-むしる 引毟る【他四他】ひきむしる（引毟る）の音便。

ひん-めくる 引剝る【動四他】ひきめくる（引剝る）の音便。

びん-めつ 泯滅【名】ほろび失（ウ）すること。泯絕。

ひん-もく 品目【名】物品の名目。品種の名目。

ひんもく-ばいばい 品目賣買【名】〔商〕商品の見本又は標本を提供せず、ただ通名（トホリナ）又は商品目錄にのみ依る賣買。

びん-らう 檳榔【名】㊀〔植〕棕梠科に屬する常綠喬木。高さ四丈乃至十丈に達し、直立して、枝なし。葉は梢頭に生じて、長さ三尺乃至六尺、羽狀複葉を成す。實は大さ一寸乃至一寸半ほどにて、卵形をなし、橙黃色又は深紅色を呈し、葉の間に生じて、房を成す。馬來諸島・印度及び支那南部等に生ず。實は食用又は藥用とし、材は建築用に供す。びんらうじ。びらう（檳榔）參照。㊁びんらうじぐろ（檳榔子黑）の略。㊂次條に同じ。

びんらう-じ 檳榔子【名】㊀檳榔の實。㊁〔植〕前條㊀に同じ。㊂次條の略。

びんらうじ-ぐろ 檳榔子黑【名】藍にて下染したる上を、檳榔子㊀の煎汁にて黑く染めたる色。びんらうじ。びんらう。

びんらうじ-もめん 檳榔子木綿【名】くろさんさめ（黑棧留）を云ふ。〔京都・大阪の語〕

びんらう-じゆ 檳榔樹【名】〔植〕びんらう（檳榔）㊀に同じ。

ひん-らく 貧樂【名】『「貧乏する程、樂（ラク）をする」を見よ』貧乏する時は、交際等に心を勞すること少く、結局、却って安樂なること。置土產「貧樂に世を渡らすべし」鶉衣「同じ貧樂のひきごとにいふは」

びん-らん 紊亂【名】ぶんらん（紊亂）の誤讀。

びん-らん 泯亂【名】紀綱のほろびてみだるること。

ひん-りき 貧力【名】力の貧しきこと。びりき（微力）㊀に同じ。曾我「我等、卑しき貧力にて、寶を奪はんこと、思ひも寄らず」

ひん-るゐ 品類【名】いろいろのたぐひ、又その物。品種。種類。

ひん-れい 賓禮【名】かくれい（客禮）に同じ。

ひん-れん 殯斂【名】殯（カリモガリ）をすること。

びん-ろ 便路【名】通りがかりのみち。みちついで。東鑑「以㆓便路㆒入㆓御小栗十郎重成小栗御廚八田館㆒」

びん-わん 敏腕【名】敏捷なる腕まへ。物事にすばしこく、はたらきのあること。うできき。

びんわん-か 敏腕家【名】敏腕なる人。うできき。

ひん-ゐ 品位【名】㊀しな。くらゐ。がら。品格。㊁金銀貨幣又は合金の中に含有する金又は銀の割合。「貨幣の品位」

ひん-ゐ 賓位【名】㊀客人のすわるべき位置。㊁〔語〕命題の主辭に就きて事を說述する部分。命題の敍述部。㊂〔哲〕命題の主辭に就きて立言する部分の內、繫辭を除きたる部分。その辭を賓辭といふ。㊃〔哲〕ひんじ（賓辭）に同じ。

ひん-ゐ 品彙【名】たぐひ。種類。

ひんゐ-しようめい 品位證明【名】造幣局にて、金・銀の地金の品位を檢して、これを證明すること。

ひん-ゐん 貧院【名】㊀貧乏なる寺院。貧山。貧地（ヒンチ）。㊁己が住持する寺院の謙稱。八犬傳「孤獨の貧院、老弱・男女の詣で來ること稀なるに」

ひん-をく 貧屋【名】ひんか（貧家）に同じ。

ひ-め 姬【名】㊀日女の義。我國中古の官撰の國史には、正系の皇族には姬の字、傍系その他のには媛の字を充てたるが如し。もと、姬の字は、支那三代の周室の姓なるより、婦人の美稱に轉用したるもの（漢書の文帝紀に「母曰㆓薄姬㆒」とある條の顏師古の註に「姬者本周之姓、貴㆓於衆國之女㆒、所㆓以婦人美號皆稱㆑姬焉」、又、避暑錄話に「婦人以㆑姬爲㆑稱。故周之諸女皆言㆑姬、猶㆓宋言㆑子齊言㆒㆑姜。自㆑漢以來不㆓復辨㆒㆑類、以爲㆓婦人之名㆒」とあり）、媛は、單に美女の意あるより、姬の字に、特に尊貴の意を含ましめたるものかといふ』ぢよし（女子）の美稱。（彥（ヒコ）に對して）〔媛〕㊁貴人の娘。ひめぎみ。㊂遊女。娼妓。〔京都・大阪の語〕㊃ひめいひ（姬飯）の略。〔編糅・糅〕和名「編糅、比女」枕「御衣、ひめに濡れたる」㊄ひめのり（姬糊）の略。

ひめ 姬【接頭】小く愛らしき意。「姬小松」「姬垣」「姬萩」「姬百合」

姬の神【句】女の神。男神の配偶たる神。〔比賣神・比咩神〕

ひめ 鴲【名】〔動〕しめ（鴲）に同じかるべし。和名「鴲、比米。白喙鳥也」

ひめ【名】〔動〕ひめぢの略。〔東京の語〕

ひめ-あざみ 姬薊【名】〔植〕㊀きつねあざみ（狐薊）に同じ。㊁なあざみ（菜薊）に同じ。㊂なんぶあざみ（南部薊）に同じ。㊃のあざみ（野薊）に同じ。

ひめ-あし 姬葦【名】〔植〕ひめよし（姬葭）に同じ。

ひめ-あぶ 姬虻【名】〔動〕雙翅類に屬する昆蟲。虻類の中、小形にして、最も普通なるもの。體、灰黑色にして、やや綠色を帶び、胸背に三つの縱條、腹部に數箇の斑紋あり。

ひめ-あぶらすすき 姬油薄【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。高さ二尺餘、細くして硬し。葉は狹長にして、先端尖る。秋季、莖梢に、帶紫綠色の疎なる穗を著く。各地の山野に生ず。

ひ-めい 碑銘【名】石碑に記す銘。

ひ-めい 非命【名】天命にあらざること（死ぬるにつきていふ）。非業（ヒゴフ）。「非命の最期」

ひ-めい 悲鳴【名】悲しみて鳴くこと、又その聲。

び-めい 美名【名】㊀よき名。りっぱなる名號。㊁ほまれ。令名。

び-めい 未明【名】みめい（未明）に同じ。

び-めい 微明【名】ほのかにあかるきこと。うすあかり。

ひめ-いちげさう 姬一花草【名】〔植〕毛茛（キンポウゲ）科に屬する多年生の草。高さ四

五寸、細毛を被る。葉は廣くして三裂す。夏季、總苞の中心より一花梗を抽き、その頂に、白色の小花一箇を著く。北海道以北及び本土・九州等の諸高山に生ず。

ひめ-いちごつなぎ 姫苺繋【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。高さ約二尺。葉は細くして尖り、莖にも葉にも粗毛あり。初夏、淡綠色の細き穗を著く。原野・路傍に自生す。ざらつきいちごつなぎ。

ひめ-いはかがみ 姫岩鏡【名】〔植〕岩梅(イハウメ)科に屬する多年生の草。地下に根莖ありて、短き地上莖を出す。葉は革質・卵形にして、粗鋸齒あり。三四寸の花莖上に、白色又は淡紅色の大形の五瓣花數箇を著く。山地に自生す。ひめかがみ。

ひめ-いはしやうぶ 姫岩菖蒲【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。地下に短き根莖ありて、細き根を生ず。葉は平滑にして劍狀を成し、二三寸乃至四五寸の花莖上に、小形・白色の六瓣花、總狀花序に排列して開く。各地の高山に生ず。ひめいはぜきしやう。

ひめ-いはぜきしやう 姫岩石菖【名】〔植〕前條に同じ。

ひめ-いひ 姫飯【名】『古、甑(コシキ)にて蒸したるもの、卽ち後世の强飯(コハメシ)に相當するを飯(ヒイ)と呼びしより、柔かに炊ぎたる飯の意にて、區別していふ』釜にて炊ぎたる飯(ヒイ)、卽ち今日普通の飯(メシ)。ひめ。ひめめし。〔古語〕 海人藻芥「公家御膳。飯者强飯也。執柄家等如レ此。姫飯全分者略儀也」

ひめ-いわし 姫鰯【名】ひみいわし(氷見鰯)の轉訛。

ひめ-う 姫鵜【名】〔動〕鵜の一種。形、小にして、頸より背にかけて、羽色、紫を帶び、光澤あり。頭上より後方に、二箇の羽冠あり。尾羽は十枚あり。北海道・千島に産す。

び-めう 美妙【名】美しく妙(タヘ)なること。極めてうるはしくすぐれたること。

び-めう 微妙【名】幽玄にして妙(タヘ)なること。精微玄妙。みめう。

びめう 微妙【名】〔人〕舞姫。京師の人。鎌倉に住す。七歳の時、父右兵衞尉爲成、讒によりて蝦夷に流され、母、これを憂へて死す。源賴家の、比企能員(ヒキヨシカズ)の家にありし時、召されて舞ひ、能員に因りて父の事を訴へしかば、賴家、その孝志に感じ、使を遣してその父を索めしめしが、已に配所に死せりと聞き、痛歎の餘、尼となりて、名を持蓮と改む。

ひめ-うすゆきさう 姫薄雪草【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。葉は披針形にして、下面に白毛密生す。花莖の頂に、頭狀花序をなして、小き筒狀花を著く。高山に生ず。みやまうすゆきさう。

ひめ-うづ 姫烏頭【名】〔植〕毛茛(キンボウゲ)科に屬する多年生の草。高さ七八寸。葉は三出複葉にして、小葉三裂す。春季、白色にして淡紅紫色を帶びたる小花開く。山野に自生す。ちんちんばな。とんぼぐさ。

ひめ-うつぎ 姫空木・姫溲疏【名】〔植〕虎耳(ユキノシタ)科に屬する落葉灌木。高さ二三尺。葉は長卵形にして尖り、對生す。春季、枝上に、白色の五瓣花、圓錐花序をなして開く。各地の山野に生じ、又、觀賞用として栽培す。こうつぎ。てんぢくうつぎ。

ひめ-うめばちさう 姫梅鉢草【名】〔植〕虎耳(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。高さ三四寸。葉は圓き心臟形をなし、下部なるは、長き葉柄を具ふ。夏秋の交、花莖の頂に、一箇の白色・五瓣の花を著く。各地の高山に自生す。

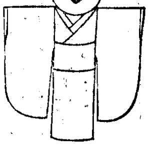
ひめ-うらじろ 姫裏白【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。葉は地下莖より叢生し、長さ五六寸乃至八九寸、三角形にして、羽狀に深裂し、下面は白色を呈す。各地に自生す。

ひめ-うり 姫瓜【名】㊀〔植〕眞桑瓜の變種。葉の形、普通の眞桑瓜のよりやや長く、莖にも、葉にも、多くの刺毛あり。瓜は大さ約二寸、淡黃綠色を呈し、味、眞桑瓜に似て淡し。うるほほづき。よめのごき。みかんうり。〔金瓜・金鶯蛋〕 續猿蓑(棗龍)「姫瓜や袖に入れても重からず」 俳家奇人談(常矩)「姫瓜に三千の林檎顏色なし」 ㊁〔植〕ごきづる(合子草)に同じ。㊂ ひめうりびな(姫瓜雛)の略。

姫瓜の節供(セック)【句】昔、伊勢國桑名地方にて、八月朔日に、棚を作りて、その上に姫瓜雛を据ゑ、酒・赤飯などを供せしこと。

姫瓜の雛【句】次條に同じ。

ひめうり-びな 姫瓜雛【名】姫瓜に、眉・目・鼻・口を描き、紅(ベニ)・白粉(オシロイ)を彩りなどして、頭とし、竹の筒などを胴とし、紙又は絹などの服を著ぜたる雛人形。ひめうり。「雛瓜の節供」參照。



(ひめうりびな)

ひめ-うゐきやう 姫茴香【名】〔植〕いのんど(蒔蘿)を云ふ。〔東國及び西國の方言〕

ひめ-おとぎり 姫弟切【名】〔植〕次條の略。

ひめおとぎり-さう 姫弟切草【名】〔植〕金絲桃(ビヤウヤナギ)科に屬する多年生の草。莖は方形をなし、高さ一二寸乃至尺餘。葉は對生し、卵形にして全緣、基部は圓形にして、莖を抱擁す。春夏の交、黃色の小花、聚繖花序をなして開く。各地に自生す。

ひめ-かいう 姫かいう【名】〔植〕みづざぜん(水座禪)に同じ。

ひめ-かいだう 姫海棠【名】〔植〕すみ(桷)に同じ。

ひめ-かいだう 姫街道【名】〔地〕『德川時代に、女子は、濱名湖口の今切(イマギレ)の渡を恐れ、且つ新居(アラヰ)の關の、女子の通行に對する調査嚴重なりしより、迂回して、この道を通過する者多かりしよりいふ』遠江國濱松より御油(ゴユ)に至る間の街道。

ひめ-かうがいぜきしやう 姫笄石菖【名】〔植〕燈心草(ヰ)科に屬する一年生の草。高さ八九寸に達し、莖・葉共に淡綠色を呈す。葉は細長くして尖り、互生す。花は細小にして、聚繖花序に排列す。

ひめ-かうぞ 姫楮【名】〔植〕楮の變種。高さ丈餘に達し、葉は狹長、實は小粒相集まりて、圓球狀をなし、熟すれば、深紅色を呈し、味甘くして、食ふべし。古書に栲(タヘ)と稱するは、この樹なりといふ。山野に自生す。

ひめ-かがみ 姫鑑【名】淑女の模範となるべき人物又は物事。

ひめ-かがみ 比賣鑑【名】〔書〕朱子の小學を敷衍して、通俗懇切なる婦道の敎訓を記せるもの。三十一卷。中村欽の著。

ひめ-かがみ 姫鏡【名】〔植〕ひめいはかがみ(姫岩鏡)に同じ。

ひめ-かがみ 姫蘿摩・徐長卿【名】〔植〕すずさいこ(鈴柴胡)に同じ。〔古語〕 和名「徐長卿、比女加加美」

ひめ-がき 姫垣・女墻【名】丈低き垣。女墻(ヂヨシヤウ)。城の垣にいふこと多し。 方丈「あばらなるひめ垣をかこひて、園とす」

ひめがさ-ゆり 姫笠百合【名】〔植〕あまな(山慈姑)に同じ。

ひめ-かなわらび 姫金蕨【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。葉は大形の羽狀複葉にして、葉柄及び葉軸に、茶褐色の鱗片密生す。山地に自生す。

ひめ-かは 姫川【名】〔地〕越後國西頸城(ニシクビキ)郡にある川。信濃國北安曇(キタアヅミ)郡神城(カミシロ)村の分水嶺佐野阪に發し、糸魚川(イトイガハ)町の西方を過ぎて、海に入る。長さ十二里。

ひめ-かはづすげ 姫かはづ菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘。葉は狹長にして尖り、互生す。頭に、數箇の穗狀花序を著く。山地に自生す。

ひめ-かひ 姫買【名】『ひめ(姫)㊂を見よ』ぢよらうかひ(女郎買)を云ふ。〔近畿地方の方言〕 臍の宿替「お茶屋へ行きながら、姫買せずと、散財だけして」

ひめ-がひ 姫貝【名】〔動〕いがひ(貽貝)に同じ。

ひめ-かぶら 姫鏑【名】上古の、一種の鏑矢。姫は接頭語、小き鏑矢をいふとも、樋(ヒ)目鏑の義にて、孔の、長くして、樋の狀をなせるものとも、後世の蟇目(ヒキメ)鏑なるべしとも、又、氷目(ヒメ)矢に關係あるものならんかともいふ。萬葉「梓弓八つたばさみひめかぶら八つたばさみ鹿(シシ)待つと吾が居る時に」

ひめ-がま 姫蒲・水蠟燭【名】〔植〕香蒲(ガマ)科に屬する多年生の草。葉は扁平にして、

長さ六七尺に達す。花は單性にして、夏季、花莖を抽き、蠟燭狀の褐色の穗を著く。沼澤に自生す。

ひめ-がんぴ 姬雁皮【名】〔植〕びらんじに同じ。

ひめ-かんらん 姬甘藍【名】〔植〕こもちかんらん(子持甘藍)に同じ。

ひめ-がや 姬萱【名】〔植〕はたがや(旗萱)の略。

ひめ-からまつ 姬唐松【名】〔植〕次條の

ひめ-からまつさう 姬唐松草【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ六七寸。葉は三出複葉にして、根生す。夏季、花莖を抽き、總狀花序をなして、黄白色の花を著く。山野に自生す。ひめからまつ。

ひめ-かりやす 姬刈安【名】〔植〕てうせんかりやす(朝鮮刈安)に同じ。

ひめ-ぎきやう 姬桔梗【名】〔植〕ひなぎきやう(雛桔梗)に同じ。

ひめ-ぎく 姬菊【名】〔植〕ひめしをん(姬紫菀)に同じ。

ひめ-ぎみ 姬君【名】㊀貴人の娘の敬稱。ひめごぜ。めぎみ。ひめご。㊁將軍の息女の、大名に嫁せしもの。〔德川時代の語〕ごしゆでん(御守殿)㊀參照。

ひめぎみ-ざむらひ 姬君侍【名】德川幕府の職制の一。姬君用人の支配の下に、姬君㊁に附せられし侍。

ひめぎみ-ようにん 姬君用人【名】德川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、姬君㊁に屬せし用人。

ひめ-きりんさう 姬麒麟草【名】〔植〕景天(ベンケイサウ)科に屬する多年生の草。高さ約五六寸。葉は長倒卵形にして、鈍鋸齒あり、對生す。花は小形・五瓣にして、莖頂に簇生す。

ひ-めく【動四自】ひひと鳴く。〔古語〕盛衰記「南殿に鵼(ヌエ)の音(コヱ)して、一つの島、ひめきわたりたり」

ひめ-くぐ 姬莎・水蜈蚣【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)料に屬する多年生の草。細長き根莖あり。葉は狹長にして尖り、三縱列に排列す。夏秋の交、小形・綠色の花を開き、球狀の花穗を成す。山野に自生す。

ひめ-くさ 姬草【名】〔植〕㊀いぶきじやかうさう(伊吹麝香草)に同じ。㊁ひめはくか(姬薄荷)に同じ。

ひめ-くず 姬葛【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する多年生の草。葉は小豆のに似て、やや厚し。夏季、花梗を抽きて、捩れたる黑花を著け、長さ一寸餘の莢果を結ぶ。種子は、暗黑色にして、斑紋あり。山地の路傍等に自生す。きつねまめ。のあづき。

ひめ-くはがた 姬鍬形【名】〔植〕玄參(ゴマノハグサ)科に屬する多年生の草。高さ三四寸。葉は楕圓形にして尖り、對生す。夏秋の交、總狀花序をなして、淡紫白色の花を著く。高山に自生す。

ひめ-くひな 姬水鷄【名】〔動〕涉禽類に屬する鳥。體甚だ小く、雀に似、上面は茶褐色を呈して、白き斑點あり、下面は灰色。夏季、我國に來る。ねずみくひな。

ひめ-くまやなぎ 姬熊柳【名】〔植〕鼠李(クロウメモドキ)科に屬する落葉灌木。高さ一丈に達す。概形熊柳に似て、莖も葉も小し。春夏の交、圓錐花序をなして、帶黄白色の小花を著く。山野に自生す。まうこぎ。

ひめ-ぐも 姬蜘蛛【名】形極めて小き蜘蛛。四季物語「姬蜘蛛とて、ささやかなる蜘蛛の」

ひめ-ぐるみ 姬胡桃・陳倉胡桃【名】〔植〕胡桃科に屬する落葉喬木。形狀、鬼胡桃に似たれど、種子の扁くして卵形なるを特徵とす。種子は調理用又は搾油用に供し、果實の綠皮は染料に用ひ、材は銃の臺・箱類・盆などを作るに用ふ。めぐるみ。おたふくぐるみ。

ひめ-くわんざう 姬萱草・金萱【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。高さ一尺五寸に達す。葉は狹長、春季、花莖の頂に、黄金色・六瓣の花被を有する花を著く。我國、中部以北の山地に生じ、又、觀賞用とす。きすげ。ひつじぐさ。ひつじらん。

ひめ-こ 姬蠶【名】〔動〕㊀春蠶の一種。繭は蹴鞠の形を成し、大なれども、薄くして、良質ならず。㊁皮膚に斑紋無き蠶の總稱。

ひめ-ご 姬御【名】ひめごぜ(姬御前)の略。武家義理物語「この姬御を連れて、……今の都に來て憂き住(スマヒ)」

ひめ-ごえふ 姬五葉【名】〔植〕ひめこまつ(姬小松)㊂に同じ。

ひめ-こがねむし 姬金龜子【名】〔動〕金龜子の一種。體は小形・楕圓にして、通常、藍綠色なれども、黑藍色・緣褐色・赤褐色等のもあり。

ひめ-こざくら 姬小櫻【名】〔植〕櫻草科に屬する多年生の草。雪割草(ユキワリサウ)に類す。葉は箆形又は倒卵形にして、粗き鋸齒あり、長柄を有して、叢生す。花は小形にして、肉色稀に白色の合瓣花、長さ二三寸乃至五六寸の花莖の頂上に、繖形花序をなして開く。寒地・高山に產す。

ひめ-ごしよ 姬御所【名】將軍の姬君。〔足利時代の語〕

ひめ-こすすき 姬小薄【名】〔植〕みやまぬかぼ(深山糠穗)に同じ。

ひめ-ごぜ 姬御前【名】ひめぎみ(姬君)㊀に同じ。平家「姬御前ばかり殘らせたまひて、奈良の姨御前(ヲバゴゼ)の御許(モト)に忍うでましましける」本朝十種香「こんな殿御と添臥の、身は姬御前の果報ぞと」

ひめこそ-じんじや 比賣許曾神社【名】大阪市南區高津(カウヅ)町高津宮の境內にある神社。祭神は比賣許曾神。創祀の年代詳かならざれども、延喜の制、大社に列す。冷泉天皇の朝に、境內に高津宮の造營ありてより、高津宮のみ、喧傳せらる。

ひめこそ-の-かみ 比賣許曾神・比賣碁曾神【名】天日矛(アメノヒボコ)の妻。一名、阿加留(アカル)姬命。前條及びひめしま(姬島)㊀參照。

ひめ-ごと 祕事・秘事【名】祕して人に示さざる事がら。かくしごと。ないしょごと。祕事(ヒジ)。

ひめ-こばんさう 姬小判草【名】〔植〕㊀禾本科に屬する一年生の草。高さ一尺內外。葉は小形・狹長にして尖り、二縱列に排列し、莖・葉共に平滑なり。初夏、莖頂に、小穗を著く。原野に自生し、又、觀賞用とす。すずがや。㊁ゆうがぎく(ゆうが菊)に同じ。

ひめ-こぶし 姬辛夷【名】〔植〕しでこぶし(四手辛夷)に同じ。

ひめ-こまつ 姬小松【名】㊀小き女松(メマツ)。ひめまつ。夫木「同じくは千本を引かん姬小松君が齡の數にまかせて」㊁〔植〕ふじまつ(富士松)を云ふ。〔京都の語〕㊂〔植〕松杉科に屬する常綠喬木。高さ七八丈、周圍六七尺に達す。葉は針形又は鱗葉にして、五葉づつ叢生し、裏面、白色を呈す。毬果は三寸餘にして、卵形をなす。材質緻密なれど、彈力乏しく、樂器・天井板等に用ふ。又、觀賞用とす。かむろごえふ。ごえふまつ。ひめごえふ。〔姬五鬣松〕

ひめ-ごゐ 姬五位【名】〔動〕よしごゐ(葭五位)に同じ。

ひめ-ざうむし 姬象蟲【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。桑の芽を害す。

ひめ-ざくら 姬櫻【名】〔植〕櫻の一品種。矮小なる灌木をなし、葉は卵形にして尖頭、重鋸齒あり。葉柄は短く、托葉は細長、花梗・萼片に長毛あり。花瓣は倒卵形なり。臺灣に產す。

ひめ-ざくろ 姬石榴【名】〔植〕てうせんざくろ(朝鮮石榴)に同じ。

ひめ-じそ 姬紫蘇【名】〔植〕脣形科に屬する一年生の草。高さ一尺內外。葉は斜方形にして、對生す。秋、莖頂に、小形・淡紅色の脣形花、穗狀花序をなして開く。

ひめ-しだ 姬羊齒【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。根莖より、軟質の羽狀複葉を出し、葉柄細し。原野・路傍に自生す。りやうめんしのぶ。しよりま。

ひめ-しほがま 姬鹽竈【名】〔植〕こしほがま(小鹽竈)に同じ。

ひめ-しま 姬島・姬嶋【名】〔地〕㊀上古、難波(ナニハ)の淀の川尻にありし島。今、新淀川と神崎川との間にある稗島(ヒエジマ)村は、その遺跡ならんといへど、疑はし。釋日本紀に引ける攝津風土記逸文に、天日矛(アメノヒボコ)の傳說に關係ある新羅の女神比賣許曾(ヒメコソ)神、この島に渡來せる由を傳ふ。記「天皇、豐樂(トヨノアカリ)したまはむとして、日女(ヒメ)島に幸行(イ)でませる時に、その島に、雁(カリ)卵(コ)生みたりき」萬葉「妹が名

は千代に流れむ姫島の小松が末（ウレ）に苔のむすまで」 **二**筑前國絲島郡芥屋（ケヤ）村の海上にありて、同村に屬する島。周回二十餘町。野村望東尼謫居の地。古稱、怡土（イト）島。 **三**肥前國南松浦郡福江島の北方にありて、岐宿（キシユク）村に屬する島。周回一里餘。 **四**豐後國東國東（ヒガシクニサキ）郡伊美（イミ）村の海上にある島。周回四里餘。豐後國より周防灘に入る船の航路に當り、全島一村を成し、姫島村といふ。 **五**土佐國幡多（ハタ）郡の海上にある島。沖の島村の屬島。周回約一里。 **六**三河國渥美（アツミ）灣の東南にある小島。渥美郡田原町に屬す。 **七**かべしま（加部島）に同じ。

ひめ-しもつけ 姫下野 【名】〔植〕 いはしもつけ（岩下野）に同じ。

ひめ-しやが 姫射干・姫胡蝶花 【名】〔植〕 **一**鳶尾（イチハツ）科に屬する多年生の草。高さ八九寸餘。葉はあやめ類のに似て細長く、花は淡紫色にして、しやがのに類すれども、二三箇づつ花莖の頂に生じ、花莖は細長し。 **二**こかきつばた（小燕子花）に同じ。

ひめ-しやくし 姫杓子 【名】〔植〕 たつなみさう（立浪草）**一**に同じ。

ひめ-しやくなげ 姫石南 【名】〔植〕 石南科に屬する小灌木。高さ一尺内外。葉は細き長楕圓形にして、下面は帶白色を呈す。夏、梢上に、帶紅白色・壺狀の花を著く。我國北部の山中の濕地に自生し、又觀賞用として栽培す。にっくわうしやくなげ。

ひめ-しやじん 姫沙參 【名】〔植〕 桔梗科に屬する多年生の草。高さ二尺内外。葉は小形・披針形にして、互生す。秋、莖頂に、圓錐花序をなして、青紫色・鐘狀の花を著く。本州中部以北の高山に自生す。

ひめ-しやら **姫抄攞**・赤梅檀 【名】〔植〕 山茶（ツバキ）科に屬する落葉喬木。高さ四五丈に達し、樹皮、赭色にして平滑なり。葉は楕圓形にして尖り、互生す。夏、白色の五瓣花を著く。材質緻密堅硬にして、小器具の製造に適す。又、觀賞用とす。あかぎ。こしやら。こなつつばき。やまつつじ。

ひめ-しゆんぎく 姫春菊 【名】 **いはこぎく**（岩小菊）に同じ。

ひめ-しをん 姫紫菀・女菀 【名】〔植〕 菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は披針形にして、互生す。夏、花莖の頂に、頭狀花簇り開き、中部の花は黄色を呈し、周圍のは白色を呈す。おほさかじをん。こじをん。たうじをん。ひめぎく。

ひめ-すいば 姫酸模 【名】〔植〕 蓼科に屬する一年生又は多年生の草。高さ七八寸乃至一二尺。葉は狹き戟形をなし、長き葉柄を具へ、互生す。夏、莖頂に、帶紅綠色の花を著け、圓錐花序をなす。山野の乾燥地に自生す。

ひめ-すが-はら 姫菅原 【名】 姫菅の一面に生えたる處。一說に、姫は地名にて、その地の菅原をいへるならんかと。〔古語〕萬葉「天（アメ）なる姫菅原の茅な刈りそねみなのわたか黑き髮にあくたし著くも」

ひめ-すぎ 姫杉 【名】〔植〕 **たうすぎ**（唐杉）に同じ。

ひめ-すぎごけ 姫杉蘚 【名】〔植〕 杉蘚科に屬する蘚苔植物。地上に叢生し、高さ二三寸に達す。葉は細小にして尖り、莖に密生す。子嚢は卵筒形にして、帶褐色の蘚帽を具ふ。諸國の山地に自生す。

ひめ-すぎらん 姫杉蘭 【名】〔植〕 石松（ヒカゲノカヅラ）科に屬する多年生の草。莖は細くして數箇に分岐す。葉は細小にして、鱗片狀を成して密生し、杉の葉に似たり。夏、葉腋に子嚢を生ず。

ひめ-すげ 姫菅 【名】〔植〕 莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。高さ一尺内外。葉は細長くして尖り、互生す。花莖の頂に、小き穗をなして、帶黑色の小花を著く。山野に自生す。

ひめ-すゐせん 姫水仙 【名】〔植〕 **あまな**（山慈姑）に同じ。

ひめたたら-いすけより-ひめ 姫蹈鞴伊須氣余理姫 【名】〔人〕 次條に同じ。

ひめたたら-いすず-ひめ 媛蹈鞴五十鈴姫 【名】〔人〕 神武天皇の皇后。事代主（コトシロヌシ）命の女。又の名は富登多多羅五十鈴依（ホトタタライスズヨリ）姫、又、媛蹈鞴伊須氣余理（ヒメタタライスケヨリ）姫。綏靖天皇及び諸皇子を生む。

ひめ-たちばな 姫橘 【名】〔植〕 **きんかん**（金柑）に同じ。

ひめ-たにわたり 姫谷渡 【名】〔植〕 **こたにわたり**（小谷渡）に同じ。

ひめ-たびらこ 姫田平子 【名】〔植〕 **こおにたびらこ**（小鬼田平子）に同じ。

ひめぢ 姫路 【名】〔地〕 **一**播磨國にある市。兵庫縣の管下に屬す。酒井氏の舊藩地。中國の要路に當り、第十師團司令部あり。古稱、姫路山。 **二**明治の初年設置の縣の一。四年、藩を廢して縣とせし播磨國姫路・明石・龍野・林田・赤穗・山崎・安志（アンジ）・三日月・三草・小野の十縣と、一時鳥取藩の所管たりし福本藩の地とを合はせて、播磨全國を管せしめしもの。四年、飾磨（シカマ）縣と改稱し、九年、兵庫縣に入る。

ひ-めぢ 【名】〔動〕 硬鰭類に屬する魚。體は細くして、長さ五寸内外、紅色を呈し、背部殊に鮮かにして、顎に一對の鬚あり。通常、蒲鉾の材料に供す。

ひめぢ-じんじや 姫路神社 【名】〔地〕 播磨國姫路市にある縣社。祭神は舊藩主酒井氏の祖正親。明治二十二年の創立。

ひめぢ-かたばみ 姫路酸漿草 【名】『舊姫路藩主酒井氏の定紋なるよりいふ』 **けんかたばみ**（劍酸漿）に同じ。

ひめぢ-がは 姫路革 【名】 播磨國姫路より產する、紋形ある革。我國特有のものにて、牛皮を流河に浸して脫毛し、種油と食鹽とを塗りて、揉みて製す。淡黄白色にして、質極めて强靱。昔は甲冑・鞍などに用ひ、今は、擊劍道具・調革・力革、火夫・職工の前掛など、耐久力を要する場合に用ふるに適し、海外にも輸出す。

ひめぢ-けんかたばみ 姫路劍酸漿草 【名】 **ひめぢかたばみ**（姫路酸漿）に同じ。

ひめ-ぢしばり 姫地縛 【名】〔植〕 菊科に屬する多年生の草。莖は細長くして匍匐す。葉は卵形又は倒卵形にして、互生し、花は黄色の舌狀花にして、小き頭狀花序をなす。山野に自生す。いはにがな。

ひめぢ-じやう 姫路城 【名】 播磨國姫路市にある城。赤松貞範の築きしもの。一說に、小寺賴秀の創始といふ。豐臣秀吉修築して、中國出師の根據とし、寛延二年以來酒井氏の居城たり。今、第十師團の兵營を置く。一名、白鷺（ハク）城。

ひめ-ちや 姫茶 【名】〔植〕 **かはらけつめい**（山篇豆）に同じ。

ひめ-ぢよん 姫ぢよん 【名】〔植〕 菊科に屬する一年生又は多年生の草。高さ三四尺に達す。葉は披針形又は長倒卵形にして、粗鋸齒あり。花は頭狀花序に排列し、中部は黄色の筒狀花、周圍は白色の舌狀花なり。北亞米利加の原產なれども、今日にては、我國各地の原野に自生す。

ひ-めつ 非滅 【名】〔佛〕 まことの滅に非ざること。不滅。盛衰記「昔、釋尊の非滅を唱へしに、雙林、風痛んで、その色、忽ちに變じ」

非滅に滅を現ず 【句】〔佛〕 「非生（ヒシヤウ）に生を唱へ、非滅に滅を現ず」を見よ。

ひめ-つが 姫栂 【名】〔植〕 **くろつが**（黑栂）に同じ。

ひめ-つき 姫坏 【名】 丈短き坏。〔古語〕

ひめ-つげ 姫黄楊 【名】〔植〕 黄楊の變種。高さ一二尺に過ぎずして、葉細かし。多くは庭木とす。くさつげ。にはつげ。

ひめ-つつじ 姫躑躅 【名】 小きつつじ。夫木「谷深み岩かた陰のひめつつじ人もすさめぬ色に咲きつつ」

ひめ-つばき 姫椿 【名】〔植〕 **一**そよご（冬青）に同じ。〔古語〕 名義抄「冬青、ヒメツバキ・ツタノキ」 **二**たまつばき（玉椿）**四**に同じ。〔古語〕 和名「女貞、比女都波岐」 **三**山茶（ツバキ）科に屬する常綠喬木。葉は互生し、長楕圓形にして、主に鋸齒を有し、革質を帶び、葉柄及び嫩葉は有毛なり。花も有毛にして、形、椿に似たり。〔杆仔皮〕

ひめ-つり 【名】 **あひうち**に同じ。

ひめ-てうせんかりやす 姫朝鮮刈安 【名】〔植〕 **いたちがや**（鼬茅）に同じ。

ひめ-てんつき 姫飄拂草 【名】〔植〕 莎草（カヤツリグサ）科に屬する一年生の草。葉は長くして叢生し、夏秋の交、葉間より數箇の花莖出でて、一尺内外に達し、茶褐色の疎なる穗を著く。畦畔等に自生す。

ひめ-どころ 姫野老 【名】〔植〕 **つくねいも**（佛掌薯）に同じ。

ひめ‐さね 姫刀禰【名】㊀みやうぶ（命婦）に同じ。紀「命婦、ヒメトネ」㊁くにん（宮人）に同じ。延喜式「宮人。訓曰二比賣刀禰一」

ひめ‐とらのを 姫虎尾・水蔓青【名】〔植〕玄參（ゴマノハグサ）科に屬する多年生の草。高さ二三尺。葉は對生、桃のに似て細く、缺刻あり。夏、虎尾（トラノヲ）のに似たる碧色の小花、總狀花序をなして開く。山野に自生し、又、觀賞用として栽培す。

ひめ‐どり 鴇鳥【名】ひめ（鴇）に同じ。

ひめ‐なそび 姫遊【名】〔動〕『姫の遊の約』女の遊。婦女子の爲すが如き遊。〔古語〕紀「おのがををしせむと盜まく知らにひめなそびすも」

ひめ‐なづな 姫薺・沙薺【名】〔植〕十字花科に屬する一年生の草、高さ七八寸に達す。葉は披針形にして、篦狀を帶び、細毛を具へ、短き莖に叢生す。葉間より花莖を抽き、小形・白色の四瓣花、總狀に排列して開く。

ひめ‐なへ 姫なへ【名】〔植〕馬錢（マチン）科に屬する草。高さ三四寸。葉は披針形にして尖り、對生す。夏、梢上の葉腋に、花梗を抽きて、四片に裂けたる小白花を著く。原野水濕の地に自生す。

ひめ‐なみき 姫なみき【名】〔植〕脣形科に屬する多年生の草。高さ一尺內外。葉は小形・卵形にして尖り、對生す。葉腋に、小形・白色にして、端に淡紫色の斑點ある脣形花、一二箇づつ開く。原野に自生す。ほそばたつなみ。

ひめ‐の‐かみ 姫の神【句】ひめ（姫）の條下「を見よ。

ひめ‐のがりやす 姫野刈安【名】〔植〕禾木科に屬する多年生の草。莖は纖細にして、高さ二尺に達し、葉は長披針形にして、互生す。夏、梢上に、細き花梗を抽きて、淡綠色の疎なる穗を著く。山地又は乾燥せる所に自生す。

ひめ‐のきしのぶ 姫軒荵・姫水龍骨【名】〔植〕水龍骨（ノキシノブ）科に屬する多年生の草。莖は細長くして、匍匐し、葉は倒披針形にして、鈍頭、下面に、圓き子囊群を生ず。山野に自生す。

ひめ‐のはぎ 姫野萩・遠志【名】〔植〕ひめはぎ（姫萩）㊀に同じ。

ひめ‐のり 姫糊【名】㊀『糅（ヒ）の糊の義ならんといふ』粳米（ウルチ）より作りたる糊。衣類の洗濯又は貼物などに用ふ。ひめ。〔糅糊・糄糅〕㊁能（ノウ）の狂言の一。大名、紺屋に遣しおきたる衣肩を、冠者を遣りして受取らしむるに、足らぬ物ありて出來上らずとて歸り、その足らぬ物の名を忘れ、主人の常に讀む本の中にある物なりといふより、主人は、平家物語を讀みはじめしに、忠度云云の條に至りて、それなりといひしかば、姫糊と忠度との差別も知らで、大に骨を折らせたりとて、叱責することを作りたるもの。**もちのり**（餅糊）參照。

（ひめはぎ㊀）

ひめ‐はぎ 姫萩【名】〔植〕㊀姫萩科に屬する多年生の草。高さ七八寸。葉は卵形・披針形又は線形にして、全緣、上面は光澤あり。初夏、暗紫色又は淡紫色の小花、總狀花序をなして開き、蒴果を結ぶ。原野に自生し、地下部は藥用に供す。おにをんじ。こぐさ。しばはぎ。すずめはぎ。のちや。ひめのはぎ。〔遠志〕㊁**おきなぐさ**（翁草）㊀に同じ。

ひめはぎ‐くわ 遠志科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。草本・灌木又は小喬木。溫帶及び熱帶に產す。姫萩・雛鬠（ヒトノカンザシ）など、これに屬す。

ひめ‐はくか 姫薄荷【名】〔植〕㊀脣形科に屬する多年生の草。高さ一尺內外。葉は長卵形又は卵狀披針形にして、對生し、花は淡青紫色にして、小し。山野に自生す。こはくか。ひめめぐさ。㊁**いぶきじやかうさう**（伊吹麝香草）に同じ。

ひめ‐はじめ 姫始【名】『姫は假借の字にて、祕（ヒメ）の義。子孫增殖の根本、人間第一の大禮の根元なるよりいふとぞ』新枕（ニヒマクラ）を交はすこと。但し、新年になりて、姫糊を用ひそむるに吉なる日、女の衣裝を縫ひそむるに吉なる日、又、飛馬始の義にて、馬の乘初（ノリゾメ）に吉なる日など、種種の說もあり。柳樽「やかましいするにしておけ姫始」

ひめ‐ばせう 姫芭蕉・紅蕉【名】〔植〕芭蕉科に屬する多年生の草。芭蕉に似て小く、高さ三尺乃至五尺、葉は長楕圓形にして、葉柄長し。花は單性にして、芭蕉のに似たれど、直立し、苞は鮮紅色にして、先端、黃色を呈す。果實は黃熟すれども、食ふべからず。葉を黑燒にし又は煎じて、油に煉り、髮を洗ふに用ふれば、禿髮の再生に効ありといふ。原產地は南部支那及び安南。我國、各地に栽培す。びじんせう。

ひめ‐ばち 姫蜂【名】〔動〕蜂類の一屬。體長一寸內外、細長にして怯弱、環節は十四箇以上あり。產卵管非常に長し。幼蟲は、他の昆蟲の蛹等に寄生し、老成すれば、宿主の體の內外に繭を張り、後、成蟲となる。**ばびほう**（馬尾蜂）參照。

ひめ‐はな 姫花【名】〔植〕**おきなぐさ**（翁草）㊀を云ふ。〔大阪の語〕

ひめ‐はなわらび 姫花蕨【名】〔植〕瓶爾小草（ハナヤスリ）科に屬する多年生の草。高さ七八寸に達す。小き地下莖ありて、地上莖を出す。葉は長楕圓形にして、羽狀に分裂し、直立す。子囊は二列を成して、枝上に著生す。本州以北に自生し、又、觀賞用として栽培す。へびのした。

ひめ‐はまぎく 雛濱菊【名】〔植〕**こはまぎく**（小濱菊）に同じ。

ひめ‐ひかげのかづら 姫日陰葛・姫石松【名】〔植〕**ひもかづら**（紐葛）に同じ。

ひめ‐びし 姫菱・姫芰【名】〔植〕菱の變種。葉も、花も、實も、すべて普通の菱よりやや小なるもの。

ひめ‐ひなどり 姫雛鳥【名】〔動〕**ひばり**（雲雀）の異稱。〔古語〕秘藏抄「春の野に姫雛鳥ぞあがるなる霞の中に聲聞えつつ」

ひめ‐ひば 姫檜葉【名】〔植〕**かたひば**（堅檜葉）に同じ。

ひめ‐ひまはり 姫日廻・姫向日葵【名】〔植〕菊科に屬する草。普通の向日葵に比し全部小にして、高さ四五尺、分岐多し。

葉は尖頭心臟形にして、緣邊に齒牙あり。莖・葉、共に粗糙にして、毛茸あり。花も向日葵のに似て、黃色なり。

ひめ‐ひみずむぐら 姫日不見鼴鼠【名】〔動〕次條に同じ。

ひめ‐ひみずもぐら 姫日不見鼴鼠【名】〔動〕食蟲類に屬する哺乳動物。日不見鼴鼠に酷似し、兩顎に犬齒を具ふ。

ひめ‐ふうろ 姫風露・漢江魚腥草【名】〔植〕風露草科に屬する多年生の草。莖は直立し、高さ一尺內外。葉は三出複葉にして、小葉は葉狀に分裂す。夏秋の交、葉腋より花梗を抽き、淡紅色又は白色の五瓣花を著く。藥用に供して、胃腸病に効ありといふ。山地に自生す。しほやきさう。しほやきふうろ。

ひめ‐ふぢ 姫藤【名】〔植〕**いはふぢ**（岩藤）に同じ。

ひめ‐へびいちご 姫蛇苺【名】〔植〕薔薇（ライバ）科に屬する多年生の草。莖は匍匐して、處處に根を出す。葉は三出複葉にして、小葉は粗鋸齒を有す。夏季、葉腋に小梗を抽きて、小形・黃色の五瓣花を著く。北地の山中に生ず。

ひめ‐まうちぎみ 姫大夫【名】㊀次條に同じ。〔古語〕㊁**あづまわらは**（東豎子）に同じ。**ひめまつ**（姫松）㊂參照。〔古語〕枕「えせ物の所得る折の事。正月（ムツキ）のおほね、行幸のをりのひめまうちぎみ」

ひめ‐まちぎみ 姫大夫・內命婦【名】**ないみやうぶ**（內命婦）に同じ。〔古語〕紀「內命婦、ヒメマチギミ」

ひめ‐まつ 姫松【名】㊀小き松。ひめこまつ。貫之集「われのみや蔭とは賴む白浪のたえず立ち寄る岸の姫松」㊁〔植〕**めまつ**（雌松）に同じ。㊂『**ひめまうちぎみ**（姫大夫）の訛』**あづまわらは**（東豎子）に同じ。〔古語〕公事根源「あづまわらはといふは、內侍司の被官にある者にて、行幸の時、姫松とて、をかしき馬に乘りて供奉する、これが事なり」

ひめ‐まんぢゆう 姫饅頭【名】形の小き「饅頭。

ひめ‐みかど 姫帝【名】**によてい**（女帝）に

同じ。絶狩剱本地「人皇十五代の姫みかど神功皇后」

ひめ-みかんさう 姫蜜柑草【名】〔植〕**かんさう**(小蜜柑草)に同じ。

ひめ-みこ 姫御子【名】天皇の御女。ひめみや。皇女。内親王。〔古語〕紀「内親王、ヒメミコ」

ひめ-みぞはぎ 姫溝萩・姫千屈菜【名】〔植〕千屈菜(ミソハギ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。葉は對生。千屈菜に似て、小なる淡紅紫色の花を著く。

ひめ-みや 姫宮【名】**ひめみこ**(姫御子)に同じ。枕「藥玉(クスダマ)して、姫宮・若宮に附け奉らせたまふ」

ひめ-みやますみれ 姫深山菫菜【名】〔植〕菫菜(スミレ)科に屬する多年生の草。葉は卵形にして尖り、鈍鋸齒あり。深山菫菜のに似て小なる淡紫色又は白色の花を著く。我國、四國の山地に自生す。

ひめ-むかしよもぎ 姫昔蓬【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ五尺内外。葉は長披針形にして、互生し、白色の頭狀花を開く。山野に自生す。

ひめ-むぐら 姫葎【名】〔植〕**きくむぐら**(菊葎)に同じ。

ひ-めん 罷免【名】『罷の字の音、正しくは**はい**』職務をやめさすること。免職。

ひ-めん 庇面【名】〔鑛〕『英 Dome』六角晶系以外にて、側軸の一に平行する面。

びめん-てう 美面鳥【名】**かほどり**(顔鳥)に同じ。二代男「女護の島より美面鳥渡る事」

ひめ-めぐさ 姫目草【名】〔植〕**ひめはくか**(姫薄荷)**一**に同じ。

ひめ-めし 姫飯【名】**ひめいひ**(姫飯)に同じ。

ひめ-もす 終日【副】次條に同じ。〔古語〕紀「終日、ヒメモス」著聞「ひめもす遊びありきて」

ひめもす-に 終日に【副】**ひねもすに**(終日に)に同じ。〔古語〕宇治「中門の側に、ひめもすに屈み居たりつる」

ひめ-もち 姫黐・姫細葉冬青【名】〔植〕冬青(ソヨゴ)科に屬する常綠灌木。樹皮は黃白色、葉は廣き披針形又は楕圓形にして尖り、互生す。本州中部以北の山地に自生す。

ひめ-もも 姫桃【名】〔植〕桃の一種。花の小形なるものか。一說に、**ははきもも**(帚桃)に同じきかと。〔古語〕堀次「春霞立ち隱さなん道のべの垣根に咲ける姫桃の花」

ひめ-もり 姫盛【名】荒和布(アラメ)の高盛。庖丁聞書「姫盛とは、荒和布を盛りたるを云ふなり」

ひめ-や 氷目矢・冰目矢【名】『**ひめ**は**ひび**(罅)・**ひま**(隙)・**ひむ**(祕む)などと關係ある語ならんといふ』木を割る時、その割目に挾む楔(クサビ)ならんといふ。〔古語〕記「その氷目矢を打離ちて、拷(ウ)ち殺しき」

ひめ-やしやぶし 姫夜叉附子【名】〔植〕**みねばり**に同じ。

ひめ-ゆぎ 姫靫【名】**にしきゆぎ**(錦靫)に同じ。延喜式「姫靫廿四枚」

ひめ-ゆづけ 姫湯漬・編糅湯漬【名】姫飯(ヒメイヒ)の湯漬。

ひめ-ゆづりは 姫讓葉・姫交讓木【名】〔植〕**一** 大戟(タカトウダイ)科に屬する常綠喬木。概形、讓葉に似て、花梗の短きと、葉の小くして長さ二寸程なるとを、特徵とす。各地に自生す。いぬゆづる。いぬゆづりは。〔青黃剛樹〕 **二** **ちやぼゆづりは**(矮交讓木)に同じ。

ひめ-ゆり 姫百合・山丹【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。一根・一莖にして、高さ一尺乃至二尺。葉は鬼百合(オニユリ)のに似て、小く、又密生せず。夏、莖頂に、一箇又は數箇の花を著く。花被の各片は、狹くして、殆ど反捲せず。花被の赤きを赤姫百合、黃なるを黃姫百合といひ、共に暗色の斑點あり。山中に自生し、鱗莖は食ふべし。ひかりぐさ。からゆり。

ひめ-よし 姫葭【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。荻に似て、莖短く、山地に自生す。ひめあし。

ひめ-よもぎ 姫艾・野艾蒿【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ四五尺に達す。葉は、形、艾のに酷似して、缺刻深く、線形を成し、別に、全緣にして缺刻なき者をも著く。花は深紅紫色にして、頭狀花序をなし、秋季、枝頭に簇り開く。莖・葉共に苦味あり。

ひめ-れんげ 姫蓮華【名】〔植〕**一** 景天(ベンケイサウ)科に屬する多年生の草。肉質にして、高さ二三寸。葉は小形・淡黃綠色にして、互生し、初夏、黃色の五瓣花を著く。山地に自生す。つめれんげ。**二** **みづうるし**(水漆)に同じ。

ひめ-れんりさう 姫連理草・姫山藜豆【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する多年生の草。高さ五六尺、やや蔓狀をなす。葉は數箇の小葉より成れる羽狀複葉にして、卷鬚あり。花は連理草のに似て紅紫色。東北地方の原野に自生す。べにざらさ。

ひめ-わらび 姫蕨【名】〔植〕羊齒(シダ)類に屬する多年生の草。葉は地下莖より生じ、長さ二三尺の羽狀複葉をなし、子囊は小葉の裂片に生ず。山野の濕地に自生す。

ひめ-ゐ 姫藺【名】〔植〕**しちたうゐ**(七島藺)に同じ。

ひめ-ゑんどう 姫豌豆【名】〔植〕**すずめのゑんどう**(雀豌豆)に同じ。

ひめ-をがらばな 姫麻幹花【名】〔植〕**みねかへで**(峯楓)に同じ。

ひめ-をどりこざう 姫踊子草・姫續斷・姫野芝麻【名】〔植〕脣形科に屬する多年生の草。概形、踊子草に似て、小く、帶紫白色の花を著く。武藏國の原野に自生す。

ひめ-をり 姫折【名】昔、年始・元服・婚禮・犬追物(イヌオフモノ)などの儀式の時、魚鳥を、臺に盛りて、神に供へしもの。

ひも 紐【名】絲を撚り合はせて太くし、又は布片・革などを細く長く斷ちて、物を束ね又は結ぶに用ふるもの。ひぼ。和名「細子、比毛」

紐差す【句】**一** 紐を結ぶ。〔古語〕曾丹集「今日よりは夏の衣になるなべに紐さしあへず時鳥鳴く」**二** 蕾、未だ開かず。〔古語〕夫木「春を淺み解けぬ氷に事よせてまだ紐させる山櫻かな」

紐解く【句】『「解く」は下二段活用』次條**三**に同じ。〔古語〕源氏「御前の櫻、やうやうひもとけて」

紐解く【句】『「解く」は四段活用』**一** 紐をほどく。紐を結ばずにおく。萬葉「難波津に御船泊(ハ)てぬと聞え來(コ)ば紐解き放(サ)けて立走(タチハシリ)せむ」枕「碁を……打つとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきに」**二** 下紐(シタヒモ)を解く。萬葉「足柄の彼面(ヲテモ)此面(コノモ)にさす罠(ワナ)のかなる間(マ)靜(シヅ)み子ろあれ紐解く」**三** 蕾開く。花綻ぶ。源氏「前栽ども、殘なくひもときはべり」

紐を解く【句】**一** 前條**一**に同じ。萬葉「二人して結びし紐を一人して我は解き見じ直(タダ)に逢ふまでは」**二** **ひもとく**(繙く)に同じ。太平記「年來誦みたまひける持經の紐を解き」

ひ-も 氷面・冰面【名】『**冰面**(ヒオモ)**の略**』張れる氷の面。(歌に、紐に言ひかけて用ふ)**ひもかがみ**(氷面鏡)參照。〔古語〕枕「薄氷あはに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりを」

ひ-も 悲母【名】〔佛〕『**ひぼ**(慈母)を見よ』教主の、慈悲を垂るるを、母に譬へていふ語。平家「我、悲母の胎内を出で、師匠の室に入りしよりこの方、未だ禁戒を犯(ボン)せず」海道記「悲母の教主は、弱き子どものために、誓願を發して」

ひも-あみ 紐編【名】編方の一。編棒を用ひず、手先にて紐に組みて編み行くもの。

ひも-うち 紐打【名】『**うつ**(打つ)**九**を見よ』絲を組み合はせて、紐に作ること。紐を編むこと。

ひも-おとし 紐落【名】**おびとき**(帶解)**二**に同じ。

ひも-おん 悲母恩【名】〔佛〕悲母の恩。盛衰記「心地觀經に、悲母恩深如大海と說きたまひけるも」

ひも-かがみ 紐鏡【名】**一** 裏面の撮(ツマミ)などに紐の附きてある鏡。**二**〔書〕**てにをはひもかがみ**(てにをは紐鏡)の略。

ひも-かがみ 紐鏡【枕】紐鏡に附きたる紐は、解くべきものにあらぬより、「なときそ」(解くなかれ)の轉音なる山名**のとか**(能登香)にかけていふ。萬葉「紐鏡能登香の山は誰ゆゑぞ君來ませるに紐あけず寢む」

ひも-かがみ 氷面鏡・冰面鏡【名】**ひも**(冰面)を鏡と見立てていふ語。(歌に、多く紐

にかけていふ)〔古語〕（雲玉）「枝に今とけ行く花のひも鏡結ぶや凍る春の池水」

ひもがたな 紐刀【名】懷劍の類。刃の拔け出でぬやうに、柄・鞘を、紐にて纏ひたる小刀。一說に、懷中に佩きて、下紐(シタヒモ)にさす小刀。〔古語〕記「八鹽折(ヤシホヲリ)の紐小刀(ヒモガタナ)」紀「匕首、ヒモガタナ」

ひもかづら 紐葛【名】〔植〕㈠卷柏(イハヒバ)科に屬する多年生の草。莖は匍匐して、斜上する枝を生じ、葉は細小にして鱗片狀を成し、枝に密生す。高山に自生す。ひめひかげのかづら。㈡いはひば(卷柏)に同じ。

ひもかは 紐革【名】㈠紐とする革。ひぼかは。㈡ひもかはうどん(紐革饂飩)の略。

ひもかはあはび 紐皮鮑【名】鮑の肉を、小口より薄く剝ぎて炙り、煮返したる醬油を塗りたる食品。

ひもかはうどん 紐革饂飩【名】いもかはうどん(芋川饂飩)を見よ。

ひもく 費目【名】費用の名目。經常費又は臨時費の細目。

費目流用【句】〔法〕豫算の各款項に定めたる費目の金額を、彼此流用すること。財政上、非常處分を爲す場合の外、禁ぜらる。

ひもく 比目【名】目を比(ナラ)ぶること。

比目の魚【句】『戰國策の燕國の條に「比目之魚、不㆓相得㆒、則不㆑能㆑行。故古人稱㆑之。以㆓其合㆒兩如㆑一也。今山東合㆑弱、而不㆑能㆑如㆑一。是山東之智、不㆑如㆑魚也」、史記の封禪書に「東海致㆓比目之魚㆒、西海致㆓比翼之鳥㆒」とあり』ひもくぎよ(比目魚)に同じ。

比目の枕【句】男女相ならびて寢ぬる枕。同衾の枕。（運歩色葉集）「比目枕、ヒモクノマクラ」

ひもく 皮目【名】〔植〕『英 Lentice』樹木の根又は莖の表面に存する、特種の孔。空氣の流通を司る機能を有し、氣孔と相似たり。かはめ。皮孔。

びもく 美目【名】うつくしき目つき。

美目盼(ハン)たり【句】『詩經の衞風碩人篇に「螓首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」とあり。盼は、黑目と白目との分明なるさま』美人の目の、はっきりと美はしき形容。

びもく 眉目【名】㈠眉(マユ)と目(メ)と。㈡みめ。容貌。㈢面目。ほまれ。名譽。十訓「祕曲を吹く間、白髮、たちどころに元の如し。尤も道の眉目といふべし」（太平記）「今度、諸人の辭退する討手を、我等兄弟……、その選に相當る事、且は弓矢の眉目なり」

眉目、畫(ガエ)くが如し【句】『後漢書の馬援傳に「爲㆑人明㆓鬚髮㆒、眉目如㆑畫」とあり』容貌、秀でたり。

眉目を開く【句】名譽を得。面目を施す。「愁眉を開く」參照。（太平記）「法相(ホッサウ)は、六家の長者たるべし、天台は、諸宗の最頂なりと宣下せられ、共に、眉目をぞ開きける」

ひもくぎよ 比目魚【名】〔動〕『爾雅の釋地五府篇に「東方有㆓比目魚㆒焉。不㆑比不㆑行。其名謂㆓之鰈㆒」とあり。目を比(ナラ)ぶる魚の義』㈠かれひ(鰈)に同じ。㈡ひらめ(平目)㈡に同じ。

ひもげいとう 紐鷄頭【名】〔植〕せんにんこく(老鎗穀)に同じ。

ひもざ 紐座【名】紐を通して結び附くるための座金(ザガネ)。

ひもさす 紐さす【句】ひも(紐)の條下を見よ。

ひもじ【名】『干文字の義。**もじ**(文字)は接尾語。**ひ**(干)は**ひだるし**の略』ひもじきこと。（一代男）「腹撫でてゐる程に、又、あるじの出て、後にひもじにならぬ程まゐれといふ」

ひもじ【形二】『前條の語を、志久活に活らかしたる語』腹へりたり。ひだるし。餓ゑたり。

ひもじい時にまづい物無し【句】「ひだるい時にまづい物無し」に同じ。〔諺語〕

ひもじき時のまづい物無し【句】前條に同じ。〔諺語〕（續膝栗毛）「吸物椀……。蓋を取りて見れば、玉味噌の濁りし汁に、大根の葉を刻み込んで、餅を入れたる雜煮なり。ひもじき時のまづい物なしに、彌次郎は、目をふさいで、一膳食って仕舞ふに」

ひもじぐさ 火文字草【名】次條の略。鷹筑波「牛王(ゴウ)とも知らで縒りぬる元結に（といふ句に）竹田の子供火もじぐさする」

ひもじぐさり 火文字鎖【名】ひまほし(火廻)に同じ。（新續犬筑波）「暮るる日に火文字ぐさりの螢かな」

ひもじっくい 紐漆喰【名】煉瓦などに、紐のごとく細長く塗りたる漆喰。

ひもすがら 終日【副】『すがらを見よ』ひねもす(終日)に同じ。

ひもずどり ひもす鳥【名】〔動〕からす(烏)の異稱。〔古語〕（祕藏抄）「日暮れぬと駒を早むるみ山ぢの木の下すごく鳴くひもす鳥」

ひもち 火持・火保【名】火の、久しく消えずにあること。火力のあるあひだ。

ひもち 氷餠・冰餠【名】「氷室(ヒム)の節句」を見よ。

ひもちの祝【句】「氷室(ヒム)の節句」に同じ。

ひもつ 被物【名】『被物(カツケモノ)を音讀したる語』絹布類の引出物(ヒキデモノ)。かづけもの。被物(ヒブ)。（盛衰記）「御布施には、……、その外、被物・裹物(ツツミモノ)、庭上、岡を成せるが如し」

びもつ 美物【名】びぶつ(美物)に同じ。

ひもつき 紐附【名】㈠紐の附きてあること、又その物。ひぼつき。㈡小兒の衣服の、紐の附きてあるもの。ひぼつき。㈢なはつき(繩附)に同じ。

ひもつきぶくろ 紐附袋【名】紐の附きてある袋。ひぼつきぶくろ。

ひもづきん 紐頭巾【名】紐を附けて、顎の下にて結びなどするやうにせる頭巾。（續山の井）「春寒み解かぬや花の紐頭巾」

ひもつけ 紐附【名】衣服・調度などの、紐を附くべき所。びぼつけ。（舞の本（烏帽子折））「直垂(ヒタタレ)……、左の手の紐つけには、齋垣(イガキ)・鳥居・社壇を縫ひ」

ひもと 火元【名】㈠火のある所。ひあひ。ひのもと。（和合人）「火元の知れぬやうにと思ひ、行燈の上にある燒酎火を縛った竹を隱さうとする」㈡火災の起りたる家。(火先(ヒサキ)に對して)（方丈）「都の巽より、火出で來りて、……、火元は、樋口(ヒグチ)・富小路(トミノコウヂ)とかや」㈢かうもと(香元)に同じ。「火下」

ひもとき 紐解【名】ひもおとし(紐落)に同じ。

ひもとく 紐解く【句】ひも(紐)の條下を見よ。

ひもとく 繙く【動四他】『紐を解く義』㈠「帙(チツ)を繙く」を見よ。㈡書物を開きて讀む。繙讀す。繙閱す。

ひもとほし 紐通【名】器物などの紐を通すべき孔。ひぼとほし。

ひもとみ 火元見【名】德川時代に、將軍又は藩主の命を受け、火災の現場に出張し、火元を見屆けて報告せし使。

ひもなほし 紐直【名】ひもおとし(紐落)に同じ。

ひもの 干物・乾物【名】魚に鹽をひきなどして、日に乾したるもの。ひうを。ほしうを。ひざかな。枯魚。

ひもの 檜物【名】㈠檜の薄き板にて作れる曲物(マゲモノ)。㈡まげもの(曲物)に同じ。

ひものざ 檜物座【名】鎌倉・室町時代の七座の一。檜物を賣りし所。

ひものざいく 檜物細工【名】檜物を作ること、又その作りたる物。

ひものざいくし 檜物細工師【名】次條に同じ。

ひものし 檜物師【名】檜物を作る工人。ひものざいくし。ひものだくみ。

ひものしやく 檜物師役【名】天正の頃、甲斐國にて、檜物師に課したる雜稅。

ひものだくみ 檜物工【名】ひものし(檜物師)に同じ。〔古語〕（夫木）「まさき割る檜物工や出でぬらん村雨やみぬ笠取の山」

ひものちやう 檜物町【名】㈠〔地〕東京市日本橋區にある町。㈡『常磐津の總家元たる文字太夫は、代代、この町に住するよりいふ』常磐津の太夫の語りぶりを賞むる時に叫びていふ語。（柳樽）「檜物町一しほ味をうまく響め」

ひものぶね 檜物船【名】檜物に用ふる材木を積みたる船。（盛衰記）「當國の檜物船とて、まきの木積みたる船」

ひもの-や 檜物屋【名】㊀檜物を作り或は賣るを業とする家、又その人。㊁徳川時代に、江戸淺草駒形(コマガタ)にありし、奈良茶飯の料理屋。

ひも-のり 紐海苔【名】〔植〕きやうのひも(京紐)に同じ。

ひもの-れうり 干物料理・乾物料理【名】乾魚を調理すること、又その食品。

ひも-はなし 紐放【名】おびとき(帶解)に同じ。

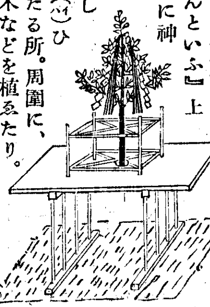
ひもむし-るゐ 紐蟲類【名】〔動〕蠕形(ゼンケイ)動物中、扁蟲類の一類。體は細長くして、圓筒狀を成し、環節無く、體の前端に、伸縮自在の吻ありて、體内に收むるを得、には前端よりやや後方に開き、腸の兩側口は、盲囊、多數に存し、肛門は後端に開口す。多くは海中に棲息し、又、海藻の間、泥中等を爬行す。

ひ-もん 祕文・秘文【名】祕密の咒文(ジユモン)。謠曲(皇帝)「祕文を稱へ」

ひ-もも 緋桃【名】〔植〕桃の一品種。緋色の花を著くるもの。

ひも-らん 紐蘭【名】〔植〕いはひも(岩紐)に同じ。

ひもろ-ぎ 神籬【名】『みもろ(御室)を見よ。きは城(キ)の義ならんといふ』上古、假に神靈の居る所として齋(イハ)ひ祭りたる所。周圍に、常磐木などを植ゑたり。あまつひもろぎ。ひぼろぎ。紀「神籬、此云二比莽呂岐一」


(もひろぎ)

ひもろ-ぎ 胙【名】『前條の神籬に供ふる物の義』神に奉る供物。〔古語〕夫木「みそぎしてながめわびぬる雪もよに神のひもろぎとくるうれしさ」

ひもろぎ-の-まき 神籬卷【名】〔書〕神籬の事を考證し、併せて出雲大社の事を記せるもの。一卷。神門守臣の撰。

ひもろけ 酹【名】酒を地にそそぎて、神を祭ること。運歩色葉集「酹、ヒモロケ」

ひや 冷【名】㊀ひやみづ(冷水)の略。(多くは、接頭語お(御)を添へていふ) 和合人「おらあ、おひやを二三盃戴かねえでは、生氣は附かねえ」㊁ひやざけ(冷酒)の略。醒睡笑「私には、ひやを下されよと所望す。即ち冷酒出したれば」

ひ-や 火矢・火箭【名】㊀古、火を仕掛けて發射せし矢。㊁火藥を仕掛けたる火器。石火矢・棒火矢・炮烙(ハウロク)火矢・隱(カクシ)火矢など、種種あり。

ひ-や 火屋【名】やきば(燒場)に同じ。和泉式部「あはれこの月こそ曇れ晝見つる火屋の煙は今や立つらん」羅士產「鐃鉢(ネウハチ)・鉦(ドラ)の音して、火屋の烟立ち昇るを見よ」

火屋へ片足【句】次條の略。

火屋へ片足蹈込む【句】老衰し又は病み衰へて、死期に近づける形容。棺桶へ片足。〔諺語〕五十年忌歌念佛「年六十に餘って、火屋へ片足蹈み込んで」

ひ-や 鄙野【名】やひ(野鄙)に同じ。

ひや (英 Hear)【感】傾聽又は贊成の意を示すために發する聲。ひやひや。(のおに對して)

びや【名】びいや(麥酒)に同じ。

びや 毘耶【名】〔地〕びしや(毘耶)の誤讀。

毘耶の城【句】びしやりじやう(毘耶離城)を見よ。八犬傳「維摩(ユヰマ)の室に毘耶の城」

ひやあ【感】驚きたる時などに發する聲。義經千本櫻「ひやあ、その中に、代官所へ上げる年貢銀、三貫目といふ物盜み取られ」

ひや-あせ 冷汗【名】ひややかなる汗。甚しく恥ぢ又は氣づかふ時などに出づ。慚汗。冷汗(レイカン)。

ひやい【名】ひあいの訛。平假名盛衰記「さっても、ひやいな騙(ダマ)し樣、中程から、ほぐれが來て、わしや、あぶあぶ思うてゐた」

ひやう 兵【名】ふ(步)に同じ。

ひやう 平【名】㊀〔語〕ひやうしやう(平聲)に同じ。(仄(ソク)に對して) ㊁〔語〕ひやうじ(平字)に同じ。(仄に對して) ㊂ひやうでう(平調)の略。拾芥抄「宮、一越。商、平」

ひやう 評【名】可否・善惡等を論じ定むること。しなさだめ。批評。品評。評論。

ひ-やう 丙【名】へい(丙)に同じ。觸穢考「三穢(サンエ)の事……甲の穢……ひやうの穢」

ひ-やう 飛揚・飛颺【名】とびあがること。

ひやう【貌】㊀思ひがけなきさま。ひよい。突然。〔古語〕蜻蛉「ひやうと寄り來ていふ」㊁矢を射る時の音。平家「よっぴいて、ひやうと射る」

びやう 鋲【名】『鋲は、兵の字の音を借りて作りたる和字』㊀びやうね(鋲根)の略。㊁釘の一種。頭部に笠あるもの。金・銀・銅・鐵などにて製し、裝飾の用を兼ぬ。びやうくぎ。のしがたの釘。りべっと。

びやう 病【名】やまひ。わづらひ。病氣。疾患。「生(シヤウ)・老・病・死」

び-やう 微恙【名】『つつが(恙)㊁を見よ』すこしのやまひ。輕きわづらひ。小恙。

びやう 未央【名】びやうきゆう(未央宮)の略。源氏「楊貴妃の形は、……太液の芙蓉、未央の柳にかよひたりし御形を」

びやう 病【接頭】病氣に罹りてある意。「病宰相」

びやう-あ 病痾【名】びやうき(病氣)に同じ。

びやう-いん 病因【名】病氣の原因。病原。病根。

びやう-うち 鋲打【名】㊀鐵板などを接合するため又は裝飾のために、鋲を打つこと。㊁次條の略。柳樽「日傘と扇鋲打を十重二十重」

びやううち-かご 鋲打駕籠【名】次條に同じ。

びやううち-のりもの 鋲打乘物【名】乘物㊁の、裝飾に鋲を打ちたるもの。全體青漆にして、押緣を黑塗にするを常とし、徳川時代に、大名の奧方などの乘用とせり。びやううち。

びやう-おとぎり 未央弟切【名】〔植〕ともゑさう(巴草)に同じ。

ひやう-か 評價【名】㊀價格を評定(ヒヤウテイ)すること、又、評定したる價格。㊁〔法〕賣買などの時、當事者以外の第三者が、その賣買の目的となりたる物件に對し、評定して附したる、相當の價格。

びやう-か 病家【名】㊀病人のある家。著風俗「親しき人人、藥の事など沙汰しはべるに、折節、若い輩誘ひまかりて、病家を憐みし人の中に」㊁醫師が、治療を乞はれたる患者の家を指していふ語。

びやう-か 病架【名】びやうしやう(病床)に同じ。新版歌祭文「病架より、母は、やうやう探り出で」義士銘銘傳「一寸お目どほりが致したい。御病架へ通ります」

びやう-か 病暇【名】病氣のために請ひ得たる休暇。庭訓「請暇・病暇」

ひやうか-かかく 評價價格【名】評價をなしたる價格。評價額。

ひやうか-がく 評價額【名】前條に同じ。

ひやう-かく 兵革【名】へいかく(兵革)に同じ。盛衰記「鳥羽院晏駕の後は、兵革打續き」

びやう-かく 病客【名】びやうにん(病人)に同じ。

びやうか-さき 病家先【名】醫師が治療を乞はれて出向きたる病家。

ひやうか-せうきやくはふ 評價消却法【名】〔經〕價格消却法の一。所有物に就きて、毎年評價をなし、減額だけを消却高とするもの。

びやう-かづら 未央葛【名】〔植〕未央葛科に屬する上昇植物。葉は卵形又は橢圓形にして、膜質、對生又は輪生す。葉柄に一箇の腺を有せるものと、有せざるものとあり。花は黃色にして、總狀花序に排列し、果實は星芒狀をなし、翅を有す。原產地は臺灣・東印度。

びやうかづら-くわ 未央葛科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉門・被子類・離瓣花區の一科。小喬木・灌木・亞灌木或は稀に大喬木にして、主に藥用又は觀賞用に供す。約五十七屬・五百種を含む。金虎尾科。

ひやうか-にん 評價人【名】評價をする人。

びやうか-まはり 病家廻【名】醫師が、その病家先を、診察のために訪問しまはること。往診。

びやう-かん 病間【名】㊀『論語の子罕篇に「子疾病、……。病間」とあり』病氣のす

こし癒えたる時。㊁病める間。病中。

びやう-かん 病監【名】監獄の一部、病囚を居らしむる室。

びやう-がん 病雁【名】病に罹れる雁。芭蕉「病雁の夜寒に落ちて旅寝かな」

びやうか-ゐゐん 評價委員【名】評價の事を委任せられたる委員。

ひやう-き 兵氣【名】へいき(兵氣)に同じ。太平記「兵氣といふ事あり」

ひやう-ぎ 評議【名】意見を交換して議すること。さうだん。商議。

びやう-き 病氣【名】やまひ。わづらひ。不快。疾病。病痾。

病氣の問屋【句】種種の病氣の、一身に集まれること、又その人。〔俚語〕

びやう-き 病鬼【名】びやうま(病魔)に同じ。謠曲(皇帝)「さては病鬼よ、遁さじと」

びやうき-あがり 病氣上【名】びやうご(病後)に同じ。

ひやうぎ-くわい 評議會【名】評議をする會合。

びやうき-けっきん 病氣缺勤【名】病氣のための缺勤。

びやうき-けっせき 病氣缺席【名】病氣のための缺席。

びやうき-ことわり 病氣斷【名】病氣缺勤又は病氣缺の席旨を、先方に通告すること。

びやうき-とどけ 病氣屆【名】病氣缺勤又は病氣缺席の屆。

びやうき-ぶん 病氣分【名】表面上、假に病氣なりとするあつかひ。

びやうき-ほけん 病氣保險【名】しっぺいほけん(疾病保險)に同じ。

びやうき-みまひ 病氣見舞【名】病氣の經過如何を問ふために見舞ふこと。

びやう-きん 病菌【名】〔醫〕びやうげんきん(病原菌)に同じ。

びやうき-もち 病氣持【名】病のある人。やまひもち。

びやう-きゆう 未央宮【名】支那漢の代に長安にありし宮殿。高祖の時、蕭何（セウカ）の築造せしもの。びあうきゆう。

びやう-きよ 病居【名】びやうしつ(病室)に同じ。武家義理物語「始めて枕を上げ、病居も改め」

ひやうぎ-ゐん 評議員【名】評議會にて評議する人。

ひやう-ぐ 兵具【名】㊀へいき(兵器)に同じ。盛衰記「兵具を調へ、軍兵など集められ」同「明經道（ミヤウギヤウダウ）の博士なり。兵具を帶する事、然るべからず」㊁鎧を著ること。盛衰記「兵具したる者三十騎ばかり、走り出でて」

びやう-く 病軀【名】びやうたい(病體)に同じ。

びやう-く 病苦【名】病みてくるしむこと。病の苦痛。

びやう-くぎ 鋲釘【名】びやう(鋲)㊁に同じ。

ひやうぐ-くらべ 兵具比【名】兵具の優劣を比ぶること。盛衰記「兵具比・勢汰（セイゾロヘ）して著到あり」

ひやう-くわ 兵火【名】へいくわ(兵火)に同じ。太平記「鬨の聲、京・白河に響き渡りつつ、兵火、四方に吹き覆ふ」

ひやう-くわ 苹果【名】〔植〕りんご(林檎)に同じ。

びやう-くわん 病患【名】やむこと。病氣。疾患。びやうげん。

ひやう-けつ 評決【名】評議して決定すること。

ひやう-げん 評言【名】ひやうご(評語)に同じ。

びやう-けん 病犬【名】病氣に罹れる犬。

びやう-げん 病原・病源【名】やまひのもと。病因。病根。

びやう-げん 病患【名】びやうくわん(病患)に同じ。盛衰記「その病患は、惡瘡にて候ひける間」

びやうげん-きん 病原菌・病源菌【名】〔醫〕生物體に寄生して、病原を爲す細菌。病原體。病原ばくてりや。病菌。

びやうげん-げんせいどうぶつ 病原原生動物【名】〔醫〕他の生物に寄生して、病原を爲す原生動物。病源原蟲。

びやうげん-げんちゆう 病原原蟲・病源原蟲【名】〔醫〕前條に同じ。

びやうげん-たい 病原體・病源體【名】〔醫〕びやうげんきん(病原菌)に同じ。

びやうげん-ばくてりや 病原バクテリヤ・病源バクテリヤ【名】〔醫〕びやうげんきん(病原菌)に同じ。

ひやう-ご 評語【名】批評の言葉。評言。

ひやう-ご 兵庫【名】へいこ(兵庫)に同じ。

ひやうご 兵庫【名】㊀〔地〕四十三縣の一。攝津國の神戸（カウベ）市及び武庫（ムコ）・川邊（カハベ）・有馬の三郡、丹波國の氷上（ヒカミ）・多紀（タキ）の二郡と、播磨・但馬・淡路の三國全部とを管轄し、縣廳を神戸市に置く。明治の初年、兵庫鎭臺を置き、直に兵庫裁判所と改め、更に改稱せし舊兵庫縣を基礎とし、攝津縣の改稱なる豐崎縣を併せて、攝津・淡路の一部を管せしめ、四年、藩を縣としたる尼ケ崎・三田（サンダ）の兩縣をも併せて、九年、更に飾磨（シカマ）縣(所管は播磨全國)と豐岡縣の一部(但馬全國と丹波國多紀・氷上二郡即ち笹山・柏原（カイバラ）二藩の地)及び名東（ミヤウトウ）縣の一部なりし淡路國を併せて、今に至れり。㊁〔地〕『神功皇后の時、兵庫を置かれし地なるによりていふ』兵庫縣神戸市の一部。もと八部（ヤタベ）郡に屬せしが、明治十二年、神戸市に合併し、今、その湊西區と稱す。**おほわだ**(大輪田)・**さびえ**(左比江)・**むこのみなと**(武庫水門)參照。㊂**ひやうごわげ**(兵庫髷)の略。平家「福原・兵庫・板宿（イタヤド）・須磨に籠る勢（セイ）」太平記「正成參二兵庫一事」

びやう-こ 病故【名】病氣の事故。

びやう-ご 病後【名】病氣の後。やみあがり。病餘。

ひやうご-かう 兵庫港【名】〔地〕攝津國神戸市に屬して、神戸港の西南に連なる港。上古も、務古水門（ムコノミナト）・大輪田泊（オホワダノトマリ）など稱して有名なりし所。慶應三年、神戸開港以來、漸次壓倒せられたり。

ひやうご-ぐさり 兵庫鎖・兵庫鏁【名】『兵庫寮にて製したる鎖、製作巧なりしより、一般にすぐれたる製作の品を稱するに至れり』昔、金又は銀などにて作り、刀の帶取に用ひし鎖。太平記「兵庫鎖の丸鞘の太刀」同「御所作の兵庫鎖の御太刀」

ひやうご-し 兵庫司【名】**ひやうごれう**(兵庫寮)を見よ。

ひやうご-しき 兵庫職【名】**ひやうごれう**(兵庫寮)を見よ。

ひやうご-だる 兵庫樽【名】『攝津國兵庫にて酒造に用ふるよりいふか』**かたてをけ**(片手桶)に同じ。

びやう-こつ 病骨【名】びやうたい(病體)に同じ。

ひやうご-とかい 兵庫渡海【名】屋形・矢倉を缺き、又、臺ありて、垣立（カキタツ）のなき渡海船。

ひやうご-のかみ 兵庫頭【名】兵庫寮の長官。盛衰記「兵庫頭賴政」

ひやうご-ぶぎやう 兵庫奉行【名】德川幕府の職制の一。攝津國兵庫に駐在し、老中支配の下に、外國貿易、その他、兵庫市街の事を管掌せしもの。定員一人。役高千石、役料現米六百石。芙蓉間詰（フヨウノマツメ）たりき。

ひやうご-まげ 兵庫髷【名】『髮を罠（ワナ）にして結ひたるが、兵庫鎖に似たるよりの名といひ、或は、攝津國兵庫港佐比江（サビエ）町の遊女が始めたるよりいふとも、元吉原の妓樓兵庫屋の遊女より起るともいふ』女子の結髮の一。唐子髷（カラコワゲ）の一變したるもの。慶長以來、都鄙の中以下の婦女の間に、盛んに行はれたり。ひやうごわげ。ひやうむすび。ひやうご。俗徒然「昔を今に、兵庫曲をかしげに」

ひやうご-むすび 兵庫結【名】前條に同じ。

びやう-こん 病根【名】㊀病氣のもと。病原。病因。㊁惡習の根本。弊根。

ひやうご-もの 兵庫者【名】「御免（ゴメン）あれ兵庫者」を見よ。

ひやうご-れう 兵庫寮【名】王朝時代に、兵庫の儀仗及び兵器の出納等を掌り、勅によりて兵器を請ふ者ある時、覆奏して渡しし官廳。天武天皇の時、既に兵庫職あり、大寶元年、寮として、左右の二に分ち、各、職員に、頭（カミ）・助（スケ）・大少允（ジョウ）・大少屬（サクワン）・史生（シジヤウ）・使部・直丁（チキチヤウ）ありき。後世、寮を司に改め、次で、寛平八年、左右兵庫及び兵造・鼓吹（クスキ）の四司を合して、兵庫一寮とし、後、又、兵部省の被官となりしが、間もなく舊に復し、後世、助に權官

の設もありたり。つはものくらのつかさ。**うちのひやうごのつかさ**(内兵庫寮)參照。

ひやうご-わげ 兵庫髷 【名】 **ひやうごまげ**(兵庫髷)に同じ。

ひやうご-をどり 兵庫踊 【名】 江戸時代に、攝津國兵庫にて行はれし、一種の踊。

びやう-ざ 病者 【名】 **びやうじや**(病者)の約。〔古語〕 源氏「いろいろのびやうざのみあつかひ、心の暇なき程に」

びやう-さい 病災 【名】 ❶病氣と、わざはひと。❷病氣のわざはひ。

びやうさい-ほけん 病災保險 【名】 **しっぺいほけん**(疾病保險)に同じ。

ひやう-ざう 評贓 【名】 贓物を評價すること。

びやう-さう 病相 【名】 **びやうじやう**(病狀)に同じ。運歩色葉集「病相、ビヤウサウ」

びやう-さう 未央草 【名】〔植〕 **ともゑさう**(巴草)に同じ。

ひやうさう-さんぐんじ 兵曹參軍事 【名】 ❶支那唐代に、中央政府の軍衛なりし十六衛の職員の一。❷鎭守府の軍監(グンゲン)の唐名。

びやう-さん 病蠶 【名】 病に罹れる蠶。

ひやう-し 拍子 【名】『ひやくし(拍子)の音便』 ❶**ひやくし**(拍子)に同じ。字類抄「拍子、ヒヤウシ。拍板樂器名」 ❷音樂・歌舞の緩急・曲節。はうし。源氏「物の上手とおぼしき限、とりどりにうち合はせたるひやうしなど」 太平記「拍子を替へて歌ふ聲を聞けば」 ❸〔文〕連句の附け方の一。前句噂なる時、附句にて、その噂せらるる物の姿を現すもの。例へば、「上戸衆の寄れば受けるも知らぬなり」といふ句に、「さらりさらりと手を打ちにけり」と附くる類。❹能樂にて、大鼓(オホツヅミ)・小鼓・笛・太鼓を、諸に合はせて鳴らすこと。これを四拍子(シビヤウシ)といふ。❺警戒又は合圖のために、太鼓・拍子木などを打つこと。曾我「夜半の拍子は、何の用ぞや。斯樣の狼藉鎭めんためなり。打止めよ」 ❻調子。ぐあひ。五十年忌歌念佛「このひやうしならば、大阪の仕合(シアハセ)もよかろ」 ❼しあはせ。運(ウン)。冥途飛脚「さあ、拍子が直った。來年も仕合(シアハセ)馬」 ❽をり。しほ。はずみ。とたん。機。機會。續膝栗毛「かけ出して行くひやうしに、何やら、紙に包みし物を取落し」

拍子に掛(カ)る 【句】 機に乘ず。調子に乘る。鳩翁道話「つらいの、苦しいのと申すやうな事ではござりませぬと、拍子にかかって、身の上の難儀話」 和合人「拍子にかかって、己(スウ)ばかり飲んでゐるは」

拍子に掛く 【句】 節(フシ)を附く。狂言(養目)「拍子に掛けて申しませう」

拍子・幕 【句】 芝居にて、一幕の終に、拍子木を打鳴らして、幕を閉づること。八笑人「蔭芝居の聲色は、三座も爰に浮ぶかと、當(アタリ)は、舟の拍子・幕」 繁千話「討込の拍子・幕で」

拍子を取る 【句】 音樂・歌舞に合はせて、その節奏を助く。源氏「我も、時時拍子取りて、聲うち添へて」 お夏淸十郎壽連理の松「つんてん、つんてん、つつつん、口三味線の拍子取り」

ひやう-し 兵士 【名】 **へいし**(兵士)に同じ。盛衰記「辻辻固めたる兵士共、下知しまはして」

ひやう-し 兵師 【名】 **ひやうほふつかひ**(兵法遣)に同じ。新可笑記「新座の兵師、一刀あがらずして、皆、受になって」

ひやう-し 兵司 【名】 **つはもののつかさ**(兵司)に同じ。籠中抄「兵司、ヒヤウシ」

ひやう-し 兵死 【名】 兵器によりて死ぬること。盛衰記「兵仗の相ありやとの御詞、怪しく侍りて、これ、即ち兵死の御相ならんと申したりけるが」

ひやう-し 拍子 【助數】〔音〕 ❶樂音の時間上の單位の種類。例へば、二分音を一拍子とし、又は四分音を一拍手とする類。❷樂曲の各小節の拍(ハク)の數を示すもの。二拍より成るを二拍子といひて、第一拍は强聲、第二拍は弱聲、四拍に數ふべきを四拍子といひて、第一拍と第三拍とは强聲、第二拍と第四拍とは弱聲、なほ三拍子・六拍子の二種ありて、前者は、第一拍は强聲、第二拍と第三拍は弱聲、後者は、第一拍と第四拍とは强聲、第二拍・第三拍・第五拍・第六拍は弱聲。又、二拍子中、二分音符を一拍とするを、二分の二拍子といひ、四分音符を一拍とするを四分の二拍子といひ、四拍子に、四分の四拍子、八分の四拍子の二種、三拍子に、四分の三拍子・八分の三拍子の二種あり、六拍子には、八分の六拍子の一種あるのみ。

ひやう-じ 平字 【名】〔語〕 平聲の漢字。(仄(ソク)字に對して)

びやう-し 病死 【名】 病氣にて死ぬること。病歿。

びやう-じ 病兒 【名】 病氣に罹れる小兒。

ひやうし-あはせ 拍子合 【名】 音樂の拍子を合はすること。合奏。源氏「女樂(ヲンナガク)試みさせん。……、拍子あはせは、わらはべを召さん」

びやう-しう 病囚 【名】 病氣に罹れる囚徒。

ひやうし-かた 拍子方 【名】 歌舞・音樂の拍子を取る人。

ひやうし-ぎ 拍子木 【名】 二つ打合はせて鳴らす、小き方柱形の木。拍子を取り、又は夜まはりなどに打鳴らす。芝居にては、多くは、單に木(キ)とふ。たく。

拍子木が入(ハヒ)る 【句】 芝居などにて、狂言の切目(キレメ)に、拍子木を打鳴らす。木が入(ヒ)る。

ひやうし-きがう 拍子記號 【名】〔音〕『英 Time signature』 樂譜記號の一。音部記號の次にありて、助數詞の拍子❷の種類を示すもの。分數を以て記し、分母は一拍とする音の種類即ち時價を示し、分子は一小節中の拍の數を示す。例へば、$\frac{2}{2}$(二分の二拍子)・$\frac{2}{4}$(四分の二拍子)・$\frac{4}{4}$(四分の四拍子)など。四分の四拍子は、最も多く使用せられ、$\frac{4}{4}$の代りにC (common timeの略)を用ひて示すことあり。又、$\frac{2}{2}$の代りにϕを用ふることあり。

ひやうし-きき 拍子利 【名】 拍子を取ることに巧なる人。

ひやうしぎ-だこ 拍子木蛸・拍子木跰胝 【名】 常に拍子木を打つ仕事に從事するため、掌に生ずる跰胝(タコ)。和合人「拍子木蛸のある奴(ヤツ)だらう」

ひやうしぎ-やく 拍子木役 【名】 拍子木を打ち鳴らす役。

ひやうし-ごと 拍子事 【名】 時のはずみにて起る事。偶然の出來事。若風俗「人の命を取るほどの女がた、よろづの拍子事、又の世にも出來まじき名人」

びやうし-しや 病死者 【名】 **びやうしにん**(病死人)に同じ。

びやう-しつ 病室 【名】 病人を入れおく室。

びやう-しつ 病質 【名】 **びやうしやう**(病症)に同じ。

びやうし-にん 病死人 【名】 病死したる人。病死者。

ひやうし-ぬけ 拍子拔 【名】 豫想外に微弱・輕易などなるために、手ごたへのなきこと。はりあひぬけ。世間子息氣質「うち晴れたる遊に拍子ぬけして」 和合人「窺ひをれど、暫くあっても、目をさます樣子もなければ、拍子ぬけして」

ひやうし-まひ 拍子舞 【名】 舞踊の一種。立(タチ)方の白(セリフ)と地(チ)の淨瑠璃又は唄との掛合なるもの。

びやう-しん 病身 【名】 ❶多病の身。❷多病。病弱。

びやう-じめ 鋲締 【名】 鋲にて金屬板を締めて、接合すること。

びやうじめ-きかい 鋲締機械 【名】 鋲締に用ふる機械。水壓又は蒸氣壓を應用す。

ひやうし-もの 拍子物 【名】 ❶太鼓などにて拍子を取る舞囃子。祭禮の餘興などに行ふ。❷**てうしもの**(調子物)に同じ。

ひやう-しや 評者 【名】 批評をする人、又、批評したる人。

びやう-しや 病者 【名】 **びやうにん**(病人)に同じ。

びやう-じや 病者 【名】 前者に同じ。徒然「息災なる人も、目の前に大事の病者となりて」

ひやう-しやう 平聲 【名】〔語〕 漢字の四聲の一。上平と下平との總稱。

ひやう-しやう 評唱 【名】〔佛〕 古人の言を批評し提唱すること。

びやう-しやう 病床・病牀 【名】 病人のねどこ。やまひのとこ。病架。病席。病蓐。

びやう-しやう 病症 【名】 病氣のたち。病質。病性。

びやうーじやう 病狀【名】病氣の有樣。病態。病體。症狀。病相。

びやうしやうにっし 病床日誌・病牀日誌【名】病氣の經過の日記。

ひやうーしやく 評釋【名】批評を加へて解釋すること、又それを記したる書物。

びやうーじやく 病弱【名】病みて、身體のよわりたること。病衰。病羸。

びやうーじやく 病雀【名】病める雀。太平記「病雀、花を喰うて、飛揚の翅を伸べ」

びやうじやーにん 病者人【名】びやうじや（病者）に同じ。

びやうじやーもの 病者者【名】びやうじや「（病者）に同じ。

ひやうーじゆつ 兵術【名】へいじゆつ（兵術）に同じ。八笑人「少したりとも兵術の心得ある者」

ひやうーしよ 兵書【名】へいしよ（兵書）に同じ。運歩色葉集「兵書」

びやうーしよ 病所【名】**一** 病人の居る所。鎌倉三代記「靜かに靜かにと、心沈めて、病所の口、立ち寄れば」**二** くわんぶ（患部）に同じ。

びやうーしよう 病證【名】びしやうやう（病症）に同じ。運歩色葉集「病證、ビヤウシヨウ」

びやうーじよく 病蓐【名】病人の臥せるしとね。病人のねどこ。病床。

ひやうしーよろひ 拍子鎧【名】草摺の拍子よく鳴る鎧ならんとも、**ひをざし**（緋緘）の誤ならんともいふ。判官物語「草摺のしどろなるひやうし鎧の札（サネ）きよに」

ひやうーす 評す【動佐變他】批評す。評論す。

ひやうーすべ【名】妖怪の名。化物繪「ひやうすべ」

びやうーすゐ 瓶水【名】**一** 瓶の中の水。へいすゐ。**二** 涅槃經に「阿難事レ我二十餘年。……一經二其耳一、不二曾再問一。如下寫二瓶水一置中之一瓶上」とあるに本づく」師より弟子に傳ふる佛法の奧義を、瓶より瓶へうつす水に譬へていふ語。**しやびやう**（瀉瓶）參照。盛衰記「渡海・入唐し、青龍寺の大和尚に謁して、三密・五智の瓶水を受け」

びやうーすゐ 病衰【名】病みて、身體の衰ふること。病弱。病羸。

ひやうーせい 平聲【名】ひやうしやう（平聲）「を見よ。

びやうーせい 病勢【名】病氣のいきほひ。「病勢、大いに募る」

びやうーせい 病性【名】びやうしやう（病症）「に同じ。

びやうーせき 病席【名】びやうしやう（病床）に同じ。保元「今、病席の論二十四歲なり」鵜鷺合戰「病席に心を苦しまして、已に死門に臨むも、祈るに平癒を得たり」

ひやうーせつ 評說【名】ひやうろん（評論）に同じ。

ひやうーせん 兵船【名】へいせん（兵船）に同じ。平家「よき武者をば、兵船に乘せ」

びやうーそう 病僧【名】病氣に罹れる僧。

ひやうーそく 平仄【名】〔語〕**一** 平聲と仄聲と。平字と仄字と。平韻と仄韻と。**二** 漢詩の平字と仄字とにつきての法式。

平仄が合はぬ【句】**一** 詩が、平仄の法式を外る。**二** つじつま合はず。てにはが合はぬ。

ひやうーそく 秉燭・柄燭【名】『ひんそく（秉燭）を見よ』皿の中央に臍の如き物ありて、これに燈心を寄せかけて立つる燈蓋。多くは土器なり。

ひやうーぞく 兵俗【名】兵士と世俗の人と。盛衰記「斯くやんごとなき聖跡に、兵俗亂れ入りつつ」

びやうーたい 病體【名】病氣に罹れるからだ。病軀。病骨。

びやうーたい 病態【名】びやうじやう（病狀）「に同じ。

びやうたいーせいりがく 病體生理學【名】『獨 Pathologische Physiologie』病理學の一分科。生體及びその一部の機能の病的變化を研究するもの。

ひやうたくれ【名】**へうたくれ**の誤。膝栗毛「おへねえひやうたくれども」

ひやうたーじるゐせう 平他字類抄【名】〔書〕事物の名を類擧して、平聲（ヒヤウシヤウ）・上聲等四聲及びいろは順の方法によりて列集せるもの。四卷。嘉慶二年の奧書あり。後世の節用集類の先驅をなせるもの。

びやうーたれ【名】**ざふすゐ**（雜炊）一を云ふ。

〔河内國・播磨國邊の方言〕

ひやうーぢやう 兵仗【名】**一** 兵器。武器。太刀・弓箭などの類。保元「氏の長者たる程の者の、兵杖の先に懸かる事やあるべき」平家「弓箭・兵仗を帶（タイ）して、射あひ、斬りあひ」**二** ずゐじん（隨身）の異稱。**ひやうぢやうせんげ**（兵仗宣下）參照。東鑑「改二關白一爲二攝政一。勅二授兵仗一如レ故之由宣下」**三** つはもの。兵士。蟬丸「右大辨早廣、兵仗二三十、此處・彼處と搜し來り」

兵仗の相（サウ）【句】兵仗一によりて危害を加へらるべき人相。劍難の相。盛衰記「兵仗の相ありやとの御詞、怪しく侍りて、これ、即ち兵死（ヒヤウシ）の御相ならんと申したりけるが」

ひやうーぢやう 評定【名】**一** 評議して定むること。評議。增鏡「武士ども、寄り合ひ寄り合ひ、評定しけり」**二** 昔、親王・公卿が、淸涼殿の御前にて開きたる、臨時の評議。（僉議（センギ）に對して）名目抄「評定、ヒヤウヂヤウ。於二御前一有レ之」

ひやうぢやうーくわん 評定官【名】**一** 評定に與（カツ）る官。**二** 行政裁判所に屬し、その裁判に列席・合議する役。勅任又は奏任たり。

ひやうぢやうーさた 評定沙汰【名】鎌倉時代に、引付に於て判斷したる案を、評定所にて評議・決定すること。

ひやうぢやうーしゆう 評定衆【名】**一** 鎌倉・室町兩幕府の職制の一。執權と共に政務を評定・執行せし重職。政所（マンドコロ）執事・問注所執事を攝し、又、引付頭人を帶することもありき。六波羅探題・九州探題・關東管領の下にも、この職ありき。**ひやうぢやうぶぎやう**（評定奉行）參照。**二** **ざっそしゆう**（雜訴衆）に同じ。

ひやうぢやうーしよ 評定所【名】**一** 鎌倉時代に、評定衆の執務せし役所。**二** 德川幕府の裁判所。江戸城和田倉（ワダクラ）門外龍口（タツノクチ）にあり、三奉行所管の事件中、特に重大なる者、三奉行の一に關聯せる事件、大名・旗本の訴訟・越訴（ヲツソ）、その他、幕府の重要事件を裁判せり。事件の輕重・種類等に從ひて、職員の組職一定せず。專務の職員には、留役（トメヤク）・組頭・留役・目安讀（メヤスヨミ）・留守居・書役・同心等ありき。

ひやうぢやうしよーあらためかた 評定所改方【名】德川幕府の職制の一。評定所に屬して、事件を調査せしもの。

ひやうぢやうしよーかきものかた 評定所書物方【名】德川幕府の職制の一。評定所に屬せし書物方。

ひやうぢやうしよーかきやく 評定所書役【名】德川幕府の職制の一。評定所に屬して、書記の任に當りしもの。

ひやうぢやうしよーきんやく 評定所勤役【名】次條の略。

ひやうぢやうしよーきんやくーじゆしや 評定所勤役儒者【名】**ひやうぢやうしよめやすよみ**（評定所目安讀）を見よ。

ひやうぢやうしよーじゆしや 評定所儒者【名】前條の略。

ひやうぢやうしよーとめやく 評定所留役【名】德川幕府の職制の一。評定所に屬して、一切の書類を管理し、訴訟の書記を掌りしもの。三奉行より、各、その屬僚を出仕せしめて、これに當らしめたれど、常に評定所に在りて事に從ひしは、勘定奉行配下の者に限り、その數、十餘人あり。卑職なれども、後には、下調の大部分を擔當し、且つ先例の取調は、全くこの職に依りしを以て、審問・判決の外、裁判上の實務は、その手中に歸したり。

ひやうぢやうしよーとめやくーくみがしら 評定所留役組頭【名】德川幕府の職制の一。評定所留役を統率せしもの。寶曆八年の設置に係る。

ひやうぢやうしよーばん 評定所番【名】**ひやうぢやうしよるすゐ**（評定所留守居）の改稱。

ひやうぢやうしよーめやすよみ 評定所目安讀【名】德川幕府の職制の一。儒者より出役し、評定所に屬して、文書の整理を掌りしもの。數人あり。寬永六年、評定所勤役（キンヤク）儒者、又は、單に評定所勤役と改稱し、正德二年廢止せしが、享保三年再設し、寬政二年更に廢して、留役（トメヤク）・右

筆等の兼職としたり。

ひやうぢやうしよーめやすよみーじゆゐん 評定所目安讀儒員【名】前條に同じ。

ひやうぢやうしよーるすゐ 評定所留守居【名】德川幕府の職制の一。評定所に屬して、守衞の任に當りしもの。萬治中、始めて二員を置き、寛政三年一員を增し、後、評定所番と改稱せり。同心十八人づつ附屬したり。

ひやうぢやうーせんげ 兵仗宣下【名】『ひやうぢやう(兵仗)㊁を見よ』古、文官に隨身を許したまひし宣下。

ひやうちやうーどうじ 丙丁童子【名】『丙(ヒノエ)・丁(ヒノト)は、火の兄(エ)、火の弟(ト)の義なるよりいふ。**はちにんざうじ**(八人童子)參照』**ひ**(火)㊀の異稱。

ひやうぢやうーはじめ 評定始【名】鎌倉・室町時代に、毎年正月及び將軍襲職の時などに、始めて政務を評定せし儀式。

ひやうぢやうーぶぎやう 評定奉行【名】鎌倉・室町兩幕府の職制の一。評定衆の長老にして、引付頭人を兼ねたる者、これに任ぜられ、政所(マンドコロ)評定の事を總べ、評定衆の進退を指揮せしもの。鎌倉の管領家にも、これを置きたり。

ひやうーちゆう 評註【名】批評と註釋と。

びやうーちゆう 病中【名】病に罹りたる間。病氣中。病間。

ひやうっーと【副】ひよっとに同じ。鴉鷺合戰「一旦俗氣の浮び候まま、ひやうっと申し出だして候」

びやうーつぎて 鋲繼手【名】鋲にて接合したるもの。

ひやうーづば【貌】『ひやうとづばとを重ねたる語』射たる矢の、飛びて中る音。平家「ひやうづばと射て」

ひやうーてい 評定【名】品評して、價格などを定むること。

びやうーてい 病體【名】びやうじやう(病狀)に同じ。

ひやうーでう 平調【名】十二調子の一。五音の商、洋樂のホ調に相當す。漢名、大簇。源氏「平調におしくだして調べたまふ」

平調の板(タイ)【句】樂器にて、平調の音の出づる板。

ひやうでうーきよく 平調曲【名】〔音〕平調に屬する樂曲。例へば、想夫憐(サウフレン)・萬歲樂(マンザイラク)・越天樂(エテンラク)などの類。

びやうーてき 病的【貌】『英 Morbid』健全ならざるさま。常態ならざるさま。

びやうてきーせいかく 病的性格【名】〔醫〕『獨 Pathologische Charakter』精神病の一種。性格に、特種の異常なる點を備へたるもの。性格の異常。

ひやうーてん 評點【名】㊀ひてん(批點)㊀に同じ。㊁優劣を評定(ヒヤウテイ)して、これを表はす點數。

ひやうーでん 評傳【名】批評を加へたる傳記。

びやうーでん 病田【名】〔佛〕ひでん(悲田)に同じ。

びやうーどう 平等【名】㊀高下の區別なきこと。一樣なること。かたよらず行きわたること。㊁〔佛〕萬有を通じて、高下・深淺等の別なきこと。萬法(マンボフ)の一如なること。實相。法性(ホッシヤウ)。菩薩の修行上に於て、自利・利他の差別相を超えて、初めて圓滿なる平等に達するものと說く。(差別(シヤベツ)に對して)

平等大念(ダイネン)【句】〔佛〕平等の理を觀ずること。「十界(ジッカイ)一心」參照。

びやうどうーかい 平等界【名】〔佛〕平等無差別の世界。眞如實相の世界。(差別界に對して)

びやうどうーかく 平等覺【名】〔佛〕しやうがく(正覺)に同じ。

びやうどうーくわ 平等花【名】〔植〕『英 Regular flower』ふくしやさうしようくわ(輻射相稱花)に同じ。(不平等花に對して)

びやうどうーくわん 平等觀【名】〔佛〕萬有の平等なるを觀ずること。

びやうどうーくわんけい 平等關係【名】高下の區別なく對立する關係。

びやうどうーじ 平等寺【名】いなばやくし(因幡藥師)を見よ。

平等寺の藥師如來【句】〔佛〕さんによらい(三如來)を見よ。

びやうどうーしん 平等心【名】〔佛〕萬有平等の理を悟りて、一切衆生(シユジヤウ)の上に、差別の見(ケン)を起さず、平等に憐憫を垂るる心。

びやうどうーしやう 平等性【名】〔佛〕平等一如の理性(リシヤウ)。平等の眞如(シンニヨ)。

びやうどうしやうーち 平等性智【名】〔佛〕四智又は五智の一。平等性を觀得せる智。

びやうどうーしゆぎ 平等主義【名】彼此高下の差別を立てぬ主義。

びやうどうーせんきよ 平等選擧【名】選擧人が、學識・資產等の有無に拘らず、一切平等の地位に立ちて選擧すること。(等級選擧に對して)

びやうどうーせんきよーせいど 平等選擧制度【名】〔法〕選擧の方法を平等選擧とする制度。(等級選擧制に對して)

びやうどうーびやうし 平等拍子【名】〔音〕へいとうびやうし(平等拍子)を見よ。

びやうどうーわう 平等王【名】〔佛〕㊀『罪福の業(ゴフ)を公平に司るよりいふ。慧琳音義の卷五に「梵音閻魔。義翻爲二平等王一。此司二典生死罪福之業一」とあり』**えんまわう**(閻魔王)に同じ。㊁**じふわう**(十王)を見よ。㊂『佛祖統記の卷三十に「議立二一平等王一、賞レ善罰レ惡」とあり』成劫(ジヤウゴフ)の初に、始めて立てられて人民の主となり、刹帝利(セッテイリ)種の大祖となれりといふ者。正統記「他人の田種をさへ奪ひ盜む者出で來て、互に相爭ふ。これを決する人無かりしかば、衆、共に計らひて、一人の平等王を立て、名づけて刹帝利といふ」

びやうどうーゐん 平等院【名】山城國久世郡宇治町に在る寺。朝日山と號す。本尊は丈六の阿彌陀佛。もと源融(トホル)の別業にて、宇治院といひしが、後、陽成天皇の行宮、宇多天皇・朱雀天皇の離宮となり、又、藤原道長の山莊となり、その子賴通(ヨリミチ)、永承七年、佛像を安置して、寺となし、平等院と號す。治承四年、源賴政、ここに戰死し、延元元年、楠正成、賊軍をここに防ぐ。寺務は、天台宗に屬し、賴通の菩提所は淨土宗にて守る。佛殿鳳凰堂は、藤原時代の建築にして、莊嚴なること、前古無比と稱せられ、今、特別保護建造物たり。

びやうーどく 病毒【名】病氣の原因となる毒。

ひやうーな 莧菜【名】〔植〕ひゆ(莧)に同じ。

びやうーなう 病惱【名】病みなやむこと。病氣。盛衰記「親の所勞、子の病惱」同「かの母儀病惱の間は」

びやうーなん 病難【名】病氣の災難。

びやうーにん 病人【名】病氣に罹れる人。病者。患者。

びやうにんーあつかひ 病人扱【名】病人と同樣に、勞り取扱ふこと。

びやうにんーせん 病人船【名】戰時、病人・死傷者の運送に使用する船。現時の病院船の類。〔明治初年の語〕

びやうにんーやく 病人役【名】病人にても勤まるほどの、つまらぬ役。八笑人「そんな病人役なら、外の者にさっし。おれが自身に手をおろす程の事もあるめえ」

びやうーね 鋲根【名】鋲の頭の形をせる矢の根。

ひやうーは 兵波【名】山鳥の羽にて矧ぎたる矢。盛衰記「水破・兵破といふ鏑矢二つ差し」

びやうーば 病馬【名】病氣に罹れる馬。

びやうーはつ 病髮【名】病中又は病後の頭髮。今國姓爺「病髮に、冠引っかけ」

ひやうーばん 評判【名】㊀評して、善惡・優劣を判(カツ)つこと。批評して判斷すること。評議して判決すること。庭訓「管領寄人・右筆奉行人等評判也」㊁うはさ。とりざた。世評。㊂盛んに噂の材料となること。名高きこと。(善きにも惡しきにもいふ)

評判ぢや、評判ぢや【句】次條に同じ。膝栗毛「さあ、さあ、評判ぢや、評判ぢや。今が、三五郎腹切ぢや、腹切ぢや」

評判、評判、評判【句】興行物の入口にて、觀客を呼び寄するために、木戸番などの叫びて言ふ語。膝栗毛「この跡が、嵐吉(アラキチ)と友吉が所作事、評判、評判、評判」

ひやうはんーき 兵範記【名】〔書〕じんしやき(人車記)に同じ。

ひやうばん-き 評判記 【名】 藝人・美人などの名を列記して、世評を記せる書物。評判本。「役者評判記」「娘評判記」

ひやうばん-ぶれ 評判觸 【名】 昔、大阪の劇場にて、年末興行の終れる夜、座員等一同、提燈を携へ、二張の高張提燈を先に立てて、關係者の家を廻り歩きしこと。

ひやうばん-ぼん 評判本 【名】 **ひやうばんき**（評判記）に同じ。

ひやうばん-むすこ 評判息子 【名】 世間の噂に上る息子。

ひやうばん-むすめ 評判娘 【名】 世間の噂に上る娘。

ひやうばん-もの 評判者・評判物 【名】 世間の噂に上る人又は物。

びやう-びやう 【感】 べうべうに同じ。 犬子集「びやうびやうと廣庭に咲け犬櫻」

ひやう-ぶ 兵部 【名】 ㊀支那の官制にて、六部の一。軍衞・武官の選敍に關する事を掌りし所。 ㊁ひやうぶしやう（兵部省）㊀の唐名。 ㊂ひやうぶしやう（兵部省）㊀の略。（その職員に關していふ時に用ふ）

兵部の手番（テツガヒ） 【句】 射禮（シヤライ）㊁の前二日に行ひし手番。兵部省の能射の者二十人を選び、省の南門の射場にて行へり。 西宮記「兵部手番事」

びやう-ふ 病夫 【名】 病に罹れる男又は夫（ヲツト）。

びやう-ふ 病婦 【名】 病に罹れる婦人又は妻。

びやう-ふ 病符 【名】 陰陽家にて、病災を主るといふ神の方位。 子年は亥、丑年は子、寅年は丑、卯年は寅、辰年は卯、巳年は辰、午年は巳、未年は午、申年は未、酉年は申、戌年は酉、亥年は戌の方位といふ。

びやう-ぶ 屏風 【名】 『風を屏（シリゾ）け防ぐ具の義』 襖の如き物を、二枚乃至八枚番（ツガ）ひ合はせて、折り疊み得るやうに作り、室內に立てまはして、風を防ぎ又は隔とする具。 多くは二箇づつ對（ツイ）に作り、これを一雙といふ。 高さは普通六尺なれども、七八尺に及ぶもあり、又、二三尺に造れる、枕屏風と呼ぶもあり。 源氏「屏風を、やをらおしあけて、入りたまひぬ」

屏風と商人は直（スグ）には立たぬ 【句】 「商人（アキンド）と屏風は曲らねば世に立たず」に同じ。〔諺語〕 狂歌咄「屏風と商人はすぐにては立たぬものといへり」

屏風は曲らねば立たぬ 【句】 「人と屏風は直には立たずに同じ。〔諺語〕

屏風を覆（カヘ）す 【句】 物の、ばたりと倒るるさまの譬。 **びやうぶがへし**（屏風返）參照。 平治「馬は、屏風をかへすごとく倒るれば、材木の上にはね落され」

七尺（シチセキ）の屏風 【句】 普通のより丈高く造りたる屏風なるより、特にいふ語。 太平記「早業は、江都が勁捷にも超えたれば、七尺の屏風、未だ必ずしも高しとせず」 琴唄（ふき）「七尺の屏風も、躍らば、などか超えざらん」（琴唄のは、正しくは「へいふう」と讀む）

びやうぶ-おさへ 屏風壓 【名】 屏風を開き伸して、廣間などの臨時の隔とする時、その轉倒を防ぐに用ふる、鉛製又は陶製の具。

びやうぶ-がうら 屏風浦 【名】〔地〕 武藏國久良岐郡にある村、又その邊の海岸。海岸の名としては、横濱市と金澤村との間に亙り、崖角、屏風を立てたるが如くなるよりの名にて、附近に杉田梅林あり。

びやうぶ-がへし 屏風返・屏風覆 【名】 『「屏風を覆す」を見よ』 屏風の倒るる如く、ばたりと倒るること。 重帷子「鞍にたまらず、伴之丞、屏風がへしに、どうと落ち」

ひやうぶ-きやう 兵部卿 【名】 ㊀兵部省㊀の長官。 ㊁兵部省㊁の長官。 ㊂『源氏物語中の人物に因みたる名。**げんじかう**（源氏香）參照』 匂袋に入るる香（カウ）の一種。 五人女「近く寄れば、肌に附けし兵部卿のかをり、何とやらゆかしくて」

びやうぶ-ごし 屏風越 【名】 屏風を隔ててあること。 犬筑波「屏風ごしなる戀は屆かず（といふ句に）閨、やいかにつがひつがひのうらみ言」

ひやうぶ-しやう 兵部省 【名】 ㊀古の八省の一。職員に、卿・大輔（タイフ）・少輔（セウ）・大丞（ダイジヨウ）各一人、少丞二人、大錄（ダイサクワン）一

人、少錄三人の四部官及び史生（シジヤウ）・省掌・使部・直丁（チキチヤウ）ありて、內外の武官の考課・選敍・位記、兵士の徵發・訓練、兵器・儀仗・牧馬・驛傳の事を掌り、又中宮職・春宮（トウグウ）坊、六衞府の舍人（トネリ）、齋宮寮の門部（カドベ）等を判補し、衞士（エジ）・防人（サキモリ）、鎭守府の官人、太宰府及び諸國の武官を管し、衞府（エフ）の長官以下に給する馬料等の事にも關係せし役所。 被管は、兵馬（ヒヤウマ）・造兵・鼓吹（クスヰ）・主船・主鷹の五司なりしが、後、兵馬司を併せたる馬寮（メレウ）、衞門府の被管なる隼人司（ハヤトツカサ）・造兵・鼓吹の二司を左右兵庫の二司に併せて立てたる兵庫寮をも管するに至り、主船・主鷹の二司は廢絕したり。 つはもののつかさ。 **ぶぶしやう**（武部省）參照。 ㊁明治維新後、一時置かれし六省の一。 職員に、卿・大輔・少輔・大丞・權大丞・少丞・權少丞（權官は、後に廢止）・大錄・少錄（後、權官を增置し、更に正・權の中錄を增置せり）及び史生・省掌・使部ありて、海・陸軍鄕兵の招募・守衞・軍備・兵學校等の事を掌りし所。 被官に兵學寮及び武庫・會計・糺問の三司あり、後、軍醫察の增設あり、明治五年廢止せられ、陸軍・海軍の二省、これに代れり。

ひやうぶ-しやうしよ 兵部尙書 【名】 ㊀兵部㊀の長官。 ㊁ひやうぶきやう（兵部卿）㊁の唐名。

ひやうぶ-しゆじ 兵部主事 【名】 ㊀兵部㊀の第四階の職員。 ㊁兵部省㊀の職員兵部錄（ヒヤウブノサクワン）の唐名。

ひやうぶ-じらう 兵部侍郎 【名】 ㊀兵部㊀の第二階の職員。 ㊁兵部省㊀の職員兵部大輔（ヒヤウブノタイフ）の唐名。

びやうぶ-だたみ 屏風疊 【名】 屏風の如く折り疊むこと。

びやうぶ-だて 屏風楯 【名】 蝶つがひを附けて、屏風の如く疊むことを得るやうにせる楯。

びやうぶ-だな 屏風棚 【名】 床の間・書院などの脇に設くる棚の一種。

びやうぶ-ちやう 屏風帳 【名】 **とちやう**（斗帳）に同じ。 和名「小帳曰ㇾ斗。俗云㆓斗帳㆒、一云㆓屏風帳㆒」

びやうぶ-て 屏風手 【名】 『屈折の自由なること屏風の如きよりいふ』 **かはつがひ**（革番）に同じ。

びやうぶ-や 屏風屋 【名】 屏風を作り又はこれを賣るを業とする家、又その人。

ひやうぶ-らう 兵部郎 【名】 次條に同じ。

ひやうぶ-らうちゆう 兵部郎中 【名】 ㊀兵部㊀の第三階の職員。 ㊁兵部省㊀の職員兵部丞（ヒヤウブノジヨウ）の唐名。

びやうぶ-ゑ 屏風繪 【名】 屏風に描きたる畫。

びやう-へい 病兵 【名】 病氣に罹れる兵士。

びやう-へき 病癖 【名】 病的の癖。

びやう-ぼつ 病歿 【名】 **びやうし**（病死）に同じ。

ひやう-ほふ 兵法 【名】 ㊀**へいはふ**（兵法）に同じ。 ㊁**けんじゆつ**（劍術）に同じ。

下司（ゲス）の兵法、大疵（オホキズ）の基 【句】 「生兵法（ナマビヤウホフ）大疵の基」に同じ。〔諺語〕 八犬傳「下司の兵法大疵の基を開きし孝吉（タカヨシ）が誤に似て」

ひやうほふ-じん 兵法仁 【名】 次條に同じ。 甲陽軍鑑「兵法仁と申すは、勿論上手に使ひ」

ひやうほふ-しや 兵法者 【名】 次條に同じ。 甲陽軍鑑「兵法者は、太刀の甲乙仕り分け」

ひやうほふ-つかひ 兵法遣 【名】 **けんじゆつつかひ**（劍術遣）に同じ。 甲陽軍鑑「大將よくして、能き家老の無きは、兵法つかひの上手のごとし」

ひやう-ま 兵馬 【名】 ㊀**へいば**（兵馬）に同じ。 ㊁**ひやうまし**（兵馬司）の略。（その職員につきていふ時に用ふ）

びやう-ま 病魔 【名】 人を病に罹らすといふ惡神。 病鬼。 二豎。

ひやう-まい 兵米 【名】 **ひやうらうまい**（兵粮米）㊀に同じ。 盛衰記「住侶衆議して、五百石の兵米を送る」

ひやうま-し 兵馬司 【名】 兵部省㊀の被管。 職員に、正（カミ）・佑（ジヨウ）・大少令史（サクワン）各一人及び使部・直丁（チキチヤウ）ありて、牧馬・兵馬、驛傳の馬、公廨（クゲ）の馬牛及び民間

の馬牛等の事を掌りし所。大同三年、馬寮（レウ）に併せらる。ひやうまのつかさ。へいばし。へいばのつかさ。

ひやうまーのーつかさ 兵馬司【名】前條に同じ。

びやうーめい 病名【名】病氣の名稱。

ひやうーもん 平文【名】㊀漆塗の一。玉（ギヨク）・貝などを嵌め込み、漆地と共に平らに摺り磨きたるもの。平脱文（ヒヤウダツモン）。江次第「平文高机」㊁『平文は假借の字にて、實は豹文なりといひ、又、實は狂文なれども、經文（キヤウモン）と音相同じきを避けていへるなりともいふ』種種の色をまぜて彩りたるもの。一説に、紋を附くるに、一つ一つ放して、丸紋にせるものなりと。「狂文・評文」曾我「ひやうもんの烏帽子懸」盛衰記「平文の狩衣」東鑑「評文水干」

平文の移（ウツシ）【句】次條の略。

平文の移鞍（ウツシグラ）【句】平文㊁のある移鞍。殿上人の用ひしもの。江次第「平文移鞍」

平文の車【句】「文（モン）の車」に同じ。愚昧記「乘二息侍從清宗車一如何、是平文車也」

ひやうもんーし 平文師【名】平文㊀の製作を業とする人。

びやうーやなぎ 未央柳・金絲桃【名】〔植〕『花の全形、桃のに似て、雄蕊は金絲のごとくなるより、支那にては金絲桃と名づく』金絲桃科に屬する灌木。高さ二三尺。枝多し。葉は對生し、長楕圓形にして、鈍頂・全緣、葉柄なし。梅雨の頃、形、桃のに似たる五瓣・深黄色の花を開く。雄蕊は數多く、纖細にして、長く花外に出で、恰も金線の總の如し。花後、蒴果を結ぶ。觀賞用として栽培す。葉を煎服すれば惡阻（ツハリ）に効ありといひ傳ふ。

（びやうやなぎ）

びやうやなぎーくわ 未央柳科・金絲桃科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區に屬する一科。草本・灌木又は喬木。熱帶及び溫帶に產し、約四十二屬・八百二十種を含み、木材用・藥用又は觀賞用に供す。雌黃（シワウ）・弟切草（オトギリサウ）・未央柳等、これに屬す。きんしたうくわ。

ひやうーらう 兵粮・兵糧【名】㊀戰時、軍人に給する食料。軍餉。太平記「物具（モノノグ）をもせず、兵粮をも未だつかはで」㊁活動力を支持する材料となる物の譬。

ひやうらうーぜめ 兵粮攻・兵糧攻【名】糧道を絕ちて、敵をして、兵糧盡き、降服の已むなきに至らしむること。じきぜめ。

ひやうらうーづめ 兵糧詰・兵糧詰【名】前條に同じ。

ひやうらうーぶぎやう 兵粮奉行・兵糧奉行【名】織田・豐臣時代の臨時の職名。兵粮を辨備して、兵士に配り給することを掌りしもの。

ひやうらうーぶね 兵粮船・兵糧船【名】兵粮を運送する船。

ひやうらうーまい 兵粮米・兵糧米【名】㊀兵粮とする米。粮米。兵米（ヒヤウマイ）。平家「大船二艘に、兵粮米積み、物具（モノノグ）入れ、都を指して上りけるを」㊁武家時代に、兵亂に際し、幕府又は武門の棟梁が、兵に供するため、特に諸國に賦課して徵收せし米穀。

ひやうらうれうーしよ 兵粮料所・兵糧料所【名】兵粮の料を徵收せんがために指定したる土地。太平記「寺社本所の所領を、兵粮料所とて、押へて管領す」

ひやうーらん 兵亂【名】へいらん（兵亂）に同じ。保元「多くの凶徒を、諸國へ分け遣されば、定めて、なほ兵亂の基たるべし」

ひやうーり 【名】ひやうし（拍子）㈧の轉訛。浮世風呂「その拍子（ヒヤウリ）に、藥罐がぶつくる返つたから」

びやうーり 病理【名】各種の病につきての學理。

びやうりーかいぼうがく 病理解剖學【名】『獨 Pathologische Anatomie』病理學の一分科。病に際して起る形態的變化を研究するもの。肉眼的及び顯微鏡的に、臟器・組織及び細胞を研究し、更に顯微化學的及び顯微物理學的に、健康及び病的なる細胞の生活現象を研究す。

びやうりーがく 病理學【名】『獨 Pathologie』病理を研究する醫學。病理解剖學・病體生理學等に分る。

ひやうりーかづら ひやうり葛【名】〔植〕へくそかづら（屁屎葛）に同じ。

びやうりーしよ 病理書【名】病理學に關する書籍。

ひやうーりん 評林【名】批評を集めたる書籍。

ひやうーりやう 秤量【名】重量を、秤（ハカ）りにかけて量ること。

ひやうりやうくわーせい 秤量貨制【名】〔經〕『英 Currency by weight』貨幣を秤量貨幣とする制度。

ひやうりやうーくわへい 秤量貨幣【名】〔經〕『英 Current by weight』一定の形式及び重量を有せず、交換の都度、秤量して、その價格を定むる金屬貨幣。（計數貨幣に對して）

びやうーるゐ 病羸【名】病みてよわりたること。病衰。病弱。

ひやうーろん 評論【名】評して論ずること。批評論議すること。

ひやうろんーか 評論家【名】評論の專門家。批評家。

ひやうーゐん 平韻【名】〔語〕ひやうしやう（平聲）を、韻として用ふる時にいふ稱。（仄韻に對して）

びやうーゐん 病院【名】多數の病人を收容して療治するために、一定の條件を具備せる建物。

びやうゐんーがよひ 病院通【名】治療を受くるために、久しきに亙りて、病院に通ふこと。

びやうゐんーせん 病院船【名】『英 Hospital-ships』戰時に際し、病院組織を具備して、傷病兵を收容し、醫療・看護をするに用ふる船。

ひやうーゑ 兵衞【名】㊀古、兵衞府に屬して、閤門の守衞、行幸の供奉に任ぜし職員。定員、大寶の制にては四百人なりしが、後、三百人に減じ、內位の六位乃至八位以上なる嫡子にして、二十一歲以上なる者、及び郡司の少領以上の子弟にして、弓馬の術を心得たる者より採用せり。つはものとねり。㊁ひやうゑふ（兵衞府）の略。（その職員につきていふ時に用ふ）

兵衞の陣【句】㊀古の宮城の一部、兵衞の陣せし所。左兵衞府のは宣陽門三間に、右兵衞府のは陰明門三間に陣し、前者を左兵衞の陣、後者を右兵衞の陣といひ、特に、後者を兵衞の陣とのみいへること多し。増鏡「中宮の晝（ヒ）の御座へ、腰輿（タゴシ）寄せて、兵衞の陣より出でさせたまふ」

ひやうゑーのーつかさ 兵衞府【名】次條に同じ。空穗「ひやうゑのつかさの使」

ひやうゑーふ 兵衞府【名】五衞府、又、六衞府の一。左兵衞府と右兵衞府とに分れ、各、職員に、督（カミ）・佐（スケ）（各一人）・尉（ジヨウ）（大・少、各一人、後、少尉は二人）・志（サクワン）（大少、各一人、後、少志は二人）の四部官及び醫師・番長（各一人）・兵衞（初は四百人、後、三百人）・使部（初は三十人、後、十人）・直丁（チキチヤウ）（二人）ありて、兵衞を指揮して、閤門の守衞、宮闕の宿衞、朝儀の儀仗、行幸の前後の供奉・分衞、左右兩京內の巡檢等を掌りし役所。つはもののつかさ。つはもののとねりのつかさ。

ひやーおろし 冷卸【名】大桶に貯藏せる清酒を、販賣のため、冷酒のままにて、四斗樽に分ち詰むること。

ひやーか 冷か【貌】ひややか（冷やか）に同じ。〔古語〕夫木「うちそそぐ秋の村雨ひややかにて風に先だつ下の浮雲」

ひやかし 【名】㊀煮・茹（ユ）でなどすべき物を、あらかじめ水に浸してひやすこと。㊁賣物の價を問ひしのみにて、買はぬこと、又その人。〔素見〕㊂張見世（ハリミセ）の遊女を見あるきて、登樓はせぬこと。〔素見〕和合人「夕（ユフ）あ、どうかいふ風が吹いて、つい、ふらふらとひやかしに行（イ）つて」㊃なぶること。冷評。嘲弄。愚弄。和合人「これまでにして、そんなひやかし無しさ」

ひやかしーきやく 冷客・素見客【名】賣物の價を問ひしのみにて買はぬ人。

ひやかす 冷かす【動四他】『ひやす(冷す)より派生せる語』㊀煮・煮茹(ユ)でなどすべき物を、あらかじめ水に浸しておく。ふやかす。㊁賣物の價を問ひながら、買はず。「素見す」㊂なぶる。嘲弄す。愚弄す。冷評す。八笑人「あの手合(テア)は、男をひやかす事は、なんとも思ふものぢやあねえ」

ひやく 百【名】『ひやくしやう(百姓)の略』田舍者を嘲り卑めていふ語。〔俚語〕

ひやく 百【數】㊀十の十倍。もも。㊁あまた。多數。㊂年齡一百歲の略。蕪村「麥蒔や百まで生きる顔ばかり」㊃錢(ゼニ)一百文の略。

百で買った馬のやう【句】用をなさぬ物の譬。俚言集覽「百で買った馬のやう」

百に足らず【句】「百の口が拔けた」に同じ。

百になって百事を覺える【句】年齡長ずるに從ひ、自ら經驗も增す。〔諺語〕

百に一つ【句】百の中に一つ。甚だ稀なる場合の形容。

百の口が拔けた【句】『錢高百文にも足らぬ意』才智、人並に足らず。天保錢。**くひやく**(九百)參照。

百も承知【句】十分に知り辨へて居ること。和合人「先も承知だから、これ、百も承知と、兩方へ掛けた詞だが、才子だらう」

百も承知、二百も合點【句】前條を強めていふ語。

百も二百も承知【句】前條に同じ。

ひーやく 祕藥・秘藥【名】㊀祕傳の藥。祕方の藥。㊁妙藥。靈藥。

ひーやく 非役【名】役を罷めらるること。

ひーやく 飛躍【名】㊀をどりあがること。㊁勢よく活動すること。

闇中の飛躍【句】**あんちゆう**(闇中)の條下を見よ。

ひーやく 祕鑰・祕鑰【名】『祕密の庫を開く鑰(カギ)の義』奧義を闡明する方法。要訣。祕鍵。

ひやく 冷く【動下二自】㊀つめたくなる。冷ゆ。冷却す。㊁**ふやく**(潤く)に同じ。

びやく 白【名】**はく**(白)に同じ。

びやく 辟【名】『**みやく**(脈)の轉訛か』地の脈。地層。次條を見よ。

辟が打つ【句】地層崩る。「人辟(ヒトビヤク)打つ」參照。俚言集覽「懸崖などの折崩るるを、びやくが打つと云ふ」

ひやくーいう 百憂【名】多くのうれへ。

ひやくーいち 百一【名】㊀あまた。多數。嬉遊笑覽「百一口の菓子あり。百一とは、數の多きをいふ」㊁百の中の一つ。百分の一。㊂『百の中、眞實は一つあるのみとの意。**せんみつ**(千三)・**まんぱち**(萬八)參照』**うそつき**(噓吐)の異稱。

ひやくいちーぐしん 百一供身【名】〔佛〕次條に同じ。

ひやくいちーしゆぐ 百一衆具【名】〔佛〕**ひやくいちもつ**(百一物)に同じ。

ひやくいちーづけ 百一漬【名】胡瓜(キウリ)・茄子・白瓜・大根・紫蘇など、さまざまの物を麴の中にまぜたる漬物。えどいちづけ。

ひやくいちーもつ 百一物【名】〔佛〕『釋氏要覽の道具篇に「百一物、大概之辭也」とあり』僧家の一切の什具の總稱。

ひやくいちーもん 百一文【名】江戸時代に、朝に借りたる錢百文を、夕方に利息を附け、百一文として返濟せしこと。

ひやくいろーめがね 百色眼鏡・萬花鏡【名】**にしきめがね**(錦眼鏡)に同じ。

びやくーえ 白衣【名】㊀**はくい**(白衣)に同じ。(主に、神佛に關する裝にいふ)(黑衣(コクエ)に對して) ㊁白小袖に、指貫(サシヌキ)・直衣(ナホシ)・素襖(スアウ)・直垂(ヒタタレ)・肩衣(カタギヌ)等の表衣(ウヘノキヌ)を著ざること。後には、白小袖のみなるをもいふ。盛衰記「大口ばかりに、白衣にて、長押(ナゲシ)に尻懸け」㊂武士の、袴を著けずにあること。**びやくえづとめ**(白衣勤)參照。㊃僧の、墨染の上衣を脱ぎて、下著の白き衣服のみにてあること。太平記「法師は、衣(コロモ)を著ずして、白衣になり」㊄『前記の意より轉じていふ』禮にそむくこと。非禮。節用「白衣。本朝俗謂二非禮之義一」㊅『印度にて、俗人は、多くは白き衣服を著くるよりいふ』**ぞくじん**(俗人)㊂の異稱。白俗(ビヤクゾク)。(黑衣(コクエ)に對して) 盛衰記「白衣弟子平重盛」

ひやくーえい 百詠【名】〔書〕次條の略。盛衰記「小兒共の讀む百詠といふ小文に、鴨集まって動ずれば雷と成るといふ事あり」

ひやくえいーわか 百詠和歌【名】〔書〕源光行の、自詠二百四十首を撰びて、註釋を施したるもの。二卷。漢土の詩句に對照したるもの多し。百詠。

びやくえーくわんおん 白衣觀音【名】〔佛〕『梵Pandrunvāsini の譯語。音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す。白色は、純淨なる菩提心の象徵』三十三觀音の一。その像は、純白の衣を著け、白蓮の中に在りて、左手に蓮花を持つ。

びやくえくわんおんーほふ 白衣觀音法【名】〔佛〕『音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』密教にて、白衣觀音の眞言を誦して修する祕法。だいびやくえ。

びやくえーづとめ 白衣勤【名】『**びやくえ**(白衣)㊂を見よ』德川幕府にて、御目見(オメミエ)以下の中、袴を著けずして出仕するを得し格式の者。

ひやくーか 百家【名】㊀百の家。百戶。㊁さまざまの學派。(支那先秦時代のにいふこと多し)百子。「諸子百家の書」

ひやくーがい 百骸【名】身體に具有する、多くの骨。笈之小文「百骸・九竅(キウケウ)の中に物あり、假に名づけて、風羅坊といふ」

びやくーがい 白蓋・白葢【名】白色の天蓋(テンガイ)。赤蓋(シヤクガイ)と相對する時は、金剛界の象徵とす。榮花「讀師の高座、左右に立てて、上に、えも言はずめでたき白葢覆ひたり」

ひやくーかう 百行【名】多くのおこなひ。諺「孝は百行の本なり」

ひやくーかう 百考【名】さまざまに考ふること。千思萬考。

びやくーがう 白毫【名】〔佛〕佛の眉間にありて、光を放つといふ白毛。光毫。**みけんびやくがうさう**(眉間白毫相)參照。平家「釋迦の像……、白毫、新に拜まれたまひし、滿月の尊容」

びやくがうーさう 白毫相【名】〔佛〕**みけんびやくがうさう**(眉間白毫相)に同じ。

ひやくかじーまうで 百箇寺詣【名】次條に同じ。

ひやくかじーまゐり 百箇寺參【名】百箇の佛寺を巡禮すること。ひやくかじまうで。**せんがしまゐり**(千箇寺參)參照。

ひやくかーせい 百家姓【名】〔書〕支那の、多くの姓氏を集めて、村塾の童蒙に讀ましめしもの。宋代の著。著者不詳。我國の名頭(ナガシラ)の類。

ひやくかーせつりん 百家說林【名】〔書〕德川時代の諸學者の隨筆・雜著を輯めたる叢書。十卷。今泉定介及び畠山健の校定。明治二十三年より同二十五年にかけて發行。後、續編を加へ、六卷、外に索引一卷として改版發行す。

ひやくかーにち 百箇日・百個日【名】人の死にてより百日目の日。佛事を修す。若風俗「百ケ日も過ぎゆけど、二親の嘆は止まざる中へ」

ひやくーかん 百感【名】いろいろの感じ。萬感。

ひやくかーんち 百箇日・百個日【名】**ひやくかにち**(百箇日)の訛。

ひやくーき 百卉【名】種種の草。種種の草花。

ひやくーき 百鬼【名】多くの鬼。種種の妖怪。

百鬼夜行(ヤギヤウ)【句】㊀多くの妖怪の、夜步くといふこと。もと支那の陰陽の思想より來り、邪氣を具體化して、有形の怪異とするに至れるものにて、形は、概ね鬼に類すれど、千態萬樣にして、中には、體は器物、頭部のみ鬼の形なるを畫きなどせり。宇治「百鬼夜行にて有るやらんと、恐ろしかりける」㊁多くの人の、醜怪なる行をなすこと。

ひやくーぎ 百技【名】いろいろの技藝。種種の技術。

ひやくーぎ 百戲【名】いろいろの演戲。種種の遊戲。

ひやくーきく 百菊【名】百種の菊。多くの種類の菊。**まんぎく**(萬菊)參照。俳諧新選(嘯山)「寒菊錦著て百菊の跡おさへけり」

びやくーぎふ 白及【名】〔植〕**しらん**(紫蘭)に同じ。

ひやく-きん 百金【名】㊀百兩。百圓。㊁多額の金（かね）。せんきん（千金）參照。

百金の士【名】『史記に「百金之士五萬人、轂者十萬人」とあり』支那にて、戰に功を立てて、百金の賞を受くる勇士。

ひやくきやぎやう-にち 百鬼夜行日【名】陰陽家にて、百鬼の夜行すとて、人の夜行を忌ましむる日。正月子の日、二月午の日、三月巳の日、四月戌の日、五月未の日、六月辰の日、これなり。

ひやくきやぎやう-ゑまき 百鬼夜行繪卷【名】〔美〕百鬼夜行を畫ける繪卷物。

ひやく-くじ 百鬮【名】みくじ（御鬮）を見よ。

びやく-ぐんじやう 白群青【名】鈍青色の群青。

ひやく-くわ 百花【名】種種の花。群芳。「百花、妍を競ふ」

百花の魁【句】梅の花の異稱。花の兄。

百花の王（ワウ）【句】『北山集に「既全三國色與二天香一、底用人家紫與レ黄、卻喜騷人稱二第一一、至レ今喚作二百花王一」とあり』くわわう（花王）に同じ。

ひやく-くわ 百果【名】種種のくだもの。

百果の宗（ソウ）【句】『南史に「宋張敷小名梂。父劭小名梨。宋文帝戲レ之曰、梂何如二梨一。敷對曰、梨是百果之宗、梂何敢比也」とあり』梨の實の美稱。

ひやく-くわ 百科【名】㊀もろもろの科目。㊁種種の學科。

ひやくくわい-き 百回忌【名】死者の百年目の祥月命日。百年忌。

ひやくくわい-さい 百怪祭【名】陰陽家にて妖怪を祓ふために行ふ祭。東鑑「於二八幡宮一、被レ行二百怪祭一」

ひやくくわ-かう 百和香【名】はくわかう（百和香）に同じ。

ひやくくわ-じしよ 百科辭書【名】次條に同じ。

ひやくくわ-じてん 百科辭典【名】次條に同じ。

ひやくくわ-じりん 百科辭林【名】次條に同じ。

ひやくくわ-じゐ 百科辭彙【名】學術・技藝、その他百般の事物を説明せる辭書。百科辭書。百科辭林。えんさいくろぺぢや。

ひやくくわ-ぜんしよ 百科全書【名】㊀種種の學術・技藝に關する書籍を合む叢書。㊁雜學者を嘲りていふ語。〔俚語〕

びやく-ぐわつ 白月【名】『梵 Suklapaksa の譯語』印度の暦法にて、滿月より前の十五日間、即ち、陰暦にて一箇月の前半。白分（ビヤクブン）。（黑月に對して）平家「白月・黑月の變りゆくを見ては、三十日を辨へ」

ひやく-くわん 百官【名】諸の官、又、諸の官人。もものつかさ。庶官。百寮。百僚。公事根源「百官、悉く朱雀門に集まりて」

ひやく-くわん 百貫【名】㊀一貫の百倍。㊁多額の金（かね）。

百貫の馬にも驇（リタ）【句】名馬にも、驇（リタ）などの病あること。〔諺語〕

百貫のかたに笠一蓋（イツカイ）【句】得失の相當せぬ譬。〔諺語〕

百貫の鷹も、放さねば知れぬ【句】如何に技倆ありとも、實地に試みざれば、知る能はざる譬。〔諺語〕

百貫ぶらり【句】古器・古畫の類を集めて娯む者を嘲りていふ語。〔諺語〕

ひやく-くわん 百貫【名】〔地〕肥後國飽託（ハウタク）郡小島町の字。一小港を成し、もと熊本市に出入する貨物、肥後米の輸出等によりて繁榮せしが、港内水淺きため、鐵道九州線開通以來、昔日の觀なし。

びやく-くわん 白冠【名】昔、紀伊國日前（ヒノクマ）神宮の神職の一。

ひやくくわん-てん 百貫點【名】點の有るまじき所に點を打ちたるが、殊に見事にて、却って百貫の價値ありとていふ語。相摸國鎌倉の建長寺の山門の額字なる「巨福山（コフクサン）」の巨の字に打ちたる點などにいふ。

ひやくくわん-な 百官名【名】官名を通稱としたる名。例へば、民部・刑部（ギヤウブ）・大藏・主水（モンド）・内記など。

びやく-げ 白夏【名】〔佛〕『白は表白（ヘウビヤク）の義』夏安居（ゲアンゴ）の中に、日日、大衆に警告して、精進（シヤウジン）を進むること。

ひやく-けい 百計【名】種種のはかりごと。さまざまの計略。

ひやく-けい 百景【名】種種の景色。芭蕉「百景や杉の木の間をいろみ草」

ひやく-げい 百藝【名】種種の技藝。種種の藝術。衆藝。

ひやく-けつ 百結【名】「鶉衣（ウヅラゴロモ）の百結」を見よ。

びやく-げつ 白月【名】びやくぐわつ（白月）を見よ。

ひやくけつ-い 百結衣【名】『晉書の隱逸傳に「董威在二洛陽一、隱二居白社一、得二殘絮敗繒一、以自覆、名二百結衣一」とあり』つづれぎぬ。鶉衣。

ひやく-けん 百犬【名】㊀百匹の犬。㊁多くの犬。

百犬、聲に吠ゆ【句】「一犬影に吠ゆれば、百犬聲に吠ゆ」を見よ。風來六六部集（菩提樹の辨）「倭名水木、又、俗に水草といへる木の實を、……、そこ・ここに落ちてゐるを、一人が見つけて、菩提樹が降ったといへば、百犬、聲に吠ゆるなり」

びやく-けん 僻見【名】へきけん僻（見）に同じ。（佛敎に關していふ時に用ふ）釋迦如來誕生會「邪法・僻見の惡僧ども」

ひやくげん-がくは 百源學派【名】支那宋の邵雍（セウヨウ）の唱へし學派。數理を以て天地を觀察し、十二辰を一日とし、三十日を一月、十二月を一年、三十年を一世、十二世を一運、三十運を一會、十二會を一元とし、一元即ち十二萬九千六百年にして、天地萬物一變すと説けり。

ひやくけん-だき 百間瀑【名】〔地〕㊀信濃國西筑摩（ニシチクマ）郡御嶽（オンタケ）山の半腹にある瀑布。高さ五十丈、幅一間餘。㊁紀伊國東牟婁（ヒガシムロ）郡熊野村にある瀑布。高さ六十丈、幅二間餘。

ひやくけん-ながや 百間長屋【名】㊀棟を長く續けて建てたる長屋。㊁江戸小石川門の外、水戸の徳川家屋敷の南方にありし長屋。其角「百間長屋にて、時鳥人の面見よ下水打」

ひやくけん-ぼり 百間堀【名】㊀長く掘り穿ちたる堀。㊁〔地〕大阪市西區江子（エノコ）島の東を流るる川。今宮心中「百間堀を思ひ出す」

びやく-こ 白狐【名】㊀毛色の白き狐。通常の狐の、多くの年を經たるものといふ。㊁をさきぎつね（尾先狐）に同じ。

びやく-こ 白虎【名】㊀しじん（四神）を見よ。㊁五行（ゴギヤウ）説の六神の一。血の神にて、婦人の臨産の事を司るといふ。

びやく-ご 白牛【名】毛色の白き牛。謡曲（車僧）「露地の白牛を打って見せんと、拂子（ホツス）を上げて、虚空を打てば」

びやく-こう 百工【名】種種の工人。

ひやく-こう 百講【名】〔佛〕百座の仁王講（ニンワウコウ）。

ひやく-こう 百孔【名】多くの孔。

百孔・千創【句】多くの孔（アナ）と創（キズ）と。缺點の多き形容。

びやくこ-き 白虎旗【名】白虎の像を畫きたる旗。

ひやく-こく 百穀【名】種種の穀物。

ひやく-こく 百谷【名】多くの谷。

百谷の王【句】『老子の第六十六章に「江海所三以能爲二百谷王一者、以二其善下一レ之故、能爲二百谷王一」とあるに本づく』うみ（海）㊀の異稱。ももたにのぬし。

ひやくこく-ぶね 百石船【名】積載量の百石なる船。ももさかのふね。

びやくこけふ-じつ 白虎脇日【名】陰陽家の説にて、建築・他行等に吉なりといふ日。三日・十一日・十九日・二十七日、これなり。

ひやくご-げん 百五減【名】相手に、若干の碁石を置かせ、七つづつ・五つづつ、又、三つづつ引きたる各の殘數を言はせて、その總數を言ひあつる遊。三つづつ引きたる殘數の七十倍と、五つづつ引きたる殘數の二十一倍と、七つづつ引きたる殘數の十五倍との和を、七と五と三との相乘積百五にて除したる殘數は、所要の總數に同じ。

びやくこ-じん 白虎神【名】陰陽家にて、その方位を犯せば、喪服の患ありといふ凶神。正月は戌、二月は亥、三月は子、四月は丑、五月は寅、六月は卯、七月は辰、八月は巳、九月は午、十月は未、十一月は申、十二月は酉の方、これなり。

びやくこ-たい 白虎隊【名】『初、藩兵を、四隊に分ち、四神(シジン)の名を取りて、隊名とし、朱雀、最も銳勇、靑龍、これに次ぎ、玄武は老者、白虎は、年少者のみを以て編成せしなり』明治戊辰の役に於ける、會津藩の、年少者(十五歲乃至十七歲)のみの決死隊。明治元年八月二十三日、瀧澤嶺を越えて城に迫らんとする官軍を迎へて戰ひしが、或は死し、或は走り、留まりし者僅かに十六人、飯盛(イヒモリ)山に入り、各、耦刺して斃る。

びやくこ-たい 白袴隊【名】『前條の白虎隊と音相同じき文字を取りて名づく』明治三十年頃に行はれし白地の小倉袴を著けたる墮落書生の團隊。

びやくこ-つう 白虎通【名】〔書〕次條の略。

びやくこ-つうぎ 白虎通議【名】〔書〕支那、後漢の肅宗、諸儒を白虎觀に會し、五經の同異を考定せしめ、班固をして、その議を撰錄せしめしもの。四卷。

びやくこ-とう-じつ 白虎頭日【名】陰陽家の說にて、建築・他行等に吉なりといふ日。二日・十日・十八日・二十六日、これなり。

びやく-ごふ 白業【名】〔佛〕『佛敎にては、白色を淸淨の象徵とす』ぜんごふ(善業)に同じ。又、善業の業力(ゴフリキ)。(黑業(コクゴフ)に對して) 榮花「白業の報なれば、求不得(グフトク)の苦もなし」盛衰記「先捧㆓白業㆒、奉㆑祝㆓紫宮㆒」

ひやく-ごぶつ 百五物【名】みつぎもの(貢物)に同じ。權記「催㆓百五物㆒之使」

びやくこ-ろう 白虎樓【名】平安京大內裏の八省院にありし四樓の一。大極殿の西南に位し、その東南なる蒼龍樓と相對せしもの。一名、右樓・西樓・龍尾道西樓。

ひやく-ざ 百座【名】㈠ここ・かしこの、多くの座席。一代女「盃の來る度度に、ちと押へましよ、是非さはりますと、お仕著(シキセ)の通り、百座の參會にも、少しも色の替りたる事なし」㈡修法(シユホフ)などの百箇の座。

百座の護摩【句】百座を設けて、護摩を修すること。

百座の祓【句】神前にて中臣(ナカトミ)の祓の詞を百度讀みて修する祓。(百座を設けて修するに代へて行ふ) 百度の祓。

ひやく-さい 百歲【名】㈠ひやくねん(百年)に同じ。㈡年齡一百。

百歲の後【句】『詩經の唐風葛生篇に「冬之夜、夏之日、百歲之後、歸㆓于其室㆒」、史記の高祖紀に「陛下百歲後、蕭相國卽死、令㆓誰代㆑之」とあり』人の死後を忌みていふ語。「千歲の後」・「萬歲の後」參照。

百歲の童(ワラベ)【句】次條を見よ。世話謠「百歲の童」

百歲の童(ワラベ)、**十歲の翁**【句】人には、年たけながら愚なるもあり、幼くして賢きもあり。〔諺語〕愚地左近太郎聞書「百歲の童とやらんの如く、年たけても愚なるあり、十歲の翁とやらん、幼より賢きあり」

ひやく-さい 百濟【名】〔地〕くだら(百濟)に同じ。

ひやくさい-じ 百濟寺【名】くだらじ(百濟寺)に同じ。

ひやく-さう 百草【名】種種の藥草。(信濃國御嶽(オンタケ)などの靈山にて採取したるは、接頭語お(御)を添へていふ) 萬葉集代匠記「藥獵(クスリガリ)とは、鹿茸(ロクジヨウ)を取らんためなり。きそひ獵ともいふ。百草を取るをいふと意得るは、誤なり」

百草を鞭(ムチウ)**つ**【句】『搜神記に「神農以㆓赭鞭㆒鞭㆓百草㆒、盡知㆓其平毒寒溫之性、臭味所㆒㆑主、以播㆓百穀㆒。故天下號㆓神農㆒也」とあり』支那にて、古代、神農氏が、百草を鞭ちて、醫藥を創めし故事。

ひやく-さう 百艘【名】すなぶね(砂船)に同じ。

ひやく-さう 百姓【名】ひやくしやう(百姓)の約。〔古語〕空穗「つたなきひやくさうは、興ある筋をなん思ひよらずはべらん」

ひやく-ざう 百藏【名】『百文の錢にて情を鬻ぎたるよりの稱。藏は、男の名に擬していふ』昔、江戶吉原の河岸邊に居を構へし、最も下品なる遊女。ごじっさう(五十艘)參照。

びやく-ざう 白象【名】〔佛〕はくざう(白象)

に同じ。(佛敎にては、慈悲の象徵とし、普賢菩薩の乘用とし、釋迦の、兜率(トソツ)の內院を下るや、又、これに乘りて、摩耶夫人(マヤブニン)の胎內に入れりと說かる) 宇治「普賢菩薩、白象に乘りて」

ひやくざ-の-はらへ 百座の祓【句】ひやくざ(百座)の條下を見よ。

びやく-さん 白散【名】屠蘇の類。白朮(ビヤクヂユツ)二兩、桔梗二兩半、烏頭(ウヅ)・附子(ブス)・細辛(サイシン)各一兩の五味を調合せるものといふ。ざしやうさん(度嶂散)參照。土佐「とうそ・びやくさん、酒加へて持て來たり」

びやく-さん 白讚【名】〔佛〕『白は表白(ヘウビヤク)、讚は讚歎の義』さんぶつ(讚佛)に同じ。

ひやく-し 百司【名】ひやくくわん(百官)に同じ。太平記「紫宸に星を列ねし百司の老臣」

ひやく-し 百子【名】ひやくか(百家)㈡に同じ。

ひやく-し 拍子・百師【名】編木子(ビンザサラ)・柏板(ハクハン)の類にて、神樂・催馬樂(サイバラ)・東遊(アヅマアソビ)などの時、拍子(ヒヤウシ)を取るために打鳴らす樂器。木にて造り、笏(シヤク)を左右に二分せるが如き形にて、長さ一尺二寸、幅は、二枚合はせて、上部二寸六分、下部一寸六分、厚さは、上部三分五厘、下部二分五厘。一方の平面と他方の割口とを擊ち合はせて用ひ、その拍子(ヒヤウシ)を、笏拍子(シヤクビヤウシ)といふ。和名「拍子、俗云㆓百師㆒」

ひやく-じ 百事【名】種種の事。萬事。

びやく-し【名】〔植〕びやくしん(柏槇)の訛。

びやく-し 白芷【名】〔植〕よろひぐさ(鎧草)に同じ。醒睡笑「白朮(ビヤクヂユツ)・干姜(カンキヤウ)・白芷・黃蓮(ワウレン)」

びやくし 辟支【名】〔佛〕びやくしぶつ(辟支佛)の略。

ひやく-じう 百獸【名】種種のけだもの。あまたのけだもの。

百獸の王【句】しし(獅子)㈠の異稱。

百獸率(ソツ)**し舞ふ**【句】次條に同じ。太平記「百獸も率し舞ひ、鳳鳥も來儀す」

百獸率ゐ舞ふ【句】『書經の益稷篇に「夔曰、於予擊㆑石拊㆑石、百獸率舞」とあるに本づく』獸までが感動して、多數引き連れて舞ふ。音樂の微妙なる形容。

びやくし-かう 白芷香【名】かう(香)㈡の一種。和名「白芷香」

びやくしか-ぶつ 辟支迦佛【名】(梵 Pratyekabuddha)【名】〔佛〕えんがく(緣覺)に同じ。

ひやくし-じゆう 百子銃【名】百發の連發銃。羅山文集「一砲母發㆓百鉛子㆒、故又謂㆓之百子銃㆒」

ひやくしち-ゐん 百七韻【名】〔語〕へいすゐゐん(平水韻)に同じ。

ひやくじっ-こう 百日紅【名】〔植〕さるすべり(猿滑)㈡に同じ。

ひやくじっこう-ずみ 百日紅炭【名】ろいろずみ(蠟色炭)に同じ。

びやくし-ぶつ 辟支佛【名】〔佛〕びやくしかぶつ(辟支迦佛)の略

ひやく-じん 百神【名】多くの神。盛衰記「百神の化導(ケダウ)に秀づ」

びやく-しん 白心【名】〔佛〕淸淨なる心。

びやく-しん 柏槇・白身・白心【名】〔植〕松杉科に屬する喬木。ひのきの類。高さ數十尺に達し、幹は松の如し。葉は、檜の如きものと、杉の如きものとを併せ有し、常綠にして、輪生す。花は雌雄異株にして、毬狀の果實を結ぶ。觀賞用として栽培し、材は用途廣し。その一種、地に這ふを、這柏槇(ハヒビヤクシン)といふ。いぶきひば。かまくらいぶき。すぎびやくしん。たういぶき。たちびやくしん。

ひやく-しや 百射【名】總矢數を一百筋と定めて射る通矢(トホシヤ)。

ひやく-しやう 百姓【名】『人民の中、農業に從事する者、最も多數を占むるよりいふ。ひやくせい(百姓)參照』農民。農夫。

百姓の秋大名【句】百姓は、秋を、最も得意の時節とす。〔諺語〕

百姓の去年物語(コゾモノガタリ)【句】百姓は口癖として、常に前年の作物の出來を言ふ。〔諺語〕

百姓の萬能【句】百姓は、大工・左官などの仕事をも、自ら爲す。〔諺語〕

百姓は油の如く、絞れば絞る程出る【句】「手拭と百姓は搾る程出る」に同じ。〔諺語〕

ひやく-じやう 百城【名】百箇所の城。多くの城。「南面百城」參照。

ひやくしやう-いっき 百姓一揆【名】百姓の、相結束して起す一揆。つちいっき。

ひやくしやう-ごゑ 百姓聲【名】のらごゑ（野良聲）に同じ。

ひやくしやう-たい 百姓隊【名】百姓より成る隊。農兵。

ひやくしやう-だい 百姓代【名】德川時代に、幕領に置きたる村方（ムラカタ）三役人の一。名主以下の職務を監督し、常時、村民を代表し、村費、その他諸割符、配當等に立合ひしもの。その村の大高持の中より、一人を選擧して、これに當らしめたり。

ひやくしやう-ぶくろ 百姓囊【名】〔書〕百姓の生業及び處世上の心得を、通俗平易に說けるもの。七卷。西川如見の著。

ひやくしやう-ぶね 百姓船【名】百姓の使用する船。一代女「河内の百姓舟」

ひやくしやう-ぶん 百姓分【名】百姓の分際。百姓の身分。二代男「陸奥の內にて、さる百姓分の人ながら」

ひやくしやう-へい 百姓兵【名】『農家の子弟が大部分を占めしよりいふ』明治の初年、徵兵の制布かれし時、その兵を、從前の武士に比して、嘲りていひし語。

ひやくしやう-まち 百姓町【名】百姓の多く住める町。田舍の町。

ひやくしやう-や 百姓家【名】のうか（農家）に同じ。萬紫千紅「東籬も、花壇も、百姓家も」

ひやくしやう-やく 百姓役【名】戰國時代に、百姓に課せし臨時の人頭稅。

ひやくしやう-やど 百姓宿【名】天保十二年以前、專ら百姓の宿泊せし宿屋。（旅人宿に對して）

ひやくしやう-よみ 百姓讀【名】漢字を、その文字の旁（ツクリ）によりてあてよみすること。例へば、「絢爛（ケンラン）」を「ジュンラン」、「洗滌（センデキ）」を「センデウ」と讀む類。いとこよみ。

ひやくしやう-わざ 百姓業【名】農夫の仕事。染模樣妹脊門松「在所へ去（イ）ねば、氣に入らぬ女房持って、百姓業」

ひやくしやう-をとこ 百姓男【名】㊀農業に從事する男。㊁田舍そだちの男。ゐなかもの。

ひやくしやう-をんな 百姓女【名】㊀農業に從事する女。㊁田舍そだちの女。

ひやくしやく-かん-とう 百尺竿頭【名】㊀百尺もある長さ竿のさき。㊁進み到るべき極處の譬。

百尺竿頭一歩を進む【句】『傳燈錄に「招賢大師示二一偈一曰、百丈竿頭不レ動人、雖レ然得入、未レ爲レ眞。百丈竿頭須レ進レ步。十方世界是全身」、無門關に「百尺竿頭進二一步一、十方刹土現二全身一」とあり』進みて已に極處に達したる者、更に一段の向上を爲す。

ひやくしや-まゐり 百社參【名】祈願のため、同じ神を祀れる百箇所の社に參詣すること。せんじやまゐり（千社參）參照。

ひやく-しゆ 百首【名】㊀一首の百倍。㊁ひやくしゆうた（百首歌）の略。著聞「百首詠むやうは習ひたるか」同「內裏の百首の御會に」

百首の歌【句】ひやくしゆうた（百首歌）に同じ。增鏡「一品してしばしおはせし頃、御百首の歌に」新葉「羇中百首の歌に」

ひやくしゆ-いけん 百首異見【名】〔書〕小倉百人一首を註釋せるもの。五卷。香川景樹の著。

ひやくしゆ-うた 百首歌【名】或時期の間に、又は同じ題につきて、百首詠みたる歌。百首の歌。百首。新葉「百首歌の中に」

ひやくしゆ-くやう 百種供養【名】百種の供具を列ねて供養すること。兵範記「有二百種供養一」

ひやく-しゆつ 百出【名】かずかずあらはれ出づること。「弊害百出」「異論百出」

ひやく-じゆつ 百術【名】種種のてだて。

百術千慮【句】種種の手段・思慮。聖德太子繪傳記「百術・千慮の下知をなせば」

ひやくしゆ-ぶるゐ 百首部類【名】〔書〕古今の百首歌十五部を集めたるもの。六十二卷、外に目錄一卷。著者不詳。

ひやく-じよう 百乘【名】車百輛。

百乘の家【句】『大學に「百乘之家、不レ畜二聚斂之臣一」とあり』支那周代の制度にて、戰時に際して車百輛を出しし家、卽ち卿・大夫の家。「萬乘（バンジヨウ）の國」參照。

ひやく-すゐ 百水【名】ばんすゐ（萬水）に同じ。判定記「一月不レ降、百水不レ昇」

ひやく-せい 百姓【名】『人民の姓氏は、その數多きによりていふ』人民。庶民。萬姓。ひやくしやう（百姓）參照。

ひやく-せい 百世【名】㊀一世の百倍。㊁永き後の世。百代。

百世の師【句】『孟子の盡心下篇に「聖人、百世之師也」とあり』百世の後までも人の仰ぐ師。

ひやく-せつ 百折【名】幾度も失敗すること。度度の挫折。

百折撓（タワ）まず【句】『蔡邕の橋大尉碑に「有下百折不レ撓、臨二大節一而不上レ可レ奪之風上」とあり』幾度失敗しても、志を屈せず。

ひやく-ぜつ 百舌【名】〔動〕もず（百舌）の漢名。

ひやく-ぜに 百錢【名】百文のぜに。一代男「手元にありし百錢を拔きて、目の子算用」俗曲（與話情浮名橫櫛）「懷より、百錢一枚取り出し、紙にひねって渡せば」

ひやく-せん 百川【名】あまたの川。

百川、海を學びて、海に至る【句】㊀『楊子法言の學行篇の語に本づく』天下の川は、皆、海を學びて、日夜流れ、遂に海に注ぐ。㊁人も、日夜、修養を怠らざれば、遂に聖人・君子の地位に達す。〔諺語〕

ひやく-せん 百戰【名】あまたの戰。度度の戰。

百戰百勝【句】幾度も戰ひて、いつも勝つこと。戰ふごとに必ず勝つこと。

ひやく-せん 百千【數】あまた。もろもろ。いろいろ。さまざま。萬千。千百。

ひやく-ぜん 百全【名】ばんぜん（萬全）に同じ。

びやく-ぜん 白前【名】〔植〕すずめのをごけ（雀孥椭）の漢名。

ひやくせん-まん 百千萬【數】甚だ多きこと。義經腰越狀「百千萬の言譯も、この世では甲斐あるまじ」

ひやくせん-ろう 百川樓【名】江戶時代に、日本橋室（ムロ）町の一部、浮世小路にありし料理屋。

ひやく-そう 百僧【名】大法會に、講師以下の七僧に、伴僧を合はせて、百四人として行ふこと。大鏡「法成寺の五大堂供養は、……百僧なりしかば」

ひやくそう-ぐ 百僧供【名】〔佛〕百人の僧を請じて、齋（トキ）を供すること。

ひやく-そく 百足【名】〔動〕㊀百本の足。㊁〔動〕『埤雅に「蜈蚣、一名蛭、一名商距、今俗謂二之百足一」とあり』むかで（蜈蚣）の漢名。

百足の蟲【句】〔動〕むかで（蜈蚣）に同じ。

百足の蟲は死して倒れず【句】『淮南子に「百足之蟲至レ死不レ僵、扶レ之者衆也」とあり』扶助する者多ければ、容易に敗亡せざる譬。〔諺語〕

びやく-ぞく 白俗【名】〔佛〕びやくえ（白衣）〔六〕に同じ。

ひやく-たい 百態【名】さまざまの狀態。千態。

ひやく-たいふ 百大夫【名】百人の諸大夫。數多の諸大夫。〔古語〕續世繼「御幸など見たまひては、百大夫變じて、百殿上人になりにけりなどのたまひ」

びやく-だう 白道【名】〔佛〕㊀『白は善の象徵』ぜんだう（善道）㊁に同じ。㊁にがびやくだう（二河白道）を見よ。

ひやく-たん 百端【名】かずかずの事端。樣樣なる端緖。萬端。

びやく-だん 白檀【名】㊀〔植〕白檀科に屬する常綠喬木。高さ二丈餘。葉は對生し、長卵形をなし、全緣にして光澤あり、葉柄短し。花は花瓣無く、淺く四裂せる萼を有し、果實は核果なり。印度及び馬來半島に產す。材は黃色にして芳香あり。薰物（タキモノ）となし、器物を作り、又白檀油を採る。からせんだん。〔檀香〕㊁〔植〕びやくしん（柏槇）の俗稱。㊂次條の略。㊃びやくだんゆ（白檀油）の略。

びやくだん-かう 白檀香【名】香の一種。白檀より製したるもの。びやくだん。

びやくだん-くわ 白檀科 【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。熱帶及び溫帶地方に產す。白檀・金引草（カナビキサウ）など、これに屬す。

ひやく-だんな 百檀那・百旦那 【名】『百は錢百文の義』布施の極めて少き檀那。〔德川時代の僧侶の語〕 柳樽「蠟燭に似た物を出す百檀那」

びやくだん-ぬり 白檀塗 【名】下に金・銀の箔を置き、上に透漆（スキウルシ）を塗ること、又その塗り方にしたる物。

びやくだん-みがき 白檀磨 【名】磨（ミガキ）をかけたる白檀塗。狂言（文藏）「びやくだんみがきの脛當」

びやくだん-ゆ 白檀油 【名】白檀の細片を蒸溜して得たる香油。黃色の濃厚なる液にして、弱き酸性を有し、味少しく苦し。主に濠洲・印度に產し、專ら醫藥に用ひ、痳病に特効あり。白檀。

びやくだん-をどし 白檀緘 【名】白檀塗の札（サネ）の鎧。

びやく-ち 躄地・躃地 【名】『地に躄（ヰザリ）て這ひする義』ゐざり行くこと。ゐざりて這ひまはること。（悶えもがくにいふ） 盛衰記「悶絕・躃地して、周章死（アツテジニ）に失せたまひき」太平記「血を吐き、悶絕・躃地しけるを、輿に乘せて」

びやくち 白雉 【名】孝德天皇の御代の年號（紀元一三一〇年—一三一五年）。

ひやく-ちや 百茶 【名】一斤百文ほどの、下等なる葉茶。〔德川時代の語〕 柳樽「纔かぬと宇治殿百茶買ひたまひ」

ひやくぢやう 百丈 【名】〔人〕支那唐代の高僧。福州長樂の人。姓は王、名は懷海（エカイ）。馬祖の上足たり。百丈山に住して、百丈禪師と稱し、又、大珠和尙といふ。憲宗の元和九年寂す。年九十五。勅して大智禪師と諡す。

ひやくぢやう-き 百丈忌 【名】禪林にて、正月十七日、前條の百丈のために修する忌。**にそき**（二祖忌）參照。

ひやくぢやう-しんぎ 百丈淸規 【名】〔書〕㊀百丈禪師が、始めて禪門の規式を定めたるもの。古淸規と稱して、今傳はらず。㊁支那元の百丈山の德輝禪師の、勅を奉じて、前記の古淸規を改修したるもの。八卷。今傳はれる百丈淸規、これにして、敕修百丈淸規といふ。

ひやくぢやう-ぜんじ 百丈禪師 【名】〔人〕ひやくぢやう（百丈）の敬稱。

ひやく-ちゆう 百中 【名】㊀ひやくはつひやくちゆう（百發百中）を見よ。㊁百の數のうち。「百中の八十」

びやく-ぢゆつ 白朮 【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ三尺內外、下部は木質をなし、葉は、下部なるは羽狀複葉、上部なるは、通常、單葉にして、鋸齒あり、互生す。花は帶紅紫色の筒狀花にして、頭狀花序に排列し、魚骨狀の總苞を具ふ。山野に自生し、漢方にて藥用に供す。をけら。うけら。きのふはけふの物語「下人を、白朮掘りに遣り」

ひやく-つなぎ 百繫 【名】緡（サシ）に貫き繫ぎたる百文の錢。一代女「分（ワケ）立てて後、百つなぎの錢を、袂へ投げ入れけるも」

びやく-つゐ 白椎・白槌 【名】〔佛〕『白は表白（ヘウビヤク）の義』禪宗にて、開堂の時、長老の對說前に、槌を打鳴らすこと一下して、衆を靜肅ならしめ、衆に告げて、「法筵龍象、當觀第一義」と唱ふる儀式。

ひやく-て 百手 【名】一手（ヒトテ）の百倍。もて。助數詞のて（手）參照。

百手の達者 【句】百手射て一矢も射損ぜざる、射術の達人。庭訓「百手達者・究竟上手」「同じ。

びやく-でい 白泥 【名】**ぎんでい**（銀泥）に同じ。

ひやく-ど 百度 【名】㊀百たび。百回。㊁ひやくどまゐり（百度參）㊀の略。（後世は、多く、接頭語**お**（御）を添へて用ふ） 著聞「神主、一日に百度をなんしける」

百度の祓 【句】「百座の祓」に同じ。

百度を踏む 【句】百度參をす。

ひやくど-いし 百度石 【名】百度參に往復する距離の標として、寺社の境內に立てたる石。

ひやく-どう 百銅 【名】銅錢百文。膝栗毛「百銅、自腹（ジバラ）を切って、往來の切手を貰ひ」

ひやく-どく 百毒 【名】さまざまの毒物。

百毒の長（チヤウ） 【句】「百藥の長」といふ語あるに對して、その反對をいへる語。和合人「誠に獨で吞んでは、百毒の長かと思ふやうだ」

ひやくど-じき 百度食 【名】昔、大炊（オホヒ）寮の米、大膳職の魚鹽を、官物の出納をなす諸司等に、每日支給せしこと。延喜式「出二納官物一諸司、每日給二百度食一」

ひやくど-まうで 百度詣 【名】次條㊀に同じ。東鑑「今日於二鎌倉一……有二鶴岡百度詣一」

ひやくど-まゐり 百度參 【名】㊀祈願を達せんがために、神社の拜殿と鳥居との間、又はその廻廊など、又、佛寺の門と本堂との間などを、一日に百度往返して、禮拜すること。百度めぐり。百度まうで。百度。㊁或場所へ、幾たびも行き通ふことの譬。續膝栗毛「さっきにから瀉（クダ）りつづけて、雪隱（セツチン）へ百度參をするは」

ひやくど-めぐり 百度回 【名】前條㊀に同じ。萬葉千紅「觀音四萬六千日、百年三萬六千日、莫レ言一萬日餘計、百度回人日日多」

ひやく-なり 百生 【名】一つの莖・蔓などに、實の百ほどもみのること。俳諧古選（亡名氏）「百生の瓢簞を見よ蔓一つ」

ひやく-にち 百日 【名】一日の百倍。

百日の稽古より、一日の座功（ザコウ） 【句】俳諧の修行は、運座に連なり、實地の工夫・鍛錬を積むに依りて進むこと、最も多し。〔諺語〕 ひとりごと「古の俳諧師は、百日の稽古より一日の座功といひて、只、會に出でなん事を、大切に思ひはべりし」

百日の鯉 【句】百日續けて行ふ鯉の料理。徒然「園の別當入道は、……この程、百日の鯉を切りはべるを、今日缺きはべるべきに非ず、まげて申し請けんとて、切られにける」

百日の說法、屁一つ 【句】一旦の過失のために、多年の苦心も、水泡に歸する譬。〔諺語〕 膝栗毛「それが出來ねえと、忽ち百日の說法屁一つ」

百日の垂兒（タレツコ） 【句】小兒の、生後百日間は、よく糞尿を垂れ流す。〔諺語〕

百日の寢兒（ネツコ）・垂兒（タレツコ） 【句】小兒の、生後百日間は、よく眠り、又、よく糞尿を垂れ流す。〔諺語〕

百日の旱には厭かねど、一日の雨には厭く 【句】雨天の厭はしきものなる形容。〔諺語〕

百日の播期（マキゴ）に三日の刈旬（カリシユン） 【句】麥は、これを播くには、百日間ほどの餘裕あれども、刈り取るには、三日と雖も、後るれば、不可なり。〔諺語〕

ひやくにち-かせぎ 百日稼 【名】冬季凡そ百日間、他國へ出稼すること。主に但馬國に、この俗あり。その間、妻は機を織り、苧を紡ぎて、留守居す。これを、百日後家と稱す。

ひやくにち-かづら 百日鬘 【名】『百日も月代（サカヤキ）を剃らぬ程に、毛の延びたる鬘の義』芝居にて、盜賊・囚人などに扮つ役者の用ふる鬘。蓬頭にして、毛の長く逆だてるさまのもの。その毛の一層生ひ延びたるさまに作れるを、大百日（オホヒヤクニチ）といひ、反對に、毛を一きは短く作れるを五十日といふ。續膝栗毛「百日鬘で、かたかたかたりとやって」

（百日鬘）

ひやくにち-きやう 百日經 【名】〔佛〕百日間を限りて、經文を書寫すること。

ひやくにち-ごけ 百日後家 【名】**ひやくにちかせぎ**（百日稼）を見よ。

ひやくにち-さい 百日祭 【名】神道にて、人の死後百日目に行ふ祭。

ひやくにち-さい 百日齋 【名】百箇日の法事の齋（トキ）。

ひやくにち-さう 百日草 【名】〔植〕㊀菊科に屬する一年生の草。高さ二三尺。葉は長卵形にして、葉柄なく、對生す。花は、白・紅・桃・黃・樺・紫等、種種の色を呈

じ、頭狀花序に排列す。原産地は北米メキシコ。庭園に栽培す。じんにや。㊂くりんさう(九輪草)に同じ。

ひやくにち-しばゐ 百日芝居【名】薦張(コモバリ)の下等なる芝居。昔、江戸兩國の廣小路に三四箇所、淺草の廣小路に二三箇所、同處の奥山に二箇所、その外、諸處にありき。

ひやくにち-ぜき 百日咳【名】『經過日數の長きによりていふ』專ら小兒(殊に六歳以下の)氣道粘膜に障害起りて、發作性に激しき咳を發する、傳染性の病。初、發熱して、嚔咳を起し、中頃、痙攣性の咳となり、吸氣長く、呼氣短く、遂に劇度を減じて、發病後四五週間にして歇む。原因はなほ不明なれど、喀痰中に、常にインフルエンザ菌の存在するを見る。

ひやくにち-ぜき-まへ 百日咳前【名】幼くして、未だ百日咳に罹らぬこと。

ひやくにち-そが 百日曾我【名】『初、團扇(ウチハ)曾我と呼びしが、大入にて百日續きしより、詩きてこの名に改めしなり』近松門左衛門の作に係る時代物の戯曲。曾我兄弟に關聯せる人物を點出して脚色せるもの。

ひやくにち-ぼっけ 百日法華【名】他宗の信徒が、一時、日蓮宗に歸依すること。女殺油地獄「代代の念佛捨て、百日法華になり」

ひやくにち-うまで 百日詣【名】祈願のため、百日間、毎日、同じ神社に參詣すること。百日參。

ひやくにち-まゐり 百日參【名】前條に「同じ。

ひやくにち-めつけ 百日目付【名】德川幕府の職制の一。寛文三年より同六年までの間、使番(ツカヒバン)兩番衆より、一年三度の交代にて、各一人づつ遣されし二條目付及び大阪目付。

ひやくに-とじやう 百二都城【名】『次條の語に擬へていふ』**かごしまじやう**(鹿兒島城)の異稱。(主に漢詩などに用ふ)

ひやくに-の-けん 百二險【句】『史記の高祖紀に「秦形勝之國。帶二河山之險一、懸隔千里、持戟百萬。秦得百二焉、地勢便利。其以下二兵於諸侯一、譬猶下居二高屋之上一、建中瓴水上也」とあり。二は倍の義』他國に百倍する要害の地。一說に、二萬の兵を以て、百萬の敵に當るに足る要害の地。

ひやくにん-いっしゆ 百人一首【名】㊀歌人百人の名歌一首づつを集めたる歌集。「武家百人一首」「名所和歌百人一首」㊁〔書〕**をぐらひやくにんいっしゆ**(小倉百人一首)の略。

ひやくにんいっしゆ-いっせきわ 百人一首一夕話【名】〔書〕小倉百人一首を詳解し、作者の事歴をも記したるもの。九卷。尾崎雅嘉の著。

ひやくにんいっしゆ-かいくわんせう 百人一首改觀抄【名】〔書〕精密なる考證を以て、小倉百人一首を註釋したるもの。五卷。僧契沖の著。

ひやくにん-ぐみ 百人組【名】**てっぱうひやくにんぐみ**(鐵砲百人組)の略。

ひやくにんぐみ-がしら 百人組頭【名】百「人組の長。

ひやくにんぐみ-てっぱうがしら 百人組鐵砲頭【名】**てっぱうひやくにんぐみがしら**(鐵砲百人組頭)に同じ。

ひやくにん-こう 百人講【名】**とみつきこう**(富突講)に同じ。

ひやくにん-しゆ 百人首【名】㊀**ひやくにんいっしゆ**(百人一首)の略。和合人「おいらのは、百人首の丸地(デ)ぐりだから、ちとおっくふだて」㊁百人一首㊁の歌を記したる歌ガルタ。

ひやくにん-だまり 百人溜【名】『人を、百人づつ溜めおきて、順次に内に入らしむる意』城の入口の門と第二の門との間にある空地。

ひやくにん-てっぱうがしら 百人鐵砲頭【名】**ひやくにんぐみてっぱうがしら**(百人組鐵砲頭)に同じ。

ひやく-ねん 百年【名】㊀一年の百倍。百箇年。百歳。㊁數多の年。

百年、河清(カセイ)を俟(マ)つ【句】**かせい**(河清)の條下を見よ。

百年の計【句】百年も後までのはかりごと。永久の計。

ひやくねん-き 百年忌【名】人の死後、百年目の正忌(シヤウキ)。百回忌。

ひやくねん-さう 百年草【名】〔植〕**りゆうぜつらん**(龍舌蘭)に同じ。

ひやくねん-め 百年目【名】㊀第百年。㊁退引(ノッピキ)ならぬ羽目(ハメ)。萬事休する時。かぎり。おしまひ。〔俚語〕織留「大屋敷買うて、借屋賃取るほど、憐かなる事はなし。火難一つの氣遣、それは百年目」鳩翁道話「若し見咎むる者があったら、それこそ百年目」

ひやく-ぱい 百拜【名】幾度も禮拜する「こと。

ひやく-ぱう 百方【名】四方八方。諸方面。萬方(バンパウ)。

ひやく-ぱう 百方【副】種種の方法にて。樣樣の手段にて。萬方(バンパウ)。萬端。

ひやくは-すずめ 百羽雀【名】一面に、多くの雀を散らし描ける模樣。五人女「鼠繻子に、百羽雀の切附(キリツケ)、段染の一幅帶」

ひやく-はたご 百旅籠【名】『**ひやくだんな**(百檀那)を見よ』僅かの布施を出して、寺の齋(トキ)につくこと。きのふはけふの物語「百はたご食ひに連れて行くぞ。よく覺えて、その時うたへ」

ひやく-はち 百八【數】〔佛〕人間の煩惱(ボンナウ)の數、又それに關聯せる數。

百八の鐘(カネ)【句】〔佛〕佛寺にて、朝暮、又、特に、除夜の半夜より、梵鐘を百八回打鳴らすこと。百八煩惱を覺醒する意なりといふ。一說に、百八は、一年の十二箇月・二十四氣・七十二候を合はせたる數に取れりといふ。

百八の數珠(ジュズ)【句】〔佛〕百八煩惱に擬へ、木槵子(モクゲンジ)一百八顆を貫きて作りたる數珠。これをつまぐりて三寶を念ずれば、百八煩惱を斷除して、無上の勝果を得といふ。太功記「百八の數珠つまぐって居たりけり」

百八の珠の緒【句】〔佛〕前條に同じ。天の網島「手に百八の玉の緒を、涙の玉に繰りませて」

ひやくはち-けち 百八結【名】〔佛〕次條「に同じ。

ひやくはち-けつごふ 百八結業【名】〔佛〕**ひやくはちぼんなう**(百八煩惱)に同じ。

ひやくはち-ぼんなう 百八煩惱【名】〔佛〕百八種の煩惱。六根が、六塵に對する時、各、好・惡・平の三種の不同ありて、十八の煩惱生じ、又、苦・樂・捨の三受ありて、十八煩惱を生じ、合はせて、三十六種となり、更に、これを、過去・現在・未來の三世に配して、一百八種となる。一說に、三界の見惑八十八種に、三界の修惑(シユワク)十種を加へて、九十八種、これに、無慚・無愧・惛沈・惡作・擧・嫉・慳・掉擧・睡眠・忿・覆の十纏を加へて、一百八種となると。謠曲道明寺「これこそ思の玉を貫く、數は百八煩惱をかたどる數珠の」

ひやくぱつ-ひやくちゆう 百發百中【句】㊀矢・彈丸などの、放つごとに、必ず中ること。㊁考案・計畫などの、試むるごとに、必ず適中すること。

ひやく-ばん 百蠻【名】もろもろのえびす。多くのえびす。「四夷・百蠻」

ひやく-ぱん 百般【名】いろいろ。さまざま。各種。諸種。萬般。

ひやくばん-かさがけ 百番笠懸【名】笠懸の一種。百番と定めて射るもの。

びやく-び 白薇【名】〔植〕**ふなばら**(白薇)に同じ。

ひやくぴき-ざる 百疋猿【名】百疋の猿の群れる樣を、描き又は彫刻しなどせるもの。義經腰越狀「百疋猿の目貫の誂」

ひやくひ-きやう 百譬經【名】〔書〕**ひやくゆきやう**(百喩經)に同じ。

ひやく-びじん 百美人【名】選拔したる百人の美人。「新潟百美人」

ひやく-ひと-くち 百一口【名】次條を見よ。

百一口の菓子【句】小き菓子。東海道名所記「茶屋なり。饂飩・蕎麥切(ソバキリ)・燒豆腐、その外、百一口の菓子あり」嬉遊笑覽「百一口の菓子は、小きをいふなるべし。今いふ南京落雁などにや」

ひやく-ひろ 百尋【名】『長きよりいふ』はらわた(腸)に同じ。

ひやく-ふ 百夫【名】㊀百人の男。㊁多「數の男。

ひやく-ぶ 百部【名】〔植〕ほどづら（百部）に同じ。

ひやく-ふく 百福【名】㊀あまたの幸福。百祿。㊁〔佛〕多くの福業（フクゴフ）。

百福莊嚴（シャウゴン）【句】〔佛〕百福を以て莊嚴すること。百福の業因（ゴフイン）に因りて佛身に具はる、莊嚴なる相（サウ）。太平記「百福莊嚴の床の上に、千佛の光を雙べて坐したまひたるに異ならず」

ひやくふく-しやうごん-さう 百福莊嚴相【名】〔佛〕『三十二相の一一は、皆、百福の業因（ゴフイン）に因りて具はれるものなるよりいふ』さんじふにさう（三十二相）に同じ。

ひやく-ぷく-ちや 百服茶【名】本（ホン）の茶・非（ヒ）の茶を分ち、種種の茶を點じて、百服に至ること。太平記「或は碁・雙六を打ちて、日をすごし、或は百服茶・褒貶の歌合なんどを翫びて、夜を明かす」

ひやく-ぶ-くわ 百部科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。多年生の草本。三屬・八種を含み、有毒なるもあれど、藥用・食用等に供するもあり。

ひやく-ふじ 百富士【名】富士山を、種種の方面より、又、種種の場合に眺望したる様を、百圖に描き分けたるもの。

ひやく-ぶつ 百物【名】もろもろの物。

びやく-ぶつ 白佛【名】〔佛〕『白は表白（ヘウビャク）の義』㊀佛に、事を白（マウ）すこと。㊁さんぶつ（讃佛）に同じ。

ひやくぶ-の-かう 百歩香【名】はくぶかう（百歩香）に同じ。〔古語〕源氏「名香には、からの百部の香をたきたまへり」

ひやく-ぶん 百聞【名】百たび聞くこと。幾度も聞くこと。

百聞は一見に如かず【句】『漢書の趙充國傳に「充國曰、百聞不㆑如㆓一見㆒、兵難㆓隃度㆒、臣願馳至㆓金城㆒、圖上㆓方略㆒」とあり』幾度も聞くよりは、一度實際を見たる方、優れり。耳聞は目見に如かず。〔諺語〕

びやく-ぶん 白分【名】〔佛〕びやくぐわつ（白月）に同じ。（黑分に對して）

ひやくぶん-ざん 百分算【名】〔數〕ぶあひざん（歩合算）に同じ。

ひやくぶん-すう 百分數【名】〔數〕しすう（子數）に同じ。

ひやくぶん-はふ 百分法【名】〔數〕『英 Centesimal method』ろくじふぶんはふ（六十分法）を見よ。

ひやくぶん-ひ 百分比【名】パアセントにて表はしたる歩合（ブアヒ）。ぱあせんてえじ。

ひやくぶん-ひれい 百分比例【名】前條に同じ。

ひやくぶん-りつ 百分率【名】前條に同じ。

ひやく-へい 百弊【名】多くの弊害。

ひやく-へき 百辟【名】天子・諸侯たる人。太平記「百辟は、樂に婬して、世の治否を見ず」

ひやく-ぼう 百寶【名】多くの寶。榮花「大寶蓮華の座あり、……、百寶の色相（シキサウ）、葉に具せり」

びやく-ほう 白鳳【名】はくほう（白鳳）に同じ。

びやく-ほつ 白拂【名】〔佛〕白熊（ハグマ）の拂子（ホッス）。庭訓往來「白拂・法螺」

ひやく-ぼん-ぐひ 百本杭・百本杙【名】〔地〕東京市隅田川の左岸、本所區横網（ヨコアミ）町の邊。護岸用の杭、水中に多數植立し、江戸時代より、明治時代にかけて、釣魚の名所たりき。

ひやくぼん-づけ 百本漬【名】乾大根百本を、糠一斗・糀四升・鹽三升半の割合にて漬けたるもの。

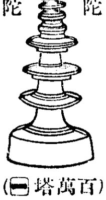
びやくぼん-わう 白飯王【名】〔人〕『梵 Sukkodana-rāja』師子頰（シシケフ）王の第二子。淨飯（ジャウボン）王の弟。釋尊の叔父。

ひやく-まなこ 百眼【名】㊀ひやくめんさう（百面相）に同じ。㊁厚紙にて假面を作り、目に當る所をくり拔き、種種の面貌を描き、眼鏡の如く、紐にて耳にかけ、面部を被ふ玩具。

ひやく-まん 百萬【名】謠曲の一。奈良の都の百萬と呼ぶ狂女の、山城國嵯峨の大念佛に參詣して、尋ぬる我が子に再會する事を作れるもの。

ひやく-まん 百萬【數】㊀一萬の一百倍。㊁極めて多大なる數。

ひやくまん-たふ 百萬塔【名】㊀孝謙天皇が、寶龜元年、奈良の十大寺に納めたまひし、百萬基の小塔。轆轤挽にて三輪・五輪等に造り、中に、陀羅尼の刷本（稀に寫本）を藏めたり。陀羅尼は、長さ一尺餘、廣さ二寸弱の一葉の紙に、僅かに百餘字の文字を記せるものにて、刷本は、文字を木版に彫り、黃色の原紙に刷りたるものの如く、世に整版印刷の始とし、寶龜版と呼ぶ。㊁〔書〕明治二十五年、中根淑校訂の下に、金港堂より發行せし叢書。二十二册。鎌倉時代より德川時代にかけての軍記物・戲曲・小說・法制書・隨筆の類四十餘種を收む。



（百萬塔 ㊀）

ひやくまん-だら 百萬陀羅【名】幾度も繰返して言ひ聞かすること。「小言（コゴト）の百萬陀羅」

ひやくまん-ちやうじや 百萬長者【名】多大の富を有する人。八萬長者。

ひやくまん-べん 百萬遍【名】㊀〔佛〕ひやくまんべんねんぶつ（百萬遍念佛）の略。狹衣「宮、この程は佛の御前にのみさぶらひたまひて、百萬遍滿てたまふなりけり」和合人「あとは、暫くひっそりと、念珠の切れたる百萬遍の如く」㊁次條の略。

百萬遍の念佛【句】〔佛〕ひやくまんべんねんぶつ（百萬遍念佛）に同じ。榮花「いと道心おはしまして、百萬遍の御念佛など、常にせさせたまふ」

ひやくまんべん-じ 百萬遍寺【名】ちおんじ（知恩寺）㊀の俗稱。

ひやくまんべん-ねんぶつ 百萬遍念佛【名】〔佛〕㊀百萬回、念佛を唱ふること。㊁淨土宗にて、信徒集まりて、念佛を唱へつつ、千八十顆の大數珠を、百回繰りまはす佛事。これを行ふ者は往生を得といふ。支那唐の道綽、木槵子（モクゲンジ）經の所說に基づき、なほ、阿彌陀經の七日念佛の說を參取し、七日不斷なれば百萬遍に滿つとて創め、我國にても、淨土敎の興隆に伴なひて流行するに至れり。百萬遍の念佛。百萬遍。

ひやく-み 百味【名】百種妙味。多くの珍味。空穗「百味を具へたる飲食（オンジキ）になりぬ」太平記「百味の珍に勝れり」

百味供養（クヤウ）【句】百味を以て供養すること。

百味の飲食（オンジキ）【句】〔佛〕㊀『無量壽經の上卷に「百味飲食、自然盈滿」とあり』百種の珍味。さまざまの珍味。㊁中陰に、亡者のために壇上に供ふる、果菓・根莖等の、種種の供物。

ひやくみ-かやく-づけ 百味加藥漬【名】漬物の一種。生薑・蘘荷（メウガ）・紫蘇・山椒等に、藥味を加へたる鹽漬。

ひやくみ-だんす 百味簞笥【名】昔、漢方醫の、藥劑を入れおくに用ひし、數多の小抽出（コヒキダシ）を附けたる簞笥。誤りて、藥味簞笥ともいふ。いろは文庫「醫者らしけれど、百味簞笥も飾ってなければ」

ひやくみやく-こん 百脈根【名】〔植〕みやこぐさ（都草）に同じ。

びやくめ-じ 白馬寺【名】はくばじ（白馬寺）に同じ。太平記「白馬寺を建てて、佛法を弘通（グツウ）せしかば」

ひやく-めんさう 百面相【名】簡單なる鬘・帽子などを用ひ、面相を男女・老幼、さまざまに變ふる技。餘興などに行ふ。ひやくまなこ。

ひやくめ-らふそく 百目蠟燭【名】重さ約百目なる、大なる蠟燭。

ひやく-もく 百目【名】『目は小孔をいふ』側面に多くの小孔を穿てる、土製の燈籠。

ひやく-ものがたり 百物語【名】夜間、數人集まりて、種種の怪談を話しあふこと。俗に、斯くすれば、妖怪現れ出づといふ。燈心を入れよう。和合人「薄っくらい明（アカリ）だ。いよいよ百物語めいて來た」

ひやく-もん-せん 百文錢【名】てんぱうつうはうせん（天保通寶錢）に同じ。

ひやくもん-ぶね 百文船【名】江戸時代に、船頭附の、極めて小き貸船。雇賃、一日百文なりしもの。

ひやく-やう 百様【名】さまざまのかた。いろいろのさま。

百様を知って、一様を知らず【句】百事に互りて辨へたる智者なれども、な

ほ精通せざる一事あり。〔諺語〕（曾我會稽山）「百様知って一様知らぬとは、御邊が事、的矢を業（フコ）の矢といへばとて、惡業（アクゴフ）の業と心得、親の敵を射る事と、故實を一偏に覺えしな」

百様を知りて一様を知らずば、爭ふこと勿れ 【句】 百事に亙りて辨ふとも、知らざる一事あらば、强ひて爭ふべからず。〔諺語〕（舞の本 烏帽子折）「百様を知りたりとも一様を知らずば、爭ふこと勿れと申す譬のあるぞとよ」

ひやく-やく 百藥 【名】 多くのくすり。（曾我）

百藥の長 【句】 さけ（酒）の異稱。「新酒百藥の長たりとも書けり」

ひやくや-まゐり 百夜參 【名】 祈願のために、同じ神社に、百夜續けて參詣すること。（發心集）「貴船（キブネ）へ百夜參して」

ひやくゆ-きやう 百喩經 【名】〔書〕 一百の譬喩を設けて、道法の邪正等を知らせたる佛經。二卷。支那六朝の時、中印度の人にして、齊に來りし求那毘地（グナビチ）の漢譯。一名、百譬經。

びやく-らい 白癩 【名】 皮膚の白色になる癩病。しらはだ。しろなまづ。はくさんかたゐ。（黑癩に對して）（著聞）「癩病を受けたる由、きこえありて……、和氣（ワゲ）・丹波のむねとあるともがら……、各、白癩といふ病の由を奏しけり」

白癩・黑癩 【句】『若し違背せば、惡病に犯さるるに至るべしとの意にていふ』 誓約の時に言ふ語。〔德川時代の語〕（三河物語）「起請の御罰を蒙りて、今生にては、びやくらい・こくらいの疫（ヤマヒ）を請け」

びやくらい-にん 白癩人 【名】 白癩に罹れる人。（宇治）「いかなる人の誦（ズ）するならんと思ひて、近う寄りて見れば、白癩人なり」

びやく-らふ 白鑞 【名】〔鑛〕 しろめ（白鑞）に同じ。

びやく-らふ 白蠟 【名】 黄蠟（ワウラフ）を、日光或はクロム酸・過酸化水素等にて漂白したる、白色又は類白色の塊狀物。成分も、用途も、黄蠟に同じ。はくらふ。

ひやく-り 百里 【名】 一里の百倍。

百里來た道は百里歸る 【句】 惡事は、結局、その人の身に報い來る。己（オノレ）に出づる者は、己に歸る。〔諺語〕（夕霧阿波鳴渡）「百里來た道は百里歸る。昔の榮耀（エヱ）ほど憂き目を見ねば、罪消えず」

百里の才 【句】『三國志の蜀の龐統傳に「龐士元非二百里才一」とあり。百里は、一縣の地の面積』 一縣を治むる才能。縣知事たる才能。

百里の道は、九十里が半（ナカバ） 【句】 次條に同じ。〔諺語〕

百里を行く者は、九十里を半（ナカバ）とす 【句】『戰國策の秦國の條に「行二百里一者半二九十里一、於レ此言二末路之難一」とあり』 事は、末の一段が、肝腎にてむづかし。〔諺語〕

百里の道も一足から 【句】「千里の行も一歩より起る」に同じ。〔諺語〕

百里の命（メイ） 【句】『論語の泰伯篇に「可三以寄二百里之命一」とあり。百里は、周代の諸侯の國の面積、命は政治上の命令』 諸侯の國の政治。

びやく-り 白痢 【名】 はくり（白痢）に同じ。

ひやくり-かう 百里香 【名】〔植〕 いぶきじやかうさう（伊吹麝香草）に同じ。

ひやくり-けい 百里奚 【名】〔人〕 支那春秋時代の秦の宰相。もと虞の大夫。秦の繆（ボク）公の夫人の媵臣たりしが、秦を亡げて、宛に走り、楚人に捉はる。繆公、その賢を聞き、五羖羊の皮を以て贖ひ、授くるに國政を以てす。友人蹇叔（ケンシユク）を推擧し、相共に治績を擧げ、秦主を輔けて、覇業を成さしむ。

ひやくりやう-きん 百兩金 【名】〔植〕 からたち（枸橘）の漢名。

ひやくりやう-とみ 百兩富 【名】 當れば百兩を得る富籤。

びやく-りゆう 白龍 【名】 はくりよう（白龍）に同じ。（盛衰記）「南庭に、二つの白龍出で來て」

びやく-るり 白瑠璃 【名】 白色の瑠璃。（榮花）「白瑠璃の葉は、冬の庭の雪を帶びたるが如し」

ひやく-れい 百禮 【名】 冠・婚・喪・祭等の諸禮。

ひやく-れい 百黎 【名】 多くの民。衆庶。（盛衰記）「九民・百黎」

ひやくれい-いっぱつ 百零一發 【名】 陸軍の禮式にて、天皇陛下に對する禮砲の發射の回數、又その禮砲。**くわうれいはう**（皇禮砲）參照。

ひやく-れう 百僚 【名】 多くの官僚。百官。百司。（正統記）「群卿・百僚に仰せて」

ひやく-れう 百寮 【名】 多くの官職。百官。百司。

びやく-れう 百療 【名】 諸病の治療。（盛衰記）「四部の書を鑑みて、百療に長ずと云ふとも」

ひやくれう-くんえうせう 百寮訓要鈔 【名】〔書〕 官職の事を略敍したるもの。一卷。藤原良基の撰。足利將軍義滿の請によりて書き贈りしものといふ。群書類從官職部に收む。

ひやくれう-わか 百寮和歌 【名】〔書〕 攝政・關白・太政大臣以下、太宰帥・六位等に至るまで、百寮の官名を題にして詠める百二十餘首の歌を集めたるもの。寫本一卷。高木夫實無の著。

ひやく-れん 百錬 【名】 あまたたび錬（ネ）り鍛ふこと。鍛ひに鍛ふこと。

百錬の鏡 【句】 ㊀ 鍛ひに鍛ひて造りたる鏡。（太平記）「背逆に裂けて、光百錬の鏡に血をそそぎたるが如く」 ㊁『白氏文集の百錬鏡と題する詩に「百錬鎔範非二常規一、日夙處置靈且奇……、太宗常以レ人爲レ鏡、鑒レ古鑒レ今不レ鑒レ容……、乃知天子別有レ鏡、不二是楊州百練銅一」とありづく』 天子の政治上の龜鑑。

百錬の雷（イカヅチ） 【句】 はげしき雷。（松風村雨束帶鑑）「百練の雷、雲を破って」

びやく-れん 白蓮 【名】 白き蓮花。はくれん。白蓮華。

白蓮の交（マジハリ） 【句】 白蓮社（ビヤクレンシヤ）㊀の社中の一人としての交。（徒然）「謝靈雲は、法華の筆受なりしかども、心、常に風雲の思を觀ぜしかば、慧遠（ヱヲン）、白蓮の交を許さざりき」

びやく-れん 白蘞 【名】〔植〕 **やまかがみ**（山蘿藦）に同じ。

びやく-れんげ 白蓮華 【名】 白色の蓮華。白蓮。**ふんだりげ**（分陀利華）參照。

びやくれんげ-しや 白蓮華社 【名】 **びやくれんしや**（白蓮社）㊀に同じ。

びやくれん-しや 白蓮社 【名】 ㊀ 支那東晉の名僧慧遠（ヱヲン）の廬山虎溪の東林寺に、僧俗を集めて結びし盟社。池に白蓮を種ゑ、念佛を修せり。陶淵明・謝靈運など、ここに遊びしより、名なり。蓮社。「虎溪の三笑」及び**はくれんけう**（白蓮教）參照。 ㊁『後世、慧遠の風を慕ひて、同名の社を結ぶ者、漸く多きに至りて、一般的の名稱となれるなり』 念佛修行の結社。 ㊂ 和泉國堺市寺地町にある大阿彌陀經寺の別稱。淨土寺に屬し、甘露山と稱す。本尊は丈六の阿彌陀佛。開山は智演。後醍醐天皇の勅を奉じ、支那の白蓮社を摸して建立せりとふ。光明天皇の勅願により、堂宇の修築成り、一時榮繁せしが、後、衰微し、今は知恩院の一末寺たり。

びやくれん-しゆう 白蓮宗 【名】〔佛〕 **じやうどしゆう**（淨土宗）の異稱。

ひやくれん-せう 百錬鈔 【名】〔書〕 時事の大要を、漢文にて、編年體に記したるもの。著者詳かならず。朝家の記錄より抄出せしものなるべしといふ。十七卷。大治の頃より正元元年の頃に及べり。

ひやく-ろく 百祿 【名】 あまたの幸福。百福。

びやく-ろく 白綠 【名】 日本畫に用の繪具の一種。綠靑（ロクシヤウ）の、淡色なるもの。

ひやくろく-ゐん 百六韻 【名】〔語〕 支那元の大德中、陰時夫兄弟の韻府群玉を撰せし時、百七韻（平水韻と呼ぶ）中の上聲「極」の一韻を刪りしもの、即ち平聲三十部を、上平・下平に分ち、上聲二十九部、去聲三十部、入聲七部と定めしもの。現行の漢詩の韻は、これに依る。

びやくろ-ち 白鷺池 【名】〔地〕『大般若經に見ゆ』 天竺王舍城の竹林園に在りきと

いふ池。釋迦、その側に衆を會して說法せりといふ。盛衰記「佛の說敎したまひける祇園精舍も、竹林精舍も、狐狼の棲（スミカ）となり、……、白鷺池には、水絕えて、草のみ深く茂り」鵯鷲合戰「佛、法輪を轉ぜし者、般若の說く處、白鷺池に非ずや」

びやくろち-きやう 白鷺池經 【名】〔書〕だいはんにやきやう（大般若經）の異稱。

ひやく-ろん 百論 【名】〔書〕三論の一。邪を破り、正を顯はして、無所得中道の敎旨を明かにせるもの。二卷。龍樹菩薩の弟子伽那提婆（カナデバ）の著。鳩摩羅什（クマラジフ）の譯。

ひやく-わ 百話 【名】或事物に關する物語を、百條記したるもの。「社會百話」「敎育百話」

ひやく-わう 百王 【名】百代の帝王。代代の多くの王。百王（ハクワウ）。盛衰記「伊弉諾（イザナギ）・伊弉册（イザナミ）尊より、百王の今に至るまで」同「百王と申すは、天神七代・地神五代の後、神武天皇より始め奉りて」

百王鎭護の伽藍（ガラン）【句】百王の鎭護する伽藍。特に延曆寺にいふ。太平記「桓武皇天の御宇に、高祖、大師當山を開基して、百王鎭護の伽藍を立てられ候ひしより以來」

ひやく-わかう 百和香 【名】はくわかう（百和香）に同じ。

ひやく-わび 百佗 【名】道爺（ダウヤ）の作りし茶湯の釜。千原叟、好みて板風爐に取り合はせたりといふ。

ひやく-ゐん 百韻 【名】㊀『蜀牋譜に「百韻牋、合以二兩色材一爲レ之。其橫視二常紙一、長三之二、可三以寫二詩百韻一、故云」とあり』韻字を一百押捺したる、長篇の詩。㊁〔文〕連歌及び俳諧の附合（ツケアヒ）の、百句續くるもの。（歌仙・五十韻・源氏・米字・二百韻などに對して）甲陽軍鑑「長篠へ信長首途（カドデ）の發句は　松風に多氣（タケ）たぐひなきあしたかな　といふ百韻の內に、山縣を始め、各武田の家老を悉く入れ、武田調伏の連歌を仕ったりと聞ゆ」

ひやくゐん-よきよう 百韻餘興 【名】〔文〕俳諧にて、百韻の際、遲參者に、擧句（アゲク）より、更に句を附けて續けしむること。正式の席にては行はず。

ひやく-ゐ 百會 【名】『一身の精要、この處に會すとていふ』㊀人體の頂の中央、即ち旋毛（ツムジ）のある所。㊁馬の背の後方にある高き所。

ひやくゑん-さつ 百圓札 【名】百圓の兌換紙幣。

ひ-やけ 日燒 【名】㊀皮膚の、日に燒けて、黑みを帶ぶること。ひぐろみ。㊁旱のため、水田・池沼などの、水涸れて、熱すること。㊂烈しき日光のため、草木などの、水分を失ひていたむこと。新永代藏「自由自在の時は、木、冬枯せず、日燒せず」

ひやけ-だ 日燒田 【名】日燒したる田。猿蓑（乙州）「日燒田や時時つらく鳴く蛙」

ひやける 【動下二自】ひやかし㊂終る。〔江戸時代の俚語〕和合「ふらふらとひやかしに行（イ）って、九つ（ひけ）を打って、もうすっぱりひやけたから、ぶらぶらと歸りがけ」

ひや-こし 冷こし 【形二】ひややかなり。つめたし。ひやっこし。

ひや-ざうめん 冷索麪・冷索麵 【名】煠（ユ）でたる後、冷したる索麪。

ひや-ざけ 冷酒 【名】つめたき酒。溫めぬ酒。ひや。冷酒（レイシユ）。

冷酒と親の意見は後（アト）で利（キ）く【句】冷酒と親の訓誡とは、後に至りて、効果あらはる。〔諺語〕

ひやし 冷 【名】㊀ひやすこと、又、ひやしたる物。㊁ひやす仕方、又、ひやしたる度合。

ひやし-うり 冷瓜 【名】水又は氷にて冷したる瓜。一茶「人見たら蛙になれよ冷瓜」

ひやし-じる 冷汁 【名】ひやじる（冷汁）に同じ。

ひやし-ずゐくわ 冷西瓜 【名】水又は氷にて冷したる西瓜。

ひやし-つゆ 冷液 【名】ひやじる（冷汁）に同じ。

ひやし-どうふ 冷豆腐 【名】ひややっこ（冷奴）に同じ。

ひやし-びいる 冷麥酒 【名】氷などにて冷したる麥酒。

ひやしんす 風信子（英 Hyacinth）【名】〔植〕百合（ユリ）科に屬する多年生の草。葉は、地下の鱗莖より叢生し、披針形にして厚く、綠色を呈す。早春、數寸の花莖を抽き、長形の總狀花序を成して、數多の小花を著く。花は單瓣又は重瓣にして、芳香あり、色は、主に紫碧色なれども、淡紅・暗紫・黃・白等、種種あり。原產地はシリヤ。觀賞用として栽培す。ひあしんす。ひやしんと。むらさきずゐせん。

（ひやしんす）

ひや-しんと 風信子 【名】〔植〕前條に同じ。

ひやし-もの 冷物 【名】水に漬けて冷したる食品。芭蕉「短夜や崩れて明けし冷し物」

びや-じやう 毘耶城 【名】〔地〕「毘耶の城」を見よ。

ひや-しる 冷汁 【名】冷したる羹。ひえたる汁。ひやしじる。ひやしつゆ。芭蕉「冷汁や須磨に淡路の帆懸船」

ひやす 冷す 【動四他】㊀ひややかにす。つめたくす。㊁水にて洗ふ。水に浸（ヒタ）す。空穗「御馬ども、地に引き立てて、ひやし」㊂刀にて、人を斬る。〔元祿時代の語〕

ひや-ずし 冷鮨 【名】冷藏庫に入れなどして冷したる鮨。夏季の食用に供す。

ぴやすとる （英 Piaster）【助數】㊀埃及（エジプト）國の貨幣の單位。我國の九錢九厘に相當す。㊁土耳古（トルコ）國の貨幣の單位。我國の約九錢に相當す。

ぴやすとる （佛 Piastre）【助數】佛領印度の貨幣の單位。約我國の舊一圓に相當す。

びや-だる 麥酒樽 【名】びいるだる（麥酒樽）に同じ。

ひや-つく 冷つく 【動四自】冷ややかに感ず。ひやひやとす。ひやめく。

ひや-っこし 冷っこし 【形一】ひやこし（冷こし）の音便。八笑人「一しほひやっこく涼しく見せる水からくり」

ひやっ-ぱい 百拜 【名】ひやくはい（百拜）を見よ。

ひやっ-ぱう 百方 【名】ひやくはう（百方）を見よ。

ひやっ-ぱう 百方 【副】ひやくはう（百方）を見よ。

ひやっぱつ-ひやくちゆう 百發百中 【句】ひやくはつひやくちゆう（百發百中）を見よ。

ひやっ-ぱん 百般 【名】ひやくはん（百般）を見よ。

ひやっぴき-ざる 百疋猿 【名】ひやくぴきざる（百疋猿）を見よ。

ひやっぷく-ちや 百服茶 【名】ひやくふくちや（百服茶）を見よ。

ひやっ-ぽう 百寶 【名】ひやくはう（百寶）を見よ。

ひやっぽん-ぐひ 百本杭・百本杭 【名】〔地〕ひやくほんぐひ（百本杭）を見よ。

ひやっぽん-づけ 百本漬 【名】ひやくほんづけ（百本漬）を見よ。

ひや-どうふ 冷豆腐 【名】ひややっこ（冷奴）に同じ。

ひ-やとひ 日雇・日傭 【名】その日かぎりのやとひ。ひよう。（定雇（ヂヤウヤトヒ）に對して）

ひやとひ-かせぎ 日雇稼・日傭稼 【名】日雇になりて稼ぐこと、又その人。ひようかせぎ。

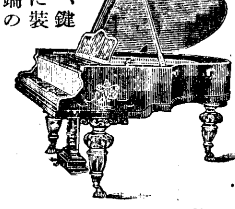
ひやとひ-ざ 日雇座 【名】江戸時代に、日雇稼を取り締り、日雇札・役錢等に關する事を取り扱ひし所。

ひやとひ-にんべつちやう 日雇人別帳 【名】江戸時代に、各町より、日雇座に差出しし人別帳。

ひやとひ-ふだ 日雇札 【名】江戸時代に、日雇座より交付せし、日雇稼の許可證。

ぴやにすと 洋琴家（英 Pianist）【名】ピヤノの彈奏に長じたる人。ひあにすと。

ぴやの 洋琴（英 Piano）【名】有絃樂器の一種。大なる函の中に、多くの金屬製の絃を張り、函外に鍵（ケン）を駢べたる、卓子狀のもの。指頭にて、鍵を壓せば、函中に裝置せる槓桿の端のハンマアが、金屬絃を打ちて、各種の音を發す。西曆第十八世紀の初、伊太利人バ



（ぴやの）

ルトロメオ、クリストフォリ(Bartolomeo Christofori)の創製。ぴあの。

ぴやの-ましん(英 Piano machine)【名】紋切機の一種。樂器のピヤノの鍵(ケン)を壓す如くにして、孔を穿つもの。

ぴやの-もんほりき ピヤノ紋穿機【名】前條に同じ。

ぴやのら(英 Pianola)【名】自働的にピヤノを演奏せしむる機械的裝置。原理は、樂曲に適應すべく、大・小・長・短各種の孔を穿てる卷紙と、多くの小鞴を備へたる挺子(コテ)とより成り、空氣の壓力のために、挺子の動くによりて、音を發す。

ひや-ひや 冷冷【貌】㊀冷やかなるさま。ひやり。盛衰記「腹に、刀を、ひやひやと差當てたり」㊁危ぶみ恐るるさま。八笑人「ひやひやして、……、長居をしては化(ケバ)の皮があらはれんと、しきりにけんのんに思ひ」

ひや-ひや(英 Hear, Hear)【感】ひやを重ねていふ語。

ひや-ひや【感】失望・落膽して發する聲。おやおや。やあやあ。和合人「大そう澄んだ酒だ、……一口呑みしが、びっくりして吐き出し、ひやひや、これやあ水だ、水だ」

びや-ほおる(英 Beer-hall)【名】『麥酒堂の義』來客の求に應じて、麥酒を、コップにて賣り、水菓子又は簡單なる西洋料理などをも供する飲食店。びいやほおる。

びやぼん【名】『音に因りて名づけたるか。一說に、琵琶笛(ビワブエ)の訛といひ、又アイヌ語ともいふ』口に銜みて彈奏する玩具的樂器。細長き竹片又は鋼鐵の一端を固著し、他端を遊離せしめたるもの。固著せる方の端を、口に銜み、口腔內の形を種種に變化せしめて、指頭にて、遊離せる方の端を彈く時は、種種の共鳴を生じ、妙音を發す。きやこん。つがるぶえ。びはぼん。

(びやぼん)

ひ-やま 日山【名】山上に宿泊することなく、一日の中に上下し得る山。

ひ-やま 火山【名】鰹節を燻烟と熱とによりて乾燥するに用ふる焙爐(ホイロ)。

ひ-やま 檜山【名】ひのきやま(檜木山)に同じ。萬葉「斧取りて丹生(ニフ)の檜山の木樵り來て舟に造りて」

ひやま 檜山【名】〔地〕㊀渡島(ヲシマ)國六郡の一。檜山支廳の所管。㊁羽後國山本郡にある町。能代(ノシロ)の東二里半。舊國道に當る。中世、安東氏、これに據れり。㊂丹波國船井郡にある村。山陰道の一驛。園部・綾部の間にあり。

ひやま-たんさい 樋山坦齋【名】〔人〕書畫の鑑定家。名は義眞、字は德忠、通稱は成篤。別に盤松軒と號す。江戶深川六間堀に住す。天保十三年歿す。年六十九。

ひや-みづ 冷水【名】㊀ひややかなる水。ひや。(飮用に供する時にいふ) ㊁「年寄(トシヨリ)の冷水」の略。

ひやみづ-うり 冷水賣【名】昔、江戶にて、夏季炎暑の時、一荷の桶に冷水を入れて賣りし者。

ひや-むぎ 冷麥【名】水に浸して冷したる切麥。夏季の食用に供す。(熱麥(アツムギ)に對して)

ひやん-ちん 香椿【名】〔植〕『漢字の唐音』ちやんちん(香椿)に同じ。

ひや-めく 冷めく【動四自】ひやつく(冷つく)に同じ。醒醉笑「腰のまはりひやめくは」

ひや-めし 冷飯【名】冷えたるめし。ひえめし。天王寺まゐり「白粥もなかねば人やふしんば冷飯もなき今日の家うつり」

冷飯から湯氣が立つ【句】有るべからざる事の譬。〔諺語〕

ひやめし-くひ 冷飯食【名】㊀寄食の人。厄介人。ゐさふらふ。㊁次男以下、家督を相續せぬ者を輕しめていふ稱。ひやめしざうり。〔江戶時代の語〕

ひやめし-ざうり 冷飯草履【名】㊀藁を編みて作れる、粗末なる草履。八笑人「冷飯草履と、中貫(ナカヌキ)と、かたかたちんばに穿(ハ)いて」㊁前條に同じ。

ひやめし-っ-くひ 冷飯食【名】ひやめしくひ(冷飯食)の音便。

ひや-やか 冷やか【貌】㊀つめたきさま。ひややか。源氏「山風、ひややかに吹きたるに」㊁思ひやりなく、又愛情なきさま。冷淡。

ひや-やっこ 冷奴【名】水又は氷などにて冷したる奴豆腐。ひやどうふ。

ひやり 冷り【貌】㊀つめたく感ずるさま。ひいやり。㊁危險を感ずるさま。

ひやり【貌】ひやろに同じ。

ひやり-ばんじやう 日遣番匠【名】㊀仕事の中途に休むこと多き大工。㊁物事を半ばにして投げやる人。

ひやり-ひやり【貌】ひやりを重ねていふ語。膝栗毛「ひやり、ひやり、てれつく、てれつく、すってんてん」

ひ-やろ 火遣【名】『火を遣らんの意』ひまはし(火廻)に同じ。

ひやろ【貌】笛の音の形容。ひやり。ひより。

ひやろ-ひやろ【貌】前條の語を重ねていふ語。ひやりひやり。萬紫千紅「これもまた星の手向(タムケ)か入りかかるひやろひやろと吹く笛の聲」

ひゆ 莧【名】〔植〕莧科に屬する一年生の草。苗は鷄頭のに似て、高さ三四尺、葉は大形の卵圓形にして、微凹頭を成し、綠色・紅色・紫色又は雜色を呈す。秋、細かく淡黃色の花、穗を成して、雌雄異株に開く。花被は、三枚ありて、披針形なり。嫩葉と莖とは食ふべし。はびやう。ひよう。

ひ-ゆ 譬喩・比喩【名】或物事を說明するに、類似せる又は對比する物事を假り來ること。たとへ。ひゆはふ(譬喩法)參照。

ひゆ 冷ゆ【動上二自】次條㊀に同じ。〔古語〕和名「食㆓熱膩物㆒勿㆑飮㆓冷酢漿㆒」。師說、冷酢、讀㆓比伊須由禮流㆒」

ひゆ 冷ゆ【動下二自】『ひ(氷)に語尾の添ひたる語』㊀冷やかになる。つめたくなる。熱氣無くなる。冷却す。㊁熱心の度衰ふ。氣勢なくなる。

ひ-ゆうくりっど-きかがく 非ユウクリッド幾何學【名】〔數〕『英 Non-Euclidean geometry』ユウクリッド幾何學の平行線に關する公理に反對して、新に建設したる幾何學。「直線外の一點を通じ、その直線に出會はざる直線は、一つあり、且つ一つに限る」との公理に對し、出會はざる直線が一つのみなりや否やは、到底證明するを得ず、これを無限に多數ありとしても、他の公理と矛盾する所なしとの新見地に立つ。

ひゆうず(英 Fuso)【名】ふゆうずを見よ。

ひゆうず-いんさつ-でんしんき ヒュウズ印刷電信機【名】次條に同じ。

ひゆうず-でんしんき ヒュウズ電信機(英 Hughes telegraph instrument)【名】電信機の一種。電信符號を用ひずして、直ちに文字及び數字を印刷するやうに裝置したるもの。米國人ヒュウズの發明に係る。ひゆうず印刷電信機。

ひゆうず-ばん ヒュウズ盤【名】ふゆうずばん(フュウズ盤)を見よ。

ひゆうず-わいや【名】ふゆうずわいやを見よ。

ひゆうまあ(英 Humour)【名】〔文〕ゆうもあに同じ。

ひゆうまにずむ(英 Humanism)【名】〔哲〕じんだうしゆぎ(人道主義)に同じ。

ひゆ-くわ 莧科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區の一科。草本・灌木、稀に喬木。熱帶及び溫帶に產す。莧・牛膝(ヰノコヅチ)・千日草等、これに屬す。けんくわ。

ひゆっ-と【副】必ず。全く。〔遠江・伊勢國邊へかけての方言〕膝栗毛「ひゆっと、此方(コ)さんが遣りからかいたに違やしよまい」同「四五日の內には、ひゆっと、此方(コチ)から持(モ)てこがな」

ひゆ-はふ 譬喩法・比喩法【名】〔文〕或事物を說くに、これと相類似し、もしくは相對比する事物を假り用ふる修辭法。直喩・隱喩等あり。

ひゆまにずむ【名】〔哲〕ひゆうまにずむに同じ。

びゆらん(佛 Burin)【名】彫版に用ふる西洋の刀。主に曲線・輪廓などを彫るに用ふ。

ひ-ゆり【名】〔植〕ひめゆり(姬百合)に同じ。

びゆれっと(佛 Burette)【名】液體を精密に計量するに用ふる具。度を盛りたる長き圓柱狀の硝子管の、下端狹く、活栓にて、自由に開閉するやうに作りたるもの。

ひよ【感】❶雛鳥の鳴聲。ひよひよ。空穗「巣を出でてねぐらも知らぬ雛鳥のなぞや暮れゆくひよと鳴くらん」❷犬の鳴聲。べう。大鏡「淸範律師の、犬のために法事しける人の講師に招ぜられて……、ただ今や、過去聖靈（シャウリャウ）は、蓮臺の上にて、ひよと吠えたまふとのたまひしに」

ひよい【貌】ゆくりなきさま。不意なるさま。ひよっ。ひやう。突然。八笑人「手拭を、ひよいと取って、後（ウシロ）へはふると」

ひよう 莧【名】〔植〕**ひゆ**（莧）の訛。〔東國の方言〕

ひよう 雹【名】霰の大なるもの。ひさめ。ひ。

ひ-よう 費用【名】つひえ。いりめ。ものいり。入費。

ひ-よう 日傭【名】**ひやとひ**（日雇）に同じ。八笑人「日傭を頼み、諸色（シヨシキ）を持たせ」

び-よう 美容【名】うるはしきかたち。うつくしき容貌。美形。

ひよう-あかざ 莧藜【名】〔植〕**ひゆ**（莧）を云ふ。〔陸奥國の方言〕

ひよう-あつ 氷壓・冰壓【名】氷の押す力。極地の海にて、氷に閉ぢられたる船の、これがために押しつぶさるることあり。

ひよう-い 憑夷・馮夷・冰夷【名】『抱朴子』に「馮夷華陰人。以二八月上庚日一、度レ河溺死。天帝爲二河泊一」、山海經に「冰夷即河伯也」とあり』支那の河の神の一。水神。太平記「水練は、又、馮夷が道を得たれば、驪龍領下の珠をも、自ら奪ひつべし」

ひよう-い 憑依・馮依【名】❶たよること。❷のりうつること。

ひよう-い 憑異・馮異【名】〔人〕支那後漢の武將。字は公孫。潁川父城の人。光武皇帝に從ひて、戰功多く、累進して、陽夏侯に封ぜられ、征西大將軍に拜す。謙退にして傲らず、途上、諸將に逢へば、車を引きて道を避け、諸將坐して功を論ずる毎に、獨り樹下に屛く。軍中、大樹將軍と稱す。

ひようい-きやう 憑依狂・馮依狂【名】〔哲〕**まひようきやう**（魔憑狂）に同じ。

ひよう-が 冰河・氷河【名】❶一面に氷の張りたる河。❷〔地〕『英 Glacier』高山の積雪凍結して、その重壓のために、下層より融解して、谷間を漸次に降下するもの。數多の谷より、相合して、大塊となりて降下し、その狀、恰も河流の如し。

ひよう-が 憑河・馮河【名】❶「暴虎（バウコ）・馮河」を見よ ❷危險なる行爲の譬。

ひよう-かい 冰海・氷海【名】氷の張りつめたる海。南北極などにあり。

ひよう-かい 冰解・氷解【名】❶氷の解くること。❷**ひようしやく**（冰釋）に同じ。

ひよう-がい 雹害【名】降雹によりて起る災害。

ひようが-き 冰河期・氷河期【名】〔地〕『英 Glacial period』次條に生じ。

ひようが-じだい 冰河時代・氷河時代【名】〔地〕『英 Glacial age 又 Ice age』地質時代の、新生代第三紀の終より第四紀に互りて、歐羅巴洲の大部及び北亞米利加洲の北部の、氷河に閉されたりし時代。冰河期。氷期。

ひようが-せいそう 冰期成層・氷河成層【名】〔地〕『英 Glacial sediment』氷河の運搬したる土砂・岩片などの重なりて、層をなせるもの。

ひよう-かせぎ 日傭稼【名】**ひやとひかせぎ**（日雇稼）に同じ。

ひようが-たく 冰河卓・氷河卓【名】〔地〕『英 Glacial table』氷河に運搬せられたる巨岩の、日光を遮るがために、その下なる氷塊の、溶けずして、卓のごとき形をなすもの。

ひよう-かん 冰寒・氷寒【名】氷張りて、寒きこと。

ひよう-かん【名】**ひようきん**を云ふ。〔九州の方言〕

ひよう-き 冰肌・氷肌【名】❶『莊子の逍遙遊篇に「藐姑射之山、有二神人一居焉。肌膚如二冰雪一」とあるに本づく』氷の如く白く美しきはだへ。❷『黃庭堅の詩に「寒香寂寂動二冰肌一」とあり』白梅の花の形容。

冰肌・玉骨（キヨクコツ）【句】❶『竹坡詩話に「冰肌玉骨淸無レ汗、水殿風來暗香滿」とあり』白梅の花と、その幹枝との形容。❷美人の形容。冰姿玉骨。

ひよう-き 冰期・氷期【名】〔地〕**ひようがじだい**（氷河時代）に同じ。

ひよう-きよ 憑據・馮據【名】よりどころとすること。よりどころ。依據。

ひようきよ-しよるゐ 憑據書類・馮據書類【名】憑據たる書類。

ひよう-くわ 冰菓・氷菓【名】**あいすくりいむ**に同じ。

ひよう-くわい 冰塊・氷塊【名】氷のかたまり。

ひよう-けつ 冰結・氷結【名】氷の張ること。凍結。

ひよう-げん 冰原・氷原【名】〔地〕『英 Ice field』廣く一面に氷に蔽はれたる地。氷野。氷田。

ひよう-こ 冰壺・氷壺【名】❶氷を入れたる玉の壺。❷『姚崇の冰壺戒に「冰壺者、淸潔之至也。君子對レ之、不レ忘二乎淸一」とあり』純白・淸潔なるとこの譬。

ひよう-さう 冰霜・氷霜【名】樹枝に置きたる、冰の如き霜。

ひよう-さく 冰醋・氷醋【名】〔化〕次條の略。

ひよう-さくさん 冰醋酸・氷醋酸【名】〔化〕『英 Glacial acetic acid』殆ど純粹なる醋酸より成り、僅かに百分の五以下の水を含むもの。無色・澄明なる揮發性の液にして、常溫に於て、多く冰塊狀を爲す。無水醋酸ナトリウムと硫酸とを混じて製す。醫術・工業上に用途多し。氷狀醋酸。

ひよう-ざん 冰山・氷山【名】❶氷にて成れる山。氷の山。❷『開元天寶遺事に見ゆ』權勢の盡き易き譬。❸〔地〕『英 Iceberg』兩極地方、その他、高緯度地方の氷河の末端の、海中に浮ぶに至れるもの。次第に溶けて、遂に消失すれども、往往、低緯度の海上に流れ來りて、航海に危害を與ふることあり。

ひよう-し 冰姿・氷姿【名】次條を見よ。

冰姿・玉骨【句】「冰肌・玉骨」❶に同じ。

ひ-ようじ 火用心【名】『或は「火危し」の略訛か』「火の用心」の訛。傾城反魂香「曙近き火ようぢの聲」

ひようしう-せき 冰洲石・氷洲石【名】〔鑛〕『英 Iceland spar』方解石の、透明・無色なるもの。複屈折作用を明瞭に示すを以て、ニコルのプリズム、その他の光學機械を作るに用ふ。氷蘭石。

ひよう-しつ 冰室・氷室【名】氷を貯へておく土窟又は家屋。ひむろ。

ひよう-じん 冰人・氷人【名】**げっかひようじん**（月下氷人）に同じ。

ひよう-しや 被用者【名】使用せらるる者。

ひよう-じやう 冰上・氷上【名】氷のうへ。

ひよう-じやう 冰狀・氷狀【名】氷のごとき形狀。

ひようじやう-さくさん 冰狀醋酸・氷狀醋酸【名】〔化〕**ひようさくさん**（冰醋酸）に同じ。

ひようしやう-せき 冰晶石・氷晶石【名】〔鑛〕『英 Cryolite』鐵及びナトリウムを含有するアルミニウムの鑛石。硬度、二・五、單斜晶形に屬し、立方體のごとき形をなす。色は白けれども、往往赤・褐等なるもあり。玻璃光澤を有して、やや透明なり。容易に熱に熔解して、弗酸を生ず。アルミニウムと弗酸との製造に用ふ。

ひやうじやう-ていてつ 冰上蹄鐵・氷上蹄鐵【名】馬を氷雪の上に使役するに當り、蹄の滑るを防ぐに用ふる蹄鐵。

ひよう-しやく 冰釋・氷釋【名】氷の如く釋（ト）くること。解けて失（ウ）すること。冰解。「解疑團冰釋す」

びよう-じゆつ 美容術【名】❶『英 Callisthenics』體操の一分科。姿勢を正しくし、五體を整頓するために行ふもの。❷**びがんじゆつ**（美顏術）に同じ。

ひよう-すゐ 冰水・氷水【名】こほりたる水。太平記「火印を結びたまひける間、氷水、忽ちに解けて、沸湯のごとくなり」

ひよう-せつ 冰雪・氷雪【名】❶こほりと、ゆきと。❷淸廉・潔白なることの譬。「氷雪の心」「氷雪の操（ミサヲ）」

ひようせつ-えいげふ 冰雪營業・氷雪營業【名】氷雪を採取・製造し、又は販賣する營業。

ひよう-せん 日傭錢【名】日傭の賃錢。日傭賃。浮世風呂「人を雇って買ひに遣っ

たところが、……日傭錢の、すくなずくなも、百五十も遣って」

ひよう-そう 氷層・氷層 【名】 年年の氷が相重なりて成す層。

ひようそう-かづら ひようそう葛 【名】 **一**［植］**ふぢかづら**(藤葛)に同じ。 **二**古、倚廬(ｲ)に用ひし具。ふぢかづらにて作りて、繩代に用ひしものなるべしといふ。

ひようたい-せき 氷堆石・氷堆石 【名】［地］**たいせき**(堆石)に同じ。

ひよう-たふ 氷塔・氷塔 【名】［地］氷の尖塔。南米アンデス(Andes)山脈の南部、雪線以下の處にあり。氷雪相混じて成り、高さ人の身長ほどなり。氷河の作用によりて生じたるものといふ。

ひよう-たふし 日傭倒 【名】 稻田の株の間などを搔きて、耕土を攪拌するに用ふる農具。狹き板に、多數の釘を打ち附け、柄を附けたるもの。

ひよう-だふれ 費用倒 【名】 **かかりまけ**(掛負)に同じ。

ひよう-たん 氷炭・氷炭 【名】 **一**こほりと炭火と。 **二**性質の相反せる二つの物事の譬。

氷炭相容れず 【句】『楚辭の七諫に「冰炭不㆑可㆓以相並㆒兮」、鹽鐵論に「冰炭不㆑同㆑器」とあり』善と惡と、忠と不忠との如く、性質全く相反して、並び立たず。［諺語］

ひよう-ちん 日傭賃 【名】 日傭の賃銀。日傭錢。

ひよう-ちゆう 氷柱・氷柱 【名】 **一つらら**(冰柱)に同じ。 **二**氷を、角柱形に切り、夏日、室內に立てて、冷氣を取る料としたるもの。

ひよう-てん 氷點・氷點 【名】［理］『英 Freezing point』水の凍り初め、又は氷の解け初めんとする時の溫度、又、これを示すために、寒暖計に刻みつけたる標點。攝氏・列氏にては零度、華氏にては三十二度とす。(沸騰點に對して)

ひよう-でん 氷田・氷田 【名】 **一**一面に氷の張りたる田地。 **二**［地］**ひようげん**(氷原)に同じ。

ひよう-ど 憑怒・憑怒 【名】 **げきど**(激怒)に同じ。

ひよう-とり 日傭取 【名】 **ひようかせぎ**(日傭稼)に同じ。

ひよう-なう 氷囊・氷囊 【名】『獨 Eisbeutel』消炎・鎭痛又は止血のため、氷を入れて、身體の患部に當つるふくろ。通常、牛・豚の膀胱、又は護謨・油紙等にて製す。

ひよう-や 氷野・氷野 【名】［地］**ひようげん**(氷原)に同じ。

ひよう-よく 憑翊・憑翊 【名】『支那にて、漢の代に、左右內史をして、首府長安を分治せしめし中にて、左內史を、後、左憑翊と改めしに擬していふ』左・右京職(キヤウシキ)の唐名。

ひようらん-せき 氷蘭石・氷蘭石 【名】［鑛］**ひようしうせき**(氷洲石)に同じ。

ひよう-りん 冰輪・氷輪 【名】 **つき**(月)**一**の異稱。

ひ-よく 比翼 【名】 **一**鳥の、二羽、互に翼を比(ナラ)ぶること。 **二**「比翼の鳥」の略。謠曲(楊貴妃)「比翼も友を戀ひ、獨、翅を片敷き」天の網島「比翼の誓紙」 **三**衣服の、表より見ゆる緣の部分のみを、重著(カサネギ)のやうにし、胴は一枚にしたるもの。費用を省くと、細腰を旨とするとにより、女子、往往これを用ふ。人形仕立(ニンギヤウジタテ)。浮世風呂「あひ著は、ずっと茶返(チヤガヘシ)の比翼で」 **四**めをと。夫婦。箱根靈驗躄仇討「酒宴の上で、比翼の床入(トコイリ)」

比翼の契(チギリ) 【句】「比翼・連理の契」に同じ。御伽草紙(和泉式部)「その夜は、鴛鴦の衾(フスマ)の下に、比翼の契をこめ」

比翼の鳥 【句】 **一**『爾雅に「南方有㆓比翼鳥㆒焉、不㆑比不㆑飛」とありて、註に「似㆑鳧青赤色、一目一翼、相得乃飛」と見ゆ。「比目の魚」參照』支那にて、雌雄各一目・一翼にて、常に一體となりて飛ぶといふ、想像上の鳥。 **二**『白居易の長恨歌に「在㆑天願作㆓比翼鳥㆒、在㆑地願爲㆓連理枝㆒」とあり』男女の契の深き譬。盛衰記「比翼の鳥、連理の枝と、天に仰ぎ、星を指して、御契深かりし建春門院」

比翼の紋 【句】 **ひよくもん**(比翼紋)に同じ。

比翼・連理 【句】 比翼の鳥と、連理の枝と。

比翼・連理の言の葉 【句】 男女の睦言(ムツゴト)。謠曲(楊貴妃)「君とかはせし睦言の、比翼・連理の言の葉も」

比翼・連理の契(チギリ) 【句】 男女の深き契。常盤嫗物語「比翼・連理の契まで、後の世かけて語らひし」

ひ-よく 肥沃 【名】 土地の肥えてあること。(瘠薄に對して)

ひよく 【貌】 **ひよっくり**に同じ。醒睡笑「大名は、ひよくと下さるる事あるものぢやに」

び-よく 尾翼 【名】 飛行機の後方にある翼(ヨク)。

び-よく 鼻翼 【名】【醫】『獨 Nasenflügel』**こばな**(小鼻)に同じ。

ひよく-ぎせる 比翼烟管・比翼煙管 【名】 一つの烟管にて、男女、互に睦じく、烟草をのむこと。冥途飛脚「比翼烟草の薄烟」

ひよく-ござ 比翼御蓙・比翼莫蓙 【名】 俗曲(其俤淺間嶽)「いやな客にも比翼莫蓙」

ひよく-さう 比翼草 【名】［植］『葉腋ごとに枝を出だし、兩兩相對するによりていふ』玄參(ゴマノハグサ)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘に達し、葉は對生し、卵形にして、銳頂をなし、鋸齒あり。莖にも、葉にも、毛茸あり。夏、莖頂と葉腋とに枝生じ、淡紅紫色の花、總狀花序をなして開く。山野に自生す。

ひよく-さう 比翼藻 【名】［植］『羽狀に枝を出だし、兩兩相對するによりていふ』紅色藻類に屬する海藻。體は絲狀にして、多數の枝、數回羽狀をなして分岐し、各枝、また、側面に、櫛齒狀の小枝を生ず。

ひよく-したぎ 比翼下著 【名】 比翼**三**の仕立方にしたる下著。

ひよく-づか 比翼塚 【名】 情死したる男女を合葬して建てたる塚。めをとづか。

ひよく-てう 比翼鳥 【名】［動］**わうさまごくらくてう**(王様極樂鳥)に同じ。

ひよく-ひば 比翼檜葉 【名】［植］ **一いとひば**(絲檜葉)に同じ。 **二さはら**(花柏)に同じ。

ひよく-もん 比翼紋 【名】 己のと情人のとを組み合はせたる紋所。ふたつもんならべもん。俗曲(初緣千種の濡事)「染浴衣(ソメユカタ)、ままに鳴海(ナルミ)の比翼紋」

ぴよくり 【貌】 **ひよっくり**に同じ。浮世床「氷が解け……、鯉がぴよくりす」

ひよぐる 【動四他】 小便を迸らす。勢よく放尿す。浮世風呂「小便をひよぐる內」柳樽「女郎屋の掟をひよぐりながら讀み」

ひ-よけ 日除 【名】 **一**日光を遮るための物。 **二はらそる**に同じ。

ひ-よけ 火除 【名】 **一**火災の延燒を防ぐこと、又そのための物。防火。 **二ひよけまもり**(火除守)の略。

ひよけ-ち 火除地 【名】 火除のために、豫め備へおく空地。

ひよけ-ぶね 日除船 【名】 **やねぶね**(屋根船)に同じ。塵塚談「家根船、本名日よけ船」

ひよけ-まもり 火除守 【名】 火難を除く効ありといふ神符。ひぶせ。ひよけ。

ひよ-こ 雛 【名】 **一**『ひよひよと鳴く子の義』**ひな**(雛)**一**に同じ。 **二**身體又は才能・技術などの、十分に發達せぬ者。乳臭き者。ひよっこ。 **三**紋所の一。鳥のひよこに象(カタド)りたるもの。

ひよこ-さう 雛草 【名】［植］**れいじんさう**(伶人草)に同じ。

ひよこ-すか 【貌】 次條に同じ。和合人「お前(メ)たちは、なんだか、ひよこすかするやうだが」俗曲(神路山色緣)「心の底に思ふ事を、ひよこすかと。貢さん。必ず氣にさへてお呉れなえ」

ひよこ-ひよこ 【貌】 跳りあるくさま。動作のおちつかぬさま。浮世風呂「舞茸(マヒタケ)……、ひよこひよこ踊つて、腹に入る」

ぴよこ-ぴよこ 【貌】 前條に同じ。

ひよこり 【貌】 **ひよっくり**に同じ。

ぴよこり 【貌】 前條に同じ。

ひよこり-ひよこり 【貌】 **ひよこひよこ**に同じ。

ぴよこり-ぴよこり 【貌】 前條に同じ。

ぴよこり-の-たわら ぴよこりの俵 【名】 玩具の一。紙の袋

の中に重（オモリ）を入れ、兩方の小口に、赤き紙を張りて、俵のごとき形としたるもの、盆・箱などに載せ、手加減にて上下すれば、ぴよこりぴよこりと轉ず。

ひよし 日吉 【名】 次條の略。

ひよし-じんじや 日吉神社 【名】 ひえじんじや（日吉神社）に同じ。

ひよし-づくり 日吉造 【名】 ひえづくり（日吉造）に同じ。

ひよし-まうで 日吉詣 【名】 日吉神社に詣づること。 盛衰記「わが立つ杣の地主（シチユ）權現、日吉詣ならば伴ひなん」

ひよし-まる 日吉丸 【名】〔人〕とよとみひでよし（豐臣秀吉）の幼名。

ひよす 菲沃斯 （羅 Hyoscyamus niger） 【名】〔植〕茄（ナスビ）科に屬する一年生又は二年生の草。莖は直立し、高さ二三尺に達し、白色の軟毛生ず。葉は卵形、下部のは、大にして、葉柄を具へ、上部のは、缺刻深く、且つ鋭鋸齒ありて、無柄。七八月頃、莖と枝との上端に、花を二箇づつ著く。花は漏斗狀・五淺裂をなし、暗黄色にして紫色の脈あり。原産地は歐羅巴・亞弗利加・印度等。痲醉性の毒分を含む。

ひよす-えきす 菲沃斯越幾斯 【名】 菲沃斯葉に、水を加へ、搗き碎きて壓漉すること二回、その漉液を、鐵鍋にて溫めて、濾過し、なほ蒸發せしめて、濃液とし、酒精を加へて、粘液質・無機鹽類等を析出せしめ、更に酒精を加へなどせる、稠厚なる越幾斯。 鎭痙・及び鎭痛の目的に供用す。

ひよす-えふ 菲沃斯葉 【名】 菲沃斯の葉を、藥用に供するために、花時に採集して、乾燥せるもの。汚灰綠色乃至綠色を呈し、痲醉性の惡臭を有す。現今は、すべて越幾斯として用ふ。

ひよす-ゆ 菲沃斯油 【名】 菲沃斯葉に酒精を加へて濕潤せしめ、二三時間放置したる後、オレエフ油を混和して攪拌し、重湯煎（ユセン）上に溫め、酒精分の揮散し盡したる後、壓搾して得たる油を、更に濾過して製する、帶褐綠色の液。 鎭痛の目的にて、塗擦劑・浣腸・耳滴劑等に供用す。

ひよっくり 【貌】 思ひがけず出會ひ又は現れ出づるさま。ひよく。ぴよくり。ひよこり。ぴよこり。ひよっこり。 浮世床「曲角で、ひよっくり逢ったから」

ひよっ-こ 雛 【名】 ひよこ（雛）の音便。

ひよっこり 【貌】 ひよっくりに同じ。

ひよっ-と 【副】 ㊀思ひがけぬさま。突然。不意に。ふと。 狂言（笠下）「住みなれしわが古寺を、ひよっと出て」 心中刃は氷の朔日「若し、ひよっと、死病（シニヤマヒ）受けたりとも」 ㊁他と不釣合に、一箇所突き出でたるさま。にゆっと。 生玉心中「腰の太い、尻のひよっと出た女子（ヲナゴ）」

ひよっとこ 【名】 ㊀口端突き出でて尖り、片目は圓く、片目は細長き、おどけたる男子の假面（メン）、又その假面をかぶりて踊ること。しほふき。 浮世床「赤熊（シヤグマ）で、面をかぶって、ひよっとこを踊って」 ㊁男子を罵りていふ語。

ひよっとこ-づら ひよっとこ面 【名】 前條に似て醜き男の顏。

ひよっとこ-めん ひよっとこ面 【名】 ひよっとこ㊀に同じ。

ぴよっ-ぴよ 【貌】 ぺっぺに同じ。 浮世風呂「ぴよっぴよと痰を吐いて」

ひよ-と 【副】 ひよっとに同じ。

ひよどみ 【名】〔植〕こばのがまずみ（小葉莢蒾）に同じ。

ひよ-どり 鵯・白頭鳥 【名】〔動〕『鳴く聲、ぴいよぴいよと聞ゆるによりていふ。鵯の字は、支那にては鴉の類なる一種の鳥の名なるを、我國にては、この鳥の義に用ひ來れり』燕雀類に屬する鳥。形、鶫（ツグミ）に似て小く、體長六七寸、尾長く、頭上は灰靑色にして、その羽毛亂れ起ち、背部は、黑褐色にして、灰靑色を帶び、翼と尾とは黑褐色、腹部は灰褐にして、黑色の斑點あり、嘴も尾も黑く、眼瞼赤く、脚細く、山地にて繁殖し、秋、低地に出で、又は遠隔の地に渡る。ひえどり。

ひよどり-あはせ 鵯合 【名】 各自鵯を持ち寄りて、その優劣を競ふ遊戲。 玉葉「院中有㆓鵯合事㆒」

ひよどり-ごえ 鵯越 【名】〔地〕攝津國神戸市の北、夢野の西北にありて、播磨國美囊（ミ）郡に通ずる山路。元暦元年二月七日、源義經の、鷲尾（ワシノヲ）三郎を嚮導として、福原の平氏の陣を襲ひし所。

ひよどり-じやうご 鵯上戶・蜀羊泉・白英 【名】〔植〕『蜀羊泉は、實は「まるばのほろし」の漢名なれど、古より、この草に誤用し來れり』 茄（ナスビ）科に屬する多年生・有毒の蔓草。莖にも、葉にも、毛あり。葉は長楕圓形にして尖り、基部に缺刻を有し、互生す。夏秋の頃、茄のに類せる白色の小花を開き、後、球形の漿果を結び、赤色を呈す。山野に自生す。 こくさい。 つつらこ。 ほろし。

ひよどり-ばな 鵯花・山蘭 【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。莖は圓柱形にして、高さ三四尺に達す。葉は對生し、形、桃のに似て細長く、鋸齒深く、又、三尖なるもあり。莖にも、葉にも毛茸あり。花は、淡紫なると、白色なるとの二種あり。山野に自生す。 みやうらん。 やまどりばな。

ひよ-ひよ 【名】 赤子の著る服。

ひよ-ひよ 【感】 鷄の雛又は鵯などの鳴聲。 枕「雞の雛の……、ひよひよと、かしがましく鳴きて」 重帷子「ひよひよひよと鳴くは鵯」

ひよひよ-ぐり ひよひよ栗 【名】 圓くして尖らざる栗の實。ひよんぐり。

ひ-よみ 日讀 【名】『日數を數ふる義。よむ（讀む）㊁を見よ』 こよみ（曆）に同じ。

日讀の午（マウ） 【句】『次條㊀を見よ』 漢字の「午」を、同訓の「馬」の字と區別していふ稱。 十訓「ひよみの午の頭を出せば、牛なり」

日讀の酉（トリ） 【句】 ㊀『曆の干支に用ふる字なるによりていふ』 漢字の「酉」の字を、同訓の鳥の字と區別していふ稱。 ㊁さけ（酒）の隱語。

ひよ-むき 顖門・顚門・囟門 【名】 ひよめき（　門）の轉訛。

ひよん 【名】〔植〕いす（蚊母樹）に同じ。

ひよん 【貌】『へん（變）の訛か』 普通と變りてあるさま。へん。 狂言（ぬけがら）「はて、ひよんな事をおしやれまする」 源平布引瀧「ひよんな御別をせうかと、それが悲しうござります」

ぴよん 【貌】 跳ぬるさま。跳ね上るさま。

ひよん-えい 【感】 木遣（キヤリ）の掛聲。 心中萬年草「時に、麓の山とよむ木遣に、のりの、ひよんえい」

ひよん-かつ 香褐 【名】 伽羅（キヤラ）の類の、下等なるもの。一說に、わうじゆくかう（黄熟香）に同じと。

ひよん-ぐり ひよん栗 【名】 ひよひよぐり（ひよひよ栗）に同じ。

ひよん-ちく ひよん竹 【名】〔植〕きんめいちく（金明竹）に同じ。

ひよんどりん （獨 Chondrin） 【名】〔化〕なんこつそ（軟骨素）に同じ。

ひよん-の-き ひよんの木 【名】〔植〕いす（蚊母樹）に同じ。

ひよ-めき 顖門・顚門・囟門 【名】『ひよやかにうごめく所の義』 赤兒の、生後二年程の間、腦蓋骨の化骨完成に至らざる時、前頂の中央の搏動を呈する部分。身體の生長に連れて、腦蓋骨の發達する餘地を存するためのもの。ひよむき。をどり。

ひよ-やか 【貌】 ひよわげなるさま。〔古語〕 曾我「母と乳母（メノト）に取附きて、ひよやかなる聲にて泣きければ」

ひ-より 日和 【名】『日依の義にて、晴・雨何れの方に依るかとの意といふ』 ㊀空のけしき。天氣。天候。 鬼貫「日和よし牛は野に寢て山櫻」 ㊁よく晴れわたりたる空。晴和。好天氣。 膝栗毛「異（イ）な日よりでおざる」 蕪村「初冬や日和になりし京はづれ」 ㊂事のなりゆき。形勢。

御四國樣の日和 【句】 しこく（四國）の條下のを見よ。

ひより 莩 【名】 蘆の莖の內側にある、薄き皮。

ひより 【貌】 ひやろに同じ。 醒睡笑「笛を、ひよりやひよりと吹いたもの」

ひより-かぜ 日和風【名】空の晴るべきしるしの風。

ひより-げた 日和下駄【名】齒の低き足駄。晴天の日に穿つ。ちゆうば。ひらあしだ。（和合人）「中形の浴衣、日和下駄がけにて」

ひより-ざる 日和申【名】晴天を祈るために、神佛に捧ぐる猿のつくり物かとも、又、申の刻より雨の霽るることかともいふ。

ひより-まうし 日和申【名】神に、日和を祈ること。

ひより-まん 日和萬【名】『まん(萬)はま(間)の音便なるべし。まんを見よ』日和のよきこと。好天氣。（一代女）「雨は、傘のしめりもやらぬほど降りて、願ふ所の日和萬の相場定まりて」

ひより-み 日和見【名】**一**空のけしきをうかがふこと。天候の觀測。**二**船の舳に立ちて、天候の一切を觀測する役、又その役を勤むる人。（一代男）「夢も結ばずありしに、日和見に起され、帆を卷く音、酒賣る聲」**三**事の成行をうかがひて、心を兩端に構ふること。首鼠(シユソ)兩端。

日和見の鳥【句】「風見(カザミ)の鳥」に同じ。〔諺語〕

日和見の順慶【句】つつゐじゆんけい(筒井順慶)**二**に同じ。

ひより-やま 日和山【名】〔地〕**一**志摩國鳥羽(トバ)町の北方にある山。高さ僅かに二七一尺に過ぎざれども、眺望絕佳、附近の舟子、登りて、天候を相すといふ。**二**陸前國牡鹿(ヲガ)郡石卷(イシノマキ)町の西隅にある小丘。高さ一八六尺、風光明媚なり。**三**越後國新潟市の北部海岸にある砂丘。高さ九六尺。遙かに佐渡を望む。

ひよろ-ぐさ ひよろ草【名】〔植〕すずめのてつぱう(雀鐵砲)に同じ。

ひよろ-つく【動四自】足元、ひよろひよろとして、定まらず。よろめく。（俳諧新選）（大夢）「よつ引いてひよろついてゐる案山子(カカシ)かな」

ひよろ-ながし ひよろ長し【形二】ひよろひよろと長し。

ひよろ-ひよろ【貌】**一**よろめくさま。よろよろ。蹣跚。蹌踉。（源氏烏帽子折）「二人は、ひよろひよろ、うろうろと」**二**細くうねり聳えたるさま。（芭蕉）「ひよろひよろとなほ露けしや女郎花」

ひよろ-まつ ひよろ松【名】うねりくねりて聳えたる松。

ひよろ-めく【動四自】細くひよろひよろと聳ゆ。

ひよろり【貌】**一**引締りたる所なく細長きさま。「ひよろりとした顏」**二**引き締りたる所なく行動するさま。飄然。「ひよろりと來る」

ひ-よわ ひ弱【貌】『次條の語幹』ひよわきさま。

ひ-よわし ひ弱し【形二】『ひわかし(ひ若し)を見よ』ひよやかに弱し。脆く弱し。かよわし。よわよわし。尫弱なり。

ひら 平【名】**一**ひらたきこと。たひら。扁平。（宇治）「大なる珠持ちたりけれども、それは、少しひらにて、この珠には劣りてぞありける」**二**なみ。普通。**三**ひらしゆう(平衆)の略。**四**ひらわん(平椀)の略。（接頭語お(御)を添へていふこと、多し）（浮世風呂）「鱣(ウナギ)……、その燒いた跡で、ええほどづつに切つてな、平に入れて、ぎつしりと蓋(フタ)して」**五**ひらてん(平點)の略。**六**〔建〕建物の正面。（妻(ツマ)に對して）**七**芝居の、東西の二階棧敷の一部。**八**刀身の、鎬(シノギ)より刃先までの間。

平の日(ト)【句】へいじつ(平日)に同じ。

ひら 枚・片【名】『前條の語の轉義』薄くしてひらたき物。即ち紙・葉・花瓣など。（源氏）「好み書きたまへるひらもあめり」（月詣集）「ひらごとに光さすめる言の葉は玉の聲せしたぐひとぞ見る」

ひら 鯆鱸【名】〔動〕ひらこのしろ(平鰶)の略。

ひら 比良【名】〔地〕**一**近江國滋賀郡にありし莊。今、南部は木戸村に、北部は小松村に編入せらる。〔枚・平〕（松の葉）「比良や小松の朝がよひ棲が濡れ候(ソ)磯打つ波に」**二**ひらさん(比良山)の略。（芭蕉）「比良・三上(ミカミ)雪かけ渡せ鷺の橋」

比良の暮雪(ボセツ)【句】ひらさん(比良山)を見よ。

ひ-ら 鞸饠【名】ひちら(鞸饠)に同じ。

ひら 平【接頭】**一**官位低く又は全く無き等、その他、特別の條件を伴なはず普通なる意。「平侍(ヒラザムラヒ)」「平大名(ヒラダイミヤウ)」「平旅籠屋(ヒラハタゴヤ)」**二**ひた(直)に同じ。「平謝(ヒラアヤマリ)」「平押(ヒラオシ)」「平詰(ヒラツメ)」

びら【名】『ひら(枚)の轉か』興行物の番附、開店の廣告などを記して、張り出し、又は配る紙。

びら【接頭】びら屋の主人の名の頭字に添へて用ふる語。びら辰(タツ)・びら清(セイ)・びら萬(マン)・びら德(トク)など。

ぴらあ 柱（英Pillar）【名】はしら(柱)に同じ。

ひら-あき 平秋【名】〔文〕連歌・俳諧にて、戀の意を含まざる秋の句。（御傘）「平秋の句に、戀の句附けて、又平秋の句、不レ可レ附レ之、他準レ之。これ、新式の詞なり」

ひら-あしだ 平足駄【名】ひよりげた(日和下駄)に同じ。（高足駄に對して）〔古語〕（著聞）「小殿平六といふ者、平足駄をはきて、早道行く」（盛衰記）「縄緒の平足駄」

ひら-あぢ 平鰺【名】〔動〕鰺の一種。體、側扁にして、卵圓形をなし、黑線多く、頭・眼共に大にして、尾鰭は深く分叉す。南海に多く產す。

ひら-あや 平綾【名】平織に近き織方の綾なるべし。〔古語〕（榮花）「平綾の唐衣、無文(ムモン)の唐衣」

ひら-あやまり 平謝【名】ひらにわぶること。ひたあやまり。

ひ-らい 賁來【名】ひりん(賁臨)に同じ。

ひ-らい 飛來【名】飛びて來ること。

ひ-らい 比來【副】このごろ。ちかごろ。近來。

ひ-らい-き 避雷器【名】『英 Lightning arrester』電氣回路に起る異常なる高電壓を、安全に放電せしめ、回路中の機械・器具等の破損を豫防するための裝置。種類多し。

ひら-いし 平石【名】表面のたひらなる石。

ひらいし-じやう 平石城【名】河內國南河內郡白木村（舊稱は平石村）にありし城。元弘元年、平石茂直の、據守して、南朝に屬し、北條氏の軍を防ぎし所、又、正平十四年、南朝の橋本正高等の據りし所。今も、遺址を存す。（太平記）「平石の城を構へて、五百餘騎にて楯籠る」

ひらい-しん 避雷針【名】〔理〕『英 Lightning rod』落雷の害を避くるために、屋上に立つる、先端の尖れる金屬針。金屬針には、表面の錆を防ぐために、黃金又は白金の鍍金を施し、家屋との間を絕緣せる上、これに導線を連結して、空中の電氣を地中に導くやうにせり。避雷柱。

ひらい-そ 平磯【名】〔地〕常陸國那珂郡の東端にある町。水戶市の東北約五里。漁業盛んに、風光絕佳、又、海水浴場たり。國幣中社酒列磯前(サカツライソザキ)神社あり。

ひら-いたじき 平板敷【名】廣き板敷。〔古語〕（中務內侍日記）「御前の西に、平板敷に紫べり敷きて」

ひらいたん【名】『もと、支那語なるべし』ふろしき(風呂敷)を云ふ。〔肥前國長崎の方言〕

ひら-いちめん 平一面【名】たひらいちめん(平一面)に同じ。

ひらい-ちゆう 避雷柱【名】〔理〕ひらいしん(避雷針)に同じ。

ひらいづみ 平泉【名】〔地〕陸中國西磐井(ニシイハヰ)郡にある村。一關(イチノセキ)町の北二里。近傍なる衣川（北上川の一部）と共に、鎭守府將軍藤原氏の四世（淸衡・基衡・秀衡・泰衡）と源義經との古蹟にして、中尊寺あり。今は寒村なれど、陸羽街道及び鐵道東北本線通過す。（奧の細道）「戶伊摩(トイマ)といふ處に一宿して、平泉に到る」

ひらいづみ-おにつら 平泉鬼貫【名】〔人〕かみしまおにつら(上島鬼貫)に同じ。

ひらいづみ-の-たち 平泉館【名】陸中國磐井(イハヰ)郡平泉にありし、藤原淸衡・基衡・秀衡三氏の居館。嘉保元年、淸衡の營造に係り、江刺(エサシ)郡豐田より移り住み、奧御館(オクノミタテ)と呼びしが、文治五年、源賴朝に攻められし時、泰衡燒きて逃る。（東鑑）「秀衡館事、金色堂西方、並二于無量光院北一、構二宿館一號二平泉館一」

ひら-いと 平絲【名】かまいと(鎌絲)に同じ。

ひら-いとおり 平絲織【名】經（タテ）絲に片撚（カタヨリ）の絹絲を用ひたる絲織。（諸（モロ）絲織に對して）

ひら-いと-ぬひ 平絲繡【名】平絲に縒（ヨリ）を掛けず、そのまま用ひて、繡（ヌヒ）をすること。

ひらいは 平岩【名】姓氏の一。弓削（ユゲ）氏の支族。物部（モノノベ）氏と同族。次條參照。

ひらいは-ちかよし 平岩親吉【名】〔人〕德川家康の臣。三河國の人。家、代代、德川氏に仕ふ。武田氏滅亡の後を承けて、甲斐郡代となり、後、上州厩橋城に封ぜられ、慶長八年、家康の子義利、甲州に封ぜらるるや、その傅となりて、國務を掌り、後、義利の尾張に移封の際、同國犬上（イヌガミ）に移る。初、大谷吉隆の女を娶りて、子親元を生みたれども、關ゲ原の役、吉隆、西軍に屬せしため、これを子とせず、家康の第七子松千代を養ひて子としたれども、夭死し、家絕えたり。

ひら-いひ 平飯【名】磨りなどせぬ通常の飯なるべしといふ。〔古語〕延喜式「平野祭料、雜給米五石八斗九升（磨飯一石一斗五升、平飯十三石料）」

ひら-いんろう 平印籠【名】ひらたき印籠。一代男「平印籠に、色華の巾著」

ひ-らう 疲勞・罷勞【名】つかるること。くたびれ。

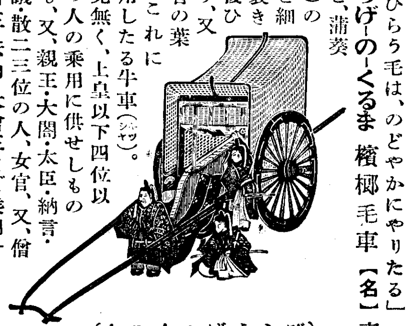
び-らう 檳榔・蒲葵【名】〔植〕『檳榔は、びんらうにて、實は別種の木なれども、相混じて、その字の音を、この木の名とするに至りしもの』棕梠科に屬する常綠喬木。高き十餘尺に達し、棕梠に似、葉甚だ大きく、その形、また棕梠のに似たれども、淺裂をなして、中部連續し、先端尖りて下垂す。葉は笠・扇などに製し、又、屋根を覆ひ葺くなどに用ひ、材は堅牢・緻密、條斑ありて雅致を具へ、床柱・丸火鉢などに造る。溫帶の南部又は熱帶地方に生ず。あぢまさ。たがやさん。びりやう。びれう。

びらう-あふぎ 檳榔扇【名】次條に同じ。續紀「檳榔扇十枚」

びらう-うちは 檳榔團扇【名】蒲葵（ビラウ）の葉を圓く截り、緣を附けて造れる團扇。

びらう-げ 檳榔毛【名】次條の略。〔古語〕枕「びらう毛は、のどやかにやりたる」

びらうげ-の-くるま 檳榔毛車【名】車蓋を、蒲葵（ビラウ）の葉を細く裂きて覆ひ飾り、又は菅の葉を、これに代用したる牛車（ギツシヤ）。物見無く、上皇以下四位以上の人の乘用に供せしものとも、又、親王・大閤・太臣・納言・參議・散二三位の人、女官、又、僧は僧正・法印・大僧正まで乘用せりともいふ。びらうげ。空穗「よしあるびらう毛の車の、簾をいと高くあけて」



（びらうげのくるま）

びらう-じま 蒲葵島・蒲葵嶋【名】〔地〕土佐國幡多（ハタ）郡の近海にある小島。

びらう-じま 檳榔島・檳榔嶋【名】〔地〕大隅國囎唹（ソオ）郡の海上にある小島。檳榔を多く産す。

ひら-うち 平打【名】ひらたく打ち造りたるもの。**まるうち**（丸打）參照。「平打の金簪（キンカンザシ）」「平打の紐」「平打の饂飩」

ひら-うち 平討【名】平押（ヒラオシ）に押し迫りて攻め討つこと。無二無三に攻め討つこと。ひらがかり。ひらぜめ。太閤記「先陣・後陣、一つになって追ひ行き、平討に討ちゆき候」

ひらうち-ひも 平打紐【名】平打の造り方なる紐。

ひらうち-を 平打緒【名】平打の造り方なる緒。

ひら-うどん 平饂飩【名】平打にしたる饂飩。ひらうんどん。一代男「所の名物とて、平饂飩を手馴れて」

びらう-の-くるま 檳榔車【名】**びらうげのくるま**（檳榔毛車）に同じ。江談抄「乘二檳榔車一」

びらう-びさし 檳榔庇【名】次條の略。玉蕊「車、檳榔庇」

びらうびさし-の-くるま 檳榔庇車【名】車箱全體に、蒲葵（ビラウ）の葉の曝して白くせるものをおして、車箱の前後と物見の上とに、廂をさしたる牛車（ギツシヤ）。上皇・親王・攝關・大臣などの乘用に供せしもの。びらうびさし。

ひら-うんどん 平饂飩【名】**ひらうどん**（平饂飩）に同じ。

ひら-おし 平押【名】一途（イチヅ）に押し進むこと。ひたおし。猛進。盛衰記「平押にこそ湛へたれ」續猿蓑（野明）「平押に五反田曇る時雨かな」

ひら-おそば 平御側【名】**ひらそばしゆう**（平側衆）に同じ。

ひら-おとし 平落【名】小鳥を捕ふる、一種の方法。

ひら-おび 平帶【名】平打の帶。若風俗「絲打の平帶」置土産「樺染の平帶」

ひら-おび 枚帶・褶【名】㊀**うはも**（上裳）に同じ。〔古語〕紀「褶、ヒラオビ」㊁半臂（ハンピ）に取り著けたる襴（ラン）。〔古語〕

ひら-おめし 平御召【名】平織の御召縮緬。かうきおり。ここのへおり。（紋御召に對して）

ひら-おり 平織【名】織物を、普通の織方、即ち經（タテ）絲と緯（ヌキ）絲とを、一本おきに交叉せしめて織ること、又その織方の織物。かたぢ。ひらぢ。（綾織・繻子織などに對して）

ひら-おりもの 平織物【名】平織にしたる織物。ひらおり。増鏡「狩衣は、ひら織物なりき」

ひら-か 平瓮【名】『**か**（瓮）は**け**（笥）の轉』平たきかはらけ。〔古語〕記「海（ワタ）の底に入りて、底のはにを咋（ク）ひ出でて、天（アメ）の八十（ヤソ）びらかを作りて」和名「瓮、比良加。俗云、保止岐。瓦器也」

天（アメ）の平瓮【句】神代に用ひし平瓮。紀「天平瓮、アメノヒラカ」

ひらが 平鹿【名】〔地〕羽後國九郡の一。郡役所を、横手町に置く。

ひら-がい 平櫂【名】清酒の釀造に於て、山卸の後、酛搔（モトカキ）をなすに用ふる器具。へらがい。

ひら-がいき 平甲斐絹【名】平織にしたる甲斐絹。（綾甲斐絹・紋甲斐絹に對して）

ひら-がかり 平懸【名】平押（ヒラオシ）に攻めかかること。ひらうち。ひらぜめ。

ひら-がき 平垣【名】低く搆へたる垣立（カキタツ）。（高垣に對して）

ひらが-きうけい 平賀鳩溪【名】〔人〕**ひらがげんない**（平賀源内）に同じ。

ひら-かく 平角【名】紋所の一。角（カク）▤の、一邊を下にして、正しく置きたる形に描けるもの。

ひらが-くにとも 平賀國倫【名】〔人〕**ひらがげんない**（平賀源内）に同じ。

ひら-がけ 平がけ【名】**ひらあしだ**（平足駄）に同じかるべしといふ。辨慶物語「辨慶は平がけにこそ似たりけれ目よりはなをばすげてはかばや」

ひらが-げんない 平賀源内【名】〔人〕本草學者。讃岐國志度浦（シドノウラ）の人。名は國倫（クニトモ）、字は士彝。鳩溪と號し、又、別に、風來山人・天竺浪人・森羅萬象・福内鬼外などの號あり。戲作を善くし、蘭語を學び、傍ら西洋窮理の術に精し。有識の才を負へども、その志を伸ぶる能はず、自暴自棄、以て一世を愚弄す。安永八年、故ありて、獄中に歿す。年五十七。

ひら-がさ 平笠【名】淺くして平たき笠。今昔「懸衣に平笠著て」著聞「法師は、又、平笠を著たる程の心ちにて候ひつるぞと申しける」

ひら-がしら 平頭【名】〔動〕鮫の一種。體は長さ四五尺、暗蒼色を呈し、頭の上部扁く、吻延長し、口裂大ならず、胸鰭黑し。胎生にして、初夏の候、一孕よく十餘尾を産す。我國、西南海に多く棲息す。あんかうざめ。

ひらかた 平潟【名】〔地〕常陸國多賀郡の東北隅にある町。濱街道に當り、三面皆斷崖なれども、沿岸唯一の港にして、漁業盛んに、又海水浴場地たり。

ひらかた 枚方【名】〔地〕河内國北河内郡の北端にある町。淀川の東岸。德川時代には、京・阪間の街道の要驛、三十石船の寄航點として繁昌し、又、本多氏の據りし古城址あり。

ひら-がたき 平敵【名】敵役(カタキヤク)の一種。思慮淺き凡庸なる惡人に扮するもの。

ひらがた-くえう 平形九曜【名】紋所の一。九曜の星の、三箇づつ、正方形をなすやうに排列せるもの。かくくえう。

ひらがた-とうぐわ 平形冬瓜【名】〔植〕冬瓜の一品種。實は、早熟にして、その形、やや小く、且つ扁圓にして、味美なり。

ひら-かど 平門【名】**ひらもん**(平門)に同じ。(棟門(ムネカド)に對して)盛衰記「この平門は何といふぞ。あの棟門は、何者が家ぞ」

ひらが-ともまさ 平賀朝雅【名】〔人〕武將。義信の子。北條時政の女婿。元久元年、平基度を討ち、伊勢守護となる。後、時政、その後妻牧氏の言に依り、將軍源實朝を殺して、これを擁立せんとし、謀露はれ、義時の兵に圍まれて死す。

ひら-がな 平假名・平假字【名】㊀『平とは、漢字を崩し和げて、平易にせるものの義なるべしといふ』漢字の草體より變形したる假名。即ち、いろは四十七字。さうがな。をんなで。いづもがな。(片假名に對して)空穗「例の女の手、二くだりに、ひらがな書き」㊁次條の略。浮世風呂「立會(クテグツイ)も、稽古のかからん物といふなら、忠臣藏・平假名・菅原・千本、まあ、こないな物かい」

ひらがな-せいすゐき 平假名盛衰記【名】『源平盛衰記に擬へて名づけたるにて、源平盛衰記の古板本の文の、多くは、片假名交りなるより名づけしならん』源義仲の生立ちを中心にして作れる淨瑠璃。並木宗輔・竹田出雲・三好松洛・淺田可啓・竹田小出雲の合作。

ひら-がなへ 平鼎・鑊【名】ひらたきかなへ。今の釜の類にて、古、食物を煮るに用ひしもの。**まるがなへ**(丸鼎)參照。〔古語〕和名「鑊、方言要目云、比良賀奈倍。煮レ肉器也」

ひら-がね 平金・鐐【名】**なんれう**(南鐐)に同じ。〔古語〕字鏡「鐐、好也。銀美也。比良金也」

ひら-がね 扁鉦【名】**ごんぐ**(金鼓)㊀に同じ。〔古語〕和名「金鼓、比良加禰」

ひら-がは 平革【名】凹凸なく、なめらかなる革。(鰐革などに對して)

ひらかは-てんじん 平河天神【名】東京市麴町區平河町一丁目に鎭座せる神社。祭神は菅原道眞。文明十年、太田持資の、武藏國入間(イルマ)郡川越なる三芳野(ミヨシノ)天神を江戸城中に勸請せるを、慶長年中、更に、この地に遷座せしもの。

ひらかは-なり 平川形【名】鏃(ヤジリ)の形の一種。

ひら-がはら 平瓦【名】**めがはら**(牝瓦)に同じ。(丸瓦に對して)

ひら-がひ 平貝【名】**ひらてがひ**(平手貝)に同じ。

ひら-がひき 平甲斐絹【名】**ひらがいき**(平甲斐絹)を見よ。

ひら-かべ 平壁【名】凹凸なく、普通の塗方なる壁。(生子壁(ナマコカベ)などに對して)

ひら-がほ 平顔【名】幅の廣き顏。ひらづら。方面。

ひら-がま 平釜【名】淺くひらたき釜。

ひら-がま 平蒲【名】〔植〕**がま**(香蒲)に同じ。(丸蒲に對して)

ひら-がんな 平鉋【名】『臺の表面平にして、木材を平面に削るに用ふるものなればいふ』普通の鉋。荒仕上(アラシアゲ)・中仕上・上仕上の三種あり。(丸鉋・反臺鉋(ソリダイガンナ)などに對して)

ひら-かんむり 平冠【名】『**うかんむり**(ウ冠)に對して、平といふ』**わかんむり**(ワ冠)に同じ。運歩色葉集「冖、ヒラカンムリ」

ひら-かめ 平龜【名】**ひらだこ**(平蛸)に同じ。

ひらが-もとよし 平賀元義【名】〔人〕歌人。舊岡山藩士。新兵衞長治の子。初、沖津新吉直義、又、源猶彦と稱す。弘化四年、藩を脫して流寓し、慶應元年歿す。年六十五。後、平賀元義集の刊あり。

ひら-からもん 平唐門【名】側面に唐破風(カラハフ)のある門。(向(ムカフ)唐門に對して)

ひら-かりまた 平雁股【名】平たき形したる雁股。

ひら-がる 平がる【動四自】『**がる**は接尾語』ひらたく伏す。ひれふす。平伏す。〔古語〕宇治「左の前足を、膝より食ひ切られて、……、切られたる所を、水に浸して、ひらがりをるを」發心集「築地(ツイヂ)の土にひらがり伏せるありけり」

ひらき 開【名】㊀開くこと。明くこと。明くること。㊁蕾の綻ぶること。咲くこと。㊂魚などを切り開きて乾すこと、又その乾したるもの。㊃**ひらきど**(開戸)の略。㊄たちのくこと。その場を去ること。(戰場又は婚儀の席などにて、逃ぐ・歸るなどいふを忌みていふ)謠曲(舟辨慶)「一まづ都を御開ありて、西國の方へ御下向あり」㊅國姓爺「身をかはして、危險を避くること。足取る、手取る、四寸・八寸、身のひらき」㊆氣のつくこと。悶絕せしを蘇生せしむること。失ひし生氣を回復すること。和合人「何か、ふと驚怖致しました事でもござって、つい肝(カン)を強く閉ぢましたが、それを、針で、開を附けましたゆゑ、何事もなく、氣分にもさはらぬぢやて」㊇船の横方より風の吹き來る時、斜に船を進めんとてする、帆の張り方。右舷船首より風を受けたる場合のを、右舷びらきと云ひ、左舷より受けたる場合のを、左舷びらきと云ひ、又、磯を山びらき・沖方びらきの二種あり。かたほ。㊈〔建〕二本の柱、又は器の二本の脚の間が、下方に至るに從ひて相距ることの多くなる程度。㊉二つの値段の差。〔商人の語〕置土產「分散に極りたる身代なりしが、舅(シウト)のゆづり銀、二百貫目のひらき、天秤(テンビン)にかけ出だし、今までは續きぬ」

開に乘る【句】開㊇の方法にて、風を犯して船を進む。仕懸文庫「しんつの鼻を、開に乘る」

ひら-き 平木【名】漢字にて、「檗」・「呆」・「架」などの字の下部の「木」の字。

ひら-き 平器【名】**ひらわん**(平椀)を云ふ。

ひら-ぎ 柊【名】〔植〕**ひひらぎ**(柊)に同じ。〔下總國・陸奥國の方言〕俳諧古選附錄(淡淡)「待つ事も無くて雪觧(ユキゲ)の柊かな」

ひらき-あはす 開合はす【動下二他】『**ひらく**(開く)㊅を見よ』雙方共に退き隔たるやうにす。太平記「攻め合はせ、開き合はせ、散散に射る」

ひらき-あふぎ 開扇【名】**ひらきすゑひろ**(開末廣)に同じ。曾我會稽山「問はれて、駕籠の簾より招く扇や、開扇は朝霧樣」

ひらき-えび 開蝦【名】車蝦の頭を去り、尾は附きたるままにて、皮を剝ぎ、背開(セビラキ)にして、乾したるもの。料理に用ふ。

ひらぎ-がし 柊樫【名】〔植〕**りんぼく**に同じ

ひらきき-じんじや 枚聞神社【名】薩摩國揖宿(イブスキ)郡頴娃(エイ)村に鎭座せる國幣小社。祭神は、綿津見(ワタツミ)神とも彥火火出見(ヒコホホデミ)尊とも、大日孁(オホヒルメ)尊ともいふ。神武天皇即位の後、勅祭ありしものなるべしといふ。もと延喜式内の社にて、國内の一の宮たりき。

ひらき-ごばう 開牛蒡【名】算木の形に切りて、煮ずに、そのまま正月の祝に用ふる牛蒡。齒朶(シダ)・楪(ユヅリハ)を敷きたる上に、開豆と共に、土器に盛る。さんぎごばう。

ひらき-しやうじ 開障子【名】蝶番(テフツガヒ)によりて、扉の如く開閉する障子。

ひらき-すゑひろ 開末廣【名】紋所の一。擴げたる一箇の扇子を、要(カナメ)を下にして描けるもの。ひらきあふぎ。

ひらき-だら 開鱈【名】背開(セビラキ)にして乾したる鱈。

ひらき-ど 開戸【名】㊀車又は蝶番(テフツガヒ)などの仕掛にて開閉する戶。まひど。ひらき。(引戶に對して)㊁**れんど**(葦戶)に同じ。

ひらき-なほる 開直る【動四自】急に態度を改めて、堂堂と議論す。

ひらぎ-なんてん 柊南天・十大功勞【名】〔植〕**ひひらぎなんてん**(柊南天)に同じ。

ひらき-にしん 開鯡【名】鯡を、鰓蓋(エラブタ)の直下より、咽喉部を貫通し、腹部より肛門まで切開し、鰓・內臟及び卵巢等を除き、數時間鹽水に漬けて、血液を滲出せしめたるもの。腹部に鹽を詰め、樽に入れて、諸方に送り出す。

ひら-ぎぬ 平絹【名】平織に織りたる絹、

即ち平絲織・平甲斐絹など。へいけん。ただ。空穂「平ぎぬのかいねりの御衣(オンゾ)」

ひらき-はくせい 平木白星【名】〔人〕文士。名は照雄。上總國の人。遞信省に奉職し、餘暇、筆を新體詩に染め、釋迦・耶蘇の戀等の創作あり。大正四年歿す。年四十。

ひらき-ばしら 開柱【名】㊀股を開かせて建てたる柱。㊁『この柱の在る部分は、橋の左右の幅廣きよりいふなるべし』橋の欄干の兩端に在りて、上部に擬寶珠を附けたる柱。〔葱臺〕和名「葱臺、比良岐波之良。橋兩端所レ竪之柱、其頭似二葱花一故云」

ひらぎ-はら 柊原【名】柊の木の一面に生えたる處。油糟「つく度ごとに汁はじく（こいふ句に）柊原目をかかへてや通るらん」

ひらき-ふう 開封【名】書狀、その他、郵便物を、封(フウ)をせぬこと。現時の規定にては、第三種郵便物(定期刊行物)と第四種郵便物中の書籍・印刷物・業務用書類・寫眞・書・畫・圖とは、この包裝に依るべきものとす。

ひらき-ぶみ 開書【名】㊀開封(ヒラキフウ)の文(フミ)。㊁紋所一。卷紙の端を、少し開きし狀に描けるもの。(結文(ムスビブミ)に對して)

ひらき-ぼし 開乾【名】魚類を、背開(セビラキ)又は腹開にして乾すこと。

ひらき-まど 開窓・開窗【名】開障子を有する窓。

ひらき-まんどう 開萬燈【名】玩具の一。厚紙を折りて、萬燈の形に作り、內に、赤紙を扇のごとくにして、四方に疊み入れ、それに附けたる竹串を、中心なる細き管竹に通し、その串竹を上下すれば、疊みたる紙の開閉するやうに仕掛けたるもの。御來迎(ゴライガウ)㊁の遺制にて、元祿の頃流行せりといふ。あさひまんどう。

ひらき-まめ 開豆【名】正月の祝に用ふる、水煮の大豆。ひらきごぼう(開牛蒡)參照。

ひら-きん 平金【名】金箔を、漆にて、鳥子紙(トリノコガミ)に貼り、その長さの方向に切りたるもの。金襴及びその他の紋織の緯緯(ヌキ)に使用す。

ひら-ぎん 平銀【名】銀箔を、漆にて、鳥子紙(トリノコガミ)に貼り、その長さの方向に切りたるもの。紋織の緯緯(ヌキ)に使用す。

ひら-ぎり 平切【名】ひらたく切ること、又その切り方にせる物。江次第「干鯛平切」

ひらく 開【名】ひらくにち(開日)に同じ。

ひら-く 平句【名】〔文〕連歌・俳諧にて、發句・脇句・第三句・擧句及び四本の花の句以外の句。

ひらく 開く【動四自】㊀つぼまりゐたる物ひろがる。接觸しゐたる物、隔たり離る。あく。「戶開く」「花開く」㊁障(サハリ)去りて、はれやかになる。よくなる。鎌倉三代記「開く御運が定(チヤウ)ならば」㊂その場を去る。たちのく。(戰場又は婚儀の宴席などにて、逃ぐ・歸るなどいふを忌みていふ)保元「急ぎ、いづ方へもおん開き候ふべし」㊃身をかはして、危險避く。太平記「追ひ立て追ひ立て攻められて……、七千餘騎の兵ども、開き靡きて引きけるが」㊄幅增す。「頭(アタマ)の鉢が開く」㊅水增す。あふる。みなぎる。㊆價格增す。〔商人の語〕㊇船の形開きて、足遲くあり。

ひらく 開く【動下二自】㊀前條㊀に同じ。相模集「花は、まだよくも開けはてず、苔がちに見ゆるを」㊁前條㊁に同じ。「思ふ事開くるかたを賴むにはいつみの山の花をこそ見め」㊂土地開拓せらる。人家繁昌の地となる。㊃世の狀態移りすすむ。人智進步す。開化す。㊄世態・人情に通ず。粹人となる。〔俚語〕

ひらく 開く【動四他】㊀つぼまれる物をひろぐ。接觸せる物を離れしむ。あく。のべひろぐ。「戶を開く」㊁蓋(フタ)を取る。おほひを去る。外部にあらはし示す。あく。「闢く・披く」「箱を開く」「手紙を披く」「肺肝を披く」㊂障(サハリ)を去る。邪魔を排除す。開發す。啓發す。「啓く」源氏冷泉節「血を開き、順氣の御療治、然るべし」㊃始む。發す。開創す。「店を開く」「一派を開く」㊄土地を掘り起す。開拓す。きりひらく。「拓く・闢く」㊅さかんにす。よくす。「運を開く」㊆〔數〕『英 Resolve』乘根を求む。「平方に開く」

ひら-くぎ 平釘【名】頭をひらめたる釘。傳馬船・磯場獵船などに打ち附くるに用ふ。

ひらくき-な 扁莖菜【名】〔植〕しらくきな「(白莖菜)」に同じ。

ひら-ぐけ 平絎【名】㊀ひらたく絎けること。㊁次條の略。

平絎の帶【句】ひらぐけおび(平絎帶)に同じ。八笑人「樂屋著(ガクヤギ)らしき浴衣(ユカタ)に、平絎の帶」

ひら-くさ 平草【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。體は細長くして扁平、兩緣より枝を出し、羽狀を呈す。心太(トコロテン)及び寒天の原料に用ふ。

ひらぐけ-おび 平絎帶【名】幅狹くして一二寸、丈も短く、心(シン)を入れず、ひらたく絎けたる男の帶。通常、博多又は小倉織を用ひ、稀に眞田(サナダ)織のもあり。主に職人の間に用ひられ、前にて結ぶ。ひらぐけ。　との中間のものにて、

ひらくたい 平くたい【形】『ひらたくたい(平たくたい)を見よ』ひらたし(平たし)㊀に同じ。〔紀伊國の方言〕

ひらくち-えそ 平口鱛【名】〔植〕あかえそ(赤鱛)に同じ。

ひらくち-おどし 【名】〔植〕いぬたで(犬蓼)に同じ。

ひら-ぐつ 平沓【名】淺沓に似て、製作の簡略なる沓。續古事談「指貫(サシヌキ)に、ひらぐつはきて」

ひらく-て 開手【名】薙刀の手の一。舞の本(鎌田)「こむ手・薙ぐ手・開く手・八はうさびしき薙刀の手」

ひらく-にち 開日【名】曆の中段の十二直の一。諸藝を學び、他行・移轉をなし、奴婢を納れ、婚嫁する等に吉なりといふ日。正月は子、二月は丑、三月は寅、四月は卯、五月は辰、六月は巳、七月は午、八月は未、九月は申、十月は酉、十一月は戌、十二月は亥の日。ひらく。繋八卦柱曆「わが身の悟ひらく日」

ひら-くび 平首【名】平侍(ヒラザムラヒ)の首。なみなみの人の首。

ひら-くび 平頸【名】馬の頸の、鬣の左右なる、平なる所。著聞「馬の手繩(タヅナ)・面繋(オモガイ)をおし外して、ひら頸を打ちてけり」

ひらく-ぶし 平九節【名】明曆・萬治の頃に流行せし小唄の節。

ひら-くみ 平組【名】格別なる計略などを用ひず、普通に取り組むこと。長門本平家「御方(ミカタ)は大勢なり、かたきは小勢なり、平組の軍(イクサ)に負くる事こそ心得ぬ」

ひら-ぐみ 平組【名】平打にしたる組紐なるべし。東鑑「平組括」

ひら-ぐも 平蜘蛛・平蜘【名】㊀〔動〕蜘蛛の一種。大さ七八分。全身扁く、色淡黑にして、屋內に棲み、壁上などに、白色・緻密なる紙樣の網を作り、その中に隱れて、蟲を捕へ食ひ、雌は壁・天井等に、徑約一寸の白色・扁平なる巢を營みて產卵す。ひらたぐも。〔壁錢〕著聞「管中に、平蛛のありけるが、喉に呑み入れられにけり」㊁『前條の語の轉か』平身低頭して詫ぶるさまの形容。㊂松永久秀が愛玩せし茶釜の名。三日太平記「調度……、數多所持致す。なかんづく、平蜘と申す祕藏の釜もござれども」

びら-くら 【名】『次條の轉義』始末の附かぬ件件。ふしだらなる事件。心中二枚繪草紙「銀盜み、所所のびらくらを仕舞はんと、ここへ來りしが」

びら-くら 【貌】びらしやらに同じ。

ひら-ぐり 平栗【名】つきぐり(搗栗)に同じ。

ひらけ 開【名】開くること。

ひら-げいこ 平稽古【名】芝居にて、役者が、衣裳を著けず、鳴物を使用せずして、狂言の稽古をすること。その內、臺詞(セリフ)を讀みあふを讀合(ヨミアハセ)、立ち上りて、動作・表情を稽古するを、立稽古といふ。

ひら-けうじゆ 平敎授【名】學校の敎授の、特別の職務を帶びぬ、普通のもの。

ひら-げさ 平袈裟【名】錦・金襴・金紗などにて、他色を交へず、單色に作りたる、七條の袈裟。衲袈裟(ノフゲサ)より尊きものと

す。一色（イッシキ）袈裟。一色七條。

ひら-げた 平桁【名】〔建〕勾欄の中程、即ち架木（ホコギ）と地覆（ヂフク）との中間にある横木。横斷面は矩形（クケイ）をなす。續古事談「懐より、白蟲を取出だして、高欄の平桁にあてて、大指して殺しけり」

ひらけづり-きかい 平削機械【名】『英。Planer 又 Planing machine』木材・金屬などの表面を平に削り取るに用ふる機械。金屬に用ふるを、俗に光盤（ヒカルバン）と稱す。

ひら-ご【名】〔動〕ひらこのしろ（平鰶）の略。

ひら-ごく 平極【名】ひらふん（平粉）に同じ。

ひらごく-つけがき 平極附書【名】平蒔繪の一種。稀薄なる漆にて、地書（チガキ）をなし、平極を眞綿に附けて、薄く蒔き、延擦（ノベズリ）・磨（ミガキ）・毛打・磨仕上等、七八度の手數を經て仕上ぐる、最も劣等なるもの。

ひらこ-たくれい 平子鐸嶺【名】〔人〕美術家。名は尙、東京美術學校の出身。金石文を研究す。佛敎藝術研究の遺著あり。明治四十四年歿す。年三十五。

ひら-このしろ 平鰶・鰣・鱛【名】〔動〕喉鰾類に屬する魚。背部は蒼色、腹部は銀白色、體形狹く、長さ、二尺ほどに達し、腹緣には尖鱗ありて、鋸齒狀をなす。下顎は前方に突き出で、顎と舌とに齒あり。脊鰭は、吻頭と尾根との間に生じ、臀鰭の基部は、體長の三分の一よりやや長く、腹鰭は、眼の直徑よりも短く、尾鰭は深く岐をなす。主に暖地の外海潮流急なる所に棲み、夏、產卵期には、內海に入り來る。鱗は、大なるため、花鈿の材料とし、支那にては、鹽藏して賞味す。おほこのしろ。きづなし。ひらご。ひら。

ひら-こぼし 平翻・平建水【名】水翻（ミツコボシ）の一種。極めて淺きもの。小卓のごとき棚物の飾などに用ふ。

ひら-ごめ 平米【名】やきごめ（燒米）を云ふ。〔陸奥國津輕・豐前國・豐後國・薩摩國の方言〕

ひら-こもがい 平熊川【名】底の淺き熊川（コモガイ）。

ひら-ざ 平座【名】平敷（ヒラシキ）の座。榮花「東宮の御座は、ひらざなり」

ひら-ざいしやう 平宰相【名】宰相㊁の、兼官を有せぬものなるべしといふ。〔古語〕續世繼「中辨より宰相になりたまひて、平宰相にて、前の右兵衞の督（カミ）とて、年久しくおはしき」

ひら-さいみ 平さいみ【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。長さ五六寸。丸さいみに似て、扁平にして、複叉狀に分岐し、通常、一平面に廣がれり。

ひら-ざうがん 平象眼・平象嵌【名】篏め込みたる象眼の、地（チ）と同じ高さに平なるもの。（高象眼に對して）

ひら-さうぞく 平裝束【名】ひらしやうぞく（平裝束）に同じ。

ひら-ざうめん 平索麪・平索麵【名】やや幅廣く平たく製したる索麪。

ひらさは 平澤【名】〔地〕羽後國由利（ユリ）郡にある町。附近の貨物の集散地にして、又漁業盛んなり。

ひら-さば 平鯖【名】〔動〕鯖の一品種。體やや狹長にして、體色、やや黃ばみ、斑紋淡し。丸鯖に比すれば、北方の海に多し。のとさば。

ひらさは-きよくざん 平澤旭山【名】〔人〕儒者。山城國宇治の人。名は元愷、字は悌侯、通稱は五助。又、兎道（ウヂ）山樵と號す。昌平黌に學び、後、大阪に至りて、片山北海に學び、再び江戶に出で、帷を下して敎授し、最も文章に力を致し、傍ら佛書に精し。漫遊文草・華陽皮相等の著あり。寬政三年歿す。年五十九。

ひらさは-くらう 平澤九郞【名】〔人〕尾張德川氏の分家なる四谷家（德川齊朝）の臣。風流の嗜ありて、仕官の餘暇に燒きたる陶器、一種の風韻あり。世に九郞燒といふ。文化頃の人。

ひらさは-へいかく 平澤平格【名】〔人〕てがらのをかもち（手柄岡持）を見よ。

ひらさは-もとやす 平澤元愷【名】〔人〕ひらさはきよくざん（平澤旭山）に同じ。

ひら-さま 平様【名】「様」の字の草體なる「様」。德川時代に、多く目下の者の宛名の下に書くに用ひたり。つくばひさま。（永様（エイザマ）・美様（ビサマ）などに對して）

ひら-ざむらひ 平侍【名】官位低き、普通の侍。太平記「四位以下の平侍・武士などは、關板打たぬ舒葺（ノシブキ）の家にだに居ぬことにてこそあるに」

ひら-さん 比良山【名】〔地〕近江國滋賀郡にある山。高さ二八〇〇尺餘。丹波高原の東緣をなし、琵琶湖の西、比叡山の北に聳え、和邇（ワニ）・木戶・小松三村の西方、南北三里に連亙す。比良の暮雪とて、近江八景の一に數へらる。

ひら-ざや 平鞘【名】刀の鞘の、扁くして、幅廣きもの。細太刀の鞘と異なり、眞劍を納むるに用ふれど、軍陣用のものにはあらず。（丸鞘などに對して）

平鞘の太刀【句】「衞府（ヱフ）の太刀」に同じ。太平記「靴（クワ）の沓はいて、蒔繪の平鞘の太刀を佩き」

平鞘の劍（ツルギ）【句】前條に同じ。桃花蘂葉「平鞘劍、細細出行時、入㆓車中㆒令㆑持㆑人、不㆑帶㆑之」

ひら-さら 枚盤【名】淺くひらたき皿なるべし。〔古語〕延喜式「枚盤……三口」

ひら-さら 平更【副】ひとへに。ひらに。曾我會稽山「ひらさら御免と入りにけり」諸國物語「ひらさら思しめしなほされ」

ひら-ざら 平皿【名】淺くひらたき漆塗の椀。膳部に用ふ。もと式正（シキシヤウ）の膳には、菜（サイ）は土器に、汁多き物は杉の曲物に盛りしを、その曲物のひらたきにかたどりて作り出ししもの。

ひらさら-がた 平皿形【名】平皿を低くしたるもの。小次郞。篤井蒼草「平皿形。平皿をひきくしたる物なり」

ひら-ざる 平笊【名】かめのこざる（龜子笊）を云ふ。〔下野國の方言〕

ひらし 平し・扁し【形一】ひらたし（平たし）に同じ。〔古語〕

ひら-しき 平敷【名】著座の際、帳臺・兀子（ゴシ）・床子（シヤウジ）などを用ひず、床に疊・茵などを敷くこと、又その座。ひらざ。〔古語〕江次第「公卿……、著㆓宜陽殿平敷座㆒」禁祕抄「平敷、疊二帖、中央茵一枚」

ひら-しば 平芝【名】土木工事にて、斜面を保護するため、その表面に、土芝を張り詰めたるもの。

ひら-じひ 平强【名】平押（ヒラオシ）に押しつけ强ふること。無二無三に强ふること。曾我會稽山「足元を見て、張合（ハリアヒ）かけての平强」三日太平記「酒事（サヽゴト）の數重なりて、平じひに」

ひら-しま 平島・平嶋【名】㊀小き島。〔嶼〕名義抄「嶼、ヒラシマ」㊁〔地〕肥前國西彼杵（ニシソノキ）郡にある島。五島（ゴタウ）列島の中通（ナカドホリ）島の東。全島一村をなして、平島村といふ。周圍四里半餘。

ひらしみづ-やき 平淸水燒【名】羽前國南村山郡平淸水村より產する陶磁器。

ひら-しん 平心【名】洋燈（ランプ）の心（シン）の、火口の所にて卷かず、平らなるままにて用ふるもの。（卷心に對して）

ひらしん-らんぷ 平心洋燈【名】平心を用ふる洋燈。

ひ-らしや 緋羅紗【名】緋色の羅紗。

ひら-じやう 平城【名】ひらじろ（平城）に同じ。運歩色葉集「平城、ヒラジヤウ」

ひら-しやうぞく 平裝束【名】束帶の時に、石帶（セキタイ）を用ひず、布帶をこれに代ふること。西宮記「六位平裝束」

びら-しやら【貌】しなやかに、ひらひらとして、身のこなしの締なきさま。びらりしやらり。びらくら。じやらくら。びかしやか。一代男「干瓢と申しはべる。夕顏を作りて、びらしやら靡くといふ事ぞかし」

ひら-しゆう 平衆【名】『家筋によりては、役の無きよりいふ』花園・橋本・園池・外山・星岡・池尻・芝山・穗波・岡崎・堤・今城（イマキ）・石山・六角・高野・七條・町尻・櫻井・壬生（ミブ）・中園・高岡・藤谷・梅園・樋口・堀川・裏辻・高倉・愛宕（オタギ）・小倉・久世（クゼ）・梅溪（ウメタニ）・植松・五辻（イツツジ）・竹內・大宮・大原・錦織（ニシゴリ）・澤・藪・東久世・武者小路・梅小路・西大路・

水無瀨（ミナセ）・山野井・冷泉上・冷泉下・富小路（トミノコウヂ）・綾小路（アヤノコウヂ）・藤井・八條・高橋の五十一家の公家衆（クゲシユ）。

ひら-じよゐん 平書院 【名】床脇の窓の一。棚板なく、奥行もなくして、緣側に突き出せぬ、附（ツケ）書院の簡單なるもの。

ひら-しらげ 平糲 【名】『あらましに精（シラ）げたる物の義』くろごめ（玄米）に同じ。〔古語〕和名「烏米、一名糲米、比良之良介乃興禰。烏米、謂下舂二一斛之糲一、成中八斗之米上也」

ひら-しりがい 平鞦 【名】かはしりがい（革「鞦」）に同じ。

ひら-しりざや 平尻鞘 【名】ひろしりざや（弘尻鞘）に同じ。

ひら-じろ 平城 【名】平地に構へたる城。ひらじやう。（山城に對して） 太平記「方四町にだに足らぬ平城に、敵四五百人籠りたるを」

ひら-すき 比良須岐・枚次 【名】『平（ヒラ）坏（スキ）の義』大嘗祭の時、神饌を盛りたる器を、机に据ゑて、供へたるもの。多賀須岐（タカスキ）と同じく、笠形に綴りたる柏の葉にて、全部を覆ふ。高橋氏文「枚次八枚」

ひら-すげ 平菅 【名】〔植〕あんぺら㊀に同じ。（丸菅に對して）

ひら-せ 平瀨 【名】淺くたひらかに流るる川の瀨。〔古語〕萬葉「叔羅（シクラ）川なづさひのぼり平瀨にはさでさし渡し」

ひらせい 平清 【名】江戸深川の土橋（ドバシ）に在りし料理屋。文化以後、深川仲町の藝妓の全盛なりし頃、八百善（ヤホゼン）と並び稱せられし家。今の伊勢平樓といふ料理店は、その跡なり。寬天見聞記「深川土橋に平清、大音寺前に田川屋、これらは、文化の頃より流行せし料理屋なり」

ひら-せいがん 平星眼・平青眼・平精眼 【名】劍術の無念流にて、他の諸流の星眼と同樣なる構へ方。分ちて、左星眼・右星眼の二とす。前者は、右手の甲を上に向け、左手の甲を下に向けて交叉し、竹刀の切先を左に斜にして立ち向ふをいひ、後者は、すべて、これと正反對にするをいふ。足の蹈方は、後者にありては、全く普

通の星眼に同じけれど、前者にありては、右足の爪先をやや内部に向け、もしくは、左足を前にし、右足を後に、爪立つるも可なりとす。

ひらせ-ぎり 平脊切 【名】料理にて、魚を、頭部を去り、尾を右にし、腹を手前に向けて、尾の方より、四五分の厚さに小口切にするもの。

ひらせ-まち 平畔町 【名】ひとせまち（一畝「町」）を見よ。

ひら-ぜめ 平攻 【名】平押（ヒラオシ）に攻むること。ひらうち。ひらがかり。甲陽軍鑑「吉良（キラ）にての合戰、山中の平ぜめ」

ひら-そう 平僧 【名】官位無き、普通の僧。平（ヒラ）の僧。政談「平僧にて、衣の色を御免ありといふまでの事なり」

ひら-ぞこ 平底 【名】船などの、底の平なること。

ひら-そで 平袖 【名】ひろそで（廣袖）に同じかるべし。大阪軍記「花色・平袖の御羽織」

ひらそで-ばおり 平袖羽織 【名】平袖の「羽織。

ひら-ぞなへ 平具・平備 【名】〔建〕建物の隅以外の部分、卽ち平面に取り附けたる枡組（マスグミ）。

ひら-そばしゆう 平側衆 【名】德川幕府の職制の一。御用御取次以外の側衆。老中・若年寄の退出以後、すべての營中の事に關せし故、頗る顯職とせられたり。ひらおそば。

ひら-た 平田 【名】㊀平坦なる田地。むらあはせだ（邑並田）參照。〔古語〕太神宮禰宜譜圖帳「二所皇大神乃橫田・平田實波」 ㊁ひらたぶね（平田船）㊀の略。〔艜〕和名「艜、比良太」 根南志具佐「茶舟・ひらた・猪牙（チヨキ）・屋根舟・屋形舟」

天（アメ）の平田 【句】神代に、天上に在りきといふ平田。〔古語〕紀「天平田、アメノヒラタ」

ひらた 平田 【名】〔地〕出雲國簸川（ヒノカハ）郡にある町。宍道（シンヂ）湖の西一里餘。溝渠によりて、船をこれに通ず。昔時、木綿を產し、今は生絲を產す。

ひらた-あつたね 平田篤胤 【名】〔人〕國學者。羽後國秋田の藩士。幼名は正吉、通稱は大角（ダイカク）。氣吹廼舍（イブキノヤ）・眞菅廼舍（マスゲノヤ）・又大壑（ダイガク）と號す。二十歲の時、江戸に出でて苦學・勉勵、寬政十二年、備中國板倉侯の藩士平田篤穩の嗣となる。享和元年の春、本居宣長の著書に感憤して、古學に志し、遂に一家を成し、本居宣長と共に、國學の二柱と稱せられ、又荷田春滿（カダアヅママロ）・賀茂眞淵・本居宣長と併せて、國學の四大人と稱せらる。著書多し。天保十三年歿す。年六十八。

（ひらたあつたね）

ひらた-いしぶね 平田石船 【名】ひらたぶね（平田船）㊁に同じ。

ひら-だいじん 平大臣 【名】總理大臣にあらざる、普通の大臣。

ひらだい-じゆんき 平臺準器 【名】臺の上に裝置し、水平・垂直を驗するに用ふる氣泡水準器。

ひら-だいみやう 平大名 【名】官位さまで高からざる、普通の大名。曾我扇八景「小身・平大名」

ひらた-かねたね 平田鐵胤 【名】〔人〕國學者。もと碧川篤眞といひ、篤胤の門人なりしが、選ばれて、その養子となる。通稱內藏介、後、大角と改む。明治の初、參與に任ぜられ、後、大學大博士となり、侍講を兼ぬ。明治十三年歿す。年八十二。

ひらたくたい 平たくたい 【形】『ひらくたい（平くたい）を見よ』ひらたし（平たし）㊀に同じ。〔俚語〕

ひらた-ぐも 平蜘蛛・平蜘・壁錢 【名】〔動〕ひらぐも（平蜘蛛）㊀に同じ。

ひら-たけ 平茸 【名】〔植〕擔子菌類に屬する菌類。八九月より春にかけて、山林中の榎（エノキ）・四手（シデ）・橅（ブナ）などの枯木に著生す。蓋は一所に簇生し、貝殼狀をなし、多數相重なりて、斜に上向し、幅二三寸乃至五六寸、鼠色・濃灰黑色・淡褐色・茶褐色等種種あり。菌褶は白色又は黃色、莖は通常短くして、本細く、末太し。蓋の上皮を剝ぎ、肉を食用とす。あはびたけ。あわたけ。むぎたけ。著聞「九條の太政大臣のもとへ、平茸を送るとて」

ひら-だこ 平蛸 【名】蛸㊁の一。圓く扁き石に、繩を附け、三四人にて使用するもの。ひらかめ。かめのこあて。

ひら-たし 平たし・扁し・匾し 【形二】『たしは接尾語』㊀厚み少くして、橫の方に廣し。薄くたひらなり。扁平なり。ひらったし。ひらびたい。ひらべったい。㊁圓滑なり。平易なり。穩かなり。わかりやすし。ひらったし。

ひらた-だいかく 平田大角 【名】〔人〕㊀ひらたあつたね（平田篤胤）に同じ。㊁ひらたかねたね（平田鐵胤）に同じ。

ひらた-だうにん 平田道仁 【名】〔人〕金工。京都の人。通稱は彥四郞。慶長中、將軍家康の命を受けて、七寶の製法を、蘭人に學び、江戸に來りて、幕府に仕ふ。江戸七寶器の祖。正保三年歿す。子孫、その製法を承けて、十一代に及べり。

ひら-たち 平太刀 【名】「平鞘の太刀」に同じ。

ひらた-ひこしらう 平田彥四郞 【名】〔人〕ひらただうにん（平田道仁）に同じ。

ひらた-ぶね 平田船・平田舟 【名】㊀平底（ヒラゾコ）にして長く、表（オモテ）の高き小舟。ひらた。〔艜・平駄船〕 和名「艜。釋名云、艇薄而長者曰レ艜、比良太。俗用二平田舟一」 ㊁江戸時代に、石材などを運ぶに用ひし船。ひらたいしぶね。

ひら-たま 平玉 【名】曲玉（マガタマ）・管玉（クダタマ）の類にて、碁石の如く平かなるもの。

ひら-だる 平樽 【名】形、桶に似て、手の無き、ひらたき樽。俳家奇人談（西鶴）「平樽や手なく生るる花見酒」 萬の文反故「鏡の餅に、平樽、鰤（ブリ）一本、祝儀を取集めて」

ひら-ち 平地 【名】㊀たひらなる土地。

ひらば。平地（ヘイチ）。和合人「平地（ヒラチ）に明いてある穴だから」**二**建物の無き土地。

ひら-ぢ 平地【名】ひらおり（平織）に同じ。

ひら-ぢやわん 平茶碗【名】夏季、風爐（フロ）などに用ふる、淺く、ひらたく、皿のやや深きほどなる茶碗。

ひら-ちり 平塵【名】次條の略。小右記「內大臣著二平塵劒・無文帶一」 東鑑「束帶、平塵蒔太刀」

ひら-ちりぢ 平塵地【名】『ちりぢ（塵地）を見よ』金粉を、全面に滋く蒔きたる蒔繪。ひらちり。

ひら-つか 平塚【名】上部の平たき塚。

ひらつか 平塚【名】〔地〕相模國中郡にある町。馬入（バニフ）川の西。舊東海道五十三驛の一。鐵道東海道の停車場ありて、雨降（アフリ）神社參詣の要驛なり。

ひら-つく【動四自】ひらひらとす。ひらめく。近頃河原達引「だんびら、ずばと引き拔いて、ひらつかせたら」 和合人「すてきな婦女（シロモノ）がひらつくぜ。そして、此身（オイラ）の方を、……、じろじろ見てゐらあ」

びら-つく【動四自】びらびらとす。

ひら-づくり 平作【名】**一**短刀の、鎬（シノギ）を設けぬ作り方。〔平造〕 **二**畦を作らず、單に地上に線を劃して、作物を栽培すること。**三**刺身（サシミ）を、皿の上などに、ひらたく作り並ぶること。

ひら-づけ 平附・平著【名】乘物を、或物に沿うて、ぴたりと横づけにすること。ぢかづけ。丹波與作「姬君の御輿舁きあげ、行列立て、御乳（オチ）の人の乘物を、平附にこそ舁き寄せけれ」

ひら-っ-たし 平ったし【形一】ひらたし（平たし）**一**の音便。和合人「首を垂れ、ひらったくなりて」

ひら-づつみ 平包・平裹【名】上刺（ウハザシ）ある袱紗（フクサ）・風呂敷など。衣類などを包むに用ひしもの。增鏡「女房の裝束・皆具（カイグ）、……、ひらづつみに、長櫃にて、大納言二位の曹司に送らる」

ひら-つぼ 平坪【名】六尺平方を單位として測りたる面積。體積の單位と混同する恐なき場合には、單に坪といふ。（立坪（タテツボ）に對して）

ひら-づめ 平詰【名】常に當直して、非番の無きこと。じやうづめ。ながづかへ。

ひら-づら 平面【名】**ひらがほ**（平顏）に同じ。宇治「ひらづらなる法師」

ひら-て 平手【名】**一**たひらかに開きたる掌。「平手で撲っ」 **二**ひらてかたつき（平手肩衝）の略。

ひら-で 開手【名】『開く手の義といふ』**かしはて**（拍手）に同じ。名義抄「開手、ヒラデ」 夫木「神山の柏のひらでうちたたきみわするゐ祈る月は來にけり」

ひら-で 枚手・葉手・葉盤・葉子【名】**一**柏の葉を數枚合はせて、細き竹釘にて刺しとめ、圓く、ひらたく、盤のやうにせるもの。上古、食物を盛るに用ひしものにて、今も新嘗祭などの時、神饌を盛るに用ふ。**くぼて**（窪手）參照。紀「葉盤、此云、毗羅耐」 和名「葉手、比良天」 **二**後世、前記の枚手の形に擬へて造れる瓦器。

枚手の筥（ハコ）【句】大嘗祭の時、枚手を入れて差し出す筥。竹と葛（カツラ）とにて編みて作る。

ひらて-かたつき 平手肩衝【名】名物茶入の一。古瀨戶の大名物。ひらて。

ひらて-がひ 平手貝【名】磨りて薄くひらたく作りたる螺鈿。ひらがひ。一說に、**ひらでん**（螺鈿）に同じと。雅亮裝束抄「ひらて貝をおしたり」

ひらで-きよひで 平手淸秀【名】〔人〕**ひらでまさひで**（平手政秀）を見よ。

ひらで-ばこ 枚手筥【名】「枚手の筥」に同じ。建武年中行事「ひらでばこの御番」

ひらで-まさひで 平手政秀【名】〔人〕武將。織田氏の臣。織田信秀の命によりて、信長の傅となり、中務（ナカツカサ）少輔と稱す。信長の放肆を諫めて、天文二十二年自殺し、ために信長をして行を改めしむ。政秀、信長記には淸秀とあれど、誤なり。

ひら-てん 平點【名】〔文〕和歌・俳諧等の評點の一。普通なるに掛くるもの。上より句の終まで線を引く。**ひらながてん**（長點）**三**參照。隨齋諧話「長點、一寸二三分に過ぐべからず、平點は七八分乃至一寸なるべしと書きたり。……かれこれ思ふに、長とは長きなり。一分・二分の爭も、たびたび定めがたき事なれば、二つ引きて長のしるしとするなるべし」

ひ-らでん 樋螺鈿【名】蒔繪の樋の中に、貝を摺りて飾りたるもの。

樋螺鈿の太刀【句】鞘の中央の樋のごとき部分に、螺鈿を嵌したる飾太刀。螺鈿の劒及び蒔繪劒と通用す。小右記「諸卿著二樋螺鈿劒・隱文帶一」

ひら-てんじやうびと 平殿上人【名】六位の殿上人。

ひらど 平戶【名】**一**〔地〕肥前國北松浦郡にある町。平戶島の東北端。松浦氏の舊城地。郡役所あり。我國貿易の開創地にして、天文年間、葡萄牙人來り、次いで、蘭人及び英人來りて、葡人に代り交易せり。**二**〔地〕明治の初年設置の縣の一。七年四月、肥前國舊平戶藩の地に立てしもの。同年十一月、長崎縣に入る。**三**金線・銀線を編みたる細工もの。南蠻の工人の、肥前國平戶島にて傳へたるもの。**四**ひらどやき（平戶燒）の略。

ひらど-かいけふ 平戶海峽【名】〔地〕肥前國平戶島の北端と對岸なる日浦（ヒノウラ）との間にある海峽。海流強く、大船は、危險多きを以て、島の西方の沖を通過す。舊稱、雷瀨戶（イカヅチガセト）。

ひらど-かう 平戶港【名】〔地〕肥前國北松浦郡平戶にある港。港內廣けれど、潮流急にして、北風の際は、出入困難なり。

ひらど-かぢ 平戶梶【名】次條に同じ。

ひらど-かぢのは 平戶梶葉【名】『肥前國平戶の舊藩主松浦氏の家紋なるよりいふ』紋所の一。一枚の梶の葉の、左右各二つの裂片を、上方に向はせ、中央の裂片と共に圓形を成すやうに描けるもの。

ひら-とぎ 平研【名】次條の略。

ひらとぎ-まきゑ 平研蒔繪【名】**とぎだしまきゑ**（研出蒔繪）に同じ。

ひらど-しま 平戶島・平戶嶋【名】〔地〕肥前國北松浦郡に屬する島。周圍四十三里餘。平戶町及び平戶村等六村より成り、平戶村に郡役所あり。

ひらど-じやう 平戶城【名】肥前國北松浦郡平戶町にありし松浦氏の居城。天正年中、鎭信（シゲノブ）、此に封ぜられて、七萬石を食み、子孫相傳して、明治維新に及ぶ。

ひら-どしより 平年寄【名】相撲（スマフ）にて、取締・檢查役などの特別の職掌無き、普通の年寄。

ひらど-つつじ 平戶躑躅【名】〔植〕躑躅の一品種。大なるは高さ一二丈に至り、花は白色・單瓣にして、四月頃開く。もと琉球より產出せるもの。琉球つつじ。

ひら-どま 平土間【名】**どま**（土間）**二**に同じ。（高土間に對して）

ひらど-まつら 平戶松浦【名】**まつら**（松浦）を見よ。

ひらど-やき 平戶燒【名】肥前國平戶より產する、純白色の磁器。ひらど。**みかうちやき**（三河內燒）參照。

ひらど-ゆり 平戶百合【名】〔植〕**はるすかしゆり**（春透百合）に同じ。

ひら-とりしまりやく 平取締役【名】社長・專務取締又は常務取締役にあらざる、普通の取締役。

ひら-なか ひら中【名】**きなか**（半錢）に同じ。**びたひらなか**（鐚ひら中）・**もじひらなか**（文字ひら中）參照。

ひら-なつめ 平棗【名】棗**二**の、扁く大なるもの。大・小二樣あり。利休がた。

ひら-なべ 平鍋【名】淺くしてひらたき鍋。字鏡集「鐁、ヒラナベ・カナヘ」

ひら-に 平に【副】ひたすらに。ひとむきに。一途（イチヅ）に。切に。何とぞ。ひとへに。ひらさら。**まっぴらに**（眞平に）參照。十訓「ひらに彼が命を請ひ受けけり」 平假名盛衰記「ひらにとどめても、とまらぬ氣」

ひら-には 平庭【名】築山の設なき、平地の庭。

ひら-ぬき 平ぬき【名】**ひらぎぬ**（平絹）の誤なるべしといふ。一說に、平緯にて、緯絲（ヌキイト）を込めて織れる物なりともいふ。枕「時かはさず縫ひて參らせよとて、平ぬ

きの御衣（オンゾ）を給はせたれば」

ひら-ぬひ 平繡【名】繡物（ヌヒモノ）にて、絲を布地に密著せしめて、ひらたく繡ふ、普通の繡方。

ひらぬま 平沼【名】〔地〕『平沼專藏の埋め立てし地なるよりいふ』武藏國橫濱市の西北部。古の神奈川港の地を埋め立てしもの。今は、大半宅地となれり。

ひらぬま-せんざう 平沼專藏【名】〔人〕富豪。武藏國飯能（ハンノウ）の人。一代にして、鉅萬の富を成し、橫濱に住し、大正二年歿す。年七十八。

ひら-ぬり 平塗【名】木地の上に直ちに漆を塗るもの。

ひら-ね 平根【名】薄くひらたき矢の根。曾我五人兄弟「塗籠（ヌリゴメ）の平根」

ひら-の 平野【名】㊀平坦なる野原。平野（ヘイヤ）。㊁〔地〕山城國にある野。平野神社の所在地。北野に接續す。山家「紅葉さす平野の松はさらにまた枝さす千代の數を添ふらん」

ひらの 平野【名】〔地〕㊀〔地〕攝津國平野鄕（ヒラノガウ）町の停車場。㊁ひらのじんじや（平野神社）の略。㊂古、神代より傳はりて、禁中の內膳屋に在りし釜の一。増鏡「內膳屋燒けて、神代より傳はれる御釜も燒け損はれけるをこそ、いとあさましき事には申しはべりしか。かの釜、昔は三つありけるを、一をば平野、一をば忌火（イムビ）、一をば庭火と申しけるを、圓融院の御代、永觀の頃、二つは失せにけり。今一つ殘りたるに、斯かる事の出で來ぬるは」

ひら-の-うら 比良浦【名】〔地〕近江國比良の地の、琵琶湖に面する所。

ひらのがう 平野鄕【名】〔地〕攝津國東成（ヒガシナリ）郡にある町。鐵道關西線の一驛。大阪市の東南二里。奈良への通路に當る。嵯峨天皇の朝に、阪上廣野麻呂に賜ひし地。中古以來、工匠多く、紡績業盛んなり。舊稱、杭全（クマタ）莊。

ひらの-きんくわ 平野金華【名】〔人〕儒者。陸奧の人。通稱源右衞門、名は玄仲（一說、去沖）、字は子和。徂徠に學びて、文を能くし、聘せられて、守山（モリヤマ）侯の儒員となる。金華文集あり。享保十七年歿す。年四十五。

ひらの-くにおみ 平野國臣【名】〔人〕勤王家。舊福岡藩士。幼名已之吉また乙吉、後、又吉といふ。通稱次郎。月廼舍（ツキノヤ）・友月庵・柏舍・獨醒軒等の號あり。國學に長じ、常に皇室の式微を嘆く。安政五年攘夷の命下ると聞き、月照と携へて、西鄕隆盛に依る。後、京に入り、一旦藩に禁錮せられ、文久三年、赦されて、又、京都に出で、學習院御用掛となり、その八月、澤宣嘉を奉じて、義兵を但馬國生野（イクノ）銀山に擧げ、事成らずして捕はれ、元治元年の變に刑せらる。年四十三（一に三十九）

ひらの-ごがく 平野五岳【名】〔人〕ごがく（五岳）を見よ。

ひらの-ごんにやく 平野蒟蒻【名】古、大阪の近在平野鄕より產出せし蒟蒻。重井筒「平野蒟蒻」

ひら-のし 平熨斗【名】のしがはら（熨斗瓦）に同じ。

ひら-の-しきりば 平仕切場・平仕切塲【名】芝居にて、仕切場を勤めて、他に特別の任務無き、普通の役員。

ひらの-じんじや 平野神社【名】山城國葛野（カドノ）郡衣笠（キヌガサ）村大字小北山字平野に鎭座せる官幣大社。天御中主（アメノミナカヌシ）神・高皇產靈（タカミムスビ）神・神皇產靈（カムミムスビ）神・可美葦芽彥舅（ウマシアシカビヒコヂ）神を祭神とする今木（イマキ）宮、天常立（アメノトコタチ）神・國常立（クニノトコタチ）神・豐國主（トヨクニヌシ）神を祭神とし、なほ大鞆和氣（オホトモワケ）神を配祀せる久度（クド）宮、埿土根（ウヒヂニ）神・角杙（ツヌクヒ）神・意富斗能地（オホトノヂ）神を祭神とし、大雀（オホサザキ）尊を配祀せる古開（フルアキ）宮、面足（オモダル）神・伊弉諾（イザナギ）神・天照大神・天之忍穗耳（アメノオシホミミ）尊を祭神とせる比咩（ヒメ）宮の四所を祀る。もと天武天皇の時の鳥見（トミ）大宮を分ちて、前記の四所とし、今木宮は、大和國山邊（ヤマベ）郡田村里に遷座あり、延曆三年、更に山城國大原野に遷座の時、他の三所も同所に遷座あり、同十三年、また現今の地に遷座ありしものといふ。延喜式內の名神大社にして、又、古、二十二社の一に數へられたり。

ひらの-じらう 平野次郎【名】〔人〕**ひらのくにおみ**（平野國臣）に同じ。

ひらの-すゐ 平野水【名】『最初、攝津國川邊（カハベ）郡の平野溫泉にて採取せしよりいふ。**てっぱうすゐ**（鐵砲水）參照』**たんさんすゐ**（炭酸水）に同じ。

ひらの-ながやす 平野長泰【名】〔人〕武將。尾張國津島の人。本姓は淸原。羽柴秀吉に仕へて、驍勇の譽高し。賤ケ嶽（シヅガタケ）七本槍の一人。後、德川家康に仕へ、寬永五年卒す。年七十。

ひらの-にんじん 平野人參【名】〔植〕**ぼたんばうふう**（牡丹防風）に同じ。

ひらの-の-みね 平野峯【名】〔地〕山城國平野にある山。謠曲（花月）「京近き山山、愛宕の山の太郞坊、平野の峯の次郞坊」

ひらの-の-やしろ 平野社【名】**ひらのじんじや**（平野神社）に同じ。

ひらの-まつり 平野祭【名】山城國平野神社の祭禮。昔は陰曆の四月と十一月との上の申の日に行はれ、今は四月二日に行はる。

ひら-のみ 平鑿【名】鑿の一種。刃の形、薄く、廣く、表面の左右兩側及び刃口に、斜面を作りて、鎬（シノギ）を設け、刃口の斜面は、袴腰の形をなすやうにせるもの。粗鑿（アラボリ）のあとを、多くは、材の纖維に並行して鑿り削るに用ふ。

ひら-の-みなと 比良水門・枚水門【名】〔地〕近江國比良山の麓、比良川の川口。萬葉「わが船はひらの湊に漕ぎはてむ沖さへな避（サカ）りさ夜ふけにけり」

ひらの-め 平野目【名】昔、木綿をはかるに用ひし量目。新永代藏「平野目・唐目（タウメ）・日本目の一斤を覺え」

ひらの-ゆ 平野湯【名】〔地〕次條に同じ。

ひらの-をんせん 平野溫泉【名】〔地〕攝津國川邊（カハベ）郡多田（タダ）村大字平野にある溫泉。炭酸泉に屬し、消化器病・泌尿器病等に効あり。一名、多田（タダ）溫泉。

ひら-ば 平場・平塲【名】㊀**ひらち**（平地）に同じ。太平記「大衆、これに射立てられて、平場の合戰叶はじとや思ひけん」㊁**ひらざま**（平土間）を云ふ。〔京都・大阪の語〕

ひら-ばかま 平袴【名】『ひら（平）は接頭語、普通の袴の義なるべし』近代最も廣く著用する袴。**はんばかま**（半袴）參照。

ひら-はし 平橋【名】平らなる橋。（反橋（ソリハシ）に對して）

ひら-はしけ 平艀【名】平底（ヒラゾコ）の艀。

ひら-はたごや 平旅籠屋【名】賣女を置かざる、普通の旅籠屋。

ひら-はっこう 比良八講【名】近江國比良の最勝寺にて行ふ佛事。

ひら-ばな 平鼻【名】低くひらたき鼻。

ひら-はぶたへ 平羽二重【名】平織の羽二重。即ち普通の羽二重。（紋羽二重・綾羽二重などに對して）

ひらばやし-せいさい 平林靑齋【名】〔人〕書家。江戶の人。名は淳信、字は明義、通稱は庄五郞。東維軒・桐江山人等の別號あり。漢魏より隋唐に至るまでの諸家の說を折衷して、遂に一家を成し、最も草書と隸書とに長じ、傍ら性理の學に通ず。寶曆三年歿す。年五十八。

ひら-ばり 平張・帟【名】假屋を造るに用ふる幕の、上部平にして揚張の如く棟の形をなさざるもの。（揚張（アゲバリ）に對して）空穗「樂人も、皆、ひらばりに集まりぬ」和名「平張曰帟、比良波利」

ひら-ばり 平針【名】**らんせった**に同じ。

ひらひ 拾【名】㊀ひらふこと。㊁花合（ハナアハセ）にて、手に場役の正（シヤウ）の物を持たず、場（バ）にてそれを起し來ること。

ひら-び 平日【名】㊀特別の日にてあらぬ日。普通の日。例へば、露店商人の、緣日ならぬ日を指していふ類。㊁漢字にて「替」・「曆」・「昏」などの字の下部の「日」の字。

ひら-び 褶【名】**ひらおび**（褶）㊀の略。〔古語〕紀「褶、ヒラビ」

ひらひ-がくもん 拾學門【名】**ひろひがくもん**（拾學問）に同じ。

ひら-びたひ 平額【名】額（ヒタヒ）㊁の、形ひらたきもの。さいし。**ひたひぐし**（額櫛）參照。〔古語〕中務內侍日記「常の衣の上に、かいぶの唐衣（カラギヌ）、纐纈（カウケツ）の衣、ひらびたひなり」

ひら-ひぢき 平肘木【名】〔建〕建物の隅以外の部分、即ち平面にある肘木。

ひらびーっーたい 平びったい【形】ひらたし（平たし）㊀に同じ。〔俚語〕

ひら-びと 平人【名】㊀尋常一様の人。普通の人。平人（ヘイジン）。㊁ひらびけし（平火消）を見よ。

ひら-ひも 平紐【名】絲を數本並べ、濃厚なる糊液の中に通じ、後、乾しなどして製したる紐。

ひら-びやう 平鋲【名】頭部の低くひらたき鋲。

ひら-びやくしやう 平百姓【名】特別の身分なき、普通の百姓。〔徳川時代の語〕

ひら-ひら【貌】ひるがへるさま。輕く動くさま。ひらりひらり。

びら-びら【名】指物（サシモノ）㊀の一。

びら-びら【貌】物の垂れ動くさま。ぴらぴら。

ぴら-ぴら【名】㊀ぴらぴらと動く物。㊁「ぴらぴらの簪」の略。

ぴら-ぴら【貌】㊀ひらひらに同じ。和合人「川の中から、ぴらぴらと、火が燃え出したら う」 ㊁びらびらに同じ。

ぴらぴらの簪（カンザシ）【句】花の折枝などに、鎖を幾筋も垂れ下げ、その端に、鳥・蝶の形或は鈴などを附け、これを插したる人の動くにつれて、ぴらぴらと動くやうにせる簪。昔時流行せり。

ひら-ふ 平生【名】〔地〕『ヒラオと音發す』周防國熊毛（クマゲ）郡にある町。郡役所あり、麻郷（ヲガ）灣に臨み、食鹽を産す。

ひらふ 拾ふ【動四他】ひろふ（拾ふ）㊀に同じ。和合人「ひらふのが難儀だの」

ひら-ぶ 平ぶ【動四自】ひらむ（平む）に同じ。發心集「敬ひ拜みて、ひらび居ぬ」

ひら-ぶたい 平舞臺【名】芝居にて、舞臺面を、そのまま使用したる舞臺。即ち、二重にてもなく、置（オキ）舞臺をも拒ゐぬもの。春花五大力「本舞臺、三間、共におっとほし平舞臺。見附（ミツキ）、鼠壁・抑入・唐紙・納戸口」

ひら-ぶがひ 比良夫貝【名】〔動〕つきひがひ（月日貝）に同じきかといふ。〔古語〕記「漁（スナドリ）して、比良夫貝に、その手を咋（ク）ひ合はさえて、海鹽（ウシホ）に沈溺（オボ）れたまひき」

ひらふく-すゐあん 平福穗庵【名】〔人〕畫家。羽後國の人。名は芸、順藏と稱し、初、文池と號す。文林・文海に學び、最も人物及び動物の畫に長ぜり。明治二十三年歿す。年四十七。

ひら-ぶち 平縁【名】〔建〕薄くして、斷面の矩形をなす押縁（オシブチ）。

ひらぶち-てんじやう 平縁天井【名】〔建〕平縁を抑（オサヘ）に用ひたる天井。

ひら-ふで 平筆【名】日本畫にて、彩色用に供する筆。ぬりふで。

ひら-ぶな 平鮒【名】〔動〕鮒の一品種。背部高くして、著しく側扁なるもの。大さ尺餘に達するものあり。琵琶湖、その他、廣き湖沼に産す。（丸鮒に對して）

ひら-ぶみ 枚文【名】卷物とせず、ただ一枚の紙に認めたる文書。（卷文（マキブミ）に對して）〔古語〕江次第「卷文若干卷、枚文若干枚印判」

ひら-ふん 平粉・平紛【名】蒔繪の粉（フン）の、ひらたきもの。中等品の蒔繪に用ふ。ひらごく。（芥子（ケシ）粉・丸紛に對して）

ひら-へいぢゆうもん 平塀重門【名】普通の塀重門。

ひらべーっーたい 平べったい【形】ひらたし（平たし）㊀に同じ。〔俚語〕

ひら-ほこ 平鉾【名】中の鎬（シノギ）なく、ひらたく作りたる鉾。

ひら-ぼね 平骨【名】きようこつ（胸骨）に同じ。

ひら-まき 平卷【名】刀劍の欛（ツカ）の卷方の一。（丸卷に對して）

ひら-まき 平播【名】〔農〕ちらしまき（散播）に同じ。

びら-まき びら撒【名】びらを撒き散らすこと。

ひらまき-がひ 平卷貝【名】〔動〕腹足類中有肺類に屬する小形の貝。介殼は螺狀に回旋して扁平なり。淡水に産す。

（平卷貝）

びら-まきゑ 平蒔繪【名】高低なきやうに、ひらたく蒔きたる蒔繪。（高蒔繪に對して）

ひら-まく 平幕【名】平張（ヒラバリ）の幕。狂言二千石「遊山となり、此處・彼處に、ひら幕打たせられ」

ひら-まげ 平髷【名】上部を、普通のよりひらたく結ひたる髷。（高髷に對して）一代女「平髷の中島田（チユウシマダ）」

ひら-まつ 平松【名】丈低く、枝葉の平らに廣がりたる松の木。兼盛集「年を經てたけも變らぬひら松のあやしやいかでねも見てしがな」

ひら-まつ 平松【名】姓氏の一。本姓は平。西洞院（ニシノトウヰン）家の支流。西洞院時慶の次男時庸を祖とす。子孫相繼ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

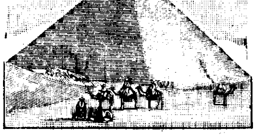
ひらまつ-ぎれ 平松切【名】名物切（メイブツギレ）の一。濃茶地の緞子に、花色の絲にて、青海波・寶盡を織り出せるもの。

ひら-まめ 平豆【名】〔植〕ふぢまめ（藤豆）に同じ。

ひら-み 褶【名】ひらび（褶）㊀の轉。〔古語〕名義抄「褶、ヒラミ・ウハミ」

ひら-みづ 平水【名】〔建〕水盛（ミヅモリ）を平にすること。水平。平準。

ぴらみっど 金字塔（英 Pyramid）【名】埃及（エジプト）古代の帝王の墳墓の一種。地を正方形に劃し、切石又は煉瓦にて、方錐狀に積み上げ、内部に設けたる壙穴に、遺骸を納めたるもの。同國ナイル河の左岸、カイロ市の附近に在り。


（ぴらみっど）

ぴらみどん（英 Pyramidon）【名】微細なる無色の結晶を成せる藥物。ニトロゾアンチピリンを、酒精の溶液中にて、亞鉛末と醋酸とにて還元して、アミドアンチピリンとなしたるを、メチルアルコオルに溶解し、苛性加里の存在に於て、更に沃度メチルを作用せしめたるもの。解熱藥として用ふ。

ひら-みみ 平耳【名】耳絲の密度を増して、平織に織りたる絲好絹（イトヨシギヌ）。上野國高崎地方より産出す。

ひら-みる 平水松【名】〔植〕綠色藻類に屬する海藻。淺海の岩石上に生じ、莖は短くして、扁平又は圓柱狀をなし、往往分岐し、同根より數株簇生し、體は扁平・葉狀にして、披針形をなし、幅三四寸、長さ二三尺に達し、全體深綠を呈すれど、晒して乾す時は、白羅紗のごとき觀を呈す。

ひら-む 平む【動四自】ひらたくなる。ひれふす。平伏す。ひらぶ。今昔「土にひらみ附きて居たり」盛衰記「はらはらと馬より下り、深く平みて通りにけり」續猿蓑（露沾）「星さえて江の鮒ひらむ落葉かな」

ひら-む 平む【動下二他】ひらたくなす。横たへ伏す。平治「弓をひらめ、矢をそばめて」徒然「鼻をおしひらめて」

ひら-むぎ 平麥【名】精げたる麥を、機械にて壓搾して、扁平になしたるもの。通常、白米に混じて炊ぐ。さくらむぎ。（丸麥・割（ワリ）麥などに對して）

ひら-むし 扁蟲【名】〔動〕體の扁き寄生蟲。即ち條蟲（サナダムシ）など。へんちゆうるゐ（扁蟲類）參照。

ひら-むしや 平武者【名】特別なる役目の無き、普通の武者。

ひ-らん 披覽【名】ひらきてみること。披見。

ひ-らん 飛亂【名】飛びみだるること。飛散。

びらん 毘藍・毗藍・毘嵐・毗嵐・鞞嵐【名】〔佛〕びらんば（毘藍婆）㊀の略。太平記「互に一足も引かず、命をきはに相戰ふ。毗嵐斷えて、大地、忽に無間（ムゲン）獄に墮ち、氷輪湧きて世界悉く有頂（ウチヤウ）天に翻らんも、斯くやと覺ゆるばかりなり」

びらん【名】〔植〕ばくちのき（ばくちの樹）に同じ。

び-らん 糜爛【名】『糜（カユ）のごとくくづれ爛（タダ）れて、收拾すべからざる義』甚しく疲弊すること。

びらん-さう びらん草【名】〔植〕次條に同じ。

びらんじ（英 Silene keiskei）【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。莖は細くして、高さ四五寸、葉は披針形又線狀披針形にして尖り、對生し、莖・葉共に紫綠色を呈す。夏季、莖頂に、五瓣・淡紅紫色なる大形の花を著く。諸國の高山に自生す。うめなでしこ。さくらせんさう。

びらんば 毘藍婆・毗藍婆・毘嵐婆・毗嵐婆【名】㊀〔佛〕『梵 Vilambā』**らんば**(藍婆)を見よ。㊁『梵 Vairambhaka. 迅猛風と譯す』速力迅急、能く世界を壞散すといふ大暴風。びらん。びらんばふう。びらんぷ。らんぷう。〔鞞嵐婆・吠嵐婆〕 釋迦如來誕生會「汝が一念、藍婆・毗藍婆の惡風となって、萬燈を一時に打消し」

びらんば-ふう 毘藍婆風・毗藍婆風・毘嵐婆風・毗嵐婆風・鞞藍婆風・吠嵐婆風【名】〔佛〕前條㊁に同じ。 釋迦如來誕生會「先へ走れば藍婆風、後へ戻れば毘藍婆風」

びらん-ふう 毘藍風・毗藍風・毘嵐風・毗嵐風・鞞藍風・吠嵐嵐【名】〔佛〕前條に同じ。

びらん-をん 毘藍園【名】〔佛〕『**らんびにをん**(藍毘尼園)の略かといふ』**はなみだう**(花御堂)に同じ。〔禪宗の語〕

ひら-め 平目【名】㊀ややひらたき程度。 醒睡笑「鼻はひら目にて、頬先尖りたる女房」 紫の一本「近江の鮒はひらめなれども、この鮒は丸めなり」 ㊁〔動〕軟鰭類に屬する魚。體は鰈(カレヒ)に似、甚しく側扁にして、長楕圓形をなし、體長二尺に達し、左側は暗褐色、右側は白色。兩眼は、幼時は通常の魚と同じく、兩面一眼づつなれど、後、左側にのみ集まり、眼球隆起して、自由に轉視することを得。口には銳齒を有して、下顎やや突出す。通常、淺海の沙泥中に、頭部を出して生息し、産卵期は五六月頃、肉は脂肪乏しく、味淡泊なり。うみひらめ。おほくちかれい。〔鮃・比目魚〕 ㊂〔動〕**かれひ**(鰈)を云ふ。〔宮女の語〕 ㊃**ひらめふん**(平目粉)の略。

ひら-めかす 平めかす【動四他】ひらたくなす。ひらむ。〔古語〕 枕「罍の、片つ方に、しどけなくすりひらめかし」

ひら-めかす 閃かす【動四他】㊀ひらめくやうにす。きらめかす。ひろめかす。㊁振り動かして、ひらめくやうにす。「白刃を閃かす」 榮花「かはほりどもをひらめかし使ひ」

ひらめ-かん ひらめ羹【名】精進料理の一。豆腐に寒天を加へて煮、煉り混ぜたる上、箱に流し入れ、冷して製するもの。

ひら-めく 閃く【動四自】『めくは接尾語』光又は旗など、ひらひらとす。きらめく。ひろめく。 源氏「神、鳴りひらめく」 太平記「才の光、四方にひらめきて」

ひら-めぢ 平めぢ【名】鮪節(マグロブシ)の一。黃肌鮪(キハダマグロ)を原料として製せるもの。

ひらめ-ぢ 平目地【名】次條に同じ。

ひらめぢ-ぬり 平目地塗【名】漆器の一種。塗硏(ヌリトギ)を施せる面に、漆を薄く塗り、平目粉(ヒラメフン)を抹布し、乾燥後、更に漆にて塗り、更に乾燥の後、木炭にて硏磨して、粉面を表面に現るるやうにせるもの。又、一種、置平目(オキヒラメ)あり。その條を見よ。

ひら-めぢか【名】〔動〕**うづわがつを**(渦輪鰹)「に同じ。

ひらめ-ふん 平目粉【名】金・銀・錫等を、箔よりやや厚き程にひらたく打ち展して、切り刻みたるもの。大さ、種種あり。漆器の平目地塗に用ふ。ひらめ。

ひらめ-ゆひ 平目結【名】紋所の一。目結を、縱橫に並べて、正方形をなすやうに描けるもの。目の數の四箇なるは、平四目(ヒラヨツメ)といふ。まめゆひ。

ひら-も 褶【名】**ひらみ**(褶)の轉。〔古語〕 字鏡集「褶、ヒラモ・ウハモ・ハカマ」

びら-もじ びら文字【名】寄席(ヨセ)のびらを書く時の字體。勘亭流と相撲(スマフ)の番附の字體とを折衷したるが如きもの。

ひも-もとゆひ 平元結・平髻【名】元結の一種。薄樣(ウスヤウ)・引合(ヒキアハセ)・杉原などの紙を、細く疊みて用ひしもの。元祿の頃、若き婦人の間に行はれしが、丈長(タケナガ)紙の製出せらるるに及びて、これを用ひ、丈長と呼ぶに至れり。 一代男「平もとゆひ太く、すべらかしに結び下げ」 若風俗「平鬠掛けて、下髮(サゲガミ)のたるい姿」

ひら-もん 平門【名】屋上を、少し平らに造りたる門なりといへど、詳かならず。ひらかど。 平家「棟門(ムネモン)・平門の内に、四五百人の所從・眷屬に圍繞せられて座(ザ)せし人」

ひら-もん 平文・平紋【名】**ひやうもん**(平文)の誤讀なるべしといふ。「同じ。

ひら-もも 平股【名】**びはもも**(琵琶股)に同じ。

ひら-もり 平盛【名】椀などに物を盛るに、緣(フチ)と同じ高さにすること。(高盛に對して)

ひら-や 平屋・平家【名】二階の設無き家。高殿ならぬ家。 平家「平家なるむね盛いかに騷ぐらん柱と賴むすけを落して」

びら-や びら屋【名】びらを書き又は印刷するを職業とする家、又はその人。

ひら-やうじ 平楊枝【名】ややひらたき形にて、少し反(ソリ)ある、長き楊枝。茶菓子などに添へて用ふ。

ひら-やき 比良燒【名】昔、近江國比良より産せし陶器。

ひら-やく 平役【名】德川幕府の金座の役員の一。簿記を補助し、職工の檢査を掌りしもの。

ひら-やしき 平屋敷【名】城・館(タチ)などな「らぬ、通常の屋敷。

ひら-やすり 平鑪【名】兩面平にしてひらたく、斷面矩形をなす鑪。

ひら-やだて 平屋建・平家建【名】次條に「同じ。

ひら-やづくり 平屋作・平家作【名】家屋の、平屋の建築なるもの。ひらやだて。

ひら-やなぐひ 平胡簶【名】ひらたく造り、矢二十一筋を、扇子形に並ぶるやうにしたる胡簶。行幸の供奉などに用ひたり。(壺胡簶に對して) 增鏡「闕腋(ケッテキ)に平胡簶」 太平記「平胡簶の箙を負ひ」

ひら-やま 比良山【名】〔地〕**ひらさん**(比良山)に同じ。 萬葉「さざなみのひらの山風海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ」

ひらやま-かうざう 平山行藏【名】〔人〕**ひらやましりよう**(平山子龍)を見よ。

ひらやま-かぜ 比良山風【名】近江國比良山より吹きおろす風。 續後撰「吹きおろす比良山風や寒からん眞野の浦人衣打つなり」

ひらやま-しりよう 平山子龍【名】〔人〕兵法家。德川幕府の臣。名は潛、通稱は行藏。兵原・運籌眞人、又、練武堂とも號す。寬政五年、選拔せられて、昌平黌に入り、普請役となれども、本志にあらざるを以て、職を辭し、苦學勉勵、禮樂・刑政より農桑・水利の事に至るまで、通ぜざるなく、殊に兵法を以て、一家を成し、武藝に精し。平常奢を惡み、嚴冬と雖も、衣を重ねず。文政十一年歿す。年七十。兵原文稿・唐宋臆斷・孫子折衷等の著あり。

ひらやま-せいさい 平山省齋【名】〔人〕德川幕府の士。名は敬忠、字は安民、通稱は謙次郎。嘉永六年、外交の事起るに及び、外國奉行となりて、專らその衝に當り、明治三年の春、東京小石川白山(ハクサン)に卜居し、意を國敎の擴張に注ぎて、神道大成敎と稱する一派を起す。明治二十三年歿す。年七十六。

ひらやま-りん 平山林【名】德川時代に、諸藩にて、薪炭の材を人民に拂ひ下げたる山林。

ひら-ゆたん 平油單【名】㊀單(ヒトヘ)の合羽。㊁**ふろしき**(風呂敷)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

ひら-よつめ 平四目【名】**ひらめゆひ**(平目「結)を見よ。

ひら-よもぎ 平艾【名】〔植〕**かはらよもぎ**(川原艾)に同じ。

ひら-らか 平らか【貌】ひらたきさま。たひらか。〔古語〕 落窪「面(オモテ)ひららかにて、北の方と見えたり」

ひらら-く【動四自】ひりひりと痛む。ひひらぐ。ひりつく。 曾我會稽山「握拳の握飯喰(クラ)うて見よと、……ぐわんと打(ハ)る。……跡はひららく天窓(アタマ)の骨」

ひらり【貌】㊀ひるがへるさま。 娥歌留多「袂より袱紗取出し、籬ごしに、ひらりと投げたまへば」 ㊁輕く身をかはすさま。 平治「小屋の軒に手を打懸け、ひらりと上

りて」平假名盛衰記「陸（ガク）へ、ひらりと飛び上れば」㊂刃物を拔き放ちて閃かすさま。丹波與作「いざ死なんと、ひらりと拔く刃物の光」

びらり-しやらり【貌】びらしやらに同じ。狂言（吃）「颼の風に吹かれて、彼方へびらりしやらり、此方へびらりしやらり」傾城酒呑童子「びらりしやらりの町風（マチフウ）も、…娘は同じ娘にて」

ひらり-ばうし ひらり帽子【名】昔、女の、笠の下にかぶりし、一種の帽子。冥途飛脚「肌にこれをと風防ぐ、ひらり帽子の紫や」

ひらり-ひらり【貌】㊀幾度もひるがへるさま。ひらひら。翩翩。㊁輕く身をかはして、彼方・此方に飛ぶさま。狂言（磁石）「磁石が上を、ひらりひらりと飛び越えて」㊂幾度もひらめくさま。きらきら。煌煌。［閃閃］

ひら-れんじゆ 平連衆【名】普通のなかま。なみなみの連中。織留「下座より宗匠を差置き、平連衆よりさし合の吟味」

ひら-わん 平椀【名】淺くひらたき椀。ひら。おひら。

ひら-ゐ 平居【名】いぬゐ（犬居）に同じ。

ひら-ゐ 平藺【名】［植］あんぺら㊀に同じ。（丸藺に對して）

ひらゐ-ごんぱち 平井權八【名】［人］因幡國鳥取の藩士（一に播州某藩の士）。劍法に精し。事によりて江戸に出奔し、芳原の妓樓三浦屋（一に玉屋）の遊女小紫と馴染を重ね、後、武藏國大宮原（一に熊谷堤）に行商人を殺して、金銀を奪ひし事發覺し、捕へられて、延寶七年、鈴ケ森に刑せらる。年二十四とも二十三ともいふ。小紫、又、目黑村なるその墓前に自害せしより、村人、哀みて、塚を建て、比翼塚といふ。

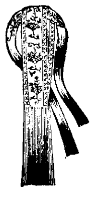
ひらゐしんでん-せん 平井新田錢【名】寛永通寳錢の一。元文四年、武藏國深川平井新田にて鑄造せしもの。銅及び鐵の二種あり。

ひらゐ-じやう 平井城【名】上野國多野（タノ）郡平井村にありし山內（ヤマノウチ）上杉氏の居城。應仁元年、上杉氏の老臣長尾昌賢の築造に係る。昌賢、越後の上杉顯定を迎へて、これに據り、足利成氏と戰ふ。後、顯定の、鎌倉山內（ヤマノウチ）に移るや、上杉氏の子孫、相次ぎて居り、天文二十年、顯定の孫憲政、北條氏康に破られて、越後の長尾景虎に依りしより、北條氏の有に歸せしが、景虎の子謙信、これを復し、後、その廐橋城をこれに代へしため、全く廢絶す。

ひらゐ-たんしよ 平井澹所【名】［人］儒者。伊勢國の人。字は可大、又、君敬、通稱は直藏。江戸に出でて、關松窓及び平澤旭山に師事し、昌平黌に遊び、最も四書に精しく、詩文を善くし、晩に桑名侯に事ふ。文政三年歿す。年五十九。

ひら-ゐづつ 平井筒【名】紋所の一。井筒の最も普通なるもの。

ひら-を 平緒【名】太刀に附屬し、束帶の時、腰より袴の上に垂るる、平組の緒。もと太刀を腰に吊す緒を結びたる餘の、轉じて、裝飾の具と化せしなりといふ。中務內侍日記「御まへには、大綬を結ばせられたり。太刀の平緒の如く結び垂れたり」


（ひらを）

ひら-をか 平岡【名】ひらたき岡。盛衰記「西に見え候平岡をば、あをた山と申す」

ひらをか 平岡【名】姓氏の一。藤原氏より出づ。家系詳かならざれども、伊豫の河野氏の家老平岡石見守重定を祖とす。重定、豐臣氏の時、本領を收められ、小早川隆景の養子秀秋の家老となりて、三萬石を食み、關ケ原の役に、黑田長政と謀を通じて、秀秋をして東軍に內應せしめ、秀秋の家斷絶するや、德川氏に從ひ、美濃國德野の地一萬石を領し、その子賴資、封地を收められ、嫡子賴重、二千石を給せられしが、子なく、有馬康純、その後を嗣ぎて、姓を伊織（イオリ）といふ。

ひらをか 枚岡【名】ひらをかじんじや（枚岡神社）の略。

枚岡の粥占（カユウラ）【句】次條に同じ。

枚岡の御粥（ミカユ）【句】一月十五日（明治初年より太陽暦に依る）、河內國枚岡神社にて行ふ神事。前日、忌火（イムビ）にて、小豆と白米とを雜ぜたる粥を煮、その際、節を除きて長さ六寸ほどに切りたる女竹五十三本を、藤蔓にて一束とせるものを、粥に入れおき、當日午前一時、祓式を行ひたる上、神前に供へ、宮司、祝詞を奏しをはりて、神饌所にて竹を割り、その中に寄りたる粥の多少によりて、年の豐凶をトす。

ひらをか-じんじや 枚岡神社【名】河內國中河內郡枚岡村大字出雲井に鎭座せる官幣大社。祭神は天兒屋根（アメノコヤネ）命・比賣（ヒメ）大神・武甕槌（タケミカヅチ）命・齋主（イハヒヌシ）命の四座。創祀は白雉元年にして、武甕槌命以下の二座は、寶龜九年の配祀に係る。式內の名神（ミヤウジン）大社にして、國內の一の宮たりき。

ひら-をしき 平折敷【名】四角のままにて、四方の角を去らざる折敷。すみきらず。

ひらを-やき 平尾燒【名】陶器の一。文化年中、尾張の藩士平尾數也（その祖は明人なりといふ）の燒きはじめしもの。

ひら-をりくぎ 平折釘【名】薄き折釘。

ひ-り 皮裏【名】皮のうら。皮膚のうら。

皮裏の陽秋（シヤウシウ）【名】『晉書の褚裒傳に出づ。陽秋は春秋㊂の義。春は萬物發生の時なれば、褒に譬へ、秋は萬物肅殺する時なるより、貶に譬ふ。春といはずして陽といふは、支那晉の簡文帝の諱なる阿春の字面を避けたるなり』うはべには現さずして、心のうちにてのみ、他人を褒貶すること。

ひ-り 非理【名】道理にかなはざること。非道。不法。

非理の前には道理なし【句】「無理が通れば道理引込（コヒツ）む」に同じ。［諺語］俠客傳「鄙語にも、非理の前には道理なしとかいふめれど」

ひ-り 鄙俚【名】いやしきこと。鄙野。野鄙。

びり【名】㊀最下等。しり。けつ。をはり。㊁『びりびり㊃を見よ』劣等なる內情に耽ること。㊂少女を嘲りていふ語。傾城酒呑童子「こりやびりめ」㊃布帛などの、びりびりと裂け易きもの。

ひ-りう 皮流【名】［地］『英Drift current』海洋の表面の流動。季節・風向等によりて、流域・速度・方向は一定せず。

ひ-りう 罷癃【名】せむし（傴僂）に同じ。

び-りう 彌留【名】『彌（イヨ）よ甚しくして留連する義。たいぜん（大漸）參照』天子の、病危篤なること。

ひりうづ【名】ひりゆうづ（飛龍頭）を見よ。

ひり-かく 放掛く【動下二他】大小便をひりて、物に掛く。落窪「ふとひりかけらるるを、いかがせん」

ひり-かけ 放掛【名】ひり掛くること。落窪「尻をかかへて、……、ひりかけの程を、え念ぜで笑ふ」

ひ-りき 非力【名】力の弱きこと。微力。鎌倉三代記「生れ附いて臆病で、弓引く事も叶はぬ非力」

非力十倍、欲力（ヨクリキ）五倍【句】非力の者にても、一旦事ある場合には、十倍の力出で、利欲のためには、五倍の力出づ。［諺語］

ひ-りき 飛力【名】ひきやく（飛脚）に同じ。太閤記「以二飛力一…申し入れはべるなり」

び-りき 微力【名】びりよく（微力）に同じ。和合人「貴樣の微力（ビリキ）には、ちと引摺が長すぎようと、無駄口まじりの御催促」

びり-ぐそ びり糞【名】下痢の氣味なる大便。びちぐそ。［俚語］

ひり-くるめ ひり括【名】ひきくるめ（引括）の訛。浮世風呂「氏子や檀方（ダンパウ）は言ふも更、無緣法界ひりくるめに、一切衆生に救はれて」

びりけん（英Billiken）【名】㊀米國より流行し來りし福の神。頭尖り、眉あがりたる容貌をなし、兩足を揃へて前方に投げ出し、後方に佛像の後光やうのものを具へたるさまの、裸體の像に作る。西暦一〇九八年、同國の一女流美術家の、夢に見し所に本づきて作りて、展覽會に出品せしに、世の好奇心に投ぜしより、シカゴの商

人の盛んに製造・販賣せしに始まる。我國へは、明治四十二年初夏に傳來す。㊁頭顱の尖りたる人を嘲りていふ語。故陸軍大將・伯爵寺内正毅も、世人よりこの綽號を得たる一人なり。

ひりこ【名】〔植〕**ひるむしろ**(蛇床子)㊀を云ふ。〔信濃國の方言〕

ひり-だす 放出す【動四他】**ひる**(放る)に同じ。「蟲が、子をひり出す」

ぴりぢん(英Pyridine)【名】〔化〕石炭タアルの中に多少存し、又骨を乾溜して得る油の中に多量に存する、無色の液體。特異の臭を有し、水に溶く。

ひ-りつ 悲篥【名】『文獻通考の巻百三十八に「觱篥、本名悲篥、出㆓於胡中㆒、其聲悲」とあり』**ひちりき**(篳篥)に同じ。下學集「觱篥、ヒチリキ。觱或作㆑篳、一名㆓悲篥㆒、胡人吹㆓葭管㆒也」

ひ-りつ 比率【名】比較の割合。

ひり-つく【動四自】ひりひりと痛む。ひひらぐ。ひららく。ぴりつく。

びり-つく【動四自】㊀びりびりと音を發す。㊁ほしがる。ねだる。㊂劣等なる情慾に耽る。びろつく。八笑人「女珍しさうに、がやがや騷騷しい事だぞ。ほんに、素人(シロウト)衆は、なぜ、あんねえにびりつく知らん」㊃兒供が、或人に對して、その姿を見れば、怒に觸れん事を氣遣ひて、身ぶるひする程に怖れ憚る。

ぴり-つく【動四自】ひりつくに同じ。

ひ-りつけん 非立憲【名】『英Anticonstitutional』立憲制の主旨にたがへること。

びりっ-とけ【名】**びり**㊀に同じ。〔俚語〕

ひりっ-と【副】ひりつくさま。

ひ-りっぱう-しき 非立方式【名】〔數〕代數の整式にて、立方に括ることの出來ざる式。例へば X^3+3X^2+3X+2 など。

ひ-りっぱう-すう 非立方數【名】〔數〕立方數にあらざる數。例へば、2・3・4・5・6・7・16・31など。

ひりっぴん-しよたう 比律賓諸島（英Philippine Islands）【名】〔地〕『西班牙王ヒリップ(Philipp)第二世の名に因みて名づけしもの』東印度諸島中、我國の臺灣の南方にある群島。凡そ二千の島嶼より成り、呂宋(ルソン)島最も大きく、もと西班牙に屬せしが、米西戰爭の結果、亞米利加合衆國に屬す。

ひり-はふ-けん-てん 非理法權天【句】非は理に勝つ能はず、理は法に勝つ能はず、法は權に勝つ能はず、權は天に勝つ能はずして、天は結局欺きさからふこと能はざること。楠木正成の、その旗に記しし語なりといふ。織留「正成が一戰のさし物旗に、非理法權天の五字を書きしるして」

ひり-ひり【貌】㊀ひらめくさま。ひらひら。きらきら。〔古語〕著聞「案にたがはず蛇(へび)出でて、ひりひりとひろめきて、やがて死にぬ」㊁皮膚・口中などの、負傷・辛味などの刺戟のために、刺すがごとく痛き感じ。ひひらぐ感じ。續膝栗毛「顏も、手足も、ひりひりして、ああ痛い、痛い」八笑人「お茶でも飲まねえで、こてへられるものか。……喉がひりひりすらあ」

びり-びり【貌】㊀布帛・紙などの裂くる音の形容。㊁腹工合惡しく、大便のゆるみて排泄せらるる音の形容。びちびち。㊂障子などの、音を立てて搖るるさま。㊃劣等なる肉情に耽るさま。びろびろ。㊄『ぶるぶるの轉か』兒供が、或人に對して、その姿を見れば、怒に觸れん事を氣遣ひて、身ぶるひする程に怖れ憚るさま。

ぴり-ぴり【貌】㊀ひりひり㊁に同じ。㊁號笛の音。

ひりふ 拾ふ【動四他】**ひろふ**(拾ふ)㊀に同じ。〔古語〕萬葉「玉くしげいつしか明けむ布勢(セ)の海の浦を行きつつ玉藻ひりはむ」

び-りふし 微粒子【名】㊀微小なる粒狀のもの。㊁〔動〕胞子蟲類に屬する原蟲。體形楕圓、透明にして光澤あり、長さ一ミリメエトルの千分の三、幅、同じく千分の二ほどにして、中に核あり。蠶の蛾及び卵に寄生す。

びりふし-せつ 微粒子說【名】〔理〕『英Atomic theory 又 Corpuscular theory』光の本性に就きて、希臘のピタゴラス(Pythogoras)唱道し、ニウトン(Newton)も採用せし假說。即ち、光は、光體より、光素と稱する光輝ある極微の物體が、大速力を以て諸方に發射し、網膜を刺戟するによりてその感覺起るものなること、臭の嗅覺に感ずると同樣なりといふもの。昔時は、光の屈折と反射とを說明するに足り、一時大に勢力ありたり。微塵說。放射說。**はどうせつ**(波動說)參照。

びりふし-びやう 微粒子病【名】傳染性なる、一種の蠶病。微粒子㊁の寄生によりて起るもの。

ひ-りん 飛輪【名】㊀速かに走る車。㊁『許堯佐の詩に「流景弭㆑節、飛輪頓㆑轡」とあり』**たいやう**(太陽)の異稱。

ひ-りん 比隣【名】『比はならぶ義』すぐ隣なること。のきならび。四隣。近隣。「萬里も、なほ比隣のごとし」

ひ-りん 鄙吝【名】しはくやぶさかなること。けちんばう。

ひ-りん 比倫【名】くらぶべき物事。たぐひ。比類。

ひ-りんず 緋綸子【名】緋色の綸子。織留「緋綸子の内衣(グユ)して居る尼あり」

ひり-もの【名】〔植〕**ひるむしろ**(蛭席)㊁を云ふ。〔陸奧國津輕の方言〕「突」に同じ。

びりやあど（英Billiard）【名】**たまつき**(玉突)に同じ。

びりやあど-くろおす（英Billiard cloth）【名】玉突臺に張るに用ふる、地質の堅き紡毛織物。メリノ種の羊の毛の良質なるものを用ひて織る。

びりやあど-てえぶる 玉突臺（英Billiard table）【名】**たまつきだい**(玉突臺)に同じ。

ひ-りやう 比量【名】㊀比べ量(ハカ)ること。比較。正統記「一往のいはればかりにて追討せられんは、上の御科とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利を得たるには比量せられがたし」㊁〔佛〕因明(インミヤウ)學に於ける、正しき推論的智識。例へば、煙あるを見て火の存在を類推・歸納する類。

ひ-りやう 悲涼【名】荒れはてて、あはれにかなしきこと。

び-りやう 鼻梁【名】はなすぢ。はなばしら。

び-りやう 微涼【名】ややすずしきこと。

び-りやう 檳榔・蒲葵【名】次條の略。七一職人歌合「車作。びりやうの輪とて、よく造れと仰せ候」

びりやう-げ 檳榔毛・蒲葵毛【名】**びらうげ**(檳榔毛)に同じ。增鏡「一門の人人、びりやうげにておはして、多く高欄に著きたまふ」

ひりやう-てき 比量的【貌】〔哲〕**べんしようてき**(辨證的)に同じ。

びりや-はらみつ 毘梨耶波羅蜜・毗梨耶波羅蜜【名】〔佛〕**しやうじんはらみつ**(精進波羅蜜)に同じ。

ひ-りゆう 飛龍【名】㊀**ひりよう**(飛龍)に同じ。㊁馬の足の繫縄(ツナギ)の上にある旋毛。かきわけのつむじ。

ひりゆう-ごんげん 飛龍權現【名】**くまのふすみじんじや**(熊野夫須美神社)の別稱。

ひりゆうづ 飛龍頭（葡Filhos）【名】㊀粳米(ウルチ)の粉と糯米(モチゴメ)の粉とを等分にまぜて、水にて揑ね、煠でて、油にて揚げたる食品。㊁**がんもどき**(雁擬)に同じ。

び-りよ 尾閭【名】『莊子の秋水篇に出づ。百川の尾(即ち下)に在りて水の閭(アツ)まる處の義』大海の底にありて、その水を絶えず洩らすといふ處。太平記「尾閭洩せども乾かず、七旱ほせども、曾て一滴も減せざる大海なれば」織留「大海の底に、尾閭といふ穴あり。諸川の水、日日夜夜に入れども、かの穴の内にて失するが故に、增すこと、更に無し」

ひ-りよう 飛龍【名】㊀空を飛びまはるといふ龍。八笑人「器量もすさまじい。飛龍に似た面(ツラ)だあ」㊁『易經の乾卦に「九五、飛龍在㆑天、利㆑見㆓大人㆒」とあるに本づく』聖人にして天子の位に在る者の譬。㊂〔動〕蜥蜴(トカゲ)類に屬する爬蟲類。主に東印度諸島・馬來半島に產す。體長八寸餘、半ばは尾にして、四足を有し、軀幹の兩側なる皮膚は、膜狀を成して、翼の如く見ゆ。樹上に棲み、昆蟲を捕食す。

びりようが-ほう 毘楞伽寶・楞伽寶（梵Sakrābhilagnamaniratna）(釋迦毘楞伽寶)の略）【名】〔佛〕寶玉の一。榮花「中央

……に大寶蓮花の座あり、吡楞伽寶、臺をなし、百寶の色相（シキサウ）、葉に具せり」

ひりようづ　飛龍頭【名】ひりゆうづ（飛龍頭）に同じ。膝栗毛「ひりようづが、聞いてあきれらあ」

ひりよう-ひば　ひりよう檜葉【名】〔植〕すゐりうひば（垂柳檜葉）の訛。

び-りよく　微力【名】㊀力のすくなきこと。びりき。貧力（ヒンリキ）。非力（ヒリキ）。㊁身分の低きこと。分限の劣れること。びりき。㊂自分の力の謙稱。びりき。

びりよ-こつ　尾閭骨【名】〔醫〕びていこつ（尾骶骨）に同じ。

びりよこつ-しんけい　尾閭骨神經【名】〔醫〕『獨 Steissnerven』脊髓神經の、尾閭骨の部に於て、脊髓管を出づるもの。尾閭骨の數の不定なるがごとく、その數不定なれど、少くとも一條は恆存す。

びりよこつ-つゐ　尾閭骨椎【名】〔醫〕びつゐこつ（尾椎骨）に同じ

びりよ-つう　尾閭痛【名】〔醫〕尾閭骨の「神經痛。

びりり（羅 Biriri）【名】『膽汁の義』魚の膽を原料として製したる、苦味強き、一種の藥劑。和蘭人より傳法せるものにて、霍亂・齒痛・蟲毒などに特効あり。

ひり-り【貌】ひりひり㊁に同じ。

びり-り【貌】びりびり㊀㊂㊄に同じ。

ぴり-り【貌】ぴりぴり㊀に同じ。

ひる　晝・昼【名】㊀朝より夕までの間。日中。ひるま。ひ。晝間（チウカン）。（夜（ヨル）に對して）㊁まひる。ひるどき。正午。午時。おひる。枕「晝になりて、ゆるびもてゆけば、炭櫃（スビツ）・火桶の火も、白き灰がちになりぬるは、わろし」㊂ひるめし。ひるげ。おひる。晝食。

晝九、夜八、船六【句】酒を杯に注ぐに、晝間は九分目、夜は八分目、船中にては六分目ほどにすべし。〔諺語〕

晝千貫（センクワン）、夜千貫【句】佐渡國相川の金山の採掘量豐富なるを誇りていひし語。〔諺語〕

晝には目あり、夜には耳あり【句】秘密は、いつとなく洩るるものなり。〔諺語〕

晝の御座（オマシ）【句】「晝（ヒ）の御座」に同じ。（「夜（ヨル）の御座」に對して）〔古語〕源氏「ひるのおましにゐざり出でておはします」

晝の鐘（カネ）【名】ひるがね（晝鐘）に同じ。太祇「麥秋や埃にかすむ晝の鐘」

晝の局（ツボネ）【句】晝の間居たまふ御局。榮花「晝の御つぼねにさし集まりおはします」

ひる　蒜【名】〔植〕のびる（野蒜）に同じ。記「ぬびる摘みにひる摘みに」

ひる　葫【名】〔植〕にんにく（葫）に同じ。後拾遺「ひる食ひて侍りける人、今は、香も失せぬらんと思ひて」

ひる　蛭・水蛭【名】〔動〕環蟲類に屬する蠕形（ゼンケイ）動物。水田・池・沼等に產し、形遍圓、長さ約一寸、黃褐色にて、表面に黑き條あり。皮は柔軟にして毛なく、前後兩端の腹面に、大なる吸盤ありて、他物に吸ひつく。口は前吸盤の中央に、又、肛門は後吸盤の背に開き、口中には鋸齒狀の齒板ありて、三叉形に開き、これによりて人畜に吹ひつき、その血液を吸收す。馬蛭・山蛭などの種類あり。普通のは、惡血を吸はしむる目的にて、外科用に供す。

蛭に鹽（シホ）【句】『蛭に鹽を振り掛くれば、苦み萎ゆるよりいふ』「青菜（アヲナ）に鹽」に同じ。〔諺語〕鷹筑波「風に散るは蛭に鹽竈櫻かな」

蛭を飼ふ【句】蛭に惡血を吸はせて、治療を爲す。**ひるかひ**（蛭飼）參照。中右記「施藥院使重基並成世等來、見二此堅根一、令レ飼二蛭五六十許一了」

蛭を喰（ク）ふ【句】前條に同じ。**ひるくひ**（蛭喰）參照。隆信集「例ならぬ事ありて、灸（ヤイト）をなしたるに、又、この女もひるくふ由を聞きて」

ひる　鶩【名】〔動〕**あひる**（鶩）を云ふ。〔大阪の語〕

ひる　放る【動四他】體外に排泄す。まる。ひりだす。「蟲が、子をひる」宇治「屁をかかげて、……ひり散らす。音高くひる事、限無し」風來六六部集「漢（カン）にて放屁といひ、上方にては、屁をこくといひ、關東にては、ひるといひ」

ひる　嚔る【動上一他】『前條の語の轉義なるべし』「鼻を嚔る」を見よ。

ひる　簸る【動上二他】箕（ミ）を用ひて、穀類などの殼をあふり振ふ。字鏡「簸米、比留」

ひる　干る【動上一自】『ほす（干す）を見よ』㊀濕氣失す。かわく。萬葉「妹が見しあふちの花は散りぬべしわが泣く涙いまだひなくに」同「朝されば潮（シホ）をひしむ」㊁潮しりぞく。干潮となる。㊂無くなる。果つ。盡く。浮世床「足下の樣にいうては、論が干ない。ああ、困ったものだ」八笑人「おれが、おれがと、何時（ツイ）までも論が干ねえから」

干る世無し【句】涙のかわく時なし。源氏「干る世なう思し歎きたり」同「故宮（コミヤ）の御事を、干る世なく思し召したる頃なれば」

びる（英 Bill）【名】㊀書附。勘定書。㊁「證書。

びる　毘盧・毗盧【名】〔佛〕**びるしやな**（毘盧遮那）の略。遠羅天釜「毘盧本有（ホンウ）の大道場」同「毘盧・法性（ホツシヤウ）」

毘盧頂上（チヤウジヤウ）【句】〔佛〕毘盧遮那佛の頂（イタダキ）の上。鴉鷺合戰「五無間（ゴムゲン）の罪を作（ナ）して、解脫（ゲダツ）を得、毗盧頂上を踏んで、なほ、これを汚す」

毗盧の極理（ゴクリ）【句】〔佛〕毗盧遮那佛所證の眞理。野守の鏡「毘盧の極理」

びる【接尾】云云の樣子ある意。（語尾、下二段活用の動詞と同じ形に變化す）「惡（ワル）びる」「きたなびる」「幼（ヲサナ）びる」

ひる-あがり　晝上【名】正午に、課業終りて、家に歸ること。平假名盛衰記「腕白な手習子が晝上見る如くなり」

ひる-あそび　晝遊【名】晝間、藝・娼妓を呼びて遊ぶこと。

ひる-あんどん　晝行燈【名】㊀日中、火を燈してある行燈。㊁『日中燈してある行燈は、光鈍きよりいふ』間（マ）が拔けて元氣なき人を罵りていふ語。

ひる-いくさ　晝軍【名】晝間戰ふこと。日中の戰鬪。（夜軍に對して）平家「夜討にこそ、さりともと思ひつれ、晝軍には、いかにも叶ふまじ」

ひる-いし　蛭石【名】〔鑛〕『英 Vermiculite』黑雲母の、分解して、多量の水分を含むに至れるもの。金色を呈し、火中に投ずれば、水分のため、小田原提灯を張りたるが如き形に延長す。

ひる-いひ　晝飯【名】**ひるめし**（晝飯）に同じ。

ひる-うち　晝討【名】日中、敵を討つこと。（夜討に對して）

ひる-がうたう　晝強盜【名】㊀晝間、強盜をなすこと、又その人。ひるがんだう。太平記「法印良忠が手の者ども、在在所所に於て、晝強盜を致す間」㊁人を罵りていふ語。

ひる-かぎ　蛭鈎・蛭鉤【名】中太（ナカブト）にて、形、蛭のごとくなる鉤。釣釜などを吊すに用ふ。ひるくぎ。ひるくわん。

びる-かくわう　毘盧覺王・毗盧覺王【名】〔佛〕**びるしやな**（毘盧遮那）㊁に同じ。

ひる-が-こじま　蛭小島・蛭小嶋・蛭嶋【名】〔地〕次條に同じ。增鏡「二條の院の御時、平治のみだれに、伊豆の國蛭が小島へ流されし兵衞佐賴朝は」

ひる-が-しま　蛭島【名】〔地〕『狩野（カノ）川の流域、今と異にして、この地、昔は、その水に夾まれて、島のごとく、且蛭多かりしより、名を得たりといふ』伊豆國田方郡韮山（ニラヤマ）村の西南四町にありて、源賴朝の流謫地として有名なる處。

びる-が-たけ　毘盧嶽・毗盧嶽【名】〔地〕**やくしだけ**（藥師嶽）に同じ。

ひる-がね　晝鐘【名】晝間撞き鳴らす鐘。日中の鐘の音。大魯「晝鐘に若草そよぐ山づたひ」

ひる-がね　ひる金【名】**いたがね**（板金）㊀に同じ。傾城酒呑童子「兵庫鎖の白銀作（シロガネヅクリ）、筋金・ひる金・鎬（シノギ）の金」

ひるかは-やま　比留川山【名】〔地〕伊勢國度會（ワタラヒ）郡にある山。名寄「月はただひる川山に雪消えて光もみちぬ星合の空」

ひる-かひ　蛭飼・蛭啗【名】『「蛭を飼ふ」

を見よ』蛭に惡血を吸はせて、治療すること。ひるくひ。東鑑「將軍家御蚊觸之間、可レ有二蛭喩一之由、施藥院使忠義朝臣申二行之一」

ひる-がへす 飜す・翻す・飄す【動四他】『ひらりと返す義』㊀ひるがへるやうにす。表面をかへして、裏面を出だす。ひらひらと裏がへらしむ。狂言（雁かりがね）「風、白浪をひるがへせば」㊁身體をはねかへす。飜轉す。「身を飜す」散木「難波がたあまのいさりに立つ千鳥いくたび磯をひるがへすらん」㊂旗などを揭げひらめかす。「錦旗を飜す」「大旆を飜す」㊃從前の意志・言說などを改め變ふ。ひっくりかへす。「初志を飜す」「前說を飜す」

ひる-がへる 飜る・翻る・翩る・飄る【動四自】『ひらりと返る義』㊀表面かへりて、裏面出づ。裏、表になる。うらがへる。㊁身體はねかへる。飜轉す。㊂高くひらめく。空中にひらひらとす。「白旗、山上に飜る」「落花、風に飄る」㊃大いに變りたる位置又は態度を取る。ひっくりかへる。

ひる-がほ 晝顏・旋花・鼓子花【名】〔植〕旋花(ヒルガホ)科に屬する多年生の草。莖は纏繞性にして、地下莖によりて繁殖し、葉は戟形にして、長柄を有し、互生す。花は、淡紅白色なる漏斗狀の合瓣花冠を具へ、朝顏のに類似し、午前に開き、夕に萎み、花後、蒴果を結ぶ。山野に自生す。あめふりぐさ。あふひづる。すまひぐさ。はたけあてんけんさう。はやひとぐさ。かさがほ。みみだれぐさ。

ひるがほ-くわ 旋花科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。草本又稀には灌木にして、普通蔓生なり。晝顏・薩摩芋・菟絲子(ネナシカヅラ)など、これに屬す。せんくわくわ。

ひる-がんだう 晝强盜【名】**ひるがうたう**(晝强盜)に同じ。雪女五枚羽子板「晝がんだう、旦那の留守をうかがひ、女子・子供をたらし」

ひる-がれひ 晝餉【名】**ひるめし**(晝食)に同じ。出世景淸「人足とおぼしくて、晝がれひの櫃を荷ひ」

ひる-ぎつね 晝狐【名】㊀晝間、巢の外に出であらはるる狐。㊁きよろつきて落ちつかぬ人を罵りていふ語。ひるねずみ。曾我物語「夜ならばこうこうとこそ鳴くべきにあさまに走る晝狐かな」㊂『きつね(狐)㊂を見よ』晝間、傾城を買ふこと。俳諧櫻鑑「櫻から化かされけるや晝狐」

ひる-くぎ 蛭釘【名】**ひるかぎ**(蛭鉤)に同じ。鳩翁道話「天井は、蒲(マガ)天井にして、蛭釘を打って、釣釜の鎖をぶら下げて」

ひる-ぐご 晝供御【名】晝時の供御。御湯殿上日記「ひる供御參る」

ひる-くひ 蛭喰【名】『「蛭を喰ふ」を見よ』**ひるかひ**(蛭飼)に同じ。朝野群載「御蛭喰吉日、今月廿六日己卯、人神在二胸中一、來月十二日甲午、人神在二左乳一」

ひる-くわじ 晝火事【名】晝間の火事。

ひる-くわん 蛭鐶【名】**ひるかぎ**(蛭鉤)に同じ。

ひる-げ 晝食・晝餉【名】**ひるめし**(晝飯)に同じ。

ひる-ご 蛭子・蛭兒・水蛭子・蛭兒【名】『足弱きによりて蛭に譬へて名づけたまひしものといふ』伊弉諾(イザナギ)・伊弉册(イザナミ)二尊の第一の御子。三歲にしてなほ足立たざりしより、不祥として、船に載せて、海に流し棄てたまへりと傳ふ。中世以後、これを惠比須(エビス)なりと稱して尊崇する風習生ずるに至れり。ひるのこ。**えびす**(惠比須)參照。

ひる-ご 晝後【名】**ひるすぎ**(晝過)に同じ。

ひる-ご 晝食・晝餉【名】**ひるげ**(晝食)の轉訛。〔信濃國の方言〕續膝栗毛「飯は、晝餉に足らないで、もろこし餅を喰って」

ひるこ-さぶらう 蛭子三郎・水蛭子三郎【名】**ひるこ**(蛭子)に同じ。

ひるこ-の-うら 蛭子浦【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡にある浦。西宮(ニシノミヤ)の前面、廣田神社のある處。謠曲(雲林院)「蘆屋の里を立ち出でて、……、名殘の月の西の海、汐のひる(干・蛭)この浦遠し」

ひるこ-の-かみ 蛭子神・水蛭子神【名】ひるこ(蛭子)に同じ。

ひる-ごろ 晝頃【名】晝の頃。正午時分。ひるじぶん。

ひる-さがり 晝下【名】眞晝の少し後、卽ち午後の一二時頃。下午。午下。蕪村「低き木に鶯啼くや晝さがり」

ひる-さき 蒜頭【名】蒜の根の球。〔古語〕和名「蒜頭、比流佐岐」

ひる-ざけ 晝酒【名】晝呑む酒。諸國物語「晝酒過し、千鳥足にて」

ひる-ざぶらひ 晝侍【名】古、宜陽殿の東廂(ヒガシビサシ)にありて、辨・少納言・外記(ゲキ)などの詰所たりし室。

ひる-じぶん 晝時分【名】**ひるごろ**(晝頃)に同じ。俳諧古選(晩山)「惜しまれて疾く散れ花の晝時分」

ひる-じまひ 晝仕舞【名】㊀官衙・學校・會社などの、晝までにて、執務を終ふること。㊁藝・娼妓の、晝間は、たとひ招かれても、席に出でぬこと。春花五大力「金三分、小萬さま十三日晝仕舞分一兩二分、千太郎二つ、品太夫三つ」

びるしやな 毘盧遮那・毗盧遮那・毘盧舍那・毗盧舍那(梵 Vairocana)【名】〔佛〕㊀『遍一切處・光明遍照・遍照など譯す。佛陀の德の遍く行きわたる義』佛陀の眞身の尊稱。盧遮那(ルシヤナ)。遮那(シヤナ)。(顯敎にては舍の字、密敎にては遮の字を用ひ、又、天台宗及び法相宗にては、毘盧舍那を法身に、盧舍那を報身に宛て、釋迦を應身に宛てて、三身に配す)㊁**だいにちにょらい**(大日如來)に同じ。

毘盧遮那・五聖(ゴシヤウ)【句】〔佛〕『毘盧遮那如來は、五智如來中の中心なるより、特に標擧していふ』**ごちにょらい**(五智如來)に同じ。著聞「毘盧遮那・五聖に向ひ奉りて」

毘盧遮那の五字眞言(シンゴン)【句】〔佛〕**あびらうんけん**(陶卑囉吽劍)に同じ。

びるしやな-きやう 毘盧遮那經・毗盧遮那經【名】〔書〕**だいにちきやう**(大日經)に同じ。盛衰記「所持の毘盧遮那經をば……、久米寺(クメデラ)の東塔の柱の底に納めて、無畏(ムイ)三藏は歸唐したまひにけり」

びるしやな-じやうだう-きやう 毘盧遮那成道經・毗盧舍那成道經【名】〔書〕**だいにちきやう**(大日經)に同じ。

びるしやな-にょらい 毘盧遮那如來・毗盧遮那如來・毘盧舍那如來・毗盧舍那如來【名】〔佛〕**びるしやな**(毘盧遮那)㊀に同じ。

びるしやな-ぶつ 毘盧遮那佛・毗盧遮那佛・毘盧舍那佛・毗盧遮那佛【名】〔佛〕前條に同じ。

びるしやな-ほふ 毘盧遮那法・毗盧遮那法・毘盧舍那法・毗盧舍那法【名】〔佛〕毘盧遮那㊀を本尊として行ふ修法(シユホフ)。

ひる-すぎ 晝過【名】眞晝より後の時刻。ひるご。午後(ゴゴ)。(晝前に對して)俳諧新選(具錦)「午時過(ヒルスギ)に籠將軍の御慶かな」

ひる-た 蛭田・水蛭田【名】蛭の多く居る田。

ひる-だ 晝田【名】晝間の田。許六「朝田晝田夕田又田やほととぎす」

びるたか 毘盧擇迦・毗盧擇迦・鼻溜荼迦(梵 Virūḍhaka)【名】〔佛〕**ぞうぢやうてん**(增長天)に同じ。

ひるた-げんせん 蛭田玄仙【名】〔人〕產科醫。名は古明。字は至德。岩代國白川の人。家世世農夫たるを屑しとせずして、醫術を學び、遂に產科を大成し、發明する所多く、諸國を遊歷して、その術を廣む。萬治頃の人。

ひる-だち 晝立【名】晝出立すること。膝栗毛「藤屋を晝立として、外宮(ゲグウ)へ參る」

ひる-たま 干珠【名】**かんじゆ**(干珠)に同じ。(滿珠(ミツタマ)に對して)謠曲(鵜羽)「干珠・滿珠の玉のありか」

びるぢんぐ(英 Building)【名】『原語は單に建築物の義なれども、北米合衆國、殊に紐育(ニユウヨオク)の高層建築の商館に、某ビルヂングと呼ぶもの多きによりていふ』高層建築の商館。

びる-ちやうじやう 毘盧頂上【句】〔佛〕**びる**(毘盧)の條下を見よ。

ひる-つら 晝通 【名】 男女の、晝間交接すること。〔俚語〕

ひる-つ-かた 晝方 【名】 ひるごろ（晝頃）に同じ。枕「晝つ方、大納言……參りたまへり」

ひる-つき 蒜搗 【名】 蒜を搗きて製したる韲物（アヘモノ）。〔古語〕和名「搗蒜、比流豆木」

ひる-つほど 晝つ程 【名】 ひるつかた（晝つ方）に同じ。〔古語〕蜻蛉「午（ヒル）つ程に立ちしかば、暗くぞ京に來著きたる」

ひる-てん 【名】 かすみあみ（霞網）を云ふ。〔東國の方言〕

ひる-でんかん 晝癲癇 【名】 晝間に發病する癲癇。（夜（ヨル）癲癇に對して）

ひる-どうふ 晝豆腐 【名】 晝頃賣りあるく豆腐。八笑人「曉を覺えず、夜に日を繼いで高鼾（タカイビキ）……。晝豆腐の聲、枕に響き、眼七（ガンシチ）は、漸う目を覺まし」

ひる-どき 晝時 【名】 正午の時刻。まひるどき。ひる。午時。

ひる-とび 晝鳶 【名】 次條に同じ。

ひる-とんび 晝鳶 【名】『とんび（鳶）㊂を見よ』 ㊀晝間、店先にある又は人の携へたる物などを掠め取ること、又その人。㊁すり（掏摸）を云ふ。〔攝津國の方言〕

ひる-どめ 蛭止・水蛭止 【名】〔種〕 蛭に食はれたる時の血どめに用ふる、一種の草。おにごけ。〔近江國の方言〕

ひる-どろばう 晝泥坊 【名】 ひるぬびすと（晝盜人）に同じ。

ひる-な 【名】〔植〕 わすれぐさ（萱草）に同じ。

ひる-なか 晝中 【名】 ひるひなか（晝日中）に同じ。紫式部日記「斯く曇なき晝なかに、扇も、はかばかしく持たせず」 著聞「この事のしたくなりける時は、晝中にも、前をかきあけて……、尼が許へ歩み行きければ」

ひる-ぬすびと 晝盜人 【名】 晝間、盜をなす人。ひるとび。ひるとんび。本朝櫻陰比事「晝盜人よと、聲聲に取廻し」

ひる-ぬすみ 晝盜 【名】 晝間、盜をなすこと。

ひる-ね 晝寢・晝寐 【名】 晝間、寢ぬること。ひるぶし。午睡。（多く夏にいふ） 好忠集「妹とわれねやの風戸（カザト）に晝寢して日高き夏の陰をすごさん」

ひる-ねずみ 晝鼠 【名】 ㊀晝間、巣より出であらはるる鼠。㊁落ちつかぬ人を罵りていふ語。ひるぎつね。風俗文選（鼠賦）「晝鼠とあなづられ、濡鼠と笑はれ」

ひるね-ばう 晝寢坊・晝寐坊 【名】 晝寢をする人を卑しめていふ語。

ひる-の-おまし 晝の御座 【句】 ひる（晝）の條下を見よ。

ひる-の-こ 蛭子・水蛭子 【名】 ひるこ（蛭子）に同じ。源氏「わたつ海のしなへうらぶれ蛭の子の足立たざりし年は經にけり」

蛭の子が齡（ヨハヒ） 【句】『ひるこ（蛭子）を見よ』 年齡三歲。〔古語〕 源氏「ひるの子がよはひにもなりにけるを」

びるばしや 毘留波叉・毗留波叉 【名】〔佛〕 次條に同じ。

びるばくしや 毘留博叉・毗留博叉 【名】（梵 Virūhaksa）【名】〔佛〕 くわうもくてん（廣目天）に同じ。

ひる-ばしり 晝走 【名】 晝間、船を走らせて行くこと。（夜走（ヨバシリ）に對して） 若風俗「風無くて、十一日の晝走、備後の鞆の浦に入りて」

ひる-はなび 晝花火 【名】 晝間打ち上ぐる花火。

ひる-はん 晝飯 【名】 ひるめし（晝飯）に同じ。

ひる-ばん 晝番 【名】 晝間、町内を見まもること、又その役の人。（夜番（ヨバン）に對して）はやひるばん（早晝番）參照。諸國物語「晝番の者、手柄を見るやう、心して、門打たずして通しける」

ひる-ひなか 晝日中 【名】 ひるま。まっぴるま。ひなか。ひるなか。日中（ニッチュウ）。白晝。（夜夜中（ヨルヨナカ）に對して） 天の網「何の恨に、晝日中、夫婦（メヨト）の恥はさらさぬ」 和合人「晝日中、大道の眞中（マンナカ）に寢てゐやがる事あ無（ネ）え」

ひる-ふさ 【名】 鵜の足のみを肴として出すこと。〔武家時代の語〕

ひる-ぶし 晝臥 【名】 ひるね（晝寢）に同じ。〔古語〕 夫木「うなゐ子がすさみに鳴らす麥笛の聲におどろく夏の晝ぶし」

ひる-ふね 晝船 【名】 晝間航行する船。（夜船（ヨフネ）に對して） 炭俵 桃隣「晝舟に乘るや伏見の桃の花」 有磯海 鳳雷「淀川晝舟、浦浦のうしろに實なき榎かな」

びる-ぶろおかあ （英 Bill broker）【名】〔商〕 てがたなかがひにん（手形仲買人）に同じ。

ひる-べんたう 晝辨當 【名】 晝飯の料たる辨當。ひるわりご。

ひる-ま 晝間 【名】 ㊀朝より夕までの間。ひる。晝間（チウカン）。源氏「あふことの世をし隔てぬなかならばひるまも何かまばゆからまし」 ㊁『ひる（晝）㊂を見よ』 ひるめし（晝飯）を云ふ。〔土佐國の方言〕

びる-ま 緬甸 【名】〔地〕 ばるま（緬甸）に同じ。

ひる-まき 蛭卷 【名】『形、蛭の卷き附きたるに似たるよりいふ』 薙刀・槍などの柄、刀の鞘などを、籐（トウ）又は銀などにて、間をおきて卷くこと、又その卷き方の物。平家「銀の蛭卷したる小長刀」

ひるます 怯ます 【動四他】 ひるむやうにす。ひるましむ。

ひる-まずぼ 【名】 こむら（腓）を云ふ。〔中國の方言〕

ひる-まへ 晝前 【名】 眞晝より前の時刻。うままへ。午前（ゴゼン）。（晝過に對して）

ひる-まま 晝飯 【名】 ひるめし（晝飯）に同じ。浮世風呂「内へ往（イ）て、晝飯（ヒルママ）の支度などせうかい」

ひる-まゆ 蛭眉 【名】〔建〕 頭貫（カシラヌキ）・虹梁（コウリヤウ）などの、柱に接する部分の決（シャクリ）、その他、すべて彎曲せる短き眉。

ひるみ 怯 【名】 ひるむこと。

ひる-みせ 晝店・晝見世 【名】 ㊀晝間の露店。（夜店（ヨミセ）に對して） ㊁遊廓にての、晝間の張店（ハリミセ）。（夜店（ヨミセ）に對して） 當世虎の卷「噺しあふ内、はや晝店のすががき」 俗曲（歸咲名殘命毛）「廓（クルワ）……、早、晝見世も引く頃に」

ひる-みつ 晝三 【名】 ちうさん（晝三）に同じ。風來六六部集「夜晝分たぬ鐵砲ぜめのくるしみ、晝三つの、つけまはしのと、位が附いて全盛するほど」

ひるむ 映畫 【名】 ふいるむ（映畫）を見よ。

ひるむ 怯む 【動四自】 ㊀なゆ。しびる。痲痺す。〔古語〕 字鏡「痿、痺也。不レ能二行歩一也。足比留牟」 ㊁氣勢挫け弱る。張り合ふ力なくなる。たわむ。太平記「敵の疼（ヒル）む所を見て、駈け出で、駈け出で追っ立てたり」 八笑人「そんなひるんだ事で、いけるものか」

ひる-むしろ 蛭蓆 【名】〔植〕 ㊀眼子菜（ヒルムシロ）科に屬する多年生の草。根莖は水底を匍匐し、又水面に浮遊す。莖は長く、葉は膜質にして、光澤あり、倒卵形又は細き披針形にして、長き葉柄を有し、水中に沈める葉は、細き披針形にして、また葉柄あり。夏、葉腋より花軸を出し、多數の綠色なる小花を、穗狀に著く。池溝・水田等に自生す。ひるも。みづなぎ。〔眼子菜・牙齒草〕 和名「蛇牀子、比流牟之呂」 ㊁はまぜり（濱芹）に同じ。〔蛇牀子〕

ひるむしろ-くわ 眼子菜科 【名】〔植〕 顯花植物・被子類・單子葉門の一科。草本にして、全部水中にあり、又は花のみ水上に抽出す。眼子菜（ヒルムシロ）・蝦藻（エビモ）・笹葉藻（ササバモ）等、これに屬す。がんしさいくわ。

ひる-め 日孁・晝女 【名】 おほひるめむちのかみ（大日孁貴神）の略。古今「ひるめの歌 ささのくま檜隈（ヒノクマ）川に駒とめてしばし水かへ影をだに見ん」

ひる-め 晝目 【名】 神樂歌の曲の一。

ひる-め 【名】〔植〕『ひろめ（廣布）の轉』 こんぶ（昆布）に同じ。

ひる-めし 晝飯 【名】 眞晝の食事。ひるげ。ひるはん。ちうじき。ちうはん。午飯。（朝飯（アサメシ）・夕飯（ユフメシ）に對して）

ひる-も 蛭藻 【名】〔植〕 ひるむしろ（蛭蓆）㊀に同じ。

ひる-やしなひ 晝養 【名】 ひるめし（晝飯）に同じ。〔古語〕 今昔「晝やしなひせんとて、藪の中に」

ひる-やすみ 晝休 【名】 ㊀晝飯を食ひて後、暫く休むこと。共角「松原や田舍祭の晝休」 ㊁晝食をしたたむるために、旅籠屋に一寸立寄りて、休むこと。丹波與作「お

じやれの身には何がなる……。晝休から泊まで、葭原雀啼くやうに喋って」 **三** ひるね(晝寢)に同じ。

ひる-やど 晝宿 【名】 晝間、宿泊所に到著すること、又その宿。東鑑「野路著御、晝宿也。於二此所一日暮。及二夜半一令レ立給」

ひる-よる 晝夜 【名】 **よるひる**(夜晝)に同じ。〔古語〕 古今「大宮にのみ久方のひるよる分かず仕ふとて」

ひる-るゐ 蛭類 【名】〔動〕 環蟲類の一亞綱。體は扁平・細長にして、その面には、環節に數多の輪皺を具へ、口は前端にありて、吸盤をなし、なほ、尾端の腹面にも、一箇の圓形吸盤あり、肛門は、最後環節に近き背面の中央に開く。雌雄同體にして、池沼・水田・海中等に棲息す。

びるろか 毘樓勒迦・毗樓勒迦 【名】〔佛〕 **びるたか**(毘盧擇迦)に同じ。

びるろしや 毘留勒叉・毗留勒叉 【名】〔佛〕 前條に同じ。

ひる-わりご 晝破子 【名】 **ひるべんたう**(晝辨當)に同じ。〔古語〕 宇治「丈六堂の邊にて、晝わりご食ふに」

ひ-るゐ 悲涙 【名】 悲しさのためにこぼるる涙。

ひ-るゐ 比類 【名】 くらぶべきこと、又その物。たぐひ。比倫。

ひ-るゐ 非類 【名】 **一** 『左傳の僖公十年の條に「神不レ歆二非類一、民不レ祀二非族一」とありて、杜預の註に「凡祭祀必以二其類一。非二其族類一、則不二歆享一」と見ゆ』 その族類にあらざるもの。謠「鬼神は、非類に享(ウ)けず」 **二** 人非人。わるものども。

ひ-るゐ 匪類 【名】 **ひと**(匪徒) **一** に同じ。

ひるゐ-うたあはせ 非類歌合 【名】〔文〕 鳥・獸など、人間以外の者の集まりて歌を詠みあふに擬へて行ふ歌合。例へば、群書類從に收めたる十二類歌合などの類。

ひれ 鰭 【名】 『平(ヒラ)・片(ヒラ)などの義、又、ひらひらとする義なるべし』 **一** 魚の背・胸・腹・尾などにありて、水中に於けるその運動を助くる器官。**はた**(鰭) **一** 參照。 **二** 魚の鰭ぎはの肉。〔料理の語〕 **三** 鯨のえら。 **四** 人の、肥えて、身はばのあること。傾城島原合戰「四十ばかりの鰭ある男」 **五** ひれがはら(鰭瓦)の略。

鰭が附く 【句】 人、成長して、姿勢調ひ、おのづから重重しくなる。

鰭の詞(コトバ) 【句】〔文〕 連歌・俳諧にて、前句(マヘク)に對して必要なき詞を、徒に殊更らしく附句(ツケク)の中に入るること。例へば、連歌にて、「暮るる霞は薄墨の色」といふ前句に、「雉子(キギス)鳴く荻の燒原雨過ぎて」と附けたる場合の「雉子鳴く」といふ詞の類。

鰭の俳諧 【句】〔文〕 鰭の詞を含める附句(ツケク)のある俳諧。拙きものとす。

鰭の連歌 【句】〔文〕 鰭の詞を含める附句(ツケク)のある連歌。拙きものとす。

鰭を附ける 【句】 **一** 誇大に言ふ。大げさに言ふ。尾鰭(ヲヒレ)を附く。 **二** 値打(ネウチ)を附く。肩身廣くなるやうにす。權威を添ふ。今宮心中「老(オイ)女房の威德に、男に家を買はせたと、譏りし人に羨ませ、男に鰭を附けうぞと」

一(イチ)の鰭 【句】 魚の鰭の、歌に最も近きもの、又、その鰭の附きたる肉。〔料理の語〕 「にあるもの。〔料理の語〕

蹲向(ソンカウ)の鰭 【句】 鯛の脊鰭の、前方にあるもの。

はたはたの鰭 【句】 鯉の鰭の、尾の上端にあるもの。まくはの鰭。〔料理の語〕

間遠(マドホ)の鰭 【句】 前條に同じ。〔料理の語〕

ひれ 領巾・肩巾 【名】 『ひらひらと飄るよりいふなるべし。**ほろ**(母衣)參照』 **一** 古、婦人の、領(エリ)より肩にかけて、裙帶(クタイ)と共に、正裝の時の飾とせし布帛。延喜式「領巾四條料、紗三丈六尺、別二九尺一」 和名「領巾(日本紀私記云、比禮、婦人頂上餝也)」 **二** 形、冠の燕尾のごとき靑き絹に、刺繡を施し、鏡臺の附屬品として、その筥に入れおくもの。もと、鏡臺などの塵を拂ふために用意せしものなるべしといふ。

領巾振る 【句】 領巾を振り動かす。(古、婦人の、人を招く時なししわざ) 「袖振る」參照。萬葉「萬代に語り繼げとしこの嶽(タケ)にひれ振りけらし松浦(マツラ)佐用媛(サヨヒメ)」

ひれ 比禮 【名】 上古、打振りて昆蟲などを逐ひ拂ひ、又は風浪を起させも靜まらせもするなどに用ひし物。その製、詳かならず。一說に、**ひれ**(領巾)を、臨時に、これらの用に供せしを記せるに過ぎずと。記「須勢理姬(スセリヒメ)の命(ミコト)、蛇(ヘミ)の比禮を、その夫(ヒコヂ)に授けて云(ノ)りたまはく、その蛇咋(ク)はんとせば、この比禮を三たび擧(フ)りて打撥(ウチハラ)ひたまへとのりたまふ。かれ、敎のごとしたまひしかば、蛇、おのづから靜まりし故に、平(ヤス)く寢ねて出でたまひき」

風切る比禮 【句】 風を止め靜まらしむる効ありといふ比禮。風振る比禮・浪切る比禮・浪振る比禮などと共に、太古、天日矛(アメノヒボコ)の、新羅國より携へ來れりといふ、八種(ヤクサ)の神寶(カムダカラ)の一。何れも、今、但馬國出石(イヅシ)神社の神寶たり。記「天日矛の持ち渡り來つる物は、玉津寶(タマツダカラ)といひて、珠二貫(フタツラ)、又、浪振る比禮・浪切る比禮・風振る比禮・風切る比禮、又、奧(オキ)つ鏡・邊(ヘ)つ鏡、并せて八種(ヤクサ)なり」

風振る比禮 【句】 風を吹き起す効ありといふ比禮。前條參照。

浪切る比禮 【句】 浪を絶ち靜まらしむる効ありといふ比禮。「風切る比禮」參照。

浪振る比禮 【句】 浪を立たしむる効ありといふ比禮。「風切る比禮」參照。

ひれ 平禮 【名】 『頂を折りてかぶるためひらめくによりていふとも、ひれ伏す義なりともいふ』 烏帽子の頂を折り伏せてかぶること、又そのかぶり方の烏帽子。へいらい。へいれい。ひれい。**ひれえぼし**(平禮烏帽子)參照。吉記「五條中納言別當(布衣・茶染・狩襖・平禮)」

ひれ (英 Fillet の訛) 【名】 牛肉の、鞍下(クラシタ)の邊、腰椎の內部に當る部分。生存中、最も運動する部分なるが故に、發育よく、料理上に、ロオスと共に賞美せらる。處處に脂肪交れるより、俗に霜降(シモフリ)といふ。ひれにく。

ひれ-あざみ 鰭薊 【名】〔植〕 **やはずあざみ**(矢筈薊)に同じ。

ひ-れい 平禮 【名】 **ひれ**(平禮)に同じ。東鑑「平禮、ヒレイ」

ひ-れい 比例 【名】 **一** 例を引きて比ぶること。てりあはせ。 **二** 〔數〕『英 Proportion』 二つの量の比と他の二つの量の比との、相等しきこと、又この關係ある量を取扱ふ算法。例へば、三の六に於ける比は、二十七の五十四に於ける比と、その値に於て、相等しき類。 **三** 〔美〕 物象の各部分の間、又は物象の相互の間に於ける、大さの割合。**わうごんりつ**(黃金率)參照。

比例の外項 【句】〔數〕 比例式 $a:b=c:d$ に於ける a 及 d の稱。

比例の內項 【句】〔數〕 比例式 $a:b=c:d$ に於ける b 及 c の稱。

比例を解く 【句】〔數〕 比例をなせる四つの量の內、三項を知りて、他の一項を算出す。

ひ-れい 非禮 【名】 禮に缺くること。無禮。失禮。「神は非禮を受けず」

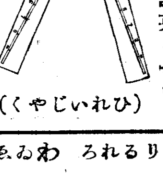
非禮の禮 【句】 『孟子の離婁下篇に「非禮之禮、非義之義、大人弗レ爲」とあり』 似て非なる禮。禮のごとくにして、まことの禮にあらざること。非箇業平河內通「大人は、非禮の禮に拘らず。故に、義によって、その親しきを滅す」

び-れい 美麗 【名】 うつくしきこと。うるはしきこと。きれい。

ひれい-き 比例規 【名】 **ひれいりやうきやくき**(比例兩脚器)に同じ。

ひれい-しき 比例式 【名】〔數〕『英 Proportional expression』 比例 **二** の意を示す等式。例へば、$a:b=c:d$ 又は $a:b::c:d$ の類。$a\cdot d$ を外項、$b\cdot c$ を內項といふ。

ひれい-しやく 比例尺 【名】『英 Proportional scale 又は Sectoral scale 又は Sector』 製圖に用ふる一種の折尺。同じ長さの木片二箇を、その一端に於て、蝶番(テフツガヒ)に



（ひれいじやく）

より結合して、兩脚となし、蝶番の中心より、兩脚の他の一端に、各、直線を畫し、これに尺度を盛りたるもの。兩脚の中間に、物を夾めば、その長さによりて、比例的尺度を見出すを得。

ひれい-じゆんび-はっかうはふ 比例準備發行法【名】〔經〕次條に同じ。

ひれい-じゆんび-はふ 比例準備法【名】〔經〕『Proportional reserved method』兌換紙幣發行法の一。紙幣發行額に對し、その四分の一又は三分の一以上といふがごとき一定の比例をなす正貨又は地金銀を準備せしむるもの。

ひれい-すう 比例數【名】〔數〕『英 Proportional number』比例する數。

ひれい-ぜい 比例稅【名】〔經〕『英 Proportional tax』課稅方法の一。稅額と賦課稅物の價格とが、算術的に比例するもの。例へば、田租は地價の百分の四箇半なる類。一率稅。(累進稅に對して)

ひれい-ぜいりつ 比例稅率【名】〔經〕算術的に比例する稅率。(累進稅率に對して)

ひれい-せん 比例線【名】〔數〕『英 Proportional line』一つの圖形に於て、比例をなす、四箇の有限直線。

ひれい-せんきよ 比例選擧【名】〔法〕比例選擧法に依る選擧。比例代表。

ひれいせんきよ-せいど 比例選擧制度【名】〔法〕次條に同じ。

ひれいせんきよ-はふ 比例選擧法【名】〔法〕選擧法の一。議員の數を、政治主義の同一なる選擧人の數に比例して選出・配分するもの。比例代表法。

ひれい-だいさんかう 比例第三項【名】〔數〕だいさんひれいかう(第三比例項)に同じ。

ひれい-だいしかう 比例第四項【名】〔數〕だいしひれいかう(第四比例項)に同じ。

ひれい-だいへう 比例代表【名】〔法〕ひれいせんきよ(比例選擧)に同じ。

ひれいだいへう-せいど 比例代表制度【名】〔法〕次條に同じ。

ひれいだいへう-はふ 比例代表法【名】〔法〕ひれいせんきよはふ(比例選擧法)に同じ。

ひれい-ちゆうかう 比例中項【名】〔數〕**一**次條に同じ。**二**きかちゆうかう(幾何中項)に同じ。

ひれい-ちゆうすう 比例中數【名】〔數〕『英 Mean proportional』比例の內項の相等しき時の、中數。例へば、25:15=15:9 に於ける 15 の類。而して、$15=\sqrt{25\times9}$ の關係に在り。比例中項。だいさんひれいかう(第三比例項)參照。

ひれい-はいぶん 比例配分【名】〔數〕あんぶんひれい(按分比例)に同じ。

ひれい-ぶ 比例部【名】〔數〕『英 Proportional parts. 二箇の數の差と、その對數の差とは、殆ど比例するものと見做して算出せる數なるによりていふ』對數表を用ふる時、表に掲げたる數より尙ほ一桁だけ多き數を求むるため、順次、二箇の數の對數の差の十分の一より十分の九までの數を、表の側傍に掲げたるもの。比例部分。

ひれい-ぶぶん 比例部分【名】〔數〕前條に同じ。

ひれい-りやう 比例量【名】〔數〕『英 Proportional quantity』比例をなす、四箇の各量。

ひれい-りやうきやくき 比例兩脚器【名】『英 Proportional compasses』中央に、長き溝孔を有し、左右に、度盛(ドモリ)を施せる二枚の金屬桿を、上下に移動し得る螺旋鋲にて接合し、兩桿を開けば、その兩端なる尖頭の間の長さは、所要の比例をなすコンパス。比例規。

ひ-れう 肥料【名】こやしに用ふる物。こえの材料。

肥料の三要素【句】〔農〕作物の成育に必要なる炭素・酸素・水素・窒素・硫黃・燐・カルシウム・ポッタシウム・マグネシウム及び鐵の十元素の內、窒素・酸素・加里の三者。この三者以外は、空氣及び土壤中よりの自然の供給によりて、植物の需要量を充し得る場合多けれども、この三者は、多くの場合、不足を感ずるため、その含有量の如何によりて、肥料の價格に、高低の差を生ず。

び-れう 檳榔・蒲葵【名】〔植〕びらう(檳榔)**一**に同じ。〔古語〕

ひれう-とりしまり-はふ 肥料取締法【名】肥料を製造・輸入・移入又は賣買する營業者を取締るために制定したる法律。明治四十一年の公布。十四條より成る。

びれう-の-くるま 檳榔車・蒲葵車【名】びらうのくるま(檳榔車)に同じ。宇治「びれうの車に乘りて」

ひれ-えぼし 平禮烏帽子【名】平禮(ヒレ)のかぶり方にせる烏帽子。一說に、かざをりえぼし(風折烏帽子)に同じと。貞丈雜記「平禮烏帽子といふ物、別に變りたるものにはあらず。烏帽子の頂を折りてかぶることを、比禮といふなり。何の烏帽子にもあれ、折りたるは、比禮なり」

ひれ-がはら 鰭瓦【名】鬼瓦の左右にある波・渦などの飾。ひれ。

ひ-れき 披瀝【名】『披(ヒラ)き瀝(ソソ)ぐ義』心に思へる事を、隱さずうちあくること。「胸中を披瀝す」

ひれ-ぎは 鰭際【名】魚類の身體の、鰭の附根(ネツケ)の部分。

ひれ-くわうざん 比禮鑛山【名】〔地〕越後國古志(コシ)郡荷頃(ニヨ)村大字比禮にある鑛山。石油を產出す。

ひれ-ごろも 領巾衣・肩巾衣【名】領巾(ヒレ)を附けたる衣。〔古語〕續後紀「ひれ衣裾垂れ飛ばし」

ひれ-だい 領巾代・肩巾代【名】領巾(ヒレ)に代用するものならんといふ。〔古語〕

ひれ-たて 鰭立【名】魚類の料理にて、鰭を立てて、差出だすこと。

ひ-れつ 卑劣・鄙劣【名】心・行などの、極めて鄙しきこと。和合人「おや、おや、至ってひれつな事をのたまふよ」

ひれ-つ 披裂【名】裂けひらくこと。

ひれつ-なんこつ 披裂軟骨【名】〔醫〕『英 Arytenoid cortilage』はいじやうなんこつ(盃狀軟骨)に同じ。

ひれ-なが 鰭長【名】〔動〕**一**鮪(マグロ)の一種。左右の鰭、長くして、黑く、紅色を帶ぶ。びんなが。びんなご。**二**ちだひ(黃參)に同じ。

ひれ-にく ヒレ肉【名】ひれに同じ。

ひれ-のし 鰭熨斗【名】魚の鰭を、板に貼り附け、乾かして製したる熨斗。

ひれはり-さう 鰭張草【名】〔植〕紫草(ムラサキ)科に屬する一年生の草。高さ二三尺。莖は枝を分ち、多少の翼を有し、葉は廣披針形にして、短き粗毛あり、上部に生ずるは、葉柄變じて、莖上の翼となれり。花は藍紫色にして、短き蠍尾狀の穗をなして開く。原產地は歐洲。庭園に栽培す。

ひれ-ふし 平伏【名】ひれふすこと。曾我「涙にくれて、……、妻戶の障子の緣に、足を支へて、ひれふしにぞ倒れける」

ひれ-ふす 平伏す【動四自】身をひらたくして伏す。伏しかがむ。平伏(ヘイフク)す。宇治「猫の鼠を覗ふやうに、ひれ伏して」

ひれふる-やま 領巾振山【名】〔地〕肥前國東松浦(ヒガシマツウラ)郡鏡村大字鏡にある山。唐津(カラツ)町の附近。一名、鏡山・松浦山・七面山。まつらさよひめ(松浦佐用媛)參照。李花集「松浦がは川音高しさよ姫のひれふる山のさみだれの頃」增補生寫朝顏話「夫の跡を戀ひ慕ひ、石に成ったる松浦潟、領巾振山の悲みも」

ひれ-まだひ 鰭眞鯛【名】〔動〕ちだひ(黃參)に同じ。

ひ-れん 飛廉・蜚廉【名】**一**『漢書の武帝紀に「長安飛廉館」とありて、顏師古の註に「應劭曰、飛廉、神禽、能致二風氣一者也。晉灼曰、身似ㇾ鹿、頭如ㇾ爵、有ㇾ角而蛇尾、文如二豹文一」と見ゆ』支那にて、能く風を起すといふ靈鳥。身は鹿に似、頭は孔雀に似、角あり、尾は蛇に似、全身に豹のごとき斑紋ありといふ。又、毛長く、翼ある怪獸なりともいふ。**二**『廣雅の釋天篇に「飛廉、風師也」とあり』支那にて、風を司るといふ神。風伯。**三**陰陽家にて歲の廉祭使君なりといふもの。子の年は申、丑の年は酉、寅の年は戌、卯の年は巳、辰の年は午、巳の年は未、午の年は亥、戌の年は子、亥の年は丑の方に在りと說き、こ

の方に向ひて土を動かし、工を興し、轉居・嫁娶をなす時は、口舌・疾病・遺亡の患ありといふ。大殺。四〔植〕**やはずあざみ**（矢筈薊）の漢名。

び-れん 尾連【名】鷹の尾の一部。

び-れん 尾聯【名】〔文〕律詩の第七・第八の兩句。（起聯・頷聯・頸聯に對して）

ひれん-かく【名】〔植〕**おほぐるま**（大車）に同じ。

ひ-れんじやく 緋連雀【名】〔動〕連雀の一品種。形、やや小く、上尾筒と尾の尖端との羽毛、深紅色を帶ぶ。

ひ-ろ 日【名】『ろは接尾語』**ひ**（日）二に同じ。〔古語〕萬葉八十「國は難波に集ひ船飾（フナカザリ）あがせむ日ろを見も人もがも」

ひろ 尋【名】一ひろの長さ。六尺ほどの長さ。諺「一寸延びれば、尋延びる」催馬樂（總角）「あげまきや、……、避（サカ）りて寢たれども、轉（マロ）びあひにけり、……、か寄りあひにけり」

ひろ 尋【助數】『**ひろ**（廣）の義。兩手をひろげたる廣さなるによりていふ』長さの單位。一ひろは、左右の手をひろげて延ばしたる長さ、即ち約六尺。尋（ジン）。

ひ-ろ 披露【名】**ひろう**（披露）に同じ。

ひろい 從【接頭】『廣の字の義』同じ位階のうちの低き方の意。ひろき。從（ジユ）。（正（オホ）に對して）〔古語〕和名「從八位下、比呂伊夜豆乃久良井乃之毛豆之奈」

ひろいん【名】**ひいろいん**に同じ。

ひ-ろう 鄙陋【名】學問・見識・風俗などのいやしきこと。野鄙。卑俗。

ひ-ろう 披露【名】『披（ヒラ）き露（アラハ）す義』一文書などをひろげて見すること。二公に發表すること。ふいちやう。ひろめ。十訓「慈惠（エジ）、この事を聞きて、憤りて、起請（キシヤウ）を書きて、三塔に披露せらる」一茶「芭蕉忌に丸い天窓（アタマ）の披露かな」

び-ろう 尾籠【名】一『をこといふ語に、尾籠の字を宛てたるを、音讀せるもの』禮を失ふこと。ぶれい。失敬。平家「かやうの尾籠を現じて、入道の惡名を立つ、不孝（フケウ）の至」二他人の前にて言ひ又は行ふことを憚るべきこと。浮世風呂「食べると、尾籠ながら吐きまする」

び-ろう 鼻漏【名】〔醫〕鼻より膿汁の出づる病。

びろう-がまし 尾籠がまし【形二】『**がまし**は接尾語』無禮なり。みぐるし。八笑人「尾籠がましき狼藉に及び」

びろう-きん 鼻漏菌【名】〔醫〕鼻漏の患者の鼻汁に存在する細菌。

ひろう-じやう 披露狀【名】一或事を披露するために差出す書狀。二**つけじやう**（附狀）に同じ。

ひろう-じよ 披露所【名】披露を行ふ場所。披露の座席。最明寺殿百人上﨟「御披露所に著座ある」

ひろ-うすやう 廣薄樣【名】幅廣き薄樣。

ひろう-ぶぎやう 披露奉行【名】室町幕府の諸奉行の一。評定始の時、奏事の役に從事し、御前沙汰始には、公事（クジ）を披露し、又、常には、將軍の許可を受けて、訟訴などの事を奉行せしもの。恩掌方の内、引附衆たる輩の兼職なりき。御前（ゴゼン）奉行。おまへ奉行。

ひろ-えん 廣緣【名】一幅廣き緣側。二**ひろびさし**（廣廂）に同じ。吉野拾遺「廣緣に出でて、聲をあげて泣き叫ぶを」

ひろ-おでゐ 廣御出居【名】鎌倉幕府の大廣間。

ひろおでゐ-しゆう 廣御出居衆【名】鎌倉幕府にて、廣御出居に宿直侍衞せし衆。

びろおど 天鵞絨（葡 Velludo. 西 Vellude）【名】柔軟にして、手ざはりよく、光澤ある毛絲の織物。緯（ヌキ）絲の間に、銅などの筋金（スヂガネ）を入れて、その上に、地合より高く輪奈（ワナ）狀に織り上げ、後、小刀にて、その針金の上を切りて、毛羽（ケバ）とし、又は、切らず、輪奈の形のままにして、針金を去りたるもの。經（タテ）絲は、地合となるものと、毛羽又は、輪奈となるべきものとの二種を用ひ、上等品は、以上二種の經絲及び緯絲の何れにも、練絹絲を用ふれど、普通は、表面に顯れぬ地合の經絲と緯絲とには、木綿絲を用ふ。天文年間、西班牙・葡萄牙の商船の輸入に係り、慶長年間、京都西陣の職工、これに倣ひて製出するに至る。コオル天・ブラッシ天など、その一種なり。剪絨。**めんびろおど**（綿天鵞絨）參照。

びろおど-いうぜん 天鵞絨友禪【名】友禪織にしたる天鵞絨。主に窓掛・袱紗・テエブル掛などに用ふ。友禪天鵞絨。

びろおど-うを 天鵞絨魚【名】〔動〕**あをた**に同じ。

びろおど-きび 天鵞絨黍【名】〔植〕禾本科に屬する一年生の草。莖は地に匍匐し、高さ一尺内外の、直立する枝を生じ、葉は長卵形にして尖り、互生し、莖・葉共に細毛密生す。花は、相集まりて小穗狀花序を成せるもの、更に集まりて、圓錐狀花序に排列す。四國の原野に自生す。

びろおど-ぎり 天鵞絨桐【名】〔植〕苦苣苔科に屬する多年生の草。莖は高さ二尺餘に達し、葉は心臟形にして、細毛密生し、帶紫色を呈し、斑紋あり。花は、下垂して開き、帶紫色の不整齊合瓣花冠を有し、總狀花序に排列す。原產地は南亞米利加。觀賞用として栽培す。

びろおど-しだ 天鵞絨羊齒【名】〔植〕水龍骨科に屬する多年生の草。莖は、長さ二三寸、革質を成し、岩石上を匍匐す。葉は、茶褐色の鱗毛密生し、鈍頂・全緣にして、やや舌狀を呈し、茶褐色の絨毛有し、子囊群は中肋の兩側に生ず。山野に自生し、又、觀賞用に供す。

びろおど-すぎ 天鵞絨杉【名】〔植〕一杉の變種の一。枝短く、葉細小にして、密生す。ばんだいすぎ。まんねんすぎ。二**まんねんぐさ**（萬年草）に同じ。

びろおど-ぜきしやう 天鵞絨石菖・雀舌【名】〔植〕石菖の一品種。小形にして、葉も長さ二三分に過ぎずして、密生す。

びろおど-せん 天鵞絨氈【名】昔時、和蘭人の、我國に輸入せし絨毯（ジユウタン）。

びろおど-むし 天鵞絨蟲【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。體は小く、卵形にして、長さ二三分、天鵞絨の如き色澤を有する黑毛密生す。五月頃發生し、桑・梨・櫻・大根などの葉を食害す。

びろおど-らん 天鵞絨蘭【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。莖の高さ六七寸。葉は、長楕圓形にして尖頂、互生し、花は、淡紅にして、綠色を帶び、八月頃、梢上に開く。我國中部及び南部の喬木帶に自生し、又、觀賞用として栽培す。しゆすらん。

ひろ-おび 博帶【名】**おほおび**（大帶）に同じ。和名「紳、大帶也。唐令私記云、大帶、今按、一名、博帶、著二禮服一帶也。以レ縉爲レ之」

ひろ-がかり 尋掛【名】和船にて、種種の制を定むるに、長さの尋を標準とするもの。（帆掛（ホガカリ）・艪掛（ロガカリ）などに對して）

ひろ-かた 廣片【名】豐前・豐後兩國の產なる、竪九寸三分、橫一尺三寸七分の紙。

ひろ-がる 廣がる【動四自】『**がる**は接尾語』一廣くなる。廣く延び張る。ひろごる。ひろる。二あまねく行きわたる。ひろまる。ひろごる。三殖えて、廣き面積を占む。はびこる。ひろごる。繁殖す。

ぴろがろる（獨 Pyrogallol）【名】〔化〕**せうせいもっしよくさん**（焦性沒食子酸）に同じ。

ひろ-ぎぬ 廣絹【名】「美濃（ミノ）の廣絹」を見よ。

ひろぐ 廣ぐ・擴ぐ【動下二他】ひろくなす。延べ張る。ひろがす。

ひろぐ 廣ぐ【動四他】一前條に同じ。**かひろぐ**（か廣ぐ）參照。〔古語〕平治「左右の手をもつて、竿をひろがせ、……土礫（ツチハリツケ）といふ物にして」二爲す。行ふ。（他人の行爲につきて、罵りていふ）阿波の鳴門「狼藉ひろいだその代り、拷問の仕樣はさまざま、覺悟ひろげと嚇せども」梅曆「金は殘らずお前（へ）が卷き上げ、世間は分散ひろぐと言ひ立て」

び-ろく 美祿【名】手厚き俸祿。

天の美祿【句】『漢書の食貨志に「酒天之美祿、頤二養天下一」とあるに本づく』**さけ**（酒）の異稱。

び-ろく 微祿【名】一僅かなる祿。小祿。二おちぶること。零落。

び-ろく 麋鹿【名】大鹿（オホシカ）と鹿と。馴鹿（トナカイ）と鹿と。

ひろくにおしたけかなひ-の-すめらみこと 廣國押武金日天皇【名】〔人〕あんかんてんわう(安閑天皇)異稱。

ひろく-にち 飛鹿日【名】陰陽家にて、家屋を造るに大凶なりとする日。正月は辰、二月は巳、三月は午、四月は未、五月は申、六月は酉、七月は戌、八月は亥、九月は子、十月は丑、十一月は寅、十二月は卯の日。

ぴろく-もん 美祿紋【名】觀相上、掌中に、三角形をなして、横に生ずる紋。衣食足り、到る處名を得る相なりといふ。

ひろ-こうぢ 廣小路【名】㊀幅の廣き街路。おほぢ。本朝三國志「道ひろき廣小路を退出する」㊁〔地〕東京市下谷區上野公園の正面に當れる大通。德川時代には東叡山寬永寺の正門の前に當りし處。今は、東側に五條町・三橋(ミハシ)町・廣小路町、西側に元黑門町・北大門町あり。㊂〔地〕東京市日本橋區柳橋の東端、兩國橋の西にありし廣場。江戸時代より明治の初にかけて、見世物小屋多く、賑ひたり。㊃〔地〕東京市淺草區東仲町の一部の俗稱。

ひろ-ごし 廣輿【名】大きく作れる輿。

ひろ-ごしよ 廣御所【名】殿中の廣間。辨内侍日記「富小路(トミノコウヂ)殿、内裏になりて、廣御所のつまの紅梅、盛りなりし頃」

ひろ-こまひ 廣木舞【名】〔建〕屋根の木舞の内、軒先にありて、幅廣きもの。

ひろ-こんぶ 廣昆布【名】〔植〕『ひろめ(廣布)を見よ』こんぶ(昆布)に同じ。

ひろごる 廣ごる【動四自】ひろがる(廣がる)に同じ。〔古語〕古今(序)「野べに生ふるかづらの、はひ廣ごり」源氏「いといたうすきたまへる御名の、ひろごりて」

ひろさき 弘前【名】〔地〕㊀陸奥國にある市。津輕平野の南部。岩木川に臨む。津輕氏の舊城地。第八師團司令部あり、鐵道陸羽線の終點たり。舊稱、津輕。㊁明治初年設置の縣の一。陸奥國に置きしもの。初、四年七月、陸奥國弘前・八戸(ハチノヘ)・黑石・七戸(シチノヘ)・斗南(トナミ)の五藩を、すべて縣とし、同年九月、これを合併して立てしもの。十一月、青森縣と改稱し、陸奥全國を管せしめしが、後、二戸(ニノヘ)郡を岩手縣に移して、青森縣となれり。

ひろさき-じやう 弘前城【名】陸奥國弘前市にありし津輕氏の居城。慶長十一年、津輕信牧の築造に係る。城址、今も存し、舊本丸は公園となり、三ノ丸には陸軍兵器支廠あり。

ひろさき-にんぎやう 弘前人形【名】陸奥國弘前にて産する、土製の人形笛。

ひろ-ざしき 廣座敷【名】㊀面積廣き座敷。置土産「一夜は爰に定めしに、筆屋といひて、廣座敷なり」梅暦「泉水の向(ムカフ)はさざめく廣座敷、終日過せし酒宴(サカモリ)に」㊁江戸城大奥の女子の詰所。四十疊敷にて、御年寄等が、表役人と對談し、又女中召抱の節に言ひ渡しなどせし室。

ひろざしき-づめ 廣座敷詰【名】江戸城大奥の女中の、廣座敷に詰めゐて、大奥へ來客又は參入者ありし時、送迎の事などを掌りしもの。

ひろさは 廣澤【名】〔地〕ひろさはのいけ(廣澤池)の略。若風俗「東山の花に暮し、廣澤の月に明し」猿蓑(史邦)「廣澤やひとりしぐるる沼太郎」㊁〔佛〕ひろさはりう(廣澤流)の略。㊂名物茶入の一。金華山燒なるもの。

廣澤の三流【句】〔佛〕ひろさはりう(廣澤流)を見よ。(「仁和寺の三流」に對して)

廣澤の六流【句】〔佛〕ひろさはりう(廣澤流)を見よ。(「小野(ヲノ)の六流」に對して)

ひろさは-さんぎ 廣澤參議【名】〔人〕ひろさはまおみ(廣澤眞臣)を見よ。

ひろさは-そうじやう 廣澤僧正【名】〔人〕『ひろさはりう(廣澤流)を見よ』寬朝僧正の異稱。

ひろさは-の-いけ 廣澤池【名】〔地〕山城國葛野(カドノ)郡嵯峨村の東北にある池。東西二町、南北一町餘、周圍約十二町。觀櫻・觀月の勝景を以て著る。へんせうじ(遍照寺)參照。六百番歌合「廣澤の池にはすずむ月影の音羽の山にたちのぼるかな」

ひろさは-は 廣澤派【名】〔佛〕ひろさはりう(廣澤流)に同じ。

ひろさは-まおみ 廣澤眞臣【名】〔人〕勤王家。舊萩藩士。柏村安利の第四子、波多野眞忠の養嗣子。幼名季之進、又金吾、通稱兵助。武術に長ず。幕府の長州征伐に際し、外艦砲擊の事に坐して投獄せられ、慶應元年、赦されて國政に與る。明治元年、征討大總督參謀となり、後、參議に任ぜられ、同四年、刺客に殺さる。年三十九。姓を廣澤と稱するは、慶應元年、内命によりて廣澤藤右衞門と稱せしに因る。

ひろさは-みつぱ 廣澤密派【名】〔佛〕次條に同じ。

ひろさは-りう 廣澤流【名】〔佛〕『寬朝、山城國廣澤の遍照寺に住せしによりていふ』東密の一派。廣澤の寬朝大僧正を始祖とするもの。御流(ゴリウ)・保壽院(ホジユヰン)流・西院(ニシノヰン)流・華藏院(ケザウヰン)流・忍辱山(ニンニクサン)流・傳法院流の六流に分れ、廣澤の六流といふ。後、御流・保壽院流・西院流の三者を總括して、仁和寺流といひ、餘の三流を廣澤の三流ともいへり。(小野流に對して)**やたくじふにりう**(野澤十二流)參照。

ひろ-ざん 廣棧【名】次條の略。浮世風呂「袚地(マヘダレチ)も、……廣棧を買ひますから」

ひろ-ざんとめ 廣棧留【名】幅廣き唐棧(タウサン)。續鳩翁道話「鍋燒でなけりや、飯は食へぬの、廣棧留は仕著(シキセ)のやうで見ともないのと、よう口が腫れぬ事ぢや」

ひろし 廣し・弘し【形二】㊀面積多し。範圍大なり。うち開けてあり。㊁心、遍くわたれり。心、ゆるやかなり。寬大なり。源氏「何事も廣き心を知らぬ程は」㊂數多し。しげし。源氏「類(ルヰ)廣く、娘がちにて」平家「北條も、子孫さすが廣ければ」

廣い世界を狹くする【句】人に對して面目なき行爲ありて、世を忍ぶ身となる。〔諺語〕

廣いやうで狹い【句】「世間は廣いやうで狹い」を見よ。

弘き誓【句】〔佛〕ぐぜい(弘誓)の直譯。

廣き中へ入る【句】廣き世の中に出でて、人人と交る。平家「弓矢取の、我も、人も、廣き中へ入ると云ふは」

廣き餠(モチヒ)【句】のしもち(伸餠)の類といふ。〔古語〕枕「くだもの、廣きもちひ」

ひろ-しき 廣敷【名】㊀武家などの邸宅内の奥むき及び臺所むき。ひろま(廣間)㊁參照。一代女「中戸に草履脱ぎて、座敷に參りて腰掛けけるに」㊁德川幕府の營中及び西丸の大奥の一室。役員は、若年寄に屬する廣敷用人二人乃至四人ありて、大奥の事を分掌し、その配下に、廣敷用達四人、同侍十二人、同用部屋書役、同吟味役、同庭番等ありたり。

ひろしき-こびと 廣敷小人【名】德川幕府の職制の一。廣敷㊁に屬せし雜役の一。

ひろしき-ごようにん 廣敷御用人【名】ひろしきようにん(廣敷用人)の敬稱。

ひろしき-ざむらひ 廣敷侍【名】德川幕府の職制の一。廣敷用人に屬して、番衞の違法を監察せしもの。定員十二人。

ひろしき-さむらひしゆう 廣敷侍衆【名】前條に同じ。

ひろしき-しんじやうばん 廣敷進上番【名】德川幕府の職制の一。廣敷㊁に屬せし雜役の一。

ひろしき-そへばん 廣敷添番【名】德川幕府の職制の一。廣敷番頭に屬して、普請その他の雜務を掌りしもの。定員十五人、燒火間(タキビノマ)に候したり。

ひろしきそへばん-なみ 廣敷添番並【名】德川幕府の職制の一。廣敷番頭に屬して、廣敷添番の次に位し、これと同一の事務を掌りしもの。定員なく、燒火間(タキビノマ)に候したり。

ひろしき-ばん 廣敷番【名】德川幕府の職制の一。廣敷㊁に交番して、非常を戒め、出入の吏員の檢察等掌りしもの。

ひろしきばん-がしら 廣敷番頭【名】德川幕府の職制の一。廣敷番の長。定員六人乃至八人。留守居の指揮の下に、兩人一日一夜づつ勤仕するを例とし、燒火間(タキビノマ)に候したり。

ひろしきばん-しよ 廣敷番所【名】廣敷番の詰所。

ひろしき-やくにん 廣敷役人【名】德川

時代に、廣敷❷に伺候せし役人。

ひろしき-ようたし 廣敷用達【名】徳川幕府の職制の一。廣敷用人に屬して、大奥の衣服・調度を調進し、兼ねて女中を監せしもの。定員四人。

ひろしき-ようにん 廣敷用人【名】徳川幕府の職制の一。廣敷役人の長。若年寄の支配の下に、留守居の指揮を受けて、廣敷の職員を統べ、大奥の用度を監し、その雜事を總掌せしもの。定員は二人乃至四人。御臺様（ミダイサマ）用人。臺所用人。

ひろしき-ようべや 廣敷用部屋【名】廣敷役人の、詰めて、職務を執りし部屋。

ひろしき-ようべや-かきやく 廣敷用部屋書役【名】徳川幕府の職制の一。廣敷用人に屬して、書役たりしもの。

ひろしき-ようべや-ぎんみやく 廣敷用部屋吟味役【名】徳川幕府の職制の一。廣敷用人に屬して、雜役に從事せしもの。

ひろしき-ようべや-まかなひぎんみやく 廣敷用部屋賄吟味役【名】徳川幕府の職制の一。廣敷用人に屬して、雜務を掌りしもの。

ひろ-しく 廣敷く【動四他】ふとしく（太敷く）に同じ。〔古語〕祝詞「底つ石根（イハネ）に、宮柱廣敷き立てて」

ひろしげ 廣重【名】〔人〕❶あんざうひろしげ（安藤廣重）を見よ。❷武藏國下原（シモハラ）の新刀の刀工。同銘數人あれども、因幡守廣重、最も著る。

ひろしげ-は 廣重派【名】〔美〕浮世繪の一流派。安藤廣重を祖とす。

ひろ-しば 廣芝【名】廣く芝の生えてある處。鵯鷺合戰「鴨西は、渺渺としたる廣芝なれども、江河・溝川流れあひて」

ひろ-しま 廣島・廣嶋【名】〔地〕鹽飽（シアク）諸島の一。諸島中の最大なるものにして、周回四里半餘。南方に、江ノ浦と稱する小灣あり、船舶の一錨地たり。

ひろしま 廣島・廣嶋【名】❶〔地〕四十三縣の一。安藝・備後の兩國全部を管轄し、縣廳は安藝國廣島市に置く。初、安藝國廣島・備後國福山の兩藩を廢して、縣とし、前者は、安藝全國と備後國八郡とを管し、後者は、深津縣の一部となる。深津縣は、小田縣と改稱の上、八年、岡山縣の一部となりしが、九年、舊小田縣の一部たりし備後國六郡は、廣島縣の所管となり、今日に至れり。❷〔地〕安藝國にある市。太田川の三角洲上に位す。中國第一の都會。第五師團司令部及び兵營あり。淺野氏の舊藩地。南方に江波（エバ）・宇品（ウジナ）の二港あり。古稱、五箇庄（ゴカノシヤウ）。❸ひろしまやくわん（廣島藥罐）の略。和合人「この廣島を、五德へくつ附けよう」

廣島へ行く【句】死ぬ。〔西國の昔の方言〕夏山雜談「西國にて、俗の諺に、死する事を、廣島へ行くといふは、安藝國嚴島は神地にて、穢を忌む故に、人死する時、その死骸を片時も置かず、息絶えぬれば、未だ死せざるよしにて、廣島の地へ渡し、彼所にて喪祭し、葬るなり」

ひろしま-ぐき 廣島莖【名】安藝國廣島市の名產なる莖漬。高菜漬。

ひろしま-じやう 廣島城【名】安藝國廣島にありし城。天正十七年毛利輝元の築造に係り、毛利氏、關ケ原の役に西軍に屬せしため、長門國萩に移るるや、福島正則代りて居り、次いで、淺野長晟（ナガアキラ）紀伊國より移りて城主となり、子孫相續ぐ。明治二十七八年戰役の時、大本營の所在地となる。現時、第五師團の兵營あり。

ひろしま-やくわん 廣島藥罐【名】安藝國廣島より產出する藥罐。ひろしま。古朽木「廣島藥罐のやうに、尻の早い生れつきにても、かぶり振る男ぶりなれば」浮世風呂「小鬢先の禿（ハゲ）っちやうでも治（ナホ）すが能（イ）い。廣島藥罐の口をもいだといふ額（ヒタヘ）だ」

ひろしま-わん 廣島灣【名】〔地〕安藝・周防二國に互れる海灣。南は、大島・中島を以て伊豫灘に隣接し、東は、倉橋島・鹿（カ）島を以て安藝灘と分つ。灣內に、江田島・東西能美（ノミ）島・嚴（イツク）島、その他の諸島あり。灣の北半部は廣島灣要塞地帶に入れり。

ひろ-しりざや 弘尻鞘【名】幅廣くひら「たき尻鞘。

ひろ-しる 廣知る【動四他】ふとしる（太知る）に同じ。〔古語〕祝詞「下つ石根（イハネ）に、宮柱廣知り立て」

ひろ-せ 廣瀬【名】幅の廣き瀬。紀「大和の忍（オシ）の廣瀬を渡らむとあよひたづくり腰つくろふも」新後拾遺「大井川山もと遠く漕ぎつれて廣瀬にならぶ篝火の影」

ひろせ 廣瀬【名】❶〔地〕大和國の舊郡の一。明治二十九年、葛下（カツゲ）郡と合して、北葛城（キタカツラギ）郡となる。❷〔地〕出雲國能義（ノギ）郡にある町。松江市を距ること六里餘。備後街道に當り、郡役所あり。舊國主松平氏の分家の陣屋所在の地。❸ひろせじんじや（廣瀬神社）の略。太平記「廣瀬・龍田の祭」

ひろせ-かいだう 廣瀬街道【名】〔地〕大和國にある街道。北葛城（キタカツラギ）郡箸尾村大字大野にて、三輪街道と分れ、生駒（イコマ）郡安堵（アンド）村笠目を經、同郡法隆寺にて、奈良街道に接す。里程一里十一町餘。

ひろせ-がすり 廣瀬絣【名】出雲國廣瀬町より產する木綿の絣織。

ひろせ-がは 廣瀬川【名】〔地〕❶大和國にある川。初瀬（ハツセ）川の下流。上流を能登瀬（ノトセ）川といひ、生駒（イコマ）・葛城（カツラギ）の二郡を限りて、大和川に入る。萬葉「廣瀬川袖漬（ツ）くばかり淺きをや心深めて吾（ア）は思へらむ」❷陸前國宮城郡にある川。羽前との國境關山峠に發し、仙臺市の西と南とを繞り、末は、名取川に入る。長さ十二里。❸上野國にある川。勢多郡箱崎村にて、利根（トネ）川に分れ、新田郡手塚村にて、また合す。古、比刀禰（ヒトネ）川といひしはこの川なりといふ。

ひろせ-きよくさう 廣瀬旭莊【名】〔人〕詩人。淡窓の弟。名は謙、字は吉甫、通稱は謙吉。梅墩とも號す。豐後國の人。大阪に住し、その子林外及び淡窓の義子青邨と共に、世に三廣と稱せらる。文久三年、攝津國池田の隱棲に歿す。年五十七。

ひろせ-ぎれ 廣瀬切【名】名物切（メイブツギレ）の一。花色の地に、淺黄の絲にて、寶珠紋を織り出したる緞子。

ひろせ-ぐんかく 廣瀬群鶴【名】〔人〕石工。幼より心を彫鐫に注ぎ、その技、神に入る。文化六年歿す。年六十。

ひろせ-しきぶたいふ 廣瀬式部太夫【名】〔人〕淨瑠璃の名人。通稱、萬太郎。江戶日本橋富澤町に住す。土佐少掾（一說には薩摩外記）に學びて、一派を成し、式部節と稱す。貞享・元祿間の人。寶永二年、母方の姓岸田と淨琉璃の祖澤住撿挍とに因みて、姓を岸澤と改め、式部節廢れ、常磐津の盛んなるに至りて、その子孫、常磐津の三味線を業とするに至れり。

ひろせ-じんじや 廣瀬神社【名】大和國北葛城（キタカツラギ）郡河合（カハヒ）村に鎭座せる官幣大社。祭神は若宇賀賣（ワカウカノメ）命にて、櫛玉（クシダマ）命・穗雷（ホイカツチ）命を配祀す。古、二十二社の一に列し、龍田の神と相並びて、風害を防ぎ、五穀の成熟を守る神として尊崇せられたり。

ひろせ-せいそん 廣瀬青村【名】〔人〕詩人。淡窓の義子。名は範治、字は世叔。舊姓は矢野氏。豐後國下毛郡土田村の人。旭莊・林外と共に、世に三廣と稱せられ、書にも巧みなりき。明治十七年歿す。年六十六。

ひろせ-たけを 廣瀬武夫【名】〔人〕軍人。豐後國の人。明治二十四年海軍少尉に任ず。日清の役、大尉として軍從し、後、露西亞留學を命ぜられ、累進して少佐に至る。日露戰爭の際、朝日艦水雷長たりしが、旅順港口閉塞の時、有馬中佐と共に、決死隊七十餘人を引率し、炮火を冒して任務に從事し、第二回閉塞の時、敵彈に全身を掠め去らる。年三十七。即日中佐に陞進す。世、稱して軍神といふ。

ひろせ-たんそう 廣瀬淡窓【名】〔人〕詩人。名は建、字は子基、通稱は求馬。苓陽とも號す。豐後國日田の人。旭莊の兄。初、唐宋詩醇を讀みて感憤し、遂に一家を成す。安政三年歿す。年七十五。

ひろせ-ちゆうさ 廣瀬中佐【名】〔人〕ひろせたけを（廣瀬武夫）に同じ。

ひろせ-の-みや 廣瀨宮【名】〔人〕『廣瀨院の皇子の義』後堀河天皇の、御卽位前の稱。太平記「後鳥羽院流されさせたまひて、廣瀨の宮、天子の位に卽きたまひける」

ひろせ-の-ゐん 廣瀨院【名】〔人〕ごたかくらゐん(後高倉院)に同じ。太平記「後鳥羽院、遠國へ流されたまはば、義時、天下の成敗を司り、……必ず廣瀨院第二の宮を位に卽け奉るべし」

ひろせ-もうさい 廣瀨蒙齋【名】〔人〕儒者。岩代國白河の人。名は典、字は以寧、通稱は臺人。林祭酒の門に學び、後、又、昌平黌に學び、江戶に住む。專ら程朱を奉じ、最も文章に長ず。白河侯に召されて學頭となり、傍ら國政に參與し、文政十二年歿す。年六十二。

ひろせ-りんぐわい 廣瀨林外【名】〔人〕詩人。豐後國日田の人。旭莊の長子。名は孝、字は維孝。最も史學に精しく、旭莊・靑村と共に、世に三廣と稱せらる。明治維新の際、東京に出でて史館に入り、七月歿す。年三十九。

ひろせ-ゐぜん 廣瀨惟然【名】〔人〕俳人。美濃國關の人。芭蕉の門人。師の歿後、その俳句を綴り、風羅念佛といふを作りて、唄ひつつ諸國を遍歷し、播磨國姬路に知友多かりしため、その地に留まりて、寶永八年(一說に七年)歿す。蕉門十哲の一に數へらる。二葉集の著あり。

ひろ-そで 廣袖【名】❶鎧の袖の一種。❷衣の袖の、袖口の下方をも縫ひ合はせずにおくもの、卽ち袂を設けぬもの。ねんねこ・どてらなどの類の袖、これなり。膝栗毛「紺の紋附の廣袖」

ひろそで-ばおり 廣袖羽織【名】袖を廣袖に仕立てたる羽織。

ひろた 廣田【名】ひろたじんじや(廣田神社)の略。著聞「國の貢物、廣田の御前の澳にて、多く入海(ジユカイ)のきこえありければ」

廣田の五社【句】ひろたじんじや(廣田神社)を見よ。

ひろたか-の-みや 廣高宮【名】いそのかみのひろたかのみや(石上廣高宮)に同じ。

ひろた-じんじや 廣田神社【名】攝津國武庫(ムコ)郡大社(タイシヤ)村大字廣田に鎭座せる官幣大社。祭神は天照大神の荒御魂(アラミタマ)。神功皇后の代の創祀に係り、後世、なほ住吉三所大神・八幡大神・諏訪大神・高皇產靈(タカミムスビ)神の四柱を、左右の別殿に配祀し、合はせて、廣田の五社といふ。延喜式內の名神(ミヤウジン)大社にして、古、二十二社の一に列したり。

ひろ-だたみ 廣疊【名】巾廣く疊むこと。一代女「丈長(タケナガ)の平髻(ヒラモトユヒ)を、廣疊に掛けて」

ひろた-の-みや 廣田宮【名】ひろたじんじや(廣田神社)に同じ。

びろ-つく【動四自】びりつく㊂に同じ。浮世風呂「女にびろつかねえから」

ひろ-っぱ 廣場・廣塲【名】ひろば(廣場)の音便。

ひろ-っぱら 廣原【名】ひろはら(廣原)の音便。

ひろ-つむぎ 廣紬【名】昔、美濃國より產出せし紬。長さ六丈、幅一尺九寸。

ひろ-づめ 廣蹄【名】『英 Wide hoof』馬の蹄の、廣くして大なるもの。低溫の地に產する馬に多し。

ひろ-づゑ 尋杖【名】船匠の用ふる間竿(ケンザヲ)の、長さ五尺なるもの。五尺づゑ。

ひろ-には 廣庭【名】廣き庭。若風俗「丸裸になされ、二幅(フタノ)まで外され、廣庭を追ひ廻はる」

ひろ-の 廣野【名】ひろき原野。曠野(クワウヤ)。

ひろ-のき 廣軒【名】ひろびさし(廣庇)に同じ。長門本平家「廣のきに、紫緣の疊を、一帖敷きて」

ひろ-ば 廣場・廣塲【名】ひろき場所。廣大なる空地。ひろっぱ。梅曆「廣場へ出して押合はしたら」

ひろ-は 廣葉【名】〔植〕同類又は近似の種類の植物中、葉の幅廣きものにいふ語。

ひろ-ば 廣葉【名】幅のひろき葉。風雅「音立つる外面(ソトモ)の楢の廣葉にも餘りてよそに散る霰かな」惟然「無花果(イチジク)や廣葉に向ふ夕すずみ」

びろはきしや 尾嚕博乞叉【名】〔佛〕びるはくしや(毘留博叉)に同じ。

ひろはし 廣橋【名】姓氏の一。本姓は藤原。舊名家の一。日野兼光の第五男頼資を祖とす。子孫相繼ぎ、明治維新後、伯爵を授けらる。

ひろ-はし ひろ橋【名】平橋の義にて、一枚板の橋なりとも、幅一尋(ヒトヒロ)ほどの橋なりとも、間を廣く石を並べ置きて橋としたるものとも、又、翻橋の義にて、そりはし(反橋)に同じともいひ、明かならず。〔古語〕萬葉「ひろはしを馬こしかねて心のみ妹がりやりて吾(ア)はここにして」

ひろはし-つなみつ 廣橋綱光【名】〔人〕朝臣。兼鄕の子。享德三年參議に任じ、累進して權大納言に至り、文明九年從一位准大臣となり、同年薨ず。年四十七。世に引接院准大臣と稱らる。

ひろはた 廣幡【名】❶〔地〕三河國額田(ヌカタ)郡にある町。岡崎市の北に接す。❷姓氏の一。本姓は源。舊淸華の一。正親町(オホギマチ)天皇の皇孫智仁親王の第三の宮忠幸(タダユキ)王より出づ。忠幸、德川義直の子となりて尾張に下りしが、後、源姓を賜はり、廣幡と稱す。子孫相繼ぎ、明治維新後、侯爵を授けらる。

ひろはた-だいなごん 廣幡大納言【名】〔人〕みなもとひろし(源弘)に同じ。

ひろはた-ちゆうなごん 廣幡中納言【名】〔人〕ふぢはらあきみつ(藤原顯光)に同じ。榮花「廣幡の中納言は、ことなる御おぼえも見えたまはず」

ひろは-の-あまな 廣葉甘菜【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。甘菜に似たれど、葉やや闊くして短く、中央に一條の淡白色なる斑紋あり。鱗莖は、食用に適す。ひろはのむぎぐわゐ。

ひろは-の-いぬのひげ 廣葉犬鬚【名】〔植〕穀精草(ホシクサ)科に屬する草。高さ約四寸。葉は長形にして、基部廣く、平行脈を有して、多數叢生し、その間より、多數の花莖生じ、花莖の頂に、小形の頭狀花を著く。山野の濕地に自生す。

ひろは-の-えびも 廣葉蝦藻【名】〔植〕眼子菜(ヒルムシロ)科に屬する多年生の草。莖は細長く、葉は線狀・長楕圓形にして、緣邊波狀を成し、對生又は互生す。細小なる花、穗狀花序をなして開く。淡水に產す。

ひろは-の-くろつばら 廣葉黑つばら【名】〔植〕鼠李(クロウメモドキ)科に屬する落葉灌木。概形、黑つばらに似、葉は卵形又は楕圓形をなす。琉球に產す。

ひろは-の-こんろんさう 廣葉崑崙草【名】〔植〕崑崙草の變種。葉闊く、葉柄の基脚は莖を抱き、小葉は五箇乃至七箇ありて、卵形をなし、齒牙を有す。下野國日光に自生す。

ひろは-の-こめすすき 廣葉こめ薄【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。高さ四尺內外。葉は互生し、細長くして尖り、平行脈を具へて、二縱列に排列す。花は小形の兩性花にして、二箇づつ集まりて小穗花序をなすもの、更に多數集まりて、圓錐花序をなす。みやまこめすすき。

ひろは-の-たにだて 廣葉谷蓼【名】〔植〕うしたきさう(牛瀑草)に同じ。

ひろは-の-つりばな 廣葉つり花【名】〔植〕衞矛(ニシキギ)科に屬する落葉灌木。葉は長倒卵形にして尖り、互生し、花は小形・帶綠白色、果實に翅の生ずるを特徵とす。山地に自生す。

ひろは-の-どぢやうつなぎ 廣葉泥鰌繫【名】〔植〕禾木科に屬する多年生の草。高さ三尺內外。葉は細長くして線形を成し、細毛密生し、泥鰌繫のに似たれども、やや廣し。夏・秋の交、圓錐花序をなして、疎なる穗を著く。山地に自生す。

ひろは-の-はまさじ 廣葉濱匙【名】〔植〕磯松科に屬する多年生の草。高さ一尺餘、多くの枝を分ち、葉は長卵形・全緣にして、大きく、花は小形・靑紫色の合瓣花にして、多數集まりて圓錐花序をなす。原產地は露西亞。觀賞用として栽培す。

ひろは-の-へびのぼらず 廣葉蛇不登【名】〔植〕小蘗(メギ)科に屬する灌木。高さ一丈。長短二種の枝生じ、短枝には、倒卵形にして鋸齒を具ふる尋常葉を具へ、長枝には、針狀の葉を具へ、花は黃色の離瓣

花冠を有し、總狀花序に排列し、紅色・長楕圓形の漿果を結ぶ。果實は藥用に供す。

ひろは-の-ほしくさ 廣葉穀草 【名】〔植〕**ひろはのいぬのひげ**(廣葉犬鬚)に同じ。

ひろは-の-まんてま 廣葉のマンテマ 【名】〔植〕石竹科に屬する二年生又は多年生の草。高さ二尺內外。葉は卵狀披針形にして、對生し、花は白色・單性の五瓣花にして、雌雄異株に生じ、聚繖花序に排列す。原產地は歐羅巴。觀賞用として栽培す。

ひろは-の-みさきさう 廣葉三崎草 【名】〔植〕**しばな**(芝菜)に同じ。

ひろは-の-むぎぐわゐ 廣葉麥慈姑 【名】〔植〕**ひろはのあまな**(廣葉甘菜)に同じ。

ひろは-の-やはらすげ 廣葉柔萱 【名】〔植〕**じゆずすげ**(數珠萱)に同じ。

ひろは-の-れんりさう 廣葉連理草 【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する一年生又は二年生の草。莖は蔓狀を成して他物に攀緣し、葉は羽狀複葉にして、一・二對の小葉を有し、先端に卷鬚あり、小葉は長楕圓形にして尖れり。花は紅色、形、豌豆のに似て、香氣高し。舶來種にして、觀賞用として栽培す。

ひろは-の-ろくをんさう 廣葉鹿園草 【名】〔植〕**ろくをんさう**(鹿園草)に同じ。

ひろ-はば 廣幅 【名】**おほはば**(大幅)に同じ。

ひろ-はら 廣原 【名】廣廣としたる原。ひろっぱら。曠原。

廣原を竹箒で掃くやう 【句】至って簡略に事を爲す譬。〔諺語〕

ひらひ 拾 【名】㊀ひろふこと。㊁『ひろふ(拾ふ)㊃を見よ』貴人の步行の尊稱。(主に接頭語**お**(御)を添へて用ふ)

ひろひ-がくもん 拾學問 【名】師に就かず拾讀(ヒロヒヨミ)などして智識を得ること。ひらひがくもん。しかた咄「昔、口のはた黃なる男、なまじひにひろひ學問して、人をせせりたがる者あり」

ひろひ-がな 拾假名・拾假字 【名】一字一字を切り離し、續けずに書ける假名文字。

ひろ-びさし 廣庇・廣廂 【名】**ひさし**(庇)㊀に同じ。隆信集「麗景殿のひろびさしなどたたずみありきしに」太平記「廣廂にくぐまりゐたるに」

ひろひ-どく 拾得・拾德 【名】拾ひたるだけ、その人の利得となること。繼八卦ノ曆「道順が涙にくれ、うろたへて落いたぞ。落した物はひろひ德」

ひろひ-ぬし 拾主 【名】その物を拾ひたる人。

拾主は半分 【句】拾主は、拾ひたる物の半分だけを得る權利あり。〔諺語〕

ひろひ-のこす 拾遺 【名】**しふゐ**(拾遺)㊂の直譯。

ひろひ-ばき 拾穿 【名】他人のはきすてたる履物を拾ひてはくこと。芭蕉「ふる沓や花の旅出のひろひばき」

ひろひ-もの 拾物 【名】㊀物を拾ふこと、又その拾ひたる物。拾得物(シフトクブツ)。㊁思ひがけぬ利得。まうけもの。㊂碁石を、碁盤の上に、種種の形に並べおき、盤面の筋に從ひて、あともどりせぬやうに拾ひゆく遊戲。とりもの。

ひろひ-や 拾矢 【名】拾ひ取りたる矢なるべし。梅松論「白木の弓の大きなるに、拾矢二三十取りさしたる」

ひろひ-ゆみ 拾弓 【名】拾ひ取りたる弓。吉野都女楠「拾弓に拾矢」

ひろひ-よみ 拾讀 【名】主要なる部分又は讀み得る文字のみを選びて讀むこと。

ひろ-びろ 廣廣 【貌】甚だ廣きさま。ゆるやか。源氏「御門(ミカド)挽き入るるより、けはひことに、ひろびろとして」

びろ-びろ 【貌】**びりびり**㊃に同じ。繼八卦柱曆「面倒なその猫め。……、牡猫見てはびろびろと。屋根も垣もたまらぬ」膝栗毛「色氣違さ。……女と見ると、びろびろして」

ひろひ-わらぢ 拾草鞋 【名】拾穿(ヒロヒバキ)の草鞋。置土產「山崎よりの舟賃無くて、ひろひ草鞋の步行路(カチヂ)」

ひろふ 拾ふ 【動四他】㊀落ちてある物をとり上ぐ。ひりふ。ひらふ。拾得(シフトク)す。㊁遺したる物を收む。遺失物を拾得す。㊂そこ・ここより擇び取る。㊃『路面のぬかりなどせぬ部分を擇び拾ひて步む義』貴人、乘物に乘らずに行く。步行したまふ。

拾ふ刀に金(カネ)嫌ふな 【名】拾ひたる物は、その品質の如何を論ずべきにあらず。〔諺語〕

ひろ-ぶた 廣蓋 【名】㊀衣箱(コロモバコ)の蓋。服など賜ふ時には、これに載せて差出す習なりき。長門本平家「御衣十二領、廣蓋に入れて參られたり」㊁前記の廣蓋の形に製し、賓客の脫ぎたる衣、又は客に供する料理を載せ運びなどするに用ふる物。膝栗毛「銚子・盃を出だし、大平(オホヒラ)が、一人前に一つづつ、廣蓋に載せ、持ち出だす」

ひろ-ぼこ 廣矛 【名】刃の幅廣き矛なるべしとも、**やひろぼこ**(八尋矛)に同じかるべしともいふ。〔古語〕紀「平ㇾ國時所ㇾ杖之廣矛」

ひろ-ま 廣間 【名】㊀廣き部屋。㊁貴族の邸宅に於ける、表向の廣き座敷。丈間(チヤウマ)。㊂**ひろしき**(廣敷)㊀參照。狂言(秀句大名)「賴うだ人、廣間へ出させられた。あれへ出て、目みえをめされ」

ひろま-ばうず 廣間坊主 【名】德川幕府の職制の一。坊主㊁の、廣間の掃除並に湯・茶の事を掌りしもの。

ひろ-まへ 廣前 【名】神社の御前の庭。おほまへ。おまへ。ふとまへ。祝詞「皇神(スメガミ)たちの廣前に白(マヲ)さく」膝栗毛「千早振る神の廣前に」

ひろま-もの 廣間物 【名】**やぐらもの**(櫓物)を見よ。

ひろまる 廣まる・弘まる 【動四自】㊀ひろくなる。字鏡「衍、比呂萬留」㊁ひろく行はる。遍く知れわたる。ひろがる。古今「いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞひろまりにける」

ひろ-み 廣處 【名】『みは接尾語』ひろき處。平家「山うち越え、ひろみへ出でて、軍をせんとはやられけれども」太平記「川原へ引きて、廣みにて戰へ」

ひろむ 廣む・弘む・擴む 【動下二他】㊀ひろくす。ひろぐ。披露す。吹聽(フイチヤウ)す。㊁ひろまらしむ。遍く知らしむ。源氏「つひに、人のみかどにも、わが國にも、ありがたき才(ザエ)のほどをひろめて」

ひろ-むしろ 廣筵 【名】幅ひろき筵。雅亮裝束抄「母屋(モヤ)・廂(ヒサシ)に、廣筵を敷き滿てて」

ひ-ろん 比論 【名】㊀くらべて論斷すること。㊁〔哲〕**るゐすゐ**(類推)に同じ。

ひろめ 廣・弘・擴・披露目 【名】『披露目は假借の字』ひろむること。公にすること。廣告。披露(ヒロウ)。吹聽(フイチヤウ)。

ひろ-め 廣布 【名】〔植〕『海藻中最も幅廣きよりいふ。又、廣の語をめでたしとして、祝賀に用ふ。**め**(布)參照』**こんぶ**(昆布)に同じ。和名「昆布、比呂米」

ひろめ-あみ 廣目網 【名】破損を防ぐために、上緣又は下緣を、太き絲にて、大目に編みたる、大形の目の、荒き網。

ひろ-めかす 閃かす 【動四他】**ひらめかす**(閃かす)に同じ。〔古語〕空穗「持(モ)て來て、宮の御文と捧げて、ひろめかす」

ひろ-めく 【動四自】**ひろろぐ**に同じ。〔古語〕枕「ゐも定まらずひろめきて」

ひろ-めく 閃く 【動四自】**ひらめく**(閃く)に同じ。〔古語〕紀「其雷虺虺、ソノイカヅチヒカリヒロメキ」

ひろ-やか 廣やか 【貌】いかにも廣きさま。ひろびろ。ひろらか。更科「ひろやかなる所の、砂子(スナゴ)、はるばると白きに」

ひろ-らか 廣らか 【貌】前條に同じ。〔古語〕宇治「すし鮎の、おせぐくに、ひろらかなるが」

ひろり 【名】〔植〕**かやつりぐさ**(蚊屋釣草)に同じかるべしといふ。

ぴろ-りんさん ピロ燐酸 (英 Pyro-phosphoric acid) 【名】〔化〕**せうりんさん**(焦燐酸)に同じ。

ひろる 廣る 【動四自】廣く見ゆ。ひろがる。〔古語〕記「しが花の照りいますし、しが葉のひろりいますは大君ろかも」

ひろ-ろぐ 【動四自】動きさわぐ。起居、定まらず。ひよろひよろとす。ひろめく。〔古語〕落窪「遣戸あくるに、いと堅ければ、立ちゐひろろぐほどに」

ひろを 廣尾 【名】〔地〕十勝國七郡の一。河西(カサイ)支廳の管轄に屬す。

ひろ-をり 廣折 **【名】** 安藝・長門二國より產出する紙。竪一尺六分、橫一尺六寸ほどのもの。

ひわ 鶸 **【名】** **一**〔動〕『鶸の字の原意は、雛の一種、鶴(タウマル)なるを、我國にては、ひわと弱き鳥の意に取りなして、古來、この鳥の名に充用し來れり』燕雀類に屬する鳥。雀よりやや小く、全身黃綠色を呈し、頭と翅とは黑く、顏に白色・眉狀の斑あり、腰と腹とは黃色なり。秋季、我國に多數渡來し、肉味美なるより、霞網にて捕獲せらる。一種の紅(ベニ)鶸・川原(カハラ)鶸・蓼(タデ)鶸などに對して、普通のを眞(マ)鶸又は唐(カラ)鶸といふ。好みて稗を食ふ。「金雀・金翅雀」 **二** **ひわいろ**(鶸色)の略。

ひ-わい 鄙猥・卑猥 **【名】** いやしく猥(ミダリ)なること。みだりがましきこと。下卑(ゲビ)たること。

ひわ-いろ 鶸色 **【名】** 鶸の羽毛の色に似たる染色、卽ち萌黃(モエギ)の、一層黃ばみて、冴えたるもの。ひわ。

ひ-わかし ひ若し **【形二】** 『**ひはひよわし**(ひ弱し)の**ひ**と同じきか』いかにも若し。わかわかし。〔古語〕 榮花「あはれに、らうたき聲どもの、ひわかく、ほそぼそと、美しげに」 鴉鷺合戰「ひわかき鳥ども、箸も習はぬ具足の綿上(ワタガミ)に」

ひわ-がのこ 鶸鹿子 **【名】** 鶸色の鹿子絞。 壽の門松「淺黃鹿子・鶸鹿子・紫鹿子」

ひわさ 日和佐 **【名】**〔地〕阿波國海部(カイフ)郡にある町。德島市より十五里餘。海に臨む。郡役所及び四國靈場二十三番の札所なる藥王寺あり。

ひわし-の-みこと 日鷲命 **【名】** **あめのひわしのみこと**(天日鷲命)に同じ。

ひ-わたし 火渡 **【名】** **ひまはし**(火廻)に同じ。

ひ-わたり 火渡 **【名】** 修驗(シュゲン)者などの、祈禱のためなどに、烈火の上を踏みわたること、又その術。

ひわ-ちや 鶸茶 **【名】** 次條の略。

ひわちや-いろ 鶸茶色 **【名】** 茶色がかりたる鶸色。黃ばみの強き茶色。ひわちや。

ひわちや-ちりめん 鶸茶縮緬 **【名】** 鶸茶色の縮緬。 娼妓絹䟽「紫の板じめの無垢(ムク)に、鶸茶縮緬のしごき」

ひわづ 纖弱 **【貌】** 『**ひはつ**とも書けど、**よわし**(弱し)と緣ある語なるべければ、**わ**と定む』**ひわやか**に同じ。〔古語〕 源氏「いとささやかなる人の、常の御惱にや、衰へ、ひわづにて」

ひわづ-もの 纖弱者 **【句】** ひわづなる人。 賀古敎信七墓廻「殊に、初(ハツ)の子、ひわづ者」

ひわ-ぼそ 纖弱細 **【貌】** ひわやかに細きさま。しなやか。〔古語〕 記「ひわぼそ、たわや腕をまかむとは」

びわぼん **【名】** **びやぼん**の轉訛。

ひわ-やか 纖弱 **【貌】** 『**ひはやか**とも書けど、**よわし**(弱し)と緣ある語なるべければ、**わ**と定む』かよわきさま。細くたをやかなるさま。ひわづ。〔古語〕 榮花「宮、いみじう、ひわやかにめでたうて」

ひ-わり 日割 **【名】** 給金・課目などを、日數に割りあてて分つこと。

ひわり-かんぢやう 日割勘定 **【名】** 日割にてする勘定。

ひ-わりご 檜破子 **【名】** 檜物(ヒモノ)にて造りたる破子。〔古語〕 寶方集「ひわりごの蓋(フタ)に書きておこせける」

ひ-わる 干割る **【動下二自】** かわきて裂く。

ひ-わる ひ割る **【動下二自】** 『**ひはひび**(皹)の義』ひび生ず。割目(ワレメ)生ず。〔古語〕 源氏「柱のひわれたるはざまに、笄の先しておし入れたまふ」

ひ-われ 干割 **【名】** ひわるること、又ひわれたる處。

ひ-われ 日割 **【名】** **一** 柱又は木材などの、日光のために乾燥して、縱に裂くること。 **二** 樹木が、晝夜、溫熱の變化著しきにより、樹幹の內・外兩部の膨脹相伴なはざるために、縱に裂け割るること。晩冬より春季にかけて、この被害多し。

ひわれ-め 干割目 **【名】** 干割れたる所。ひわれ。

ひ-ゐ 非違 **【名】** **一** 法則にたがふこと。非法。 **二** **けびゐし**(檢非違使)の略。〔古語〕 榮花「非違の別當」

ひ-ゐ 被位 **【名】**〔佛〕『**ひ**(被)は單(ヒトヘ)の敷物の義』僧堂にて大衆の坐禪する座席。

ひゐ-きよ 脾胃虛 **【名】** 小兒の胃病。 當世虎の卷「わけて賴むは、この子の事。あのおまんまが過ぎいすと、脾胃虛とやらをしいすとやら」 膝栗毛「たった一人の子寶は、脾胃虛して、骨ばかりに瘦せこける」

ひゐる 冲る **【動四自】** **ひひる**(冲る)に同じ。 字鏡集「冲、ヒヒル・ヒキル」

び-ゑん 美園 **【名】** 草木のうつくしく生えてある園。

ひ-を 緋緒 **【名】** 緋色の緒。

ひ-を 氷魚・銀魚 **【名】**〔動〕小鮎(コアユ)の、小くして、二三寸ほどなるもの。色白く、琵琶湖にて生長す。京都附近及び近江國大津にて、飴煮(アメダキ)として賣る。 萬葉「わがせこがたふさぎにするつぶれ石の吉野の山に氷魚ぞさがれる」 宇治「このひをの、ことのほかに少かりければ」

氷魚の使 **【句】** 古、九月より十二月まで、山城國宇治と近江國田上(タナカミ)とより氷魚を取りて、朝廷に獻りし使者。

ひを **【名】** **しなもの**(品物)を云ふ。〔出雲國松江の方言〕

ひを-ぐくり 緋緒括 **【名】** 緋色の緒にて、裾を括ること。〔古語〕 著聞「ひをぐくりの直垂(ヒタタレ)・袴などもありけり」 平家「ひをぐくりの袴、絲葛(イトクズ)の直垂・立烏帽子にて」

ひを-くにこ 日尾邦子 **【名】**〔人〕日尾荊山の妻。和歌を荊山に學びて、その堂に升り、貞淑にして夫を助け、令名あり。明治十八年歿す。

ひ-をけ 火桶 **【名】** 木(多くは桐)を刳りて圓く造りたる火鉢。〔古語〕 枕「冬は、火桶に、やをら立つる火箸の音も」

ひを-けいざん 日尾荊山 **【名】**〔人〕儒者。名は瑜。字は德光、幼名は多聞(タモン)、後、宗右衞門と改む。武藏國秩父(チチブ)郡日尾村の人。江戶に住す。博覽・宏識にして、その學一家を主とせず、廣く考證・辨析し、專ら實踐を先にし、又、國學に精し。安政六年歿す。年七十一。

ひ-をどし 緋縅・火縅・氷魚縅 **【名】** 鎧の縅の一。茜(アカネ)にて紅色に染めたる革を用ひたるもの。これと色の同じき絲を用ひたるは、別に絲緋縅(イトヒヲドシ)の名あり。くれなゐをどし。 平家「伊勢武者はみなひをどしの鎧著て宇治の網代(アジロ)にかかりけるかな」

ひをどし-てふ 緋縅蝶・蛺蝶 **【名】**〔動〕鱗翅類に屬する昆蟲。體は長さ約七分、翅は、開けば一寸五六分に達し、表面黃赤色にして美しく、前翅に大小七箇、後翅には、黑色なる一箇の大斑紋あり。春より秋にかけて活潑に飛ぶ。幼蟲は、黑褐色にして、背に白線二條あり、且つ長き黑色の棘を有し、榎の葉を食害す。たてはてふ。

ひ-をどり 火踊 **【名】** 三河國南設樂(ミナミシダラ)郡東鄕村にて、每年七月十六日の夜、同村千人塚に於て行ふ祭事。五六十名の壯者、向鉢卷・法被(ハッピ)にて、垢離(コリ)を取り、松明に點火して擔ぎ、鉦・太鼓・笛などに合はせ、塚を匝りて踊る。塚は、天正三年長篠の役に陣歿せる武田勢を葬る所と稱す。

ひを-の-やま 標山 **【名】** **へうのやま**(標山)に同じ。

ひを-むし 蜏 **【名】**〔動〕 **一** **かげろふ**(蜉蝣)に同じ。〔古語〕 和名「蜏、比乎无之。朝生暮死蟲名也」 **二** **ひとりむし**(火取蟲)に同じ。〔[illegible](但し和字)〕

び-をん 微溫 **【名】** **一** なまぬるきこと。すこしあたたかきこと。 **二** 徹底せぬこと。にえきらぬこと。因循。

びをん-たう 微溫湯 **【名】** なまぬるき湯。ぬるまゆ。ぬるゆ。

ひ-をり 引折 **【名】** 『眞手番(マテツガヒ)の日には、射手が褐(カチン)の尻を、袴より前の方に引き折りて挾むことあるより、引(ヒキ)折を略していへるなりとも、前日の荒手番(アラテツガヒ)に試みたる所を、翌日折返して行ふによりて、日折の義にていふとも、又、當日は長き柵(ヲリ)を結ひて行ふによりて、引柵(ヒヲリ)の義にていふともいふ。**ひのやま**(標山)參照』古、五月五日、左近衞の舍人(トネリ)、又その翌日に、右近衞の舍人が、大內の馬場にて、眞手番を行ひしこと、又その日。 古今「右近の馬場(ウマバ)のひをりの日」

をゑゐわ　ろれるりら　よゆや　もめんむみま　ほへふひは　のねぬにな　とてつちた　そせすしさ　こけくきか　おえういあ

昭和二年十二月十八日印刷
昭和二年十二月二十六日發行

改修言泉　第四卷
豫約配本分

著作權所有

著作者　落合直文
改修者　芳賀矢一
發行兼印刷者　大倉保五郎
東京市日本橋區通一丁目十九番地
印刷所　大倉印刷所
東京市京橋區新榮町五丁目七番地

東京市日本橋區通壹丁目拾九番地
發行所　大倉書店
（振替貯金口座東京二三八番）（電話四五茅場町四一六番）

大倉書店

特約販賣所

東京市日本橋區	丸善株式會社
同	六合館
同	青野書店
同	明文館
同	大東館
同	榊原文盛堂
同	文林堂
同　神田區	東京堂
同	益文堂
同	丸善支店
同	三省堂
同　麻布區六本木	誠至堂
同　京橋區	北隆館
同	東海堂
同	春祥堂
同	中川文林堂
同　芝區	丸善支店
同	福島書店
横濱市伊勢佐木町	有隣堂
靜岡市札ノ辻	吉見書店
濱松市連尺町	谷島屋
名古屋市西區下長者町	川瀬書店
名古屋市西區玉屋町	星野書店
京都市佛光寺烏丸	東枝書店
京都市寺町二條	若林書店
同　二條通河原町東	京都書籍株式會社
同　寺町通二條	松田書店
同　寺町通夷川北入ル	山本文華堂
京都府伏見桃山中學校前	川勝鴻寶堂
大阪市西區阿波堀通	大阪寶文館
同　西區靱北通	盛文館
同　東區横堀四丁目	三宅書店
同　東區博勞町	丸善支店
和歌山市新通	宮井宗兵衞
神戸市元町通	寶文館支店
神戸市元町通	川瀬日進堂
兵庫縣龍野町	竹內伊八郎
鳥取市片原町	尚文館
鳥取縣米子市	今井兼文

松江市殿町	郁文堂支店
松江市京店町	有田傳助
岡山市西大寺町	大森隆文堂
岡山市下ノ町	渡邊泰山堂
廣島市鹽屋町	積善館
山口縣山口町	白銀日新堂
下關市東南部町	日新堂支店
德島市西新町	黑崎精二
高松市丸龜町	宮脇書店
松山市湊町	向井書店
高知市桝形	日新館
高知市種崎町	富士越書店
久留米市米屋町	菊竹金文堂
同	田中幸次郎
福岡市東中洲町	積文館書店
同　上西町	丸善支店
同　中島町	金文堂支店
佐賀市呉服町	大坪惇信堂
長崎市築町	森屋書店
同　東濱町	好文堂
大分市竹町	甲斐書店
熊本市新二丁目	長崎次郎
同　上通四丁目	長崎支店
宮崎市	松井修進堂
鹿兒島市中町	吉田書店
同	谷村書店
同　東千石町	久永書店
那覇市松下町	小澤博愛堂
千葉市本町	多田屋支店
千葉市市場	松田屋支店
水戸市上市泉町	川又書店
水戸市上市泉町	平野書店
茨城縣土浦町	寺田分店
宇都宮市鐵砲町	內山書店
足利市通町	青木大盛堂
前橋市曲輪町	煥乎堂
甲府市柳町	柳正堂
甲府市柳町	朗月堂書店
長野市大門町	西澤書店

松本市大名町	鶴林堂
同　本町	水琴堂書店
松本市大名町	明倫堂
長岡市表四ノ丁	目黑書店
同　三ノ丁	覺張書店
新潟市古町通	萬松堂
同	北光社
富山市東四十物町	中田書店
高岡市守山町	學海堂
金澤市片町	宇都宮書店
福井市佐佳枝中町	品川書店
同　佐佳枝上町	中村六三郎
仙臺市郵便局前	金港堂書店
同　大町	鈴木英華堂
同　國分町	丸善支店
盛岡市肴町	佐藤庄兵衞
盛岡市肴町	玉山東山堂
盛岡市呉服町	佐々木書店
弘前市土手町	今泉本店
青森市米町	今泉支店
山形市七日町	五十嵐書店
同	遠藤書店
山形縣新庄町	大泉商店
秋田市大町	石川書店
秋田市茶町菊の町	成見書店
秋田縣大館町	藤島書店
同　増田町	東海林本店
札幌市南一條	富貴堂
同	維新堂
函館市末廣町	魁文舍
小樽市花園町	魁文堂
樺太コルサコフ	齋藤支店
釜山府大倉町	吉田書店
京城府本町	大阪屋號支店
大連市大山通	大阪屋號
哈爾賓市道裡買賣街	千葉堂書店
臺灣坊石街	新高堂書店
布哇ホノルル	村上超倫
桑港	中央書店